

---

# 魔法少女リリカルなのは～神様の力を得た少年～

秋風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 神様の力を得た少年

### 【Nコード】

N2773K

### 【作者名】

秋風

### 【あらすじ】

ある日神様に名簿をコーヒーで汚されて死んでしまった少年、神矢迅。少年は創造の女神アテナの力によってリリカルなのはの世界に転生する。見た目は5歳、中身は19歳！チート（無敵）の力を得た迅はリリカルなのはの世界を渡り歩く！初の無印からの作品にして、最強の物語！ネギま！編終了！StrikerS編にいよいよ突入！秋風の第3弾新連載。不定期になるかもしれませんが、努力してまいります。他の皆さんのチート小説を見習って頑張ります！ちなみに苦手な方は回れ右をお願いします。

## 始まる前の話（前書き）

秋風です。予告していた新連載です。これから頑張っていきます。もうなんでもありなので、原作ブレイクというのも覚悟で読んでください！

それではどうぞ！

## 始まる前の話

そこは天界。人間からすれば、神様がいる場所。私はアテナ。ギリシヤでは技術や知恵、工芸、戦略の神様と謡われている。

「暇ねー……」

「仕事してください、アテナ様」

「やーよ、だるいもん」

私はそのままFate/stay nightを読む。まったく、うるさい女天使だわ。

「また下界の漫画ですか？」

「いいじゃない。面白いんだから」

私の仕事机には色々置いてある。最近ハマってるのは、魔法少女リカルなのはね。あのなのは魔王ぶりは見事だわ。

ガタン

「あ、しまった！」

「なにしてんですか」

「コーヒーこぼれちゃった。漫画は大丈夫みたい。……」

「ねえ」

「なんですか？」

「私のところに、いつ下界の人間名簿回ってきた？」

「一週間ほど前ですね。チェックして送ったじゃないですか」

「……どうしよう、これ」

私は天使にそれを見せた。天使は顔を真っ青にする。

「……ア、ア、ア、アテナ様！それ人間の名簿ですよね！」

「……うん」

「何でコーヒーかけちゃったんですかー！」

「しょ、しょうがないでしょー！」

漫画とかゲームで山済みだもん！

「だもんとか言わないでください、その人死にますよー!？」

「どーしょー!」

私の声が天界に響き渡った。その人間の名前は『神矢迅』

こつして物語は幕を開ける。

始まる前の話（後書き）

次回より本編です

**第一話「主人公が死ぬとそれは大抵転生する」(前書き)**

はい、ということとで第一話

私としては長く書きたいのですが、色々とあれなので短いです。今回は主人公たちの簡易プロフィールのみ。迅の能力はまた次の話で。



## 第一話「主人公が死ぬとそれは大抵転生する」

それは突然の出来事だった。といつても、かなりいきなりでわけがわからなかった。歩いていたら、上から鉄柱が落ちてきて即死。せつかく買った漫画もすべておじゃん。で、なんで俺に意識があるかって？だってドラゴンボール的描写で浮いてるからだよ。おっと、俺は神矢迅。って、誰に喋ってんだよ俺は。

「うーむ、俺はこのままどうすればいい？」

正直未練つてのはある。でも自縛霊になる理由が『漫画を読み損ねた』でいいのか？

「こんにちは」

「ん？どーも」

そこには翼の生えた女性がいた。

「お迎え？」

「え、ええ………なんか随分順応ですね」

「いや、ほら………こんな感じなんだろうな………って予測はあったし。鉄柱落ちて死なないってほど俺は無敵じゃないし。」

俺が言うと、天使はあっちゃーって顔してる。どうしたんだ？

「えっとですね、女神のアテナ様が貴方に会いたがってます。とい

うか、会ってください」

「え？」

俺は天使に手を引かれ、天へと昇っていった。ああ、今週号のジャンプ読みたかったな……

天界とやらは雲の上にある。なるほど、綺麗なところだな。

「アテナ様、お連れしました」

「え？ああ、ごくろーさま」

なんとも気の抜けた声。アテナって創造の女神だよな……なんで机の上が漫画だらけ？

「初めまして。アテナと申します」

「ああ、どうも。俺は……」

「神矢迅……そうですね？」

「ええ」

「その、ごめんなさい！」

いきなり土下座された。

「は？」

「えつとですね、ご説明します」

天使の女の子は俺のデータとやらをアテナが定期的な検査で俺のデータを回し忘れ、コーヒーをぶっかけたことで俺が死んだということらしい。

「・・・殴っていい？」

「ごめんなさい！本当に！」

「俺は蘇れないの？」

「あの体に？」

天使の女の子が言う。確かに、あのつぶれた体には戻りたくないな・・・

「それで、さっき上の神様にお叱りを受けまして。貴方を別世界で転生を行うことになりました」

「は？」

「転生って知ってます？」

「一応・・・」

転生ってそのまま魂を別世界に移す奴だろ？ラグナロクオンラインとかでもあったけどあれはちょっと違うか。

「でね、でね！私に転生先は任せるって言っから、ぜひともアニメの世界とかにしたいのよ！」

「それが殺した人間を送る態度なのか？」

「なんというか、こんなに駄目人間なのか、創造の女神アテナって・  
・

「現代の下界の影響です」

「そうなんだ……」

「俺に選ぶ権利は？」

「多分ないと思います」

「ないのかよ……」

「でね、アニメの世界はこれ！」

「あ？魔法少女リリカルなのは？」

「……魔王に会いに行けと？」

「最近ハマっててね？私としてはFateでもよかったんだけど」

「あの、アテナ様？この人わかるんですか？」

「大丈夫よ。この子オタクだから」

「……嫌な言い方するな。この腐女子」

「うるさいわね！コホン、それで、貴方にチートの的な力を与えようと思うのよ」

「チートの力？」

なんでもありってか？しちゃうよ？原作ブレイク。

「もちろんいいわよ？」

「いいのかよ。」

「並行世界だもの。壊れなければ何してもいいわ。能力だけ……  
・これなんてどう？」

稀少能力『神の代行』

やろつと思えば神様の武具、神具、宝具使い放題。FFシリーズの魔法、薬使い放題、武装はガンダムになれるし、平成仮面ライダーなら誰にもなれる。

「チートですね」

「たらねえよ」

身体能力は最強、魔力はEX、頭脳はガツシュに登場するデュフォ  
ーより上。「答えを出す者」使用可能。その他やりたいと思えば何  
でもできる。

「大丈夫なんですかこれ？これだけで天変地異起こせますよ？」

「いいわ。そのくらいなら簡単よ」

「ホントかよ……」

「あと戸籍も作ってあげるわ。で、あんた」

「はい？」

「ついてってあげなさい」

「ええ！？」

女天使、めちやくちや驚いてるよ。そりゃあ驚くよな。

「あたしだって行きたいけど始末書書くのよ」

「え、でもそんな！」

「ほら、つべこべ言わない！」

アテナが指を鳴らすと、女天使の羽が消える。

「え！？嘘！」

「じゃ、行ってらっしゃい！」

俺と女天使は浮遊感に襲われた。



## 第一話「主人公が死ぬとそれは大抵転生する」(後書き)

### 主人公紹介

神矢 迅 (かみやじん)

19歳 無印スタートなので0歳から

能力 神の代行

家族 なし

神様のうっかりに殺された転生者。リリカルの世界に介入していく。目の色は介入によって変わっており、緑。神は茶髪である。やろうと思えばなんでもできるので、多分最強なんじゃないかな……。一応オタク。というか、大学がそうそうに決まった高校時代に、やることもなかったので片っ端からゲームや漫画、アニメ、特撮を漁ったことでもなかった。

エレナ

天使のため年齢なし

能力 特にない 身体的に高いだけ

アテナの部下

女神、アテナの部下で、働かない上司に困り果てている。イメージ



はFF5のレナ・タイクーンをイメージしてください。一応、迅がやりすぎないように見張りをする。おっとりだがまじめ。天使の中でも上位であり、女神の部下になるほどである。

アテナ

神さま

能力 なんでもござれ

最高神クラス

アテーナー（古代ギリシア語：

、別名、アテーネー：

古代ギリシア語：

）は、知恵、芸術、工芸、戦略を司

るギリシア神話の女神で、オリュンポス十二神の一柱である。アルテミスと並んで処女女神として著名である。

というのが普通。しかしこの作品ではやる気なしで酷い女神。漫画やアニメ、ゲーム、特撮。あらゆる下界の娯楽を見ることを楽しみにしている。容姿端麗なのだが、どうにも問題ばかり起こす女神様。迅を殺してしまったのも正確にはこの人。最近では迅が言ったリリカルの世界のデバイスを作れないかと模索中。

次回、第二話「転生すると予想外の事態に見舞われる」

**第二話「転生すると予想外の事態に見舞われる」(前書き)**

はい、第二話。短いです。ごめんなさい。でも同時連載ではこれが限界です。

では本編どうぞ

## 第二話「転生すると予想外の事態に見舞われる」

目が覚めると、そこは病院だった。……ん？どこどこ？

「ああ、可愛い」

可愛い？誰が？

「私の子……そうね、名前をつけなきゃ」

なんで俺浮いてって……

「迅……迅がいいわ。疾風迅雷のごとく、人を助けられる子になる。貴方の名前は神谷迅だよ」

「おぎゃあああああああああ！！！！（何じゃこりゃああああああああああ！！！！！！！！！！）」

目が覚めたら赤ちゃんになってました。

それから3年後の世界。天使エレナにお願いして時の加速をしてもらった。現在俺は3歳だ。

「じんくん、ごはんだよ」

「うん、母さん」

俺は眠い足取りでそこを歩く。

「今日のメニューは……じゃーん！フレンチトースト！」

「……母さん、『じゃなくて、『も』でしょ」

「うん、いめんね」

「いいよ。嫌いじゃないから」

母の年齢何歳だと思う？20です。17で俺を生んだんだよ？何これ。

「母さん、仕事は？」

「うん、もう時間だよ。行ってきます。いい子にしててね」

そうして母さんは出て行った。母さんは生涯を誓った優秀な教師の男がいた。だが教師は俺が生まれてから事故で死んだ。一回見たけど、確かにいい人だったな。神谷の苗字はそのまま残っている。なんでも、母さんは周りの反対を押しつけて結婚をしたらしい。忘れていたけど、母さんの名前は神谷理沙さん。俺の母となった人物だ。で……

「ふう、おはようございます」

隠れて出てきたのは俺のことを監視もとい犠牲者のエレナ。天界にいた天使だ。

「エレナ、お前寝癖すげいよっ」

「ええ、みたいです。」

「にしても、まさか0歳からって……」

「転生とはそういうものです。本来『時』を加速させるなんてしたらいけないんですよ？」

「うん、わかってるよ」

俺は食器を片付けてテーブルに座る。

「うーん……」

「どうしました？」

パンをかじりながらエレナが聞く。行儀悪い。

「いや、この家はあの人の家なんだろうけどさ、どれくらい持つのかと思って」

「ああ、確かに。理沙様のお仕事も大変のようですよしねえ」

20歳で高卒では、なかなか入れてくれるという会社もない。おまけに母さんは色々と抜けている部分もあるので、危ない店にスカウトされることもある。

「で、どうするんですか？」

「原作にだろ？」

ここは確かに海鳴市だが、原作介入は早すぎる。

「どうするって・・・まあ能力は確かめたし。今は家の生計だよ」「  
「ですねえ・・・」

借金はしてないが、結婚を押し切った母さんが周りから援助金をもらえるわけもない。今は国からの補助金だけだ。

「いつそ未来の力を使ってみますか？」

「特許でも取る？」

「そうですねえ・・・」

力は色々ある。現在一番役に立つのはガツシユの清麿、デュフォーの力「答えを出す者」だ。

「これなら何でもできるよ。」

「なら宝石などを錬成すればどうです？」

「その材料を石ころから作ったら犯罪だよ」「  
成分が同じならいいけどさ。」

「先が明るくないですねえ・・・」

「そうだね。アテナの奴、なんてことしてくれてんだか」

二人同時にため息をつく俺たちだった。

で、時は流れる。流れるのは自然にだよ？現在4歳です。とりあえず街で母さんと歩いていると、誘拐犯が見えた。誘拐されてるのは若き日……てか、小さいすずかとアリサ。う、わ……

「ねえお母さん」

「なあに？じんくん」

「ちょっと先に帰ってて？」

「どうして？おうちならもつすぐなのに……」

うーん、嘘をつくのは嫌だけど……

「ちょっとお菓子置き忘れちゃったから。大丈夫、すぐ戻るよ」

「そう？帰り道に悪い人に捕まったりしないでね？」

「そのセリフはお母さんにバットで返すよ。」

「はいはい、じゃあすぐに帰ってきてね？」

「うん！」

こうして俺は笑顔で走り、母さんが見えなくなったら瞬動で商店街を駆け抜けた。エレナに念話を飛ばす。

「(エレナ、車の位置は?)」

「(北西400メートルに向かっている。その先は廃棄された工場です)」

「(なるほど、あいつら身代金とかを奪うつもりか。んでもって最後は本人もって所だな。よし!)」

俺はさらに瞬動を加速させた。

忍side

そこは廃棄された工場。そこに柄の悪そうな20人ほどの男。私とすずか、そしてバニングス家の女の子が縛られていた。男たちの会話からして、この町の財閥の人間を捕らえたんだと思う。

「へっへっへ・・・月村家とバニングス家の令嬢か、いい金になるぜ」

「こっちの姉ちゃんも売ったらいい金になりそうだ」

せ、せめてこの子たちだけでも逃がさないと・・・

「お、おねがい！私はどうなってもいい！妹やその子だけは助けて」

「へっへっへ！やだねえ！」

男が手を伸ばす。もう駄目だと思った。そのときだった。



『おばあちゃんが言っていた……』

誰かの声が響き渡った。

迅side

おっと、ここだな……って、忍さんもいるのかよ！しょうがない、かつこよく決めますか。

「（天道総司の）おばあちゃんが言っていた……」

俺登場！てな。

「だ、誰だ!？」

「男がやってはいけないことは2つある……女を泣かせることと、食べ物で粗末にすることだ」

俺が言いながら歩くと、男たちは笑っている。この姿だからな。

「小僧、どっから入った!」

「さあな。お前らに言いつもりはない」

「この生意気なぐくふう!」

俺は言い終わる前に男を殴り飛ばした。

「さて、その3人を解放しておとなしく捕まると、俺にボコさ

れるの、どっちがいい？」

「このやるう！とっちめろ！」

全員が襲い掛かる。無駄無駄。俺は腰にベルトを出現させる。すると、カブトムシが飛んでくる。そう、このフリーズからして使うチートはこれだよな。

「変身！」

『HENSIN』

仮面ライダーカブト、マスクドフォーム

「な、なんだ!？」

男たちが驚く。体がでかくなったからな。簡単に言うと、ディケイドに出てきたアスムやワタルと同じだ。

「来い」

「うおおおおおがあー！」

殴りかかる男たちを次々と倒していく。ふん、たいしたことないな。

「（あんまり長居すると3人に驚かれますよ？）」

確かにな。しょうがない。そう思いながら俺はカブトゼクターのフオーンを触る。そして外部装甲が浮き上がった。

「キャストオフ」

『CAST OFF!』

外部装甲が弾け飛び、ゼクトフォーンが装着された。

『CHANGE BEE T A L』

「クロックアップ！」

『CLOCK UP!』

クロックアップによって時間が止まるようになる。そのうちに俺は3人の縄を斬り。生き残りの男たちを蹴り飛ばした。

『CLOCK OVER!』

「「「「ぎゃあああああああ!!!!!!!!!!!!!!」」」」

あ、骨でもいったかな？まあいいや。

「これでいいだろう。後は警察に連絡しな」

「あ、ありがとう・・・あなたは、いつたい？」

「俺か？俺は名乗るほどのものでもない。じゃあな」

『CLOCK UP!』

こうしてその場から離脱した。

家に帰ると、母さんが抱きついてきた。

「遅かったよ！どうしたのじんくん！」

「ごめんねお母さん。お菓子なくなっちゃった」

「いいのいいの！また買ってあげるわ！」

「でもね、これ」

そう言っただけは宝くじを渡した。今の俺はネギま！の桜子並の幸運を持っている。

「あらあら、今日の宝くじ。誰かのを拾ったのね。ちょっと見てみましょうか」

笑顔で母さんが言う。桜子の幸運ってどれくらいなんだろう。

「じ、じんくん！」

母さんが声を上げる。

「どうしたの？」

「じ、じ、これ！」

母さんが指差すのは3億のナンバー……え？

「当たった！当たったよじんくん！」

「えええええ！？」

まさかここまでの幸運だったとは！まあいいや。これで貧乏脱出だな！

「今日はご馳走だよ！じんくん！」

「なに？ステーキでも食べるの？」

「もう、じんくんはそういつとくる子供っぽくない」

「じめん母さん。でもおいしいところに食べたいっ」

「そっだねじんくん、行こう！」

「こうして貧乏を脱出した俺と母さんだった。

第二話「転生すると予想外の事態に見舞われる」(後書き)

秋風「よし、第二話終了!」

迅「わー……なんというか、これって面倒くさいな」

秋風「そういうな、これから俺は混沌の方を書くんだから」

迅「頑張ってね」

秋風「で、今回登場したのはカブト!」

迅「クロックアップもいいけど、ソニックのカオスコントロールでもいいんじゃないの?」

秋風「俺の気分!」

迅「……まあいいや。次回は?」

秋風「これだよ」

迅「次回、第三話『原作介入を始めるのは常に作品を思い出しながら』じゃ、またねー!」

第三話「原作介入を始めるのは常に作品を思い出しながら」(前書き)

はい、連続投稿！もう燃え尽きるまで今日は書きます！

### 第三話「原作介入を始めるのは常に作品を思い出しながら」

3億というお金が入ったのでとりあえずお引越し。とりあえず海鳴から離れるのが嫌だという俺と母さんの希望に沿ったマンションだ。うん、いいんじゃない？ここ八神家近いし、翠屋もそう遠くはないし。綺麗だね……一望できるよ。

「片付いたね、母さん」

「やっとだよ……」

超疲れきってる。しょうがない、紅茶でも入れてあげるか。

「はい母さん」

「わあ、ありがとう。じんくんは本当に紅茶入れるの上手だよ？」

「うん」

とりあえず子供っぽく笑う。正直母さんは俺の性格も驚いてるし。

「で、母さんご近所の挨拶は？」

「したよ……あ、そうそう！おいしそうなお菓子屋さん見つけたよ！」

「え？どんな場所？」

「翠屋さんって所。女の人2人で切り盛りしてるんだって」



おいしい！俺が介入する前に母さんが介入してどうすんだよお！

「じゃあお母さん、お昼そこにしようー！」

「いいわよ、じゃ、行こうね」

「（迅……）」

「（わーってるよ。何が良い？）」

「（ショートケーキ！）」

「（はいはい）」

エレナについてもそのうち母さんには話さないとな。チートや転生以外のこと。

で、翠屋到着。

「いらっしゃいませ〜」

お、桃子さんだ。

「こんにちは」

「こんにちは〜」

とりあえずあれだ。俺も5歳だし、多分お父さんが怪我したところ

か？

「何にします?」

「そうねえ……じんくん何が言い?」

「うーん……じゃあこれ!アサリのパスタ!あとコーヒーがいいかな」

「あらあら、小さいのにコーヒー飲むの?」

「うん、大丈夫、身長は牛乳飲んでカバーするから」

思わず本音が出ると、桃子さんは笑う。

「わかりました。で、お母さんのほうは?」

「じゃあ私はこのオムライスをお願いします。後紅茶を」

「はい、かしこまりました」

こうして料理注文。で、食べる。旨い……普通に旨い。ただの喫茶店じゃないだろ。

「ごちそうさま!お母さん、ケーキ食べようよ!」

「そうねえ……じゃあじんくんどれがいい?」

「じゃあこのチーズケーキ!」

「じゃあ私はフルーツタルトを」

「はいはい」

「こうしてケーキも食べ、お腹いっぱいになった。」

「ごちそうさまー!」

「はい、ありがとうございます。」

「それにしても素敵なお店ですね」

「母さんナイス! 会話をどんどん続けて!」

「そうですね? ありがとうございます。」

「実は最近こっちのほうに来たもので」

「あらそうなんですか?」

「ええ、ご飯の仕度も大変なので、しばらくここに通おうかと」

「母さんいいね、それ。」

「それは嬉しいわ。ならどんどん来てくださいね?」

「桃子さん、OKだよ。どんどん母さんと話してっつて。え? なんでか  
つて? 母さん友達がいないんだよ。俺を見たり仕事したりで。仕事  
だつてこの前イジメられてやめちゃったし。そのいじめた連中は社  
会的抹殺をしてことを収めたけど。母さんは現在無職だ。」

「じゃあ母さんここで働けば？」

「え？」

「コラ、じんくん？そつというのは……」

「だってお母さんなら仕事できるしここで飯も食べれるし！」

「あら、お仕事探してるの？」

「え、ええ……この前会社を辞めてしまったので……」

「ならここで働かない？今人手が足りなくて困ってるのよ」

「え？」

そつそつ、お父さん入院中だもんね。

「でも、私なんかが……」

「母さん、その私なんかってやめようよ。」

「そつよ、月給これくらいでどう？」

桃子さん、子供の前でそつという話はやめようか。

「え、こんなにですか？」

母さん驚きすぎ。まあ確かに、これは高いだろ。俺は手の動きでそ

の金額を把握する。

「ねえ母さん、桃子さんもいい人だし、ここで働くのが一番いいよ」

「そうねえ……」

「そうすれば母さんが毎日翠屋のケーキ買ってきてくれるし！」

俺の言葉に、母さんと桃子さんが笑う。

「ふふっ、そうだね。そうしようかな。桃子さん、お願いできますか？」

「ええ、わかったわ。えつと名前は……」

「神谷理沙です。こっちは息子の迅」

「あら、息子さんだったの？お若いわね」

桃子さんも若いと思うけど、突っ込まないでおこう。すると美由希さん登場。なんか慌てる？

「ねえお母さん、なのは知らない？」

「え、帰ってないの？」

「うん、まだみたい」

「困ったわね……」

「なのは何？」

「ええ、うちの末っ子なんだけど、まだ帰ってこないみたいで・・・  
・実を言えば、主人が怪我で入院してからあの子を一人にしま  
ってるの」

「じゃあ僕が探してくるよ。どんな子？」

「一人で大丈夫？」

「うん、任せて桃子さん」

ま、知ってるけど一応聞いとかないとね。

「茶髪に、片方だけ結びを作ってる子よ。」

「わかった！」

こうして店を出た俺は公園に向かう。あいつが向かうのはそこだろ  
うな・・・

公園に着くと、なにやら子供の泣き声が聞こえた。

「あれか・・・」

「うっうっ・・・」

もしかしてずっと泣いてたのか？

「くんには」

「ふえ？」

なのはがこつちを見る。スマイルスマイル。

「どつしたの？」

俺が隣に座ると、なのははこつちを見て、口を開く。

「おとうさんがけがをしちゃって、おかあさんもおねえちゃんもいそがしいの。だから、なのはひとりなの」

「そっか・・・僕ね、神谷迅って言うんだ」

「っ？」

「さつき翠屋さんで桃子さんが心配してたから迎えに来たんだ」

「お母さんが？でもだいじょうぶ、なのはひとりでへいきなの」

この駄々っ子め・・・迎えに着たのにそれかよ。

「じゃあ僕と遊んでから帰る？」

「いいの？」

「うん、いいよ」

「わあ！うれしいの！じんおにいちゃんなの！」

「あの、なのはちゃん？僕一応君と同じ歳だよ？五歳でしょ？」

「うん・・・って、じんくん・・・おないどしなの？」

「うん、僕も5歳」

俺が言うと、なのはが顔を赤らめる。間違ったのが恥ずかしかったのか？

「じゃあ、じんくんってよぶの！」

「じゃあ僕はなのちゃんって呼ぶね？」

「うん！」

こうして俺はなのはと二時間ぐらい走り回ったりブランコに乗って遊んだ。まあ昼食の後だから色々と楽だった部分もある。夕方にはなのはがヘトヘトになったので、一緒に手を繋いで帰ることにした。

「ただいまー！」

「なのは！」

桃子さんが大慌てで駆け寄ってきた。

「なのは、大丈夫？」

「うん、じんくとあそんでいたの！」



「そうだったの。迅君ありがとうね?」

「どういたしまして!」

「じゃあ帰ろうか迅?荷物まだ降ろし終わってないもんね?」

「はい!」

そういえばまだ俺の個人の服とかそのままだったっけ?

「じんくん、帰っちゃうの?」

なのはが子猫のような目で俺を見る。やめる!そんなピュアな瞳で俺を見るな!・・・って、俺は何してんだよ。

「大丈夫だよ、また明日!ね?」

「・・・・・・・・・・うん!また明日なの!」

なのはが元気を取り戻したのでこれでいいだろ。こうして帰宅・・・あ、お土産忘れてた。・・・っと、思ったら母さんがちゃっかり買ってた。で、夕食にエレナにあげた。これならいいだろ。

「(とうか、今回私の出番まったくなかったんですけど)」

「(しょうがないよ。お前なんだから)」

こうして一日がまた過ぎる。



第四話「介入と書いて崩壊と読む」(前書き)

介入開始！まあ、戦闘はもう少し後です

では本編どうぞ

#### 第四話「介入と書いて崩壊と読む」

さて、引っ越してから早くも3ヶ月。相変わらず俺となのはは遊びまくってる。

「じんくん！次はあれなの！」

「ブランコだね？」

もうなんというか、なのはは俺に引っ付きまくり。

「二人とも危ないから気をつけてくださいね」

「うん、エレナおねえちゃん！」

「あいよー」

エレナは何故こうなってるかって？とりあえず説明したよ？エレナは外国からやって来て、道で倒れていたというのを設定にしてつれて帰った。エレナ本人は母さんと仲良くなったことで、うちに住むことになった。これによって母さんの負担はずっと楽になった。で、現在は俺となのはの子守だ。

「（もう、何で私が……）」

「（しょうがないよ、お前いつまでも迷彩で生活するわけにもいかないだろ？）」

ちなみに国籍も日本のものを取った。もちろん非合法。さて、そ

そろ介入を本格的にしますか。

「ねえなのちゃん？」

「なあに、じんくん」

「なのちゃんのお父さんのお見舞いに行こうか？」

「ふえ？なんで？」

「お母さんが言ってたんだけどね？一人だと怪我って治りにくいんだって。だからなのちゃんと一緒に行って元気を分けようと思うんだ。どうかな？」

「お父さんに元気を……うん！行くの！明日一緒に行くの！」  
こうして、なのとは指切りをして。今日は一緒に帰ることにした。

で、夕方。俺は母さんが働いているのを見計らい、一足速く土郎さんの病室を訪れた。

「こんにちはー！」

「あの、迅？多分喋れる状態じゃないと思いますけど」

まあ、目は開いているし、起きてはいるだろ？

「まあ、とりあえずこれか」

俺はRAVE登場のエリクシル・改を取り出した。

「どうやって飲ませるんですか？」

「うーん、とりあえずケアルガあたりを使って回復させてからにしようか」

俺はケアルガを士郎さんに向け、動けるぐらいまでにする。

「どうも、こんにちは高町士郎さん」

「うっ……君はいつたい？」

「えーと、まあ、高町なのはちゃんの友達？です」

「なのはの友達がどうしてここに？」

「ええ、実はですね……」

とりあえず俺なのはが明日俺とここにお見舞いに来ることを告げた。

「なるほど……でも何故君は先に来たんだい？」

「貴方になのはちゃんが元気になるきっかけになって欲しいんですよ」

「え？」

さらに説明中。なのはが店が忙しくなって一人になってしまったこ

と。で、現在はほぼ毎日俺がなのはと遊んでいることを。

「なるほどね……だが、恭也はどうしているんだ？」

「さあ？なんか一人で苛ついてましたねえ」

以前見たことがあるが、とてもなのはが話かけられる雰囲気ではなかった。恐らく士郎を襲った組織を潰すのに闘志を燃やしているんだろう。まったく妹をそっちのけとはいいい迷惑だ。

「なるほど、だいたいわかったよ。で、僕はどうすればいいのかな？」

「これを飲んでもらいます」

そう言っただけ俺はエリクシル・改を渡す。

「これは？」

「それはエリクシル。まあ、秘薬です。飲んだ分だけ身体機能から精神状態まで、あらゆる機能を良好にします」

「どうしてそんなものを？それに先ほどの力は……」

「内緒です。少なくとも今はね。時が経てばお話しします。エリクシルは言うとおり秘薬です。それをすべて飲み干せば少なからず3日後には退院でしょう。」

「そうか……だが君はどうして僕にここまでしてくれるんだ？」

「ええ、とりあえず言うなればなのはちゃんのためです」

「なのなの？」

そう、それが士郎さんを蘇らせる理由だ。

「なのはちゃんは孤独という闇にいる。だからなのはちゃんがあなたに会うことで貴方が元気になり、力になっているという証明がしたい。」

「なるほど……君はすべてなのはのために動くのか」

「まあそんなところです。じゃあ僕は帰ります。」

「色々すまなかったね。礼を言うよ」

「どういたしまして。ちなみに僕の母が翠屋で働いてましてね。以後よろしく。で、母は僕の力を知りませんから言わないでくださいね。後明日は初対面ということので」

「ああ、わかったよ。気をつけて帰ってくれ」

「ええ、それでは」

こうして俺は帰宅する。

「よかったですか？これで」

「ああ、少なくともこれでなのはが立ち直るのは早くなったよ」



これで何とかなるな。母さんの仕事も何とかなるし、後の問題は「PT事件」と「闇の書事件」

「この二つにどう介入していくか……」

「とりあえず初っ端からなのはちゃんの味方ですか？」

「いや、どちらの味方もしない。ここは純粹にジュエルシードを集める」

「何故です？」

「アルハザードに行くというプレシアの概念を潰すにはそれが一番だけど、そうなるとフェイトの幸せはなくなるからな。」

問題は山積みだ。これから先どうするか。まずやることをまとめておこう。

PT事件までにデバイス作成

八神はやてとの接触

アリシアの蘇生、プレシアの病を治す

10年後の戦いへの準備

「こうやって見るとかなり大変だよな」

「正直デバイスは考え物ですね」

「ああ、そうだな」

どうすっかな。自作してもいいけど知識持ちすぎだ。カートリッジはこの先まだ不安定なもの。少なくとも闇の書事件までは出さないほうがいい。

「とりあえず杖にして、後から改造するのは？」

「というか、俺にデバイスってそこまで必要じゃないよな」

「確かに。でもこの世界で使わないと怪しまれますよ？」

「そうだな……」

それは後々でいいだろう。

「じんく〜ん！エレナさ〜ん！」

「母さん！」

「理沙様」

母さんがマンションの入り口で待っていてくれたらしい。まあ細かいことは後で考えよう。今はね。

次の日、俺となのはは士郎さんのお見舞いに行った。なのはは頑張って明るく振舞い、士郎さんは絵リクシルを飲んだことで回復に向かっていった。

「じゃあなのは、迅君とお話があるから、ちょっと出ててくれるか  
」？」

「うん！わかったの！」

こうしてなのはが退出した。

「さて、お話とは？」

「いや、君にお礼が言いたくてね。これのおかげ。そしてなのはを  
連れてきたことについてね」

「いえいえ、お気になさらず」

「にしても、君は5歳とは思えないな」

うわお、さすがだ。一発で見抜かれた。

「よく言われます。母さんにも「子供らしくない」ってね」

「そうかい。でも君の言葉を信じて、それについては解答を待とう」

「ええ、頼みます」

こうして俺は土郎さんの病室を後にしようとする。

「あ、そうだ」

「はい？」

「恭也はどっしてる？」

「相変わらずみたいです。なのは、話題に出したらおびえてました」

「そうか……よし、退院したら色々叩きなおすかな」

「はは、それはそれは……」

いい気味だ。

「では、僕はこれで」

「ああ、なのはを頼むよ」

「ええ、もちろん」

「こうして俺はなのはと帰ることとなった。

「お父さん元気だったね」

「うん！よかったの！」

「これもきつと、なのちゃんのおかげだね」

「ふえ！？そんなことないの！」

「ううん、なのちゃんのお陰だと思うよ。自身持ってよ」

「うん……ありがとなのじんくん」

「ごうじましたしまして」

こうして、俺となのはは笑顔で翠屋に帰っていった。

#### 第四話「介入と書いて崩壊と読む」（後書き）

秋風「相変わらず短いです」

迅「てか似てるよね。神楽先生のと」

秋風「ここはどうしても似るもんだよ。次回から本格介入だから」

迅「あ、そ」

秋風「ちなみに感想待ってます！」

迅「どしどし待ってますよ！」

秋風「ほい、次回」

迅「次回、第五話『最強の人間は都合が悪いと記憶を消せる』それじゃ、またねー！」

第五話「最強の人間は都合が悪いと記憶を消せる」(前書き)

眠いです……

## 第五話「最強の人間は都合が悪いと記憶を消せる」

しばらくして、俺は小学校に入学した。当然なのは同じ学校にみんな入ると思うだろう、しかし！うちにはお金がない！

私立聖祥大附属小学校などに入れるわけもない！しかし母さんいわく。

「小学校3年生くらいになったらお金が溜まるから、それまで我慢ね？」

と、母さんが言ってくれた。なので俺は我慢して3年間普通の市立の小学校に通うことになった。まあ、当然といえば当然なんだけど、士郎さんも順調に回復に向かい、仕事場に復帰したと母さんから教えられた。最近は翠屋には行っていないし、なのはとも会っていない。というのも、デバイス作りに奮闘しているからだ。

「よし、できたかな？」

「やっとですか？」

「ああ、これだよ」

そう言って取り出したのは、真紅の宝石がついたブレスレット。

「なるほど、かなり高性能ですね。」

「まあな。さて、起動開始」

『……起動を確認。コードを』



「術式、古代ベルカ。そしてミッドの両方だ」

『了解、術式認証。次のコードを』

「俺の個人データを全て転移」

『了解、データ認証。次のコードを』

「デバイス名称設定。設定コードは……『ゼロ』だ」

『登録終了。よろしく頼みます。マスター』

「ああゼロ。ために起動してみよう」

『オーライ、スタンバイレディ』

俺を甲冑が包む。その姿は体は上から下まで黒いバリアジャケット。もといライダージャケット。そして黒いヘルメットのようなもの。髪は金髪へと変化し、伸びた。

「よし、完璧だぞゼロ」

『そのようです』

そのヘルメットとはロックマンゼロの着用していたヘルメット。さらに手にはZセイバーがある。

「武装の形はこれだけですか？」

「いや、他にもゼロシリーズは全部できる。あとミッドらしいのはネギ・スプリングフィールドの杖かな」

「もう、なんでもありですね」

「まあな。さて、解除と」

『解除』

元に戻り、一息つく。これならいいだろ。

「でもどうしてゼロなんですか？名前」

「ん？だって好きだからさ。ロックマンゼロ」

『なるほど、だから声もそうなのですか』

「ああ、できれば口調もそして欲しいけど。あいつ無口だから」

『確かに』

まあそんなことはさておき・・・

「明日はとうとう編入試験か」

「大丈夫なんですか？」

小学生の問題に大丈夫もクソもないだろ。実を言えば、なのはたちが温泉に行くちょっと前だったりする。なのはすでにフェイトと接触済みだろ。

「もう寝る」

『おやすみなさい、マスター』

こうして明日、編入試験になる。

次の日、編入試験は一発クリア。小学生の問題大学生が解けばそうなるよな。で、転入当日。

「わー！じんくん似合うよー！」

「うん、ありがとう母さん」

半ズボンというのがなんとも嬉しくないが、いいだろう。子供だしな。

「さて、元気に行っておいでー！」

「母さん、ありがとう。本当はお金……」

「いいのいいのー！じんくんが立派に勉強できればそれでね？」

「……ありがとう、母さん」

とても25歳には見えません。

「さて、時間よ？行ってらっしゃい」

「うん、行ってきますー！」

こうして、俺は私立聖祥大附属小学校に向かった。

学校につき、職員室へ向かう。当然ゼロは所有したまま。

「じゃあ神谷君、先生が呼んだら入ってきてね？」

「はい、先生」

こうして先生が教室に入り、俺について説明する。

「じゃあ入ってきてー」

俺は指示に従って入る。そこにはなのは、アリサ、すずかがいた。  
・・・まじで？

「じゃあ、自己紹介」

「神谷迅です。よろしく」

「迅君は学校始まって以来の満点で編入しました。みなさん、仲良くしてあげてね？」

『はいー！』

うん、これが小学生の反応だな。可愛い。

「じゃあそっね、席は月村さんの隣ね」

言われて俺はさすがの隣に座った。

「よろしくね」

「う、うん！よろしく！」

わーお、驚いてるよ。まあそうだよな。あれはどうやって説明しようか……。で、近くではなのはがそわそわしてる。まあ、後で挨拶しよう。こうしてホームルームを終え、質問攻めも終わる。そしてなのはが飛び掛ってきた。

「じんくん！」

「な、なのちゃん！？」

待て待て待て！人いっぱいいるところで！

「じんくん！ほんとうにじんくんなの！」

「お、落ち着こうかなのちゃん、でも久しぶりだね。」

「うん、今までちょっとさみしかったの！」

なのはが笑顔で言うて来る。本当に寂しかったんだな。

「それで、じんくんはどうしてこっちに？」

「うん、母さんがお金を貯めてくれて、ようやくこっちに」  
「ちょっとあんた！」  
「ん？」

そこにはバーニングもとい、アリサ・バニングスがいた。

「あ、はい」

「なのは、こいつと知り合いなの!？」

「え、うん。そうだった。こっちはアリサちゃんとすずかちゃん、私の友達なの!」

「そうなんだ。神谷迅です。じんって呼んでください」

「わかったわ・・・じゃなくて!あんだ、前に会ったでしょ!？」

「えーと、なんのことだろ?」

とりあえずとぼけてみる。というか、とぼけないと色々とまずい。こいつを使うかな。

「私も気になってたの・・・って、あれ?何を気になってたんだっけ?」

「あ、あら?」

よし、ネギ魔のタカミチがアスナに使った忘却魔法成功!まあ、そのうち蘇らせてあげるかな。

「二人ともどうしたの?」

「なんでもないわ。気のせいだったみたい」

「でもなのはちゃんと友達だったんだね。」

「お母さんが翠屋で働いてるんだ。だからなのちゃんとは小さい頃から友達なんだよ」

「そうなんだ。じゃあなのはちゃんの友達なら私も友達だね。よろしくじんくん」

「うん、すずか」

そう言っただけはすずかと握手する。

「しょ、しょうがないわね！そういうことなら友達になってやろうじゃない！」

「あ、うん……よろしくねアリサ」

さすが釘宮ボイス……つと、なんか思いにふけてしまった。そんなことを思いながら俺はアリサと握手をした。

まあこうなっただけで小学校の生活に馴染むわけで、帰りは一緒に翠屋に行くことになった。

「それにしても、じんくんが翠屋に来るのは久しぶりなの！」

「そうだね、全然行かなかったから」

「そういえばお母さんが翠屋で働いてるんだっけ？」

「そっだよ?。」

「じゃああの美人店員のことね」

美人店員・・・まあ美人だよな。25だけど明らかにもつと若く見えるし。

「ついたの!。」

「ほんとだ」

久しぶりだな。ここに来るのは。

「いらっしゃいませー・・・って、じんくん」

「母さん、仕事してる?。」

「うん、お母さん頑張ってるよ」

母さんが案内してくれて、席に座る。

「久しぶりだね、迅君」

「はい、士郎さん、桃子さん」

「今日はゆっくりしていいってね」

こうしてケーキを頼み、みんなでわいわい話すと。



「キュー！」

「あ、ユーノ君」

出た、淫獣。

「なにこいつ。イタチ？」

「イタチじゃなくてフェレットだよ？名前はユーノ君」

「へえ、こいつがねえ」

と、掴んでブラブラさせてみる。

「キューキュー！」

「じ、じんくん！ユーノ君可愛そうなの！」

「あ、ごめんごめん」

俺はユーノを放した。するとケーキが来て、みんなで食べる。そうか、温泉までしばらくしないのか、接触は。

「そついえばじんくん、綺麗なブレスレッドしてるね」

「ん？これ？自作だよ」

「あんだこんなの作れるの？」

あつはつは、俺に不可能はないさ。

「まあね。この前本で見たんだ。天然石を使って作ったんだ。今度みんなにも作ってあげるよ」

「いいの!？」

「うん、もちろん」

こうして3人と約束。すると、土郎さんがこんなことを言い出した。

「迅君、来週の休日、一緒に温泉に行かないかい？」

「温泉？」

うわーお、フェイトとのエンカウトフラグですか……

「母さん、いいの？」

「もちろん理沙さんも一緒さ。頑張ってくれてるからね」

「じゃあ行くのかな。いいんだね?母さん」

「ええ、私も温泉に浸かりたいもの」

こうして温泉フラグが立った。

それからしばらくして、恭也が帰ってきた。

「こんにちは」

「あ、どうも」

うん、とりあえず俺に殺気を飛ばすのやめてくれない？

「お前が、なのはの面倒を見ていたようだな」

「ええ、まあ」

見ていたというか、遊んでただけな。

「一応、礼を言っておこう。」

ん？何この雰囲気……

「正直な話、お前が少々気に入らない。相手してもらおうか」

「恭也！？」

「お兄ちゃん！？」

「……いいですよ」

俺はそう言っただけで立ち上がる。とりあえず道場に行くことになった。

「すなまじね。どうやら僕が怒ったことを根に持っているようだ」

うわあ、原作と違って小さい男。俺がチクツタこと根に持っているのかよ。てか……

「なんでなのちゃんたちも？」

「だってじんくん心配だもん！」

あ、さようですか。母さんは来ていないみたいだし、いいか。ボコしても。さて、どうしようかなー・・・道場についてもう剣構えるよ。早・・・

「さあ、剣を取れ」

木刀を投げられるけど、それをそのまま弾き飛ばした。よし、あいつの誇り潰してやるう。

「いらぬですよ、そんなの」

「何？」

「俺は無手でお相手しましょう」

そう言つて構えるのは八極拳の構え・・・つまりネギだな。

「余裕のつもりか？」

「妹ほつぱり出して復讐に燃える馬鹿にはこれで十分」

「貴様っ！」

おー、怒ってる怒ってる。

「では、試合始め！」

士郎さんの声で、試合開始！早速「神速」ですか。

「もらった！」

振り下ろされた剣を受け流し、俺は体を回転させる。

八極拳 金剛八式

「はあっ！」

「くっ！」

そのまま拳に魔力を乗せ、撃ち放つ。それによって距離がとられた。

「今度はこっちの番だな」

足に気を溜め、瞬動で後ろに回りこみ、拳を振るう。なるほど、このスピードには追いつくのか。

「な！？」

「ならこれだ・・・」

八極拳 弓步冲拳

「ぐお！？このっ！」

俺は再び瞬動で動き、翻弄する。

「右！？いや、左だと！？」

瞬動二連はさすがに厳しい。次で決める。

「吹き飛べ……」

雷華崩拳

「ぐあっ！」

見事腹に命中。威力はまほら武道会くらいに留めた。これなら死なないだろ。恭也は吹き飛び、壁にぶつかった。

「勝負あり！」

「ふう……」

こうして、恭也との戦いは幕を閉じた。

第五話「最強の人間は都合が悪いと記憶を消せる」(後書き)

秋風「ヤヴァイ……」

迅「どうした？」

秋風「なんだか、色々と似てきている。神楽先生と」

迅「ほんとだな」

秋風「神楽先生すみません！」

迅「次回からはすごい方向に話が行くので！」

秋風「すみません！」

迅「第六話『温泉では絶対に覗きをしないこと』それじゃ、またね  
ー！」

第六話「温泉では絶対に覗きをしないこと」(前書き)

更新遅れました。申し訳ないです。

では本編どうぞ



第六話「温泉では絶対に覗きをしない」と

「ちょっと！なんだったのよあれ！」

「何って、中国拳法」

「なんであなたができるのよ！」

おい、落ち着けよアリサ……ただいま尋問されてます。理由はもちろんさっきの戦いだ。まあ、8歳があんなのしたらびっくりだよ。顔近いつてアリサ。

「うーん……まあ、エレナに教えてもらった」

「エレナさんが？」

「エレナは中国拳法、柔術、空手、テコンドーとか、大体の格闘技はできるって」

「へー……」

はい、嘘です。あいつは見ればできるけど、中国拳法以外は嘘です。

「ま、そんなところ」

「あの瞬間移動はなんなんだい？」

もう士郎さん、そういう突っ込みはやめて欲しいんだけど。

「瞬動……八極拳では活歩と呼ばれる歩法でもあります。」

「なるほど……」

あ、ヤヴァイ……

「あの、士郎さん？間違ってもエレナと戦うとか考えないでくださいね？」

「ん？ああ、わかってるよ。」

士郎さんもエレナについては色々考えている部分もあるんだろう。あいつ人間じゃないしな。そんなこんなで、一日は過ぎていく。

あれから一週間して、今は俺たちは海鳴温泉に来ている。道中はもちろんのはと一緒に車。なのは俺にべったりだった。で、温泉に入ることになるわけだが……

「じんくん！じんくんも一緒に入るの！」

「あの、僕は男だからね？」

「でも11歳までならこっちに入っても平気なの！」

「いやいやいや……そういう問題じゃないから。その代りにほら、こっち持ってけ」

「きゅ！？」

俺は男湯に逃げようとするユーノを掴み取った。

「可愛いペットだろ？持ってたけって」

「うー……しょうがないの。わかったの、ユーノくんて我慢するの」

「そうそう、ほらユーノ」

「キューキューー！」

このやろう、大人しくしろや。

「さあユーノ、なのはの所へ（行かないと三枚におろすぞ？）」

「キューー！」

俺の言葉に、ユーノは慌ててなのはの肩に乗った。

「じゃ、後でね？」

こうして温泉に入った俺と土郎さん。ふっ、ユーノ……これで淫獣フラグは確立したぞ。

「ふー……」

えーと、この後はあれだ。アルフが出てくるんだっけ？で、夜になのはとフェイトが戦ってなのはが負ける……と。

「めんどくせー……」

「どうしたんだい？」

「え、あ、なんでもありませんよ。それにしても、いいお湯ですね」

「ああ、酒が欲しいよ」

「あと10年経ったらお相手しますよ」

俺が言うと、土郎さんが苦笑する。まあ、その後も温泉を満喫し、先に上がった。で、なのはたちは先に上がったらしく、エレナと廊下を歩く。ちょうどなのはがアルフに絡まれている。

「おい、うちの連れになにしてんだ」

「まったくです。いい大人が」

「なんだい、じゃましないでくれ」

エレナと俺がなのはの前に立ち、アルフを睨みつける。

「そもそも、なのはが何したんだ、この酔っ払い」

「え？へ？え〜っと、やっぱり私の勘違いみたい。ばいばーい！」

そう言ってアルフ退場。

「なのちゃん、大丈夫？」

「うん、ありがとなのじんくん、エレナさん」

「あーもうなんなのよあの酔っ払い！気分悪！」

アリサ、うるさいよ。声小さくしろ。

「まあ、よくいるんだろ、こつこつとこころには」

そんな感じでアルフとのエンカウントは終了。ま、何とかなるだろ。

夜、なのはがフェイトと戦闘を開始する。俺は影からそれを見守る。危なくなったら、助ければいい。

「レイジングハート！お願い！」

『オーライ』

デバインバスター発射。すごいすごい……もう魔法じゃないから。あ、フェイトのやつ、あれはまずい。しょうがない、介入開始！

「ゼロ！」

『了解、武装形成』

俺はZセイバーを持ち、防御した。

「なっ！？」

「ふっ、甘いな」

「あなたは!？」

「なあに、ただの通りすがりだ……帰ることをお勧めする」

バイザーで顔を隠し、髪は金髪のロング。さらに身体は19歳の体  
にしているため、なのはに俺のことはばれないだろう。

「バルディツシュ」

『サンダースマツシャー』

「やれやれ……」

『マ・セシルド』

自動的にマ・セシルド発動。ゼロには今のところガツシュとネギま  
!の設定を使えるように調整してあるからな。

「なっ!？」

「わかっただろう?私に攻撃が通じないということを」

「くっ!」

『プットオン』

レイハがジュエルシールドを排出。貰ったくぞ。

「レイジングハート!？」

「ふつ、主思いのいいデバイスだな。さて、こちらも封印した。」

俺は二つのジュエルシードを持って遊ぶ。

「帰るよ、アルフ……」

「でも、ジュエルシードは……!」

「これはしばらく私が預かるう。」

「貴方もジュエルシードを!??」

ユーノが叫ぶ。まあ、そういうわけじゃないんだけど……

「……いい、帰ろう……アルフ」

懸命な判断だな、フェイト。引くときは引く。戦いの手際をわかっている。

「待って!」

「……出来るなら、私達の前にもう現れないで。もし次があったら今度は止められないかもしれない……」

「名前……あなたの名前は?」

「……フェイト、フェイト・テストロッサ」

「……あたしは!」

行ったか……

「あ、さっきはありがとございました！」

なのはが一礼する。まあ、俺は今回介入しただけだし、いいか。とりあえずやることもやったしな。

「気にするな……俺はでしゃばったに過ぎない」

「あの、ジュエルシールドは……」

「悪いが、これは俺が預かるう」

「っそんな！」

「何、悪事に使うのではない。私が『預かる』だけだ」

「それでも！危険な物なんです！」

危険ねえ……だったらなんでなのはにその危険なものを持たせるんだか。

「危険ならば尚更だ。私はこれを渡すつもりはない。それと……」

「ふえ？」

「そら、結界も張っていないものだから、旅館の方に明かりが多くなってきたようだが」



「にゃああ!？」

「さて、私は退散しよう」

「あ、待って！」

俺はその言葉を待たずに、その場を離脱した。

旅館に戻り、俺はジュエルシードをゼロの中に収めた。

「とりあえず、これでいいはずだ」

『とりあえずって……私の中に入れて大丈夫なんですか?』

「ああ、お前はロストログア入れても壊れないようになってるから大丈夫だよ」

そんなことを言っていると、なのはが帰ってきた。

「あれ、なのちゃんどうしたの?」

「ふえ!? じんくん! そのえつとね……眠れなかったから散歩行ってたの」

「そっか」

俺が言いながら布団に入ると、なのも同じ布団に入ってきた。

「ん？なのちゃん？」

「あのね、じんくん。今日だけ一緒に寝て欲しいの……」

よほど今日のこと Shock だったのかな。まあ、その Shock を作っただのは俺でもあるわけだが……

「うん、いいよ」

なのはが俺の布団に入り、俺の寝巻きを強く握り締める。

「何かあったの？なのちゃん」

「……なんでもないの」

「そっか、僕は何も聞かないけど、何かあったら言ってね？力になるから」

「うん、ありがとなのじんくん……」

こうして俺となのはは眠りにつくことにした。

次の日……

「なによこれー！」

第一声目がアリサの叫び声だった。

「ん……なんだよアリサ……うるさい」

「なんでって！あんたなんでなのはと寝てるのよ！」

「え？あ……」

俺の隣では、なのはが幸せそうに眠っている。

「えへへ、じんくん……」

寝言でなのはがしまりのない笑顔で笑った。

「あの、アリサさん？すずかさん？」

バチコーン

「あいたあ！」

「いつ！」

この後母さんたちが来るまで延々とアリサたちに説教された俺となのはだった。

第六話「温泉では絶対に覗きをしないこと」（後書き）

秋風「さて、更新です」

迅「しかし、最近思つがお前は忙しすぎじゃないか？」

秋風「まあね……」

迅「というより、日ごろの私生活がだらしない」

秋風「すいません……」

迅「そして今回の奴、更新遅すぎ」

秋風「ごめんなさい」

迅「まあいい。ということ、誰か早く寝て早く起きられる方法を教えてください」

秋風「待ってます」

迅「次回、『KYは全力で討つべし』それじゃ、まったねー！」

## 第七話「KYは全力で討つべし」(前書き)

さてさて、今回はちょっと長くなりました。一気に書いたので誤りがあるかもしれませんが

では本編どうぞ

## 第七話「KYは全力で討つべし」

初めての邂逅からちょっととして、なのはとアリサがケンカした。理由は原作を見ているからわかるだろう。なのはに起こった「小さな事件」だ。原因はなのはにあるだろう。喧嘩した事で、俺となのはで帰っている。

「……………」

「いつまで落ち込んでるの？なのちゃん」

「……………ん、ごめんなさい」

「僕に謝られても困るよ。ちゃんとアリサに言わないと」

「うん……………それはわかってるんだけど……………」

「言えないよな、魔法のことなんて。」

「なのちゃんは昔からそうだよな、いつも自分で考えてたらことん悩むから」

「うん……………明日、ちゃんと謝る」

「ならよろしい」

俺は笑顔で言う。

「じゃ、俺はこっちだから」

「うん、また明日なの」

こうしてなのはと別れる。公園に差し掛かると、アリサがいた。やっぱり悩んでるよ。

「アリサ」

「あ、迅……」

「こんなところでどうしたんだよ」

「ちよっとね」

不機嫌なアリサ。まったく、世話の妬ける子供だ。

「今日怒鳴ったこと、気にしてるんだろ？」

「……ええ、そうよ」

「妙な所で意地張るからそうなるんだろ？」

「しょうがないじゃない！迅だってわかってるでしょ！？あの子悩んでるのまる分かりじゃない！」

アリサの気持ちもわからんでもない、なのはがいるから、今のアリサやすすかがある。すると、すすかがやってきた。

「アリサちゃんお待ち……って、迅君？」

「やあすすか。すすかもいたんだね」

これは予想外。

「うん、今日のことであつとね」

「そつか」

「……なのはにだって、好きで怒つたんじゃないわよ」

「わかつてるよ」

アリサが寂しそうな顔をする。

「でも久しぶりだね、喧嘩したの」

「そうなんだ」

ああ、原作の最初のことね。

「うん、昔はアリサちゃんもすごかったから」

「我ながら我俣で強がってたからね」

俺はその後、アリサたちの話を聞いた。もちろん原作の話を。

「そんなところね」

「なるほど、でもアリサの強がりぶりはわからなくもない」

「どつどついう意味よ」



「私もそれはわかるかな」

俺とすずかで笑うと、アリサが顔を紅くする。

「もう！二人して笑わないでよ！」

「素直になれよ、アリサ」

俺が言うと、アリサが顔を伏せる。

「わかんないわよ、そんなの……」

「あいつにもお前らに言えないことが一つや二つある。俺にだってある。お前らだってあるだろ？そういうことくらい。」

「……」

「なのははそれを出しやすい。それはしょうがないさ。人間である以上な」

俺の場合、人間かどうか怪しいところだけだな。

「なら、私はどうすればいいのよ！」

「……待ってやれよ、あいつがそれを打ち明けるときまでさ」

「……うん」

アリサが頷く。これで一件落着か？

「なら明日、ちゃんと謝れよ?」

「わかってるわよ」

「なら帰るか、今日は」

「そうね。あの………」

「ん?」

「ありがとう」

アリスが赤らめながら俺にお礼を言った。

「どういたしまして」

こうして俺たちは家に帰ることにした。

その日の夜、原作どおり互いの攻撃が響き、レイジンググハートとバルディッシュが傷つく。俺はあえて介入しなかった。というか、できなかつた。次の日に登場する『あいつ』を討つために、色々考えていたからだ。そして、翌日。

「なのちゃん」

「ん、じんくん」

「元気ないね」

当然か、レイ八がああなつたら。

「なんでもないの……」

「まだ気にしてるの？」

「うん……」

はあ、このガキは……って、俺も今はガキか。アリサもアリサで素直に謝れていない。仲直りは原作どおりになるな……これ

そして4月27日……とうとうこの日がやってきた。

海鳴臨海公園にてジュエルシード発動。まったく、めんどうだな……

「まったく、生意気にバリアまで張るのかい！」

アルフが叫ぶ。まったく、世話が妬ける連中だ……

「はっ！」

俺はゼロをチェーンロッドにして木の化け物を絡み取った。

「あなたは！」

「この間の！」

「話はいい、今は前に集中しろ！」

俺の声に、二人が我に戻って木の化け物を見る。

「いいか、私が抑えている限りやつは動けん、その間に砲撃で潰し、すぐさま封印しろ！」

「は、はい！」

「うん」

二人が砲撃をする準備をする。まったく・・・俺も丸いねえ

「今だ！」

「デイバイン！」

『バスター』

「貫け、轟雷！」

『サンダースマッシャー』

二つの砲撃が命中。すぐさま封印させる。

「これでいいだろう」

「あ、ありがとう・・・」

「ふっ、君からそんな言葉を聞けるとはな」

俺が言うと、フェイトがちょっと顔を紅くする。だが、すぐにデバイスを構えた。

「だけど、譲れないから」

「私はただお話しただけなんだけど……」

「やれやれ、君たちの好きにしまえ」

俺はため息をつきながらあいつを待つ。二人が駆け出す。その瞬間、水色の魔法陣が張られた。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」

出た、KYにして数々のネット小説、そして同人誌で変態として知られる男。

「时空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか？」

「撤退するよ！フェイト」

おーおー、原作どおりで助かるよ。危ないぜ？フェイト。

『セウシル』

全体防御魔法発動。もう少し別のものも使ってみるべきだったかな？うーん……まあいいか。

「あなた・・・」

「ふっ、心配するな。私は味方だ」

「早く撤退したまえ」

「・・・ありがとう」

「ああ、道中気をつけてな」

フェイト撤退。それにクロノが怒りの表情を表す。

「貴様っ！」

「突然出てきた輩に、貴重なジュエルシード封印人材を潰されるわけにも行かないのでな。」

「貴様が行ったのは公務執行妨害だ！」

「ほう？この地球に管理局と呼ぶ組織は存在しない。そんな組織に公務などあるのか？」

「なんだと！？魔法を使っているのに管理局を知らないわけがないだろう！」

「憶測で話をするな、礼儀を知らないガキめ」

「なっ！」

このクソガキ、常識を自分のものだと思いやがって。悪い意味で天

道総司だな、こいつ。

「それとも、貴様が公共の場でそれを言って、公務執行妨害だと言  
い張るか？メディアにも知り合いがいる。教えてやってもいいぞ？」

はったりをかけると、俺にステインガーが飛んできた。

「ほう？」

「これ以上話しても無意味だ！貴様を逮捕する！」

「くつくつく、待ってたよ、この時を……」

向こうが手出しすれば、こちらはそれを迎撃したとすればいい。エ  
レナにも、その写真は収めさせている。

「（まったく、人使い荒いんですから）」

「（後で翠屋のケーキ買ってやる）」

「ゼロ、武装形態解除だ。モビルスーツMSの武装を」

一応俺単体でもなれるのだが、ゼロを使えば稼働のサポートなども  
してくれるので、こちらのほうが楽になる。いくらチートの身体で  
も、俺自身の精神などを支えるのには、デバイスは有効的だ。

『了解、何で行きます？』

「合言葉は、『赤い彗星』……だ」

『了解、ザク？、シャアモデル武装』

俺の身体がシャアザクに変わる。認めたくないものだな、若さ故の過ちというものを……なんてね。

「な、なに!？」

「モビルスーツの性能の差が、決定的な戦力でないということ、教えてやろう!」

俺はバーニアを吹かし、クロノにヒートホークで斬りかかった。

「ぐっ!」

プロテクションが、甘いクロノ。

「何、後ろ!？」

俺は後ろに回りこみ、蹴り飛ばした。

「うーむ……」

『どうしました?マスター』

「いまいち力がない。ゼロを武装してたほうが良いと思ってさ」

『まあ、専用とはいえ『ザク?』ですから』

「そうだな」

となると、別の力を使うか……でも、これだとなのはにばれる



んだよな。

「いずれはらすし、いいか」

俺は武装を解き、なのはの前に下りた。

「ここは、これのほつが良さそつだ」

『コードは？』

「合言葉は『自由の翼』」

「了解、フリーダムガンダム武装」

俺の身体が今度はフリーダムに変わる。

「ふええ！？」

「危ないぞ、下がっている」

「あ、はい！」

なのはを下がらせ、ビームライフルを発射する。

「くっ！」

「どうした、私を捕まえるのだろう？」

『ターゲット、マルチロック』

「はあっ！」

ハイマツトフルバースト発射。魔力ダメージだから死にはしないだろう。おー、堕ちた堕ちた。……………ん？

「ぐっ……ブレイズ……」

まだあがくのか。というか……

「大きなスキを作りもせず大技か？」

「何!？」

「戦いとは、二手、三手先を読んで行うものだ」

俺は一気に接近し、ビームサーベルでクロノを斬り飛ばした。

「うわああー！」

「さて、これで止めだ……」

俺はビームサーベルを突きつける。

「あ、あの……なにもそこまで……」

なのは、やはりお前は甘いな……

「お前が救いたいと願った少女に攻撃したのにもかかわらず……か？」

「それでも、これはいけないと思います」

「ふっ……若いな。まあ、見た目どおり」

「ふえ!？」

なのはがアタフタしてる。まあいいや、そろそろ来るか？あの女が

『待つてくれないかしら?』

「……誰だ?」

『そこにいるクロノ・ハラオウンの上司であり、母親のリンディ・ハラオウンです。武器を収めてもらえないかしら。』

「それはそれは……だが、私が武器を引いてこの者が襲い掛かってくるという危険性もある。悪いができない相談だな。」

『私たちに敵意はありません』

「なら何故こちらに襲い掛かってきたのかな?よくわからない単語を並べられて困っているのだが?」

『……こちらの非礼はお詫びします。ですから、武器を収めてください。こちらは事情を聞きたいだけです』

リンディさんの真剣な目。まあいいだろう。まあ念のために……

『バインド』

「なっ!?!」

「これくらいの処置はさせてもらおう」

言いながら俺はバインドでクロノを拘束する。

『・・・わかりました』

「かあさ・・・いや、艦長!?!」

『クロノ、今回は貴方に責任があるわ。おとなしくしてなさい』

「くっ・・・!」

ざまあwwつと、武装を解除するか。

「ゼロ」

『武装解除』

俺は元の金髪にバイザーがついたロックマンゼロのヘルメットをかぶった状態になった。

『貴方達の名前を聞いてもいいかしら?』

「あ、はい!なのは、高町なのはです!」

「ユーノ・スクライアです」

「.....」

さて、困った……仮の名前とこのを思いつかない。いつそのことリリカルの名前以外のアニメキャラの名前でも使うか？いや、それは個人的に痛い……。チートの『能力』はいいもの、そういう中二病的な名前、行動、セリフに違和感がある。

「（もうばらしても問題ないんじゃない？）」

「（そーだな……。エレナ、出てきていいよ）」

俺の念話を了承し、木の陰からエレナが出てきた。

「なんだ、お前は！」

「ふえ！？え、エレナさん！？」

「こんにちはなのはちゃん」

「どうして？ええ！？」

なのは慌てまくり。落ち着けて。

「それはそこにいる人が説明してくれるわ」

「ふえ？」

「……。ゼロ、武装完全解除、変身魔法も解除だ」

『了解、武装魔法オール解除』

俺は元の姿に戻る。

「今まで黙っててごめんね、なのちゃん」

「じ、じんくん？え、だって、ええ？」

「落ち着こうかなのちゃん」

「ふええええええ！無理だよお！」

なのは完全にパニック状態。まあしょうがないだろうな……

『あ、あの……』

「ああ、そうだった。俺の名前は神谷迅だ」

こうして、俺のKY男へのフルボッコは幕を閉じた。

第七話「KYは全力で討つべし」（後書き）

迅「長かったな」

秋風「ああ、めちゃくちゃ長かった」

迅「それにしても、今回だが……」

秋風「ああ、シャアザク？」

迅「わざわざなる必要あった？あれ」

秋風「まあ、あれだ……なんとなく出したかった」

迅「気分なのか……」

秋風「気分だ」

迅「にしても、ガツシユネタ多くないか？」

秋風「ああ、あの時は万難排す戦女神の盾も考えたけどさ」

迅「考えたけど？」

秋風「ここはお決まりである時かな……と」

迅「あ、そ……あと出す予定なのは？」

秋風「とりあえず王道漫画の力は全部出すよ？個人的にはジヨジヨ

とかもいいかなと思ってる」

迅「えー……」

秋風「安心しろ、第3部からにしてやる」

迅「それが不安だよ」

秋風「そっぴいな」

迅「次回、第八話『取引で策略は徹底的に潰すべし』それでは、また」



**第八話「取引で策略は徹底的に潰すべし」(前書き)**

はい、連続投稿です。身体が持つか心配です  
随時、リクエスト募集しています

では本編どうぞ

## 第八話「取引で策略は徹底的に潰すべし」

しばらくして、リンディさんが到着する。俺はエレナを走らせ、お茶を買いに行かせた。

「初めまして、時空管理局所属艦『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

「アースラ通信主任のエイミー・リミエッタです」

「高町なのはです!」

「ユーノ・スクライアです」

「……神谷迅だ。ほれ、返すぞ」

俺はクロノを投げると同時に、空中でバインドを解いた。

「うああああ!?!」

そして見事地面に落ちた。

「いつ……」

ざまあないな

「あの、じんくんやりすぎなの……」

「僕に襲い掛かってきた代償は重いんだよ、なのちゃん」

俺がここにこいつらを呼んだ理由。それは、俺という存在を管理局に確認させないためだ。俺は指を鳴らし、10にも20にも結界を張った。

「これで干渉できる人間、機械はない」

「……すい」

ユートノが驚く、ふっ、これがチートを使う人間の實力さ。

「さて、まずはそちらの素性を明かしてもらおう。管理局というものについて」

「ええ、わかりました」

こうしてリンディさんから話を聞く。ふん、9割方嘘じゃないか……

「なるほど、世界規模の警察組織か」

「ええ、簡単に言えば、ですけど」

「なら疑問があるな。何故この『管理外世界』でその少年に『逮捕権』というものがあるのかを」

そう、この管理外世界では時空管理局の常識や法律は関係ない。

「それは申し訳ないことをしたわ。今回の件は、不問にします。」

「不問も何も、俺は元から無罪だ。『先に』攻撃してきたのはそちらだ」

エレナが動画を取り出し、それを映し出した。

「これは動かぬ証拠だろう」

「っ…」

ふん、こっちにプレッシャーを与えようだったってそうは行かないんだよ。

「さて、ではユーノ・・・まさか人間だったとは思わなかったが、お前も説明したらどうだ？」

「え、あ、うん」

ユーノが人に戻ったときはなのはが当然ながらパニックになった。その辺は原作と一緒だ。そして、ユーノはジュエルシードについての説明、この世界に来た理由を話した。

「なるほど、立派だわ」

「だが同時に無謀でもある」

リンディさんが感心し、クロノが呆れる。

「これよりロストロギア『ジュエルシード』の回収には、時空管理局が全権を持ちます」

「えっ……」

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも…そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、それから改めて話をしましょう」

戸惑う二人、本当テレビで見たときとは違うな。生で聞くと虫唾が走る。

「なるほど、なら帰ろうか、なのちゃん」

「え、じんくん？」

俺が立ち上がると、リンディさんが待ったをかける。

「待って頂戴」

「なんだ？もう話は終わっただろう」

「貴方には、聞きたいことが山ほどあるわ」

「……」

「まず、あなたの力について・・・あの全身体の特特殊武装、そしてあのデバイスについて、できれば詳しく説明と解析を「断る」え！？」

俺の言葉に、リンディさんは驚いて俺を見た。

「俺は管理局に協力する義務も義理もない」

「そ、そついわずに・・・」

「そもそも、人を利用しようとする組織に、誰が手を貸す？」

「な、なんだと！？」

クロノが驚く、リンディさんは顔を強張られた。

「クロノ、君は言った。『民間人を巻き込むわけにはいかない』と」

「あ、ああ・・・」

「ならば何故、再度の『話し合い』が必要になる？」

クロノは俺の言葉が理解できていない。空気になりつつあるエイミイも、首をかしげた。

「もっとわかりやすく・・・いや、真理を言おう。俺はなのちゃんを利用したことを許そうとは思わんぞ、リンディ・ハラウン」

「っ！」

「え、どうということなのじん君！」

「簡単のことだよなのちゃん。なのちゃんのことだ、きっとこう言われても協力するつもりでいたんだろっ？」

「う、うん……」

「その心をリンディさんは利用した。そのまま誘導し、自分たちの戦力に加えようと考えた。そうすれば事件の解決は迅速になり、さらには事件後に協力要請を簡単に出せる。」

俺の言葉に、リンディさんは顔を強張らせる。クロノは驚いてリンディさんを見る。

「本当ですか艦長!？」

「なのちゃんの魔力を凶る機械が恐らくそちらにはあるのだろうか？ それを使うことであな方は自分たちの力にしようと考えた……  
・俺の説明に否定するところがあれば言ってもらいたい？」

俺の言葉に、リンディさんは何も言わなかった。否、言えなかった。当たり前だ。俺はこの人の策略を粉々に打ち砕いたのだから。

「さて、帰ろうなのちゃん。管理局に頼らなくても、僕がなのちゃんに協力するから」

「じんくん……」

「待つてください!」

リンディさんが声を上げた。まったく、俺は帰って飯を食いたいのに・

・・・

「何か？」

「貴方たちを騙したことは、謝罪します。こちらは立場上一般人に協力などできません。でもこの事件を解決するため、お願いです！力を貸してください！」

リンディさんが頭を下げる。断りたいところだが、この後の展開はよくわかっている。

「……………だって、なのちゃん、ユーノ」

「私……………手伝います、手伝わせてください！」

なのはが言う。……………つたく、このお人よし。

「僕も手伝います、原因は元々僕ですし」

はあ……………どうしてお前らはお人よしなんだ。

「なのちゃん、いいんだね？」

「うん、フェイトちゃんのためにも私、頑張る」

「そっか……………そうになると事情は変わってくるな」

「え？」



何意外そうな顔してんだのは。

「僕も協力しよう。ただし、条件付でね」

条件は以下の通り。

俺が作成したデバイス『ゼロ』については一切触れない

協力しても、俺の能力の解明、解析はしない

俺の存在は上に報告せず、事件の成果は全てなのはものとする

テスタロッサの名がつく人間に、クロノは手出ししない

「おい！ちょっと待て、なんだ4つ目は！」

「ん？だって君は恐らくあのフェイトという子を強制的に捕獲しようとするだろう。そうすればあのちゃんがフェイトと会話ができない」

「当たり前だ！彼女はすでに犯罪者……」

「ふん、どうだかな」

「何！？」

「その犯罪に対する理念、改めたほうがいいぜ」

俺はクロノをにらみつける。あ、これは言っておいたほうがいいな。

「そうそう、この約束、4つ目はともかく、他の3つを破ったら俺は管理局を潰すから」

そう釘を刺し、俺はなのはと帰ることにした。

「あの、じんくん」

「ん？なんだいなのちゃん」

「どうして、あんなことを言ったの？」

「どれのこと？」

「管理局を潰すって……」

「あなたならやりかねないですけど」

ああ、そのことが。

「そうじゃないと色々とまずいからだよ。」

「えっ？」

「簡単なことですよなのはさん、ユーノさん。迅の力はオーバーテクノロジーばかりです。上が知れば、恐らく迅だけではなく、理沙様も目標になってしまっ……いえ、最悪海鳴市の住民に管理局の手が及びます」

「え!？」

エレナの言葉になのはたちが驚く。

「だから釘を刺したんだよ。手出しできないようにね」

「な、なるほど・・・」

「後俺は協力するとは言ったけど、管理局に協力するつもりはないよ?」

「ふえ?」

「俺はなのはとフェイトに協力をする。」

「ふえ?え?へ?」

三拍子で疑問をするな。鬱陶しい・・・

「だから、俺はなのちゃんを守るために一緒に戦うんだよ」

俺の言葉に、なのはが顔を赤くする。

「じ、じんくん・・・」

「ん?」

「ありがとなの・・・」

「どういたしまして」

そんな会話をしていると、ユーノが少し不満そうに俺を見た。

「どうした」

「い、いえ・・・」

「(ふっ、なのはの気を引きたいなら頑張るんだな)」

「(なっ！僕はそんなんじゃない・・・)」

「(ほう、女湯を覗いた淫獣がそんなことを言うか)」

「(そ、それはあなたが原因です！って、淫獣！？)」

「(たく、認めないのかこの淫獣め・・・)」

「(エレナが言っていたぞ、フェレット姿で鼻の下伸ばしていたと)」

「なっ!?!」

「ユーノ君どうしたの?」

「え?ううん!何でもないよなのは!」

「ふふふ、面白いなあまったく。さて・・・俺は次のことを実行しようかね。」

この後家に帰り、  
帰りを心配された母に抱きつかれたのは言いつまで  
もない。

第八話「取引で策略は徹底的に潰すべし」(後書き)

秋風「あー！すつきりした」

迅「そうだな」

秋風「そして次回はまた場面が移るよ」

迅「とりあえず大丈夫なのか？それは」

秋風「まあな」

迅「不安だ」

秋風「気にするな、いつものことだ」

迅「・・・次回、第九話『原作の悲しさは潰すべき』ではまた次回」

秋風「ちなみに感想、リクエスト受け付けます！どんどん応募してね！」

第九話「原作の悲しさは潰すべき」（前書き）

・  
・  
とりあえず更新・・・もうすぐ10万を超えそうです。感謝感謝  
・

## 第九話「原作の悲しさは潰すべき」

「」

「さっきから何をしてるんですか、迅」

俺はアースラの室内でしきりにコンピューターのコンソールを叩いている。

「ん？」

「ん？じゃないですよ、何してるんですか」

「ああ、ちょっとな（管理局にバレるとまずいこと）」

「ちょっとって……（また危ない橋を渡るつもりですね）」

え？何をしてるかって？それは内緒だ。でも今やったのは阻害認識魔法の強化版。

「これでよしと……ゼロ」

『了解』

結界を張る。

「どじするんですか？」

「ん？ああ、フェイトの母親……プレシアさんの所に乗り込む」



「ちょっと、それはまずいんじゃない？」

「なのはないし、やれることはやっておく。」

現在なのはジュエルシードを追って淫獣と出ている。クロノはサポートだし、ここには監視カメラをつけないという約束もある。

「でも誰か来たらどうするんですか？」

「それはこれさ」

俺は手を十字に合わせる。そしてボンツと、煙が出てそれが形成された。その場に俺は3人となった。

「なるほど、影分身……」

「さらに……」

「変化！」

分身の一人がエレナに変化する。

「なるほど、これならばなりませんね……にしても」

エレナはジト目で分身+変化の俺を見る。

「いささか、本物の私より胸が大きいような……」

「そうか？」

分身の俺は頭をかきながら胸を見る。

「まあ、細かいことはいいだろ。すぐにでも出発する」

「大丈夫なんですか？」

「転送魔法は使えるし、フェイトが言っていた時の楽園の場所を言えは何かなるだろ」

確か転送のコードは『答えを出す者』だと876C 4419 3  
312 D699 3583 A1460 779 F3125か  
・・・長いな。

「ここからは完璧に原作を破壊するんですね」

「ああ、正直この世界に来たときは戸惑いもあったが、この力で変えられるものがあれば変えたいからな」

実際、テレビを見て涙する場面は変えたい。この後のことと言えば  
リンフォースの消滅、JS事件においての重要人物の親類の死亡  
だ。ティードとかクイントとか・・・

「ま、それはいい。今は時の庭園に行くことだな」

「そうですね」

「ゼロ、転移魔法を展開してくれ」

『了解です、マスター』

「座標コード 876C 4419 3312 D699 358  
3 A1460 779 F3125・・・時の庭園への扉を開く」

こうして、俺はエレナと共に転送した。

転送すると、そこは扉の前だった。

「・・・・・・ほう、ここか」

扉・・・・・・ここがあのある有名な部屋か。一応俺はゼロを使用し、変装する。

「でも迅、あなたどうするつもりなんですか?」

「まあ、任せとけて」

扉を開けると、イスにもたれる女性がいた。これがプレシアさんか・

「何者?」

「こんにちは、大魔導士のプレシア・テストロッサさんで合ってます?」

「いかにも、私が大魔導士のプレシア・テストロッサよ」

言いながらプレシアさんが立ち上がる。まあ、警戒心丸出したな。

「答えなさい、どこから入ったのか。それと何者なのか」

「……そうだな、秘密」

「話にならないわ。消えなさい！」

おっと危ない……

「エレナ、下がれ」

「はいはい……わかりましたよ」

エレナがバツクし、俺はシールドブーメランを構えた。

「来い、大魔導士」

「馬鹿にして……！」

紫色の雷。おととつと……えーと……アリシアのいる部屋は……

「ここだあ！」

「なっ!?!」

俺は壁を破り、アリシアが眠る場所に辿り着く。

「あなた、何故ここが……」

「あんたの娘……か」

「そうよ、私の娘、『アリシア・テスタロッサ』」

「……一応聞くが、フェイトは違うのか」

「あんな人形と、アリシアを一緒にしないで！」

再び放たれる紫の雷を俺は盾で流す。危ないな……

「こんなところで暴ればアリシアが危ないと思わないか？」

「あなた、人質のつもり!？」

「どうだが」

俺は短く笑い、武装を降ろした。

「フェイトが人形……か」

「そうよ!あの子は私が作った人形!事故で死んだその子の代わりに作った人形よ!」

「……気に入らねえな」

「なんですって?」

俺はいい、プレシアさんが表情を険しくする。

「こんなことして、仮にこの子が目を覚まして、喜ぶとでも思っているのか?」

「……………」

「あなたは目の前の事実から逃げてるだけだ。」

「黙りなさい……………」

プレシアさんが言うが、俺は言うのをやめない。

「自己満足して、アリシアの命を弄び、フェイトを傷つけ続ける……………」  
「それが今のあんただ」

「黙れ……………」

「（天道総司の）おばあちゃんが言っていた。子供は宝物……………」  
この世で最も罪深いのは、その宝物を傷つけることだ。今のあなたをみたら、アリシアは悲しむ以外のなにものでもないだろうが！」

「黙れっ！」

言葉と共に雷発射。ぐっ、きつい……………」

「（ちょっと！なんで避けないんですか！）」

「……………」正直、アニメ見て思ったけど、母親の想いってどんなもんかと思ってさ」

そんなこと言ってたけど、これって結構きついな……………」

「何故、避けないの……………」？貴方の動きなら避け「ゴホッ！ガハッ！」

「しっかりしろ」

「殺そうとした……人間の心配する……なんて、変わってるわね」

「知ってたよ、あんたが弱ってるの」

「!?!」

「だから正直、負担は減らしたかったんだが……すまない」

「ほんと、変わってるわ」

俺はプレシアに手をかざし、ケアルガかけた。

「これは……」

「一時的だが、楽になるだろ。落ち着け」

「……ええ」

「別にあんたの想いは否定しないさ。あんたがどんだけ娘を思ってるのかも、わかってる」

「……そう」

「でもよ、フェイトを『人形』なんて思うのは、やっぱり違つと思  
うんだ」

「何故？」

「だってよ、どんな生まれ方をしてもフェイトはあんたが「生みの親」じゃないか」

「……………！」

プレシアさんが驚く。まったく、なんでこんな簡単なことをわからないんだか。

「……………アリシア、そしてフェイトはあんたの娘だ。例え世界を敵に回しても、守るべきなのはこの二人……………違うか？」

「………………………………………」

俺はプレシアさんを壁に寄りかからせ、立ち上がる。

「……………恐らく、このあとフェイトがケーキを持ってここに来る。ジュエルシードは少ないだろう。だが怒ってやるな。それが母だ。」

「あなた、本当に何者？」

「……………俺は神谷迅。魔導士……………かは定かではないが、とりあえずあんたの味方であり、この先の悲劇を変えようとするものだ。また会おうプレシア」

そうして、俺はその場を去ることにした。立ち去るとき、プレシアさんが「私は間違っていたの？」と呟いたが、俺は「自分で考える」といって転移した。



アースラ 迅の部屋

「ふう、帰ってきたぞと」

「お疲れ俺」

「お帰り、どうだった？」

「ん、まあな。」

こうして俺の分身たちは消えた。

「これでプレシアの心が動くか……」

「どうなんです？ 実際」

「さあな……」

「じんくんー！ いるのー？」

「いるよなのちゃん」

タイミング悪くなのはが入ってきた。

「どっした？ なのは」

「うん、その、明日フェイトちゃんと決闘するの……」

決闘……なるほど、分け合って戻ってきたか。

「なるほど、で？」

「勝つために、特訓したいの！」

「なるほど……んー……わかった。なのちゃんに協力するよ」

「やったー！」

なのはが怒りだすと怖いからな……よし、試しにだがあれを使ってみよう。

「なのちゃん、着替えとか一式、ここに来たの全部持っておいで。ユーノも」

「ふえ？」

「いいから」

「う、うん……」

30分後

「持ってきたよー！」

「うん、こつちも準備完了っ」と

「あれ？なに？このミニチュア」

そこにあるのはネギま！登場の『別荘』だ。

「ふふふ、訓練場より広い環境を用意しようと思ってね。まだ未 completion 成だけどテストもかねて使おうと思ってね。」

「あらあら、これはなあに？」

リンディさん、タイミング良すぎ。まあいいや。

「説明するより使ったほうが早いな」

指を鳴らし、魔法陣を展開する。そして中へと転移した。

「ふ、ふええええええええ！？」

「い、いっは！？」

「ここはさっきのミニチュアの中だよ。説明は座ってしよう」

あの転送場所から移動。た、高いな。ソファに座り、説明を始める。

「えっと、ここって、えええ！？」

「なのは、落ち着こうよ」

「それで、どういふことなの？」

「ここは俺の作り出した『別荘』です」

「別荘？」

みんなが首を傾げる。まあ当然か。

「説明すると長いのはしよりますが、ここは圧縮空間を魔法で作  
り出したもの。」

「な、なんだかよくわからないの……」

「まあ、そんなもんだよ。ここになのちゃんを呼んだのは色々と理  
由がある。その一つが、修行の時間を長引かせることだ。決闘って  
明日だろ？」

「うん、時間がないの……」

「ここはね、外とここで時差が発生するんだ」

「時差？」

「ここでの一日は、外では『一時間』になる」

「ふえ！？」

「そんなことが可能なの？」

可能じゃなくて事実なんだよ。

「ええ、だからなのちゃんにはたっぷり修行させます」

「あ、あの、じんくんちょっと怖いので……。それと、まだよくわからないの」

「そうだね、浦島太郎の竜宮城があるでしょ？ここではその逆ってこと」

俺の言葉に、なのはがようやく理解した。

「安心してなのちゃん、フェイトに勝てるために地獄コースを用意したから」

「安心できないのー！」

なのはの声が別荘で響いた。

さてさて、なのはは一時ユーノが見ることに。俺はリンディさんと話しをすることになった。

「それで、お話というのは？」

砂糖入りの緑茶を飲みながらリンディさんが聞く。あんだ、やっぱり糖尿病になるよ？

「この事件の全容、そろそろ見えてきた頃かと思いましたが」

「……ええ、フェイト・テストロッサのテストロッサについてね」

「なるほど、事件はそのテストロッサの人間がやったと？」

「まだ確定ではないけど、そうなるわ」

「リンディさんもわかってきていると思うが、フェイトが自分の意思でやっていないことはわかるだろう」

「ええ、クロノは納得してないみたいだけど」

しょうがない、あのガキは今度肉体言語でわからせてやる。

「フェイトの罪を無罪にして欲しい。もちろん、主犯もな」

「……フェイトさんはわからないけど、主犯は無理よ。確実にね。でも理由があるなら減刑はできるけど……」

「理由は話す。全部ではないが……」

俺は話す、主犯の名前プレシア・テストロッサのこと、そしてその理由を

「本来あなたの立場上、プレシアの行動は犯罪として処理するだろう。だが、これには管理局の対応の遅さ、さらには管理局の監督不届きが問題になる。プレシアを逮捕したら俺はこれを公表するつもりだ。」

「あなたはどうして欲しいの？」

リンディさんは驚きながら言う。まあ、そんなことは一つだ。

「フェイトとプレシア、その二人が不自由なく、二人で暮らせること。そして特別枠でフェイトとプレシアを重要参考人として保護すること」

「わかりました、できる限りの処置はしてみます」

「そうですか。まあ、上が何か要ったら全力で潰しますから、管理局」

俺は笑顔でそう言った。

「あ、あなたの笑顔は怖いわ」

「そうですか？これが普通なんですけどね……」

「（普通じゃありませんから）」

「何か言った？エレナ」

「い、いえー！」

こうして、俺はリンディさんとの交渉を続けた。

第九話「原作の悲しさは潰すべき」（後書き）

迅「さて、おい秋風、カブト2連続って」

秋風「天道語録だけな」

迅「んでもって雷、チート使ってるのに痛かったぞ」

秋風「それは本編で」

迅「まあいい。次回、第十話『決戦、そして・・・』それではまた」



第十話「決戦前夜は必ず後のことを考える」(前書き)

タイトル変わりました。その辺はご勘弁を

第十話「決戦前夜は必ず後のことを考える」

プレシアシード

「そう、ジュエルシードはこれだけなの」

「その、ごめんなさい、母さん……」

いつもなら、ここで制裁をするけれど、今日は何故だかそういう気分にはならないわね。

「わかったわ……残りのジュエルシード、必ず集めなさい」

「え……あ、はい」

「それと……このケーキ、後でいただくわ」

「はい！」

フェイトは嬉しそうに部屋を後にした。

「……どうしたのかしらね、私は」

あの青年、神谷の言葉が忘れられない。

『例え世界を敵に回しても、守るべきものはあの二人……違うか？』

「……大切な娘」

アリシアだけ、そう思っていた。でも今は……

「……おいしいわね」

私はケーキを口ににする。しかし、その瞬間毒気が身体を走った。

「ゴホッ、ゴホッ！」

もう、この身体も長くはない。この身体ではアリシアを蘇らせる時間もなければ、フェイトと共に暮らす時間もない。

「あら……？これは」

足元に、何かが落ちていた。それはメッセージカード

『もし、決心が決まったら電話をしてくれ 神谷』

「決心……」

私の決心……それはアリシアを蘇らせること、そして、フェイトに幸せになって欲しいという願い……。何といても私は、あの子たちの母親なのだから。私は神谷に連絡をとることにした。

別荘生活5日目。詰まる話、5時間経過

「ほら、また隙ができた」

「ふえ！？」

「はっ！」

「あう！」

ベシヤ、と音を立ててなのはが地面に叩きつけられた。まあバリアジャケットがある分大丈夫だろ。

「いたたた……」

「なのちゃん、もう終わり？」

「ま、まだまだなの！」

「でもなのは、やりすぎじゃない？ちょっと休憩にしないと」

「大丈夫なの！」

まあ、ここなら魔力も充満してるし問題はないけどやりすぎかな。もうこの中で4時間はぶっ続けだし。ん？ケータイ……非通知

「わかった、ちょっと休憩な。ちょっと電話してくる」

俺は携帯を手に、地下へと行った。便利だな、別荘でも使えるなんて、ケータイ

「もしもし？」

『……私、プレシアよ』

「ほう、電話をかけて来たということは、決心が固まったかな？」

『……ええ、そんなところよ。それにしても貴方の声が幼く聞こえるんだけど？』

「気のせいだ、気にしないでくれ」

そういえば本来の姿見せてないっけ……

『まあいいわ……あなたに、頼みがあるの』

「……頼み？」

『ええ、フェイトをお願いするわ』

「は？」

何言ってるんだこいつ

『私はもう助からない……アルハザードにだって、行けないとわかっている。だから、私は最後まであの子に『悪者』を演じるわ』

「……それが、あんたの答えか？」

『そうよ……私は、あの子に幸せになって欲しいもの』

「……わかった、フェイトは俺に任せろ」

『ええ、頼むわね』

こうして電話が切れる。

「迅、どうでした？」

「ああ、ちょっと厄介なことになった」

俺はエレナに今までのことを話す。

「つまり、このままでは原作どおりになってしまつと？」

「そうだ……だが、俺がさせると思つか？」

「いいえ、まったく」

確かにそれはフェイトのためになるだろう。だが、それは間違っている。そんなことしたらフェイトに罪を作ってしまうだけだ。

「……不治の病と死者の復活か」

「やる気ですか？」

「できなくはないだろ」

「貴方の力なら当然可能ですね」

「……だけどさ、死者の蘇生って天使の立場上どうなのさ」

「私は今はあの上司バカのせいであんな人ですから、責任はアテナ様に行くでしょう」

「あ、そ」

なら問題はないな……でも死者の転生って色々あるんだよな……その辺は考えておこう。

「さらに言えば、プレシアの今後も考えなくては……」

「ああ、そうだった」

そう、リンディさんと色々交渉はしている。交渉というよりは脅しだったりもするわけで、管理局の悪事を色々とちらつかせている。

「じんく〜ん!」

「あー、うん!今行くよ〜!」

まあ、それより今はなのはの修行に励みますか。

なのははすでに準備している。

「さて、もう一回行くよ、なのちゃん!」

「うん!」

こうして、なのはとの修行を再開した。

修行が終わり、そろそろやめようということになった。夕食を食べ、ゆっくりする。

「明日の決闘のことだけだし、ユーノ」

「何？」

「お前、決闘で横槍入れんなよ？」

「え、うん……」

「これはアルフにも言いつつもりだけだな」

決闘に横槍なんて入れられたらせつかくのバトルが見れなくなるしな。

「あとなのちゃん、全力でぶつかってフェイトと理解しあうんだよ？」

「うん、わかってるの！」

「そっか」

まあ、なのはのこういつまっすぐなところはいい所だな。

「さて、寝ようか」

「うん、そうするの！」

明日が楽しみにだな。

こうして次の日がやってきた。そこは海鳴臨海公園。そこにはすでにフェイトがバリアジャケットを着ている。アルフも後ろにいる。



「さて、揃ったな。これより、高町なのは、そしてフェイト・テスタロッサのジユエルシードを賭けた決闘を始める。立会人は私が行う。両人ともいいか」

俺の言葉に、両方が頷いた。

「ルールはギブアップするか、相手が気絶したら負けになる。それと、その二人は横槍を入れないこと。それがルールだ。何か質問は？」

黙っているところを見ると、どうやら良いらしいな。

「では海上に行け、俺の合図で戦いを始めてもらう」

こうして、海での決戦が幕を開ける。

第十話「決戦前夜は必ず後のことを考える」(後書き)

今回はお休みです

迅「次回、第十一話『全てを自分の思うとおりに運べ』それではw」

第十一話「原作以上のBad endはさせるな」(前書き)

はい、最新話です。最近は時間がおかしくなりました。忙しいので  
すみません

では本編どうぞ

## 第十一話「原作以上のBad endはさせるな」

現在海上にいます。はい、決闘です。ちなみになのははやる気満々だ。頑張れ……

「あの、気になったんですが」

「なにさ？」

「（貴方が特訓したなのはちゃんなら、負けないんじゃないですか？）」

「（あー……それな、多分五分五分だぜ？）」

「（は？）」

まあそうだよな、あれだけ特訓したんだから。でも実は『実践』に馴れさせるだけであって、能力的なものは何にも上げてない。実際原作でもなのはギリギリの勝ちだった。多分今の二人は同じくらいのと技量のはずだ。後はあいつらの頭の回転に賭けるしかない。原作どおりの戦いがあればそれでいい。

「（なるほど……でもいいんですか？原作どおりで）」

「（プレシアさんが動けば後から色々と変わるだろ、大丈夫だって）」

うん、大丈夫……だよな？

「んじゃ、始めるぞ。準備はいいな」

互いが頷く、さてと……始めますか

「決闘、開始！」

俺はバックし、エレナたちがいる地上まで降りてきた。

「ふう、これならいいだろ」

「なのは……大丈夫かな」

「さあな、実戦ならフェイトのほうが上じゃね？」

「なんだあんた、わかってるじゃないか。あんなぬくぬく育った子とっ「それも間違ってるけどな」はあ？」

アルフの言葉をさえぎり、俺は言葉を続ける。

「フェイトも辛い思いはしているだろう。だがなのはもあんなニコニコしているが、小さい頃は笑顔なんてほとんどなかったからな……少なくとも、俺に会うまでは」

さて、プレシアさんが防御は……そうだな、考えておこう。

「なのはー！」

……  
ユーノが叫ぶ。お、なのはの奴捕まったな。これからどう抜けるか……

「なのは！」

「待たんか淫獣」

「うわっ！」

飛ばうとするユーノを、俺は掴んで止めた。

「決闘に横槍するなって言っただろっが」

「で、でも……！」

「それに、ここでなのはに助けに入れば俺はこれでなのはの反則負けにするぞ」

「うっ……」

というか、マジでいい所なんだからジヤマしてやるなよ。……ふむ、なのはは無事か。一緒に修行してわかったけど、あいつって結構頑丈なんだよな……

「受けてみて！デイバインバスターのバリエーション！」

出た、魔王砲撃……拘束はあいこでも、これは実際見るとエグイもんだな。

『スターライトブレイカー』

「うああー！」

ゲームセットだな……原作どおり海へぼちゃんか……まあ  
させないけどな

虚空瞬動！

「間に合え！」

間一髪、俺はフェイトを受け止める。

「フェイトちゃん！」

「ふっ、決したな」

「……はい」

なんだ、随分と素直じゃないか。

「負けを恥じることはない、君は精一杯やったのだからな」

「……はい」

『プットアウト』

ジュエルシードが出てきた。さてと、そろそろ来るな。紫色の雲……

「なのちゃん、下がれ！」

「えー!？」

「か、母さん……」

フェイトがおびえている。そして、紫色の雷が放たれた。今回は喰らう気はないぞ！

「織天覆う七つの円環<sup>ロー・アイアス</sup>！」

七枚の花弁のようなバリアを展開。うん、さすがだな……

「ふう……リンディさん、時の庭園へのルート、把握しました？」

『え、ええ……逆探知は成功したわ』

これから、最終決戦だ……！

プレシアシデ

これでよかったのね……神谷が防いだし、フェイトは無事ね……

「ゴホッ！私もう、長くないわ……」

「それはどうかな？」

「っ！神谷!？」

そこには神谷がいた。気配を感じなかった!？

「安心しろ、今の俺は分身だ」



「分身？」

「まあ、今はあなたの容態だ……もうすぐ管理局が乗り込んでくる。これを飲め」

「これは……？」

それは綺麗なビンに入った水。

「秘薬だ。身体を持たせるのにはいいだろ。不死の病は、分身の俺には治せない」

「……礼を言うわ。アリシアを渡すわけにはいかないから」

「……最後まで演じるんだな？悪役として」

「ええ、フエイトが幸せになれるなら、それで」

「……わかったよ、後はあなたの好きにしてくれ」

そう言って神谷は煙を立てて消えてしまった。

迅side

「……さて、武装局員はどうだ？」

「乗り込んだわ。あれは……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

出ちまったな、アリシアの映像が

「あれ、何・・・？」

フェイトが目を見開く。

『消えなさい！私の娘！アリシアにはさわらせない！』

「アリ、シア・・・？」

フェイトが口を半開きにしている。管理局員一掃・・・ふっ、分  
身が旨く薬を上げたらしいな。あげたのはファウードの体液・・・  
あれの効果は絶大だからな。

『聞いているんでしょう？フェイト・・・』

「！」

『貴方はこの子、アリシアの代わりに作り出した人形・・・』

「プレシアが作り出した死者の蘇生秘術・・・当時研究がなされて  
いたプロジェクト『F・A・T・E』のことだな。それにあやかっ  
てフェイトにその名をつけたか」

『その声、神谷ね？』

「・・・・・・・・ああ」

俺は頷き、プレシアさんの目を見た。どうやら言つようだ、フェイトへの、決別の一言を。

「アリシアは……いつでも私に優しくかった……。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽物よ……。せつかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃダメだった……。」

「やめて……。やめてよ!!」

『アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使うだけのお人形』

そこでプレシアさんは言葉を止めた。どうしたんだ……？

『……。やっぱり駄目ね、私に悪役は演じられないわ』

「えっ!?!」

フェイトが驚く。……。おいおい、まさか？

「……あなたは、アリシアではない。あなたはフェイト……。私のもう一人の娘。でも、私にはその資格はないわ……。許してはもらえないでしょうけど、今までごめんなさいフェイト」

プレシアさんが悲しい笑顔でフェイトに笑いかけた。

「フェイト、貴方のことが大好きよ」

「か、母さん……。」

あの人……。悪役演じてないのにこんな別れになったらフェイト

は……いや、それ以上に、やっぱり原作以上の悲しい別れはさせたくねえ！

「神谷」

「……なんだ？」

「最後に貴方に礼を言っわ……」

笑みを浮かべるプレシアさん。

「ありがとう」

次の瞬間、九つのジュエルシールドが強い光を発した。ちっ！始まったか！

「次元震です！中規模以上！！」

「振動防御！ディストーション・シールドを！」

リンディさんが局員に指示を出す。

「ジュエルシールド九個発動！次元震、更に強くなります！」

「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動！！」

「了解！」

指示を受けた局員が動く。

「規模は更に拡大！このままでは『次元断層』が！！」

慌しく全員が動く中、フェイトが俺を見ていた。

「迅……さん」

「なんだ」

「知ってたんですか？全部」

「……ああ、知っていた」

その瞬間、アルフに殴られた。防御をしなかったせいで、まともにその攻撃を受ける。

「あつ……ごめ」

「謝るな、悪いのは俺だ」

言いながら変身魔法を解く。

「え？」

「……恐らくジュエルシードを使い、このままプレミアアさんは行ってしまうだろう。アルハザードへ」

「……」

「お前はどっしりたい、フェイト」

答えは決まっているんだろう？俺は心の中でそう聞いた。

「私は母さんの笑顔が見たかった。でも、あんな笑顔は違う……」

「だったら、どうしたい？」

「私、母さんを助けたい！」

その言葉に、俺は笑った。そりゃそうだよな……

「行くぞ、プレシアさんを救いに」

「……うん！」

フェイトは強く俺に頷いた。

時の庭園に転送された俺達。深部にすぐにも行きたかったのだが、チートの能力でも世界のルールには従わなければいけないのか、それとも転送技術だからか、なのはたちと入り口に立つことになった。

「さあ、行くか」

「あ、あれは……」

そこには大量の傀儡兵がいた。ここでならぶつ放しても平気か。

「いっぱいいるね……」

「下がっててなのちゃん、フェイト、アルフ、エレナ……ついでに男二人」

「ついでってなんだ！」

「まあまあ……」

「お前らがここで魔力を消費する必要もないだろ、俺が行く」

俺は身体の魔力を集中させ、あれを使うことにする。

「ラストテイル マイ・マジック スキル マギステル……」

「み、みなさん下がってください！」

「ふえ！？」

「迅の魔法だとこの辺一帯が荒野になります！」

エレナ、ナイスだ。よし、下がったな……

ウエニアント・スクリヤセヌアーリスムヲルルゲキヤキヤキナ・テンベスタマダストリーナ  
「来たれ雷精風の精雷纏いて吹きすさべ南洋の嵐」

手に魔力が充填、目標は門前の傀儡兵！

ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス  
「雷の暴風！！」

雷の暴風が炸裂し、門前の敵が全て吹き飛んだ。

「す、す……」

「なんだ、あのバカみたいな魔力は！」

「無駄口叩くな、行くぞ」

こうして、俺達は突入した。



第十一話「原作以上のBad endはさせるな」(後書き)

秋風「はい、ということで最終決戦開始！」

迅「心なしか、早すぎる気もするけどな」

秋風「まあ色々省いてるからね」

迅「それはいいが・・・何故に超鈴音の始動キー？」

秋風「だってネギだとベタだし、エヴァは京谷が使ってるじゃん」

迅「まあ、確かに」

秋風「まあ、次回で無印は完結しないよ、多分あと2、3話続く」

迅「そうなのか」

秋風「ちなみに出して欲しいライダーとか大募集です。迅は平成なら何でもできる設定なので」

迅「ただ、オリジナルは無理なんで」

秋風「あとはあれだ、漫画も出して欲しいのをリクエストすれば本編で登場します」

迅「どしどし応募してください」

秋風「では、今日はここまで」

迅「次回、第十二話『時を支配するのは最強の力』それでは！」

## 第十二話「時を支配するのは最強の力」(前書き)

アンケートが続々と来ています。ありがとうございます。

しかしながら、感想が入っていません。明らかに無理だと思っ  
リクエスト、ギャグ、コメディの作品にはお答えしませんし、削  
除いたします。その辺を考えて投稿をお願いいたします。

一応ルールを守っていただきたいので、お願いします。

では本編どうぞ

## 第十二話「時を支配するのは最強の力」

俺は今、なのはたちと時の庭園を走り続ける。

「つたく、この中結構広いな……」

身体が小さい分、アニメと違って長く見える。フェイトの描写もあつたし、実際はかなり長いんだろうな。

「ねえ、じんくん」

「どうしたなのちゃん」

「さっきの魔法って……」

「ん？ああ、あれは詠唱呪文だよ。デバイスの機能ではなく、俺の身体に流れる魔力そのものを媒体に、始動キーと呪文を使って魔法を撃ちだす」

「ふえー……すごい」

まあ確かに、この世界の魔法とはずれているものがある。

「だが、そんなことが可能なのか？」

「この世界で魔力がSSランク以上ある人間なら2発くらいできると思うぞ。」

「君はどうなんだ？」

「俺は……EXにでもしておけ」

俺は適当に答え、走り続ける。おっと、ここが噂のあれですか。

「みんな気をつけて！ここh」ここは虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間だ。落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってはこれないだろうから気をつけな」

「じんくん、物知りなの！」

当たり前だ、原作ちゃんと覚えてるんだからな。んなことを言っていると、傀儡鎧が出てきた。こんな所で時間は喰えないし、大きい魔法もできないな……なら、あれだ」

ライダーシステム、そしてカブトゼクター……この二つは俺の戦力だな。

「変身……！」

『HENSIN』

俺の身体を、マスクドライバーシステムが包む。そしてゼクトホルンに触れた。

「キャストオフ」

『CAST OFF』

そして外部装甲がはじけ飛び、傀儡鎧が何体か飛び、虚数空間に落

ちた。

『CHANGE BEETLE』

まったくワラワラと・・・

「クロックアップ」

『CLOCK UP!』

時が止まることに近い状態になり、俺は傀儡鎧を蹴り飛ばし殴り飛ばし、虚数空間に全てを叩き落した。

『CLOCK OVER』

ガラガラと音を立て、鎧が落ちていった。

「い、今何が!？」

「何をぐずぐずしてる、行くぞ」

こうして俺達は走り続ける。もちろんカブトのままだ。万が一プレシアさんが堕ちた場合のことを想定している。

「っと、分かれ道か・・・」

「どっつする?」

「なのは、ユーノ、エレナは上へ言って駆動炉の封印。俺とフェイトとアルフ、クロノはプレシアさんの所に」

「え、じんくん……」

不安そうに俺をなのはが見る。心配ないのに……

「大丈夫、ある人（天道総司のおばあちゃん）が言っていた。絆とは決して断ち切ることでできない深い繋がり。離れていても、心と心が繋がっている。だから大丈夫だよ、なのちゃん」

「……うん！」

さあ、行くか！俺はフェイトたちと一緒に走り出した。

走り出して数分、そこには巨大な傀儡鎧がいた。おいおい、原作と違ってでかいな……というか、ここに出てこないってどういうことだ。まさか、プレシアが俺が来るのをわかって配置を変えた？

「つく、かまつてる暇はないが、倒さないと先に進めない。行くぞ、フェイト、アルフ、クロノ」

「うん！」

「オツケー！任せな！」

「いいだろう！」

こうして三人がかりで攻撃をする。しかし……

「ぐっ！」

「キヤア！」

「ガッ！」

「ぐああ！」

吹き飛ばされた。んな馬鹿な。いや、原作でもコイツはそこそこの強さがあった。

「まったく、面倒くさい……」

そつだな、あれを試してみるか……

「じん、どうするんだい!？」

「……そつだな、未来の力を借りるとしよう」

「未来？」

フェイトが聞き返す。俺が右手を上げると、そこにはハイパーゼクターが俺の手にあった。

「ハイパーキャストオフ！」

『CHANGE HYPER BETAAL』

強化されたカブトの力、仮面ライダーカブト、ハイパーフォーム。そして、パーフェクトゼクターが俺の手に収まった。



「フェイト、クロノ、一度でいい……奴の足を狙ってバランスを崩させる」

「うん、わかった……バルディッシュ！」

『イエッサー』

「……君に命令されるのも癪だが、いいだろう！S2U！」

バルディッシュを構えるフェイト。S2Uを構えるクロノ。すると、巨大な手がフェイトに襲い掛かる。どうせならクロノの方に行けよ。

「フェイト！」

アルフが叫ぶ。だが俺は確信した、あいつらの登場を。フェイトに手が来る瞬間、ザビーゼクター、ドレイクゼクター、サソードゼクターがそのいく手を妨害する。そしてそのままパーフェクトゼクターに装備された。

「な、なんだい今の!？」

「あれは……!？」

「フェイト、クロノ、今だ！」

「サンダー……スマッシュ！」

「ブレイズキャノン！」

サンダースマッシュとブレイズキャノンが炸裂し、大型の傀儡鎧

はバランスを崩した。

「よし！」

『GUN MOOD』

俺はそれぞれのボタンに触れる。

『KABUTO THEBEE DRAKE SASSWADE P  
OWER』

ボタンを押し終え、構えを取る。これで終わりにしてやる！

『ALL ZECTERS COMBINE』

「これで、終わりだ！」

カブテクターが展開され、俺はトリガーを引いた。

『MAXIMUM HYPER CYCLONE!』

発射された竜巻上の巨大エネルギーが、大型の傀儡鎧を貫いた。そしてそのエネルギー波によって、その傀儡鎧は跡形もなく吹き飛んだ。

「す、すごい……」

「なんなんだ、あの力は……」

「さあ、先を急ぐぞ！」

こうして俺達は駆け出す。行くのは、プレシアさんが待つ、最下層！

プレシア side

「……侵入者、誰か入ってきたわね」

(恐らく管理局の執務官)

私はアリシアのポッドを見つめながら、それを撫でた。

「でも無駄よ。私には時間がない」

この不治の病に侵された身体……神谷に貰った薬の効力も、管理局員を追い払った時に随分と使ってしまった。もう駄目ね……

「フェイト……あなたは、幸せに生きなさい。いつでも見守っているわ」

言いながら目を瞑る。

「プレシア・テストロッサ」

「……!」

そこにいるのは緑色の髪に、管理局員の服装をした女……来たわね。

「終わりですよ。次元震は、私が抑えています。駆動路は直に封印・

「あなた元には執務官が向かっています。……忘れられし都アルハザード……そしてそこに眠る秘術は存在するかどうか曖昧なただの伝説です」

「……夢物語でも構わない。滅び行く身体に与えられた最後の希望……それを邪魔する人間は全て消し去るわ！」

ただのハッター。私にはもう、立っているのも精一杯。もう限界だわ……

「……随分と効率の悪い賭けだわ」

「そんなこと知れている。でもやらなければいけない。こんなはずじゃなかった、この過去をやり直す！」

私が消えることで、あの子が幸せになれるのなら……

ドカーン！

そのとき、突然壁が崩れた。そこにいたのは頭から血を流す少年……なるほど、彼が執務官ね。

「世界は……いつだって、こんなはずじゃないこと……ばっかりだよ！！ずっと昔から……いつだって誰だってそうなんだ！！」

「うるさいぞクロノ、んなこと誰だってわかる。時間がないからその辺は省略だ」

「なっ！」

「貴方は……………」

そこに立つのはカブトムシを思わせる甲冑を着た男。この声、まさか……………」

「神谷？」

「ああ、その通りさ。俺は、届け物を持ってきた」

そして前に出てくるのは、私の愛する二人目の娘だった。

迅side

「母さん！」

「何を、しに来たの？」

「私は……………」

フェイトはゆっくり歩み寄り、真っ直ぐにプレシアさんを見つめる。

「母さんを、助けに来ました」

「……………っ！」

プレシアさんの身体が、若干震えている。

「私は、母さんに笑顔になって欲しかった。けど、私が見たかった母さんの笑顔は・・・あんな悲しそうな笑顔じゃない!」

フェイトの声が、最下層に響いた。原作とは違う、もう一つの可能性。それが今、ここにある。

「・・・母さん、一緒に帰ろう?」

「・・・私は」

フェイトが手を伸ばす。そのときだった。プレシアさんの足場が崩れる。

「くっ!」

俺はアリシアのポットを掴んで投げる。そしてプレシアさんの手を掴んだ。

「あ、あなたっ・・・!」

「ぐっ!くう!」

「は、放しなさい!貴方まで巻き込まれるわ!」

言われても、俺はそのまま手を掴み続ける。そして、フェイト、アルフがプレシアさんの手を取った。

「フェイト、アルフ・・・!貴方たちまで!」

「母さん、もう放さない！絶対に！」

「こんな私でもね、フェイトのために戦ってるんだよ！」

「母さん！一緒に帰ろう！お願い！」

「！！」

緩んでいたプレシアさんの手が、強くなる。何とか引っぱり上げ、安全なところまで連れ出す。俺は離れた場所に行き、アリシアの入ったポッドを持ってリンディさんの所へ行く。

「後何分で崩落する？」

「せいぜい、10分ね」

「そうか・・・」

時間もない、急いで脱出をしないと。そう思っていると、上から大きな落石が起きる。

「危ない！」

クロノが叫ぶ。プレシアさんがフェイトとアルフを庇う。バッドエンドなんてさせるか！

「ハイパークロックアップ！」

『HYPER CLOCK UP!』

瞬間、全ての動きが止まる。俺はハイパーゼクターの顎を動かす。

『MAXIMUM RIDER POWER』

さらに、俺はカブトゼクターのスイッチフルスロットを押して行く。

『ONE TWO THREE!』

「ハイパーキック!」

『RIDER KICK!』

タキオン粒子が集まり、俺は飛翔してその落石を砕いた。

「はあっ!」

ハイパーキックが直撃し、俺はフェイト達の所へ着地した。

『HYPER CLOCK OVER!』

「え?」

「……危なかったな。さあ、脱出だ!」

なのはたちとも合流し、俺達は時の庭園から脱出した。



## 第十二話「時を支配するのは最強の力」(後書き)

秋風「あと少しで無印も終わりだな」

迅「おい、読者のみんなに言うことあるだろ」

秋風「カブトばかりでごめんなさい！」

迅「アンケートにはW、デイケイド、龍騎などが来ているぞ」

秋風「そうだな、そのうち出さないと。」

迅「そうそう、言い忘れてましたが、くがいい、とだけしか書かないのは消しますので、次回から」

秋風「ちゃんと感想なども添えてください」

迅「さて、今回はとうとうプレシアさんの呪いとアリシアの蘇生だ。見逃すなよ？」

秋風「一応、いろんな急展開もあるので、お楽しみに！」

迅「次回、第十三話『人知を超えたことをすると人はパニックになる』ではまた！」

第十三話「人知を超えたことをすると人はパニックになる」(前書き)

更新遅れてすいません。またしばらくしたら更新できなくなるので、  
今日明日で連続投稿頑張ります！

では本編どうぞ

第十三話「人知を超えたことをすると人はパニックになる」

とりあえずアースラに戻ってきた俺達。んで、俺はカプトゼクターを外し、元の姿に戻った。

「え!？」

プレシアさん、どうした？

「あなた、子供だったの？」

「ん、まあ一応フェイトとは同じ年ですよ？」

あれだ、変身魔法使ってたからな。

「やっぱりじんくんはこっちのほうがいいの!」

「そう?」

「ん・・・」

なのはとフェイトに頷かれた。なぜ？

「ゴホッ!ゴホッ!」

「おっと、そうだったそうだった・・・」

まずはプレシアさんの病を治さないとな。

「無理よ……私の病は治らない」

「母さん……」

「この世に無理なんて言葉はないぜ？少なくとも俺にはな」

俺は考える。さて、どうしようか……？サイフォジオ……あれは外傷の修復だ。となると……あれだな。

「お前ら全員並べ。そのミイラになってるクロスケも」

「クロスケって言うな！」

「今からお前らに回復魔法かけるから。プレシアさん治すついでに」

「ついでって……」

全員を並ばせる。そして俺はネギま！のネギが持つ杖を取り出した。この際杖は何でもいいんだけどね。

「さて、やるぞ……リミット技『大いなる福音』」

低い天井が光だし、雨が降る。そして、そこから光が差し込み、俺の足元が光り輝いた。そしてプレシアさんから始まり、なのはたちにも光が降り注ぐ。

「これって……」

「キレー」

「傷が!？」

「どうです、プレシアさん？」

「か、身体が、軽いわ!痛みや苦しみもない!」

そりゃそうだ。状態異常の回復に無敵効果、さらには体力なども全快にする。

「念のため、このエリクサーっていう秘薬も渡しておきます。これを飲めば、もう病気になることはほとんどないでしょう」

後はアリシアだな・・・ポッドの中で眠ったように死んでいるアリシアを蘇らせる方法。試したいのはいくつかあるが・・・

「じんくん、どうしたの？」

「ん?ああ、あそこのポッドで眠っているアリシアを蘇らせる方法を考えてたんだ」

「それは、本当なの!？」

プ、プレシアさん近いつて・・・

「お、落ち着いてくれ!とりあえずリンディさん・・・これは人に見られたくない。どこか広い場所を頼む」

「ええ、わかったわ・・・」

未だにプレシアさんたちの病、傷が癒えたことに驚いているリンデ

イさん。まあ、そりゃそうだ。にしても、これで大丈夫だよな？この杖、使用方法知らんけど……

「（あの、迅？）」

「（何さ、今忙しいんだけど）」

「（いえ、クロノ君が先ほどから睨みっぱなしなんですけど）」

「（いいよ、ほっとけ）」

どうせプレシアさん捕まえる+俺を捕獲しようとしてもしてんだろ？後で潰す。

「さて、ついたわよ。ここが訓練室。でも何故広い部屋に？」

「別に理由はないけど、あんな場所は好ましくない」

言いながら、エレナに指示し、シーツを展開する。そしてポッドからアリシアをだし、結界を張る。

「さてと、そこの男二人は部屋出る」

「断る、君を監視する」

「そんなこと言ってアリシアの裸が見ただけじゃないのか？」

「……スケベですね」

「クロノ君……」

エレナとエイミィが冷やかな目でクロノを見る。

「っ！ 失礼する！」

「ユーノ、お前も出てろ」

「わ、わかってるよ！」

こうして男二人が退場。服がないとあれなので、エレナが着せている。服はエメラルドのドレスのような服。つまり、ASでフェイトの夢の中に出てくるあの格好だ。俺はその間に聖杖バルキリーを取り出していた。

「じんくん、それは？」

「大司祭という称号を持つ人間に与えられる杖、聖杖バルキリーだよ」

ファイアーエムブレム聖戦の系譜に登場する聖杖バルキリー……この杖が今回は一番いいというか、楽だ。聖杖バルキリーはファイアーエムブレムに登場する唯一、仲間を蘇生させる方法を宿した杖だ。条件は「死ぬべきでない時に死んだ」というのが条件だ。

「プレシアさん、確認するが……貴方の実験において、アリシアが死んだことで間違いはないですか？」

「……ええ、そうよ。あれは確かに、事故だった」

「そうですか、大丈夫ですよ。アリシアは蘇ります」

それが、このシリーズで俺がするべきことだ。

「聖杖バルキリーよ……」

俺の声に反応し、杖が光りだす。その光は全体を包み、そして収束してアリシアへと降り注ぐ。

「アリシア!？」

「心配ない、この光は人間に害をもたらさない。少し黙っててください。集中できない」

ぐっ……!チート使ってるのにこんなに集中力があるのかよ。光を当てるのが辛い。だが、  
だんだんとその光は収束し、アリシアの中へと消えていった。

「う、うん……」

「アリシア!？」

「あれ、おかーさん？」

何とか成功だ。つと……

「アリシア!アリシア!」

「お、おかーさん……どうしたの?なんで泣いてるの?」

アリシアが不思議そうに首を傾げる。



「いいえ……」

プレシアさんがアリシアを強く抱きしめる。

「少し、悪い夢を見ていただけよ」

そう言って、涙を流していた。さて、邪魔者は出て行きますか。

「神谷」

「ん？」

「ありがとう……」

「どういたしまして。後、今度から俺のことは迅って呼んでくれ」

「ええ、迅……」

こうして、俺達は部屋を出た。プレシアさん、フェイト、アリシア……三人だけの、家族の時間を作ることにした。監視もない、家族だけの空間。リンディさんも最初は難色を示したが、プレシアさんに戦意などがないことから許可を出した。これでやっとひと段落……

「おい！貴様！」

してなかった。なんだよ、このKY野郎。

「誰がKYだ！」

「どっからどう見てもお前だろ」

「何故プレシア・テストロツサを部屋で自由にさせている!」

「あ?」

何言っただこいつは。

「親子水入らずの対面に、俺達が必要か?」

「そんなこと知るか!彼女は犯罪者だ!すぐにでも逮捕しなければならぬ!」

こいつ、アニメで見たときより陰険だ・・・

「ほう、彼女のどこからどう見れば犯罪者なのか、言ってみろ」

「彼女はジュエルシードを使い、次元震を起こした!」

「それは管理局が対応に遅れたからだ。もしジュエルシードをいち早く管理局が対応していれば事件事態が起ころなかつただろうが」

「それに彼女は管理局員に攻撃を加えたんだぞ!」

「攻撃だあ?時の庭園はプレシアさんの個人の家だ。それに不法侵入したのはお前らだろ。攻撃されて当然。そもそも、逮捕状もなしに彼女を逮捕しようとしたお前らが『住居不法侵入罪』にあたると思っが?」

というか、そもそもの原因はスクライアが原因だけだな。黙ってお

「う。」

「君との話合いでは埒が明かない！押し通らせてもらおう！」

「口で負けたら強行手段か？成長しないガキだな」

「黙れ！この際だ、貴様も拘束する！」

「ほう、一度負けた癖にそんなことを言うか……」

ポコポコにしてやる。

「ゼロ」

『オーライ、スタンバイレディ』

俺の身体にバリアジャケットが纏われた。

「さて、ぶっ飛ばしてやるよ」

「待って」

以外にも、俺を止めたのはリンディさんだった。

「リンディさん、俺を止めるかい？」

「……………いいえ、貴方とは、取引をしましたから」

「母さ、いえ、艦長！？」

そう、取引……それはASより使われるカートリッジシステムの安定性を教えた資料の提供。さらにここ数十年の管理局の『不正』をしめしたデータだった。

「じゃあ提督ご自身の判断をお聞きしましょう」

「プレシア・テストロッサ、そしてフェイト・テストロッサは管理局が身柄を保護とし、しばらくは監察処分。その後は自由にします」

「さっすがリンディ提督、話がわかる」

「艦長！そんな不当なことは……！」

「元々約束だったもの。それに、断つてたら私達死んでたわよ？」

「なっ!?!」

リンディさんの視線の先にはエレナがいた。その手には一つのドロマークが入ったスイッチ。

「そ、それは……！」

「アースラの掌握をして作り出した自爆システムです。よかったです、ね、クロノ君？」

エレナの言葉に、全員が腰を抜かした。そう、俺がプレシアさんと会う直前にコンソールを叩いていたのは、『答えを出す者』によるアースラの掌握だった。

「さて、俺達もそろそろ帰ろうか、なのちゃん」

「ふえ？」

「そろそろ帰らないと、みんな心配するから」

「うん、そうだねじんくん！」

「あ、待ってくださいっ！」

こうして、俺達の無印における戦いは幕を閉じた。

第十三話「人知を超えたことをすると人はパニックになる」(後書き)

秋風「更新遅れましたー!」

迅「うるさいっ!」

秋風「ぶるああああ!」

迅「まったく、旅行だということを読者に言わないとは」

秋風「すいません」

迅「にしても、今回は色々とチートだったな」

秋風「まーな」

迅「で、次回は?」

秋風「一応ASに向けて色々していくぜ」

迅「あ、そ」

秋風「一応ゲームの話もちゃんと盛り込むから」

迅「っつてか、リクエストのほうはライダー多いな」

秋風「お前は主人公しかなくてないからな」

迅「他の人からしたらどうなんだろ」

秋風「あれじゃないの？カイザとか来てるけども」

迅「呪いのベルトで死ねと？」

秋風「そこまで言っていないと思う」

迅「まあいいけど」

秋風「では、次回からASです。多分」

迅「次回、第十三話『物語の進み方は変わる』ドライブ イグニッション！」

第十四話「名前を呼んで」(無印最終回)(前書き)

はい、またしてもタイトル変更です。申し訳ない

では本編どうぞ



## 第十四話「名前を呼んで」（無印最終回）

無印完結から少し経って、色々と原作を改変した。

プレシア・テストロッサの死亡回避

フェイト・テストロッサの無償無罪

アリシア・テストロッサの蘇生

この三点が無印においての改変点だ。で、現在三人は保護監察処分ということで、管理局にいる。監察員はリンディさんだ。色々と問題もあったようだが、上は今までの不正をちらつかせて黙らせることにした。色々あって、今日は家で寝ている。チートな身体でも、疲れるものは疲れるらしい。俺は眠い身体を起こした。

「母さん、どうしてこうかな」

母さんが嬉しそうにうずくまって寝ている。母さんの部屋は隣だろ  
うに。俺は下に降りてコーヒーを注いだ。

「はぁ……」

「どうしたのよ、ため息なんてついて」

「いや、この先のもの……」

「あら、どうしたの？」

「ブフアア！」

「キヤア！？汚いじゃないのよ！神様に向かって何してるの！」

そう、そこにいたのはエレナではない。俺を殺した張本人の創造の神、アテナだ。

「ちょっと、人聞きの悪いこと言わないでよ、新規の作者が混乱するでしょ」

「な、なんであんたがここにいるんだよ！あんた、始末書に追われてるんじゃないのかよ！」

「その件で来たに決まってるでしょうが！」

は？何言ってるんだこいつ。

「あれ、アテナ様」

「あら、久しぶりねエレナ。なんかすっかり馴染んでるじゃない」

「そりゃそうですよ、どっかの誰かさんが人間にしたんだから」

「悪かったわね」

口を3にしているアテナ。さっさと用件言えって。

「ああ、そうだった。あなた、人間の蘇生なんてしたでしょ」

「ああ、したな」

「それ重罪なのよ？天界じゃ」

「いや、エレナがアテナが始末書書くからって……」

俺が言うと、アテナがエレナを睨む。

「エレナ？」

「だって、アテナ様が原作ブレイクOKって言ったじゃないですか」

「確かにそうだけどね、いい？そうになったら誰が報告書書くと思ってるの！？」

「アテナ（様）」

「なんとも思わないわけ！？」

「全然」

俺らが言うと、アテナがなみだ目になる。

「な、なんて神不幸なの貴方達！」

「あー、悪かったよ、だから泣くな泣くな」

「うう……せっかく元の世界に返してあげようと思ったのに」

「は？」

だって、俺死んだんだろ？

「ゼウス様とか最高位の神様たちが特別に元に戻しても良いって言ったの」

ああ、なるほどね……けど

「いいよ、俺はしばらくこの世界にいる」

「あら、いいの？」

「まだ無印しか終わってない。ASやStrikerSなんかの改変もしたい。今回の騒動で、色々とわかるものもあったからな」

「なら良かった！始末書書かないで済むわ！」

あんだ、最初からこれが狙いだっただろ。

「そ、そんなことないわよ！それじゃ！」

そう言っただけ消えた。あの女……

「ま、何はともあれ、私はしばらく貴方に協力することになりそうですね。」

「ああ、そういえばそうだな」

多分忘れてたな、あいつ。

「まあいいや。今日はなのはとフェイトとアリシアの面会だ」

「フェイトさんはしばらく保護観察ですからね」

「ああ、そういうこと」

原作の改変された無印最終回って所かな。

そして海鳴臨海公園。俺はなのはとそこにいる。すると、クロスケが転移して、フェイトたちを連れてきた。またいやらしい目で見ただんたろうな。

「なんだその解説！ふざけてるのか！」

人の心読むんじゃないよ。てか、事実だろうが。

「あれ？なんでプレシアさんまでいるの？」

「ええ、この子にも、色々と迷惑をかけたから」

プレシアさんの服装はあの服ではなく、過去編で出てくる普段着。で、かなり若返ってる。それというのも、目の皺などは日ごろの疲労やストレスが原因だった。なので、回復して肌のハリや、顔色などもかなり良くなっている。

「じゃ、しばらく話してなよ。今日ぐらい空気は読めよ？クロスケ」

「だから誰がクロスケだ！それにそのくらいわかってる！」

「（クロノのやつ、あの後リンディさんにごっつり絞られたからね）」

「  
と、アルフが念話で教えてくれた。ふっふっふっ……いいぞま  
じゃないか。」

「あれ、ちょっと待ってじんくん、じんくんも一緒がいいの」

「え?でも」

「いいから!」

なのはに無理やり引っ張られ、フェイト、アリシアと共にそこに立  
つ。

「……今日来てもらったのは…返事をするため」

「え……?」

「君が言ってくれた言葉……“友達になりたい”って……」

「あ……うん!!うん!!」

「私に出来るなら……私でいいなら……だけど……私、  
どうしていいかわからない。母さんに聞いてもわからないって……  
……だから教えてほしいんだ……どうしたら友達になれるのか  
?」

「私も、お友達いないから……わかんない」

戸惑うフェイトとアリシアの手を、なのはが強く握った。

「そんなことないよ・・・友達になる方法、すごく簡単・・・  
・名前を呼んで。初めはそれだけでいいの…君とかあなたとか、そ  
ういうのじゃなくて・・・ちゃんと相手の目を見て、はっきり相手  
の名前を呼ぶの・・・私がじんくんの名前を呼ぶように。私は、  
高町なのはだよ」

なのはの言葉に、フェイトは小さく口に出した。

「なのは・・・」

「うん！そう！」

「なのは」

「うん！うん！」

なのはが嬉しそうに二人の手を取り、笑顔になる。そして、俺のほ  
うを見た。

「貴方とも、友達になれるかな・・・」

「ああ、もちろん。俺は神谷迅。よろしくな、フェイト、それに・・・  
アリシア」

「うん・・・迅」

「じん！よろしく！」

フェイトとアリシアとも、手を合わせる。

「ありがとう、なのは、迅」

「うん！」

なのはが嬉し涙を流し、フェイトはそれを拭ってやる。みな終始笑顔だった。

プレシア side

嘘みたいね、今こうしてここにいることが……

「うっ、うっ……うっ」

「あら、どうしたのアルフ」

何故か、アルフが泣いていた。どうしたのかしら？

「だって、あの子……なのはがいい子で……フェイト、あんなに笑ってるよ」

「……そうね」

確かに、あの子の満面の笑みを見たのは、いつ振りなのかしら。そしてアリシアも嬉しそうにしている。彼がいなかったら、いったいどれだけの傷をフェイトの心につけていたかと想像して、恐ろしいわ……

「これから、彼はもっと人々を幸せにするでしょうね」



ピンク色の髪の女性が、嬉しそうに微笑んでいた。

「そういえば、あなたは？」

「私はエレナと申します。そうですね……彼を支える一人です」

「そうなの……」

「よろしければ、また今度ゆっくりお話でもしましょう」

「ええ、喜んで……」

私達はその後、楽しそうに話す娘達を見守り続けた。

迅side

「ふう……」

家に帰り、ひと段落。とりあえず疲れた。この後も、何が待ってるかわからないしな。

「何言ってるんですか、ASまで時間もありませんよ」

「そうだな……」

「八神はやてとの接触、ギル・グレアムの計画阻止……やる」とは山積みです」

「なんか、ノリいいな。どうした？」

エレナがなんか積極的？

「ここまで来たら、とことん改変していきましょう」

「……ま、それもそうだな」

こうして、俺達は新たなステージへと動き出す。

第十四話「名前を呼んで」(無印最終回)(後書き)

秋風「はい、無印終了！」

迅「なんとなくか、適当だったな」

秋風「気にするな！」

迅「で、次回は？」

秋風「いよいよ色々動き出すし、続々と出てくるぞ！」

迅「そうなんだ」

秋風「ではこれでw」

迅「次回、第十五話『エンカウントは時期を考える』ドライブイグニッション！」

第十五話「エンカウントは時期を考える」(前書き)

今週は日曜まで更新できません！申し訳ない！

では本編どうぞ！

## 第十五話「エンカウントは時期を考える」

さてさて、無印の最終回から、幾分に時が流れた。季節は5月の終わりでか、明日から6月。平和な日々を過ごしている。で、今日はというと……

「ここか、図書館」

すずかの話ではここのはずだ。ここに後に夜天の王となるはずの少女がいる。

「えーと……」

「うーん、うーん……」

いた。案の定車椅子だから目立つと踏んだけど、こんなにすぐ見つかるとは……。しかもいいタイミング？なのは、本を頑張って取るうとしてる。

「はい」

「ありがとう」

「他に、欲しい本はある？取ってあげるけど」

「あ……気にせんといってください。なんとかしますから」

「いやいや、こういう人を助けるのはしたいと思ってね」

はい、嘘です。ぶつちゃけはやてが目当てです。

「そですか？じゃあ、あそこのあれと、あれを……」

「はいはい……ちょっと待ってな」

俺ははやてとこの後話したりして、仲良くなった。

「へえ、迅君とうち、同い年なんやね」

「そうだね、何だと思ったの？」

「うちより年上に見えた」

「よく言われる」老けてるって」

実際老けてるけどね。

「あ、そんなつもりやないで？」

「気にしないで八神さん、慣れてるから」

「あ、うちのことはやてって呼んでや？うちも迅君って呼ぶし」

「そう？じゃあ、はやて」

「うん」

はやてが嬉しそうに笑った。やっぱり可愛いな、はやても。

「そういえば、迅君はもうお昼は？」

「まだだね、そういえば……」

朝は食べたけど、今日休日だから面倒くさくてなんもしてないや・

「ほんなら、うちでご飯なんてどうや？」

「いや、悪いよ。さすがに」

「ええんよ、本取ってくれたお礼、させてや」

「じゃあ、お願いしようかな」

こうして、俺は八神家に向かうことになった。なんとというか、はやて人を信用するの早い！

「おじやましーす……なんか、すごい大きい家だね」

「せやね、うち一人暮らしやから……」

「え、そうなんだ」

「うん……」

はやてが一瞬くらい顔になった。

「その、すまない」

「あ、ええんよ。気にせんといて」

いいながら、車椅子を台所へと移動させた。

「さて、何作る・・・オムライスなんてどや？」

「いいと思う。って、はやてが作ってくれるの？」

「そやけど・・・」

「なら、俺も手伝おうかな」

いいながら、俺も台所に立った。

「あ、ほんまか？」

「料理は得意だよ。任せなさい」

俺が笑うと、はやても笑顔になった。

「うん！」

こうしてオムライスを作り、一緒に楽しい午後を過ごした。現在は食事を終え、お茶を一緒に飲んでいる。

「そういえば、迅君のご家族は？」

「ん？ああ、母さんと、居候の三人暮らしだよ」

「居候？」



「ああ、なんでもござれの女外人」

「お母さん、お仕事は？」

「母さんは翠屋つて所の喫茶店でウェイトレスやってる。そうだ、今度一緒に行ってみる？あそこのケーキおいしいんだ」

「そうなん、じゃあ今度一緒にいこ！」

なんて会話をしていた。そのときには一切、体のことや、家族のことには触れないでいた。はやくも父親はどうしてるかなんてことも聞かないので、俺は黙っていた。

「んじゃ、お邪魔しました」

「また会えるとええな」

「会えるよ、俺は学校終わったらしばらく図書館通うことになってるし」

「あ、そうなん？じゃあ明日も？」

「もちろん」

俺が言うと、何故かはやくが顔を赤くした。

「じゃあ、明日も会えるん？」

「もちろんだよ、はやく。夕方にはなるけど……それじゃ、ま

たね！」

「うん、また明日！」

こうして、俺は帰宅することにした。

帰宅途中、俺はエレナと合流した。そして海鳴臨海公園を歩く。

「暇そうだな、エレナ」

「暇ではありません、家の掃除してましたから」

「あ、そ……で、出てこないわけ？」

俺は視線を草むらに移した。すると、そこには仮面の男が二人現れる。

「……いつから気がついていた？」

「ん〜と、図書館を出るところから」

詰まる話、最初からだ。

「まあ、図書館から、私は貴方達を見張っていましたがね」

「なに！？」

「で、何の用だ？人のことつけ回して……いや、正確にははやてか？」

「一応全部知ってるけど、面倒だからはぐらかして話を進めよう・・・」

「(ぶっちゃけ言いますが、エンカウト早くないですか？この猫姉妹)」

「(あいつらとしては早いうちに芽は潰したいんじゃないか？魔力EXなんてものを持つてる俺、どこからどう見ても危険だろ？)」

「(確かに・・・で？どうするつもりですか？)」

「(まあ見てろって)」

俺は仮面の男達を見ながら、話を進める。

「それで、俺のところに来たのは何が目的だ？」

「これ以上、八神はやてに関わるのはやめてもらいたい」

「ほづ？」

「貴様の力、これからの我々の計画に支障が出かねない」

「なるほど・・・」

「そうきますか・・・」

「話はわかった」

「ならば、了承してくれるか？」

「するわけねーだろ、この屑共」

俺はさつきを放ち、猫姉妹を睨みつける。猫姉妹も体制をとった。

「お前らがしようとすることは知ったことじゃないが……は  
やてと友達になって、友達に会うことができなくなるのはありえな  
いほどイラつく」

俺は腰にベルトを出現させた。今回は特別というか、エレナもだ。

「え、私もですか？」

「ああ、今回は二人で地獄って奴を見せてやるう……」

「（私、一応天使なんですけど……）」

「（気にすんな！）」

俺とエレナはバックルの上のボタンを押し、開く。そして、緑と茶  
色のバッタ……ホッパーゼクターが飛び跳ねてきた。俺は緑を、  
エレナは茶色のゼクターを掴み取る。

「変身」

ホッパーゼクターを乗せ、セットアップする。

『『 HENSIN 』』

それぞれ装甲が装備される。

『CHANGE KICK HOPPER』

『CHANGE PUNCH HOPPER』

「なっ!？」

「今、俺を笑ったか？」

「こついつのはノリが重要ですね・・・行きましようか、兄貴」

女パンチホッパー・・・思ったより面白い・・・

「なにか問題が？」

「いえ、まったく」

「交渉決裂だな、お前達にはここで消えてもらおう!」

猫姉妹が襲い掛かる。こちらら地獄兄弟、落ちた穴はマジで深かったぜ!

「はあ!」

「はっ!」

激しい攻防が繰り広げられる。ふん、結果を張っているのか・・・  
なら、多少の無茶はやってもよさそうだな・・・

「ラアッ！」

「ぐっ……！！」

猫姉妹の片割れを吹き飛ばし、着地する。そろそろ決めるか……

「エレナ……いや兄弟、決めちまうぞ」

「ええ、兄貴（わかってると思いますけど、ここでブレイクしたらえらいことになりますよ？）」

「（心配するな、逃げれる程度に加減しておくから）」

「（なら良いですけど）」

「お前らあ、こういう敵とエンカウトするときはもっと調べてからにするんだなあ！」

「もっとも、調べようがないですけど」

俺の能力調べてたら多分人生終わるぜ？

「ライダージャンプ」

俺とエレナはホッパーゼクターの脚部『ゼクターレバー』を付け根部分のタイフーンを基点に動かす。それにより、俺の右足のアンカージャッキと、エレナの右足にタキオン粒子が蓄積された。

『『RIDER JUMP』』

電子音とともに大きく跳躍し、ゼクターレバーを元に戻す。

「ライダーキック！」

「ライダーパンチ！」

『RIDER KICK!』

『RIDER PUNCH!』

「ぐああ！」

「うああ！」

それぞれの必殺技を喰らい、猫姉妹が吹き飛ばされる。それによつて、結界が消えた。

「お、覚えている……！」

「誰が覚えるかバーカ！」

猫姉妹は転移。言いながら、俺はホッパーゼクターを外した。

「地獄を見せるってのも悪くない……」

「迅、はまりすぎです。こちらの世界に戻ってきてください」

「おっとっと……悪い悪い……」

さて、帰りますかぁ……

「え、いいんですか？リンディさんたちに知らせなくて」

「いいよ、少なくともそうだな・・・守護騎士が出てくるまではな」

こうして、俺は家に帰ることとなった。



第十五話「エンカウントは時期を考える」（後書き）

秋風「はい、ということでホッパーズでした！」

迅「おい！いいのか！カブトものばかりで！」

秋風「いや、姉妹でくるなら兄弟で対抗しようかなと」

迅「ま、いいけどさ……」

秋風「んでもってお知らせです。明日から日曜日まで、長期で出かけるので更新ができません！」

迅「すみません！」

秋風「その代り24日で連続投稿したから許してください！」

迅「帰ったら真っ先に更新しますので！」

秋風「それでは！」

迅「次回、第十六話『原作ブレイク開始！はやての誕生日パーティー』ドライブイグニション！」

第十六話「原作ブレイク開始！はやての誕生日パーティー」(前書き)

帰ってまいりました。氷点下 - 4 の世界から……とりあえず  
どろぞろ

## 第十六話「原作ブレイク開始！はやての誕生日パーティー」

6月が過ぎた……。ああ、明日辺り闇の書の守護騎士達が目覚めるんだっただな。どうしよう……

「迅君、どうしたん？」

「あ、いや……。なんでもないよ」

俺は図書館ではやてと本を選ぶ……。正直、『答えを出す者』のせいで、ほとんどの本が要約、翻訳できてしまう。

「ちよつと考え事……」

「そうやん、うちは力になれる？」

「うーん……。そうだな、はやての誕生日、いつ？」

「へ？」

なんのこつちやという顔をしているはやて。

「いや、なんとなくさ……。そういえばー……。って」

「あ、そうなん？実はうちの誕生日、明日なんや」

「そっなの？」

少し驚いたように見せるが、知ってます……

「じゃあパーティーしよう!」

「え、へ?」

「実はね、僕の友達を紹介しようと思ってたんだ。機会をもつけようにも、みんな忙しくてさ」

実際、3人は塾などで忙しい。なので、会う機会が学校で会う以外  
のことが少ない。確か、なのはは明日暇だったな。

「翠屋で、誕生日パーティーなんてどう?」

「えつと、ええんか? うちなんかのために、そんな・・・」

「そんなこと言わない! 明日の夕方、迎えに行くよ。その友達と一緒にね」

「あ・・・うん!」

守護騎士と会うフラグ、成立つと・・・

はやて side

夜9時・・・先生から電話が来た。

『はやてちゃん? 明日なんだけど、はやてちゃんの誕生日よね? お祝いしようと思うんだけど・・・』

「あ、その・・・平気です。お友達が、その、お誕生日パーティーをしてくれる言っんで」

『あら、そうなの？でもはやてちゃん、そのお友達・・・男の子かしら？』

「ふえ！？」

な、なんで当たったん！？

『ふふふ、どれだけ貴方を診てると思ってる？貴方が嬉しいときは、声が高くなるから』

「あつう・・・」

『なら、明日に備えて休んでね』

「はい、失礼します」

電話を切り、ベッドに眠る。明日、楽しみや・・・

迅side

「・・・きた」

闇の書の起動・・・感じ取った。なるほど、できることなら手伝いたいけど、ここは原作どおりに事を運ぶとしよう・・・

翌日

俺はなのはとはやての家へ向かう。

「じんくん、じんくんの紹介したいお友達って、どんな子？」

「優しい女の子だよ。色々事情があるみたいで足が動かないらしいけど、その辺は言わないであげてね？」

「うん、わかったの……でも」

「ん？」

「じんくん、知らないところで女の子と友達になっちゃだめなの  
なんのこっちゃ。」

「……善処するよ」

そんなことを言ってるうちに、はやての家到着。

ピンポーン

『はい！』

ガチャリと音が開いた瞬間。

「オラー！」

「キヤー！？」

いきなり赤毛の女の子……ヴィータが出てきて、襲い掛かってきた。

「なのちゃん！」

俺はなのはを庇って、避ける。

「じ、じんくん！あれが紹介したかった子！？」

「い、いや違う……」

「なんだお前ら！」

「いや、俺ははやての友達で……」

「嘘つけー！」

グラーファイゼンをそのままヴィータが振り下ろす。

「ヴィータ！」

そこに、はやての声が響き渡る。

「その子はうちの友達や！傷つけたりなんかしたらあかん！」

はやての言葉に、ヴィータはシュンとなってはやてに謝る。

「じめん……はちて」

「謝る相手、うちとちやじゅん」

「じめん、なさい……」

俺達にそう謝った。

「ああ、いいよ」

「き、気にしてないよ……」

なのはが乾いた笑いをする。

「えーと……こんにちははちて」

「うん、昨日ぶりや」

はちてがニコニコと挨拶してくれる。

「あの、この子は誰？」

「その、な……えーと、うちの外国に住んでいる遠い親戚な  
んよ」

はちて、それはいくらなんでも無理があるぞ。

「そつなんだ……」



なのは、お前はもうちょっと疑うことをしろ。

「で、その子が？」

「うん、俺の幼馴染の……」

「高町なのはです！」

なのはがそう言っておじぎする。

「うちは八神はやて言います。よろしゅうに」

そう言って握手をする二人。

「で、こっちがヴィータや」

「ヴィータです」

警戒心丸出しのヴィータ。まあ、俺となのはの魔力を感じ取ればそ  
うだよな。

「他にもいるんよ、紹介するから中入る？」

「うん、はやて」

こうして、はやての家の中に入った。家の中に入ると、シグナム、  
シヤマル、ザフィーラの2人と1匹がいた。

「いんこちは」

「「こんにちは」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ザフィーラ、なんか喋ってよ。

「紹介するで、シグナムとシャマル。それにザフィーラや」

「わんちゃん？」

「・・・・・・・・」

狼だよね、ザフィーラ

「つと、俺は神谷迅。はやての友達です」

「高町なのはです。じんくんの友達です」

「シグナムだ・・・・・・・・」

「シャマルです」

警戒心丸出したなおい・・・・・・・・

「んじゃ、はやて行こうか？」

そうやって俺が車椅子を触ろうとしたら、シグナムに睨まれた。

「貴様！主は「シグナム！」うっ！」

「シグナム、迅君はうちの大切な友達や、失礼はあかんよ？」

「すみません……」

あーあ、怒られちゃったよ。

「はやて？なににもそんなに怒らなくても……」

「ええんや、みんなこつちとは色々違う環境の生まれやから」

「そうなんだ」

ま、なにはともあれ……翠屋へゴー！

翠屋についてから、すぐに誕生日会決行！

「はやて、誕生日おめでとー！」

「ありがとうー！」

祝福するのは神谷家と高町家。それに途中で合流したアリサとすずかだ。すずかは本来なら12月に会っただけど、もういいや。はやてが楽しいと思ってくれるなら。

「あ、このケーキおいしい」

「ほんと！？それ私が考えたの！」

「ほんまか？なのはちゃんケーキおいしいよ」

てな具合になのはとはやてが仲良くなった。で、ヴォルケンリツタ  
ーは祝い方を知らないらしく、首を傾げたりしていた。みんなで楽  
しみ、終わる頃にはヴィータもなのはとちよくちよく話すようには  
なっていた。

「じゃあはやて、またね！」

「迅君、今日はホント、楽しかったで。ありがとう」

「また遊ぼうね！」

「今度はうちでお茶会をしようね」

「はやて、楽しかったわ」

みんなが仲良くなる。後はフェイトと仲良くなればいいかな。はや  
てが満足げな笑みで言ってくれる。すると……

「その、お前……」

「何かな？」

「ケーキ、ありがとう……」

ヴィータがお礼を言ってくれた。

「どういたしまして。でも次からは迅って呼んでくれると嬉しいな」

「わかった」

「じゃあ、また」

こうして、はやての誕生日は終わりを迎えた。

第十六話「原作ブレイク開始！はやての誕生日パーティー！」（後書き）

秋風「はい、かえって来ました！」

迅「雪山で埋もればよかったのに」

秋風「おい！」

迅「まあいいとして、今回は微塵にもなかったぞ、チートが」

秋風「任せろ、全力で次を投下するから」

迅「次回、十七話『止めるときはやっぱり肉体言語』ドライブイグニション！」

第十七話「止めるときはやっぱり肉体言語」(前書き)

ヤヴアイ……蒼天シリーズが更新できてない。こうなったら徹夜で……あ、駄目だ、眠い

後評価ポイントが1000を越えました。みなさん、ありがとうございます……

## 第十七話「止めるときはやっぱり肉体言語」

幸せな日々は続き、なのはが俺の家に飛んできた。

「じんくん!」

「ど、どうしたのなのちゃん」

「あのね!あのね!フェイトちゃんたちが戻ってくるって!」

なのはの話では、裁判は完璧に勝訴。というか、色々と俺が脅したので勝負にならなかったとか。なので、形だけの裁判とリンディさんは言っていた。

「そっか、よかったね」

「あれ?じんくんフェイトちゃんに会ったの嬉しくないの?」

「そんなわけないさ。嬉しいよ。そうだな・・・歓迎パーティーでも開く?」

「うん!そうするの!アリサちゃんと、すずかちゃんと、はやてちゃんも誘っの!」

なのはは嬉しそうに言う・・・・・・そろそろ、止まっていた歯車が動き出す。行動に移るか。

そこはビルの屋上。ビルの屋上には、シグナム達があった。



「よしいk「ちよいと待った」何!？」

俺はみんなの前に姿を現す。もちろん、ゼロを装備している。

「貴様、何者だ!？」

「誰でも良いさ。そんなことより、君たちの行動を止めに来た」

「何……?」

シグナムが俺を睨む。まあ、当然か。

「君たちの行いは、八神はやての幸せを破壊することに繋がる」

「どういう、意味？」

シヤマルの言葉に、俺は抱えられた闇の書を指差す。

「その本……闇の書というらしいな」

「それが、どうした？」

「ページを蒐集し……主に絶大な力を与える」

「そんなこと知ってらあ!何が言いたいんだテメエ!」

ま、原作以上に悪態をつくのは予想してたな……

「では聞くが……君たちが蒐集をして、主はどうなったか覚

えているか？」

「なんだと……そんな……」

聞いた瞬間、ヴォルケンリッターはなんともいえない表情となる。  
まあ、大半は蒐集前に潰されるか、蒐集したら闇に飲まれるか……  
……そのどちらかだ。

「……貴様は、何を知っている？」

「世界の全て……は、言い過ぎか。少なくとも、君たちよりは  
その本のことを知っている。八神はやてを救う、その方法もな」

「嘘つくんじゃないやねえ！蒐集以外、はやてを救う方法はないんだ！」

ヴィータが吼える吼える。まったく、どうしてこうヴィータはちゃんと  
言うことを最後まで聞いてくれないのかなあ……泣きた  
くなってきた。

「では逆に問おう。君たちの行く蒐集によって、本当に八神はやて  
が救えるのか？」

「な、なんだと！？」

「闇の書の闇は、八神はやての身体を蝕む。蒐集をすれば、その闇  
が増幅して「うるせえ！」おっと……」

言い終わる前にヴィータが俺に殴りかかる。危ないなあ……

「黙れ、黙れ、黙れ、黙れ……」

グラーファイゼン危なっ！

「まったく、話くらい聞け」

「知るか！テメエから蒐集してやらあ！」

結局こうなるのかよ……ヴィータあたりは予想してたけど……

「ゼロ！」

『コードは？』

「コード入力『革命者の剣』だ……」

『了解、00ガンダム、装甲展開』

俺の身体が00ガンダムに変化し、GNソード？でグラーファイゼンを防いだ。ちなみに何故00オーライザーではないのか？それは簡単、形成に時間がかかる。それに動きにくそうだからだ。このビルの上だと。一応ツインドライブは安定してるし、問題ないな。

「落ち着けと言っている！」

「うわあー！」

グラーファイゼンを弾き飛ばし、ヴィータにGNソード？をつきつけた。

「だから、話は最後まで聞け。俺は敵対するために来たわけではな

い

「なら、なぜ……」

「先ほどから言っているだろう……はやてを、助けると」

俺は変身状態を解除し、元の子供の状態に戻った。

「なっ！お前は……」

「久しぶりだな」

「迅！てめえなんで……！」

「いいから、今は黙って聞いてくれ。」

俺は説明する。蒐集の結果、それは逆にはやてを苦しめること。そして、プログラムの改悪と、防衛プログラムの暴走、闇の書の本来の意味を。

「そんな……」

「じゃあ、どうすればいいんだよ！」

「闇の書の管理人格が目覚めたら、それを治せばいい」

「どっせって！」

「俺がやる。それで問題ない」

「お前に、できるのか？」

シグナムの言葉に、俺は短く笑った。

「俺に、不可能はないぜ」

「信じろというのか」

「ああ、俺は一度、死者の蘇生にさえ成功しているからな」

シグナムは俺の言葉に信じられないという顔をしていたが、やがて俺の目を見る。

「わかった、信じよう」

「シグナム！？」

「だが、裏切れば……」

「わかってるさ、煮るなり焼くなり、好きにしる」

こうして説得完了。俺はシグナムたちに家へ帰るように言った。そして残った俺は周囲を見渡す。再び、結界が敷かれている。

「お前らか」

「……貴様、余計なことを」

猫姉妹、お前らしつこいぞ。

「ああ、闇の書が完成しないと闇の書は封印できないんだっけ？」

「そこまで知っていながら、貴様は！」

「吼えるなよ、仮面ども。あの子……はやては普通の女の子だ。そんな子が、一緒に封印されて良いわけがない」

さて、今日はどうしようかな……

「あんな小娘一人の命、どうでもいい！」

「我々はある小娘一人よりも、ロストロギアを封印する義務がある！」

……どうでも、いい？

「お前ら、今なんて言った？」

許せねえ……もう、完璧頭に来た。身体から、大量の魔力を放出させる。

「なっ……」

「今回はかりは、許さねえ……」

俺が変身しようとする、俺の身体にバインドが巻きついた。

「前回と同じ手を喰らうとも思ったのか？」

「悪いが、あの姿にはさせんぞ」

「……………お前は、どこまで俺を甘く見ている？」

「何!？」

ベルトで変身することしかできないとでも思ったのか？

「俺の力は、もっと恐ろしいことを、教えてやる。」

俺はバインドを引きちぎる。そして俺の額には美しく輝くオレンジ色の炎があった。

「なっ!？」

「悪いが本気で行くぞ、手加減はしないからな」

手にグローブが装着される。『Xグローブ』……………リボーンの主  
人公、沢田綱吉の力。

「今回は一人!二人がかりで仕留める!」

攻撃が来た瞬間、俺は炎の推進力で高速移動し、後ろに回りこんだ。

「何っ!？」

「遅い」

俺は片割れを蹴り飛ばした。ん?浅かったか……………

「なんだ、その力……………」

「悪いが、今回はおしゃべりをする気はないぞ」

炎を吹かし、また拳を突く。

「がはっ！」

「さっきまでの威勢はどうした？」

「ぐっ！貴様、なぜあそこまで……あんな、ちっぽけな存在に……」

「……お前らは、勘違いしている」

ちっぽけ……確かに、世間から見ればそうだろうな……だが、だからこそ、なんだ。

「ちっぽけだから、守らなくちゃいけないんだろう！」

さらに炎圧を上げる。そして……

「オペレーション、X」<sup>イクス</sup>

『了解シマシタボス……XBURNER発射シークエンスヲ開始シマス』<sup>イクスバーナー</sup>

右手を後ろにかざし、炎を噴出する。

『ライトバーナー柔ノ炎10万FVデ固定。レフトバーナー柔カラ剛ニ変換シツツ、炎エネルギーヲグローブクリスタル内ニ充填』<sup>ファンマポルテージ</sup>



「な、何をする気だ!?!」

「消える……一片も残さず」

『ターゲットロック、ゲージシンメトリー!! 発射スタンバイ!!』

イクスバーナー

X B U R N E R !

炎が発射される。そしてそれが猫姉妹に向かっていく。

「う、うわああ!」

その瞬間だった。

「迅!」

俺の手が、逸らされた。

「!?!」

そのまま結界に当たり、結界が壊れる。そこにいたのは……

「エレナ、お前いつから……」

「ヴォルケンリッターを説得するあたりからですよ!」

その瞬間、二人組みが逃走した。

「逃げた……か」

俺は炎を消した。その瞬間。

バキッ！

思いつきり殴られた。

「痛っ！お前何を……！」

「それはこつちのセリフです！あんなのぶついたら、彼女たちだつてただじゃすみませんよ!？」

「それは、わかって」「まったくわかってません!」なっ……」

「怒りで我を失ってチートの能力で人など殺めてみなさい!？なのはさんが悲しみます!」

「っ！それは……」

確かに、そうだけど……

「彼女達は、確かに裁かれるべきかもしれませんが、それは今ではない。違いますか?」

「……」

「そして、人を殺しては、罰するなどできない。私が言っている」と、間違ってますか?」

「……いや、間違つてない。すまなかつた」

「わかればいいです。ほら、理沙さんが待っています。帰りましょう」

「・・・エレナ」

「はい？」

「ありがとな」

俺がお礼を言うと、エレナは優しく微笑んだ。

「どういたしまして、」  
「迅」

## 第十七話「止めるときはやっぱり肉体言語」(後書き)

秋風「はい、というわけでやりすぎると怒られるという話でした」

迅「確かに、今日はやりすぎたな」

秋風「で、今回は一応こんなのを用意した」

迅「何？『迅のチート能力詳細？』」

秋風「では一覧です！」

・基本、平成仮面ライダー(サブのライダーも含む)の変身能力および変身ツールの使用

・リリカルなのは登場の魔法全部

・魔法先生ネギま!の能力および魔法などの力の使用可能

・Fateの宝具、能力、技の全部を使用可能

・ロックマン(エグゼ、エックスX、ゼロゼロ、ゼクスZX、ゼクスアドベントZXAの武器、アイテム等の使用可能

・リボーンの力、道具、匣、能力の使用可能

・金色のガッシュの呪文、人間の特殊能力使用可能

・ガンダムファーストからユニコーンまでの全てのMSになれる。

サイズは人間サイズ

・NARUTOの術、血系限界などの使用可能

・BLEACHの斬魄刀と、その能力から虚化<sup>ホロウ</sup>も使用可能

秋風「今のところ、確定事項はこんだけある」

迅「チートというより、お前の趣味が全開になってるとしか思えんぞ」

秋風「気にするな!」

迅「するわ!」

秋風「では、今日はここまで!」

迅「次回、第十八話『隠し事といっても限度がある』ドライブイグニッション!」

第十八話「隠し事といっても限度がある」(前書き)

今回初めて話をまたぎます。まあ、いつかw

ではどうぞ

第十八話「隠し事といつても限度がある」

「迅！」

「フェイト、久しぶり。元気だったか？」

「うん！」

フェイトが嬉しそうに俺に抱きつく。あ、危ない。色々。

「あー！フェイトずるいー！私も私もー！」

「アリシア・・・お前もか・・・って、わあ！？」

俺はアリシアにも抱きつかれて倒れてしまった。

「お前らなあ・・・」

「いゝいゝめん・・・」

「まあ良いけど」

俺はゆっくりと起き上がってフェイトたちを起こした。

「今日は遊びにアースラに来たんじゃないんだぞ？」

「それはそうだよね、いゝめん」

「ほら、行くぞ。リンディさんに呼び出されたんだから」

そう、今俺はアースラにいる。理由は簡単。俺が昨日結界破壊をして、それをアースラが感知したからだ。

「ども、リンディさん、それにプレシアさんも」

「元気そうだなによりだわ、迅」

「久しぶりね、迅君。さ、座って」

言われるがままにすわり、お茶が出される。いつ見ても、これだけは飲めそうにない。

「で、お話つてのは、昨日の結界のことですか？」

「ええ、何をしてたのか気になって」

「ああ、あれなら俺が魔法の練習してたら色々あって破壊しちゃいました」

100%嘘だ。リンディさんも驚いている。

「貴方が、練習？」

練習という単語に引っかかったのかよ。

「ええ、練習です」

「そ、そう・・・事情はわかったわ。わざわざ呼び出してごめんなさいね。あとなのはさんと貴方に聞きたいんだけど、テストロッ



サ家が住めるような物件はないかしら？」

ああ、そういうことね。

「一応、なのはの家の近くにあった気がします。まあ、その辺は探しておきましょう」

こうしてお話終了。そのあと、俺はプレシアさんに呼び止められた。

「迅」

「はい、なんですか？」

「また、危ない橋を渡るのね？」

この人、鋭いったらありやしないな。

「ええ、まあね」

「何か、私が力になれることはあるかしら？」

「いえ、平気ですよ。プレシアさんはフェイトとアリシアの二人と一緒に幸せにすごせばいいんですから」

正直、助けた理由がそれだしな。

「そう……あと、貴方をお願いがあるのよ」

「お願い？」

「ちょっと、部屋で話しましょう」

こうして、俺は部屋に連れて行かれた。

「で、お願いとは？」

「その、実はね………なんだけど」

プレシアさんが俺に耳打ちする。ああ、なるほど……

「アリシアに母として見てもらえない……と」

「そうなのよ………その、あの子が眠っている間に何年も立ってしまっただから」

まあ、いきなり目が覚めて母親が老けてたら驚くわな。

「うーん………若返りねえ………」

「やっぱり、無理かしら？別に、無理にとは言わないんだけどその、アリシアがよそよそしくて………」

プレシアさんが寂しそうな顔をする。まあ、しょうがないな。

「わかりました。ちょっと待ってくださいね？………王の宝具」

ギルガメッシュが使用する『王の財宝』だ。たしか、昔wiki見たときに船のほかにも若返りの霊薬やらなにやらがあったよな………えーと『答えを出す者』発動。どれだろ………お、これだ！

「はい、これ」

「何？これ」

「若返りの薬」

「お、恐ろしく希望に沿ったもの出してくれたわね」

「うーん、実際あるとは思わなかったけどね。飲んでみて」

「え、ええ……」

こうして若返りの霊薬を飲むと、プレシアさんの肉体に変化が生じた。あれだ、事故が起きる前くらいの年齢になったな。肌のハリとか、まったく違うし……

「ほ、本当に若返った……」

「もしかして半信半疑だったの!？」

「い、いえ、そんなことないですよ……やだなーあはは（まじかよ）」

実際、設定は知ってたけど本当にあるとは思わなかったよ。

「まあ、とにかくありがとう」

「どういたしまして」

プレシアさんの笑顔がこの時すごく眩しかったのは秘密だ。

で、しばらくして……

「フェイトちゃん！アリシアちゃん！久しぶり！」

「うん、なのはー！」

「なのはちゃん久しぶり〜！」

三人は大喜び。さて、そろそろあれだな、今後のことについて話そう。

「なあ二人とも……」

「何？」

「もっと強くなって見ない？」

ここはデバイスルーム。

「ねえじんくん、もっと強くなるって？」

「うん、なのちゃんやフェイトは強いけど、これから時が経つに連れて、どんどん新しい技術を取り入れるべきだと思うんだ」

俺はコンソールを叩きながら、画面を表示に出した。

「これは？」

「カートリッジシステムさ」

俺がカートリッジシステムについて説明すると、エイミーが意見を出した。

「でもカートリッジシステムって、まだまだ不安定で、レイジングハートとバルディッシュにはとても……」

「たしかに、この力は不安定だ。」

そう、この時代ならばね。

「で、これがあるんだな」

「これは？」

「俺独自で開発したカートリッジシステムの機構の仕組みさ」

俺はそれをマリーさんに見せる。

「すごい……！こんな方法で！」

「安定は今の技術の10倍ありますよ」

「すごいすごい！」

マリーさん、目がキラキラしてる。

「で、それを組み込んだのが、ゼロの新型『ゼロ・エックス』とい

「うわけだ。」

「ゼロ・エックス？」

「そう、カートリッジを入れたこいつは接近も射撃も行える、奴になつたのさ！」

実際はチートの能力で無理やり改造したんだけどね。

『正直、私はマスターが滅茶苦茶で怖いです』

「ゼロ・エックス、そういうこと言わないでくれ」

まあ、実際はフォームチェンジでゼロと似た格好の接近戦スタイル。そしてエックスと似た遠距離戦スタイル。この二つだ。実はアクセルも考えてたりするけど、面倒だからまだやってない。

「でも、なんで急にやることになつたの？」

「うーん……ま、そのうち話すよ。マリーさん」

「はい？」

「この技術、提供しますので、二人のデバイスに組み込んでもらえませんか？」

「え、私はいいけど……」

「もちろん、二人の意向に合わせてからでいいので」

正直、カートリッジは使うと身体に負荷がかかりすぎる。だから無理はしたくないんだけど。

「（迅、どうしてそんな急ぐんですか？）」

「（正直、闇の書のバクは修復にかなり面倒がかかる。時の庭園の時みたいに、原作と違うことが起こったら困るしな）」

「（なるほど）」

実際、闇の書の防衛プログラムは本編で詳しくできないほどの年月が経っている。多分、今回の介入で変わる部分も見えてくるだろう。

「あ、そうだ……神谷」

「あん？」

「君となのは、それにフェイトに会いたいという人がいるんだが、この後いいか？」

「……うーん、いいんじゃない？」

とつとつ登場か、提督殿。

俺達は本局を訪れた。なのははヴィータの襲撃にあっていないので、ここに来るのは初めてだ。まあ、俺もそうだけだ。

「こつちだ」

「おい、KY。誰が俺たちに会いたいって？」

「だからKYっていうな！……本局に勤務するギル・グレアム提督だ」

「ほーう、どうしてまた？」

「地球で活躍する魔導士たちに会いたいそうだ」

なるほど、そうきましたか……。ま、なんとでもなるだろ。こっつして、俺たちは提督室に入ることになった。



第十八話「隠し事といっても限度がある」(後書き)

秋風「はい、というわけでこれまたぎます、話」

迅「おい！」

秋風「まあ気にすんな！でわ！」

迅「後で漬す。次回、第十九話『正義』ドライブイグニション！」

第十九話「正義」(前書き)

明日は更新できません。ごめんなさい・・・

## 第十九話「正義」

部屋に入ると、提督の服を着たおっさんがいた。なるほど、コイツがギル・グレアム。で、あっちの猫たちがアリアとロッテって所だな。

「初めまして、ギル・グレアムだ」

「た、高町なのはです!」

「フェイト・テストロッサです」

「アリシア・テストロッサです」

「………神谷迅だ」

「うむ、なかなか元気な若者たちだな。まあ、かけたまえ」

言われるがまま俺たちはソファーに座る。なるほど、警戒はすごいな。

「で、何故俺たちを呼び出したんでしょうか?提督殿」

「はっはっは、そう構えなくてもいい。君たちが地球で活躍する魔導士だと知ってね。実を言えば私も地球出身なので、興味を持ってね」

「地球出身なんですか!」

「ああ、私はイギリスの生まれだよ。なのは君と同じように魔法に出会い、今に至る」

「へえ〜・・・」

なのは、感心しすぎだよ。さてと、いきなり矛盾が出やがったな。

「じゃあそろそろ、本題に入ってもいいのか？提督さんよ」

「神谷！君は提督になんて・・・」

「いい、クロノ。なんのことかな？」

「とぼけなくていいさ。俺を呼び出したことについては、別件なんだから？」

「じんくん？何の話？」

正直なのはたちに話すのもどつかと思うが、なのはとはやてはもう友達だ。話してもいいな。

「まず、俺を呼び出した理由さ」

「それは提督が君たちに会いたがってだろう！」

「そこだよクロノ、君たちというところがおかしいのさ」

「何！？」

口は災いの元。リンディさんが約束を守らないというのは考えにく

い。

「リンディ提督との約束で、俺を魔導士と知るのはリンディさん率いるアースラのスタッフだけだ。この前の事件の功績は全てなのは行っている」

「ふえ！？ そうなの？」

「で、フェイトはその当事者だ。呼んでも問題はないが……なぜ、公になっていない俺がここに呼び出されたのか？」

おっと、猫姉妹……警戒してるな。

「答えは簡単だ。あんたが封印しようとして躍起になっているロストロギア『闇の書』に関係を持った人間だからだ」

「!?!」

「おい神谷！ それはどういうことだ！ いや、お前は闇の書を知っているのか!?!」

「ああ、知っているさ。そこの提督殿がその所有者ごと封印しようと考えていることも、数日前、俺を襲って来た仮面の二人組みがその猫だったこともな」

「なんだと!?!」

グレアム、クロノ、猫姉妹が驚きの目で俺を見る。で、なのはたちがわけがわからないという顔をしている。

「あの、闇の書って何？じんくん」

「闇の書……僕の父が命を落とすきっかけとなったロストロギアだ」

クロノが語りだす11年前の事件。なのはたちはそれを聞いて黙ってしまった。だが、俺には関係ない。

「そう、闇の書は呪われてしまった魔導書……それにより数々の人間が命を落とした。でもな……俺は許さないそれを知らない無関係な人間ごとロストロギアを封印するなんてな」

「提督、それは本当なんですか!？」

「……………」

どうだ、グウの音も出まい。

「あの、じんくん？私知ってるの？その魔導書を持つてる人！」

「……よく知ってるはずだ。つい最近、なのちゃんは友達になっただろう？」

「もしかして……………」

「そう、八神はやて……あの子が闇の書を持つ少女だ」

「!?!」

俺の言葉に、なのはが驚く。

「なのは、知ってる子？」

「私の、友達……今度フェイトちゃんたちにも紹介しようと思  
つてた……」

「あんたの考えはこうだ。天涯孤独のはやてなら、封印しても悲し  
む人間は少ない……そんな考えだ」

「そんな……」

なのはが声を上げる。

「そして、空間で凍結でもさせて次元の狭間に閉じ込める。そんな  
ところか？」

「……それしか、ないと思った」

グレアムが重い口をあけた。

「最初は、運命だと思っていた。あの子を不憫と思ったが、君の言  
うとおり、天涯孤独の彼女なら、封印しても……」

「そしてはやての生活の援助をしていたのもあんたか。」

「そうだ……生きている間くらい、せめて幸せに……」

「ふざけんな」

俺は、グレアムの言葉をさえぎった。

「生きている間の幸せ？んなもんあんたが考えてる偽善だろうが。それがあんたの正義だとしても言う気か？」

「今までの闇の書の主だつてアルカンシエルで消滅させてきた！それと何が違う！私達の正義は、人のためにあるんだ！」

「そうだ！一般人だからなんだ！そんな決まりのせいで悲しみが繰り返される！クロノのお父さんのクライド君だつて、そのせいで！」

「お前らの行為は正義ではない。個人的な、復讐だ！」

「……………！！！」

俺は言いながら立ち上がる。

「ギル・グレアム……………あんたがまだ復讐のためにはやてたちに危害を加えると言うのなら……………」

俺は言いながら銃を構えた。それはブラックキャットのトレイン・ハートネットが持つ装飾銃『ハーデイス』

「あんたに、不吉を届けよう」

「神谷！貴様……………動くなクロノ！」なっ！」

「悪いが、俺は認めない。いくら復讐に駆られようと、人の幸せを奪う奴は！」

「……………一つ、聞かせて欲しい」



「なんだ」

「君にとって、八神はやてはなんだ？」

はやては……

「はやては、俺の大切な友達だ。」

「友達のために、君はここまでするの？」

「そっだ……」

しばらくの間、沈黙が流れる。すると、グレアムはため息をついた。

「わかった、私の負け、だ」

それを聞き、俺は銃を降ろし、消滅させた。

「なら今後一切、はやてに手を出さないと約束しろ」

「わかっている」

「それと、その猫共の監視もやめさせる」

「いいだろう」

「話はそれだけだ。俺は帰るぜ」

言いながら俺はドアへと向かう。

「待ってくれ」

「なんだ？まだ何かようか？」

「君の、正義とはなんだ？」

正義か……そんなの俺にはないな。でも……

「（天道総司の）おばあちゃんが言っていた。正義とは俺自身……俺が正義だ」

こうして、俺は部屋を出た。

戻ってアースラ。俺はロビーでくつろいでいる。

「はあ……か、かなり疲れた」

「じんくん、大丈夫？」

「まあ、大丈夫といえば大丈夫かな……」

俺が寝ようとする、倒れる方向になのが座る。

「えへへ、膝枕」

「あのね……」

ま、悪い気もしないし、いいか……

「でも迅、迅は どうしてそこまではやてって子のためにあそこまでしたの？」

「ん〜・・・まあ、友達を見捨てたくないってのは理由だけど、一番の理由は・・・」

「理由は？」

「秘密」

「ええ！？」

思わずフェイトたちがずっこけた。

「教えてよ！迅！」

「ひーみーっ！」

つてか、死んでも言えないよな、実際見たはやての笑顔が少し可愛かったからなんて。多分言ったら殺される。

「さて、これであいつらは塞いだ。後は・・・」

後は、闇の書のバグを直すだけだ。

## 第十九話「正義」（後書き）

秋風「つてなわけで、迅VSグレームでした!」

迅「なんとというか、もう完璧提督が悪役だぞ」

秋風「いいんだよ、悪役で」

迅「んでもって、次回か?」

秋風「ああ、AS編も中盤へと進むぞ!」

迅「なんでも今回はオリジナル要素があるらしいな?」

秋風「まあな、まあそれは敵側になるもの話だけど」

迅「まあいいだろう」

秋風「それでわ!」

迅「次回、第二十話『休みもたまには良いだろう』ドライブイグニション!」

第二十話「休みもたまには良いだろう」（前書き）

はい、お久です。ほのぼのかと思いきや、シグナムと戦います。

では本編どうぞ

## 第二十話「休みもたまには良いだろう」

季節は夏！夏休みだ！そして夏と言えば……

「クーラーの効いた部屋でゲーム……」

「違うでしょうが！」

「あだっ！」

アリサ、痛いって……

「何をするんだよアリサ……」

「あなたが馬鹿を言ってるからでしょ！」

「そっだよ迅君、夏と言えばやっぱり……」

「……海だー！」「……」

というわけで、現在バニングス家のプライベートビーチに来ています。泊まるどころかマジ、高級ホテルです。

「暑い……」

「まあ、夏で海で砂浜ですから」

エレナはエレナでパラソルの下で涼んでいる。

「にしても、すごいな、これ」

神谷家、高町家、月村家、バニングス家、テストロッサ家、八神家、さらにはハラオウン家という8家族が大集合。もう、なんだこれ。

「じんくん！じんくんも遊ぶの！」

「いや、俺はいいよ……暑いのが苦手だし……てか、なのちやんとフェイトは別荘でも遊んでるだろ」

「あそこはいいけどみんながいないから」

「まあ、そうだけどさ……」

俺はみんなほど若くないんだって……

「10歳児がなに言ってるんですかまったく」

実際はもう20歳超えてるんだけどね。まあ、しょうがない……

「迅、遊ぼうよ」

「わかったよ、今行く」

言いながら、俺はみんなの所に向かった。

Ere na s i d e

まったく、年齢が年齢だからって……

「ふふっ」

「理沙さま、どうしました？」

「うっん、なんだか迅が子供っぽく見えておかしくて」

確かに、3歳ごろからもう19歳の貫禄丸出しでしたからねえ・・・

「そうですね・・・まあ、子供らしいから良いですね」

「そうね・・・」

私は理沙様と共に、遊んでいる迅を見守ることにしました。

迅 side

「それ！」

「ったあ！」

「ちょっと待て！なんでボールが沢山俺に集中するんだよ！」

現在3個のボールが俺めがけて飛んでくる。はやてはまだ足が動かないのでシャマルに抱かれて見ているが、そのほかの5人から一斉放火を浴びている。

「だってあんたこうでもしないと勝てないもの」

「勝てないってなんだよ！」



「いいからやられなさい！」

「ぐはっ！」

た、玉が燃えるように見えた……

「ふ、ふふふ……ふふふふ……」

「な、なによ……」

「な、なんかやばそうな雰囲気やな……」

「じんくん、なんか怖い……」

「お〜ま〜え〜ら〜！」

俺は思いっきり水の上をダッシュし、アリサからなのは、フェイト、アリシア、すずかの頭を掴んで投げ、海へ落とした。

「「「「「きざ〜！」「」「」「」

「たく……」

疲れた。

とりあえずみんなで昼食。疲れたので食事も箸が進む。

「あ……疲れた」

「酷いじゃない、迅」

「いや、最初に一齐放火してきたのはどこの誰だ？」

「うっ……」

まあ、いい薬だ、こいつらには。

「とりあえず……そうだな、昼は昼寝でもs」迅「なんだよシグナム」

「後で私と勝負しよう」

あら……シグナムに火が……

「わかったよ、後でな」

こうして、決闘？を受けた俺でした。

何はともあれ結果をしいた俺たち。干渉できないように、結界の中にはなのは、フェイト、アリシア、はやて、ヴォルケンリッター、プレシアさん、リンディさん、クロノ、アルフ、ユーノがいる。

「じゃ、いくぞ」

「ったく、しょうがないなあ……」

うーん……今日は……これだな。コイツにしよう。そう思

って刀を取り出す。

「ほう、刀か……」

「まあな……神谷迅、推して参る」

「ヴォルケンリッター烈火の将シグナム、いざ参る！」

互いに構え、地面を蹴った。

「はっ！」

「ふっ！」

火花が散り、距離を取る。うーむ……やっぱり強い。

「どうした？」

「いや、やっぱり強いと思ってさ」

「ふっ、怖気づいたか？」

「まさか」

俺は短く笑い、そのまま剣を振る。この刀、ただの刀じゃないんだよね……

「本気で行きましょう」

「ああ、来るがいい！」

「散れ……千本桜！」

その瞬間、刀が花弁になって崩れる。

「なっ！くっ！紫電……一閃！」

紫電一閃により、花弁が吹き飛ぶ。シグナムの腕には、無数の斬り後ができていた。とっさの判断。やっぱりすごいな。

「よく理解したな、千本桜の能力を」

「ふっ……もしかと思ったが……厄介な能力だ」

戦闘でのカンか？簡単に見破られたから面白くない。なら、やっぱり本当の本気を出すか。

「つまらないな……どうせなら、本当の本気を見せよう」

千本桜が消える。

「I am the bone of my sword. (身体は剣でできている)……」

俺は語りだす、本当の力を。

シグナムside

迅は得物を捨てた。何故だ？

( ippitai, nani o suru ki da? )

そう思っていると、迅は歌いだした。

「I am the bone of my sword . ( 身体  
は剣でできている ) . . . . .」

迅 side

本当の本気 . . . . いや、やってみたかった力の一つだ。

I am the bone of my sword .  
身体は剣でできている

Steel is my body , and fire is  
my blood .  
血潮は鉄で心は硝子

I have created over a thousand  
blades .  
幾たびの戦場を越えて不敗

Unknown to Death .  
ただの一度も敗走はなく

Not known to Life .  
ただの一度も理解されない

Have withstood pain to create

many weapons .

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う

Yet , those hands will never ho  
ld anything .

故に、生涯に意味はなく

So as I pray , unlimited blade  
works .

その体はきつと剣で出来ていた

「無限の剣製〜アンリミテッドブレイドワークス〜!」

俺の歌が終わると同時に、結界ごと世界が覆われる。空には歯車が回り、剣が突き刺さって幾重にも並んでいる。

「こ、これは……!?!」

「これは俺の固有結界だ」

「固有結界!?!」

「まあ、置いておこう…….そしてご覧の通り、貴女が挑むのは無限の剣! 剣戟の極地! 恐れずしてかかって来い!」

俺は近くにあった剣を手に取り、駆け出す。

「はああ!」

「っく!」

幾重にもある剣を手に取り、攻撃を繰り返す。

「やるな！」

「まだまだ……！はっ！」

俺は別の剣を手に取り、レヴァンティンを弾く。

「何！？」

「さらに……！」

邪魔になった剣を捨て、さらに剣を持って斬りかかる。

「またっ！？」

「これでっ……！」

剣で一太刀浴びせると、シグナムが下がった。

「ぐっ！くう！」

「どうだ……？」

「まだ、まだ！」

シグナムがレヴァンティンで防いでいた。おいおい……アーチヤーの力なのに……

「ならばっ……っ！」

俺が右腕を上げると、辺りの投影されていた剣が宙を舞った。

「はっ！」

そのまま剣がシグナムに向けて落ちていった。

「うっ……っ！」

すれすれで剣が突き刺さり、シグナムの動きを止めた。

「さて、ゲームセット……だな」

俺は複製された剣の一本を突きつけた。

「そのようだ……」

シグナムが負けを認めたと同時に、固有結界は消滅した。正しくは消した。俺にだからこそ、できるものだ。

「さすがシグナムだ。俺にこれを使わせるとはな」

俺は手を差し伸べる。

「こんな隠し玉があったとはな……あの数々の剣……あれは？」

「ああ、それについてはなのはたちにも説明したほうがよさそうだ」



遠くで、なのはたちが黒いオーラでこちらを見ている。

「ふふっ……そのようだな」

シグナムは苦笑しながら俺の差し出した手を取っていた。

シグナム side

ふふ、こんなにも心が躍ったのはいつぶりなんだろうか？ただの殺戮ではない、純粋な戦い。あいつはどれだけの強さを見せたのだろうか？いつか、本気を見てみたい気もするな。にしても……

「どうした？シグナム？」

「い、いや……」

こいつの先ほどの笑顔……一瞬心臓が高鳴ったが……なんだっただろうか？

## 第二十話「休みもたまには良いだろう」（後書き）

秋風「ということでお久しぶりです。で、シグナムにフラグが立ちかけです」

迅「中途半端だな」

秋風「で、「無限の剣製」アンリミテッドブレイドワークス」

迅「お前ただ出したかっただけだろ」

秋風「まあな・・・なんとというか、剣が宙を舞ったのは、YOU TUBEでそんな感じのを見た。まあ、正式なアニメとかじゃなくて、同人ゲーム？みたいなので」

迅「まあ、どうでもいいが・・・」

秋風「疲れた。」

迅「そのまま永眠してしまえ」

秋風「そういうこといな！」

迅「まあいい・・・次回、第二十一話『救済、そして・・・』ドライブイグニション！」

第二十一話「救済、そして……」（前書き）

今回は連続投稿です。明日は蒼天シリーズを連続投稿します

## 第二十一話「救済、そして……」

リゾート地でのひと時も終わり、少し早くはやての所有する闇の書の呪いを解くことにした。もう、完璧に原作ブレイクだ。今ははやての自宅。なのは、フェイト、アリシア、ヴォルケンリッター、プレシア、ユーノ、アルフと共に、そこにいる。

「えっと、じゃあ迅君も魔法が使えるん？」

「そうだね、僕は魔導士であり魔術師でもある。まあ色々あれだけど気にしないで」

「うーん……なんか納得できへん」

「じゃあ、これでどうかな？ほら」

俺の手が光る。魔法の矢の光の球を見せる。

「ほえ〜」

「な？」

「うん、ほんまや……それで、この子どじするん？」

はやては不安そうに闇の書を握る。

「別に壊したり燃やそうなんて思ってないよ、その闇の書のバグを取り除く……それだけだから」

「そつなん？なら安心や」

「でね？はやくお願いがあるんだ」

「お願い？」

これ言っておかないと、多分原作が壊れるどころか、物語が崩壊してしまう。

「闇の書……闇の書つてのは本当の名前じゃない

」

「そつなん？」

「ああ、本当の名前は夜天……夜天の書つていうんだ。でも、こいつの管理人格に、名前がない」

「名前がない？そら不便やね」

「だからさ、はやくつけてあげてよ、この子の名前をさ」

「……うん、わかった」

はやくがうなずく。よし、最後の仕上げって奴だ。

「シグナム」

「……ああ、わかった」

「ぐっ！」

俺のリンカーコアが排出される。

「じ、迅君!？」

「主はやて、ご安心を……迅に危害はありません。ただ、魔力を少し貰っただけです」

「そ、そう……だい、じょうぶ……」

と、言いたいけどなかなか辛いぞこれ……

「どうだ?シグナム……」

「……すごいな、400ページ埋まったぞ」

「ふっ……だろ?」

実を言えば、なのは、フェイトにも協力してもらい、リンカーコアから魔力を貰っている。はやてを助けたいと、なのはとフェイトも申し出たのだ。

「よし、始める……『答えを出す者』……起動」

俺の目が変わり、コンソールが現れる。

「闇の書……データバグ検索……」

よし、いい調子だ……

「エレナ、データバグを発見した時用のデータを抑える結果を」

「了解です、でも大丈夫ですか?」

「……………さあな」

まずは……………起動させよう

「目覚めよ、書に眠る管理人格よ……………」

俺の言葉と共に、闇の書は震えだし、光を放つ。結界内に光があふれる。その場にいたヴォルケンリッター達は知っているらしいが、なのはたちは驚きながらも構えている。しかし、そこに現れたのは初代、闇の書の管制人格……………後にリインフォースと名のつく銀髪に紅い目をした女性だった。

「……………私を起動させたのは、あなたですね」

「ああ、そうだ。でも、マスターは知ってると思うがそっちだ」

「……………私をどうするつもりですか？また、悲しみを繰り返すのですか？」

「俺は、そんなことを望むつもりはない」

「では何故……………何故私を目覚めさせたのです」

「待ってる、今からお前の体内のバグを消してやる」

「な！？そんなことできるはずが……………」

リインフォース驚きまくり。まあ、それもそうだ。バグは、かなりの侵食をしているらしいからな。

「でもその前に、はやく」

「うん、初めまして……ってのもちやうかな？ずっと一緒にあったもんね？」

「我が、主……」

「うん、えーと名前。決めたんや」

「名前……ですか？」

「闇の書なんて名前じゃあまりに不憫や……それに、家族なら名前があるほうがええ……って、これ……迅君に言われたんやけど、うちも同じ気持ちや」

「我が主……」

「今まで辛い思いしとったやろ？辛かったんやな、悲しかったんやな……」

はやくはまるで幼い子をあやすように、リインフォースの手を取った。その顔の笑みは温かく慈愛に満ちていた。

「でも、うちが主になったからにはもう辛い思いなんてさせへん。だから最初に、名前をつけたる。」

「わ、私は……」

「名前は、そうやね。これから先、人に不幸は与えない……人



を支える、幸運の追い風……『祝福の風』……リインフォース」

「リイン……フォース」

「そう、それが新しい名前や」

はやての笑顔に、リインフォースは喜びの笑顔を見せた。

「ありがとうございます、我が主」

「よし、じゃあいいかな？リインフォース」

「本当に、バグは治るのだな？」

「ああ、もちろんだ」

俺は魔法陣を展開する。

「バグ………発見。リインフォースとの直結を解除、融解。」

「くっ！っう……！」

「少し我慢しろ、すぐに修復させる。ゼロ・エックス」

『了解、<sup>デコイ</sup> 函展開、仮修復システム起動、リインフォースへのバグ進行100%カット』

よし、後はこれを……

「バグ、排出！」

俺の言葉と共にリインフォースの体からバグが排出された。

「う、うう……」

「よし、これで大丈夫だ」

「エレナ、そのままバグを……」

「待ってください迅！バグが！」

バグが結界を破った。そんな馬鹿な！

「はやてちゃん！」

真っ直ぐバグがはやてに向かう。くっ！

「うわっ！」

「迅君！」

アメーバ状になったバグがはやての代わりに俺を襲った。くっ！取り込むのかと思うと、バグは俺から離れる。

「……」

バグは形を変えた。あれは……

「リュウガ!?」

漆黒の仮面に漆黒のカードデッキ……何から何まで俺が知っている、仮面ライダーリュウガだった。

「……………」

リュウガは無言のまま、鏡の中へと姿を消した。

「なっ！」

「まさか、俺の知識を手に入れたって言うのか……………」

「迅、大丈夫？」

「……………なのちゃん、フェイト、それにみんな……………はやてを頼むよ」

「え？」

俺は龍の紋章がついたカードデッキを手を取った。計算外イレギュラーだな、この事態は。俺はカードデッキを鏡に向け、Vバツクルを出現させた。そして、俺は右手を斜めに上げ、カードデッキを装填する。

「変身！」

俺は仮面ライダー龍騎へ変身し、ミラーワールドへと飛び込んだ。

エレナ side

異常事態ですね、これは……

「あの、エレナさん」

「はい、なんでしょう？」

「いったい、何が起きてるんですか？」

「……恐らく、闇の書の防衛プログラムが迅の持つ知識の一部をコピーしたのでしょう」

「じゃあ、あれは？」

さて、どう説明しましょうか……

「……仮面ライダーリュウガ」

「リュウガ？」

「漆黒の龍を纏う、仮面ライダー」

「あの、前から気になってたんですけど、仮面ライダーって……」

説明のしようがありませんね、この世界に「仮面ライダー」という存在はないのですから。

「仮面ライダーは、様々な並行世界にいる……平和を守るために存在する戦士たち」

「では、何故奴はその様々な世界のライダーとやらになれる？」

「……それは、彼に直接聞いてください。私からは言えません」

「そう、ですか……」

「私も、彼には及びませんが、ほぼ同系統の力を持っているのは確かです」

私も一つのカードデッキを取り出します。迅はこういう時のために、私に力を残してくれているのだから。

「では、ここを頼みます。あとこのことは、くれぐれも内密に」

私もカードデッキを照らし、Vバックルを出現させます。それは、蝙蝠の紋章を持ったカードデッキ。右手を握りこぶしにして横にさせ、構えを取ります。

「変身！」

カードデッキが装填され、私は仮面ライダー騎士<sup>ナイト</sup>へと変身しました。では、行くとしましょう……私も、この世界で戦う戦士なのだから……

迅 side

俺はミラーワールドに飛び込み、現在ははやての家の外にいる。

「……どこ行った？」

『SWORD VENT』

「なに！」

突然リュウガが俺に襲い掛かる。

「リュウガ……いや、闇の書の防衛プログラム……！」

まさか、力をコピーされるとはな……闇のライダーの力か。

「ならっ……！」

『SWORD VENT』

俺もドラグセイバーを構え、リュウガに立ち向かう。

「はっ！」

「……！」

力は五分……どうするっ……どうすればいい？

『ADVENT』

ドラブラッカーか……！なら！

『ADVENT』

こっちもドラグレッターを召喚し、戦わせる。

「うおおおー！」

「……………」

「こいつ、やっぱり強い。」

「迅！」

「……………仮面ライダー騎士……………エレナか！」

「大丈夫ですか？」

「……………正直不味いな」

ドラグセイバーはお互い弾き飛ばされた。なら……………

「同時攻撃だ」

「わかりました」

『FINAL VENT』

「うおおおおー！！はあ！」

「はあああああ！！！！やああ！！」

ドラゴンライダーキック、そして飛翔斬が発動してリュウガに向かう。

「「はあっ！」」

「・・・・・・・・！」

「やったか！？・・・・・・・・」

「迅！あれを！」

「何！？」

そこにはリュウガがいた。でも確かにリュウガは今・・・・・・・・！

「・・・・・・・・」

リュウガはそのまま鏡の先へと消えた。まさか、分裂していたのか・・・・・・・・闇の書のプログラムそのものが・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

「あ！待てっ！」

逃がした・・・・・・・・！

「くそっ・・・・・・・・！」

「とりあえず戻りましょう、そろそろ、限界のようです」

もうすぐ、9分55秒を過ぎるか・・・・・・・・仕方ない。

「わかった、戻ろう」



「それとですね」

「なんだ？」

「そろそろ、なのはちゃんたちに力については説明してあげないと」  
「エレナは仮面ライダーについて少し教えてしまったのだという。まあ、状況が状況だったからな……」

「わかった、その辺は俺に任せろ」

こうして、俺たちはミラーワールドを抜け出した。

第二十一話「救済、そして……」（後書き）

秋風「今回は連続投稿です」

迅「次回、第二十二話『語られる秘密と、秘密基地』ドライブブイグニション！」

第二十二話「語られる秘密と、秘密基地」(前書き)

連続投稿その2！

## 第二十二話「語られる秘密と、秘密基地」

「よっと」

ミラーワールドから脱出し、変身を解いた。

「じんくん!」

「ただいま」

「大丈夫だった!？」

「ん? ああ……防衛プログラムには、逃げられたけどな」

対策も練らないと……こっからは、原作の知識が通用しなくなるからな。

「その、すまない……私が、迷惑を」

「リインフォースのせいじゃないさ。とりあえず、対策も練らないといけないしなあ……」

「そうか……その、すまない」

ん? なんでリインフォース顔赤くなってんだ? なんて事を考えていると、なのはが意を決したような顔で俺を見た。

「じんくん……」

「何？なのちゃん」

「教えて？じんくんの、力のこと……」

あつちやー……やっぱり避けて通れなかったか。

「わかったよ……少しだけな」

こうして、俺は少しだけ話すことになる。俺の力について。

「まず、仮面ライダーって、なんなの？」

「……うーむ、まあ簡単に言えば人を守るために存在する戦士たちだ。この世界とは違う地球……そこにいる悪を討つ戦士。それが仮面ライダーだ」

……ざつと説明するとこんなものか？

「では、何故お前はその仮面ライダーになれるんだ？」

「俺の稀少技能レアスキルさ」

「稀少技能？」

「稀少技能『神の本棚』」

「神の、本棚？」

嘘だが、神様に力を与えられたなら、これが正解だろうな。

「神の本棚……あらゆる並行世界に存在する力を検索し、読み取り、己の力に変える。それが神の本棚さ」

「は、反則くせえ」

「まあな」

じっさいチートだしな。

「じゃ、この話おしまい！」

「くれぐれもこのことは管理局には内密にしてください」

「どうして？」

「簡単な話よ、フェイト。私がジュエルシードを利用したように、迅を利用する人間が出てくるかもしれないってことよ」

「母さん……」

「大丈夫だ、私達はお前を信じている。たとえば、お前が何者であるうとな」

「そっか、ありがとみんな」

こうして、祝福の風はみんなに迎えられた。俺も、いつかすべてを話そう……

side out

そこは誰もいない世界で、場所は砂漠。リュウガは形を崩し、スライムのような形となった。防衛プログラムは完璧に浄化されなかったためか、意思が暴走していた。『闇の書とその主を守るため』でなく、『己自身を守るといふものに変わっていた』

「……………チカラヲ……………モットチカラヲ……………！」

闇の書の防衛プログラムは、段々と闇を増幅させていた。それは不幸にも、神の力を授かった少年の力を持って……………

迅side

夏も終わり、秋を迎えた。過ぎ去る日々……………俺は今日、管理局の本局に訪れていた。

「よう、グレアム提督」

「やあ、君か……………」

「お前！なんのようだ！」

「しだいによつては許しません！」

警戒する猫姉妹。まあ落ち着けつて。

「落ち着けるか！」

「二人とも待ちなさい。今日は、なんのようだね？私は今までの責

任を負って、局から身を引こうと思ってるんだ」

「なるほどね・・・まあ、別にあんたがそうならいいんだけどよ。今日は頼みがあって来たんだ」

そう、アースラだけじゃ対応できない。必要な戦力は、すべて揃えないとな。

「頼み・・・？」

「頼みの前に先に報告してやるよ。闇の書を歪めていたプログラムは改善した」

「・・・！ それは本当か！」

「嘘言っでどうするんだよ。後驚きすぎだ猫姉妹」

まったく、落ち着けての。

「で、あんたに相談だ。しばらくアリアとロッテを借りたい」

「え！？」

「私達を！？」

「どうしてかね？」

「色々厄介なことが起きてな」

俺は防衛プログラムが逃げ出したことを説明した。



「ふむ……なるほどな」

「あなたに人を動かせるだけの戦力や権力があるのは知っている。あなたの部下に防衛プログラムの搜索を頼みたい」

「では、なぜアリアとロッテが必要なのかね？」

「二人は十分な力を持っている。今は少しでも力が欲しい」

「父様がお前なんk「よかろう、君の要請を受け入れよう」父様！  
？」

「ほう、やけに素直じゃねーか」

「せめてもの償いだ。あの子の……はやてへの」

ふん、そうこなくちな……

「んじゃ、この二人は借りてくぜ」

「あ、放せ！尻尾を持つなあ！」

「お、お父様助けて〜！」

こうして、俺は猫二匹を連れて、本局を後にすることにした。

八神家

「ただいま」

「あ、帰ってきた……って、リーゼリアさんとリーゼロッテさん」

「放せ！放せつたら！」

「尻尾を掴まないでください！」

「迅？この二人はどうしたの？」

「ああ、借りてきました」

とりあえず、提督に搜索を頼んだことを頼む。

「な、なるほど……」

「管理局相手になんつーことを……」

「でだな……ヴォルケンリッターの4人。それにこの猫二匹、あと俺、なのちゃん、フェイト、エレナ、アルフ、ユーノ、プレシアさんではやてとリインフォースを守る。」

「え？うちらを、守る？」

「そうだ。恐らく防衛プログラムははやてとリインフォースを狙ってくる。夜天の書に再び寄生するかも知れないからな」

「そつなん？」

「はい、我が主……恐らく私達を狙ってくるでしょう」

そのための防衛策ってわけだしな……うーむどうするか。

「さすがにはやてちゃんの家にいるわけにもいかないよね」

「そうだね、はやてを狙ってくるなら、ここにいるのは危ないね」

「……よし、あれでいい」

「あれ？」

「海鳴の近くにアリサの家が所有する別荘があったはずだ」

「え？そうなの？」

「ああ、前自慢してたし」

そこに『あれ』を設置すればいいんだからな。

「よし、んじゃさっそくアリサに連絡するか」

こうしてアリサに連絡する俺だった。

数時間後

「悪いなアリサ」

「しょうがないわよ、はやてが危ないなら」

「そうだよ、友達だもんね」

ま、しょうがないよな……

「ありがとな、多分数日で終わるから」

「私達はこれから塾だから、明日にでも様子見に行くわよ？」

「わかってるって」

言いながら俺がアリサの頭を撫でる。二人には、はやてがとある事情で狙われていて、その連中を捕まえるために警察などが動いているという説明をしておくことにした。なのはいわく、二人に魔法をばらすのは、もう少し後にして欲しいらしい。

「ちょ、ちょっと!」

「あ、悪い悪い」

「いいなあアリサちゃん、迅君、私も!」

「え? はいはい……」

「」

満足した二人は帰っていった。よし、これで……

「じんくん!」

「な、なに？なのちゃん」

「私も！」

「私もして、迅！」

「わたしもー！」

「うちもして欲しいわぁ」

なんかみんなに迫られた！た、助けてエレナ！

「駄目です、あきらめなさい」

「この裏切りものお！」

この後もみくちやされた。結局全員の手を撫でるはめになった。

「さ、て、と……」

「特殊結界は張らないといけないけど、ここで大丈夫？」

「プレシアさん、まさか俺がこれしかしないとでも？」

「え？」

パチンツ！

俺が指を鳴らすと、目の前には別荘が作り出された。ここにいれば、

万事解決ですよ。もう、それは完璧なまでにね。

「そうか、この手あつたわね」

「時間はちよつと調節します。今から5時間はそのままに戻しますが、それ以降は連絡が来たときにまずいですから」

「なるほどね」

「さて、みんなー！入ってきて！」

『うわぁー！』

「迅、これはなんだ？」

「ミニチュアみたいですけど……」

「ああ、これは……」

「見たほうが早いよ？」

「レッツゴー！」

随分と着替えを持って来たな、なのは、フェイト、アリシア……

「だってここだと大変だもん」

「そうだよ、前詳しく教えてくれなくて大変だったし」

「あっちはおよげるしー！」

「はいはい……」

すっかり置いてきぼりのヴォルケンリッターと猫姉妹

「ま、フェイトの言うとおり、見たほうが早い」

俺は指を鳴らす。すると、魔法陣が引かれて転送した。

「……………ええええええ!?」「……………」

「ようこそ、『俺の』別荘へ」

とりあえず荷物や食料をすべて運んだ。

「ふええ?ここ、どこなん?」

「さっきのミニチュアの中だよ」

「ええ!?ここ、あれの中なんですか!?!」

「すっげー……」

「なんと規格外な……」

「しかし、どういふところなのだ?ここは……」

混乱しまくりだな、みんな。

「まあ、簡単に説明すると、俺が作り出した空間。圧縮空間とでも

考えて欲しい」

「ほへえ〜・・・魔法ってなんでもありなんやなあ・・・」

「いや、じんくんが特殊なだけなの・・・」

「あはははは！気にするな！さて、始めようかはやて」

「ふえ？」

「君を縛っていた闇の書の淀みは消えたんだ。今からでも足のリハビリができるよ」

「ほ、ホンマに！？」

それにここ、魔力も充満してるから治りも多分早いしな・・・

「エレナ」

「はいはい、ではやてさん。設備のあるところをご案内しましよ  
う」

「頑張つてはやてちゃん！」

「なにかあつたら手伝つからね」

「おてつだいするよー！」

「おおきに、がんばるでー」



こうしてエレナとはやてが俺特性のリハビリ施設へ。リインフォー  
スとシャマルがお付でついていった。

「大変だね、はやてちゃん」

「足が動くといいね、はやて」

「お前ら、何を行ってるんだ？」

「「え？」」

「今からお前ら二人はカートリッジシステムになれるための特訓だ  
ぞ？」

「ええ！？」

「で、カートリッジシステムを良く知る二人がいるんだ。しっかり  
勉強しろ」

いいながらヴィータとシグナムを指差す。

「あたしも戦うのか！？」

「私もか？」

「ああ、二人はいい刺激になる。頼んだぜ？」

「おっしやあ！なのは、いくぞお！」

「ふえええええ！？」

「テストロツサ、行くぞ」

「え？ちよ、シグナム！？」

二人とも慌てまくり。まあ、頑張れー……

「アリシア、あなたは向こうで魔法の勉強よ？」

「えー！？」

どうやら三人とも遊ぶ気だったらしい。

「安心しろ、二日にいっぺんは休日やるから」

「「「安心できないよー！！」「」「」

三人の声が別荘内に響いていた。

**第二十二話「語られる秘密と、秘密基地」(後書き)**

秋風「連続投稿って辛い・・・」

迅「次回、第二十三話『闇の予兆』ドライブイグニション！」

## 第二十三話「闇の予兆」(前書き)

連続投稿終了・・・明日は蒼天シリーズを連続します

## 第二十三話「闇の予兆」

ここはエヴァが保有する別荘を模して作った俺の別荘だ。で、現在はと言つと……

「おらあっ!」

「レイジングハート、お願い!」

『イエス、マイマスター。ロードカートリッジ』

「アクセル……シューツ!」

おお、大分うまくなったな。

「バルディッシュ!」

『イエッサー。ロードカートリッジ』

「プラズマランサー……ファイアー!」

おお、こっちもつまり具合だな。

「どうですか?二人は」

「よう猫姉妹。ひなたぼっこはいいのか?」

「いい加減名前で呼んでって」

「そつですよ」

「あはは、悪い悪い」

いいながら俺はのど元を撫でたり、頭を撫でてやる。

「にゃう・・・」

「うにゃく・・・」

やっぱり猫だな、こいつら・・・

「迅君！」

「はやて・・・おつと」

はやてが松葉杖で歩き、俺に抱きついた。

「大分歩けるようになったね」

「うん、順調や！」

「それはよかった」

はやての足も順調だ。だいぶ歩けるようになったみたいだし、何より頑張ってるしな。

「ふえええ〜終わったあ〜」

「もう、駄目・・・動かない」

「なっさけねえなあ」

「もう少し精進しろ、テストロッサ。無論、高町もだが」

多分原作終盤くらいの力はもてるようになったかな？

「ええなあ、二人とも。魔法」

「はやても使えるよ、練習すれば」

「そうです我が主」

お、リインフォース……って、服、なんか違うね？

「これは……その、エレナがこれを着ると……」

それは純白のツーピースで、可愛い服だ。

「やはり、私にこのようなのは……」

「いやいや、似合ってるって。自身持てよ。美人なんだし」

「び、美人だなど……」

あれ？またリインフォース紅くなった？

「じんくん？わざとなの？」

「なにが？」

『マスターはこの手には疎いですから』

「ゼロ、何がだよ」

『そんなの自分の胸に聞いてください』

「??？」

まあいいや・・・簡単に説明すると、あれからもう数ヶ月が経っている。もちろん別荘の時間ではない。一応時間はたまに調節しているが、8月から11月にまでなっている。アリサやすずかがたまに遊びに来るので、そのために出たり入ったりしている。学校へは行っている。俺が転送して帰りもすぐにここへ転送している。

「にしても、まだ捜査で見つかっていないのか」

「父様の話では、やられた後は発見されているそうですけど・・・」

そう、地球以外の管理世界でやたらと防衛プログラムが暴れている。だが、足取りがつかめないままなのだ。幸い、今のところは死人は出ていない。極限まで魔力を取られているだけらしい。

「でも、ここに来て随分たってもうたなあ」

「そうだな・・・」

うーむ、さすがにみんなも飽きが来たか？



「そつだな、一回みんな呼んで、出ようか。」

「え？」

「ふえ？どうして？」

「まあいいからいいから」

こうして一回外に出た俺たち。一同は不思議そつだ。

「よし、みんな目を閉じて。絶対だよ？」

「え、うん……」

よし閉じたな。

### 再構築

別荘を再構築して、ネギたちが使用する単行本19巻から登場の場所にした。

パチンツ！

もう一度別荘へ転送された。

「よし、目を開けて」

「ん……」

『……………』

「どづ？みんな」

『なにこれええええええええええ！？』

驚くみんなだった。

「すごいー！」

「お城……」

レーベンスシュルト城……まあ、エヴァの城を真似て作ったからなあ……

「熱帯林もあるし、そっちの魔法陣は-40の氷期地帯。そっちは50の砂漠……あとそれは森林地帯で、それは古代インカを模した場所だよ」

「ふえ〜」

「で、こっから向こうまで500mあるから、その魔法陣で向こうに行こう」

こうして轉移し、城まで来る。

「ふええ……改めてみるとすごい……」

「キレー」

「だろ？そろそろ小さいほうはあれだし、気分を変えてな」

さて、俺も修行するかぁ……

「え？じんくんが『修行』？」

「へ？なにかおかしい？」

「だって、迅君いらなと思うもん……」

「反則が修行してどうするんだよ……」

おいおい、俺を怪物みたいに扱うなよ……俺はか弱い10歳だよ？

『普通の10歳は仮面ライダーにならない』

「そんな声揃えて言うなよ！」

ちよつと傷つく……

「じゃああれだ、はやて……ちよつと魔法の練習してみる？」

「あ、ほんまか？」

「リインフォースとのユニゾンもやってみよう」

「そうですね、我が主。お供します」

「うんー！」

まあ、こんな感じに時は過ぎていく。

Side out

ここは海鳴の郊外

「トウトウ……コノヒガキタ……サア、ウタゲノハジマリダ」

そこにいるのは黒いなかだった。足元の草、土が死んでいく。

「ワタシハミズカラヲマモル……ダカラコソ、アノコムスメモ、ワタシノ一部モ回収せねば……すべては、私のためにな……いや、ならば……そうだ、そうしよう」

危機は、刻一刻と迫っていた。

迅side

「んじゃ、今日はここまでにしような」

「ありがとうございました！」

「お疲れ様です、我が主。それに迅も」

「いやいや、覚えが早い生徒で助かるよ。これなら数日もすればなのはたちに並べるし」

「ほんまか？ならもつとがんばらな・・・ってあ、そういえばそろそろ石田先生の所いかな」

「そういえばそうだな」

そろそろ警戒も解いてもいいかもしれないな。

「そういえば私、お母さんに買い物頼まれてた！」

「そういえば迅、そろそろ一度帰らないと理恵様が泣いちゃいますよ？」

うっ！それはそれで面倒だな・・・

「しょうがない、帰るか一回」

そういつて俺たちは外へ出た。

「ふう、なんとというか・・・久しぶりだな」

「そうだねー・・・」

さて、街に行つて母さんの所にも・・・！！？

「これはー！」

「結界！？」

この色・・・まさか！？

「探したぞ……」

「……！お前は！」

あの姿……かわってはいるが、魔力でわかる！あいつは、まさか！

「私の中にあつた、防衛プログラム……」

「そうだ……さっそくだが、取り込まれてしまえ」

「はやてを下がらせろ！」

「は、はい！」

「防衛プログラム！お前の相手は俺だ！」

駆け出し、変身ベルト取り出した。ファイズギアを腰に装着し、ファイズフォンを手に取る。

「ほう、なら私もそうしよう」

「何！？」

『000 STANDBY』

『555 STANDBY』

「変身……」

「変身！」

『『COMPLETE』』

俺は仮面ライダーファイズへ変身をする。そしてあいつは……

「仮面ライダー……オーガ……」

「ふっ……今やその神の力……お前の物だけではない」

「迅！加勢します！」

『913 STANDBY』

「変身！」

『COMPLETE』

エレナもカイザに変身する。カイザの呪いはエレナだから受け付けないらしい。

「いくぞ！」

「えええ！」

駆け出し、拳を入れる。

「ぬん！」

くっ……くっ……！

「はっ!」

「こぞかしい!」

「うわっ!」

「きゃあ!?!」

っ、強い……

「さすがは神の力か? そうだろう?」

……神の力か。本家が負けられない。

「諦めてたまるか!」

「その通りです」

「じんくん!」

「なのちゃん、はやてを連れて逃げるんだ!」

「う、うん!」

「エレナ!」

「ええ!」

俺はファイズポインターを足に装着すると、ファイズフォンのEN



TERを押した。

『EXCEED CHARGE』

エレナも同じようにする。

『EXCEED CHARGE』

「はあ！」

「やあ！」

「これを待っていたぞ……！」

「何!？」

クリムゾンスマッシュとゴルドスマッシュが当たる瞬間だった。オ  
ーガの姿が消え、奴が口を開いた。

「なっ!？」

「どけ!エレナ！」

「もらった！」

「うわああ!！」

俺は防衛プログラムに吸い込まれ、そこで意識が途絶えた。

## 第二十三話「闇の予兆」（後書き）

秋風「連続投稿終了……」

直人「なんとなくか、滅茶苦茶だったな」

秋風「で、なんでお前がいるんだ直人」

直人「吸い込まれた迅の代わりだ」

秋風「そうか」

直人「で、蒼天シリーズはどうするんだ？」

秋風「明日連続投稿する」

直人「大丈夫かよ……」

秋風「俺に不可能はない！」

直人「嘘付け」

秋風「うっ！」

直人「まあ、いい……蒼天シリーズもよろしくな」

秋風「じゃ、次回予告よろしく」

直人「次回、第二十四話『闇に染まる街』ドライブイグニション！」

井上直人

私、秋風が書くここでの処女作である二次小説の主人公。他のサイトからはフラグメーカーと呼ばれている。腕は確かであるが、優しさを持ち合わせた少年。現在なのは、フェイト、はやてと結婚して、新たな部隊『光の剣』の部隊長を務めている。

第二十四話「闇に染まる街」(前書き)

今回も連続投稿です

## 第二十四話「闇に染まる街」

なのはside

「じん……くん？」

じんくんが、吸い込まれちゃった……？

「これで、私は無敵だな……くつくく……あっはっは！」

「……っく、離脱します！捕まって！」

「え！？でもじんくんが……！」

「いいから！」

私はエレナさんに捕まれ、魔法陣に放り込まれました。

「転移！」

「じんくん！じんくん！」

私は目の前が真っ暗になりました。

エレナside

とりあえず私はなのはさんが良く練習をしていた展望台まで転移して、逃げ切りました。

「ここまでくれば……」

「いったい、何が起きているの？」

「あれって……！」

はやてさんが指差す方向には、街全体……いえ、この周囲まで覆うものがありました。

「これは結界！？でも、こんな大質量なものを……！」

「プレシアさん、お忘れですか？防衛プログラムは今、迅を取り込んだのですよ？」

「あの子の魔力ってこと？……ほんと、規格外ね」

さて、困りましたね……彼の力が敵となるとは……それに、奇跡でも起きなければ彼は出て来れない。アテナ様にも連絡は取れないし……

「みんな！あれ！」

フェイトさんが今度は別方向を指します。そこにいるのは……

「まさかあれは……」

そこにいるのは異形の怪物たち。グロンギ、アンノウン、ミラーモンスター、オルフェノク、アンデット、魔化魍、ワーム、イマジン、ファンガイア……怪物のオンパレードですね。

『みんな、無事!?!』

「リンディさん!」

『いったい、何がどうなってるの!?!この結果は!?!』

いいタイミングです、リンディさん

「リンディさん、そちらから私たちを転送できますか?」

『そ、それが・・・通信はできても結界に阻まれて転送ができないのよ』

「こののあらましを言つと長くなりますが、このままでは海鳴が消えます。確実に」

「ええ!?!」

何か、策はないのでしょうか・・・

迅side

・・・一寸先も闇か。ここ、どこだ?

「真っ暗だな・・・」

闇の中・・・そうか、俺は防衛プログラムに取り込まれて・・・

「脱出は不可能、他の能力もカットされ、吸収されつつある」  
もう、駄目か……

「眠ろう、俺は……もう力にはなれない」  
俺は眠りについた。

Eレナ s i d e

「何か、何か策は……」

「どうしたの？」

「いや、どうしたもこうしたも……」

「やっほー」

……

「何で降りてきたんですかあ！」

スパアン！

「あいつたあ！何するのよ！」

私は思わずいきなり現れた馬鹿様アテナを殴りました。

「なんで貴方はそうほいほい現れるんですか！」



「何よ！せっかく力になろうと思って出てきたんでしょ！」

「ニートで引きこもりで腐女子の貴方がいますか！」

「あ！ひっどおい！それ上司に言う言葉あ！？」

「あ……………」

おとつと……………なのはさんたちは初対面でしたね。

「そちらは？」

「えっと、この人は一応、私の上司の……………」

「アテナよん みんなの事はよく聞いてるわ」

「で、どうして来たんですか？」

「今の貴方達じゃ全滅するのがオチだからよ」

まあ、確かにそうですね……………

「だから、一時的にエレナ、貴方に力を戻すわ」

「わかりました」

「じゃ、私帰るわ」

「え！？」

「バイバーイ！」

言いながらアテナ様はそのまま消えてしまいました。

「消えた・・・？」

「まったく、しょうがないですね」

力といっても、天使の力では駄目ですね。天使の力にライダーの力を付与させたりしないと・・・

「みなさん、この街の住民達は恐らく今、結界で消えていることでしょう・・・ですから街から出さないため、街に怪物たちが入る前に、食い止めます」

「・・・管理局からも援軍は来ない。私たちが死守するというわけね」

「そうです」

「やる！やるよ！そしてじんくんを取り戻すの！」

「そうや、迅君も助けて、街のみんなも助ける！いくで！リインフオース、みんな！」

「我が主、そして迅のために、死力を尽くします」

「烈火の将として、かならずや主の期待に答えます」

「おっし！やってやるぜ！」

「頑張りましょう」

「主のご期待に答えます」

はやてさんたちも決意は固い……今のみんななら、乗り越えられるでしょうね……

「いきます！転移！」

こうして私たちは転移し、戦いの待つ戦場へと転移しました。

アリス side

「これ、何よ……」

街が暗くなっていた。まだお昼過ぎなのに……なんで？

「アリスちゃん、あれ！」

「な、なにあれ！」

すずかが指差す方向には、怪物が群れを成していた。

「がああああああ！」

「きゃあああああ！」

「デイバイインバスターアア！」

「え？」

どこかで聞いた声が聞こえた。怪物たちは爆発した。そこにいたのは……

「なのは!？」

「アリサちゃん!？すずかちゃん!？」

「い、いったい何がどうなってるの!？」

「それになのは、その格好……」

「ふえ!？えっと、えっと……これは、その……」

「なのは、どうし……アリサ!？すずか!？」

「フェイトまで!？なによその格好!」

「えっと、これは……」

もう何がなんだかわからない……

「ユーノ君!二人を安全なところへ!」

「アルフも」

「ユーノ?アルフ?」

男の子と女の人のこと？え？え？

「と、とにかく、後で全部お話しするから！」

そう言っただけなのよが飛んでいった。な、なんなのよあれ……

なのはside

「ど、どうしよう……ばれちゃった……」

「うん……あとで、説明しないと」

「そうだね……」

「どうかしました？」

「エレナさん、その……」

私は今までのことを説明しました。

「なるほど、それは後で話したほうがいいですね。彼女達なら、きつと受け入れてくれますよ」

「……そうですね」

「さあ、行きましよう……この街を守るために」

「はい……」

待っててね、じんくん！必ず助けるから！

第二十四話「闇に染まる街」(後書き)

秋風「……今回も連続です」

迅「次回、第二十五話『奇跡は起きるものではなく人が起こすもの』  
ドライブイグニション!」

**第二十五話「奇跡は起きるものではなく人が起こすもの」(前書き)**

今回は後書きに私の皆さんへの質問とアンケートがありますのでど  
うか一つ・・・



第二十五話「奇跡は起きるものではなく人が起こすもの」

迅side

「……………」

『起きろ、朝だぞ』

『起きてみなよ』

『起きよじつげ』

『起きろって』

『おきろー』

「……………」

『起きろ、少年』

『起きろ…………』

『起きてよ』

『起きなうって』

「だあああああー！うっせえー！」

『やっと起きたね』

「なんだ、あんたたち」

顔が暗くて見えない9人の男。でも、どこかで聞いたことがある声。

『今、外でみんなが戦ってるよ』

『君は戦わないのか？』

「……こんな状況で、俺に何ができる」

『そうだね、でも、諦めたらいけないだろ』

「……力のない俺に、人を守る資格はない」

『力がなくても、大切な人を守らなければいけないだろっ』

「……」

『弱かったり運が悪かったり、何も知らなかったとしても、何もしないことの言い訳にはならないよ？』

「……そんなこと、わかってる」

だから今まで戦ってきたんだ。

『みんなの笑顔を守りたいんじゃないの？』

守りたい……

『みんなの未来を守りたいんだろ?』

守りたい……

『悲しい戦いを、止めたいんじゃないのか?』

止めたい……

『あいつらの夢、守ってやるべきなんじゃないか?』

守りたい……

『戦えない全ての人のために戦うんだろ?』

そくだ……俺が、戦わなきゃ

『待っている人が、いるんじゃないか?』

いる……少なくとも、俺はそう思ってる

『人は人を愛すと弱くなる。けど、恥ずかしがることはない。それは本当の弱さじゃないから』

……俺に、戦えるのだろうか

『弱くたって、運が悪くても、やることはやらなきゃ』

……そくだな

『愛する人のために、戦うんじゃないのかい？』

愛する……か、少なくとも、大切なものはある。

「俺は……」

俺は、全てを守りたい

「いい返事だな」

俺の前に、また別の人間が現れた。

「これは、お前にやるよ」

「これは……」

それは白いバツクル……そうか、お前がここに、みんなを呼んだのか

「門矢、士……」

「ふつ、並行世界を旅していたら、変な女にこれを渡されて、お前に渡せたとさ」

「……そうか。ありがとう」

俺はディケイドドライバーを受け取り、立ち上がる。

「……行こう、仮面ライダーのみんな」

エレナ side

「……ふふふ見事だな、あの怪人たちを倒すとは」

「……防衛プログラム」

「じんくんを返して！」

「ふつ、あやつならとつくに次元のどこかに消えた」

「そんな……」

「それより、お前らに面白いものを見せてやる」

防衛プログラムが指を鳴らすと、9体の防衛プログラム初期の、スライムのようなものが形をつける。そして……

「ヘンシン」

「装備完了」

「ヘンシン」

「ヘンシン」

『OOO STANDING BY COMPLETE』

「ヘンシン」

『OPEN UP』

「カブキ」

「ヘンシン」

『HENSIN CAST OFF CHANGE BEETLE』

「ヘンシン」

『NEGA FORM』

「ヘンシン」

『ガブリ』

仮面ライダークウガアルティメットフォームの目が黒いバージョン、仮面ライダーG4、仮面ライダーリュウガ、仮面ライダーオーガ、仮面ライダーグレイブ、音撃戦士歌舞伎、仮面ライダーダークカブト、仮面ライダーネガ電王、仮面ライダーダークキバ……なるほど、ダークライダー総結集というわけですか……

「そして、私も戦わせて貰おう」

あの、黒いバツクル……まさか！

「変身」

『KAMEN RIDE DECADE!』

「ダーク・・・デイクライド」

そのマゼンタではない、青い目に黒い体。金色のプレートを身につけた闇の戦士・・・仮面ライダー・・・最悪ですね。

「あれは・・・!?!」

「迅ほど上手くできるかわかりませんが・・・」

『KAMEN RIDE』

「変身!」

『DIE!END!』

私は仮面ライダーディエンドに変身し、カードを取り出します。これで、防げるといいいのですが・・・

『KAMEN RIDE・・・G3-X!KNIGHT!DELTA!  
A!CHALICE!IBUKI!GATACK!ZERONOS  
!IXA!』

「はっ!」

私は仮面ライダーG3-?、ナイト、デルタ、カリス、息吹鬼、ガタック、ゼロノス、イクサを呼び出します。クウガの分とダークデイクライドの分は、私が補わなければ・・・

「行きます!」

私はライダーたちと駆け出しました。

「はっ！」

「があ！」

激しい殴り合い、斬り合いが続きます。なのはさんたちも参加するのですが……

「きゃあ!?!」

「うわあ！」

ダークライダーたちだけでなく、怪人たちまで現れ、攻撃されました。

「うわああ!!！」

「ぬああ！」

「がああああ！」

「ぐあ！」

「ああ！」

カリス、G3-?が消え……

「ぬあ！」



「ぐはっ！」

息吹鬼、ゼロノスが消え……

「うわっ！」

「ぐああ！」

ナイト、イクサが消され……

「うああ！」

「があっ！」

ついにはデルタとガタツクまでも消えてしまいました。

「はあっ！」

「きゃあ!?!」

私もダークデイケイドに蹴り飛ばされ、地面に叩きつけられました。全員満身創痍……もはや、これまで……なのでしょう。か。

「死ね、愚かな魔導士達……」

ダークデイケイドたちが駆け出し、こちらに向かってきます。……  
・さようなら、迅

「魔法の射手！連弾・光の97矢！」

光の矢が、灰色のオーロラの向こうから降り注ぎました。

迅side

「……………どうやら、間に合ったみたいだな」

「じんくん……………」

「迅……………」

「じん……………」

「迅君……………」

「なのちゃん、フェイト、アリシア、はやて……………待たせてごめんな……………それに、エレナやリインフォース、シグナムたちも」

みんなボロボロだ……………そうとう、戦ったんだな。

「ほう、生きていたか……………コピーし終えたので次元の彼方へ飛ばしたのだから」

「……………俺は、お前を倒すために戻ってきた」

「一人でこの勢力に！最強になった私に立ち向かうか！おもしろい！」

「一人じゃない……………俺達」は、みんなで立ち向かうんだ」

「何？」

俺は共に戦う仲間達を呼び寄せた。

エレナside

迅の言葉と共に再び灰色のオーロラが現れました。そこにいるのは・  
・  
・

「あれは!？」

そこにいる9人の人間達……まさか!？

「みんなの笑顔のため、俺も戦う！」

オダギリジョーではない!？『五代雄介!？

「みんなの未来のために！」

ではあれは賀集利樹ではなく『津上翔一』

「人を守るために、俺は戦う！」

須賀貴匡ではなく『城戸真司』

「人の夢……俺が壊させねえ」

半田健人ではなく『乾巧』

「戦えない、全ての人のために……俺も戦う！」

椿隆之ではなく『剣崎一真』

「少年一人に、戦わせるわけにもいかんからな」

細川茂樹ではなく『日高仁志（ヒビキ）』

「お婆ちゃんが言っていた。不味い飯屋と、悪が栄えた試しはない」

水嶋ヒロ・・・ではなく『天道総司』

「悪いけど、この街の時間は消させない。彼と、あの子達もね」

佐藤健ではなく『野上良太郎』

「愛する人を守る気持ち・・・彼も、僕も、同じだ。僕も戦う！」

瀬戸康史ではなく『紅渡』

それぞれの世界に本当に存在する仮面ライダーたちが、今ここに終結していました。奇跡・・・いえ、こんな驚くことをするのは、あの上<sup>ばか</sup>司しかいませんね。

「貴様ら・・・いつたい何者だ！」

「「」

迅と、仮面ライダーたちがそう言い放ちました。

迅side

準備は整った……後は、目の前の敵を倒すだけ……

「行くぞ、みんな！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

みんなが返事をし、変身始める。

「変身！」

「変身！」

「変身！」

『555 SUTANDING BY』

「変身！」

『COMPLETE』

「変身！」

『TURN UP』

「変身……ってみんなやるのか？ま、いいけど」

リン

「変身……！」

『HENSIN』

「キャストオフ」

『CAST OFF CHANGE BEETLE』

「いくよ……変身」

『SWORD FORM』

「キバット！」

『おっしやー！異世界でも頑張っちゃうぜー！ガブッ！』

「変身」

「……勝負だ、防衛プログラム。」

『KAMEN RIDE』

「変身！」

『DECADE！』

クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、剣、響鬼、カブト、電王、キバ……そしてディケイドが揃い、闇の書プログラムたちの前に立った。

「……エレナ」

「はい」

「みんなを頼む」

「ええ、もちろん」

「行くぞ、みんな！」

「おおっ！」

こうして、闇の書防衛プログラムとの戦いが始まった。

第二十五話「奇跡は起きるものではなく人が起こすもの」(後書き)

秋風「やってしまったorn」

迅「どうした」

秋風「蒼天シリーズ書くつもりが、こっちが気になって書いてしまった」

迅「駄目人間め」

秋風「うるさい！見ていろ、かならずあげるからな！」

迅「むりだ」

秋風「やるったらやる！」

迅「で、今日はみんなにお願いがあつたんだろ？」

秋風「そうだった。どなたか、ネギ魔！の『雷の暴風』で、どうすれば全体的にカタカナが呪文の上にくるのか、教えてください！」

迅「方法がなくて、ネギ魔の呪文のところがさびしいんです！」

秋風「あと、ルートのアンケートもあります」

AS編後、別世界に行ってからStrikersになる(世界はネギ魔or Fate)



中学生、高校生編ありStrikersへ

なんもなく一気にStrikers編突入

そのままASで終わる

迅「ちなみにFateはライダー戦に介入するだけです」

秋風「できればASで終わりたいわけではないけど、アンケート待ってます！」

迅「次回、第二十六話『一人で戦うわけじゃない』ドライブイグニション！」

第二十六話「一人で戦うわけじゃない」(前書き)

今回も連続投稿です

## 第二十六話「一人で戦うわけじゃない」

俺達は駆け出し、怪物たちに踊りかかった。

『うおおおおおおお！！！』

「はっ！」

キバがファンガイアを蹴り飛ばし。

「だりゃあっ！」

電王がデンガツシャーでイメージンを切り飛ばす。

「俺、最強！」

「はっ！」

クウガがグロンギを殴り飛ばす。

「らあっ！」

ファイズはファイズエッジでオルフェノクを斬る。

次々とライダー達が怪人を撃破していく。ダークライダーたちも平成ライダーたちに襲い掛かる。クウガと闇のクウガ、アギトとG4、龍騎とリュウガ、ファイズとオーガ、ブレイドとグレイブ、響鬼と歌舞鬼、カブトとダークカブト、電王とネガ電王、キバとダークキバが死闘を繰り広げる。そこへ、ダークデイケイドが現れる。俺はライドブツカーで攻撃を防ぐ。

「貴様ら、どこまで私の邪魔をすれば気が済む！」

「お前を倒すまで、俺達は負けない！はあっ！」

ダークディケイドの攻撃を弾き返す。

「力がありながら！貴様は！」

「くっ！」

「何故世界をこの手に掴もうと思わない！」

さらに拳が飛んできて、俺はそれを喰らって吹き飛ばされる。他のライダー達は傷つきながらも、ダークライダーたちに深手を負わせる。

「ぐっくう！」

「迅君！」

「だい、じょうぶ……」

「愚かな者よ、闇に沈め……」

「確かに、俺には力がある。それこそ、一つの組織を潰してしまうような、そんな力が……」

今まで、何度も歴史を改竄してきた。

「そして、他人のために使える力だってあった」

士郎さんの怪我を治し、プレシアさんを治し、アリシアを蘇らせた。リンフォースのバグを取り除いた。

「でも、でも違う!」

「なに……?」

「俺の力は、何かを傷つけるための力じゃない……誰かを、救う力だ」

「ちっぽけな貴様一人で、全てを救うことなどできまい」

「一人じゃない!」

「何?」

「じんくんには、私がいる!」

なのは……

「私もいる!」

フェイト……

「わたしもいるよ!」

アリシア……

「うちもおる!」

はやて……

「私もだ！」

リインフォース……

「私もいるぞ！」

シグナム……

「あたしだっている！」

ヴィータ……

「私もです！」

シヤマル……

「我也だ」

ザフィーラ……

「私もよ……」

プレシアさん……

「あたしだっているやー！」

アルフ……

「僕だつて……！」

ユーノ……

「あたしも！」

ロツテ……

「私もです！」

アリア……

「そして、僕たちもさ……」

ライダーのみんな……

「そうだな……俺には、みんながいる。だから、お前には負けない！」

「戯れごとをお！はあああ！」

ダークライダー達が取り込まれる。そして、ダークディケイドはコンプリートフォームへと進化する。違うのは、その絵柄たちがダークライダーだという点。

「そつちがその気なら……！」

俺はケータッチを取り出し、装着する。

『HYPER SHINING BLASTER ARMED S  
RVIVER KING RISING ULTIMATE EMP  
ERROR SUPER CLIMAX』

ライダー達の頭上にカードが浮かび、それがかぶさる。そして俺の前にも、ディケイドのカードが現れた。

『FINAL KAMEN RIDE DECADE!』

ディケイドのカードが額に収まり、カードが変わる。そして装甲が変わって俺を仮面ライダーディケイド コンプリートフォームへと進化する。

「はああああああああああああああああ!!!」

ダークディケイド コンプリートフォームの腕から黒いオーラが発射される。

「うわあああああ!」

爆発がおき、吹き飛ばされる。だが、俺を含めた全員が立ち上がった。

「強化したところで、雑魚どもが……!」

「ならその雑魚なりに戦わせて貰う!」

俺は駆け出し、ライドブッカーをソードモードにして斬りかかった。

「その程度か……!」

「んなわけ……ねえだろう!」



俺はすぐさま回避行動を取った。俺の背後では、すでにチャージを終えていたライダーと、なのは達がいたからだ。

「はあっ！」

「ふんっ！」

「はっ！」

『FINAL ATTACK RIDE D I D I D I E  
N D ー！』

「はっ！」

「デイバイン・・・バスター！」

「トライデントスマッシュァー！」

「穿て！ブラッティダガー！」

ファイズ、龍騎、カブトがそれぞれ砲撃を放ち、それに続いてエレナ（デイエンド）、なのは、フェイト、したはやてが魔法を放つ。

「はあっ！」

「らあっ！」

「紫電一閃！」

「うおりゃあぁー！」

「おらあ！」

キバ、ブレイド、シグナム、電王、ヴィータが一撃を入れる。

「はあっ！」

「おりゃあー！」

「ぬっんっ！」

「はっ！」

アギトと響鬼、ザフィーラとアルフが拳を入れる。

「はああ！」

「はああっ！」

そしてクウガとリインフォースが拳で殴り飛ばした。

「ぐっ、うう……」

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE DE DECADE!』

カードの紋章が現れ、俺はそれを突き抜けた。

「はああああ！てやああああああ！」

ディメンションキックが発動し、それがダークデイケイドに激突した。

「ぬうう……まずい、このままでは……『本体』に戻らなければ……!」

「何!?!」

「ぬあああああああ!?!?!?!?!?!」

ダークデイケイドは黒い水晶となり、逃げ出す。

「待てっ!」

俺達はそれを追いかけ、走る。そこは臨海公園……そこにいたのは、原作でも登場した暴走したリインフォースだった。

「あいつはっ……!」

「……」

そのリインフォースもどきはダークデイケイドと同じように黒いオーラを投げ、爆発させた。

「うわああっ!」

何とか避ける。どごだ……どごご!!

「死ね……」

一瞬の出来事だった。俺の背後には、すでにそいつがいたのだ。奴の手刀が迫る。まずい、避けられない！

「させんっ！」

「リインフォース！」

その瞬間、リインフォースが俺の盾となり、肩を貫かれた。

「う、うう……！」

「貴様あー！」

全員でそいつに襲い掛かるが、奴はオーラを発し、俺達を寄せ付けない。奴はそのまま海上へと逃げ出していく。

「リインフォース！しっかりい！」

「我が主……ご心配、なく」

「リインフォース！しっかりしろ！ケアルガ！」

俺はケアルガをかける。だが、闇の侵食が早い……

「余計な魔力を使わなくていい……私は、大丈夫……だ」

「ざけんな！今助ける！」

「迅、待ちなさい」

デイエンドに止められる。

「なんでだよ!」

「闇の侵食のせいで、ちゃんとした魔法が通じません・・・リインフォースを助けるには、あの防衛プログラム本体を倒すしかありません」

「・・・っく」

「少年、君は行くんだ」

元に戻っている響鬼が、俺に言う。先ほどの一撃を喰らったためか、ライダーたちは元の姿へと戻っていた。

「だが・・・」

「あいつに勝てるのは、同じように力を持った君だけだ。違うか？」

クウガ言われる。確かに、その通りだ。

「・・・」

「リインフォースの闇の侵食は、私が止めます。だから、行ってください」

「街のほうは、俺達に任せる!」

「わかった・・・みんな、行こう!」

こうして、俺は地上を仮面ライダーたちに頼むと、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、アルフ、ユーノと共に、空へと飛んだ。

第二十六話「一人で戦うわけじゃない」(後書き)

秋風「今回はお休みです」

迅「次回、第二十七話『未来を切り拓く者』ドライブイグニション  
！」

## 第二十七話「未来を切り拓く者」(前書き)

はい、ということで次回をもってAS終了です。

アンケートによって導かれたルートの発表もあるのでお楽しみに！





やるしかない。

「リンディさん、聞こえるか？」

『ええ、なんとか……』

「これから闇の書の防衛プログラムを破壊する作戦を言う、よく聞いてくれ」

俺は原作どおりの作戦を話した。

『む、むちゃくちゃね』

「だが、地球に影響を与えないでやるにはこれしかない。発射に備えてくれ」

『それはいいけど、どうやってそこからこっちへ』

「何とかする。頼んだぜ」

こうして通信を切ると、作戦をみんなに伝える。やるには、これしかない！

「行くぞ、みんなっ！」

『おおっ！』

こうして闇の書プログラムとの戦闘が始まった。

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

アルフたちが足を切り……

「鋼の軛！」

ザフィーラの攻撃で進行が止まり……

「遅れんなのよ！なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

「エクセリオン…バスタアアアア！ブレイク…シューー…トツ！」

「轟天爆碎！ギガントシュラーク！！」

なのはとヴィータが防御の結界を破壊する。

「駆けよ、隼！」

「疾風迅雷！」

シュツルムファルケンが最後の結界を弾き飛ばし、ジェットザンバーが斬り飛ばす。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」



答えを出す者を使い、闇の書の防衛プログラムに干渉して結界を解除する。

「シャマル！ユーノ！アルフ！」

「了解！」

無事に転送した。そして……

「リンディさん、防衛プログラムは？」

『無事、消滅したわ！』

「やったあ！」

全員が喜ぶ。だが、早くリインフォースを治さないと……！俺達はずぐに公園に戻った。

「エレナ！」

「迅、よかった！リインフォースの闇が引いていきます！」

「わかった！ケアルガ！」

再びケアルガをすると、残っていた闇の書の防衛プログラムの残滓はどこかへ消えた。

「どうやら、俺達の役目は終わったみたいだな」

「・・・ああ、ありがとう。五代雄介、津上翔一、城戸真司、乾巧、  
剣崎一真、ヒビキ、天道総司、野上良太郎・・・それにモモタロス、  
紅渡・・・」

すると、俺の手に一枚のカードが宿った。

「これは・・・」

それは劇場版とはまた違う、『ALL RIDER』と書かれたカ  
メンライドのカード。アギトからキバと共に、変身者たちが映つて  
いた。

「またなにかあつたら呼んでくれ」

「そうすれば駆けつけるよ」

こうして、仮面ライダーたちはオーロラの向こうに消えた。

「行っちゃったね・・・」

「ああ、でもまた・・・きっと会えるぞ」

「・・・どうかな？」

『！？』

全員がその声を聞いてそちらを向いた。そこにいたのは、先ほどの  
防衛プログラム、その残滓だった。

「まだ、生きていたのか!？」

「私は、この程、度で、死な、ん……！貴様らは、くち、はて、ろ！」

強大な爆発が起きる。それによつて、俺達は吹き飛ばされる。俺は至近距離で受けたため、海へと落ちた。

なのはside

「じんくん！」

「あつはつは！あつけない最後だな！」

「あなたを、許さない！」

私たちはデバイスを構えるけど、そのとき闇の書の防衛プログラムに変化がおきた。黒いなにかに包まれ、その身体は機械に似た、背中から粒子を出す白いロボットになっていた。

「まさか、0ガンダム！？」

エレナさんが叫んだ。0ガンダム？

「もはやこれまでの力だが、貴様らを殺すことはできる！しねえ！ライフルからビームが放たれた。私たちはそれを受けてまた吹き飛んだ。」

「きゃあああああああ！！！！」

もう魔力も残っていない。このままじゃ・・・

「じんくん・・・」

「安心しろ、すぐにあの男の下へ送ってやる」

「まけ、ないもん・・・」

「鬱陶しい・・・消える」

私に銃口が向けられた。もう、駄目・・・!

「おおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」  
目をつぶろうとしたそのとき、夜空から蒼い流れ星が降ってきた。

迅 side

「・・・きて」

誰の声だ・・・?

「・・・ちい」

「え?」

「起きなさいっ!」



「うわっ!?!」

目を覚ますと、そこにはアテナがいた。

「アテナ……」

「神様を呼び捨てとは、やっぱりいい度胸ね」

「なんのようだよ……ってか、ここどこ?」

「一応生みに落ちた瞬間、一時的に次元の狭間に送って避難させたのよ」

アテナはどうだといわんばかりの表情だ。

「……わーったよ」

「で、どうしたいわけ?」

「……どうするもこうするも、戻る」

「今の貴方の力じゃ、良くても相打ち……わかってるの?」

もう力もない……ライダーたちに力を借りたとしても、あの空間から出るのに力を使い、ダークデイケイドと戦うのに力を使い、そして防衛プログラムと戦うのに力を使った。魔力量EXとはいえ、その消費量も、かなりのものだった。もう力もない。あいつには負けるか、それとも相打ちか……。だが『慣れた』のかもしれない。

「……………人ってよ、初めてのことはなんでも怖いし、躊躇うよな」

「ええ、そうね」

「死ぬのも、もう経験しちまった……………もう、怖くねえ」

「それは、良い事ではないわ」

そんなこと、誰が聞いたってそう答えるよな……………

「わかってる。でもよ……………」

そう、死んでしまったからこそ、わかることがあった。

「俺が死んで救える命があるんなら……………それで本望さ」

自然と、笑みが零れた。

「変わったわね、世間が面白くないと僻み、ネットの世界に逃げたあなだが」

「……………そーさな、どっかのお馬鹿な神様のお陰だ」

「馬鹿は余計よ」

「ふん、どうだか……………んじゃ、いくぜ……………次死んだら、多分地獄かな？」

「どっけしゅっね」

こうして、俺はもう一度なのはたちの世界へと渡った。

エレナside

「行っただか・・・」

「ええ、ゼウス様」

最高神ゼウス様が、空間から現れた。

「あれがお前の死なせた転生者か・・・」

「・・・ええ、まあ」

「資料を見たときには驚いたものだ、あのような男が・・・とな」

そう、これは偶然だった。私たち神ですら、知らなかった未来。

「そうです、彼こそ世界を救える『器』です・・・」

「神になれる可能性を宿した男か・・・」

さて、ここからが大変なのよね・・・

「それでゼウス様・・・彼の処遇は？」

「議論の末、彼にはお前が与えた『かりそめの命』ではなく、正しい命を与えることになった」

「それはそれは……貴方以外の神がよく処断したもので」  
爺たちがよく頷いたわね……

「聞こえとるぞ……」

「失礼」

「だが自分の命で他人を救えるなら本望……か」

「ここ数百年、聞かなかった言葉ですね」

積み重ねた歴史によって、人は変わる。

「世界を救う『器』よ……主に加護があらんことを……」

ゼウス様は、私にギリギリで聞こえる声で呟いた。

迅side

「なのはっ!」

俺は叫びながら、太陽炉の出力を上げる。

「あれは……」

この命は、みんなの未来のために……原作を破壊するなんて  
言っていた俺だけど、もう違う……みんなに悲しい思いをさ

せないために……だからこそ、この言葉を言わせてもらおう……

「ガンダムエクシア、神谷迅……………未来を切り拓く！」

なのはside

じんくん……

「じんくん！」

私は目に涙をため、その名前を叫んだ。

「この、人間風情が……………！」

防衛プログラムが叫び、空中へ飛んでライフルを撃った。でも、じんくんはそれを避けて、大きな剣を構えていた。

「でええええええええつ……………！！！」

「きゃあ!?!」

二つの機体は地面に落ち、すごい衝撃が起きる。それでも、二つの機体は海上を駆け抜ける。じんくんはビームを避けながらも、一発のビームを撃ち放って防衛プログラムが持っていたライフルを破壊した。でもその煙が目くらましになって、今度はじんくんに向かって防衛プログラムが何度もじんくんを殴った。

「じんくんつ!今……………つ!?!」

私は援護に行こうとしたけど、体が動かなかつた。もう、魔力が限界に来ていたみたい。でも、じんくんはその拳を受け止め、一本背負いで陸のほうへと叩きつける。そして光る剣を抜き放ってそれを振り下ろした。

「だああああああああああああっ！！！！！！！！！！」

剣が掠り、防衛プログラムの破片が飛び散る。でも、防衛プログラムも反撃する。じんくんの身体も斬られてしまった。

「ぐっ！くうう！」

じんくんはなんとか堪えて、そこで足をとどめた。そして立ち上がる。すると、防衛プログラムは盾を捨てて、光の剣を両手で握り締めた。じんくんも、大きな剣を構えた。その瞬間、背中からものすごい勢いで光が噴出する。

「きれい……………」

思わず出た言葉…………でも、嘘じゃない。いくつも生まれ、消えていく光の円…………両手で剣を構えていたじんくんの姿が、とても輝いて見える。そして、じんくんは数歩駆け出してから、飛んだ。その低くも長い跳躍。防衛プログラムも、光の剣を突き出した。その瞬間、激しい光が生まれる。

「きゃっ！？」

光がやみ、目を開いた。そこには、大きな剣で防衛プログラムを貫く、じんくんの姿があつた。だけど、じんくんも同じように、胸に

光の剣が突き刺さっていた。光の剣は消えて、防衛プログラムは力尽きたかのように身体をだらんとさせた。まさに、その瞬間だった。

ドオオオオン!

防衛プログラムは爆発した……じんくんを巻き込んで。

迅side

……ははっ、なんだか、読めてた展開だったな……なんか、途中から原作まんまだったし……刹那はあの後助かったけど、あれはコクピットだったからで……身体は機体じゃないもんなあ……

「ん？ここは……」

また白い世界……今度こそ地獄行きか？

「ほう、目が覚めたか」

「……誰？」

「ゼウスじゃ」

あの最高神か……

「そのゼウス様がなんのようですか？」

「なに、お主に本来の命を授けようと思うてな」

「はあ……」

本来の命？

「今までのほかりそめの命……まあ、お試し期間じゃな」

「で？」

「転生者はほいほい出すものではない。異世界においてどのような活躍をするか見て、本当に命を与える」

「もし駄目だったら？」

「そのまま消滅じゃな」

うわーお、この爺いかれたこというね。

「聞こえとるぞ……まあよい。神谷迅、お主は世界を救おうと世界に逆らった。だからその功績を称え、正式な転生者として認めよう。」

「……ありがとうよ」

「では目覚めるがよい、お主の大切な者達が待っておるぞ」  
ゼウスが指を鳴らした瞬間、俺の目の前は真っ暗になった。

「……うっ……うっ……」



「・・・・・・・・・・?」

誰か、泣いている?

「じんくん・・・・・・・・起きてよ・・・・・・・・じんくん・・・・・・・・」

「じん・・・・・・・・」

「うえ〜ん!じん〜!」

「ひっぐ、えっぐ・・・・・・・・せっかく勝ったのに・・・・・・・・じゅじゅ」

・・・・・・・・この、声は・・・・・・・・

「みんな・・・・・・・・泣くなよ・・・・・・・・」

俺が目を開けると、ぐしゃぐしゃの顔で泣いているみんなの姿があった。そして涙が止まっている4人。だが、また一気に涙と鼻水が流れ、俺に抱きついた。

「「「「じん(君)〜!うえええん!」「「「」

「いつ!お前ら、待て、おちつ・・・・・・・・け・・・・・・・・」

極度の激痛に、俺はまた倒れる。

「じんくん!?!じんくーん!」

なのはの叫びが聞こえていた気がした。

## 第二十七話「未来を切り拓く者」（後書き）

秋風「ということで、AS編は次回で終了です」

迅「なんとなくか、めちゃくちゃだったな」

「ふ、なんともいえ」

迅「話またいで作ったのはいいけど、防衛プログラムと戦ったところ適当すぎだろ」

秋風「まあ、ガンダム戦が書きたかったからな」

迅「ライダーもそんな活躍がなかったし」

秋風「気にするな!」

迅「するわっ!」

秋風「んでもって、ルートを発表します」

AS後 中学3年までなのは編 中学3年から学園祭までのネギま  
!編 StrikerS編 ????

秋風「思ったよりFateに表が入らなかったの」

迅「まあ、ライダー戦だけってどんだけだよな」

秋風「ゲーム持ってないと辛いね」

迅「だな」

秋風「てなわけで、今日はこの辺でw」

迅「次回、第二十八話『看病と書いて、争奪戦と読む』ドライブ  
グニション！」

第二十八話「看病と書いて、争奪戦と読む」(前書き)

今回はのほほんです

## 第二十八話「看病と書いて、争奪戦と読む」

戦いから2日が経過した。事件は何事もなく、終わりを迎えた。ただ、問題と言えば……

「いてててて！」

「ほら、また無理する。迅君、大人しくしなさい」

「母さん、わかった！わかったから！」

別荘にて、母さんに看病してもらっています。

「はい、おしまい」

「ふう……母さん、もう3日目だからそろそろ仕事だよ」

「うん、行ってくるからいい子にしているね？」

まあ、なんでと疑問があるだろう。なぜ母さんが別荘（こ）にいたのか。それというのも、なのはが意を決して家族に魔法の存在を教えたらだ。なのははフェイト、はやてと共に、管理局で働く道を選んだ。はやても、今回の事件で色々と迷惑がかかったので、その恩返しをしたいと名乗り出た。ロストロギア所持での管理局入局に、上層部は難色をしましたが、原作どおり、レティ提督が色々根回しをして管理局へと入局した。そして俺も母さんに話をして、なのはたちを守ることにした。なので、ここにいますのである。

「……あー、暇だ」

体が動かないし、正直だれる。魔力の回復には約3日はかかる。まだみんなは学校だし、やることねー……

『マスター、いい機会です。静かにしましょうよ』

「暇なのは性に合わん！」

『でしょうね』

「迅」

声がしたので、振り返る。すると、そこにはリインフォースがいた。

「リインフォースじゃないか、どうした？」

「いや、その……だな、お前がなかなか回復しないというので、様子を見に来た」

「そっか、ありがとな」

「い、いや……その、うう……」

なんだ？様子がおかしいけど……

「どうした？」

「い、いや！なんでもない！なんでもないんだ！」

「そっか、ならいいけど……」

なんなんだいったい……

「その、迅？」

「何？」

「ありがとう」

「は？何がだよ」

「私は、お前に救われた。私を、永久の闇から救い出してくれた」

なんだ、そのことが……

「いや別に、気にするな。俺が救いたいと思ってやったことだ」

「それが、疑問だったんだ。」

「あ？」

「どうして、お前は私を救ってくれた？」

「……めんどくせえなあ。」

「救いたいからだよ」

「え？」

「お前も、はやても、シグナムたちも……一つの大切な家族

の温もり。それを救いたい……それに、お前に光を見せたかった。ただ、そんだけだよ」

言った瞬間、俺はリインフォースに抱きつかれた。

「リイン、フォース？」

「うっ……うっ……」

「お、おいおい、どうした？」

「……長い時の中で、私は……闇にいる、のだとヒッグ……思っ、いた……」

原作やゲームでは見たことがない、リインフォースの弱さ……それがこれだった。

「光を、私に見せてくれた……お前は……うっ……」

「わーった、わーった、泣くなって……お前らしくもない。それによ」

「……?」

「俺は、笑顔で言うて欲しいよ。ありがとうってな」

「そうか……では、ありがとう。迅」

その笑顔は、原作では見られないほど、美しい笑顔だった。



「お、おう……」

「そつだ、腹がすかないか？」

「ん、まあ、そつだな……もうすぐ昼だしな……」

「なら果物を剥く。何がいい？」

「んじゃ、林檎」

「わかった、すぐにやるかなら」

リンフォースは嬉しそうに厨房へと走っていった。

「なんなんだ……いつたい」

『マスターって、やっぱり疎いですね』

「何が？」

『なんでもありません』

だからなんなんだよ……

それからまあ、リンフォースと静かに時を過ごすわけだが、ここで別の人物が来訪した。

「迅、調子はどうだ？」

「ん、シグナムじゃん。どうした？」

「その、だな……お前が調子が悪いと聞いて……って、  
ラインフォース、貴様何している！」

「騒ぐな将、迅に林檎を食べさせているだけだ」

両手使えないからってこれはないとは思うけど、シグナムどうしたんだ？

「私にもやらせる！」

「駄目だ将、これは私の役目と今決めた」

「き、貴様というやつはあゝ！」

「お、おいシグナム！落ち着けよ！レヴァンティンしまえって！」

「む、すまん……」

今までになく怖かった……話題を変えよう……

「そういえば、お前らの処遇はどうなった？」

「うむ、迅の渡してくれたデータを見せたら、上層部は黙った。私たちは主はやてと同じように保護となり、私たちは主はやてと管理局へ入る」

「そっか、ならよかった。」

「だが、恐ろしいものだ。お前があの時私を止めていなければ、悲劇が起きていたのだから」

そう、シグナムには話した。アリアとロッテがやるうとしたことを。そしてその結果を。

「…………お前のお陰だ。ありがとう迅」

「駄目だぞ、将」

「何？」

「礼を言うときは、笑顔で言わなければ」

「……………そうだな、ありがとう迅」

シグナムが、笑顔でそう言った。

「あ、ああ……………」

原作じゃあ見れないな、こんな笑顔…………

「その、だな…………お礼を、ずっと考えていたんだが……………」

「いいよ、礼なん…………て!？」

シグナムがいきなり俺に迫り、頬にキスをした。

「シ、シ、シ、シ、シグナム!？」

「その、テレビでその、やっていたのだが……」

「お前、テレビの影響でこういうことするなよ!」

シグナム顔真つ赤だし。

「将、ずるいぞ!私もする!」

そう言っただけはリインフォースが俺にキスをする。逆の頬に。

「お前らやめろ!こんなところなのは達なんかに見られ、た……  
……」

俺はそれを見て固まった。

「どうした?迅」

「何が……」

二人も振り向き、固まった。

「ジンクン、ナニシテイルノカナ?」

「シグナム、貴方まで何をしてるんです?」

「リインフォース、主を出し抜いてそないなことするなんていい!」  
身分やな」

「な、なのは……なんか誤解してる」

「テストロツサ、落ち着け！これはだな……」

「わ、我が主！これはその、なんというか……」

「「「言い訳無用！！」」」

こうして、俺達3人はO H A N A S H Iをされた。

「ただいま……って、じんくん、なんか怪我増えてない？」

そう、さっきより包帯がぐるぐる巻きだ。

「……悪魔にやられた」

「なにか言ったかな？じんくん？」

「別に……」

で、今度はやった張本人たち+アリサ、さすが、アリシアに看病されている。

「でもすごいわねこじ……」

「ほんとだね、魔法って何でもできちゃうんだ」

「まあな、俺がちょっと特殊なだけだが」

「ずるいじゃない、私もやってみたいわよ、魔法」

「そりゃ無理だ」

「なんでよー！」

俺の言葉に、アリサが頬を膨らませる。

「落ち着け、理由も説明するから。だからその拳を下ろせ」

「ほらアリサちゃん」

「しょうがないわね……」

いいながら拳を下ろした。で、説明するときには様子を見に来たプレシアさん、リンデイさん、クロノたち、アルフ、ユーノもいた。

「さてさて、んじゃあ説明しよう。まず魔法を使えないのはアリサ、すずか、アリシアの3人だな。母さんとかも無理だけど」

「なんで？」

「魔力資質ってやつさ。それがあるか、それが問題になる」

「へええ……」

「それが3人と母さんにはない。だから魔法が使えないのさ」

「でもあんた、あのカブト虫みたいのはなによ」

「ああ、あれは魔法じゃないな。」

「そうなの?」

「実践してやるのか?」

「できるの?」

「一応、動く程度ならな」

傷も大分癒えたし、大丈夫だろ。俺はベッドから降りると、外へ出た。そして手を上げる。それによって、異空間からカブトゼクターが現れた。

「変身」

『H E N S I N』

電子音が鳴り、俺は仮面マスクドライダーカブトになった。

「へえ、すごいっ!」

「私たちでもできるの?」

「……そうだな、できなくもない。」

「でも、大きなリスクなどもありますから、やらないほうがいいですよ?」

「む……」

俺はカブトゼクターを取り、変身を解除した。

「わーった、わーった、ちょっとやってみるか？」

「え？」

「魔法と仮面ライダー、どっちがいい？」

「魔法っ！」「魔法っ！」

まったく……

「んじゃ、これかしてやるよ」

そう言っただけで俺が渡すのはネギも使用していた練習用の杖だ。

「なんだか、魔法使いみたいだね」

「わーい！」

「杖を持って『プラクテ ビギ・ナル 火よ（アール）灯れ（・デスカット）』だ。いくぞ？」

プラクテ ビギ・ナル 火よ（アール）灯れ（・デスカット）

俺の呪文と共に、杖の先に火が灯った。

「わー！すごい！」

「この魔法はこの世界の魔法とはいろいろ違うんだ」



「どう違うのかしら？デバイスでないのはわかるけど……」

リンディさん、いい質問だ。

「俺が使用した魔力は俺自身に眠る魔力の質量だけでなく、この周囲に漂う魔力を糧にしたというわけさ。万物に宿るエネルギーを息を吸い込むように吸収し、それを杖一点に集中する」

「そんなことが可能なの？」

「ああ、一見地味だけど、この炎は真空でも灯すことができる炎だ」

「ふえ〜……私もやってみるの！」

「私もやる」

「うちも！」

「はいはい、杖はあるから」

こうして杖を私、魔法の練習をするみんなだった。結局なのはとフエイトは元から魔力の素質が馬鹿みたいに大きいのでできるのだが、アリサとすずかはちよつと灯る程度だった。だけど、これでも灯るってんだから才能あるな、こいつら。

で、現実世界の夜になった。

「……何？この状況」

「えへへ〜・・・」

「なのちゃん、フェイト、はやて、アリシア、なんでお前らいるわけ？」

「今日はお泊りなんだ〜」

母さん、なんで許可するかな。

「ちゃんとじゃんけん決めてから。隣で寝る順番も」

なんだそれ・・・

「ほら、お休み〜！」

と、なのはとフェイトが俺の腕を掴む。

「アリサとすずかは明日来るって」

「明日はわたしとはやてだからね！」

もう勝手に決まってるし・・・

「・・・なんでさ」

俺は思わず、そう呟いた。

第二十八話「看病と書いて、争奪戦と読む」（後書き）

秋風「はい、ということで勝負編でした」

迅「なんとなくか、シグナムとリインフォースのキャラが崩壊していたぞ」

秋風「気のせいだ、気のせい」

迅「で、この後は？」

秋風「まあ、待っておけよ」

迅「次回、第二十九話『戻った日常』ドライブイグニション！」

第二十九話「平和な日常と、少女の涙と」(前書き)

今回は重大な発表があります。必ず目を通してください

では本編どうぞ

## 第二十九話「平和な日常と、少女の涙と」

治療も終わり、年が明けた。いろいろあってあれだったが、はやてが復学し、とりあえず平和だったりする。現在お昼休みなので、昼食を食べている。

「なんか、学校が久しぶりだね」

「別荘での生活が長いからな」

「そうだ、じんくん！テストの前ときは今度あそこを使うの！」

「……あんまりお勧めしないぞ？」

「ふえ？どうして？」

「年取るから」

「」「」「」「うっ！」「」「」

やっと気がついたのかよ……

「ま、お前らもがんばってるから好きに使えよ」

面倒だから嫌だけど……

「じゃあ今日も迅君の家集合だね」

毎回毎回、飽きないのか、こいつらは……

さて、そんなこんなで放課後。なのは、アリサ、すずかは塾なので途中で別れた。はやては診察があるので、病院でお別れ。なので必然的に、フェイトと帰宅することになる。現在物件を探していることもあるので、テストロッサ家はうちに住んでいる。

「ねえ、迅？」

「どうしたフェイト」

「迅って、胸の大きい人が好きなの？」

「は？」

何言ってるんだこいつ。

「だって、昨日シグナムやリインフォースと……」

「あのな、昨日のは誤解だって言ってるんだろ。別に、そういう風に思ってるないし……」

「そ、そっか……」

何か誤解が生まれた……

『あの状況で誤解しないほうがおかしいかと……』

「ゼロ、お前は黙ってる」

まったく、そう思うなら助けるよ、アホデバイスめ……

『マスターが悪いです』

「知るか」

「ねえ迅」

「どうした？」

「これからどこか、遊びに行かない？」

「いいけど……どこに？」

「公園なんてどうかな？」

フェイトがもじもじしながら言う。ま、いつか……

「いいよ」

「ほんと!?!」

「嘘言つてどうするんだよ」

「そっか、そうだね……行こう!」

俺はフェイトに手を引かれ、公園へと歩き出した。

公園

「わあ、綺麗だね……」

「そうだな、もう夕方だし……」

海鳴臨海公園が夕焼けに染まる。とても綺麗だ。

「ねえ、迅」

「どうした？」

「迅は、私のこと、どう思うかな？」

「あ？」

「私、この前管理局で言われたの……プロジェクトFの人造魔導素体で犯罪者の人間が、執務官試験を受けるのかって……」

管理局のどこのどいつだ、そんなこと言ったの……

「私、人じゃないから……迅は、どう思うんだろうって……」

「……フエイト」

とりあえずその管理局員を潰す。

「私、幸せになったらいけないのかな……？」

「……バーカ、そんなわけないだろ？」



フエイトside

言われると同時に、私は迅に抱きつかれた。

「じ、迅？」

「幸せになっただけじゃない奴なんて、この世にいやしねえよ」

「でも、私……人間じゃ……」

「だったらなんだよ、その程度のことです、幸せになっただけじゃないなんて法律聞いたことがない」

迅の言葉が、私の体の中を澄み渡っていく。

「なあ、フエイト？」

「何？」

「今だけ、誰も見てねえ。俺も、見ねえ……だから今だけ、いっぱい泣いておけ」

迅の言葉を聞いた瞬間、私の目から、涙が溢れ出した。

「あ、う、あ……」

「辛かったんだよな、怖かったんだよな、でも、もう大丈夫だよ……俺も、プレシアさんも、アリシアも、アルフも、なのはも、はやても、アリサも、すずかも、エレナも、たとえ世界が敵に回っても、お前の味方だ。大丈夫、お前は一人じゃない」



「（フェイトさんに暴言を吐いた人間のあぶり出し……ってところ？）」「

よくわかってるじゃないか……

「（ああ、頼む……）」

「（了解）」

さて、こっちはいいとして……問題はこいつだよな。

「フェイト、そろそろ帰らないと……」

「やだ、もう少し……」

少し泣き止んだフェイトは、俺の服に強くしがみついていた。やれやれ……

「わかったよ、家まで手を繋いで帰ろう」

「い、いいの？」

「ああ、いいよ。ほら、帰ろう」

「うんっ！」

フェイトは涙を目にためながらも、笑顔で頷いた。

しばらく商店街を通り、家に着く。

「ただいま」

「「「「おかえり〜!」「「「「

なのはたちがいた。

「お前らな……」

「お帰りじんくん。」

まさか本当に上がりこんでいるとは……

「フェイト、目が赤いわよ?どうしたの?」

「え?う、ううん!なんでもないよ母さん。ほんと、なんでもないの……」

フェイトの顔が真っ赤になる。どうした?そんなことを思っている  
と、俺はがっしりとなのはに肩をつかまれた。

「じんくん?なんでフェイトちゃんと手を繋いでるのかな?かな?」

ひぐらし化した!

「いや、これはその……フェイト、お前もなんか言ってくれ!」

「その、先に優しくしてもらったの……」

「じんくん、お話ししようか?」

「つ、謹んで遠慮させてもらう」

「私たちもお話しするわよ？」

「私もしようかな」

言いながら二人が練習杖を取り出す。

「お、おい！お前ら落ち着け！」

「大丈夫、魔法の矢程度しかできないから」

そうかそうか……って、何い〜!?

「お、お前らいつの間に……」

「ふふん！伊達に勉強してないわ！」

「ってわけで……」

「「「お話ししようか？」「」」

この後3人からOHANASHIを食らった。

Sid out

時空管理局本局

「では、これで失礼」

男は管理局でそこその地位を持つ男。

「ふん、犯罪者を入れるか・・・レティ・ロウランの目は腐ったよ  
うだな」

男の手の資料にはフェイト・テストロッサの名前があった。

「管理局にゴミはいらん。この魔導士としての権利も奪ってやる」

男は周りを蹴落とし、地位を築く男。地位のためなら、人間を自殺にさえ追い込む。男はこれからの自分の地位がまた上がると考えるとニヤケが止まらなかった。本局から転移し、ミッドチルダ、クラナガンの町並みを歩く。

「む？」

帰り道の裏路地。そこには、黒いフードを被る男が立っていた。男はとてつもない殺気を放っていた。局員の男は思わず身構える。

「なんだ貴様、ここで何している！」

「・・・お前に、地獄を見せてやるっ」

男の目を見た瞬間、局員の男は思わず携帯していた銃を手に取り、撃ち放った。見事心臓に命中する。だが、男は倒れない。局員の男は驚き、何発も銃弾を撃った。

「ひ、ひいー！」







へ行き、何かに怯えて生涯をすごしたらしい。それはまた別の話。

第二十九話「平和な日常と、少女の涙と」（後書き）

秋風「遅れました。かなり遅れました」

迅「ネタが尽きてきたらしいです」

秋風「とりあえず言わせてください。私は作品にかなり力を入れます」

迅「ほんとかよ……」

秋風「ほんとだよ!」

迅「まあいい……何が言いたいのかというと……」

秋風「今回、盗作されました。ものすごく」

迅「ほとんど一緒というか、まるまるパクられるという事態に」

秋風「で、俺がパクったのではないかとの感想」

迅「どういふことだろうね、これ」

秋風「第7話まではとりあえず知ってるよ、盗作とは別の先生だよ。そのひとつには謝罪メール送ったよ」

迅「けどそれを前の話で言ったのに聞かないでクレームってどういふことだろ」

秋風「あれか？クレーマーか？クレーマーなのか？」

迅「とりあえず言いたいことを言え」

秋風「私、秋風は神様の力を得た少年を書いている上で、これからもオリジナルを手がけて生きていきます」

迅「で、もうひとつ」

秋風「これ以上盗作が出る場合、さらにはクレームがくる場合、神様の力を得た少年は打ち切りとさせていただきます」

迅「ここでの小説を書こうのルール、私も守っていききたいので」

秋風「みなさまもどうか、ルールとマナーを守ることを勤めてください」

迅「それでは・・・」

秋風「今日はこの辺で」

迅「次回、第三十話『墜ちた天使』ドライブイグニション！」

第三十話「墜ちる天使」（前書き）

はい、ということでも色々な風に負けずに連続投稿です。

ちなみにマテリアルは出しません。理由は本編で

### 第三十話「墜ちる天使」

時は過ぎ、季節も過ぎていく。この数日中に、なのはは墜ちる。

「なのちゃん、今日はどどういう予定？」

「今日はね、調査に行くんだ」

やっぱりそう来るか……

「ねえなのは、最近無理しすぎだよ」

「にははは、大丈夫だよフェイトちゃん。ウィータちゃんもいるし」

トン

俺はなのはの頭を軽く突いた。

「ふえ？」

「……なのは、お前身体に限界が来ているのわかってるか？」

「そんなことないよ！私は元気だもん！」

「嘘こけ、この前の訓練でも訓練でスターライト使ったな？」

「……………」

なのはの表情が少し変わった。わかってんじゃねえか。

「今日は俺がお前の代わりで行く。お前は休んで……」

「なの……」

「え……?」

「大丈夫なの!私、私が行くつ!」

「あ、なのは!」

なのはそのまま走り去ってしまった。

「つたく、あの馬鹿……」

俺はため息をつくしかなかった。

「なの……大丈夫かな?」

「……はやて、ヴィータに連絡取れるか?」

「ふえ?うん、多分……」

「なら、後で連絡するって伝えてくれ。じゃな」

そう言って俺は先に家に帰ることにした。

家に帰ると、ヴィータから通信が入った。

『なんだよ迅、なんかよろうか？』

「ああ、今日なのはを前線に出すな」

『はあ！？何の話だ？』

「わかってんだろ、最近なのはの体が不調なのを」

『んなことねえよ、あいつはいつも調子がいいぜ』

「つたく、あいつは・・・」

「いいかヴィータ、あいつの身体はもうボロボロなんだ。この数年でな。だから管理局に申請してあいつを休ませろ。絶対だ。」

『あ、ああ・・・』

「確かに伝えたぞ、これ以上あいつが無理をすれば、あいつが死ぬ事だってありえるんだ」  
「そう言っただけで通信を切った。」

「迅、どうするつもりですか？」

「・・・どうだろうな」

「貴方の考えてることはわかりますよ？」  
「なのはに怪我をして欲しくない』」

「・・・」

「しかし、それでは原作に大きな支障もきたしてしまう」

その通りだ。さて、どうしたものか……

「にしても、出てきませんでしたね、マテリアル」

「そりゃそうだ、完璧にバグを抹消したんだからな」

会えないのが残念だが、あいつらは出てこない。でもなんだ？この、嫌な感じ……

side out

そこはなのはが向かう世界。そこには何か黒い影がうごめいていた。

「フクシュウヲ……フクシュウヲ……」

黒い何かは、ただそれだけを繰り返していた。

迅side

さて、と……原作介入は久しぶりだな。にしても……

「寒い」

「半袖だからでしょう」



「なんでついてきてるの？リインフォース」

「いいではないか、今のマスターはお前だぞ？」

そう、リインフォースは現在俺がマスターだ。というのも、防衛プログラムを分離したことで闇の書とのリンクがシグナムたち同様に切れ、はやてとのユニゾンができなくなったからだ。で、調節したら俺との適合率が高くなって、俺がリインフォースのマスターになっている。マスターになったときにシグナムが何故か怒っていたが、どうしたんだろうか。

「なんか納得いかない」

「何か言いました？」

「いや・・・」

「（エレナです、聞こえますか？）」

「（ん？聞こえてるぞ、どうした？）」

「（何か感じませんか？リインフォースも・・・）」

「そういえば、何か・・・？」

そんなことを言っていると、なのはが近くを飛んでいる。来るな・・・アンノウンが・・・

「リインフォース、お前は待機。で、エレナと何かあったら対応してくれ」

「わかった。気をつけてな」

俺は頷いてなのは達の方へと飛んだ。

なのはside

いつもどおりだった。いつもと同じように任務をして、帰る。そんな途中だった。未確認に襲われたのは……

「レイジングハート！」

『オーライ、マイマスター』

砲撃を撃とうとした瞬間だった。

ピシッ

あれれ？か、体が……

『マイマスター！』

「え!？」

その瞬間、私の身体を未確認の体が貫いた。

「がっ、は……」

「なのは!なのは!しっかりしろよおい!」

ヴィータちゃんの声が聞こえていた気がした。

迅side

ちっ、間に合わなかったか……そして二撃目が迫っていた。  
俺はそのままなのは庇った。

「ぐっあ……」

腕に突き刺さる。痛いじゃねーかコノ野郎……

「じ、迅！」

「だから言ったんだ。なのはを前線に出すなって」

「お前、それより血がっ……！」

あー……ボタボタ垂れてるよ……

「んなこといいんだよ、なのはがやべえ、お前は行け」

「お前はどうぞすんだよ！」

「俺に構うな。さっさと行け！リインフォース！」

「大丈夫か迅」

「ああ、なのはとヴィータを頼む」

「わかった、ヴィータ、行くぞ」

リインフォースが二人を抱きかかえた。

「放せ！放せよ！」

「黙って大人しくしろ！なのはの容態を悪化させたいのか！」

「っ……！」

ヴィータはリインフォースの言葉に黙り、大人しくなった。さてと……

「こいつら、おかしいな……」

ただのガジェットのはずなのに、なんとというか、闇の力を感じていた。

「フクシュウヲ……」

「あ？」

俺は腕を回復させながら声を聞く。そこにいたのは、かつて見たことのあるものだった。

「防衛プログラム……てめえか」

どうりで強化があったと思っただけ。



『ACCEL!』

エンジン音が鳴り響き、俺は仮面ライダーアクセルに変身した。

「さあっ！振り切るぜ……」

俺はエンジンブレードを持って駆け出した。

リインフォースside

「なのは！なのはっ！しっかりしろよ！おいっ！」

「落ちて着けヴィータ、出血が酷くなる」

私はヴィータをなだめ、迅に渡されていたエクスポーションを使って緊急処置を行った。

「これでいい。後は医療班を待つだけだ」

「リインフォースさん、ヴィータさん！」

「エレナさん」

「なのはさんは？」

「大丈夫だ、エクスポーションが聞いている」

それを聞くと、エレナは安心した顔になった。

「よかったわ……でも、ヴィータちゃん、あなた何で迅の言うことを聞かなかったの？」

「え？」

「私知ってるわよ？迅に『なのはは前線に出すな』って言われていたでしょう？」

「それはっ……それは、なのはが大丈夫だって……」

「やれやれ、この子は……」

エレナが呆れてため息をついていた。まあ、私も同じ気持ちだ。いくら強くても、限界というものはある。なのはは限界を乗り越しているのだから。それにしても……

「迅は、大丈夫だろうか？」

第三十話「墜ちる天使」（後書き）

秋風「今回は話またぎます」

迅「次回、第三十一話『独りぼっち』ドライブイグニション！」



第三十一話「独りぼっち」(A,S編最終回)(前書き)

今回でA S編は最終回です。

では本編どうぞ

### 第三十一話「独りぼっち」(A'S編最終回)

俺はアクセルになり、周りのガジェットを切り裂いていく。そしてエンジンメモリをエンジンブレードに挿入した。

『ENGINE!』

さらにトリガーを引く。

『ELECTRIC!』

エンジンブレードに電撃が帯びると、俺はそのままガジェットを引き裂いた。やはりたいしたことがない……

「よし、これなら……」

「ハアア！」

「何!？」

あ、あれは……

「アルティメットD!？」

MOVE大戦に出てきたあいつか!

「がああああ!」

っちい!

「はあっ！」

エンジンブレードで斬りかかるが、そのまま攻撃を止められ、紅い雷を食らった。そのまま吹き飛び、変身が解除された。

「ぐああっ！」

く、くそ……

『まったく、世話が焼けるわね……』

この声、アテナ？

『また呼び捨て？まあいいわ。緊急事態だもの、力を貸すわ』

声と共に、銀色のオーロラが現れた。そこにいたのは……

「左翔太郎、フィリップ!？」

「お前か、アテナちゃんが言ってた助けて欲しいって奴は……  
つて、ここ寒っ！」

「次元を超えられる力、実に興味深い。だが翔太郎、今は目の前を  
見たほうがよさそうだ」

「あいつはっ……なるほど、お前に力貸せって、こっぴつこと  
か」

正太郎がジョーカーメモリを取り出した。

「力を貸してくれるのか？」

「ああ、アテナちゃんに報酬たっぷりもらったからな」

「そうか・・・」

俺は言いながらデイケイドライバーを取り出した。フィリップもサイクロンメモリを取り出す。

「行くぜ、フィリップ。それとえーと、お前名前は？」

「迅。神谷迅だ」

「よし、行くぜ、フィリップ、迅！」

「ああ、翔太郎」

『CYCLONE』

「力借りるよ、二人とも！変身！」

『KAMEN RIDE DECADE！』

「よっしゃ、行くぜ！」

『JOKER！』

「」  
「」  
「変身！」

『CYCLONE! JOKER!』

俺が仮面ライダーディケイドになると、続けて翔太郎が仮面ライダーWに変身する。

「「「さあ、お前の罪を数えろ!」「」」

3人合わせてそれを言った。

「ガアアあああああああああ!?!?!?!?!?!」

それに対してか、アルティメットDは方向を上げ、駆け出してくる。

「行くぞ!」

「ああっ!」

俺とWは駆け出し、攻撃をする。だが、攻撃は弾かれて吹き飛ばされた。

「うわっ!」

「ぐあっ!」

「前に戦ったときよりも強い!」

フィリップの言うとおりで。映画で見たときより強い。やっぱり腐っても闇の書かよ。

「があっ!」

「うおっ!?!」

「翔太郎! うわっあ、がつ……」

俺は首を絞められ、宙に上げられる。

「ちいっ!」

『HEAT! METAL!』

「おらぁっ!」

Wがヒートメタルになり、アルティメットDの腕をメタルシャフトで殴った。その衝撃で俺は解放される。

「ごほっ、ごほっ!」

「がぁぁぁあ、あぁっ!」

今度は超高速で動き、俺達を翻弄する。

「うわっ!」

「ぐぁっ!」

くそ、やっぱり強い!

「おおっ!」

俺はライドブツカーをソードモードにして斬りかかる。それでも、まったく刃がたたない。

「があっ！」

「うわっ！」

『CYCLONE! JOKER!』

Wがもう一度サイクロンジョーカーになって殴りかかるが、それでも敵のほうが速い。そして、アルティメットDは胸部から紅い分子破壊光線を出され、俺達の周囲が爆発した。

「うわあああ！」

「ぐあああっ！」

俺達は吹き飛び、地面に転がる。くそ、こうなったら……！！

「デイケイド、切り札を……持っているんだろっ？当然」

フィリップ、やっぱりお前カンがいいよな！

「ああ、もちろんだ！ちょっとくすぐりたいぞ！」

「またあれかよ……本当にくすぐりたいんだぞ？あれ」

翔太郎、今緊急事態。OK？

「ま、いいぜー」

『FINAL FORM RIDE WダWダ (ダ) Wダブル!』

俺はそのままWの身体を半分に取り離す。そして・・・

『CYCLONE! CYCLONE!』

『JOKER! JOKER!』

仮面ライダーWサイクロンサイクロン、仮面ライダージョーカーが登場した。

「よし、行くぞっ!」

俺はファイナルアタックライドのカードを入れ、空中へ飛んだ。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEC  
ADE!』

「はああああっ!」

「たああああっ!」

「だああああっ!」

俺達の攻撃は見事にアルティメットDに直撃した。

「がああああああああああっ! フクシュウ、フクシュウ、フクシュウ・・・」

「あん? 何を復習だっ? 勉強好きかあいつは」

「翔太郎、復習じゃなくて復讐だ」



「・・・・・・・・わーってるよ」

ほんとかよ・・・・・・・・にしても、まだ倒れない・・・・・・・・？

「が、がああああああああああ！……！！……！！……！！……！！……！！」

アルティメットDもとい、闇の書の防衛プログラムは再び叫び、爆散して消えた。

「勝ったな・・・・・・・・」

二人の変身が解け、俺も変身を解いた。

「つふう・・・・・・・・」

「一件落着かぁ・・・・・・・・」

「ありがとう二人とも、お陰で助かった。」

「なに、いいっていいって」

「それにしても、君がアテナの話に聞いた戦士・・・・・・・・実際に興味深い」

フィリップの奴、本当に検索馬鹿なんだな。

「迅」！

「おっと、そろそろ俺達は行くぜ。ほら、フィリップ」

「しょうがない。今度会ったとき、詳しく話を聞かせてくれ」

「……ああ、もちろんだ。いつか、また会おう」

「ああ、じゃあな……」

こうして二人は元の『仮面ライダーW』の世界に帰っていった。

それからしばらくして、俺は病院へと向かった。

「フェイト、はやて、ユーノ」

「あ、迅」

「迅君！」

「迅、無事だったか」

三人が俺のところへ駆け寄ってくる。

「なのはは？」

「……目が覚めたけど、すごく落ち込んでる」

だろうな。

「怪我自体はどうだ？」

「リインフォースさんが使ったエクスポーションが効いてて、傷はそんなに深くない。でも、飛ぶのには相当なりハビリがいるって・・・」

ユーノが説明してくれる。体の怪我は軽いものの、その辺は避けられなかったか・・・

「わかった。三人はロビーに行ってる」

「うん」

「じゃあ、後で・・・」

「なのはをよろしく」

こうして三人はロビーへと向かった。俺はなのはの病室に足を踏み入れた。

「なのちゃん」

「じん、くん・・・」

原作までとは行かないけど、本当に包帯がぐるぐる巻きだなおい。

「具合は？」

「・・・お医者さんは、同員を辞めることを薦めるって」

そりゃそうだろうな。

「俺は言ったよな？お前の身体は、限界が来てるって……」

「……うん」

「そしてヴィータにも、お前を前線に出すなとっておいた。聞いたんじゃないか」

「……うん」

なのはの声が、次第に小さくなっていく。

「なんで、聞かなかった？」

「……ごめん、なさい」

なのははだんまりだ。まあ、そうだろうな……

「お前が思ってること当ててやるよ」

「え……？」

「お前は、魔法がとりえで、それが消えるとみんながいなくなると思った……」

「……！」

なのはの表情が一変した。驚きと恐怖……その二つがなのはを染めていく。

「また独りになると思ったか？」

「……めて」

「魔法がなかったら、誰もいなくなると思ったんだろっ？」

「……やめて」

「魔法は、お前の逃げ場所か？」

「やめてっー！」

なのはが声を荒げる。俺はそこで言葉を止めた。

「お願い、もう、これ以上私の中に入ってこないで！」

なのはが必死に叫ぶ。俺は思わず、その瞬間に手を振りかざした。

パアンツ！

「あ………」

「……なのは、お前は何を勘違いしてるんだよ」

「え………？」

「お前が独りになるのを嫌ってるのは、俺は誰よりも知ってる。」

「………」

「そして、お前がどれだけ頑張ってるかも」

ずっとこの7年見てきた、俺はなのはを。

「でも、お前が頑張ってる傷ついて……悲しむ奴がいるんじゃないか？」

「……………」

「俺は、一番悲しい」

俺の言葉に、なのはの目から涙がこぼれた。

「わ、たし……こわ、かった……」

「……………」

「まほ、う……つかえ、なかったら……じんくんが、フエイトちゃん達が、離れちゃいそうで……」

「……………」

「わだし、独りが、ごわぐって……こわ、くて！眠れないときも、あったの！」

なのはの目から、ボロボロと涙が流れる。俺が動くと、なのはが体をびくりとさせるが、俺は気にせず、ベッドに座ると、なのはを抱きしめた。

「あ、う………?」

「なのは、俺はな……お前が魔法なんて使えなくても、ずっと傍にいる」

「じん、くん……」

「俺は、お前を一人になんかさせない……」

「う、あ、ああ……」

なのはの涙が多くなる。俺は優しく、なのはの頭を撫でる。

「いっぱい泣いとけ、俺はここにいるぞ……なのちゃん」

「う、うわああああああん！ごめんなさいっ！ごめんなさいっ  
！」

それから数十分、なのはは泣きながら俺にごめんなさいと繰り返していた。

第三十一話「独りぼっち」(A、S編最終回)(後書き)

秋風「ということで、幼少編はこれで終わります」

迅「まじで?」

秋風「こっから飛んで中学3年生!」

迅「はやっ!」

秋風「そうじゃないと話が追いつかないんだって」

迅「そうなんだ」

秋風「ってことで、これで」

迅「次回、第三十二話『新たなるページ』ドライブイグニション!」



第三十二話「新たなるページ」(前書き)

はい、ということで中学生編です。中学三年に上がるまでに色々あります。

特にネギま！を知らない方は読んでからこの小説を読みましょう(笑) それでは本編スタート

### 第三十二話「新たなるページ」

なのはの事故から3年後・・・なのはは回復し、管理局へと復帰した。原作よりも少し早い復帰を果たしたなのは。なのはは俺と『二度と無茶はしない』と約束した。なので俺はなのはにファイアーエンプレム聖魔の光石に登場する聖杖『ラトナ』を使い、回復させた。そして4月・・・入学式のため、俺はなのはと学校までの道を歩く。

「今日から中学生だねー」

「そうだな、あんまり実感ねーけど」

正直中学校とか2回目だし、やってらんねーよ。本来の年齢だけならもう三十路だぞ・・・

「なのはー！迅ー！」

「フェイトちゃん！」

「フェイトか、おはよう」

「おはよう二人とも！今日から中学生だね！」

なんかテンション高いな、フェイトの奴・・・

「だって私、入学式っていうのは初めてだから」

そうか、こいつは小学校は編入だったからなあ・・・それにしても・・・

「眠い・・・入学式寝よう」

「駄目だよ迅君、入学式で寝ようとか考えたら駄目駄目！」

「いいだろう、昨日だって徹夜だったんだ・・・」

「もしかして、また？」

「またとはなんだ、またとは・・・」

「今日からどれくらい寝てないの？」

「ん・・・一週間？」

俺が言った瞬間、二人が驚く。

「なんだよ、二人とも・・・」

「それで眠いって当たり前だよ、体に悪いよ」

「しょうがないだろ、手がかりも掴まないといけないんだからな」

そう、俺は闇の書の防衛プログラムの残滓を探して、色々な管理世界と管理外世界を放浪し、探している。まあ、見つかったも雑魚敵のファンガイアやイマジンなんかなわけで、たいしたことはない。でも、その残滓がいるってことは、どこかに親玉が潜んでいるということになる。面倒だが、俺がやった以上責任はある。

「でも、無理は駄目だよ？」

「おはよ〜!」

「ん、はやて、アリサ、すずか……おはよ」

やばい、本格的に眠くなってきたな……

「なんや、迅君眠そうやな……」

「聞いてよはやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、迅君ってば一週間寝てないんだよ!」

「い、一週間って……いったいどうしたん?」

「追ってたよ、防衛プログラムの残滓」

「だからって一週間はきついでしょ!馬鹿じゃないの!?!」

「そつだよ、無理なんかしたら駄目だよ」

無理でもしなかったら被害出るだろうが……

「でも無理して倒れたら意味ないよ?私にそう言ったじゃない」

「へいへい、気をつけるよ」

言いながら、俺たちは学校へと歩いていった。

入学式のために体育館へ行く前に、俺達はクラス訳の表を見に行っ

た。

「え〜と、1年1組……」

「あっ！迅君と同じだ！」

「あたしもだ」

「っていつか、みんな1年1組じゃない」

「ほんまやね〜」

「またみんな一緒だね」

1年1組……この学校では、かなりの秀才クラスだ。まあ、実年齢が20代後半の人間に中学校の問題などちよるすぎるので、勉強だってお手の物だ。昔一度『答えを出す者』をテストに使ってみたが、使うまでもなかったのでやめにした。というか、それがなのはにバレて、O H A N A S H I を喰らったので、使えない。

「じゃあ下駄箱行こう」

つと、みんなで移動する。終始、男子生徒からの殺気が来ていたが、気のせいだろう。

「え〜と、私はここ」

言いながらなのはが開ける。すると、そこには大量の手紙が落ちてきた。

「にゃあああ!?!」

「きゃっ!なにこれ!」

「わわ、なんや?」

「もう、何よこれ!」

「わわっ!」

5人の所にあるのは全部ラブレターらしい。入学早々かよ……

「もう、困るのよね〜こっぴうの」

「大変だな、お前ら……」

言いながら俺も下駄箱を空ける。すると……

ドササツ!

俺のほうにも入ってた。

「おいおい、なんの冗談だよ……」

言いながら手紙をとると、なのはたちくらい美少女である少女の名や、女生徒会長の名前などが入った紙があった。

「迅、貸しなさい」

「え?」

アリサが俺が手にしていた紙の束をひったくった。そして杖を取り出した。おい、まさか……

「プラクテ ビギ・ナル オムネ・フランマンス ものみな焼き尽くす浄化の炎破壊の主  
ンクテイオーニエト・シグヌム・レゾルタタリトオマヌネ・エンヌイニミークム・エダット フランマ・ブルガ主ネムスエクスティ  
フラグランテイア・ルビカンス  
にして再生の徴よ我が手に宿りて敵を喰らえ。 『紅き焰』!!!」

紅き焰によって、俺のとなのはたちのラブレターが燃えた。

「アホかお前は！人がいないからってこんなところで魔法使っ  
なつて！」

「いいじゃない『誰も見てない』なら」

「はーっ、お前な……」

アリサとすずかもこの数年でまさかの魔法使いとなっていた。なのは  
はたちに劣るとしても、ネギま！の魔法先生くらいなら倒せるよう  
な実力者になつていた。誘拐犯に捕まればすぐに魔法でボコボコに  
するほどだ。こいつら頭もいから呪文もすぐに覚えることができる。  
ここで繰り返し言わせて貰うが、魔導士ではなく魔法使いであ  
る。っというか、さすがバーニングアリサだな。

「はーっ、お前に魔法教えなきゃ良かった」

「まあまあ」

「あ、もうすぐ時間だよ？体育館行かないと」

「そうだな、行くか」

こうして俺達は入学式へと向かうため、体育館へ行った。

体育館につくと、名前のあるところに座る。名前の順では、神谷なので力行だ。で、何故か知らんがあいいうえお順に並ぶ。たとえばア行はあいいうえおで縦に並ぶし、力行ならかきくけこで縦に並ぶ。となると俺は孤立するはずなのだが、俺のクラスにサ行がないので夕行が隣になる。そして……

「えへへ、迅君が隣だ」

「まじかよ……」

なのはが必然的に隣になった。

『これより中等部の入学式を始めます。起立……』

全員が立ち上がり、校長の話、来賓の話と続く。あー、ダリー……  
・座ってるから眠く……あ、だめだこりゃ……俺は意識を落とした。

なのは side

ふう、入学式長いなー……

「すー、すー……」

あらら、迅君寝ちゃった……やっぱり徹夜なんて駄目だよ……



コテン

「ふえ!？」

思わず声が出ちゃったけど、迅君が私のほうへもたれかかった。

「すー、すー……」

か、顔が近いよお……心臓ドキドキするし……にしても、寝顔可愛い

「よいしょ、っと」

私はちょっとだけ迅君の体制を変え、私の肩にちゃんと頭が来るようにしておいた。

「すー、すー……」

(えへへ、ちょっとうれいかも……)

周りからなんだかすごい睨まれてるけど、別に気にしない気にしない

迅side

「これで、入学式を終わります」

ん？終わったのか……って、なんかやわらかい？

「あ、おはよう迅君」

気がつくとなのはの肩に寄りかかって寝ていた。

「あ、悪いのは……」

「ううん、いいいいの」

周りから殺気がすごいけど、気にしないでおこづ……

入学式も終わり、放課後になった。

「ああー、眠い」

「さつき寝たじゃない」

「あんなの寝たうちに入らない……」

『迅、聞こえるか？』

「あ、悪いちょっと待って（どうしたリインフォース）」

『いや、理沙殿が今日はみんなで入学パーティをしたいらしい。それで家までみんなを連れてくるようにと』

（あいよー……）

めんどろうだけど、ま、いつか。

「みんな、今日はうちで入学記念のパーティーやるだよ、母さんが」

「本当に!？」

「嘘言つてどうするんだよ」

「じゃあ久しぶりに別荘だね」

「うちもシグナムたち呼んでこな」

「そうだな・・・んじゃ、6時にうちな」

「・・・・・・はい」

つてなわけで、みんなと別れて家に向かう。で、適当な公園で足を止めた。

「・・・・・・出て来いよ、いるんだろ？」

そこに現れたのは、黒い塊・・・

「いい加減消えてくれよ。なんでお前と何回も戦わなきゃいけないんだよ」

そこにいるのは闇の書の防衛プログラムの残滓だ・・・

「・・・・・・」

「いつもどおりだんまりか……だが、消えてもらっせ」

俺は周囲に結界を作り出し、ゼロを取り出した。

「ゼロ！」

『オーライマスター……合言葉は？』

「そうだな、合言葉は『白き一角獣』だ」

『オーライ、ユニコーンガンダムセットアップ』

俺の体がユニコーンガンダムになる。

「行くぞっ！」

俺はビームマグナムを撃ち放つ。防衛プログラムの残滓は変化し、もう何かも判別がつかない化け物になる。

「あれを防ぐか……ならば、ゼロ！」

『オーライ、デストロイモード！』

角が二つに分かれ、各部分がずれて紅い装甲が表れる。ユニコーンガンダムデストロイモードになると、そのままビームサーベルを引き抜いて斬りかかる。

「おおおおおっ！」

「……………！」

そのまま引き裂くが、それが分離してファンネルに変化した。くそつたれ……つとでも思ったか？

「行けっ！ファンネル！」

はっはっはっ！NT-Dニコータイプドライブが作動しているときはサイコミュ系のコントロールを奪えるのだよ！そのままファンネルはプログラム残滓にビームを撃ち、最終的に突っ込んで爆散する。

「……………！」

「とどめだ……消えろっ！」

ハイパー・バズーカを撃ち、プログラム残滓は爆発して消えた。

「これでよしっ」と

『今回初めて、向こうからこちらに攻撃して来ましたね』

「ああ、今までは俺が探して倒してたが……それにあの姿、多分生き残りの本体に余裕がなくなってきたんだろっな」

「なんだろうが来やがれ……俺の力で徹底的に破壊してやらあ……」

家に帰ると、すでに高町家、テストロツサ家、八神家、バニングス家（といってもアリサだけ）月村家（といってもすずか、忍、ノエル、ファリンだけ）が集合していた。

「ただいまー」

「お帰り、遅かったね」

「悪い悪い、ちょっと寄り道してた。んじゃ、行くところか」

俺達は轉移し、別荘へと入っていった。別荘に入ると、すでに母さんが支度を終え、アインズとエレナが皿を並べていた。

「ただいま母さん」

「おかえりなさい、迅。それに皆さん、いらっしやい」

「…………おじゃましまーす!」「…………」

色々差し入れも貰い、パーティーが始まった。みんなでわいわいと叫び食事をして、遊ぶ。こんな日がいっまでも続きますように……  
……そう思いながらも、俺はパーティーを楽しみ続けた。

### 第三十二話「新たなるページ」（後書き）

秋風「ということで中学編スタート！」

迅「なんとなくか、まだ防衛プログラムくだりか」

秋風「大丈夫×2敵にはオリジナルも登場するから」

迅「あ、そ」

秋風「んでもって、フラグも順調に立てていくのでお楽しみに！」

迅「次回、第三十三話『動き出す闇』ドライブイグニション！」

秋風「ちなみにアリサとすずかの始動キーも募集中！小説の感想、始動キー、始動キーの由来を明記して、どしどし送ってください！」

迅「応募待ってます！」

第三十三話「動き出した闇」(前書き)

さあー走りますー！走っちゃいますよー！



### 第三十三話「動き出した闇」

とある管理世界

俺はとにかくその世界を走り、それを追い詰める。森を抜け、海に出た。見つけたぜ、闇の書の防衛プログラム！

「さーて、鬼ごっこは終わりだ。エレナ、行くぞ！」

最近できるとわかった『あれ』試してみるか！そう思いながら構えを取る。エレナは両拳を固め、動作を行う。俺も右手を上へ上げ、左手を腰に持つてくる。そして俺とエレナはあの動作をしてこう叫んだ。

「変身っ！！」

俺の力によって『キングストーン』が体内に発生し、エレナも同様になる。俺達は光に包まれ、昭和と平成の間を戦ったライダーに変身した。

「俺は太陽の子、仮面ライダーBLACK RX！」

「仮面ライダーBLACK！・・・うう、恥ずかしい」

「うじうじするな！行くぞ！リボルケイン！」

俺はリボルケインを引き抜き、防衛プログラムに斬りかかる。

「・・・・・・・・！！」

「ライダーパンチッ！」

エレナも飛翔し、そのエネルギーを宿した拳で出てきた他の敵を殴りつける。

「……………！」

しばらく小競り合いが続くも、俺とエレナの攻撃によって敵は追っていた防衛プログラム以外破壊した。さて、これで最後だ……………

「行くぞBLACK！」

「ええRX」

互いに構えを取りながら頷き合い、飛翔する。

「ダブルキック！」

二人のキックがぶつかり、防衛プログラムは爆発を起こして消えた。俺は変身を解き、エレナも変身を解く。すると、体がぐらついた。やはりキングストーンを体内に一時的に宿したのがまずかったのか。

「ちっ……………」

「大丈夫ですか？迅」

「なんとかな……………」

やっぱりあれだ……………もう昭和ライダーはやめとこ……………いや、

ギリギリで平成か・・・まあどうでもいいや。

「帰るぞ・・・」

「そうですね・・・って、迅!？」

突然何か降り注ぐ。俺はエレナを抱えてバックステップを取り、何か飛んできた方向を見た。

「クツクツク・・・」

「誰だ？」

「初めまして」

服からして、局員か・・・っち、面倒だな

「何か用か？」

「君にお願いがありましたね」

お願い・・・？

「人に物を頼むときにはまず名乗る・・・大人の癖に常識がな  
ってねえな」

「これは失礼・・・私は紅くれなゐとでも名乗りましょうか」

・・・中二くせー名前・・・

「で、その紅とやらがなんの様だ」

「だから頼みごとをしに来たんですよ……」

「……なんだ？」

「ここで、死んでもらおう！」

突然、空中から矢が飛んできた。ちいっ！

「エレナ！」

「はい、これは……」

囲まれている、10、20……いやもつとか？

「お前局員じゃないな……」

「あつはっは！とんでもない、私は局員ですよ……上層部、といえはいいですか？」

上層部……面倒なのが来たな。あの脳みそどもの傘下か……

「ほう、上層部か。その上層部が何故俺達を狙う？」

「君が先ほど破壊した『闇の書』の防衛プログラム……それに私たちは興味がある」

「あのプログラムは俺が破壊したぞ、あれは残滓だ」

「そうですね・・・しかし、残滓があるのならまだ本体のプログラムはどこかにある可能性が高い・・・違いますか？」

確かにその通りだが・・・疑問があるな。

「何故、お前は闇の書を知っている？」

「さて、何故でしょう？」

「管理外世界で起きた事件で、しかも小規模なもの・・・アー  
スラ以外リークしているはずが・・・まさか？」

「ハッキングか・・・」

「つたく、面倒なことしやがって・・・」

「ご名答・・・まあ、積もる話は後にして・・・君たちには  
消えていただきます」

魔導士らしき男達が武器を構える。・・・仕方ない

「やるぞ、エレナ」

「ええ、どうやらそうでなくてはいけないようですね」

さて、RXになったからそう無茶はできないな・・・ゼロで乗り  
切る。

「ゼロ、行くぞ」

『オーライ、スタンバイレディ』

「エレナ、お前は好きに戦え」

「わかりました」

エレナもエックスバスターを構える。

「よし、行くぞっ！」

俺はZセイバーを持ち、一閃！

『ぐあああああああああ！……！！……！！』

周囲の魔導士達が吹き飛ぶ。

「エックスバスターっ！」

『ギャあああああああ！……！！……！！』

とんでもなく弱いな、こいつら……

「おい、この程度か？」

「……………っ！」

紅がデバイスを起動させる。ふん……

「シールドブーメラン！」

「何っ!？」

俺はシールドブローメランを投げつけ、デバイスを弾き飛ばす。

「チエックメイト」

「ぐっ……ふっふ……あっはっは!」

「何がおかしい？」

「私が逃げる策を持ってないとも？」

足元に魔法陣が引かれた。しまった……!

「さらば、少年」

そっぴい残し、紅は消えた。

「……つち」

「エレナ、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です……引き上げましょう」

こうして、俺達は地球へと戻った。

そして地球。家に帰ると、武装した局員が待ち構えていた。

「神谷迅だな……」

「なんだ？」

「次元犯罪者、神谷迅！貴様を逮捕する」

これが、俺の逃亡劇の始まりだった。



第三十三話「動き出した闇」(後書き)

秋風「今回はいけるところまで走ります」

迅「次回、第三十四話『逃亡者 神谷迅』ドライブイグニション！」

第三十四話「逃亡者 神谷迅」(前書き)

走るゝ 走るゝ 俺たちち

では本編どうぞ！

### 第三十四話「逃亡者 神谷迅」

「俺が次元犯罪者？」

「そつだ、局員殺害容疑！さらにはロストロギアの不正所持ともある！」

「おとなしく来て貰おう！」

「……はめられた！つくそ、RXになった反動で察知能力がなくなってたのか。」

「(エレナ……)」

「(はい)」

「(なのはたちを頼む……アインス！)」

「(わかっている！)」

瞬間、俺は局員達を殴って気絶させた。

「母さんを頼む、エレナ！」

「はいっ！」

そう言って、俺はアインスを連れて転移した。

なのはside

「ええっ！？迅君が指名手配!？」

『ええ、そうなのよ……もう武装局員が行ってしまったわ』

「そんな、どうして!？」

『信じられないけど、彼が局員を殺した……ということだけど』

リンディさんのいきなりの通信に、私たちは驚いていた。

「そんなの嘘だ！迅はそんなこと……」

『これを、見て欲しいの……』

映し出された別の映像には、迅君が剣で局員達を斬っていた。おびただしい血が流れ、局員達が倒れる。

「そ、そんな……」

『とにかく、貴女たちにも要請が来るわ……最悪、彼を捕まえることになる』

「……」

信じられなかった。迅君が、そんなことをする人だったなんて……  
……いつも笑ってくれてた迅君が、人を殺したなんて……

はやてside

信じられへん。迅君は、そんなことする人やない……何か、おかしい……

「(シグナムシャマル、……)」

「(はい、主はやて……)」

「(どうしました？はやてちゃん)」

「(アインスの魔力を追って、迅君を探してや……上手くすれば、事情が聞ける。シャマルは、エレナさんと理沙さんたちのところへ)」

「(わかりました)」

「(了解です、はやてちゃん)」

うちは二人に頼む。きっと、何か裏があるので、今回のこと……

迅side

俺は管理外世界に逃げ込み、ジャングルの洞窟に潜むことにした。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ！」

「大丈夫か？迅……」

「あんまり、大丈夫じゃねえな……」

変身して防衛プログラムを倒し、同員達をデバイスで非殺傷で倒し、強制転移で逃げる……そうとうな魔力を使っちゃった。

「迅、少し休め……今のお前では」

「駄目だ、転移の履歴を調べてすぐに追ってくる。多重転移で管理外世界に逃げないと……」

「だが、お前の体では……!」

「アインスでも、どこまで戦えるかわからない……母さんにはエレナがいるとして、厄介なのがいる」

「……なのは達だな」

そう、あいつらのことだ……管理局の命令でこちらに来てしまっただろう。

「とりあえず落ち着け、迅……そうだ」

リインフォースは思い立ったように、持っていたバッグから水を取り出した。

「これを飲め、落ち着くはずだ」

「……ふう、なんだ？これ」

「少し前に作った、安定を保つ薬だ」

「驚いたな、お前にそんな知識があつたんなんて」

俺が言うと、リインフォースは微笑む。

「お前を守ると決めてから、色々とやっているんだ」

「そうか……」

落ち着いたが、余計に考えられない……まず、落ち着いてみよう。

「まず、今回俺をはめたのは管理局の上層部………目的は闇の書の防衛プログラム……」

「すまない……」

「お前のせいじゃない、考えるのを続けよう………局員を傷つける………多分Zセイバーで斬ったことか。だが、非殺傷のはずだ………」

偽造か………ロストロギア所持は、多分俺の力を見てだな。

「よし、転移するぞ」

「大丈夫なのか？」

「ああ、転移！」

こうして、俺は多重転移を開始した。

Side out

そこは暗がりの一室……

「紅、どうかね？首尾は……」

男の一人が紅にたずねる。

「ええ、順調です……一級ロストロギアの力、必ずやわれらの手に」

「わかっているな？くれぐれも我々を感じられるな？」

「ええ、すべては多次元世界の支配のために……」

紅は笑う。それは純粹な気持ちでの笑みではない、欲望を秘めた、そんな笑い。

「では、失礼……」

何よりも深い闇は、動こうとしていた。

迅side

「すっかり夜だな、この世界は……」

「ああ、そうだな……少し、寒い」



確かにな……気温も低い……雪も降っている。

「アインス、これを着ろ」

「迅？だがお前が……」

「いい、着ている」

「あ、ありがとう……」

アインスは顔を紅くし、俺が手渡したコートを羽織った。

「ん？あそこ……洞窟だ。あそこで休むとしよう」

洞窟に入ると、すぐに火をつける。木はその辺の枝を魔力で浮遊させて、大量に持って来て乾かした。

「迅……」

「ん？」

「これからどうするんだ？」

これから……か

「とりあえず、防衛プログラムの本体を見つけて破壊しなければいけないし、上層部もなんとかしなければいけない……」

だが、打破策も見当たらないし……つと、眠いな

「もう休もうね、今日は体を酷使しすぎだ……」

「そうだな……ちょっと、休まない」と

そういうと、アインスが俺を引っ張り、膝に寝かせる。

「お、おい？」

「い、いいから寝ろっ！私が見張っておく！」

「あ、ああ……」

俺は目を閉じ、アインスの好意に甘えることにした。

アインス side

「……………」

勢いでやってしまったが、恥ずかしい……

「い、いや、何が恥ずかしい！今は誰もいない！二人っきりなんだ！この世界で！」

「……………」この世界で、二人きり『？考えた瞬間、顔が一気に熱くなった。』

「お、落ち着け……落ち着くんだ私……」

自分に言い聞かすものの、落ち着けないし、胸の鼓動は増すばかりだった。

「……………うう、私はどうしてこうなんだ」

迅に闇から助け出されてからというもの、私は迅を男として見るようになった。さまざまな迅の力によって、人でこそないものの、それに限りなく近い存在にもらったことには代わりがない。迅が笑えば胸がドキドキするし、なのはやシグナム、それに元主はやと仲良くしていると、ムツとしたり、心のどこかが痛んだ。私はいつの間にか、どこか普通の人間のようになっていた。

「……………私は、本当に闇から解放されたのだな」

良いながら私は迅の髪を撫でる。寝てる……………数年前は可愛らしいだけだったが、今は凛々しくたくましくなった。だが寝顔だけは、可愛いはまだ。

「こうして寝ている男が、私を救ってくれたとは考えられないな……………」

良いながら、私はまた迅の髪を撫でた。

「お休み迅、良い夢を……………」

私も目を閉じると、眠ることにした。

第三十四話「逃亡者 神谷迅」（後書き）

秋風「まだまだ行くぜー！」

迅「……次回、第三十五話『烈火との再会』ドライブイグニッション！」

第三十五話「烈火との再会」(前書き)

つ、つかれた・・・もうだめだ・・・

では本編どうぞ・・・

### 第三十五話「烈火との再会」

次の朝、俺達はまた転移をした。一時的に、ミッドチルダへと転移した。アインスはあたふたしている。当然だ。敵陣のど真ん中に飛び込んでいるのだから。

「だ、大丈夫なのか？ 迅……」

「ああ、この年齢詐称薬なら、お手の物さ」

俺は現在23歳位になっている。アインスは手配になっていないので大丈夫だが、俺は吹くなどを調節して自然公園で落ち着いている。俺は駅で買った新聞を広げた。

「これだな、ミッドチルダの新聞だ……」

そこに書かれていたのは以下の内容。

管理局員50人惨殺 13歳の少年指名手配

20歳未満なので名前は公表されないが、13歳の少年がロストロギアを不正所持した上、取り押さえようとした局員50人を惨殺し、上層部の一人にも怪我をさせた疑い。

管理局はこの少年に懸賞金を賭け、指名手配としている。単独で行動しており、魔力なども計り知れない化け物だと、怪我をした上層部の局員は語る。上層部の実力者に怪我を負わせ、50人の局員を皆殺しにするという13歳にして恐ろしい少年は現在逃走中である。

「完全な悪役だな、おい」

「どうする？余計に動きずらいぞ……」

まさかここまでとはな……

「防衛プログラムはまだ沈黙を守っている。そして俺は指名手配……逃げ回っていれば上層部が防衛プログラムを手に入れる……厄介だ」

いくらチートな力を持っていても、組織一つに世界が敵に回れば、厳しいな……

「状況はわかった……転移するぞ」

「待て……」

「「！？」」

誰もいなかったはずの公園……そこにはピンク色のポニーテイルの姿があった。

「将……」

「シグナムか……？」

「お前……神谷、か？」

「……ああ」

「無事でよかった。来てくれ神谷、そうすれば悪いようにはしない・

「・・・」

「・・・なるほどな」

「何者だ？お前」

「なんだと？私はシグナム！闇の書の守護騎士だろう！」

「なるほどな・・・」

アインス、お前も気がついたな。

「どうしたんだ？早く来い、早くしないと逃げられないだろう？」

「・・・いい加減芝居は寄せ、偽者野郎」

「何を言っている？私は・・・」

「お前がもし本物のシグナムなら・・・お前は俺のことを『迅』と呼んだ筈だ」

「それに、もはやお前は闇の書の守護騎士とは名乗らないだろう・・・」

「ふ、ふふふ・・・どうやら、ばれていたようだな・・・」

シグナムがありえないような笑みを作っていた。

「てめえ・・・何者だ」



「ふっ……名はない人は私を『血塗られた道化師』と呼ぶ」

「大層な名前だな……所詮、偽者だろうに」

「どつだろつな……」

「下がれ迅、私が倒す……」

言いながら、アインスが騎士甲冑を纏った。

「将の誇りを汚した愚か者……私が倒す」

「ほう、元闇の書か……面白い！」

互いが駆け出し、激しい攻防が繰り広げられる。これは……！？

「うぐっ！」

「アインス！」

アインスが吹き飛ばされた。俺は何とかキャッチする。なんだあの動き……あれじゃあまるで……

「気がついたか？私の稀少技能『ハイフェクト・コピー完全なる複写』だ」

完全なる複写……だと？

「私が複写すれば、その者の力を得ることができる！」

なるほど、だから道化師ってわけか……

「アインス、下がれ」

「何!?!」

「今のお前はまだ万全じゃないんだ……休め」

「しかし、お前だってそれは……」

確かに、まだ万全じゃない……. . . だけど

「お前がシグナムあいつを傷つけるところなんて見たくないし、シグナムあいつに傷つけられるお前を、俺は見たくない……. . .」

「迅……. . .」

さて、大見得切ったけど力を使うのは避けたいところだ……. . . . .  
使いすぎれば管理局に気づかれる。なら、これで良くしかない……. . .  
・俺はクラウドが使うバスターソードを取り出した。  
「ほう、烈火の将と謡われた者で剣に挑むと?」

「お前が烈火の将? 笑わせるなよ、屑野郎」

言っ、俺は駆け出し、バスターソードを振る。

「はあっ!」

「甘いっ!」

「ちいっ!」

体がまだ鈍ってるのか……身体能力が下がってやがる……  
だが！

「負けるかよっ！」

凶斬りを発動し、敵に斬りかかるが、最後の文字のところでは止められる。

「紫電一閃」

「何!？」

俺は紫電一閃を喰らって飛ばされる。なんとか遠くまで飛ばずに着地するが、まずいな。よほどキングストーンを一時的に体内に取り込んだのがまずかったらしい。

「終わりだ……」

レヴァンティンが連結刃になった。飛竜一閃か……避けたらア  
インスに当たる。まずいな……

「消える」

連結刃が振り下ろされた。くっ……!!

「紫電一閃！」

「ぐあっ！」

突然敵が吹き飛ばされた。今の技は……

「あれは……」

そこにいたのはピンク色のポニーテールに、薄紫の騎士甲冑……  
そしてその手にあるのはレヴァンティン……

「無事か、迅……アインス」

「シグナム……お前どうして？」

「主はやてにお前を探すように頼まれていた。どうやら、私の偽者らしいな……」

「ぐっ……まさか本物が来るとは」

シグナムが剣を構える。

「来い、偽者よ……格の違いを見せてやるっ」

「つく……この、呪われた騎士があ！」

血塗られた道化師が斬りかかる。だがシグナムはそれに関わらず剣を全て受け流し、血塗られた道化師を斬り飛ばした。

「がああっ！」

「この程度か、話にならん。これで私を語るな、下郎」

「つく、このお！調子に乗りやがってえ！」

レヴァンティンがボーゲンフォルムになる。まずい、あの野朗こいで撃つ気か!?

「シグナムっ!」

「安心しろ、私は負けん……レヴァンティン!」

『ボーゲンフォルム』

「消えろおっ!」

「駆けよ、隼!」

『シュツルムファルケン!』

互いの矢が発射され、光が巻き起こった。そして……

「ばか、な……」

血の道化師は変身が解け、その場に倒れ伏した。

「勝った……」

アインスがため息をついた。だが、ことはこれで終わりではなかった。シグナムが俺にレヴァンティンを向けた。

「……………」

「将!何のつもりだ!」

「迅、お前には逮捕状が出ている」

「……………ああ、知ってる」

「お前が、あれをやったのか？」

シグナムの問いに、俺はこう返した。

「俺が、やったと思うか？」

ここでそうだと言われて斬られても、文句は言えない。なにせ、何も言わずに逃げたんだからな。俺に、仲間を倒そうなどという度胸はない。俺は目を瞑った。

「……………迅」

「……………お前が正義を貫くなら、俺に失望したのなら、斬れよ」

言った瞬間、俺の体が温かくなった。目を開けると、シグナムが抱きついていていた。

「そんなこと……………できるわけがないだろう」

「シグ、ナム？」

「私たちを救い、主はやてを救った……………そんなお前が、人殺しなどするはずがない。仮にそうだとしても、お前を、斬れるわけがない……………」

シグナムは震えていた。

「シグナム？」

「よかった……お前が、無事で……本当に」

「シグナム……泣いているのか？」

あのシグナムが……烈火の将のシグナムが、涙を流していた。

「心配……したのだぞ」

「ごめんシグナム……お前にも、みんなにも……心配かけた」

「いいんだ、お前が無事なら、主はやてや高町、テストロッサたちも喜ぶだろう」

「……将、いつまで迅に抱きついているのだ」

「む、なんだアインス、何が悪い」

「悪いに決まっている！迅は私のマスターだぞ！」

アインスがいうと、シグナムは離れ、笑った。

「ふっ、それは関係なかつ。悔しかったら私をどけてするのだな」

「いいだろう、受けて立ってやる！」

「お、おいおい……」

「っと、すまない。とりあえず安全なところ行こう。時期に管理局が来る」

「……シグナム、お前」

俺が言いかけると、シグナムに人差し指で口を押さえられた。

「何も言つな迅……今は、お前の話も聞きたい。そしてなににより……私はお前の味方だ」

「……そっか、ありがとうシグナム」

こうして、俺達3人はミッドチルダから転移した。



### 第三十五話「烈火との再会」(後書き)

秋風「ふつ、燃え尽きたぜ……真っ白にな」

迅「明日のジョーか……ってか、今回シグナムとアインズすごいな」

秋風「三人娘のフラグはいつでも強化できるからな」

迅「まじか……」

秋風「にしても、感想来ないな……」

迅「まあ、あれだけ更新してないならな」

秋風「感想どしどし待ってます!」

迅「次回、第三十六話『本当の気持ち』ドライブイグニッション!」

第三十六話「それぞれの想い」(前書き)

燃え尽きましたが、ちょっと歩きましょう・・・

### 第三十六話「それぞれの想い」

管理外世界へと逃げた俺達3人。俺はこのいきさつをシグナムに話した。

「……………なるほどな」

「信じてくれるのか？」

「信じないわけがなかるう……………管理局にも、やはりそういう闇はある」

「問題は、防衛プログラムの本体の場所を知らないこと……………それに、なんとかして俺の無実を証明しなければいけないこと……………」

「どちらも非常に難しい問題だ……………」

「それに敵も多い……………現状では、お前を捕らえるために管理局が躍起になって捜査している。私は主はやての操作で休暇中の扱いでお前を探したのだからな」

「だが将、現状でこの戦力では大部隊が来ればやられるぞ」

「そうだな、魔力ランクEXがいても、大部隊が来れば……………」

「いや、大部隊はさほど問題じゃない」

「そう、問題はまだ別にある。」

「問題は、なのはたちだ……」

「高町たちが？」

俺の考えが正しければ、管理局は間違いなく最前線になのはたちを送ってくるはずだ。

「……なるほど、攻撃できんな」

「だろう……?」

まったく、面倒になったものだ。頼むから来てほしくないものだ。にしても、エレナたちは大丈夫かな……

エレナ side

「あの、エレナさん？迅が、指名手配って……」

「ええ、時空管理局の上層部にはめられたんです。迅は逃げられるでしょうが、理沙様は私が守ります」

「迅……」

一時的に別荘へと逃げた私は、理沙様にことのあらましを説明した。すると、別荘にシヤマルさんが来た。つく、もう彼女達にも……

「待って、エレナさん、私は管理局の命令では動いてないわ」

「え!？」

なら、何故ここに……

「実はね……?」

私はシャマルさんから事情を聞きました。

「なるほど……さすがはやてさんですね」

「ええ、私もびっくりしてます。それで、貴方達はこれから?」

「とりあえず、理沙様をどこにかくまわなければなりません。私は、迅を追わないと」

「……わかったわ。何とかしてみるわ」

迅、どうか無事で……

迅side

「神谷迅!おとなしく投降しろ!」

現在逃亡中……面倒だな

「ラスト・テイル マイ・マジック・スキル マギステル 契約に  
ライオン・デアコネットまき糸: 夢ロゴス エピゲネーテラ田カスカタルセオ由糸ネー・  
従い我に従え炎の霸王!! 来たれ浄化の炎燃え盛る 大剣 ほと  
サントーン・ ビヨール・カイ・テイオン ハ・エペワビヨン・ハマルトートウス エイス・クインタナトウ  
ばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄罪ありし者を 死の塵に  
イラニア・フロゴース 燃える天空!」

燃える天空によって、大半の魔導士達が吹っ飛ぶ。たーまーやーってか？

「いつ見ても規格外だな……………」

「そうか？なのはのスターライトブレイカーと変わらねーよ」

「高町は止まって撃つだろう。お前は走りながら面倒くさそうに唱えていたではないか」

ん…………まあぶっちゃけ長いからやなんだよね、詠唱呪文。

「退却だ！退却しろお！」

魔導士たちが逃げてく。おー、おー、仲間放置かよ…………

「一応聞くが、奴らは生きているのか？」

「ああ、確実に。本来なら殺傷だけど、俺が非殺傷に変えたから本当は殺してやりたいけど、本当に人殺しになるから、そこは我慢だな。」

「さーて、このまま逃亡だな、転移」

こうして、俺はその世界から逃げ出した。

なのはside

「あ、あれ……？私……」

いつの間にか、私はアースラで寝ていた。私、どうしたんだっけ？

「あ、なのは……気がついた？」

「あ、フェイトちゃん……私……」

「倒れたんだよ、迅の話聞いてから」

「あ……」

迅君の名前を聞いて思い出す。そうだ、迅君が殺人犯になって、私は信じられなくて倒れちゃって……

「そうだ、迅君は……」

「今、アースラで追ってる……話だと、管理世界21番で発見して、魔法で全滅したって」

「え……」

まさか、また……

「大丈夫、みんなちょっと火傷したくらいだって」

「そ、そっか……」

少し安心した……でも、あの時の映像は……

「なのは、なのはは休んでいて。とりあえず私が行くか……」

「駄目、私も行く……私も、確かめたいから……」

「……うん」

私はブリッジへと歩き出した。

ブリッジに着くと、リンディさん、クロノ君、プレシアさん、はやてちゃんたちが待っていた。

「……では、神谷迅に対しての上層部からの通達を伝えます。」

周りに張り詰めた空気が流れる。そしてリンディさんが発表した。

「アースラ所属スタッフ一同は、神谷迅を捕獲、あるいは抹殺を命ずる」

抹殺……？

「そ、そんな……」

「私たちだからこそ……彼を説得できると上は踏んだんでしようね」

「艦長！神谷迅の魔力を捕らえたと他の部隊から連絡が来ました！」

「了解、ただちに現場に向かってください」

私は、どうすればいいの……？



迅side

「……………ん、しつこいなあ」

ここはとある管理世界……美しい自然が見えるけど、俺が逃げて、奴らが魔法を使うからその自然が消えていく。いい迷惑だぜ……環境破壊だ。

『マスターが逃げるからだと思えますけど』

「だって俺まだ何もしてないじゃん、俺無罪。オーケー？」

『……………意見を出した私が馬鹿でした』

おいおい、そりゃないぜ相棒。

『そういえば大丈夫でしょうか、シグナムさんとリインフォースさんは……………』

「大丈夫大丈夫、何かあったら連絡来るでしょ。それにデバイスが取られてもあいつらにはあれを渡したから、心配ないって」

そう、シグナムとリインフォースには一旦引いてもらった。というのも姿を見せていないとはいえ、一緒にいるところを見られたら確実にあいつらまで犯罪者になる。それにはやてたちに話も伝えていないので、それがまずい。

「さーて、この辺でぶつとばすかあ……………」

『合言葉は？』

「合言葉は『革命の天使』だ……」

『オーライ、ウイングガンダムゼロver E.W。スタンバイレディ』

俺の体を白い羽が包み込み、ツインバスターライフルを手に、空中に俺、地上に魔導士たちがいる。俺はツインバスターライフルを構えた。

「警告する……絶対に敗れない防御魔法を張れ……死にたくなければな」

『出力70%に到達……発射スタンバイ……』

「……発射」

俺はトリガーを引き、ツインバスターライフルが発射された。

『うわあああああああ！』

とりあえず殲滅終了。100はいたであろう魔導士たちを倒した。もちろん殺していない。そして、俺の見える視線に船が現れた。

「……あれは、アースラ」

来たな……

「迅君！」

俺の前に、一番のジョーカーが登場した。

第三十六話「それぞれの想い」（後書き）

秋風「今回も話をまたぎます」

迅「次回、第三十七話『世界の真実』ドライブイグニション！」

### 第三十七話「世界の真実」(前書き)

なんだか蒼天シリーズホツポリだします。近日中に更新しないと・・・最新話は昨日更新したので良かったらどうぞ・・・

では本編スタート

### 第三十七話「世界の真実」

「迅君！」

「……なのは、か」

俺はツインバスターライフルを降ろしながら、なのはを見た。

「迅君……どうして？どうして、管理局の人達を……？」

こいつ、何をさせられたかは知らんが、俺の逮捕の理由を鵜呑みにしちまってるな。

「何の話だ？」

「どうして、管理局の人達を殺したの……？」

は？何を言ってるんだこいつ……

「俺が殺しただと？」

「見たよ……迅君が、管理局の人達を……剣で斬っているの……お願い、お話を聞かせて？そうすればきっと……」

O H A N A S H I ですか……にしてもZセイバーのことか？だが殺した覚えはない……なるほど、話が読めたぜ。

「いいだろう。なら聞くぞなのは……お前は、俺が殺したと思うのか？」

「……………だって、映像が」

「そうじゃない、お前自身、本当に俺がやったと思っているのかと聞いている」

俺の言葉に、なのは押し黙った。闇を知らないのはならば、無理はない。だがはつきりしたのは……………

「……………所詮、俺はなのにとってその程度の存在か」

「違うよ！迅君は……………迅君は私の……………」

「なら、何故一言目が俺に何故殺したと聞いた？」

「っ！」

もう時間もない……………こいつと話しててもラチがあかない。

「もう時間切れだ……………そんなに俺が殺人犯だということならこう言ってやろう……………高町なのは、『お前殺す』」

俺はビームサーベルを引き抜き、なのはに突きつける。

「じん、くん……………」

「行くぞっ！」

俺は空を蹴り、なのはに斬りかかった。

「レイジングハートっ！」

『プロテクション』

ビームサーベルが激突し、激しい光が巻き起こる。

「アクセル……」

つち、この距離では……！

「シューッ！」

俺は羽で防御し、距離を取った。

「バスターライフルっ……！」

俺は片方のバスターライフルを構えて撃ち放つ。

「きゃあっ!？」

「……止めだ」

「レイジングハート！」

『ロードカートリッジ!』

く、最大砲撃が来るか……

「ゼロ……パワー出力最大、一気に行くぞ」



『了解……ツインバスターライフル充電』

「デイバイイン……」

『ライフル充電100%』

「バスターアアア！」

「発射っ！」

互いの攻撃がぶつかり合い、激しい光が巻き起こった。

フェイス side

なのはが確かめたいと言って一人で出てしまった。そしてなのはと迅は戦闘を始めた。なのはは多分、精神が不安定すぎる……なのはは管理局は正しいのだと信じ込まされている。だからこそ、あんなにも悩んでいるのかもしれない……

『デイバインバスターアアア！』

なのはと迅が光に包まれた。そして……なのはが墜落して海に落ちた。

「なのはっ！」

私はすぐさまアースラから出撃して、海から拾い上げた。海から拾い上げるとき、迅も一緒になのはを掴んでいた。

「……………迅」

「次はフェイトか」

「迅、私は信じるよ……………迅は、あんなことしない」

私が言うと、迅は武装を解除していた。

「……………すまないな、フェイト。なのはを頼む」

「うん……………まかせて」

「今は、話をするわけにはいかない……………聞きたいなら、俺を捕まえる（エレナに話を聞け）」

迅が言葉と念話を同時にしてきた。

「……………本当に、戦うしかないの？（やっぱり、何か事情があるんだね？）」

「そうだ……………（そうだ。管理局の上層部に気をつける。あいつらが今回の黒幕だ）」

「なら、私は貴方を倒す……………（わかった、なのはにも伝えておく）」

私が最後の念話を送ると、迅はただ頷き、転移して消えていった。迅、気をつけてね。

なのはside

「・・・・・・・・・・」

目が覚めると、またアースラの医務室だった。

「なのはちゃん、目が覚めた？」

「シャル先生・・・・・・・・」

「迅君、上手く手加減したわね。無傷よ」

「え・・・・・・・・？」

嘘、だって迅君は私を・・・・・・・・

「詳しい話は、エレナさんがしてくれるわ。行きましょう」

私はシャル先生に連れられ、ミーティングルームへと向かった。

ミーティングルームへ向かうと、アースラのみんながいた。いつの間にか、アインスさんとシグナムさんもいた。

「そろいましたね・・・・・・・・では、お話ししよう」

エレナさんが口を開き、全員が息を呑む。結界がある？

「まず、今回の迅のことですが・・・・・・・・あれは上層部の仕業です」

「上層部ですって？」

「……はい、上層部が闇の書の防衛プログラムの力を手に入れようとしています」

え？え？どういう、こと……

「以前にも少し話しましたが、迅は防衛プログラムの残滓を追っていました。力を手に入れようとする上層部は、迅の存在が邪魔になつたのでしよう」

でも……

「でも、あの映像は……」

「あれは上層部が作った偽造品です。先ほど見ましたが、よくできています。普通では見破れないでしょう」

じゃあ、私……

なんで殺したの？

なんて、酷いことを……

「なのは……」

フェイトちゃんが私の手を握ってくれる。

「なのはさん」

「あ、はい……」

「あなたは、迅を信じていますか？」

私は……私は信じてる……でも……

「先ほど、迅から通信で聞きました。管理局の闇をあまり知らないあなたに、迅がきつい言葉を言ったと」

「わ、私……」

「大丈夫、迅はわかっていました……だから、あんなことを言っただけです」

そのとき、迅君の言葉が脳裏をよぎる。

俺はお前にとって、その程度の存在だったわけだ……

「あ、ああ……」

「大丈夫、彼は貴方を信じていました」

「私、謝らなきゃ……私……」

私は、なんて馬鹿なことをしたんだろう……

エレスサイド

意外なところを、原作ブレイクしていたものですね。管理局の闇を

知らないのはさんですか……それにしても、不可解です。なぜこれほど強力な偽者の映像ができているのか……私でさえ、始めは驚いたのですから。でも問題は……

「リンディさん、クロノ君……貴方達はこれからどうしますか？」

「……………」

だんまりの二人。まあ、こんなことを知らされれば驚くのは当たり前ですよね。最初話したときは信じなかったので、ビデオの偽証を証明してから信じたのですから。

「エレナさん、私……迅君を助けてたいです」

「なのはさん……………」

もう立ち直りましたか……さすがは不屈のエースでしょうか？

「私、迅君に何もしてあげられないで……酷い事言っ……  
……私、迅君を助けなきゃ」

「私も、迅を助けてい……私を助けてくれた迅を、今度は私が」

「うちもや……うちを、そしてうちの家族を……助けてくれた迅君を、助けたあげな」

皆さん……

「僕は反対だ……そうなれば、君たちも反逆者だぞ？」

「この子は歳をとってもKYですね……」

「私は構わないわ。管理局に恨みはあっても、恩はないもの」

「プレシア母さん……」

「それに、あの子には色々と借りもあるしね」

「我らも戦うぞ、管理局の闇を暴かなければ、先へは進めん」

あとは、リンディさんですが……

「リンディさん、いかがですか？あなたは不当な命令に操られるか、それとも一歩前へ出て、世界の真実を暴くか……」

「私は正直、エレナさんの話を信じてはいませんでした……でも、彼は、人殺しをするような人ではありません。さらに言えば、闇の書の防衛プログラムを懸命に探し続けた方です。ここで、捕まらせるわけには行きません……」

「リンディさん……」

「現時点を持って、私たちはすぐに迅君を追い、迅君たちの味方になります」

『はいっ！』

そこにいた全員が、リンディさんの言葉に頷いた。

### 第三十七話「世界の真実」(後書き)

秋風「ということ、真実に近づく話でした」

迅「どの辺が真実だよ」

ハヤト「は、な、せ！」

秋風「おっと、忘れてたぜ。久しぶり」

迅「ティアナとのフラグはいいが、今までうじうじしゃがって」

エレナ「まあまあ、ハヤト君もわざとではないんですし」

迅「まあな……」

ハヤト「エレナさん！ やっさしー！」

エレナ「きゃあああ！？どこ触ってるんですか！」

ハヤト「えーと、胸？」

エレナ「〜！」 声にならない叫び

『FINAL ATTACK RIDE D I D I D I E  
ND!』

ハヤト「ギャあああああああ……!……!……!……!……!……!」



迅「おい、やりすぎじゃない？」

エレナ「知りません！」

秋風「おーい、ハヤト。生きてるか？」

ハヤト「我が人生に一遍のくい……あり」

迅「あるのかよ！」

秋風「まあ、ハヤトだしな」

迅「おっと、そろそろ時間か」

エレナ「もう、帰ってください！」

ハヤト「じゃあもう一回胸を……」

エレナ「けだもの！」

スパアン！

ハヤト「ぎゃああ！気持ち良い！」

秋風「変態だな。まあいい……コイツの首にティアアナが使うハヤト専用の鞭と、祝いの品を少々と……」

迅「ではなのはさん、ごうれいのあれを」

なのは「オツケ〜！蒼天シリーズから来たからネオ・スターライト

ブレイカーだよ」

ハヤト「いやー!」

なのは「ブレイカアアア!」

秋風「ばいばい」

迅「またこいよー」

ハヤト「エレナさんの胸のためなら!」

エレナ「二度と来ないでくださいっ!」

ハヤト・ロツクウエル 登場作品 魔法少女リリカルなのはStrikerSとある新人の日常

蒼天シリーズ第3部の感想を参照のこと

とうとうティアナとのフラグがたち、終盤へ向かっています。

迅「次回、第三十八話『闇の書防衛プログラムの正体』ドライブレグニション!」

ラモン先生、いかがでしたでしょうか?

祝 1,000,000万ヒット！ 新募集発表！（前書き）

皆様のお陰で1000万ヒットとなりました。これからもよろしくお  
願いします

祝 1,000,000万ヒット！ 新募集発表！

秋風「100万ヒットお！」

迅「まじかああ！」

秋風「こんな、こんな駄目小説が、とうとう100万ヒットだあ！」

迅「見てくれている人ありがとう！」

秋風「にしても、今回はすごいぞ！一日に5000とかだぞ！」

迅「あ、ありえねえ」

秋風「でだな、今回新たに募集するぞ！」

迅「何を？」

秋風「以下の内容だ！」

- ・アリサ、すずかの魔法始動キー
- ・新たに出るであろうエレナのデバイスの名前、能力、形態
- ・フラグ

秋風「以下の3つです！」

迅「応募するときは、必ず小説の感想を明記してくれ！」

秋風「採用されればそのまま小説に登場します！」

迅「どしどし応募してくれ！」

秋風「さてさて、このまま戦い、ちよつと休みの後、とうとうネギ魔の世界へ！」

迅「わからない人のためにも、ちゃんと解説をまじえるぞ！」

秋風「さらにさらに！StrikersとVividにも行くのでご安心を！」

迅「おい、Forceは？」

秋風「俺、あれあんまり好きじゃない」

迅「なんでさ」

秋風「だった魔法戦記なんだもん。それにあれ、ブックオフに大量にあつたぞ」

迅「そんな人気ないのか？」

秋風「わかんない」

迅「まあ、それはさておき、前回のようにハヤトが登場しましたが、この小説でも感想に出たい人大募集です！」

秋風「もし出たい場合は感想、もしくはメッセージへ！」

迅「さてさて、ここで時間ですので、次回をお楽しみに！」

秋風「そして最後に！」

迅「この100万というスコアを心から感謝し」

エレナ「これからも精進してまいります」

アテナ「さまざまな疑問や突込みどころ……沢山あるとも思います！」

迅「どうかこれからも温かい目で見守って欲しいです！」

一同「それではっ！！」

第三十八話「紅の正体、クライマックスな戦い！」（前書き）

大学内から更新です！

### 第三十八話「紅の正体、クライマックスな戦い！」

Side out

そこは暗がりの一室。そこに紅はいた。

「紅、我々に知らせるべきこととは何かね？」

そこにいるのは上層部の人間……実質上、迅を陥れた人間たちだ。いや、正確には陥れることを指摘され、実行した人物たち。

「実はですね、皆様にお伝えすることがありまして……」

紅はめがねを吊り上げながら、静かに語りだす。

「伝えることならば、モニターで話せばよかるう」

「いえいえ、実を言えば闇の書の防衛プログラムの発見の報告をね……」

「ほう！見つけたのか！どこにある！」

一人の男が叫ぶ。紅は目を閉じ笑い出す。

「ふっふっふ……もう、目の前にいるじゃないですか」

「何？」

「どつという意味だ？」



「こういう意味ですよ、上層部のみなさん」

紅の体が変わった。体が黒く染まった。

「なっ！」

「私自身、私が、闇の書プログラムの核の残滓なのですよ」

紅の体が元に戻る。だが、上層部は慌てていた。

「ば、馬鹿な！お前は10年以上この上層部に仕えていたではないか！」

「本当にそうでしょうか？」

「な、何！？」

紅は薄気味悪い笑みを出した。

「私はつい先日、あなた達上層部の中に一角として紛れ込んだのですよ」

そう、簡単な話だった。上層部の人間たちに『紅が10年以上上層部に忠誠を誓っている』と記憶を植えつける。もっと簡単に言えば『管理局に自分を認識させる』というものだ。

「な、なぜわたちにそんなことを……」

「簡単ですよ、あなた達のように欲のくらむ人間なら、動かしやすい

い。そうすれば奴を排除するのも楽になる……………」

そう、つまりはすべて決まっていたこと……………」

「あなたたちは私を利用した気でいたのでしょうか……………逆ですよ、あなたたちを利用してたのは私だったんですよ」

紅が言った瞬間、鈍い音がした。そして一人の上層部の男が倒れた。おびただしい血を交えて。その後ろにいるのは黒い何か。いや、迅がいたなら驚くであろうその正体……………」

「ご苦労、ダークデイケイド、そしてダークライダーの諸君」

「……………つもらん」

「ひ、ひい！」

男たち数十人は驚きの悲鳴を上げる。

「さて、上層部の皆さん、あなたたちにはもう用はないし、役もありません……………この世界という名の舞台の壇上から、降りていただきますしよう」

「た、たすけ……………」

「さようなら」

紅の言葉と共に、上層部たちの悲鳴と、血の渋きが上がった。そして紅が呟く。

「さあ始めよう……復讐への鎮魂歌を」

迅side

「……ちい、ザゲルガあ！」

俺は手からザゲルガを放ち、局員たちを倒す。実を言えば、もう詠唱をするほどの余裕がない。大部隊が3大隊ほど迫っていたからだ。

「……完璧に時間がないな」

ここで千の雷でもぶつけてやろうかと思ったけど、多分無理だな……詠唱まで時間かかる。

「これを使うか……？」

俺はライドブツカーから『ALL RIDERS』というカメンライドカードを取り出した。これを使えば、おそらくライダーたちが時間を稼いでくれるので詠唱魔法も楽になる。

「いや、だが……これは今使うべきじゃない」

たかが大部隊だ。乗り切る。

「ゼロ、力を貸してくれるか？少し、お前に無理をかける」

『もちろんですマスター。そのために私はいるのですから』

「つくづく、俺が前世で思い描いたとおりのデバイスだよ、お前は」

ゼロを構え、技を撃ち放つ。

「消え去れ！」

『裂光波』

オメガの力、裂光波を撃ち放つ。それによって、大部隊が吹き飛んでいく。

「次だっ……はあっ！」

『アークブレイド』

斬撃波が走る。さらに俺は駆け出し、全力で敵を切り伏せる。

「おおおおおおおっ！」

『チャージセイバー』

次第にゼロにヒビが入る。大技ばかり繰り出したツケが回ってきたらしい。

「ゼロ、もういい……ありがとう」

『まだいけます、マスター……後一撃、やらせてください』

「だめだ、お前の負担が大きい。オメガの技は本来強化をしてから使う予定だった。それくらいお前が一番わかっているだろう」

『マスター……』

「俺は、お前をここで失いたくない」

転生してから、初めて得た相棒。だからこそ、失いたくない。

「後は、俺がなんとかする」

俺はベルトを出現させる。あいつらはいないが、何とかなるだろ。俺はポーズを取る。

「変身！」

『SWORD FORM』

オーラーアーマーが俺の体を包みこみ、赤い電仮面が俺の頭に現れる。そしてお決まりのポーズを取った。

「俺、参上！」

どうやら、チートだからイマジンはいらぬ……

『おい、なんだテメエ！』

どこからか声が聞こえてきた……は？

『良太郎かと思ったら、誰だお前！』

「お前、モモタロス？」

まさか、電王のベルトと連動してモモタロスが……？チートの能力も困りものだな。

『なんで俺を知ってんだよ！』

いや、一回会っただろ。

「俺だ、士の代わりにディケイドになつてた……」

『ああ！お前か……つて、なんでてめえが変身してんだ！』

「説明面倒だし、今は前見てみる」

『ん？おお、倒して良いのかよ』

モモタロスは焦った魔導士たちを見る。ようやく現状を理解したか……

「モモタロス、戦いは主流俺だが、サポート頼むぜ」

『しょーがねえ、こうなつちまったら付き合っしかねえか……つてか、俺に戦わせる！』

「え、おい……!？」

「行くぜ行くぜ行くぜえ！」

モモタロスが俺の体を制御し始める。つたく、しょうがねえ……

『あんまり無茶な戦いはするなよ？大部隊が相手なんだ』

「へっ！俺がまとめて相手してやらあ！」

モモタロスはそのまま魔導士達をもともせず突っ込んでいく。むしろ、カートリッジシステムが確立されていないためか、魔導士ばかりのこの部隊に、ソードフォームの電王は有利だ。

「おらあっ！」

『モモタロス、斬つても大丈夫だ。非殺傷設定だから』

「なら遠慮はいらねえなあ！おらあ！」

さすがモモタロスだな。剣の筋がめちやくちやだけど、強い……

「俺、最強ーっ！」

気がつくとも周囲の魔導士たちが倒れている。なんか自信なくす……

「お、おい！なんだあありゃあ！」

そこには見たことのない巨大な竜がいた。キャロの竜じゃねえな……つというか、あの集落が管理局に協力するわけない。多分、管理局に強力な召喚士がいるのか……

「ど、どーすんだ！？」

『デンライナー呼べるか？』

「無理だ！」

マジかよ……何故？

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA  
AAAAAAAAAAAAAAAA」

火炎弾を吐かれ、周囲が爆発する。

「うおおお！？」

『逃げるぞモモタロス！』

「なんでだよ！？」

『倒れてる魔導士が危ない！巻き込むわけにもいかないだろ！』

「ちいつ！」

電王は駆け出し、倒れた大隊から離れていく。よし、これなら……

『モモタロス！』

「なんだっ！」

『てんこ盛りいけるか！？』

「……無理だ」



『なんだよ今の間は！』

「……………だつてよお」

しょうがないだろーが

『しょうがない、呼ぶか、犬』

「わ、わかったよ！おい！お前からできるんだろっな！」

モモタロスが叫ぶと、どこからか声が聞こえてくる。

『ま、緊急事態だしねえ』

『よっしゃ！行くでえ！』

『わ〜い！頑張っても良いよね？答えは聞いてないけど！』

よし、頼むぞ！

「おら、行くぜ！」

モモタロスの言葉と共に、プラットフォームに形成され、4つの電  
仮面と一つの『羽』が背中についた。そっか、劇場版だとなかった  
もんな音声。

「……………このビラビラ……………手羽野朗！またお前か！」

『素晴らしいであろう？ありがたく思え、異世界の戦士よ』





・ここまでか

「悪いな、みんな……………」

そう言っつて目を閉じる。エレナ、後は頼むわ……………

「デイバイインバスターアアアア!!!!!!」

桃色の砲撃が、そこに轟いた。

第三十八話「紅の正体、クライマックスな戦い！」（後書き）

秋風「初めて大学内で更新した（笑）」

迅「勉強しろ！」

秋風「うーん、めんどい」

迅「ふざけんなあ！」

秋風「そして今日はここまで！」

迅「次回第三十九話『大切な人』ドライブイグニション！」

第三十九話「大切な人」(前書き)

はい、ということで夜遅くに更新です。がんばりますw

### 第三十九話「大切な人」

電王の変身が解け、覚悟を決めたとき、俺の目の前に桃色の砲撃が轟いた。

「なのは……………」

「じんくん、お待たせ」

「お前、なんで……………」GYAAAAAAAAAAAAAAAA  
AAAAAAAAA!!!!!!」つく!

「トライデント、スマッシュャー!」

「フレイスベルク!」

あれは……………」

「フェイト……………はやて!?!」

二人の攻撃により、龍は崩れ落ちた。そして二人も降りてきた。

「お前ら、どうして?」

「じんくん、私……………わかったの、私、どれだけ間違ってたかって」

「なのは……………」

なのはが、俺に抱きついた。

「ごめんなさい」

なのはは只一言、そうささやいた。俺は、静かに頷き、抱きしめた。

「俺も、すまなかった」

俺が言うと、なのはがボロボロと涙を流していた。

「うつぐ、ひつぐ……うえええ……」

なのはの涙を見たのは、あの事件以来だ。すると、フェイトとはやても俺に抱きついてきた。俺は敵が来ないかサーチを続けながら、3人を静かに受け止めていた。

アースラにつくと、俺は崩れた。数日に渡り逃亡していた俺だったが、緊張が解けたのかわからない。だが、今は逃げているときより温かかった。なので、今はアースラの医務室にいる。

「じんくん……」

「大丈夫だ、少し休めば回復はする」

体の回復力は異常だが、体を酷使し魔力を消費し続けたからか、回復は少し遅かった。すると、リンディさんが入ってきた。

「気分はどう?」



「不思議な気分だ。まさか、あなたが協力すると考えるなんて」

「ええ、でも私も……偽りの正義を主にするほど馬鹿じゃないのよ」

リンディさんが微笑む。なるほどね……

「そつだ、ゼロは？」

「かなり損傷がひどいけど、核がやられたわけじゃないわ。パーツもあるし、交換すればすぐに使えるわよ」

「そうですか……」

なんとかかなりそつだな。それならいいんだが……

「これから、どうするか」

アースラという味方を付けたはいいが、一つ間違えば仲間達はみんな捕まってしまう。上層部を、どう叩けばいいのか……

『艦長！上層部室から通信が……全国ネットで！』

「何ですって!?!」

俺も回線を使ってそれを見る。すると、そこには紅がいた。だがそれ以上に驚いたのは……

「あれは……!」

後ろにいるのはダークライダー!?

『世界にいる人々、こんにちは……私は世界の闇……闇の書の防衛プログラムと呼べる存在……これより私が、いや、私達が……』

言葉と共に、黒い影からグロンギ、オルフェノク、ミラーモンスターなど、怪物たちが続々と登場する。

『手始めにミッドチルダを闇に沈めよう……あがけ人間ども……そして、とめようと思うなら止めに来るがいい、哀れな子羊よ……』

そう言って通信が切れた。つまり……

「管理局の本部が、乗っ取られた……」

『艦長!本部周辺に怪物たちが……!』

「なんですって!?!」

映像ではクラナガンで多くの怪人達がものを破壊し、人を襲っている。

「……ぐっ、くう!」

「じんくん!駄目!まだ動いたら……」

ベッドから降りて行くことするが、なのはに止められる。

「……子羊か、ずいぶんいいようじゃねーか」

名指しで喧嘩を売ってくるとは、いい度胸じゃねーか……

「落ち着いて、落ち着いてよ……迅」

「俺は大丈夫だ」

「大丈夫やあらへん！ポロポロやないか！」

こんなの傷に入らないって

「何を言っている、包帯だらけで」

「将の言つとおりだ。いかにお前でもあの大軍隊を前では……」

「大丈夫、俺は立ち止まれない……あいつを潰すのは、俺の役目だ」

イレギュラーを作り出したのは俺だ……だから、俺が……

「迅」

「エレナ？」

パンツ！

「ッ!？」

「いくらあなたでも、一人では無謀ですよ」

「……………」

「今は、仲間がいるでしょう?」

「だが……………」

「この世界では、いくら神の力を持つとも……………只一人では無力です」

わかってる、そんなこと……………」

「巻き込みたくないですか?みなさんを……………」

「それは……………」

「甘ったれないください。あなたが自分の命をかけるなら……………」

言いながら、俺に手を差し伸べる。

「私達の命くらい、賭けてください」

「……………」

どっかで聞いたことあるセリフだな……………だが、そのとおりだな……………」

「ああ、そうだな」

言いながら手を取り、立ち上がる。

「俺に、力を貸してくれるか？」

「もちろんだよ、じんくん」

なのは……

「言ったでしょ？ 私達は迅の味方だよ。」

フェイト……

「うちらも、力になるで」

はやて……

「私のマスターはお前だ。なら、力を貸すのは当然だ……」  
私は、お前と共にある」

リインフォース……

「お前の味方だからな。当然だ」

シグナム……

「私もお手伝いします」

シャマル……

「あたしだって手伝っぜ、迅」

ヴィータ……

「私も、戦いに参戦しよう」

ザフィーラ……

「リインも味方になるでう〜！」

リイン……って、は？

「お前は……」

「初めまして！リインフォース？（ツヴァイ）です！リインと呼んでくださいですー！」

「い、いつの間に二代目が……」

「実は内緒で開発が進んで、一昨日ロールアウトしたばかりや」

「えへへ〜はやてちゃんが言ったとおりかっこいいですう！」

と、リインが俺の肩に乗り、擦り寄る。

「あ、こらリイン……」

「おねーちゃんだって、いつも擦り寄ってるって聞いたです！」

「何！？それは本当なのかアインス！」

「い、いや、それはその……だな」

なんだかもう、最終決戦の雰囲気じゃねえよ……

「けど……」

「きっとできますよ、みんななら、ね？」

「ああ、そうだな」

こうして、最終決戦が動き出そうとしていた。

第三十九話「大切な人」（後書き）

秋風「今日は寝ます。寝かせてください……」

迅「次回、第四十話『世界掛けた決戦には助っ人がつき物』ドライ  
ブイグニション！」



## 第四十話「決戦には助っ人が付き物」(前書き)

最近ルール守らない人が多いです

指摘をため口でするって何様ですか？

幻滅するなら読まないでください

リクエストだけ押し付けて感想書かないのって我侭とどこが違うか？

本当にルールとマナーを守らない人ばかりが増えています。正直更  
新停止しようかとも思ってるくらいです。このサイトは本気で小  
説を書くのに取り組む人もいます。私もそうです。

私もできた人間ではありません。少しの中傷でも傷つきます。まじめ  
に書いてて中傷されるとか、小説を書く人の気持ちになったことは  
ありますか？

次からマナーとルールを守らない人は本気でブロックユーザーの設  
定をさせていただきまます。みんながみんな、小説をちゃんと読んで  
くれると思っていた私が馬鹿みたいに見えます。

長々と文句を書いてしまいました。申し訳ありません。少々病ん  
でいるようです。しかし、支えてくださる皆さんにはとっても感謝  
しています。これからも頑張りますので、応援よろしく願いま  
す。

それでは本編をお楽しみください。

## 第四十話「決戦には助っ人が付き物」

Side out

ミッドチルダ首都、クラナガン……怪人はそこから沸いていた。そんな町を、一人の少女が逃げている。

「お兄ちゃん助けて……誰か！」

小さな少女の声が響く。少女はファンガイアに襲われかける。少女は目を瞑るが、ファンガイアは襲ってこなかった。そこにいるのは、金色の髪をなびかせる男。

「ゼロ！」

『ロードカートリッジ！』

「消え去れっ！」

『烈光波』

光が走り、ファンガイアは消滅した。少女はその光り輝く姿を目に焼き付けた。

「君は、早く逃げろ」

「……うん」

避難シエルターへ誘導され、少女は後ろにいるバイザーをかけた男を見ながら走り出した。そして避難する。シエルターがしまり、地

下へともぐつた。そこで少女は自分の兄を見つけた。

「お兄ちゃん！」

「ティアナ、無事だったか。」

「お兄ちゃんは？」

「ああ、ちょっとドジをしてな、今は怪我を手当てしてもらったんだ」

兄の言葉に、少しの心配と嬉しさを交えたティアナは喜びながらも兄、ティード・ランスターに抱きついた。

「私もいつか、あんな風に……」

「ん？どうしたティアナ」

「うんお兄ちゃん、あのね……？」

ティアナは今までの経緯をティードに話した。この少女、ティアナ・ランスターと、バイザーをかけた金髪の男が会うのは、もう少し先の話。

迅side

「やて、と……」

目の前にいる怪人達……迅は武装を解除し、ディケイドライバ

ーを取り出した。

「迅くん！」

「なのは、大丈夫か？」

周りを殲滅しながらも進む俺達は集合地点でその怪物であるグロング、アンノウン、ミラーモンスター、オルフェノク、アンデット、魔化魁、ワーム、イマジン、ファンガイア……さらには吸血男や蠍男、蜂女……さまざまな敵が終結していた。だが、俺達もそれだけではない。

「行くぞ、みんな」

「うん！高町なのは、行きます！」

「勝って、帰ろう迅。フェイト・テストロッサ、行きます！」

「おっしや、いくよー！八神はやて、行くで！」

「烈火の将、シグナム 参る」

「鉄槌の騎士 ヴィータ、行くぜー！」

「湖の騎士 シャマル、行きます」

「盾の守護獣 ザファイラ！いざっ！」

「祝福の風、リインフォース、いざ参る」

「祝福の風二代目、リインフォース?! いくです!」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウン……行くぞ!」

「大魔導士 プレシア・テスタロッサ、行くわよ」

「フェイトの使い魔 アルフ! いくよ!」

「ユーノ・スクライア、行きます!」

みんながそれぞれ武装を構える。俺も、ディケイドのカードを取り出し、エレナも、ディエンドライダーを取り出した。

「「変身!」」

『KAMEN RIDE DECADE!』

『KAMEN RIDE DI END!』

俺たちも仮面ライダーに変身した。

「よし……行くぞ!」

『おおつ!』

全員が数千の怪物たちと、ダークライダー達に駆け出し、攻撃を開始する。

「ディバインバスター!」

「トライデントスマッシュャー！」

『ATTACK RIDE BLAST!』

次々と怪人を打ち倒していくが、次から次へと沸いて出てくるのできりが無い。

「うち……きりがねえ」

俺はカードを取り出す。今こそ、力を借りるときなのかもしれない。

「みんなの力、借りるぞ！」

『KAMEN RIDE ALL RIDERS!』

電子音と共に、銀色のオーロラが現れる。そしてWを含めた平成ライダーたちが姿を現した。だが、それだけではなかった。

ブオオオオオン！

バイクの音が鳴り響くと、銀色のオーロラから3人が飛び出してきた。そこにいたのは……

「仮面、ライダー!?!」

そう、そこにいたのは仮面ライダー一号、二号、V3

「彼らだけじゃない、みんなが力を貸してくれる」

クウガの言葉に困惑する俺だったが、彼らはすぐに現われた。

「あれは……！」

そこに姿を現すのはライダーマン、X、アマゾン、ストロンガー、スカイライダー、スーパー1、ZX、ブラック、ブラックRX、Z0、今は巨大でない」、そして真が現われた。

「君が、士が言う別のディケイドか」

「あ、ああ……」

一号の言葉に戸惑いながらも、頷く。

「俺たちは、悪のあるところに、人々の平和を守るために現われる。俺たちも戦おう」

「……！ああ、力を貸してくれ！」

「もちろんだ。そして、さらに仲間がいる」

「え？」

今度は別の場所から銀色のオーロラが現われる。あれは……！！

「他の、仮面ライダー！？」

そこにいるのはギルスから始まり、アナザーアギト、ナイト、王蛇  
タイガ ファム ソルダ ガイ オーディン シザース ライア  
ベルデ インペラー カイザ デルタ、ギャレン レンゲル カ  
リス 息吹鬼 轟鬼 斬鬼 朱鬼 ドレイク サソード ガタツク

キックホッパー パンチホッパー ゼロノス NEW電王 イク  
サ キバーラ アクセル…… 仮面ライダーのオールスター……  
……よくまあ、王蛇やシザース、キックホッパーやパンチホッ  
パーまで……

「今は世界の危機、一人でも多くのライダーが必要だったのさ」

「お前は……」

そこにいたのは、マゼンタのカメラを首から下げた男。

「久しぶりだな」

「門矢士、あんたがやってくれたのか」

「ああ。俺も行くか、変身！」

『KAMEN RIDE DECADE!』

士もディケイドへと変身する。これで、ディケイドは2人になった。

「さあて、行くうぜ。こいつら潰して、お前はやることあるんだ  
ろ？」

「ああ……行くぞ！」

こうして俺たちライダーと、なのはたちが駆け出す。

「らあっ！」



士とともに、ライドブツカーを振り上げて怪人たちを蹴散らしていく。

「ハーケンセイバー！」

「俺の必殺技！異世界特別編っ！」

電王とフェイトが周囲の敵を跳ね除け

「でりゃあっ！」

「はあっ！」

「ふんっ！」

「はっ！」

ブレイドとシグナム、RXとカイザが先頭で道を開く

「いくぞディケイド！」

「ああっ！」

「わかった！」

士と俺が一号ライダーの言葉に頷く。そして二号ライダーと共に飛び、蹴りを突き出す。

「……ライダー、フォースキック！」

目の前にいたガラガンダーとイカデビルを蹴り飛ばし、爆発させる。

「デイベインバスター！」

『FINAL BENT』

「はああああ……おりゃあ！」

なのはのデイベインバスターと、ゾルダのファイナルベント『エンドオブワールド』、そしてゼロノスのゼロフォームによるバスターノヴァが発動し、怪物たちが塵になっていく。

「ん？あれは……」

他のライダーたちも、はやてやヴィータたちと共に、怪人たちを蹴散らしていく。そして、その奥に見えるのは次元の歪。あそこが、紅の居場所に繋がってるのか！だが、敵が多くて進めねえ！

「行け！迅！」

「士？」

「ここは、俺たちが防いでやる！お前は行け！」

怪物を殴り飛ばしながら、士が叫んだ。

「だが……」

「行って！迅君！」

「なのは・・・?」

「私、信じてるから!」

「私もだよ、迅!」

「せや!必ず勝ってきてな!」

「がんばってくださいですよ!」

「負けたら承知せんぞ」

「勝ってこいよ!」

「みんなで信じてますから!」

「頼んだよ!」

「頼むぞ」

「頑張ってください!」

「帰って来てくださいよ?またあの上司アチナに言われますから」

みんなが俺に言う。なら、みんなを信じる。

「わかった、行かせてもらっぜ!」

俺はそのまま歪の中へと突っ込んだ。

「うわあっ!」

俺は歪を抜けると変身が解けてしまった。

「大丈夫か、迅?」

「ああ、って……リインフォース?」

「私のマスターは迅だ。ついてくるのは当然だろう?」

そうだな。にしてもここはどこだ?

「長い廊下、のようだが……」

「ああ、そうだな。」

俺は廊下を歩き続ける。どこにいるのだろうか。そんなことを考えながら廊下を歩き続けると、そこには大きな部屋があった。そこにたたずむ、黒い影

「やあ、お待ちしていましたよ?」

「紅……!」

「もはや機能しなくなった管理局に力があるとは思っていませんよ。よくもまあ、ここまで辿り着いたものです」

こいつを倒さなきゃ、世界は消える。

「覚悟しろ、俺はお前を倒す」

「ほう、面白い……私も残滓とはいえ力を持っています。お相手しましょう」

こうして、俺たちの最後の戦いが始まる。

第四十話「決戦には助っ人が付き物」(後書き)

秋風「・・・・・・・・・・・・・・・・」

迅「いい加減復活しろよ」

秋風「ああ」

迅「まったく、たかが幻滅したと言われたただだろ」

秋風「俺の心はガラスだから」

迅「んじゃあ砕いてやるうか」

秋風「お前は鬼か！」

迅「まあ、それはともかく感想に中傷するような文は禁止させていただきます」

秋風「次ぎ見つけたらユーザーブロックしてやる」

迅「落ち着け。」

秋風「あ、そうそう、メイプルストーリーをやってらっしゃる同士の方、いたら是非ぽぷらサーバーでやりましょう。それでわw」

迅「次回、第四十一話『世界の半分を差し上げましょうって言うけど結局戦闘は避けられない』ドライブイグニション！」

第四十一話「世界の半分を差し上げましょうって言うけど結局戦闘は避けられな

今回はライダーネタが多いという意見が多数寄せられたので、それ以外のチートが多いです。

どうかお楽しみください

そして皆様、数々の応援のメッセージ、感謝いたします。これから  
も頑張っていきますので、よろしくお願いします

第四十一話「世界の半分を差し上げましょって言っけど結局戦闘は避けられな

俺は紅と対峙すると、リインフォースを下がらせた。

「リインフォース、下がってる……」

「迅……?」

「こいつとは、一対一で決着をつける」

いいながら、俺はゼロを構えた。

「なるほど……あくまで戦いの道を選びますか」

「何?」

「私はてつきり、手を組みに来たと思ったのですがね」

「……何を言ってるんだ?こいつ

「この世界の現状、あなたはよく知っているでしょう。管理局が支配する世界。それがこの世界です。だが、ひとたび崩れさえすれば他愛もない。力在りしものが、頂点に君臨する」

「何が言いたい」

「私と手を組みませんか?もちろんただとは言いません……ベタですがどうです?世界の半分を差し上げますよ?」



「……………なぜ、俺にそれを言う？」

「私は闇の書の防衛プログラムの生き残りであり、あなたの力の残滓だ……………あなたの心も理解はしている。あなたはこう思うだろう。『この世界は腐りきっている』……………とね」

「……………だったら、貴様はどうしようというんだ？」

「私とあなたで世界に君臨するのですよ。神の力を得た者たちが組めば……………誰にも負けることはない」

「……………なるほどね、確かにその通りだ」

「迅……………!？」

「ほう、賛同していただけですか」

言った瞬間、俺はZセイバーで斬りかかった。紅はそのまま吹き飛び、着地した。

「……………!？」

「だが生憎、俺はお前ほど利口な考えは持ってない。ましてやそんな誘いに乗るほど、馬鹿でもない」

「……………」

確かに管理局の腐り具合はFF7の神羅しかり、ネギま!のメガロメセンブリアしかり、銀魂の幕府しかり……………組織というのはまともなものではない。だが、これだけは言える。

「この先の未来、お前みたいな奴に任せたら間違いなく世界が滅ぶ  
ってことだ」

「ふっふっふ……おもしろい……ならば来るがいい！」

紅がこちらに駆け出し、剣を振るう。これは……っ！

エソンスエクセクエンス  
「断罪の剣……！」

俺は断罪の剣をゼロで受け流し、弾いて一閃を入れるが避けられる。

「ほう、これを防げますか……ならば」

ニウガスス  
氷爆！

「っ！」

詠唱なしでこれか……！体が凍り、俺はすぐに手に魔力をまわ  
して無理やり溶かす。

「驚いているようですね……これも私の使える能力の一部」

「迅……！」

リインフォースが駆け寄ろうとするが、俺はそれを止める。

「大丈夫だ！巻き込まれないように下がれ！」

サギタ・マギカ  
魔法の射手  
セリエス・ルーキス  
光の101矢！

牽制として放ったが………やっぱり効果はないな。

「無詠唱で101矢………なるほど、あなたの神の力も素晴らしい物だ。私のような「コピー」とは違うようですね。」

「なんだ、えらく素直じゃねーか。本体のお前はかなり短気だったのに」

「ああ、学習したのですよ。無駄に魔力を消費しないように………  
・ねっ！」

ケンチヤウなマホツブラエ  
百の影槍！

「ちい！」

あれは避けられない………ならばっ！

ロー・アイアス  
熾天覆う七つの円環！

このままじゃ防戦一方だ………何とかしないと………待てよ？

「ウエニアンと合ヒリテイウダラチアオビスターランゴムオダスクーラフヤサダベ  
リック・ラク・ライラック！来たれ氷精 闇の精！ 闇を従え吹雪  
スターズニウアーリス  
け 常夜の氷雪！！！」

相手が同じようにチートを繰り返すなら………

「そろそろその残りの花びら！散ってもらいましょうー！」

ニウイステンオズダケメンズ  
闇の吹雪！

俺はアイアスを解除し、手を前に突き出す。

「迅!?!」

「ふっ!最早諦めましたか!」

「……………まさか」

俺は来た闇の吹雪を受け止めた。そして闇の吹雪は丸くなり、俺の手に収まる。

「な、なにに!?!」

「あれは……………」

それを上回るチートで叩き潰せばいい

「コンプレクシオン  
掌握!」

「闇の魔法……………はっ!」

俺は一瞬で背後に回りこみ、そのまま殴り飛ばした。だが、一気にその力は消えてしまう。

「……………っち、やっぱりこの程度じゃだめだな。なら……………」

「エーミツサ・スタブボウアキタリエンス  
解放固定雷の暴風!」

「ぐっ……………あれは」

コンプレクシオサレーキウザロ  
掌握 魔力充填 術式兵装 『アギリータ&ミニス  
疾風迅雷』 !!

「おおおおおおおっ!!」

「ぐあっ!!」

疾風迅雷の力を得た俺はそのまま殴り飛ばし、ラッシュで追い込む。  
このまま反撃させなければっ……絶対に勝てるっ!

「な、なめるなあ!!」

ト・ティゴスエルザスト……  
障壁突破石の……

「させるかっ!!」

デクストキミットム  
右腕解放!! 白雷掌!!

「ぬおおお!!?」

「まだ、まだだあ!ラスト・テイル!マイ・マジック・スキル・マ  
ギステル!契約に従い我に従え高殿の王!!来れ巨神を滅ぼす燃ゆ  
ネホス・ティターナカトウキキリアキス・アストラブサト  
ケラウ  
る立つ雷霆百重千重と重なりて走れよ稲妻!!」

魔力最大っ……!!

「ま、待てっ……」

キーリブル・アストラペー  
千の雷!

「ぬがああああああああああああああああああああああああああああ!!」



「なっ……」

「くっくっく……あっはっはっはっは！」

「馬鹿な……あれだけの雷撃を喰らって」

リインフォースの言うとおりだ。非殺傷設定にしてないうえ、全力であれを撃った。なのに立っていられるなんておかしい。

「熾ロー・アイアス天覆う七つの円環と万難排すアイギス魔除けの盾……同時に使わなければ死んでいましたよ……」

あのやろう、宝具の同時使用なんてものを……

「まったく予想外でしたよ……くっくっく……」

なんだ？この気の圧力は……

「殺し足りんっ！一度や二度殺したくらいでは殺し足りないぞ貴様らあー！」

「ぐっ！」

「きゃっ!？」

奴の冷静だった顔が一気に変わった。なんて殺気を……

「貴様も、魔導士達も、ライダー達も……皆殺しだあああああ……！！！！！！！！」

瞬間、紅が黒い何かに包まれる。それは次第に増幅し、形ができていく。それは怪物とも呼べ、悪魔とも称される物だった。

「デビル……ガンダム」

『貴様ら、一片も残さん!』

砲撃が来る……まずい!

「みんな!中央によれえ!」

『消えるおおおおおおおおお……!……!……!……!……!  
!……!』

砲撃が放たれた。俺とエレナはそれぞれ宝具を展開した。

「熾<sup>ロー・アイアス</sup>天覆う七つの円環!」

「万難<sup>アイギス</sup>排す魔除けの盾!」

二つの盾によって砲撃は逸れた。だが拡散し、周囲一体に爆発が巻き起こり、ビルなどの建物も巻き込み、爆発する。

『うわあああああああああ……!……!……!……!……!』

俺たちはその砲撃に吹き飛ばされた。

(ここでディケイドの最後のディケイドライバーが出てきてしまう  
というイメージを持ってもらえると嬉しいです。)



第四十一話「世界の半分を差し上げましょって言っけど結局戦闘は避けられな

秋風「ふう、とりあえず決戦編はもう少しで完結だ。」

迅「なんというか、滅茶苦茶だったな」

秋風「ライダーのネタが多いと言われたので、今回はネギま！そしてfateネタを多くしてみました。」

迅「まあ、いいんじゃない？」

秋風「次回はもっとどえらいことになるぞ」

迅「大丈夫かよ」

秋風「あとガンダムファンの皆さん。次回はガンダム出ますからね！」

迅「お楽しみに！」

秋風「ちなみにこの前計算したらこの物語かなり長いです。最後までお付き合いしてくれると嬉しいです。それでは！」

迅「次回、第四十二話『自分の行く末と決着』ドライブイグニション！」

第四十二「自分の行く末と決着」(前書き)

とうとう蒼天シリーズに話が追いついてしまいました

とりあえずこれからもがんばります

## 第四十二「自分の行く末と決着」

「ぐっ……あ」

デビルガンダムの砲撃を浴び、俺たちはそのまま地面に叩きつけられた。

「なのは、しつかりしろ！」

「うん、大丈夫……」

なんとかなのはを立たせる。フェイトやはやても、なんとか持ちこたえている。ライダーたちも無事のようだ。

「なんだ……あれ」

デビルガンダム……普通なら下にいるのはDQ細胞に犯されたガンダムたちだが、それが違っていた。

「あれは……リョウメンスクノカミに、キングダーク!？」

本来あるべきガンダムの顔の場所には、ネギま!のリョウメンスクノカミと仮面ライダーXに登場するキングダークの顔面が埋め込まれていた。

「あんなのと、どう戦えばいいの……?」

「どうする?どうすればいい……?」

ここで戦うならゴッドガンダムが妥当だ・・・だがそれはデビルガンダム単機での話であり、リョウメンスクノカミヤ、キングダークは視野に入っていない。

「があああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

「ちいつ！ゼロ！」

『合言葉は？』

「合言葉は『神の闘士』！」

『オーライ、ゴッドガンダム起動開始！』

パチンツ！

指を鳴らした瞬間、俺の体をゴッドガンダムの装甲が形成された。

「おおおおつ！」

バーニアを吹かし、デビルガンダムへと踊りかかる。なのはたちも続くが、そこからMDが展開された。

「デスアーミー！？」

「あれは・・・！？」

「みんな！あいつらは全力で潰せ！じゃないと死ぬぞ！」

俺の言葉に全員が賛同し、全力で潰しにかかる。もうデスアーミーもただの雑魚ではすまないほど、俺たちは傷を負っている。

「このっ！」

迫りくるデスアーミーたちをゴッドスラッシュユナイフで斬り飛ばし、そのままゴッドフィンガーを繰り出す。

「ゴッド……」

『甘いわぁっ！』

「何っ!？」

ゴッドフィンガーを撃つ直前、突然フィールドに阻まれた。これは……っ!

「?フィールドだと!？」

馬鹿な!デビルガンダムにそんな装備は……!

『私は仮にも貴様のデータを受け継いでいるのだぞ?こんなことわけがない!』

っちい!

「くっ……」

何か、何か手はないのか……?みんな満身創痕……作戦を組むほど時間も余裕もない。どうする?どうすればいい?

『迅……』

ん？この声は……

「アテナか」

『ええ、大ピンチのようね……力を貸しましょうか？』

「……いい」

そんなもの、いらぬ。

『何故？』

「未来は、俺たちで切り開く！」

「そういうことです、アテナ様……私たちは、まだ負けてませ  
ん」

『そう……なら、せめて見届けるわ。ポテトチップでも食べな  
から』

神様それでいいのかよ……まあ、それはさておきエレナもやれ  
そうだな……だがなのはたちやライダーたちはあと一発が限度  
か……

『みんな、聞こえるか？今から最後の作戦を話す。心して聞け』

俺は作戦を話した。

なのはside

『 以上が、作戦だ』

無茶だけど、でもやるしかない。

『 本当に、大丈夫なの？』

『 ああ、これしか思いつかないというのが現状だがな』

『 ほんなら、うちらは信じるで、迅君のこと』

そうだね、私たちは、迅君を信じるんだもんね。

『 ああ、そうしてくれると助かる』

『 勝とうね、迅くん』

『 ああ、ありがとうなのは……』

迅君の言葉は、とても温かった。

side

……なるほどね、こういう作戦も悪くない

『 ライダーのみんなには負担を掛けることになる』

「気にすんな。その程度で俺たちはやられねえよ」

『……………そうか』

「それに……………」

『……………?』

「俺たちの力を借りたと言って言ったのはお前だろ? もう少し信用しろ」

俺がそういうと、迅は笑っていた。

『ああ、そうだな……………』

迅 side

ライダーたちが並ぶ。そして、なのはたちも空中で構えを取った。

「みんな……………行くぞっ!」

『おおっ!』

土の声を合図に、ライダーたちが走り出す。

「フェイトちゃん! はやてちゃん!」

「うん!なのは!」



「オツケー行くよ！」

なのはたちがデビルガンダムにデバイスを向ける。

「スターライトオ……」

「プラズマザンバー……」

「ラグナロク……」

「……ブレイカアアアアア!!!!!!!!!!!!」

3人の強力な魔法によつて？フィールドが一瞬だけ破壊される。？  
フィールドも一度破壊するれば、あの全ての巨体を覆うには時間  
がかかる。そして、そこに飛び上がったディケイドたち仮面ライダ  
ーがライダーキックを発動させる。

『おりゃああああああああああ!!!!!!!!!!!!』

『グおおおおおおお!!!!!!この、程度でえええ！』

全員のライダーキックがデビルガンダムの腹部、キングダーク、リ  
ヨウメンスクノカミの顔面へ激突し、大爆発を起こしていく。破壊  
しきれないまでも、傷を負わせることはできる。そのままDG細胞  
を使わせないよう、エレナが足止めし、俺は明鏡止水に入る。

「……見えた、水の一滴！」

「雷神槍 ディタノクトノン 巨神ころし！はあああああっ！」





なのはside

「迅君……？」

いきなり、何を言い出すの？

「このまま、一撃でやつを仕留める」

「無茶だよ！そんなの！」

「せや！あんなん、うちらでも手に負えん！」

「……それでも、やる。最後の魔力をもつてな」

すると、迅君の手が輝いた。そしてその輝きは形を成し、一本の剣へと変わった。

「綺麗……」

迅君の手に握られたそれは、圧倒的な存在感を私たちに見せていた。

迅side

約束された勝利の剣……エクスカリバー。投影ではない。俺が願い、作り出した剣。セイバーこと、アーサー王が持っていたのと同じもの。

「迅、それは……」

「……エクスカリバー約束された勝利の剣だ」

エクスカリバーを出したのには、理由があった。

『エレナ、もしこれにみんなの魔力を込めてあれを撃ったら、どうなると思う?』

『……っ！無茶です！いくら規格外の体と強さを持ったあなたでも！本来の衝撃にはとても……！』

『知ってる……だから俺なんだ』

『え……?』

まあ、俺しかいないよな。

『これは俺のケジメだよ』

『ケジメ?』

『もしこの世界が、本当のシナリオで進んでいたら、こうはならなかった……だから、俺なりのケジメとしてイレギュラーとのケリをつける。同じ、イレギュラーとしてな』

エレナの目が、少し潤んでいた。

『迅……でも』

『大丈夫、死ぬつもりはないさ。ただ、無傷じゃすまないっただけだ』



俺は静かに、その咆哮を上げ続ける怪物を見据えた。

「俺はこの世界に転生して、ずっと考えていたことがある。それは・  
・・・・」

この世界であいつらに何をしてやれるのか？

「最初はいつらに来る悲劇を全部回避するつもりだった。でもあの日気がついた」

プレシアさん、アリシア、リインフォース・・・・救ってきたものは多かった。

「なんか駄目なんだ・・・・嬉しいのに、満たされねえ」

どんなにいい事だとしても、それは本当によかったのかと悩まされた。結局、原作ブレイクなんかをして、俺はただ自己満足をしていただけだった。

「満たされないのは俺のただの自己満足だから・・・・いくらやつても満たされねえ・・・・当たり前だな。でもこの世界で生きてきて変わったことがあった」

なのはたちの優しさに触れて、それがどうしようもなく暖かくて・  
・・・

「元いた世界じゃ味わえない、そんな優しさやぬくもり・・・あいつらが教えてくれた」





ミッドチルダは、優しい光に包み込まれた。

## 第四十二「自分の行く末と決着」（後書き）

秋風「はい！ということで最後にチートの自分とは何か見出した迅速でした！」

迅「なんか、あんだけやっておいてそれがよといわれそうだぞ？」

秋風「チートの能力が何を見出すのかってことで紅のために言った言葉だよ」

迅「まあ、そうだけど」

秋風「それに、今までどおりの原作ブレイクは変わらないから安心しろ」

迅「本当かよ」

秋風「本当だとも」

迅「まあ確かに、原作ブレイクは悲しい未来が変わるという捕らえ方が多い」

秋風「まあね。けどそのキャラは本当に幸せになるのか？俺はちよっとだけ疑問だったんだよね」

迅「だから今回こうなったのか？」

秋風「言ってることがおんなじ気もするけど。簡単に言えば」

迅「紅のように破壊活動をするために力を使わないってな」

秋風「そのとおり」

迅「まあこれから展開はいろいろあるからな」

秋風「どうか皆様、お楽しみに」

迅「次回、第四十三話『全ての決着、平和の中へ』ドライブイグニション！」

第四十三話「すべての決着、平和の中へ」(前書き)

大学から更新です(笑)

まだ時間があるので更新できたらもう一話w

## 第四十三話「すべての決着、平和の中へ」

なのはside

虹色に輝く光は私たちのところまで届いていた。暖かく美しい、そんな光が。そして周りにいた怪人やデスアーミーが消えた。

「綺麗……」

私はただ一言、そう言った。その輝きは、それ以上表現できなかった。紅と呼ばれた怪物も、その光と共に消えた。

「やった……」

「今度こそ、やったあ！」

みんなが喜ぶ。遠くでは迅君が立っていた。私はすぐに迅君のところへと飛んだ。

「迅君、やったね！」

「……」

私が言うけど、迅君は答えない。その手に、光る剣を握り締めたまま。

「じん、くん？」

私は迅君の肩に触れた。その瞬間、迅君がその場に崩れた。

「迅君！迅君しっかり！」

「迅！」

「迅君！」

フェイトちゃんとはやてちゃんも駆けつける。すると、エレナさんが駆け寄ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「エレナさん、迅君は・・・・・・・・」

「少し、力を使いすぎたのでしょうか。大丈夫、すぐに目は覚めますよ」

よく見れば、少し気持ちよさそうに迅君は眠りについているだけだった。私たちはため息をついて、その場に座り込んでしまった。

迅side

俺は暑さを感じて目を覚ました。で、固まる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えーと、これはどういう状況かな？」

なのはとフェイトとはやて、アリシア、リインフォースとリイン、シグナムが、別荘の大部屋のベッドで一緒に寝ていた。

『目覚めましたか、マスター』

「ああ、あれからどうなった？」

『はい、デビルガンダム・・・いえ、紅は消滅しました。あなたは今回英雄ということになるそうです』

俺はため息をつく。大量虐殺の汚名を着せたのに、手のひらを返して英雄とか・・・ないわ

「まあ、それが管理局だからな」

『そうですね』

「やあ、目が覚めたのか」

そこにはクロノ<sup>KY</sup>がいた。

「おい！クロノと書いてKYって読むな！」

「んじゃクロスケ？」

「それも違う！」

「ギヤーギヤー騒ぐな、みんな起きるだろうが」

言いながらベッドを降り、クロノと廊下を歩く。

「で？なんだよ、お前が来るなんて意外だな」

「……僕だって君に話をするために来ることだってあるぞ」  
ほう、珍しい……

「今回、君にお礼が言いたかったんだ」

「お礼？」

俺何かしたか？

「君は、闇の書……その根源を倒してくれた」

「ああ、そのことか」

確かクロノは、親父を闇の書の関係でなくしてるんだっただな。

「礼を言う。これで母さんもきつと心が晴れる」

「……どうだろうな」

「何？」

「そうだな、確かに闇の書は消えた。だが、管理局にある闇は、まだ巢食っている」

「……」

クロノが黙り込む、まあ、当然か。

「だからお前が、変えていけばいい」



「……………！」

「本当の光ってやつを……………世界に見せてやれ」

そう言っただけは、俺はその場にクロノを残して歩き出す。クロノが無言で頭を下げていたのを、俺は見ないことにしておいた。

クロノといた廊下を後にして、俺は外へ出た。夜で、城の上だから、風が少し冷たい。だが、悪くない風だった。

「迅君」

「はやくか……………どうした？」

「あんな？ちゃんとお礼……………言おうと思うて」

「え？」

「もし迅君がいなかったらうちのリインフォースを殺してしまってた。きつと」

原作のことか……………でも、どうしてはやくがそのことを？

「闇の書の防衛プログラム。うちが考えても、絶対に助かる方法なんてなかった。だから……………」

言いながら、はやくが俺に抱きつく。

「ありがとう」

「……………どういたしまして」

俺は優しく、はやての頭をなでる。

「なあ、迅君？」

「ん？」

「ん……………」

「!？」

いきなりはやてにキスをされた。

「ん、ん……………」

「ぶはっ!は、はやて!？」

「うちは、迅君が大好きです」

「……………はやて」

「だから、将来お嫁さんになりたい」

何を言い出すかと思えば……………

「アホ、あと5年は早いって」

「あう……………」

はやてが顔を真っ赤にしている。

「正直、誰が好きとか、俺にはわからない。はやても好きだし、なのはやフェイトだって好きだし……………」

「それは、友達として?」

「そうだけど?」

「じゃあ、女としては?」

はやてが俺に迫る。ち、近い……………」

「俺は……………」はやてちゃん?」げっ!!」

そこにはなのは、フェイト、アリシア、リインフォース、シゲナムがいた。

「抜け駆け禁止って言ったよねえ?」

「そ、それは……………」

「……………」(今のうちだな)」

「逃がさないわよ?」迅

「そうそう……………」はやてちゃんと一緒にお話だよ?」

そこにいたのはアリサとすずかだった。その持っているのはバーニングアリサにふさわしい刀と杖。さらにすずかの手には杖が握られていた。

「おい、なんだその物騒なの」

「ふふふ……あんたが寝てる間に作ったのよ」

「そんなものどっから……」

「倉庫よ」

まじかよ……

「さあ、お話ししましょう」

「そうだね、お話ししよっか、迅くん、はやてちゃん？」

「………なんでさ」

俺は小さくため息をつき、あいつらのお話に付き合うことになった。

ちなみに解放されたのは外の時間で5時間分だったりする。

第四十三話「すべての決着、平和の中へ」(後書き)

秋風「今日は大学から更新です」

迅「先週もだろっが」

秋風「まーな」

迅「勉強はいいのかよ」

秋風「今日はサークルまで暇だから」

迅「う、わゝ……」

秋風「いいじゃん」

迅「で？」

秋風「ふ、蒼天シリーズ越えちゃったよ。どうしよう」

迅「もう何も言わない」

秋風「ですよね」

迅「次回、第四十四話『別れは突然に』(オリジナル編最終回)ド  
ライブイグニション！」

**第四十四話「別れは突然に」(オリジナル編最終回)(前書き)**

さてさて、今回でオリジナル編は最終回です！

次回から別世界ですが、変わらず見ていただきたいと思います！

#### 第四十四話「別れは突然に」(オリジナル編最終回)

時は流れ、中学二年の終わり……あれからいろいろな事があった。事件は「ナイトメア事件」と呼ばれた。そして、俺はミッドを救った光の勇者と称えられた。なんか嬉しくない。で、プレシアさんは管理局へ協力者となり、なのは、フェイト、はやても順調に自分の道を進み始める。アリシアはリンカーコアがないので、俺が教えたとほうの魔法で人助けなんかを何とか言い出したので、プレシアさんと色々検討中。アリサとすずかも順調に魔法を覚え、今では管理局の魔導士にも引けを取らない腕前になった。俺は英雄になったので協力要請が主にクロノの方から来た。Sランクばかりのが、報酬を数十倍でもらうことにして協力をしているが、管理局に入ってはいない。現在は学校での授業を追え、帰宅中。

「あー……もうすぐ中3か」

「迅くん、迅くんはどうするの?」

「普通に高校だよ……俺なら問題なく通るから」

「元の世界だったらもう中年だよ……まったく」

「えー!一緒に管理局入ろうよー!」

「だめよなのは、迅は私たちと国立の高校を受けるの」

「ずるいよアリサとすずか」

「せや!抜け駆けやん!」

「抜け駆けじゃないよ、迅君がそこに行くから、私たちも行くって話になっただけ」  
なんてみんながギャーギャー騒ぐ。

「迅」

「ん？なんだリインフォース」

リインフォースは俺の正式なユニゾンデバイスになる。現在はリインと同じくらいの大きさだ。どうも、俺が学校に行くのについてきたいらしい。

「迅は私のですから、その辺お忘れなく」

正式なマスターになったから敬語使うようになったけど、言うことが物騒になった。

「あー！ずるいですお姉ちゃん！迅さんはリインのですー！」

リインが飛び出し、俺の肩に飛び乗った。

「だめだリイン、迅は私のだ」

「ずるいですー！」

「ちよつと二人とも……」

お、助け舟が……



「「「「「迅（君）は私（うち）（あたし）（のだよ）（よ）（や）  
！」「」「」」」」」

なんでやねん！

「あーもー……鬱陶しい……」

前の戦いが嘘みたいだな。

『マスター』

「どうしたゼロ」

『クロノ提督から通信です』

「わかった。開いてくれ」

『やあ、迅』

「またか？仕事……」

『ああ、かなり急な仕事だ』

クロノの言葉に、一同が止まった。

「どういうことだ？」

『海鳴に、SS級犯罪者が逃げ出した。至急拘束してくれ』

「……また面倒だな」

『ああ、頼む「報酬いつもの3倍な」「うっ……なんとかしよう』  
そう言っただけで通信を切る。さてと、行きますか。

「迅君、私たちもいくよ！」

「えっ！」

「何か問題あるの？」

「あんまり見ないほうがいいですね」

「どづいづことや？アインス」

「い、言うなリインフォース！」

「は、はい……」

必死にこいつを止める。こいつに言われたら俺が死ぬ！なんてことを思ってたらなのはゼロを取られた。

「ゼロ……教えて？」

『ひい！マスター！』

「お、おい待て！」

「ゼロ、話したほうが身のためだよ？」

言いながらレイジングハートを向ける。

『ママママママ、マスターはいつも相手にトラウマができるほどの攻撃なんかして日ごろのストレスなんかを犯罪者相手に発散してるんです!』

「あ、おい馬鹿!」

「それで?」

『そそそ、それで捕まった後に犯罪者たちがもうなんというか、真っ白に燃え尽きて・・・』

「へえ〜迅君私の知らないところでそんなことをしてたんだ〜」

「うっ・・・」

「後でお話ね。というか、ぐずぐずしてないで行くわよ!」

は?

「アリサたちも来るつもりかよ!」

「いいじゃない。私たちだってそこらの魔導士には負けないわよ」

「そうそう、行くよ!」

こうしてなのはたちは反対を押し切り空へ飛んだ。俺もため息をしながらゼロをセットアップして飛んだ。

しばらく飛んでいると、魔力反応を確認した。

「あそこだな……」

そこには、明らかに人相の悪そうな男が立っていた。

「……なんだてめえら」

「それ、デバイスだな。お前が逃走した魔導士か」

「だったらなんだ？」

「拘束する」

俺が言うと、男は笑う。

「へ！貴様ら程度にそれができるか！やれえ！」

男の持っていた黒い塊が光を放ち、その場に怪人が現われる。あれはまさか！

「闇の書の防衛プログラムの残滓！」

今にも消えそうだが、男が保っていたからか、その威力は増していた。

「ちい！ゼロ！」

『ロードカートリッジ』

「消え去れっ！」

『烈光破』

怪人たちを消し飛ばし、違法魔導士に斬りかかった。

「らあっ！」

「ぬっっ！」

そのまま畳み掛ける。

「ゼロオ！」

『ロードカートリッジ！』

「はあっ！」

『チャージセイバー！』

そのまま違法魔導士を切り裂いた。

「うがあああっ！」

そのまま倒れる。する防衛プログラムの残滓が膨れ上がる。

「なっ！」

そこにいたのはロックマンゼロのオメガ第一形態だった。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
！！！！！！！！」

「ぐっ！」

「きゃあ!？」

なんていう咆哮……!

「ラスト・テイル!マイ・マジック・スキル・マギステル!風精召エウオカウチルキ五  
リアールムトゥヘルナーダマティアアローアトラー・フーゲメント  
喚!剣を執る戦友!迎え撃て!!」

俺の形を模した精霊たちがオメガに襲い掛かる。一気に決める!

「ラスト・テイル!マイ・マジック・スキル・マギステル!契約にト・シユンボ  
ライオンダイアコネートールバヤク・ウーラニオーノエビゲーネサチムルニス・ケラウネ・ホス・ティデーナカトツチをセイイン  
従い我に従え高殿の王!!来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆百重千  
重と重なりて走れよ稲妻!」

俺は拳をオメガにぶつけた。

「吹き飛ばへ……」

零距离!千の雷!キーリブル・アストラバベ

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!」

そのまま千の雷を受け、オメガが崩れ落ちる。

「やったか……?」

「う、うおおおおおおおおお……!……!……!……!……!」

「きゃあ!?!」

「あれを喰らってまだ……!」

「さうとう強化されてるな。怪人たちと戦って無理もしてるし、こいつらにはもう戦わせられない。」

「ゼロ」

『了解です、強制転移!』

「迅君!?!」

「離れてろ、危ないから」

「じんく……」

「いい終える前に、なのはたちが転移する。」

「おいアインス、お前も転移を……」

「嫌です。私のマスターは迅であり、他にはありません。ですから、私を信じてください」

「…….…….わかった、行くぞアインス」

「イエス、マスター」

「ユニゾン・イン！」

ユニゾンし、髪は銀に目は赤っぽくなる。そして、そのまま<sup>エウ</sup>約束された勝利の剣を取り出す。<sup>スカリバー</sup>

「ゼロ、アインス、衝撃に備える」

『はい、マスター』

確実に粉碎する方法はただ一つ。この結界内で、確実に決める。

「……………行くぞっ！」

俺はオメガの攻撃を避けながら、確実に接近する。千の雷のゼロ距離がだめなら……………

「おおおおおおおおおっ！」

零距离で、<sup>エクスカリバー</sup>約束された勝利の剣を当てた。

「消える、この世界から今度こそ……………」

<sup>エクスカリバー</sup>約束された勝利の剣！！

俺はエクスカリバーを発動させた。その瞬間激しい光が放たれ、俺は起きてしまった次元断層に巻き込まれた。

なのはside



「きゃ!?!」

私たちはそのまま転移された。もとの場所があんなに遠く!?!? それにあの光は……!

「あれは、約束された勝利の剣!?! エイミー! 迅の反応は!?!」

『……………』

「エイミーっ!」

『迅君の反応、それに闇の書の反応……………ロスト』

「そん、な……………」

私は目の前が真っ白になった。

第四十四話「別れは突然に」（オリジナル編最終回）（後書き）

秋風「はい、ということで迅君の追悼式！」

迅「おいしい！」

秋風「まあ、冗談はさておき、次回からちょっとだけ……ちょっとかわからないけど、世界が変わります」

迅「まあ、ネギま！なわけだけど。アンケート」

秋風「一日3話のペースで仕上げ、すぐにStrikersに戻ります」

迅「言ったな？有限実行しろよ？」

秋風「やってやらあ！」

迅「次回、第四十五話『辿り着いた世界、新たな出会い』ドライブイグニッション！」

第四十五話「辿り着いた世界、新たなる生活」(前書き)

ここからネギま！編です。

内容的にはみなさんナギとの出会いやエヴァとの邂逅を望んだでしょうが、stsへ行く時間枠的に単行本3巻目と間……くらくらいです多分。ではどうぞお楽しみください。

なのはラバーズとしてはリインフォースがついています。

## 第四十五話「辿り着いた世界、新たなる生活」

アテナside

「……………まったく、あの子ときたら」

まさか自分を犠牲にしてあれを使うなんて…………

「はっはっは！なかなか良い若者じゃないか！」

「ゼウス様、洒落になってません。でもまあ、彼はどこか違う覇気を感じますね」

「うむ、だからこそ…………彼にまだ死んでもらっては困るわけじゃ」

「そうですね、未来の選ばれ者…………そのためにも」

「ええ、別世界に送りました。後は彼が自力で何とかするでしょう。帰り方や何やらは」

正直心配といえば心配だけど、まあいいか。

「では私はこれで」

「うむ、下界の漫画やアニメにふけるでないぞ？」

「……………はい」

さあ見せて頂戴？神に選ばれた、真の転生者の次の物語を……

迅side

………ここはどこだ？

「………知らない天井だ」

そこはどこかの保健室だった。

「迅、目が覚めましたか」

「リインフォース？俺たちは……」

「はい、生きています」

そうか、俺は助かったのか……

「で？ここはどこだ？」

『マスター、落ち着いて聞いてください』

「ん？」

『ここはリリなのの世界ではありません』

は？

「まじで？」

『はい、マジです』

「……？何の話ですか？迅」

そうか、リインフォースは知らないんだっけ。

「……いい機会だな、リインフォースには話すよ、俺の存在が  
どういうものなのか」

こうして俺は語る。俺たちがいる世界はアニメの世界だったこと。  
俺が転生者であること。そしてすべてのいきさつを

「し、信じられません……では私は本来なら」

「ああ、はやてを助けるために消滅の道を選んだはずだ。」

「なら余計に、私はマスターに感謝しないといけませんね」

「え？」

「平行世界は、今あるこの世界です。だからこそ私の運命を変えて  
くれた」

「……どういたしまして」

そんな話をしていると、ドアがノックされた。そしてドアが開く。  
俺はゼロを持ち、リインフォースが俺の後ろに隠れる。

「目が覚めたかい？」

「あ、あんたは……」

そこにいたのは眼鏡に髭の男。居合い拳の使い手で、最強とも言われる男。

「僕はタカミチ・Ｔ・高畑だ。君の名前を覚えてくれるかい？」

「神谷迅だ……」

「できれば、君の後ろに隠れている子も教えてほしいんだけど？」

「っ……お見通しか。私はリインフォースだ」

「なるほど……で、君の事情を聞きたいんだけどいいかな？」

まあ、普通にそれならいいんだが……

「できればどうして俺がここにいるのか教えてくれ。あと、周辺で見張りにいる魔力を持つ人間を引っ込めてもらえるか？」

「なるほど、君はやはり魔法を知る人間だね」

「まあな。あとそのドアの後ろにいる奴とか？」

「フオッフオッフオ！お見通しか。見事じゃの」

でた、頭骨格がおかしい爺さん。

「まあ簡単に言うと、君が学園の広場で倒れておった。傷だらけなの。なので医務室に運んだが、驚くことに自然と傷が治った。これ

は只者ではないと思つての」

なるほどね……

「ここはどついつ場所なんだ？」

「ここは麻帆良学園という大きな学校じゃよ」

「魔法の存在を知る学園か？」

「そうじゃな」

まあいい……大体の事情は知っている。てか、これネギま！の世界かよ！

「わかつた、俺も話せる範囲で話そう」

俺は話す。とある平行世界において、次元が裂けるほどの攻撃で空間に引きずりこまれたこと。

「じゃあ君も魔法使いなわけかい？」

「……そうだな、簡単に言つと魔導士であり、魔術師であり、魔法使いつて所か」

「魔導士？魔法使いとは違つのかい？」

「まあ、媒体が違つたり、発動させるのがこんなのだつたり」

言いながらゼロを取り出す。



『こんにちは、ご兩人』

「宝石が喋るのか……」

『はい、私たちの世界では、デバイスと呼称されるものです』

「私もデバイスの一種にあたる」

「ふむふむ……なるほどのう。では神谷君、しばらくこの世界に滞在するわけじゃな？」

まあそうなるよな……元に戻る方法考えないと。

「ならばらくこの学園に滞在せんか？」

「俺に何かしろと？」

「ほっほ、良くわかつとるな」

まあ、だいたい予想はつくって。

「この学園というか、この周辺にある秘めた強大な魔力。その所有者を守るための警備か？」

簡単に言うと神楽坂アスナと近衛木乃香、それにネギ・スプリングフィールドだろうな。

「ふむ、お主だいぶ腕が立つようじゃの」

「どうだろうな……まあ、少なくともさっき周囲にいた魔法使いには負けないな」

「ほっほ、確かにそうかも知れんな……」

「別に警備するのはいいが、条件がある」

そう言って出したのが以下の内容。

とりあえず警備のためのバイト料ははずむこと

俺の住む場所の確保

俺の存在については多くを語らない

「そんなところか」

「ふむ、その辺は了解じゃ。」

「あんたも俺が知られて困ることもあるだろ？」

正直旧世界の元老たちに知られるのはまずいな。

「そういえば、マスターはもう中学3年せいですし、学びの場所が必要では？」

いいよ、もうそんなの俺はできるし。

「そうなのかい？じゃあ編入生として入ってみるのはどうだろう」

「いや、いいって」

「そうじゃのう。学生の本分をせねばのう」

おい、話聞けや。

「ですが学園長？男子校の方は確か……」

「ふむ、いっぱいじゃの。一応交換留学生として女子校のクラスに編成しようかの」

「おい、いって言うてるだろ」

「それにそのクラス、一応君の言う巨大な魔力を持つ子たちがいるんだ」

だから……

「君も護衛ということでもよろしく頼むよ」

「もうやだこいつら、人の話し聞いてくれない……」

「マスター、あきらめたほうがよろしかと」

「………なんでや」

俺はただ一言そう言った。

第四十五話「辿り着いた世界、新たなる生活」(後書き)

秋風「ということまで予告どおりの第一話！」

迅「まさかの学園編からかよ！」

秋風「あっはっは！だってナギ編からやったらえらいことになるもん！」

迅「あほか」

秋風「いいだろうが！」

迅「まあいいけどな」

秋風「では後に2話！お楽しみください！」

迅「次回、第四十六話『転入3-A！』次回をよろしく！」

第四十六話「転入！3-A！」（前書き）

はい、二つ目です。いろいろと無茶設定はスルーで（笑）

## 第四十六話「転入！3-A！」

ネギま！の世界に来て次の日。俺は提供された『女子寮』に来た。なぜか知らんが、そこしか開いてなかったらしい。

「おはようリインフォース、ゼロ」

「おはようございます、迅」

『おはようございますマスター』

「綺麗な世界ですね……はやくたちにも見せたいくらいです」

そうだな、確かに……この学園って学園じゃねえよな。一つの都市だよな。

「そういえば、高畑先生がこれをと」

そう言っつてリインフォースが持ってきたのは制服だ。青いブレザー？

「この学園ではないらしいです。交換留学生なので」

「なるほど」

俺が着替えると、リインフォースは朝食を作って並べていた。

「すごいな、お前が作ったのか？」

「ええ、はやくてに教えてもらいました」

よかった・・・シャルルに教えてもらったとか言われたらどうしようかと思った。

「うん、おいしい」

「よかった」

うん、よかった・・・おいしい・・・

「ごちそうさま。じゃあ行くか」

「はい、そうですね」

ということであまり早くに学園へと出発する。学園長室で待っていると、一人のガキンチョがやってきた。赤い髪に眼鏡をかけて、茶色い杖を持ち、肩にオコジヨを乗せた少年。

「おはようございます学園長」

「うむ、おはようネギ君」

なるほど、こいつがネギ・スプリングフィールドだな。

「実は君のクラスに急遽一人転入生が入ってな」

「この子供が、教師なのですか？」

リンフォースが驚くのも無理はない、そこにいるのは10歳の子供だからだ。

「君のクラスは女子校だけど、男子校がいっぱいだね。彼を入れることになったんだ」

「……神谷迅だ。よろしく頼む」

「あ、はいっ！ネギ・スプリングフィールドって言います！」

「この魔力、あなたは魔法を使えるんですね」

「えっ！？あの、その……」

「申し遅れました。私はリインフォース……この世界で言えば、迅の従者ということになります」

「この、世界？」

じじい、説明したんじゃないのかよ。

「ほっほ、忘れとった」

「しょうがない、後で俺が説明する」

ってなわけで、リインフォースは小さくなってバッグに入り込んだ。

「小さくなった！？」

「そのオコジヨとかわからねーよ。おめー喋れるだろ」

「き、気がついてたのか！？」



「ヤニ臭いオコジョがどこの世界にいるんだよ」

ばれてないつもりだったのか？

「……まあ別にばれたからどうこうというのものない。よろしくな先生」

「あ、はい！よろしくお願いします！」

かちかちだな。ま、いいか……

「あ、ネギ」

「あ！アスナさん！」

そこにはツインテールの少女。なるほど、この子が……

「（黄昏の姫巫女……ですね）」

「で、あんた誰？」

「神谷迅だ。今日からこいつのクラスの世話になる。」

「ふーん、あたしは神楽坂アスナ。ネギのクラスよ」

「そうか、よろしく」

挨拶を済ませ、廊下を歩く。さてさて、ここがあのか・Aか……

「じゃあ、僕が呼んだら入ってきてください！」

「お前、かなり張り切ってない？」

「はい！男性の生徒さん持つの初めてですから！」

「あ、そ」

「皆さん、はようございませーす」

『おはようございませーす』

本当に馬鹿クラスだ。

「きよ、今日はですね、新しい仲間ということとで、別の学校から転入生の男子生徒さんが来ます。皆さん仲良くしてください」

男子生徒！？

かっこいいのかな？

どんなこ？

など、いろいろと飛び交ってる。まあそういう反応だよな……俺カッコいいとも言えないし……反応が微妙だろうな。

「（迅は十分カッコいいですよ？）」

「（そう言ってくれると少しうれしいよ）」

そうしてクラスに入る。みんな無言……まじか。まあいいや。

「えっと、神谷迅って言います。よろしく」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

なんだ？この反応・・・・・・・・一応笑顔で言ったんだが・・・・・・・・

「かつ・・・・・・・・」

蚊？

『かつこいいいいいいつつつ！！』

一瞬鼓膜が破れるかと思った・・・・・・・・

「どこから来たの！？」

「その学校の制服！？」

「どうして来たの？」

「スポーツとかやってる？」

質問攻め・・・・・・・・これ辛い・・・・・・・・

「はいはい！ここからは私、朝倉和美にお任せ！」

おおっ、パラッチが出た。

「名前は？」

「神谷迅」

「誕生日は？」

「10月4日」

「出身地は？」

「日本」

「趣味と特技は？」

「趣味は・・・格闘技かな。特技は料理」

「女性経験は？付き合ってる人とかは？」

「ノーコメント」

「最後に、このクラスで好みは？」

「それもノーコメントで」

その後何人かから質問を受けて、質問終了。

「とりあえずよろしくお願いします」

パチパチパチパチパチ

そんなわけで、俺の3-Aでの生活が始まった。英語の授業

「じゃあ次、アスナさん。次のところを和訳してください」

「え？えーと……………」

アスナの汗がだらだらと垂れてくる。こいつ馬鹿だからな。しょうがない……………」

「え？あ……………」

「だめですか？」

「えつとね……………」風は吹き抜け、木の葉はなびきます。木の葉は舞い、地に落ちる。落ちる木の葉をサニーは拾い上げ、大切に持って帰りました……………」

アスナが終わらせた瞬間、教室から歓声が沸く。

「すごいですアスナさん！正解です！」

「馬鹿レツドが正解した！すごい！」

などなど……………」え？何したかって？答えをそのままアスナのノートを書き換えたただけだよ？で、アスナが驚いて俺を見る。あれ？バシタ？

「じゃあ次は……………」

そんなこんなで授業は終わった。あー、疲れた。で、現在俺は屋上で空気を吸っている。

「ちょっとあなた」

声がするほうを見ると、アスナがいた。

「ん？なんだい？」

「私のノート、何かしたでしょ」

『鋭いですね……………』

な……………どうしてそう思ったんだか。

「何の話？」

「あなた、魔法使い？」

「何を馬鹿な。魔法なんて……………」  
「さっきカモと話してるの見たわよ」「う……………」

なるほど……………だからか

「俺は魔法使いであり、魔導士であり、魔術師さ」

「ふーん、つまりオコジヨが話しても驚かないってことね」

「で？それ知ってどうするの？」

まさか、殴るのか？

「別に。英語のノートが正しく入れ替わったから正直なんのつもりかと怒るうかと思ったけど、助かったから許してあげるわ」

「そりゃーどうも、神楽坂」

「明日菜よ」

「？」

「明日菜って呼びなさい。」

「オーケー明日菜。改めてよろしくな。俺も迅でいいぜ」

「ええ、よろしくね……えと、迅」

「おう」

意外と可愛いじゃないか。

「あ、そうそう……ちょっと教室まで付き合いなさい」

「？ああ……」

言われるがまま3・Aに戻る。で、教室を空けるとクラッカーの音が鳴り響いた。

『神谷君！ようこそ3・Aへ！』

「え？何これ」

「何って、歓迎会よ。歓迎会」

「はいはい！主役はこっちちゃで〜！」

と、言われて木乃香に連れて行かれる。で、座らされた。

「はいジュース」

「これ食べるヨロシ！」

「お、おう」

なんというか女子校なのに俺に対して抵抗がないのかこいつらは。

「あはは、楽しいですねー」

ネギ、後でしばく。

「（おいしそうですね・・・）」

「（後でお土産でもらってやるから我慢して？）」

「（はい、ありがとうございます）」

リインフォース、お前いつからそんなに食い意地張るようになった。

「やあ、神谷君」

「ああ、高畑先生」



「今日の夜、さっそく君を紹介するそうだ。よろしく頼むよ」

「ええ」

と、小声で会話。たぶんこれはタカミチと模擬戦かな……  
まあどうでもいいけど。

で、夜になって魔法先生やら何やらが集まってきた……  
たいしたことなさそうだな。お？刹那とマナじゃん……あいつ  
らも警備してんだ。

「さてさて、今日は異世界から来たという少年……神谷君を  
みに紹介しよう」

異世界？

魔法世界のことか？

それにしてもずいぶん弱い……

などとど言葉が飛び交う。このやろう、今弱いって言ったの  
誰どころ。

「でじゃな、今度から彼も警備に回ってもらうのじゃが、みなも実  
力を知りたかろう。高畑君、ちょっと相手をしてあげなさい」

まじでか……

「よろしくね、神谷君」

「楽しそうだな、あんた」

「そんなことないさ」

なんて言ってるタカミチは、  
ずいぶん楽しそうだ。  
こうしてタカミチとの戦いが始まる。

第四十六話「転入！3-A！」（後書き）

秋風「よし、二話目終了！次行くぜえ！」

迅「次回、第四十七話『VSタカミチ！そして修学旅行へ！』次回もお楽しみに！」

第四十七話「V S タカミチ！そして修学旅行へ！」（前書き）

日にちがあきましたがどうにか3つ更新です。今日も一日頑張りま  
す

## 第四十七話「VSタカミチ！そして修学旅行へ！」

世界樹の広場。そこで俺はタカミチと対峙する。

「さて、やるつか？」

「勘弁してくださいよ、勝てませんって」

「何、遠慮することはないよ」

「ほーう？完璧に俺をなめてるな？」

「おいじーさん、やっぱ無理だつて」

「高畑君も本気は出さんよ」

おお、完璧になめられてるよ。他の魔法先生たちも俺が勝てると思  
つてないらしいな。ふむ……

「では行くつか」

「はぁ……ゼロ、セットアップ」

『オーライ、スタンバイレディ！』

甲冑を纏い、Zセイバーを握る。

「なるほど、君の世界の魔法だね？」

「まあな……ルールは？」

「どちらかがギブアップするまでだそうだ」

なるほど……

「なら、行くぜ！」

瞬動で背後を取り、Zセイバーを振るう。だがタカミチはそれに反応して下がった。おー、早い早い。

「君、猫をかぶってたね？」

「それはお互い様ってことで」

俺が言うと、タカミチが少し嬉しそうに笑う。

「じゃあ僕も遠慮しないよ？」

「どうぞお好きに」

互いに再び瞬動で攻撃しあう。

「うーむ、あんまり面白くないな」

『とーとーとー』

「やっぱり拳と拳でやらない？」

『オーライ、ゼロナツクル』

「セイバーがゼロナツクルに変わる。これだけでも威力高いしな。」

「剣は良いのかい？」

「安心しろ、俺は素手でも強い」

「ふふっ……おもしろいね！」

今度は拳がぶつかり、互いに距離をとる。

豪毅 居合い拳！

「おっと！一発目はサービスか？」

「そうだね、次は当てるよ？」

再び放たれる。なるほど……

「なら、簡単に防げそうだ。熾ロ・アイアス天覆う七つの円環！」

七枚の花びらの盾が居合い拳をかき消した。

「珍しい魔法だね」

「これは宝具と呼ばれるもの。トロイア戦争の英雄、ヘクトールの投擲を唯一防いだというアイアスの盾だ」

「それが本当なら、僕の居合い拳が通らないわけだ」

まだ余裕か？さすがはAAクラスだな。この程度じゃ驚かないか・・・ならこれだな。

「トレース・オン  
投影開始」

俺の手に夕凧が宿る。さつき刹那が持ってたの見たし、漫画見てるし、余裕だな。なんというか、俺の投影は記憶からでも再現が可能らしい。この辺はチートらしさだな。

「それは・・・」

「なんだ？異世界の俺がこれを持ったらおかしいか？」

「なぜ、君がそれを？」

「さあな、勝てたら教えてやるぜっ！」

俺は全力で殺気を放ち、夕凧を構えて斬りかかる。

神鳴流奥義 斬岩剣！

「っ！」

豪殺 居合い拳！

「やっと本気になったか・・・ならこっちも容赦しねーぜ！」

神鳴流奥義決戦奥義 真・雷光剣

「っおおおっ！」



やべ、やりすぎたかな……

「ふう、まさか……神鳴流を使えるとはね……」

ポロポロのタカミチ。おいおい……あれかなり本気だぞ。紅い翼にはチートキャラしかいねーのかよ。

「どうだ？まだ続けるか？」

「いや、ギブアップだよ……僕では勝てそうにない」

「あ、そ……んじゃあ終わりで良いな？じーさん」

「う、うむ……見事じゃ。では警備に移ろう。あとその辺を直すかの」

やべえ、だいぶぐちやぐちやにしちまったな。ま、いつか……

「んじゃ、俺も警備行くか。リインフォース」

「はい、マスター」

こうして俺は闇夜を舞った。ちなみにこの日、ネギとエヴァが戦ってたらしい。なんで魔法先生たちは気がつかなかったんだ？

## 二日後

「えーと皆さん！来週から僕たち3-Aは京都・奈良へ修学旅行へ

行くそーで・・・!!」

おお、そういえばそんな時期か。

「もー準備は済みましたかー!？」

『はい!』

子供かよみんな・・・

で、班を決めることになる・・・俺はどこでもいいや。

「ネギ、部屋は同じらしいな」

「はい、まあ神谷さんの場合みんなと同じ年齢ですから」

捕まるよな。普通に。

「にしてもギャーギャー騒ぐねえ」

班は大方決まったのに、なんか騒いでる？

「リインフォースさんは？」

「あいつは俺と同じじゃないと嫌らしい」

「え、でも・・・」

「大丈夫だよ、大きさは自由自在だし。カモと同類の精霊の類だしな」

実際はユニゾンデバイスだけど……。

「ネギ君、神谷君、学園長がお呼びですよ〜!」

「え？学園長が？」

ああ、そういえばあれだっけ？向こうが拒否とかするの。ホームルームを終えて学園長室へと訪れた。

「え……し 修学旅行の京都行きは中止〜!？」

「うむ……京都が駄目だった場合はハワイに……」

「キョウト……」

あーあー、ネギの奴落ち込んでるよ。

「落ち着けネギ。じーさん、駄目だった場合ってことは、まだ決まってるんだな？」

「うむ、実は先方がかなり嫌がっておつてのう」

「あんたが言うつてことは、魔法の関係か？」

「そうじゃ、関西呪術協会……それが先方の名前じゃな」

「関西……呪術協会!？」

そういえばこっちだとじーさんが関東の魔法協会の理事だっけ？

「わしは関東の魔法協会理事もやっとなるんじやが、昔から仲が悪くてのう」

「なるほど、だからネギがいるのを嫌がると」

「そのとおり」

「じゃあ僕のせいですか!？」

「まあ聞きなさい。ワシとしてはもーケンカはやめて西と仲良くしたいんじや。そのために君たちに特使として西へ行ってもらいたいん？」

「ネギはわかるが、なぜ俺なんだ？」

「君は神鳴流を使ったるうに」

「あーあれか？あれはただの『コピー』だ」

「『コピー』とな？」

しよがない、少しネタばれするか。結界を張り、説明を始める。

「俺の体には生まれつきある能力が備わっている。それが『神の本棚』だ」

「神の本棚？」

おおつ、ネギいたのかよ……まあいいや。

「俺の脳には、あらゆる並行世界の知識が表現できる。それは世界の魔法、技は問わない。」

「なるほど、規格外じゃのう……」

「まあな。つまり俺は神鳴流には親しくない。後俺が異世界から来たのは知ってるだろうが」

「ほっほ、言われてみればそうじゃったのう」

「じーさん、この話外部に漏らしたらこの学園破壊するぞ?」

「わーっとるわい。昨日のことで承知しとる!」

こうして、俺とネギは特使として西へ向かうことになった。

「ふえ〜神谷さんは本当に異世界から」

「ああ、といっても魔法世界とは違うぞ」

「それはどづいつことぞい」

「そうだな、例えばネギが魔法を覚えられない世界や、カモがここに来ない世界なんていう無限の世界の一つ……それが俺の世界だ」

「な、なるほど……」

さすが大学を出れるほどの頭を持った子だ。物分りがいい。

「んじゃネギ、俺は準備しに行くから」

「はい、神谷さん！」

「それと、俺のことは迅でいいぞ？それとも兄でも」

「え……いえ、生徒と先生ですから」

んなこといつてもお前ガキだろうに。

「遠慮すんな、子供ってのは甘えたりしないと可愛げねーぞ？先生である前に子供であることを自覚しろ」

「あ、はい！じゃあえと、迅お兄さん！」

まだ固いけど、いいか。

「よし、んじゃなネギ。パクティオーカードはなくすなよ？」

「な、なんでそれを！」

「兄に不可能はない！」

俺は言いながらその場を後にした。

さーと……俺も買い物行こうかな。

「（迅、何を買いに？）」「

「ん？服とか……あとお前も欲しい物あるんだろ？」

「（あ、はい……私も服を）」

ならいいじゃん。ちょうどいい。金はじーさんからたっぷりもらってるしな。

「じゃあ買い物に「な」遊ぼうぜえ！」ん？あれは……」

なんか知らないが、ちゃらい男5人が女子生徒をナンパしている。あれって……

「大河内アキラ？」

バッグ持つてる。たぶん帰りか？

「私用事あるので」

「いいじゃない、遊ぼうよ」

う、わ……

「（助けましょうよ）」

まあ、同じクラスだしなあ……

「あんたら、その辺にしとけよ」

「あん？なんだてめえ！」

「……通りすがりのお人よしだ。覚えなくて良い」

「ふざけたこと……ぐふえ！」

「彼女はクラスメートでね、悪いけど引いてくれる？」

「やろっつ！やっちまえ！」

お決まりのパターン……っつか、雑魚キャラのセリフだぞそれ。アキラがわからない程度に魔法で潰すか。

「(ゼロ)」

『オーライ、ゼロナツクル装備』

とりあえず怪我しない程度にと……

「はあっ！」

『ぎゃあああああああ』

全員吹っ飛びました。

「大河内さん、大丈夫？」

「あ、うん……ありがとう。神谷君強いんだね」

「まあね。それより早く帰ったほうが良いよ？」



「うん・・・その、本当にありがとう！」

アキラが顔を赤くして去っていった。

「どうしたんだあいつ」

「（迅・・・）」

「え？俺何かした？」

「自分の胸に聞きなさい！」

リインフォースがアウトフレームになって、そのまま歩いていった。  
俺何かしたのか？

余談だが、このあとリインフォースの機嫌を直すのに一時間かかった。

こうして、京都編が始まる。

第四十七話「VSタカミチ！そして修学旅行へ！」（後書き）

秋風「はい、ということまで日にちがずれましたがネギま！編スター  
ト！」

迅「なぜにナギたちの時代じゃないの？」

秋風「いろいろあんだよ。がまんしろ」

迅「一応言っと、3話更新しろよ？」

秋風「まかせろ！さて、最初のフラグはアキラです」

迅「なんでアキラ？」

秋風「好きだから（笑）あとフラグは増えるからな」

迅「まじかよ……って、なにこれ！？」

秋風「ガンダムだ……」

迅「俺に乗れと？」

秋風「じゃないの？」

迅「おお、おもしろい！」

秋風「ありがとございました。ではまた！」

迅「次回、第四十八話『修学旅行開始！関西の妨害を阻止せよ！』  
次回もお楽しみに！」

**第四十八話「修学旅行開始！関西の妨害を阻止せよ！」（前書き）**

今回は何を血迷ったのか4回連続です。明日は投稿できるかわかりませんが、頑張ります

第四十八話「修学旅行開始！関西の妨害を阻止せよ！」

朝7時

「ふあゝ……………」

「おはようございます、迅」

「ああ、おはようリインフォース。準備は？」

「はい、ちゃんと準備しました。朝食もできてますよ」

「そっか……………じゃあ荷物はこれに入れてと」

リインフォースの荷物は『メル』で使用するアームの『ジッパー』の中にしまい込んだ。これアームだけじゃないんだな。入れられるの。

「じゃあ朝飯食べて、早く行こうか」

「はい、そうですね」

朝食を食べて大宮駅へ。この世界の日本地図はどうなってるんだろ  
う……………

大宮駅

「えーと……………」

大宮には前に遊びに来たな……

作者は何度も遊んでます。高校が埼玉だったので  
なんか変な電波来た。まあ良しとして集合場所は……

「おはよーございませーす！」

おお、みんな集合してるよ。早いな。

「おはようネギ。10歳に早起きはきついと思っていたが」

「もう京都行くのが待ち遠しくて！」

楽しそうだなこいつ。まあそれなら子供らしいな。

「んで、俺はどの班に行けばいいんだっけ？」

「はい、迅兄さんは4班です」

4班って言うとなあスポーツ娘たちか。

「やつほー神谷君。よろしくね！」

「ああ、明石さんが班長だったね。よろしく」

そついえばここ真名もいるんだっけ。

「さてネギ、時間じゃないか？」

「はい、そろそろ集合しましょう!」

こうして集合する。……やけにアキラと俺の距離が近いって、ん?

「泉さん、どうした?」

新幹線に乗る前から体調が悪そうだ。

「気にせんといてえ〜肉まん食べすぎたんや〜」

いや、明らかに大丈夫そうじゃないから。

「水でも買っとくか。ほれ」

「おおきに〜……」

マジで体調悪そうだな。ま、大丈夫だろ。で、車内。

「えーと、俺はここか」

亜子とアキラの間かよ……

「えっと、俺外側行こうか?」

「え? いいよ! というか、ここにいてくれて!」

……? アキラどうしたんだ?

「(迅の鈍さには時々呆れます)」

何言ってるのぞ。まあいいけど。

「特に怪我には気をつけ……ってわぁ!？」

あはははははは!

「(迅……)」

「(わかってる。式神だな……)」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。ちょっとトイレに行くよ」

言っただけで席を立つ。さーて、トイレでゆっくりするか。

「(助けないんですか!?)」

たかがカエルに付き合ってるかよ……問題は親書だ親書。

「キヤー!？」

出たな……

「(迅!)」

ツバメ……よし、ゼロ

「Zセイバー」



『了解』

「セイバーを取り出し、飛んできたツバメを真っ二つにした。

「僕の親書　！わぷ！」

「ったく、アホかお前は。気をつける」

「あつう」

「旦那、助かったぜ！」

親書は無事だな。よしよし。

「気をつけるネギ。向こうに行ったら敵だらけだと考える」

「は、はいっ！」

「あとカエルはたぶん式神だ。その辺は払え」

「わかりました」

ネギが大慌てで戻っていった。

「んで、出てきたら？桜咲さん？」

「……気づいてたのか」

「そんだけ殺気があればねえ」

「あなたが、スパイですか？」

「何故かな？」

「神鳴流の継承者に、貴方のような人物を見たことがない」

ほうほう……なるほどね。

「安心しな、俺は関西とは関わりがない。君は君の仕事に尽くせばいい」

「……………」

「あとネギが君の事をスパイと疑ってるから、早めに誤解を解くように」

言って、俺も席に戻ることにした。

「皆さん降りる準備してください！」

もう着くのか、早いな……

「あ、神谷君」

「ん？」

「な、なんでもない……」

変な奴・・・まあいいや。さて忘れ物もないし・・・後は・・・

「ネギ、気を引き締めてな」

「はいっ！では皆さん！いざ京都へ！」

『おー！』

アキラ side

・・・なんか、きっかけがない。この前のお礼を何かしたかった  
んだけど・・・

「どーしたのアキラ」

「ゆうな・・・うんちよっとな・・・」

「ははっん」

ゆうながいきなりにやける。な、なに!?

「さてはアキラ、惚れたね？」

「えっ・・・」

な、なんで!?

「ネギ君に」

言われた瞬間私はずっこけた。

「ち、違うよっ!」

「あれ?違うのー?」

「違うってば」

ゆーな、なんかずれてる。

「でもアキラがぼーっとするなんて珍しい。どないしたん?」

「えと、実は昨日不良な人に絡まれて……」

「ええっ!?!」

「だ、大丈夫だったの!?!」

「それで神谷君に助けってもらったんだけど、お礼がしたくて」

どういうお礼すればいいかな……

「ふっふっふ……ならアキラ、自由行動の日にも誘っちゃいなよ」

「ええっ!?!」

いきなりなんで!?!

「アキラスタイルいいし、いけるって！」

「いや、そういうわけじゃ……!!」

「頑張つてねアキラ！応援してるよ！」

まき絵まで……

「?どうかしたの？」

「な、なんでもな……わひゃあ!？」

「うわっ!ど、どうかしたのか？」

神谷君いつの間にも後ろに!

「な、なんでもない!なんでもないれす！」

舌かんじやった。

「ならいいけど、バスが着たから乗れってネギが」

「んじゃ行くよ」

うう……本当はどうしたんだろう私

迅side

さて、清水寺か……

「来るのは二度目だな」

中学のときの修学旅行は京都だっけ、懐かしい。

「はいはい」

「ねえ、お兄さんて？」

「いや、親しみを込めて」

「ふーん」

なんだよ明日菜。

「別に、気になっただけ」

「そう？お前もお姉ちゃんって呼んでもらえば……」

「馬鹿言っでないで並ぶわよ！」

「いつて……殴ることはないだろ」

「あんたが馬鹿言っからでしょ」

「はい、撮りますよ〜！」

で、写真を撮った。場所はネギの後ろ辺り。で、清水寺の場所に着いた。

「京都おーっ!!」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かつ！飛び降りれっ！」

「おやめなさいっ！」

おーおーテンション高いな。

「ネギ、親書は？」

「はい、ちゃんと」

「ならよろしい」

この先は……ああ、あれか、落とし穴とお酒……

「この辺はスルーでいいか。リインフォース」

「はい、気持ちがいいですね」

「ああ、だな」

「この後は？」

「このまま旅館に行つて対策でも練るか」

正直俺がいなくてもネギなら大丈夫だろ……

「みんなが神社で騒いでる間にちよつと遊ぶかな」

「そうですね……では元に戻っても「神谷君」！」

急いでリインフォースがバックに戻る。この声は……

「大河内さん。どうかしたの？」

「あの、みんながお酒に酔っちゃって……」

思ったより早かったな。

「あらら……わかった行こうか」

アキラがだいぶ焦ってる。まあネギだけじゃ收拾つかないよな。そんなわけで何とか全員をバスに押し込み旅館へ。部屋で寝かせた後、ネギと会議を開く。

「さて、どうしたもんかね……」

「みんなに迷惑を……」

「気にははいけませんよネギ君。あなたは精一杯やってるのですから」

「あ、はい……リインフォースさん」

「だが兄貴、旦那……どうするよ？」

まあ實際けが人は出てないしな。



「やっぱりあの刹那って奴の仕業に間違いねえよ兄貴！」

「そうかなー……」

「その線は薄いと思うけどなあ……」

なんて話していると、明日菜がやってきた

「ちよつとネギ！迅！」

「アスナさん！」

「一体何があつたのよ」

「えつと……」

「実はな……」

俺はアスナに事情を話した。

「また魔法の厄介ごとか」

「すみませんアスナさん」

「ふふつ……どーせまた助けて欲しいって言うんでしょ？いいよ。ちよつとなら力を貸してあげる」

「ア……アスナさん」

「これで心強い仲間が加わりましたね？」

「え？お人形が喋った!？」

「そういえば初対面だっけ？」

「私はリインフォース。迅の従者です。」

「あ、神楽坂明日菜です。」

なんて会話の後、刹那について話し合い、ネギは風呂に向かった。俺は後で良いと促し、とりあえず外へ出た。これからの戦いの準備のために……

第四十八話「修学旅行開始！関西の妨害を阻止せよ！」（後書き）

秋風「もうやめて！私のライフはもう0よ！」

迅「突っ込んで欲しい？」

秋風「すいませんでした」

迅「まあ、もう栄養ドリンク飲んでるしな」

秋風「昨日から今日までカラオケに連れて行かれてました」

迅「どんまいだな」

秋風「がんばります」

迅「次回、第四十九話『久々ライダー 縮まる距離』次回もお楽しみに！」

第四十九話「久々ライダー 縮まる距離」(前書き)

まだまだ行きます！

第四十九話「久々ライダー 縮まる距離」

「このかさんを返せ！」

おっと、ようやく出番か……って、あれ？

「なんか鬼が多くない？」

「おそらく魔法使いが多いことがわかったんでしょ」

そう、原作と違って鬼の数が多い。しかも鬼っぽい。

「ようネギ」

「お兄さん！」

「雑魚は俺がやろう。君たちは近衛を」

「はいっ！」

「あんた一人で平気なの！？」

「おう、任せろ……そうだな、これで行こう」

久しぶりにライダーになるとしよう。

「変身」

『HENSIN』

マスクドライバーカブトになると、俺はクナイガンを連射して鬼を蹴散らす。

「お前らは早く行け！」

「は、はいっ！」

「……思った以上に鬼が多い。仕方がない」

「リインフォース」

「はい、迅」

「お前にこいつを貸す」

言いながら、俺はもう一つのライダーベルトを渡す。

「わかりました。行きましょう。変身」

『H E N S I N 』

マスクドライバーガタックとなったリインフォースが敵をなぎ払う。

「いくぞ」

「はい」

「「キャストオフ」」

『CAST OFF!』

外部装甲が弾け飛び、ライダーフォームへと姿を変える。

『CHANGE BEETLE』

『CHANGE STAG BEETLE』

「クロックアップ」

『CLOCK UP』

クロックアップの状態で駆け出し、次々と鬼を蹴散らす。そして先  
にいるでかい鬼を見る。

「リインフォース!」

「はいっ!」

俺たちはフルスロットを押し始める。

『ONE TWO THREE』

ゼクターフォーンを元に戻し構えを取る。

「ライダーキック!」

再びゼクターフォーンを戻し、タキオン粒子を蓄積させた。

『RIDER KICK!』

同時攻撃のライダーキックによって鬼は撃沈した。

『CLOCK OVER』

鬼たちが爆発し、消滅した。

「よし、行くぞ」

俺は変身を解き、ネギたちの所へ向かった。

「このかになんてことするのよーっ!」

「このかお嬢様に何をするかーっ!」

お?もう決着が付きそうだなおい。

「フランス エクサルマティオー  
風化!武装解除!」

「なああああああ!?!あたーっ!」

秘剣 百花繚乱!

おお、決着がついた。俺の出番なしだなおい。

「お、覚えてなはれー!」

「まてー!」



「やめとけアスナ。追うだけ無駄だ。」

「あ、迅。早かったわね」

「まあ、お前らが片付けたから問題ないみたいだな。それより、近衛は？」

「そつだ兄貴！あいつ札とか薬とか使うとか言ってなかったか！？」

「そつだ！このかさん！」

あー……まあ大丈夫だろ。俺は帰ろうかな。

「あ、待ってくれ」

「ん？」

「その、助かりました……足止めされていたらお嬢様は危なかつたし、ありがとう」

「なーに、気にするな。またなんかあったら手を貸すぜ。じゃーな」

言つて、俺は先に旅館へ戻ることにした。

旅館に戻り、温泉に入る。ここの温泉は24時間いつでも入れるという珍しい温泉だ。というか、ここの温泉の維持費大丈夫なのか？

「ふ……」

気持ちいいな、温泉。

「まったくですね」

「……ん？」

「リ、リインフォース!？」

そこにはアウトフレームになったリインフォースがいた。タオルを巻いてはいるが、かなり状況的にまずい。

「な、なんで……!」

「迅、看板を見ましたか？露天風呂は混浴ですよ？」

そ、そういえばここ混浴なんだっけ……

「だ、誰かに見られたら……」

「もう深夜2時です。誰も入ってきませんよ」

そうじゃなくて！

「胸があたってる!」

「当ててます」

「こ、こいついつの間になんな性格になったんだよ！

「なのはやフェイト、はやて……それに将までいないのですから、

私と二人つきりでも良いでしょう」

「あ、あのなあ！」

「私はユニゾンデバイスでも、貴方を想っているのですよ？」

「そ、それはわかってる！わかってるから！」

こんな風呂でそんなこと言われたら洒落にならん！

「お前の気持ちはわかった！わかったから離れる！誰か本当に入ってきたら取り返しがつかん！」

「だからもうこんな時間には・・・」あー疲れた」「ほんまやね

」

そこにいたのはアスナと木乃香・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うひゃー!?!」

「え・・・・・・・・・・・・・・・・」

アスナ硬直。近衛は顔が真っ赤で目をふさぐ。

「・・・・・・・・のよ」

「え?」

「何してんのよあんたあー！」

ハリセンで吹き飛ばされました。

「ふ、不幸……だ」

俺はそこで意識を手放した。

次の日の朝

「まったく、何してるのよあんた」

「俺じゃない、リインフォースが悪い」

「私はただ迅と触れ合っただけです」

「あんたも変なこと言わないで」

ただいま朝からアスナに説教喰らってます。

「だから誤解だ。別に変なことしてない」

「あの状況でそついうこと言える？」

「まあ、確かに言えないけど」

なんで俺は年下に説教を喰らってるんだ……あ、今は同じ年か。

「とにかく気をつけなさいよ。知ってるのは私とネギと刹那さんだ

けなんだからね。このかの説得だつて大変だつたんだから」

「ありがとアスナ……気をつける」

「わかればいいわ。ほら、ご飯食べに行きましょう」

「おっ」

はあ……あと2泊は地獄になりそうだな。

朝食を終え、今日は班行動。そういえば4班はどこに行くって言うたけ？原作ではどこかに見学とかまき絵が言ってたけど……

「神谷君やつほー」

「ん？明石さん。おはよう」

「今日はどつするっどつに行きたい？」

「んー……まかせるよ。のんびりできればそれでいいし」

「オツケー、じゃあこつちで決めちゃうね」

そう言つてゆーなが立ち去る。なんだつたんだ？

アキラ side

うーん……どつしおつ

「ほらアキラ、チャンスだって！」

「え、何が？」

「神谷君特に行きたいところないから、アキラが行きたいところ決めて二人きりになれば！」

「え？え？どうしてそうなの？」

「いいじゃんいつとけ！」

あゝも〜・・・なんかみんなおかしいよ

「私はお礼をしたいただけだって・・・」

「でも不良から助けてもらったとき嬉しかったんでしょ？」

「それは、そうだけど・・・」

「なら行けっ！ほら！」

「わっ！」

私はゆーなに押され、神谷君のところまで寄った。

「おはよう大河内さん」

「あ、うんおはよう・・・」

「……………」

「あ、あの、神谷君？」

「何？」

「い、いやその、今日は奈良公園に行かない？」

あれ？なんで私緊張してるんだろう。

「ああ、別に良いけど」

「じゃあ、また後で」

「うん、了解」

私はそれを聞いて急いでゆーなたちの所へと戻った。

迅side

なんだっただ？今の

「そつえば迅お兄さん」

「ん？どうしたネギ」

「お兄さんはどうやって昨日の鬼を退けたんですか？」

「ああ、アレはまあ、色々やって潰した。そのうち見せるよ」

「は、はあ」

別に今見せるほどでもないしな。

「んじゃ、俺は行くぞ。4班だし」

「はい、お気をつけて」

こうして俺は4班となら公園へ向かった。

### 奈良公園

「（ここが奈良公園ですか）」

「（ああ、鹿が多いな）」

色々遊んでるゆーなたち、鹿に興奮するってどんな女子中学生だよ。

「この後はえーと……………」

ネギがのどかに告白されるんだっけ？そのあとネギの唇争奪戦。俺が力になってやるのは次の日からだな。

「……………ってあれ？」

いつの間にかあいつら消えた？



「あの、神谷君」

「ん？大河内さん」

「まき絵たち、先に行ったみたい。だからよかつたら一緒に行かない？」

「あー、別に良いよ」

特に断る理由もないし。

「じゃ、じゃあ行くわ」

こうして俺はアキラと奈良公園を回るようになった。

大仏……前にも見たなあ

「そういえば神谷君、アスナのことアスナって呼んでるよね」

「ああ、あいつがそう言えって言ったから。」

「じゃあその何というか……私もアキラで良いかなって」

「へ？」

「べ、別に深い意味はないよ？ただその、そのほうが友達っぽいかなって」

友達……か

「そっか、じゃあ俺も迅でいいよ」

「あ、うん!」

まあよくわからないが、アキラが笑顔になったのでよしとしよう・・・ん？

「(迅!)」

「(ああ、何か気配を感じるな・・・多分隙を狙うつもりだ。)(原作にはなかったが、やはり監視の目はあつたらしいな。」

「悪いアキラ、俺ちょっとトイレ行ってくる」

「え、あ、うん・・・」

「すぐ戻るから!」

こうして俺はトイレへ走るフリをして外へと向かった。

ゆーな side

おお!なんか進展した!私たちは今影から二人の様子を伺っていた。でもなんかいきなり走って行った?

「あれ、どうしたんだろ」

「トイレとか聞こえたで?」

「でもトイレってあっちだよー？ねー龍宮さん」

「・・・あれ？龍宮さんは？」

「いないね・・・」

龍宮さんもどこかに行っていた。

第四十九話「クワライダー 縮まる距離」(後書き)

秋風「そ、そろそろ限界が」

迅「そのままくたばれ」

秋風「それ生みの親に言うセリフ!？」

迅「次回、第五十一話『二人の銃使い、ネギ、迅キス争奪戦』次回  
もお楽しみに！」

秋風「無視!？」

**第五十話「二人の銃使い ネギ、迅キス争奪戦！」（前書き）**

五十話になりました。蒼天シリーズを更新してなくて申し訳ない。  
がんばってネギまを終わらせませす。

第五十話「二人の銃使い ネギ、迅キス争奪戦！」

「この辺だな」

「ほう……気がつくとはな」

原作でも見たことがない奴らが5、6人……なるほど、陰陽師

「貴様は危険だという情報が入った。そうそう消えてもらう」

「やれるもんならやってみな」

俺は構えを取る。すると前回より大きい鬼が姿を現した。

「前鬼、後鬼……か」

「西洋魔術師も一人ではこれには勝てないだろう！しねえ！」

鬼たちが襲い掛かる。よし、行くか！

ガアンツ！

いきなり銃声がとどろく。周囲には結界が張られているので問題はないが。この銃声は……

「龍宮さん！？」

「やあ神谷……手を貸すよ」

別に良いけど……だが頼もしい

「んじゃ、お言葉に甘えよう」

背中合わせになり俺は『BLACK CAT』のトレインの装飾銃である『ハーデイス』を取り出した。

「行くぜ」

「ああ」

真名もライフルを構える。そして銃撃が轟く。

「はあっ！」

クイックドロウ  
早撃ち4連！

「む、やるな」

「まあな」

「てつきり剣ばかりだと思っていたが……」

そういえば俺とタカミチの模擬戦見てたんだっけ？

「なら、これはどうかな？」

俺の体からバチバチと電気が放出され、ハーデイスに蓄積されていく。

レールガン  
電磁銃！

電磁銃によって鬼の数体が吹き飛んだ。

「やるな・・・だが私も負けないぞ」

行つて、真名はケースから拳銃を取り出し、四方八方へ銃を撃ち放つた。やるなあ・・・

「15歳でそれつてすごいなやっぱり」

「そうか？お前も似たようなものだろう」

「確かにな」

互いに笑いあい、再び銃を撃つ。

「な、何をしている！相手はたった二人だぞ！」

「相手が悪かったな。最後はちょっと格好良く決めるぜ・・・・・・・・  
龍宮さん」

俺はボソボソとその「格好よく」を話す。

「なるほど、お前はおもしろいな。いいだろう」

「オーケー、これで決めるぜ」

次々と銃弾に倒れる鬼たち。そして最後の一体になったとき、真名と同時に銃口を向け、どうじに打ち合わせしたセリフを言い放った。



「「JACK POT!」」

同時に鬼を撃ち貫き、その鬼は倒れた。なんか銃を持ったからこのセリフを言いたかったのは内緒だ。

「なかなか楽しかったよ、龍宮さん。でもどうしてここに?」

「ふっ、妙な気配を感じてな。もともと私は学園長に護衛の話を受けていた。気配を追ってみたらお前が戦おうとしていたので手を貸したのさ。報酬は今度にも請求しよう」

「学園長につけといてくれ」

なんて話していると、真名の後ろにいる陰陽師が魔法を放とうとした。

「真名!危ない!」

「な!?!」

「しねえ!」

強大な魔力が発射される。

「万難排す魔除けの盾!」  
アイギス

アイギス万難排す魔除けの盾!によってその陰陽師の攻撃を弾き飛ばし、そのままハーデイスの引き金を引いて倒した。(銃の中身は魔力弾)

「大丈夫か?」

「あ、ああ・・・大丈夫だ・・・だ、だがこの体制は・・・」  
その体制とは、俺が真名を抱きかかえている感じだ。

「あ、ああ！すまん！ちょっととっさだったから！」

俺が言っていると、真名はクスリと笑う。

「ふふっ、今日は許してやろう。名前も呼んでくれたしな」

「あ・・・」

そういえば咄嗟だったな。

「ではな『迅』私は先に戻るぞ」

そう言っつて真名は頬を赤く染めて走って行った。

「とりあえず認めてもらったということでもいいのか？」

『いいでしょうが、リインフォースさんが』

「・・・？リインフォース？」

「（知りません！）」

なんなんだ・・・

真名 side

なかなかどうして、高畑との戦いを見たときもそうだが、あいつは面白い。それに、なかなかっこいいじゃないか……

「……………コウキ、私は許されるのか？」

ただ一言、かつて契約を交わした男の名前をつぶやいた。

迅 side

「ふう、えらい目にあつた……………」

ホテルに戻つた後、アキラに散々どこに行つたのかと文句を言われた。ちよつと迷子になつたとそれで誤魔化したのが、状況としてはネギがえらいことになってる。まあ放っておけばいいだろう。俺にはどうでもいいことだ。

「にしても、原作と違うことが起きるとはねえ……………」

まさかのだよ……………ここでも原作と違うことが起きるんか。

「(まさかまた闇の書の……………?)」

「(あんな、気にしすぎだよ。さすがにそれはない)」

少なくとも、この世界であつてたまるか。

「だが強力なやつらがいるのは間違いない。」

少なくとも今回の敵はネギたちじゃかなわなかった。

「警戒を強化する……か」

とりあえずゼロを経由してサーチャーは撒いてある。何か出れば察知はできるが、明日が問題になる。明日は総本山に乗り込むことになる。刹那に伝えておくか……

「おい、桜咲さん」

「はい？なんですか？」

「明日の自由行動だが、近衛さんを総本山へ連れて行け。ネギたちと一緒にな」

「なっ！？それは危険です！総本山は……」

「じーさんから聞いたが西の長は近衛さんの父親だろ？なら娘をどうこうするわけもないだろ」

「た、確かにそうですけど……」

まあ、警戒するのはわかるよ。

「実はさっき奈良公園で刺客がいた」

「なっ……！」

「安心しろ、俺と真名で潰した」

「そ、そうですね・・・って、真名とですか!？」

「ああ、手伝ってくれた。報酬はじーさんに頼めって言ったけどな」とりあえず・・・総本山に向かう予定でもそうでなくても、親書を届けるためには色々とやる必要がある。

「ああ、あとあの神鳴流の剣士・・・ふざけてはいるが間違いないSSSクラスだ」

「なっ!」

「おそらく、本気を出されたらちよつとまずいだろうな。お前の場合」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

刹那の顔が深刻になる。まったく・・・

「安心しろ、俺とかリインフォースがついてる。お前は近衛さんを守ることだけ考えろ」

「は、はい!」

刹那 side

最初は怪しいだけだったが、ずいぶんと頼りになる。この前の戦闘も終盤しか見ていないというし、その少ないデータで相手を見破るとは、この人の実力は本物だろう。

「ですが、なぜ私たちに力を貸してくれるんですか？」

「別に……学園長の依頼だしな。それに、お前らはなんか放っておけなくてな。特にお前とか」

「えっ……」

「俺の世界でも、お前みたいな奴がいてな……」

神谷さんの世界の……？

「『できます』とか、『大丈夫』って言うてずっと無理をしたり……人とは少し違うからってそれを気にしすぎていたり……お前やネギ、アスナはあいつらにかぶって放って置けない」

人ではない……って

「神谷さんは、私のこと……」

「少し、人ではない気を感じていたからな。そのくらいは気がつくよ」

やはり、この人は本物だ……

「そう、ですか……」

「お前が何だろうが関係ない。俺も、ネギも、アスナも、お前の味方だ。それを忘れるな」

「は、はい！」

私は思わず大きい声で返事をしてしまった。私の存在のこと……それを言われて苦しかった。でも、今はとても満ち足りている。

「あ、あの……」

「ん？」

「私のこと、刹那って呼んでくれますか？」

「ああ、別に良いよ。俺も迅って呼んでくれると嬉しいな」

「は、はい……迅さん」

「さんはつけなくてもいいのに……」

「あ、えと」

しまった、つい癖が……

「あはは」

「ふ、ふふ……」

私たちはその後少し笑いあった。それから神楽坂さんと合流してパトロールへと向かった。カモさんがなぜか魔法陣を引いていたが、なんだっただのだろうか？

11時10分前……

朝倉side

ふっふっふ……こんな面白い企画を考えるなんて私ときたら天才だね

「さて姉さん、準備はいいかい？」

「大丈夫だよカモっち。ネギ先生も神谷君も部屋にいるらしいし」

「ふっふっふ……神谷の旦那にも仮契約の的になってもらおうぜ」

『ネギ先生と神谷君へのラブラブキッス作戦スタート！実況は報道部朝倉がお送りいたします！ちなみに参加者はこちら！』

雪広あやか

長谷川千雨

古菲

長瀬楓

明石裕奈

佐々木まき絵

大河内アキラ



龍宮真名

鳴滝風香

鳴滝史伽

綾瀬夕映

宮崎のどか

『チームを組むのもよし！一人で独占もよし！ではゲームスタート  
』！

第五十話「二人の銃使い ネギ、迅キス争奪戦！」（後書き）

秋風「キス争奪戦はいつもと違う原作ブレイクです」

迅「てか、オリジナル要素？」

秋風「そのとおり！」

迅「次回、第五十一話『ゲーム決着！授かりし仮契約』次回もお楽しみに！」

第五十一話「ゲーム決着！授かりし仮契約」(前書き)

4連続終了です。ちょっと眠い……

## 第五十一話「ゲーム決着！授かりし仮契約」

迅side

俺は現在外で星を見ている。

「……………何か嫌な予感がする」

「どうしたした？迅」

「いやな、今日はネギの争奪戦だけど……………なんか嫌な予感が」

「先程の放送で貴方も含まれているようでしたが……………」

「ないない、みんなネギ狙いだろ」

「では私と、仮契約してください」

「は？」

「ここならカメラもありませんし、ほら」

言って、リインフォースが俺に近づく。しないと多分怒るだろうな。

「……………わかったよ」

俺は了承し、リインフォースを抱き寄せる。

「ん……………」

「ふぁ……」

甘い吐息が流れ、唇が重なる。そして光が輝いた。

「これで、本当にこの世界では従者です。マイマスター」

「そうだな、よろしくリインフォース」

これでよかったのかな……。もしもばれたらなのはたちの殺され・  
……ん？

「誰か来る、隠れる」

「はい」

リインフォースと隠れる。リインフォースは小さくなるので良い。  
あれは……

「アキラと真名？」

あいつらどうしたんだ？メンバーには入ってないはずだけど

「いないよ、龍宮さん」

「おかしいな……。確かにこのあたりに迅がいたはずだが」

「……他の人はみんなネギ君だし……」

「うむ、私たちは迅を狙うぞ」

おいおいおい・・・なんであいつら参加してるんだよ。ってか、  
なんで俺を狙ってたんだよ。

「（迅、ここは逃げましょう）」

はいはい・・・

ぱきっ！

「そこだ！」

「しまった・・・！」

『おおーっと！神谷君狙いの二人！神谷君を発見！』

俺は地を蹴り、空中へ飛ぶ。

「逃がすか！」

言いながら真名が銃を撃ち放つ。

「なあっ！？あぶねーだろ！」

「お前が逃げるからだ！」

くっ！逃げ切ってやる。俺はとりあえずそのまま旅館へと避難した。  
たく、あいつらなんてことしてるんだ！もう原作がめちゃくちやじ  
やねーか・・・

「ぎゃひい!?!」

この声は千雨か……新田先生がいるんだな。

「ならこれか、バニツシュ!」

FFでも有名な透明になる魔法、バニツシュを発動し、千雨を連行する新田先生をやり過ごす。

「これでよ、みつけたぞ」げっ!」

真名がライフルを構えていた。あ、危ないって!

「ここで私に撃たれるか、それとも唇を奪われるか、さあ選べ!」

どっちも選べるかっての!

「なんで俺!?!ネギでもいいだろうが。てか同年代とキスするって抵抗ないのかお前!」

『おおーっと!?!神谷君焦ってます!』

朝倉、あとで潰す!

「ふ、理由などいらん。悪いが捕まってもらっぞ!」

「何っ!?!」

後ろに気配を感じた。これは……

「えいつ！」

アキラか！

「おっと・・・」

「わわっ！」

アキラが空振りして落ちる。ったく・

「なんで二人して俺なんだよ」

「え、それは・・・」

「その・・・」

『おおーっと！？ネギ先生が5人！どういうことだー！？』

もうそんなに速い展開なのか！？

だったらこっちに・・・！

「逃がさん！」

「転移魔法符！？」

アキラの前で使っなよ！

「これは縮地だ」



「わっ!」

アキラとぶつかり、真名も倒れる。

ドタアーン!

「ん……」

「ん……!??」

……俺の唇に、アキラの唇がかさなった。

「なっ……」

「逃がすか!」

今度は真名に取り押さえられ、唇を奪われる。

「ん……」

「んん!??」

『おおーっと!なんとアキラ選手と真名選手!キス成功!そしてなるほど朝倉、お前が主犯か……』ぎゃひいひい!』

げ、やばいな……

「逃げるぞ」

「え?え?」

「わかった」

俺はアキラを抱え、真名と部屋まで逃げ切った。この日、原作より多く数人が正座していた。俺たちはしていなかったが。

### 次の日三日目

「へえ〜これが豪華商品か〜」

のどかの手にはネギとの仮契約カード。そしてアキラと真名には俺との契約カードが握られていた。

「ふふ、これで私もお前との仮契約者だぞ」

「あんな・・・事情知ってるならそういつことするな」

「いいじゃないか」

よくねーよ・・・

「はいはい！今日は完全自由行動の日ですよ〜」

しずな先生の指示に従い、みんなが出て行く。俺とネギはアスナ、朝倉とロビーに集まった。

「まったくあんたたちこんなにカード作ってどうするのよ!」

「ええ！？僕のせいですか！？」

「おい、俺は被害者だぞ」

「真名と契約したんですか？」

「え？ああ……」

「……」

なんか刹那にジト目で見られた。

「ともかく、龍宮さんは刹那さんいわく知ってるらしいけど、本屋ちゃんとアキラは一般人だからね！あとリインフォースマまで契約したの！？」

「そうですがなにか？」

「なにかじゃないわよ、主人を止めないでなにしてるのよ」

「いいではないですか、私の勝手です」

「あーはいはいわかったよ。とりあえず今日はネギが総本山に行くんだ、すぐ準備して来い。俺は4班撒いてから行くから。とりあえずアスナにネギはカードの説明もしてな」

「はい、わかりました！」

つてなわけで、総本山へ向かうかぁ……

アキラ side

向こうに宮崎がいたけど、私は別方向から迅たちの会話を聞いていた。なんの話だったのかな・・・なんかアスナがオコジョに話しかけていたような・・・

「カード・・・」

私の絵が入った不思議なカード。確か、アスナがなんか言ってたけど・・・

アデアット  
来たれ

「わわっ、これって・・・」

カードが形状を変える。それは弓だった。

「君が主人か？」

「えっ、弓が喋った!？」

「なんだ、魔法を知らない口か？私は魔法の精でもあるのだよ」

「ま、魔法？」

私はその弓から魔法というものについて説明を受けた。

「わかったかい？」

「えっと、信じにくいというか……」

「まあそれが普通だ。さてさて、紹介が遅れた。私は戦乙女の弓<sup>ヴァルキリーボウ</sup>」

「ヴァルキリーボウ……」

「なんだかもう、信じるしかないみたい。でもその仮契約ってことは……」

迅side

さて、俺は現在あいつら（4班）を撒いて総本山で合流した。

「ネギ、お待たせ」

「はい、では行きましょう」

で進んで当然のごとく結界が張られていた。

「……」

「どうしました？」

「結界だな」

俺は魔法の矢<sup>サギタ・マギカ</sup>でそれを破壊した。

「そこにいる奴、出て来いよ」

「へっ！お見通しか！あんちゃんできるな！」

「あ！君はさっきの！」

そこには犬上小太郎がいた。ふう・・・

「ネギ、お前がやれ。アスナとやればあの鬼は倒せる。俺は手を出さない」

「は、はい！」

ここでネギには強くなってもらわないとな。俺はその場を離れ、遠くから観戦することにした。

アキラ s i d e

「あ、見つけた！」

「アキラ！？どうしてここに」

カード、ヴァルキリーボウに助言を受けて、私はここまでやってきた。

「ひどいよ、みんな置いてどこかに行くなんて」

「い、いや・・・それより」

ズガァン！

「え!？」

私たちの前に、大きな蜘蛛が現われた。

迅side

「おいおい……………」

こいつは…………術者が近くにいるのか。あのサル女がやったとは思えないな。警戒したフェイトがやったのか？

「…………事情は後で話す。アキラは逃げて」

最終的に記憶を消せばいいだろう。

「大丈夫、私も手伝う」

「は?」

アテアット  
来たれ!

「なっ…………!」

「戦乙女の弓!」

アキラが来たれを発動させ、弓を持った。これがアキラのアーティファクト!?

「わ、わ、私も戦うよ」

「声震えてる震えてる」

まずいな……そうそうにけりをつけるか……ならこれだ。  
俺は薬を飲み込み、手袋をはめた。

「行くぜっ……!!」

ハイパー死ぬ気モードとなり、蜘蛛の一体を叩き潰す。

「はっ!」

別の蜘蛛の足を掴み、それを投げて残った蜘蛛へと投げ飛ばす。よし、いけるな。

「オペレーション……X」イクス

『了解シマシタボス……XBURNER発射シークエンスヲ開始シマス』イクスバーナー

右手を後ろにかざし、炎を噴出する。

『ライトバーナー柔ノ炎10万FV<sup>ファンマホルテージ</sup>デ固定。レフトバーナー柔カラ剛ニ変換シツツ、炎エネルギーヲグローブクリスタル内ニ充填』

「消し飛べ!」

『ターゲットロック、ゲージシンメトリー!!発射スタンバイ!!』



イクスパーナー  
XBURNER!

蜘蛛たちに直撃して、ばらばらになる。だが、それで終わりではなかった。

「あああああああああああああああ」

「ちい！まだ！」

いたのかよ！俺が構えを取ろうとしたときだった。

セレスティア・ルーキス  
「天上の矢！」

白い光の矢が蜘蛛を貫いた。い、今は！？

Akiraside

迅が危ない……助けないと！

「ご主人、私を使いなさい」

「え、でも私……弓なんて」

「いいから弦を引いて……創造イメージしてください。闇を貫く、光の矢を」

「闇を貫く、光の矢……」

「今です、放ちなさい！」

私は夢中でその生まれた矢を放った。それによって、大きな蜘蛛が撃沈した。

第五十一話「ゲーム決着！授かりし仮契約」（後書き）

秋風「今日の朝まで大学サークルでカラオケ行きました」

迅「何を歌った？」

秋風「アニソンとライダー」

迅「ばかか」

秋風「いいじゃないか。ちゃんと更新しただろ！」

迅「そのうち死ぬんじゃないの？」

秋風「そうかもな」

迅「次回、第五十二話『任務完了、修学旅行も終盤へ』次回もお楽しみに！」

第五十二話「任務完了、修学旅行も終盤へ」(前書き)

えーと、スランプに陥りました。駄文です。

そして話をかなりすっ飛ばしてます。ごめんなさい

第五十二話「任務完了、修学旅行も終盤へ」

戦いが終わり、ネギたちの様子を見に行くと、そちらもすでに決着がついていた。ネギたちと合流して、のどかとアキラに魔法使いについての説明をした。

「……………そんなところです」

「先生も魔法使いだったんだね」

「はい。迅お兄さんはまた別世界から来た人ですけど」

「別世界？」

のどかが首を傾げる。

「本当に物語みたいな話さ。並行世界から飛ばされて、俺はここに  
いる」

俺も少し現状を話した。すると…………

「あ!？」

「どっしたの!？」

ちびせつなの体が透けていく。

「本体のほうで何か……………」

そのまま消えた。

「まずいな、きつと分身を使う余裕がなくなっただろ」

「ど、ど、ど、どうしましよう!」

「大丈夫だろ、刹那なら」

「え、でも……」

「お前は本山に向かうまで体を休ませろ。また襲撃されたらひとたまりもないぞ」

「う、はい……」

そう言ってネギは目を閉じた。

「でも旦那、どうするんない」

「安心しろ、俺の分身が様子見に行ったから」

数時間後

とりあえずネギの代わりに俺が出向き、原作どおりに進んだ。このかの魔法イベントはのちに重要性が出てくるので必要だと思っただからだ。それで、みんなと合流した。

「さて……いくか」

「いいの!? 朝倉たちスルーで!」

「今更こいつらが帰るたまでもないだろ」

「そ、そりゃそうだけど・・・」

「それに本山では俺が見張りをやるし、問題はないよ」

そんな会話の後、本山へと入り、詠春に親書を渡して任務は完了。宴会へと移った。むこうでは長と詠春が話をしている。どうやら、このかについて話すか話さないからしい。

「あ、神谷君、楽しんどる〜?」

「あ、近衛さん」

「いややわあ、このかでええよ〜」

「んじゃ、このかって呼ぶよ。俺も迅でいいし」

「うん、そうするーそれよりありがと、さっき助けてくれて」

「あー、気にするな。刹那も助かったんだし」

にしても、このかの酔い具合、これ酒じゃないならなんだろう・・・

「まあいいけど」

「あ、そういえばアキラもカード持ってるんや、見せて〜」

「あ、うん」

アキラのカードは「戦乙女の弓」なぜか関連性がないけど、まあいいか、気にしないでも。

「アキラ、このことは……」

「うん、みんなには内緒……だよな？」

「ああ、わかってるならいいんだ」

まったく、意外なところで原作をブレイクしてしまった……

「ちょっとよろしいですか？」

詠春が現われた。「コマンド？」

「（いやいやいや、何を言ってるんですか）」

「どうも、西の長さん……それとも紅き翼が一人の詠春さんですか？」

「なるほど、学園長から聞いたとおり、貴方はなんでも知ってるっしやるようだ」

「まあ色々だね。それで、何か？」

俺が言うと、詠春は相変わらず穏やかな顔だった。



「いえ、このかをここまで護衛してくれたのを聞いて、ぜひともお礼が言いたくてね」

「ああ、その辺なら仕事でもあつたんでお気になさらず」

「ふふ、君はどこかネギ君の父に似ています」

ナギに？

「んなわけないですよ、俺は英雄には似ても似つかない」

「ふふ、君のその天邪鬼っぷりはそっくりですがね」

そうなのか？

「まあ、それは良いですが……長、気がついてます？」

「む……結界があるので大丈夫だと思いますが」

原作でも抜かれるからなあ……

「一応多重結界を展開してます。今のうちに使用人の人たちは避難をさせてください」

「わかりました。君とネギ君にお任せします」

「ええ」

このあとは原作どおりに進む。アキラを含めた人間が石化。このか

が攫われた。で、現在風呂場。

「……アスナ、大丈夫じゃなさそうだな」

「うう……」

とりあえずタオルをネギがかぶせる。

「……そこだ」

「……!」

俺は瞬時にゼロを起動させて斬りかかる。水か……!

「やるね、瞬時にそんなことをするなんて」

「……フェイト・アーウェルンクス。お前のことは神の本棚で確認済みだ」

「ほう……そのサウザントマスターの息子より遊べそうだね」

「リインフォース!」

「はい!」

リインフォースが魔力を形成した拳で殴りかかる。それによってフェイトが吹き飛ぶ。

「……どうやらここでは分が悪い。まあ、止めたいならつい

てくるといい」

「うち、転移か。追うぞネギ」

「あ、でも刹那さんが……」

そういえば吹き飛ばされたんだっけ？

「つたく……ケアルガ」

「あ……すごい、傷が」

「さて、アスナは待ってる、危ないから」

「何言ってるのよ！このかを助けに行くわよ！」

もう奪取でアスナが駆け出し、着替えを終えた。

「カモ」

「おう！刹那の姉さん、あんた兄貴のこと好きかい？」

「え、それは今何の関係が……」

「つまり姉さんと兄貴がちゅうするってことだよ」

「この非常時に何言ってるのよ　っ！」

「ち、違うよ姉さん、仮契約だよ仮契約！」

「あ、そっか」

まあ、イベント上ここではやらないしな。今は良いか。

「……まあ今はそれどころじゃないかもな。時間もない。追いながら考えるぞ」

こうして、俺たちはこのかを追った。

「待てっ！」

俺たちが追いつくが、鬼を召還する猿女。おいおい、軽く原作の数超えてるぞ。

「そこの子供二人は魔法使い……せやから警戒のためにすこし数を増したんや」

「ほう……なるほどね」

軽く500はいそうだな。

「ネギ、障壁だ」

「は、はい…」

すぐに俺が仮契約を促し、作戦はカモのを採用する。俺はネギと共にそのままこのか奪還を狙う。

ヨウオヌベスタース・フルグリエンス

「雷の暴風…」

「<sup>エクスカリバー</sup>約束された勝利の剣！」

鬼たちが吹き飛ばす。そして俺はネギと共に空を飛んだ。<sup>エクス</sup>約束された勝利の剣のおかげで原作くらいまでには数が減った。

「お兄さんは杖なしでも飛べるんですか？」

「ゼロはこの世界で言う魔力の発動体でもある。だからゼロがないと飛ばないさ」

他にも色々あるけどな。あれは……

「ネギっ！」

「狗神!？」

ネギが吹き飛ばされる。そういえばこの厄介なイベントがあったな。

「さあ、勝負やネギ！」

「……ネギ、お前は行け。このかを救うんだろ」

「で、でも……」

「なんや、男の勝負に口出すなや！」

「黙れ駄犬が……こちとらクラスメートの命がかかってんだ。邪魔するなら消すぞ」

殺気を込め、犬（小太郎）にらむ。

「上等お！」

「だが旦那！旦那がいないと・・・」

「5秒で蹴りつける。先に行け」

「だああああああっ！」

よし、行くぞ・・・

俺も駆け出そうとすると、手裏剣が舞った。そういえば、ここでは助っ人イベントがあるんだっただか？

「ニンニン、神谷殿。いくらクラスメートが危機とはいえ、怒気がこもり過ぎでござるよ」

「らしいな・・・ネギ、行くぞ」

「でも楓さんが！」

「ネギ坊主、今は考えるときより行動のときでござる」

「でも・・・」

「さあ早く！」

楓ほどの実力なら小太郎は倒せる。それは原作でも証明済みだ。

「行くぞネギ」

「はい..」

こうして修学旅行編はクライマックスへと向かう。

第五十二話「任務完了、修学旅行も終盤へ」(後書き)

秋風「すいません、スランプになりました。当分駄文になります」

迅「しかも飛ばし飛ばし……だめだな」

秋風「面目ない」

迅「次回、第五十三話『終わる旅』次回もお楽しみに！」



## 第五十三話「終わる旅」(前書き)

今回にて修学旅行編終了です。かなりすっ飛ばしました

## 第五十三話「終わる旅」

「一足遅かったようすなあ……たった今儀式は終わりましたえ」

スクナが目を覚ました。

「あれがスクナか……でかいな」

「旦那！言ってる場合かよ！」

「救援は呼んだんだろ？あいつはスルーでいい。問題はあいつだ」

魔法の矢が解けたフエイトがいた。

「ネギ、アスナたちを召喚しろ。」

二人が召喚される。

「……刹那、行け」

「え、でも……」

「ここは俺とネギとアスナで防ぐからな」

刹那の羽には、ネギたちも驚くが、原作と同じく、アスナがそれを制していた。

「わ、わかりました……みなさん、このちゃんのために頑張

つてくれてありがとうございます」

「行かせ……」おらあ！」「つくー！」

さーて、久々に暴れようかね。ネギは少し石化が来たか……その辺は木乃香にまかせよう。

「行くぜ『完全なる世界』」

いいのかな、この単語出して。

「……来るが良いさ」

互いに駆け出し、魔法を発動させる。体術も互角。ふん……

「この程度か？それとも本物が出てきたほうがいいんじゃないか？」

確かエヴァはこいつは人形の類だと聞いている。

「なるほど、それがわかってるのか」

「だがまあ、将来的にネギには勝てないよ、お前はな」

「言ってくれね」

距離を取り、フェイトが詠唱を始める。

「ハイシリスグガレオーチタ・コーク  
「ト・ポドーン・カイ ヴィシュ・タル・リ・シユタル エメーイタイリカティアーストーリー・ガムクネテドクセウ ヴァンゲイト ハツ 小さき王 ハツ 八つ

ト・ポドーン・カイ 足の蜥蜴 カコイン・オンマトイン 邪眼の主よ ト・フォース その光 エメーイタイリカティアーストーリー 我が手に宿し ガムクネテドクセウ 災いなる眼差しで射よ」

ブノエーベトラス  
石の息吹

標的はネギたち。俺はそのまま盾になる。宝具を発動させるのも面倒だ。跳ね返す！

「リフレク！」

多少は跳ね返したが、そのまま俺は喰らって石になる。おおっ、石化した。だが、この程度ならいいな。

「迅お兄さん！」

「あー……大丈夫だよ。お前もレジスト強める。」

さて、そろそろか……

「やはり君は危険だ！カミヤジン！」

そのまま来る拳を、ネギが受け止め……

「悪い子には……お仕置きよっ！」

アスナがハリセンで殴り、ネギが拳で殴り飛ばした。

「やったな」

「……甘く、見ないでもらおう！」

フェイトの拳が飛ぶ。だがそれはこちらには来なかった。

「ウチのぼーやが世話になったな、若造」

エヴァさん登場。

「遅いつての、救援」

「ふん、貴様もその程度であるまい」

「暴れたいんだろ？大きいのは残しておいたさ」

多分エヴァもタカミチから話は聞いてるんだろ。

「面白い奴だな。まあ私が戦いというものを見せてやろう！」

そう言つて空を飛ぶエヴァ。で、振り返り

「いいな！よく見ておくんぞぞ！」

本当にネギの前に負けたのが悔しかったらしい。

このあとエヴァがスクナを破壊。再度の封印を施した。このかこの力  
によつてネギは救われた。はあ・・・俺つてとことん意味が・・・

「迅さん、後ろ！」

「！！？」

後ろにはフェイトがいる。まだ何か用かよ……

「君だけは排除させてもらう」

そう言つてフェイトはスクナの残りの紙片らしきものを使ってそれを怪物に変えた。どういう原理だこれ？

「……………お前らは下がれ。危ないから」

「迅お兄さん！」

「エヴァンジェリンと同じように決めれる機会があるとはおもわなんだ。行くぜ、リインフォース！」

JOKER！

「はい、迅」

CYCLONE！

ガイアメモリを取り出し、作動させる。

「「変身！」」

CYCLON！JOKER！

ガイアメモリを装填し、俺を仮面ライダーWに変身させた。

「君は、何者なんだ？」

「俺の名は、仮面ライダーW」

言いながら、決めポーズを取った。

「さあ、お前の罪を数えろ」

言いながら、俺は化け物とフェイトに蹴りを入れた。

「ここは任せるよ」

そう怪物に言っつて、フェイトは消える。逃げるとはな……

「来ますよ、迅」

こういう時は……

「これだな」

LUNA！

ルナのメモリを作動させ、それをWドライバーに入れる。

LUNA！JOKER！

ルナジョーカーとなり、そのまま怪物を絡みとって地面に叩きつける。

「どンドン行くぜー！」

METAL！

今度はメタルのメモリを入れる。

LUNA! METAL!

メタルシャフトを鞭のように持って、それを叩きつける。

「があああああああ!!!!」

「なかなかタフだな、次で決めるぜ」

「了解です」

CYCLON! JOKER!

再びサイクロンジョーカーになると、ジョーカーメモリを取り出し、ソケットに入れて叩く。

JOKER! MAXIMUM DRIVE!

俺の体が宙に浮いて、そのまま突撃する。

「ジョーカーエクストリーム!」

「はあっ!」

「てやあっ!」

そのままジョーカーエクストリームが激突し、怪物は消え去った。

「ふう、おしまいっ」と



「な、何よあれ！」

「何といわれましても」

「仮面ライダー」

「そうじゃなくて！」

このあとアスナたちに説明するのが大変だったが、なんとか納得してくれた。

早朝

「どこに行くつもりだ？刹那」

「……っ！」

「出て行くつもりだったな？」

「い、一応掟ですから！あの姿を見られた以上は……！」

馬鹿か、こいつは……

「お前は人間でも鳥族でもない……そう言うならば、お前に掟もクソもないと思うが？」

「し、しかし……！」

「お前を見て、このかはなつて言った？そしてこの先、このかを誰が守る？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まったく・・・・・・・・なんて俺がこんなことしてるんだ。まあ、放つて置けないからなんだが。

「お前はお前だ・・・・・・・・桜咲刹那としてお前はとうしたい？」

「わ、私は・・・・・・・・私は、みんなと・・・・・・・・お嬢様と・・・・・・・・一緒にいたい」

「それが答えだ。だろ？みんな」

「え・・・・・・・・！！？」

そこにはネギたちがいた。まあぶつちゃけ、俺が教えたからなんだが。

「せつちゃん、一緒に帰る？」

「この、ちゃん・・・・・・・・」

「刹那さん、私たちもう友達じゃない、水臭いわよ」

「神楽坂さん・・・・・・・・」

「僕は先生です。生徒の力になるのが仕事です！」

「ネギ、先生……」

刹那は涙を流し、3人が受け入れることを喜んだ。で、大変悪いのだが……

「あー、いい空気のところ悪いんだけどな」

「「「「「？」」「」」」」」

「先に戻ったりインフォースの連絡で、俺たちの身代わりが大暴れしてるらしい」

「「ええ！？」「」」

「ここにいたか桜咲！」

「至急ホテル嵐山に急行するアル！」

「ほら刹那！身代わりはお前の専門だろ！」

「せつちゃんはよー！」

みんなが声をかける。まったく騒がしい奴らだな。まあ、それがいいところだ。

「ほら刹那、ネギ、行くぞ」

「しかた、ないですね……ありがとう、ネギ先生、迅さん。参りましょーお嬢様！」

こうして激しい戦いは終結し、この後問題もなく戦いと修学旅行は

終わりを迎えた。

第五十三話「終わる旅」(後書き)

秋風「スランプ、抜けない」

迅「次回、第五十四話『修行！そして少女の過去』次回もお楽しみに！」

**第五十四話「修行！そして少女の過去」(前書き)**

今回はアキラと真名のアーティファクトを紹介です。

リインフォースはまた次回ですw

## 第五十四話「修行！そして少女の過去」

修学旅行も終わり、いきなりネギが俺の部屋に押しかけてきた。

「迅お兄さん！」

「ん？ようネギ。どうかしたのか？」

「は、はい。その……僕に戦い方を教えてください！」

「は？」

まてまて、これはどういう原作ブレイクだ？

「なんで俺？エヴァンジェリンでいいだろ」

「その、エヴァンジェリンさんにテストをされると言われてて……」

「ふーむまあ構わんが……お前確かクーフェと一緒に修行予定だろ？そのとき見てやる」

「ありがとうございます！」

そう言ってネギは嬉しそうに出て行った。

「まったく、びっくりしたよ」

『マスター、また誰かいらっしやいましたよ？』

「え？」

「迅、いるか？」

「真名じゃないか。どうした？」

珍しく私服姿の真名がそこにいた。

「いや、実は少しだけ厄介な仕事を請け負ってな。報酬も分けるから手伝ってくれないか？」

この前戦ったとき腕が鈍ってるのわかったし、ちょうどいいか。

「わかった、いつ？」

「GW中だが、大丈夫か？」

「いいよ、了解」

こうして真名も出て行った。

次の日の早朝

「うーむ」

とりあえず中国拳法の練習終了後、俺が見る。そのときにはアスナや刹那が身体能力は高くても術式で無理やり上げてたら茶々丸には勝てないしなあ……



「ネギ、お前確か自分に契約執行をやってたな？」

「はい」

「うーむ、それだと茶々丸には勝てないよ」

「そうなんですか!？」

「こいつわかってなかったのか？」

「契約執行の90秒じゃ決着をつけずに沈められる。そうだな、これをやってみるか」

### 戦いの歌

「わあ!」

俺の体が光りだす。そしてネギが驚く。

「これは戦いの歌という身体強化魔法だ。これの上位として戦いの旋律というのがある。お前にはこれの簡易を教えてやる」

それから2時間ほどそれを教える。才能があるのですぐに覚えてくれた。うむ、満足だ。

「後は中国拳法を併用して覚えれば茶々丸とどっこいどっこいにはなるのか？」

「いえ、僕に聞かれても」

「そういえばアスナも修行してるんだっけ？」

「ええ、そうだけど……」

「んじゃテストしてやる。ネギと刹那と組んでかかって来い」

「ええ！？」

この先ちよつとでも強くしてやるのも俺の楽しみだしな。準備が完了し、契約執行状態の2人とネギ。さて、楽しませてくれよ？

「行くぞネギ！」

「は、はい！」

サキタ・マキカセリエス フラグリエンス  
魔法の射手雷の29矢！

「あうえ！？無詠唱！？風楯！」  
デフレンジャー

風の楯か。だが……

「それは一回防ぐと隙ができるぞ！」

「11のおー！」

「むっ！」

アスナは反応がいい。

「神鳴流……斬岩剣！」

「ぐっ！」

こいつらチームプレイでくると連携はすばらしいな。

「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル！」

む、いい作戦だ・・・ネギから少し離されている。

フルグラテルボカンス  
白き雷！

「ぐおおっ！」

直撃し、吹き飛ばされる。なかなかいい威力だ！

「やった！」

「まだまだ」

俺は耐えて、ゼロを構える。

「ゼロっ！」

『ロードカートリッジ』

「はあっ！」

『チャージセイバー』

「ぎゃあー！」

「あつっ！」

ちよつとやりすぎたか？まあいいか。

「加減したとはいえよく防いだ。でも……」

俺は一瞬でネギの背後に回りこんだ。

「離しすぎるとこつという事態にもなる」

「え、あ、い、いつのまに!?!」

「今日はこちらまでだ。あがるうか」

この日から二日間。ネギは中国拳法を学び、エヴァのテストを受けた。原作と違ってちゃんとした勝負をして、ネギは死闘の末に茶々丸に一撃を当て、勝利した。で、GW前日。

「あつっっ?」

「ネギ!」

ネギがエヴァの指示の修行で倒れました。

「まだ魔力の引き出しが甘いな……もう少し身体の強化をしたほうがいいんじゃないか？」

「戦いの歌を教えたのは貴様だろう。ぼーやはそれに頼る癖がある」

「でもこの先魔法使いか魔法剣士かのジャンルに分けるならネギは剣士だけど？」

「……………というか、なんで貴様が口出ししてるんだ！」

「だって俺、ネギに戦い方を教えてくれって頼まれてるし」

ぶっっちゃけ休日暇なんだよ。

「まあいい……………だがぼーやはまだまだだな……………」

「エヴァンジェリンさんよお、並の術士ならこれでも十分……………」

「カモ、それじゃあ駄目だよ。もっとちゃんとした修行じゃないとね」

「そのとおりだ。私やこいつを師と呼ぶなら生半可でないことぐらいい覚悟があるだろ」

お？何気に俺のこと認めてくれるのか？

「認めるか馬鹿め」

「なんで人の心読むんだよ」

「ふん……………」

この後ネギはアスナとケンカした。まあ自業自得だわな。どうでもいいけど。

GW3日目

真名と神社で待ち合わせ、電車で移動する。ネギの警護はリインフオースに任せてある。

「今日まさか、本当に引き受けてくれるとはな」

「刹那でもいいのになんで俺？」

「できればお前との契約のカードの力も試したかったんだ」

「なるほど……」

そんな会話をしながら電車を降りる。そこは学園を離れた場所。なんだこの山奥

「この先に、逃走した違法魔法使いの一団が根城にしているらしい。早めに潰すのさ」

「はいよ……」

「それにしても、お前は戦いに慣れてる感じだな」

「そうでもないさ。戦いの時は二手、三手先を読んでいるだけ」

「それは戦いなれしてるからだろう……まあい、あそこだ」

そこには小屋があった。

「潜伏先だな。見張りがいる……この感じ、地下にも何かありそうだ」

魔法で作ったのか？まあ、潰せばわかることだ。

「サーチもある……どうする？」

「問題ない」

言つや否や、真名がサイレンサー付きの銃で見張りを撃った。

「容赦ねーな」

「安心しろ、麻酔弾だ」

まあいいけど……

「ジャミングもできたし、行くか……」

こうして小屋へと突入した。

突入すると、地下があった。やはり地下が根城のようだ。地下の階段を下りると、そこは広場で、あちこちに実験動物らしきものたちが暴れている。嫌な光景だな。

「……真名」

「……」

「おい、真名？」

「……あ、ああ、この先だな」

大丈夫かよ。まあいい……先に行くと、集団に囲まれた。

「侵入者か」

「この辺を根城にするころつきじゃねーのかよ」

明らかに逃走者たちのようなものではない。

「悪いがお縄になってもらおう」

「倒すぞ」

「ああ」

真名が武器を構え、俺は投影してアーチャーが使う双剣を手取る。

「魔法の……」  
サキタ

「おらあー！」

俺が詠唱しようとした男に突っ込み、戦いが始まる。魔法剣士の割合が少ないので、接近戦は楽だった。

「はっ！」



「ぐあっ！」

「いい機会だ、試してみよう」

アテアット  
来たれ！無限銃 自在の固定砲台

真名の新アーティファクトか！なんだあの銃……銃かあれ？  
形は銃だけど……

「はっ！」

銃弾が放たれ、そのまま打ち貫くが、障壁に阻まれる。だが……

「銃弾が曲がった！？」

そう、銃撃が曲がる。さらには、換装して別の銃にもなるレアなアーティファクトだ。それのおかげで、ほとんどが全滅した。

「終わったな」

「真名すげーな」

「ふふふ、お前のおかげだ」

ならよろしい。とりあえず……

「バインドだ」

『オーライ』

全員にバインドをかけて拘束。

「さて、あとは引き渡して終わりか？」

「ああ、助かった。報酬は山分けだな」

「いや、いいよ。いい運動になったし。」

言いながら俺は真名と階段を歩く。

「そついえば真名、聞いてもいいか？」

「なんだ？」

「なんでお前は俺と仮契約を？」

「……………」

突然真名の足が止まる。止まったかと思うと、真名は別のパクティ  
オーカードを取り出した。

「これって……………」

それはすでに死んだカード

「似てるんだ……………お前が、前の契約者に」

「真名……………」

「私は昔、紛争地を回る「四音階の組み鈴」という所に所属もして

いた。」

真名の眼は、どこか寂しそうだった。

「だから、私はお前を重ねてしまった。」

「……真名」

俺は言いながら真名の手を取る。

「迅……？」

「別に、人を想うことは悪くない。そして俺は死なないよ、真名」  
俺の言葉に、真名は顔を紅く染める。

「……ふふっ、その目や言葉まであいつそっくりだ」

言って、真名が俺に抱きつく。

「ま、真名？」

「ありがとう、迅……」

そう言って離れてくれた真名はさっきとは違ってどこか嬉しそうだった。

「さて帰ろう、もうすぐ日が暮れる」

「ああ、そうだな」

こうして任務を終えて、俺たちは学園へと戻った。

## 第五十四話「修行！そして少女の過去」（後書き）

秋風「スランプだぁ……」

迅「もうそのまま寝ろ。永久的に」

秋風「さて、そんなわけでちょっとだけオリジナルの真名のフラグが立った理由でした」

迅「で、今回は？」

秋風「アキラと真名のアーティファクトについてご紹介」

### 戦乙女の弓

アキラのアーティファクト。純粹が故乙女。誰かの力になりたいがために武器。でも遠くから見守ったり支援することが多いから弓。こうなつてできた戦乙女の弓。レア的には『いどえのえにつき』と同等。ちうと同じ喋るアーティファクト。声は女性で、弓の形状は純白の弓。供給される魔力が、アーティファクト本来の魔力から矢が形成される。それぞれお魔法の矢と同じ光、闇、風、雷、炎、水などが形成可能。矢は本人がイメージして作り出すため、基本的に魔力が尽きなければ無限に生み出せる。

戦乙女の弓のラテン語を表示を誰か教えて欲しいです

### 無限銃 自在の固定砲台

真名の迅とのアーティファクト。銃使いの真名のためのアーティファクトである。銃は水鉄砲からバズーカまでありとあらゆる武器を

取り出せる。魔法銃も可能。弾丸は無限ではあるが、本人の意思持っているものと入れ替えも可能。魔力弾として発射も可能だが、その場合は契約者から契約執行をしてもらわないといけない。

無限銃 自在の固定砲台のラテン語を表示を誰か教えて欲しいです

秋風「こんな感じですよ。二人は原作でアーティファクトがないのでこんなになりました」

迅「二人のラテン語での名前を誰か調べてくれると嬉しいです」

秋風「それでわw」

迅「次回、第五十五話『VS悪魔 圧倒の力 祭りへの準備』次回をお楽しみに！」

第五十五話「VS悪魔 魔王の力 祭りへの準備」(前書き)

今回は読者の皆様のお力をお借りしたいです。

正直今回私はかなり思いつめてますので、何卒力をお貸しください

それでは本編をどうぞ。今回だけは一話更新のみです

## 第五十五話「VS悪魔 魔王の力 祭りへの準備」

ネギが修行を初めて数日。例の悪魔のおっさんがやってきた。だがイレギュラーがあった。おっさん以外にも悪魔がその場に存在していた。

「情けねえなあヘルマン」

「……ナイトメアか」

原作になかった展開だった。ネギのオーバードライブや勝利は原作どおりだった。だが、このイレギュラーはかなり意外だった。俺はエヴァとそこへ降りる。

「師匠、迅お兄さん！」

「……下がっていいぞ、ぼーやの手には負えん相手だ」

ランクで言うとフェイトレベルだ。こいつは最高位の悪魔だな。

「ほう、ダークエヴァンジェルか……それにその隣、かなりできると見える」

さて、どうするか。

「エヴァ、ネギを連れて別荘へ。ここは俺が食い止めよう」

「いいだろう、ぼーや行くぞ」



「え!?!」

エヴァはアスナたちと共に、俺が作った転移魔法で消えた。だが・

「よく逃がしてくれたな」

「……余計な力は使わない性質なのでね」

余裕……か。まあ、肩慣らしくらいにはなるかな？

「行くぜ」

俺はゼロを構え、奴に斬りかかる。だがナイトメアはそれを受け止め、俺に斬りにかかる。さらに触手が展開され、俺にそれが襲い掛かる。こいつ、なかなかだな。

「聞くが、何故邪魔をする？」

「簡単だ……あいつが俺の、弟子だからだよ!」

元老議員の屑どもの思い通りにはさせない。このまま倒すか? なら試したかったあれをしよう。

「ゼロ!」

『あれですね?』

「ああ、あれだ!」

『オーライ、デバイスモード付加装備、システムドライブ！』ゼロシステム』！』

そう、これが新しいシステム。デバイスを通常起動の状態を使う、さまざまなシステムの使用だ。

「ターゲット確認、排除開始！」

「！？」

俺は迫り来るその攻撃と出された触手を確実に避け、ゼロをナイトメアに突き刺した。

「ぬ！ぐうう」

「ゼロ、俺を導いてくれ」

『ややこしいですね。了解、ゼロシステム全開』

それによってルートが俺の視界に入る。どうすればこうなる、こうなればこうするという情報が頭に流れる。

「ここだ」

触手がナイトメアに続くそのわずか一手。それにより、残りの触手も弱まった。このまま潰す………

「お前を殺す」

『ロードカートリッジ』

「はあああああああ！」

『チャージセイバー』

「ぬおおおおおおおおおおおおお！！！！」

そのままナイトメアにチャージセイバーが直撃する。

『ゼロシステム解除。マスター？』

「ああ、大丈夫だ」

暴走もないし、これ使えるな。組み込み方法によってはゴッドガンダムハイパーモードだとか、00ガンダムのトランザム・・・それにユニコーンガンダムのラプラスだって使えるだろう。ただ・・・

778

「あんまり意味がないみたいだけど」

「この程度か？」

勝利を得るためのゼロシステムは対人間であり、人間を倒せるほどの力加減では悪魔は倒せない。背格好が人間だから人間と認識するのか。改良の余地が必要だな。

「なら今度はこちらの番だ」

ナイトメアの体がメキメキと音をたてて形を変える。なんかもう、仮面ライダーWのドーパントの第二形態みたいになったよ。

「まったく」

『どうしますかマスター』

時間を掛けたくはないな……あのお馬鹿<sup>ネキ</sup>を立ち直らせなきゃならないし、困ったな。

「があああっ！」

「っち！」

図体がでかいだけここ一帯が壊れそうだ。だが……もうひとつ試しておきたいものがあつた。

「でかいたになら、これでいい！ゼロ、カノンモード！」

『オーライ、マイマスター』

力借りるぜ、なのは！

「喰らえ！閃光弾！」

「がああああああ！？」

手っ取り早くモンハンの閃光弾をぶつけ、視界を奪う。こつこつ巨体ならやっぱこつこつというのやらないとな！

「魔力収束、3、2、1、エンゲージ！」

『魔力リンク開放、ターゲット補足、発射スタンバイ！』

これだけじゃないさ

「リインフォース！」

「はい、わかってます！」

アデアット  
来たれ！

「夜天の決戦！」

それはPSPにも登場するリインフォースの装備だった。超ご都合主義だな。だが、それがいい。

「デイバイン！」

「撃ち抜け！」

ターゲットが動き出す。今だ！

「バスタアアア！」

「夜天の雷！」

双方の攻撃がぶつかり合い、光が生まれた。

「があああああああああ！」

ナイトメアは光に包まれ、そのまま消えた。倒したとは思えない。おそらく逃げた……ということだろう。

「終わったな」

「はい」

アペレアット  
去れ

「ネギたちのところに帰るか、リインフォース」

「はい、迅」

これで悪魔との戦いは幕を閉じた。

数日後

さて、ネギは未だにうじうじとしている。この辺は原作どおりだ。アスナの力もあって、ネギも少しずつ立ち直りつつある。お化け屋敷の製作を手伝いながらも、ネギはアスナとのデートに行った。この世界でも、原作と違うことが起きつつある。それが俺には不安だった。

「……はあ」

『マスター、ため息は幸福を逃がしますよ？』

「余計なお世話だ。それにしても、この世界も限りなく本物に近い平行世界」

なのはの世界では平行世界として渡り、俺の介入でイレギュラーがあった。だがこの世界は、本物のアニメの世界じゃない。この世界も、限りなく近い平行世界なんだ。

「となると、何か大きな力でなのはたちの世界に戻る可能性も出てくる」

これから大きい力が出る瞬間……それはつまり

「世界樹の発行の最終日」

もしかしたら、またイレギュラーの事態が起きるかもしれない。

「そうなれば、俺は帰れる」

「ただいま戻りました、迅」

「ああ、お帰りリインフォース」

リインフォースが買い物袋をぶら下げて帰ってきた。

「迅、外でお祭りのようなものをしていましたが、学園祭はまだ先なのでは？」

「ああ、ネギたちも行ったけど、確か地元の祭りが重なってるんだ」

「その、私たちも……ゴニョゴニョ」

ん？

「もしかして行きたいのか？」

「……………」

「まあ家にいるのも暇だしな……………」

「わかった、行こうか」

「はいっ！」

「ラインフォースは嬉しそうに着替えに行った。」



第五十五話「VS悪魔 魔王の力 祭りへの準備」(後書き)

秋風「・・・・・・・・・・・・・・・・」

迅「どうした？」

秋風「最近思うんだが」

迅「何？」

秋風「不評だな、ネギまの世界編」

迅「確かに、なんで真名とフラグがたつたか不明とかな」

秋風「正直、悪い部分だけ指摘されてどうすればいいのか来てなくて死にたくなった」

迅「・・・・・・・・・・・・・・・・」

秋風「えーと、今回そんなわけでアンケートを実施します」

迅「まあ、予測はつくと思うが・・・・・・・・」

ネギま！ルートを中断し、StrikerSへ移動するか否か

秋風「正直、ここまで来たらネギま！編は全て削除しようかと思っ  
てます。納得行く人は多いと思いますが」

迅「読者の皆さんとしてはどうでしょうか？是非とも意見をいただ

きたいです」

秋風「選択肢は以下のとおり」

一番 ネギま！中止でStirikerSへ

二番 そのまま続行

三番 このまま小説を終わる

秋風「以下の3つの選択肢です」

迅「理由を明記の上、アンケートにご協力ください」

秋風「暴言、中傷文で来た場合は必ずやユーザーブロックを適用します」

迅「マナーは守ってください、お願いします」

秋風「今日はこの辺で」

迅「次回、第五十七話『学園祭スタート！ いざ予選会！』 次回は  
どうなる!?!?」

秋風「ちなみに一番の選択肢の場合は」

迅「次回、第四十五話『たどり着いた過去の世界』 TAKE OF  
F!」

第五十六話「学園祭スタート！ いざ予選会！」（前書き）

ありがとうございます。結果はあとがきで！

あと5話少しおかしくなってました。編集をミスしたのかわかりませんが、気をつけます。

第五十六話「学園祭スタート！ いざ予選会！」

リインフォースとデートを準備前に行い、数日が過ぎた。いよいよ始まるのが……

『これより、麻帆良学園、学園祭を開催いたします！』

「うはぁ……すごいなあ」

「なんだか、テーマパークに来たような感じですね」

リインフォースとその道を歩く。そのものすごいパレードは前の世界でも、前世でも見るできないパレードだ。

「さて、どうしようかねえ……ネギは時間跳躍使っだろうし、仕事まで時間もあるし」

予選会は面白そうだから出たいしなあ……

「そっいえば、どうでしょうか？」

リインフォースは白いドレスと服の中間のような服を着ている。正直、かなり似合うし綺麗だ。

「ああ、綺麗だよ」

「ありがとうございます……」

リインフォースは顔を紅くする。ははっ、リインフォースも変わっ

たな。

「じゃ、リインフォース、行こうか」

「え？」

「どうせなら後でネギを捕まえて時間を戻ればいいし、一緒に学園祭を回ろう」

「はい」

リインフォースが俺の腕を絡ませ、俺は少しそれを気にしながら人ごみの中を歩き始めた。

アキラ s i d e

まき絵やゆーな、それに亜子と急いでクラスまで戻る。

「やばいよ、もう入場始まっちゃうよ」

「うん、急ごう」

そんな風に歩いていると、亜子が足を止めた。

「亜子？どうしたの？」

「あれ、神谷君やない？」

そういえば迅は午後から仕事だっけ。

「本当だ。つて、あの美人誰？」

その隣を、楽しそうに美人の女性が歩いていった。銀髪で赤い目をした女性。胸が私より大きくて、なによりスタイルがいい。あの服もすごく似合ってる。

「うは〜・・・神谷君もすみに置けないねえつて、アキラ？」

「え？な、なに？」

「アキラ、缶が潰れてるつて」

「え・・・・・・・・・・」

気がつくのと、持っていたジュースの缶がぐしゃりと潰れていた。

「どうせならアキラ学園祭で世界樹の伝説行けばいいのに」

「な、な、な、なに言ってるの、ゆーな！」

「そうすればあんな銀髪美人を出し抜けるつて！」

「出し抜くとかそんな・・・・・・・・私はただ・・・・・・・・」

あれ？私は・・・・・・・・どうなんだろう。キス争奪戦のときもキスをして、魔法を知って・・・・・・・・

「アキラ？」

「え？うつん、なんでもない。ほら、早くクラス戻ろうよ」

「そうだった！行く、行く！」

こうして私たちはクラスへと走っていった。

???side

「ここが……並行世界」

「はい、そうです」

……よつやく会える。

「今は学園祭の途中です……そうですね、会つのにちよつびいいイベントがありますよ」

「本当ですか？」

言われながら私はそれを受け取る。

「行きましよう、この龍宮神社へ」

迅side

「ふふふ、楽しいですね迅」

「ああ、本当にテーマパークだ」

いろんなゲームで遊ぶ。楽しいことこの上ない。そろそろ腹も減ったし……

「飯でも行くか」

「はい、超包子に行きたいです」

そだな……でも食ってみたのはお料理研究会だ。ちよつどそっ  
だし。

「やあ、四葉さん」

あ、こんにちは

さっちゃんが笑顔で迎えてくれる。

「お料理食べに来ました」

はい、喜んで。そちらは彼女さんですか？

「か、彼女……」

「いや、俺の家族だよ」

そうなんですか。そうそう、これがメニューです

さっちゃんにメニューをもらい、料理を頼む。ほんと、おいしい。

「あの、これはどうやったら……」



これはですね、肉の加減を・・・

と、リインフォースとさっちゃんが料理について話をしている。平和だな・・・ん？

「どうかしました？」

「いや・・・」

どこかから視線を感じたんだが、気のせいかな？

「・・・」

「迅？どうしました？」

「いや、なんでもないよ」

俺を狙うなら俺が倒せばいいか。

「ごちそうさま四葉さん。頑張ってたね」

はい、ありがとうございます

こうして料理研究部を後にし、その後もいくつかの場所を転々とした。そして、ようやくまほら武道大会が開催する。

「え、迅お兄さんも参加するんですか！？」

「おう、俺と戦うまでに当たったら・・・そうだな、あの地獄

のメニュー5倍な」

「う、うばい……」

聴いた瞬間、ネギがガタガタと震えだす。え？何したかって？たとえば史上最強の弟子ケンイチの修行みたいに足をくくりつけて火の上にやりの、腹筋と背筋を鍛えたり……あの砂浜を俺が鞭を打ちながら何百週と走らせたり……あとはもう色々だ。

「んじやなネギ、コタ、多分本戦残るだろうから頑張れよ」

「はい！」

「おう！あんちゃんも負けたらあかんで！？」

誰に物言ってるんだよ」

俺は苦笑しながら壇上に上がった。おおう、面白いな。さーてやるかあ

「おいおいにーちゃん、ほっそいなあ！」

周囲の人間が笑う。まあ俺は普通の体だからな。

「お手柔らかに」

俺はただ一言言い、構えをとった。えーと、武器使用禁止だけど無詠唱ならいいか。でも派手なのは駄目だな。ガンダムも不味いだろうし……まあ気を強化してるだけでも十分勝てそうだな。

『それでは人数がそろいました！レディーファイッ！』

「そのあんちゃん覚悟しなあ！」

雑魚が……

「なっ!？」

死ぬ気の炎で強化して、その襲い掛かる集団から消える。そしてそのまま蹴り飛ばし、着地した。

「俺に勝とうなんざ1000年早い」

「はあっ！」

ん？

「おっと」

「……………」

フードをかぶった女？が木刀を振り下ろす。この太刀筋、中々だな。だが甘い。俺は腰に刺した木刀を抜き、振り下ろされた女の剣を受け流すように回転する。

「遅いぜ」

「！」

「飛天、御剣流……」

龍巻閃！

そのまま本来なら女は倒れるはずなのだが、避けられた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「やるな、瞬動・・・・・・・・いや、縮地に近い」

早いな。それにこいつ、戦いなれてやがる。

「おらあ！」

「おっと」

他の方向から数人が殴りかかってくるので、俺はそれを避ける。あの女とは後だな。

「次から次へと・・・・・・・・」

俺は他の格闘家たちへと躍り出て、勝負は幕を閉じた。

さてさて、原作どおりに進めばいいのだが違った。ロボ田中と中村達也がいない。その枠には俺と謎のフードがいるからだ。さらに佐倉愛衣と高音・D・グッドマンの部分にも別のTと書かれた人物がいた。いったい何者なんだか。

「お、真名や刹那は当然としてアスナも残ったか」

「刹那さんにくっついてたから。でも勝てそうにないわね・・・・・・・・」

まあ刹那だしな。

「でもそろそろ、刹那が本気を出せるくらいの実力にはなったんじゃないか？」

「そんなわけないじゃない、私全然よ」

「そんなことありません、アスナさんはかなり腕が上達してますし」

そうそう、かなり強くなったよな。

「それより迅」

「ん？」

「気がついてるか？」

そういえばフードの集団が2人いる。原作で見なかったけどな。でも何者だ？

「こっちに異様な殺気を放っている」

「まあ、何とかなるだろ」

なんか、懐かしいような気もするけど………なんでだろ

「それでは、トーナメントを発表します！」

こうしてトーナメントが発表される。原作どおりの面子だが、当然その原作部分に俺と謎のフードがいる。だが、本戦が楽しみだ。

第五十六話「学園祭スタート！ いざ予選会！」（後書き）

秋風「皆さん、たくさんの応募ありがとうございました。」

迅「ようやく結果が出たので発表します」

秋風「とりあえず学園祭までは続けます」

迅「本当ならもう少し先までだったのですが、やはりstsが重要という意見もありました。」

秋風「それに私個人としても、やはり原作採用はなので、早めに致しました」

迅「さまざまな方にご迷惑をおかけしました。」

秋風「自分の書きたいように書くためにも、精進して参ります」

迅「これからも応援をよろしくお願いします」

秋風「そしてアンケートやメッセージをくださった方々、誠にありがとうございました！」

迅「次回、第五十七話『本戦ブレイク！フードの正体』次回もお楽しみに！」

**第五十七話「本戦ブレイク！フードの正体」(前書き)**

さてさて、本戦スタートです、ネギま編もあと少し！

## 第五十七話「本戦ブレイク！フードの正体」

本戦が開始される。第一回戦はコタと謎のフード。場所にはFと書かれていた。なんだ？この威圧感は……

「おっしや、行くでえ！」

「……………」

『では第一試合……ファイツ！』

「おらあー！」

コタが殴りかかる。Fは二刀流の木刀でそれを流した。あれ……？

「どうしたんですか？迅お兄さん」

「いや……………」

気のせいか？あいつの動きが何か誰かと重なる。

「がっ……………！」

コタローが吹き飛ばされる。

「コタロー君！」

「あんだ、やるやないか……………」



「・・・・・・・・・・」

Fとなのるフードはそのまま二刀で攻撃を食らわす。コタローも反撃したものの、それはかなわずコタは沈んだ。

『8、9、10！試合終了！勝者F！』

フードはそのまま退場。コタは医務室に運ばれた。

「コタローくふええ！？」

「行くな、ネギ」

俺は行こうとするネギを止めた。

「な、なんですか！」

「何しに行くんだ？」

「は、励ましに・・・・・・・・」

「アホ、お前もし負けてライバルに励まされて嬉しいか？」

ネギはしばらく考えて、頭をたれる。

「ちよ、ちよっとそれは・・・・・・・・」

「だろ？長瀬さんが様子を見に行ったし、安心しろ」

さて、もうすぐ俺の試合だな。

試合はかなりイレギュラーな展開を見せた。まず真名とクーふえの戦いは原作どおりに行くと思いきや、真名が奮戦し、クーふえも漫画とは違う戦いを見せて勝利した。そのあと真名に「頑張ったから後でデートしてくれ」とせがまれ、俺はこいつは超の軍勢じゃないのかと疑問を持ちながらも了承、真名はそれに喜んでいて。楓の試合は楓がTと名乗るフードに負けた。楓は「修行が足りなかったでござる」と言っていた。だがTから放たれるその拳からの気の強さはかなりのものだった。あいつも達人クラスなのかもしれない。だが離れて気を放つ仕草、どこかで見たような？まあそんな疑問もあるわけだが、とうとう、俺の出番になった。

「さーて、行きますか」

「迅お兄さん、頑張ってください！」

「おう、任せときな」

「負けんじやないわよ？」

「お、アスナ心配してくれるのか？」

俺が言うと、アスナが顔を背ける。

「さあね、知らないっ！」

あれ？アスナってこんなキャラだったけ？

「気をつけてくださいね。あの覇気、ただものではありません」

「わかってるよ刹那」

さてさて、行きますか。俺はそのまま壇上へ上がり、ステージに上る。おお、実際来ると観客いっぱいいるんだな。

『さて、次の試合は圧倒的力で予選を勝ち抜いた真帆良女子中学校の交換留学生、神谷迅！』

そして対するは謎のフード4人目！その名はS！さあ第五試合！フアイツ！』

「さて、予選の決着を付けようぜ」

「……………」

フードの中で頷くのが見える。さて、行くか。

「行くぜ！」

俺は木刀をFateの士郎と同じように強化し、斬りかかる。相手も木刀を構えるが、これは防げないだろう。

「……………」

その一閃を避けられ、そのまま突きが飛んでくる。俺はそれを避けると、木刀を握りなおす。まさか、見切られた？

「わかったのか？木刀が『強化』されてるのが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この強化された木刀に対して普通の木刀で受ければ間違いなくその木刀は粉々に碎けるだろう。微量の魔力粒子で木刀が光るが、それを見るなど達人レベルでなくては不可能だ。もしくは、俺の技を最初から知っていたのか。Sはそのまま何も言わず斬りかかった。俺はそれを受ける。なんなんだ？Fというコタを倒したフード、それに楓を倒したTというフード、そしてこのSというフード・・・・・・・・全員どこかで戦ったようにも思える。だが、楽しい。そう思った。

「ふう、後10分か・・・・・・・・ならそろそろ本気で行くぞ」

「おおっ！？神谷選手、本気宣言です！今まで力を隠していたのか！？」

俺は気を体に張り巡らせ、木刀を構える。その構えは抜刀術の構え。すなわち予選と同じ、飛天御剣流だ。

「行くぞっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

木刀が交わり、俺は速度を上げていく。そして隙ができたところで、技を放つ。

飛天御剣流 奥義 土龍閃！

木の破片が飛び散り、Sに向かっていく。だがSはその木の破片をかまわず突っ込み、俺の一閃を受け止めた。

「なにっ!?!」

「……………はあっ!」

「!?!」

気合の入った声から、一振りが振り下ろされた。俺はそれを喰らった。その声に反応して、スキができたからだ。

「ぐっ……………」

『おおつと!?!神谷選手の動きが止まったあ!一体何があったんだあ!?!』

「お、お前は……………」

「……………」

Sはそのまま俺に斬りかかる。俺は混乱する。何故……………?何故こいつがここにいるんだ?いや、ありえない。ここにいつはいるはずがない。少なくともこいつは『この世界』にいるはずがない。

「ぬっ!」

「……………」

俺はそのまま攻撃を受け止め、バックステップで距離を取った。

「お前は、何者なんだ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

答えない。答えてくれない。なら・・・・・・・・

「お前を倒して、俺の疑問を晴らす」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は再び構えを取る。Sも構えを取る。俺は飛び上がると容赦なく、その一撃をSに放った。

飛天御剣流 奥義 龍槌閃！

「ぐ、あ・・・・・・・・」

『S選手ダウン！し、死んだ！？いえ、まずはカウントを！1、2、・・・・』

木刀が粉々に砕け、攻撃を受けたSはその場に倒れた。一応加減はしてあるし、死なないだろう。そしてカウントが取られて試合終了。俺はSを抱きかかえ、会場の裏手へと回った。リインフォーースも転移し、俺と共に裏手へと回っていた。

「・・・・・・・・・・」

俺はフードを取った。そして俺の疑問は確信へと変わった。

「やっぱり、お前だったのか・・・・・・・・」

戦いで予想はしていた。だがありえないとわかっていた。だが、俺の予想は、見事的中してしまっていた。そこにいたのは……

「……………シグナム」

第五十七話「本戦ブレイク！フードの正体」(後書き)

秋風「まだまだ、飛ばすぜ！」

迅「次回、第五十八話『再会』そして師弟対決』次回をお楽しみに！」



第五十八話「再会　そして師弟対決」(前書き)

これにて武道会は終了になります。

最近ライダー活躍してないなあ……

第五十八話「再会　そして師弟対決」

「…………シグナム」

「ん、んん…………わ、私は…………あ」

「お前、シグナムだよな？」

「迅…………」

シグナムが目には涙をため、俺に抱きついた。

「迅、迅！」

む、胸が当たる…………って、そうじゃない。

「わかったから落ち着けよ。それにそこにいるんだろ…………なのは、フェイト、アリシア、はやて…………それにエレナ」

俺が言うと、フードをかぶっていたなのは、フェイト、はやて、アリシアがいた。

「迅君！」

「迅！」

「じん！」

「迅君っ！」

3人も抱きつき、涙を流す。

「やっと、やっと会えたよお！ふええええん！」

「迅、よかった、よかったっ……！」

「心配したんだよ！すっごくー！いっぱい！」

「ほんまや、やっと……やっと会えた」

とりあえず感動の再会はいいんだが……

「おいエレナ、たたずんでないで俺に事情を説明しろ」

「久しぶりの登場なのに……ゴホン！はい、説明しますよ」

こうして、エレナは俺に説明してくれることになった。かなり派手に暴れたので、試合を再開するのは当分先のようにだ。

「まず、どうやってここに？」

「これです」

そう言って取り出したのは蒼いひし形の宝石。これって……

「ジュエルシード？」

「いえ、似ていますが、別のものです」

エレナの力によって作り出されたものらしい。世界を渡る力を持つてるとか

「あの戦いの後、あなたの微量の魔力を中心に、この魔石に封印しました。それによって、あなたのいる世界へと飛ぶようになったのです。」

なるほど……だから石が俺に張り付くのか。

「つまり磁石ってことか？」

「はい、そういうことです」

「だけど、なんですぐに俺のところに来なかったんだ？」

すぐに会いに行ったのに。

「この学園が広すぎたんですよ。だからあなたが参加するであろうまほら武道会に出たわけです」

「私たちを置いていったから、おしおきもかねてね」

別のところから声がした。

「え、お前ら……ごぶっ！」

そこにいたのはアリサとすずかだった。俺は言い終わる前にアリサに蹴りを喰らった。

「でもじゃんけんで負けて大会にはでなかったんだけどね」

クスクスと笑うすずか。そして怒っていたアリサも涙を流しながら、俺に抱きついていていた。

「心配かけないでよ！ばかあ！」

「よかったよ、迅君……」

「みんな……ごめんな」

こうして、俺はみんなとの再会を果たした。

会場へ戻ると、ちょうどネギが試合を始めるところだった。

「ようネギ、がちがちじゃん」

「は、はい……キンチョーしてます」

まったく……コタいないし、アドバイスしてやるか。

「ネギ、あごを守れ」

「え？」

「そうすれば一発ではやられないだろ。んでもって俺の見たところタカミチの攻撃範囲は10メートルだ。」

俺が言うと、少しだけネギが緊張が強くなっていた。

「だが、お前も親父に追いつきたいなら、このくらいの試練は乗り切って見せる」

「は、はいっ！」

この後ネギはエヴァたちにも応援をもらい、見事タカミチに勝利した。アスナと刹那の戦いは原作どおり、クウネルがきっかけを与えてえらいことになった。

「……あなたが、アルさんかい」

「クウネルで結構ですよ。神谷君」

「ふ……あなたの目的、ずばりネギだろ？」

「おやおや……全て知っているような感じですね」

「ああ、あなたに協力するよ、ネギにも、強くなって欲しいしな」

こうして俺は、次の試合Fことフェイトと、Tことなのはを棄権させた。まあどのみちにしろ、フェイトとなのはにこの男を倒す術がないわけだし、いいだろう。さて、次は俺とネギだな。

「さて、約束どおり頑張ったんだ。メニュー五倍は許してやるう」

「よ、よかった……」

ネギが安堵のため息をつく。ちょっと苛めようかな。

「だが、俺に傷を付けられなかったら10倍な」

「くひい！」

さて、こいつの緊張も解けたことだし、やりますか。

「行くぜ、ネギ」

「はい、おにいさん師匠」

拳と拳がぶつかり、瞬動同士の戦いになる。俺の場合は縮地だが、かなり加減している。

「そろどうした、タカミチとの戦いでへばったか？」

「ま、まだまだです！」

「抜きが甘い、攻撃が単調すぎ」

「あつう！」

お？力こめたのに腕に魔力を溜めてガードしたのか……こいつ、どこまで成長するんだかなあ。

「今、腕に魔力を集中したのか？」

「は、はい……」

「練り方が旨くなったな。だがそれも、こつするととらにすいぞ  
？」

俺は最大出力でネギと同じことをする。

「うわわっ！」

「まあ俺もタカミチと同じように、お前がどこまで強くなったか知りたいのは事実だ。だから……」

俺は魔力を溜める。

「さあ、行くぞネギ」

「はい！」

魔法の射手 サギタ マギカ 雷の59矢 セリエス フラゲラリス!

「うわあっ！」

ネギが驚いて距離を取る。

「ネギ、俺は無詠唱で白き雷のレベルまで使えるぞ……とあどつする？」

本当は千の雷レベルまでできるけどな。

「つく！」

ネギの周囲にも光が起きる。なるほどね。

「タカミチを倒したと同じやり方では、俺には勝てんぞ！」

9本まで待つと、俺は駆け出して魔法の射手を消そうとする。だが



ネギはそこで消える。

「何っ！？」

「やああああっ！」

最大 桜花崩拳！

「後ろ……ぐあっ！」

俺は吹き飛んだ。まさか、技を放つ瞬間に瞬動で移動するとは……

「ま、まだまだあ！」

そうか、こいつ遅延呪文が得意だったか！

「はあああああっ！」

あらかじめどこかで溜めておいたのであろう魔法の射手が発動し、再び桜花崩拳が放たれた。

桜花崩拳！

「ぬぐっ！」

はは、強くなったな……ネギ

「よろしい、合格だ」

「え？」

「お前は、十分上へ進む権利がある」

「え？え？」

俺はよろめきながら、その場に寝た。

「よくやった、俺はギブアップだ。朝倉さん」

『ついに決着！子供先生準決勝進出！って、やばいやばい！急いで担架をー！』

おー、リミッターかけてたからめっちゃボロボロだ。まあいいか。

「お兄さん」

「おう、お疲れさん。刹那との勝負も頑張れよ」

「は、はい！でもお兄さん、手加減してました？」

「ふふ、どうだろうな……でもお前は強くなった。俺が保障しよう。」

「はいっ！ありがとうございます！」

元気な返事の後、ネギは元気に返事をした。

「少し、疲れたな……」

なのはたちが入ってきた。

「迅君、大丈夫？」

「ああ、まあな。なのはとしてはどうだ？ネギは」

「すごい才能の子だね、強くなるよ」

だろうな……って、あれ？眠気がする。なのはたちに会ったから安心したのかな。

「悪い、ちょっと寝る」

「うん、おやすみなさい」

「ああ、お休み」

そう言って、俺も意識を落とした。

第五十八話「再会　そして師弟対決」（後書き）

秋風「さてさて、これでまほら武道大会は終わります。次回より決戦です」

迅「何？チャオのあれか？」

秋風「まあその辺は本編で！」

迅「次回、第五十九話『真帆良防衛戦！』次回をお楽しみにね！」

第五十九話「麻帆良防衛戦！」（前書き）

お久しぶりです、なんとというか、五月病になりました。まじで何に  
対してもやる気がおきません。

最近は何で俺呼吸してるんだ？とも思っくらいです（嘘）

今回デート編は先送りしました。でも真名とアキラ、それにアスナ  
やネギたちも再登場する予定ですので、ご安心ください。

とりあえず頑張りたいです。五月病の解消法や、応援メッセージ、  
待ってます

## 第五十九話「麻帆良防衛戦！」

試合が終わり、なのはたちと脱出した。んで、時間が過ぎてネギたちは最終日のイベントを迎えることとなった。俺たちは学園祭の中を歩く。

「ふえーすごいねえ」

「ああ、ネギにしては考えたイベントだな」

麻帆良防衛作戦……あいつにしてはいい作戦だ。まあ、俺には関係ないけどな。

「ねえ迅、私たちは本当に何もしないの？」

「ああ、したらゲームにならないだろ」

防衛チームが勝つのは原作どおりだしな……なんてことを考えていると、誰かとぶつかった。

「あ、すみません」

「こちらこそ……って、あー！迅！」

「ア、アスナ！」

やっぱ……

「あんだ、あんだ今までどこ行ってたのよー！」

「いや、それはだな……」

「ん？その人たち誰よ」

め、めざとい……

「えーと……」

とりあえずこいつらが異世界から俺を探しに来たという話をした。

「ふーん、なんかあんたがネギに見えてきたわ」

「あのかな……」

「それはさておき、あたしたちがどんな苦勞をしてきたか教えてあげましょうか……」

やばい、なんか恐ろしい覇気が……

「落ち着けアスナ！」

「あんたのその抜けた顔見て落ち着けるかぁー！」

なんだそりゃー！このあとアスナから数十分説教された。

「というわけで、あんたも手伝いなさいよ！」

「なんでだよ、お前らの戦いだろっつが」

「あんた怪物倒したでしょうが、とにかく手伝いなさい」  
「面倒だしやだ……」

「いいじゃない迅君、手伝っちゃおうよ」

「なんでだよ、お前ら勝手に暴れただけだろ」

「あんたがどっかに行って私たち泣かせたのに？」

「うっ！」

ちくしょう、アリサのやつ……

「それに、私たちの言うことも聞くべきだよな？」

「あーもう！わーったよ！」

なんでこうなるんだか……

『それでは、ゲームスタート！』

おーおー始まったな。さて……なのはとフェイトとシグナムが強いのはわかったけど、アリサたちはどうかな？

「フレイム・フレイア・フレイデル！ト・シユンボライオン・ディアアコネート契約に従い我に従え炎の霸王エヒゲネー・テカ田クヌタルセオウ凶ギネー・来たれ浄化の炎燃え盛る 大剣 ほとばしれよ ソドムを焼ロンファイア・レウサントーン・きし 火と硫黄罪ありし者を 死の塵に」ハ・エズラビオン・ハマルトートウス・ エイヌ・クーンタナトウ ビュール・カイ



ウーラニア・フロゴース  
『燃える天空』！

ええええええええええ！？

「ルナ・カルプ・ノクテム！ 契約に従い我に従え氷の女王！ 来れと  
イオーニオン・エレボス ハイオーニエ・クリュスタレ パーサイス・ソーサイス・ トン・イソング・タナトン  
こしえのやみえいえんのひょうが全ての命ある者に等しき死を！」

『コスミケー・カタストロフエー  
おわるせかい』！！

なにいいい！？

炎と氷が周囲を包み、田中さんたちが滅びていく。

「どんなもんよ！」

「どんなもんで……」

なんでお前らが最上位の魔法使ってるんだよ！

「血へド吐くほどお二人は練習してましたし……」

「才能がどうこうじゃないだろ、あれ」

天才だろ、あいつら……

「まあ、きつかけをあげたのは私だけだね」

「お前は……」

そこにいたのは聞いたことがある声

「アテナ！」

「いい加減、呼び捨てやめなさいよ……………」

「てか、きつかけ？」

「そう、あの子達は原作どおりじゃなかったのよ。並行世界の可能性…………あの子たちに干渉したあなたのおかげね。まあいいとして、あれはいいのかしら？」

アテナが指差す。それはスポーツ娘どもが田中さんに苦戦を強いられているところ。アスナたちがいないし辛そうだな。

「はあ…………行くか。でもアテナ、俺は帰れるのか」

「そうね、来るべき時が来たら…………ね」

そっぴい残し、アテナは消えた。何を考えてるかわからんがまあいい。俺はディケイドライバーを取り出す。

「変身！」

『K A M E N R I D E D E C A D E !』

手をぱんぱんと叩き、ライドブツカーを手に、田中さんたちに斬りかかった。

「ほら、ポーっとしてんなキッド！」

「え、え！？神谷君！？」

「俺もヒーローユニットさ。はっ！」

ライドブツカーをガンモードにし、田中さんたちを蹴散らす。

「さて、防衛軍の諸君、私がいなくても大丈夫だろうか？」

俺が言うと声が上がリ、士気が上がった。これならいけるな・・・

「迅！」

「アキラか、お前もアーティファクト使ってるなら大丈夫だろ」

「それはそうだけどその・・・」

「？」

なんだ？

「気をつけてね」

「おう」

アキラの言葉に頷き、俺はそのままマシンディケイダーに乗って田中たちを潰していく。

「どんどん行くぜ！」

『ATTACK RIDE SIDE BASSHER!』

激情時でもないのに使えるのもなんと気持ちがいいことか。サイド  
パッシャーのミサイルであまたの田中を蹴散らす。これならもう十  
分だろ。

「デイバインバスターアアア！」

「トライデント、スマッシュャー！」

「フレイスベルク！」

「飛竜一閃！」

「夜天の雷！」

『FINAL ATTACK RIDE D I D I D I E  
N D!』

「はあっ！」

それぞれも必殺技を放つ。すると、増援と共に鬼神たちが現われる。

『なのは！みんな！各自一体ずつ援護に回れ！』

「「「「「了解！」「」「」「」

「さて……俺の分身もやってってくれるかな？」

超side

「……思った以上にやるね」

神谷とのお仲間……ネギ坊主の姿が見えないが、おそらく休養中か……

「よう」

「!?!」

そこにいたのは神谷。だが神谷はあのへんてこな姿で戦っている。

「安心しろ、俺は分身だ」

「分身……」

「まあお前と話をしにきたただけだ。別に捕まえるわけじゃねーよ。ほれ、食べよ」

言いながら彼は私にアイスを渡して座る。本当に敵意はないように見える。

「世界中の人間に魔法の存在を公表はひ……か」

「……どこで知ったネ？」

「ん？まあ色々なルートを知ってな」

「この世界は大変淀んでるね、だからこそ、私が管理する。それだけヨ。どうネ？神谷も仲間にならない力？」

私が言うと、神谷はあくびをしながらも、面倒くさそうに私を見る。

「興味ない」

「何故力、世界を救う有効な手立てヨ」

「だから、その世界とか救うとか、興味ないんだよ」

「理解できないネ、それでも魔法使い力？」

「正直な話をすると、魔法をばらしても大差はないと思うぞ」

「どういう意味力？彼は本当に分からないイ」

「何故そう思うネ」

「この世界には、確かに悲劇がありふれてる。その現況はここや魔法世界のような独立組織や国……その耐えない紛争や力が人々を苦しめる。だが「魔法」も力だ。その魔法がばれたら、そいつらを煽るだけだと思っぞ？」

「そうならないように、私が管理するネ」

「そんなの難しい過ぎるさ、隠れたところで非道な人体実験や殺戮が必然的に行われるだろう」

「……………」

確かに、そうかもしれない。でも、それでも……

「人つてのは欲望を格付けする。「世界を救いたい」「ここにいたい」「金が欲しい」「名誉が欲しい」「大切なものを守りたい」すなわち、全部が『願い』だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前は何を願う？未来の平和？世界の革命？世界の支配？それとも独裁か？いいや違う・・・・・・・・お前は、お前はただ、自己満足をしたいだけなんだ」

「黙レ！」

とっさに叫んだ。自分の真の本心に近いことを言われたからか、それとも理想をけなされたからか。だが叫ばずにはいられなかった。

「お前に、一体何が分かるネ！お前のように、ぬくぬくと育つたよ  
うな男ガ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前なんか、私の気持ちは分からないヨ！」

「・・・・・・・・わかるさ」

「えっ!?!」

「俺も一度は、世界を変えようとしたんだからな。さて、もう話は十分だろ・・・・・・・・後は、ご先祖様と、そして自分自身に決着つけな俺は行くぜ」

そう言つて神谷が消える。本当に戦う気はナカタか……

「変な奴ネ……」

迅side

俺の分身が消えた後、ネギと超の戦いは終結した。まあ、原作どおりになったことだし、良しとしようか。ゲームも終わりだな。

『我々防衛軍の大勝利……なにあれ！？』

朝倉が叫ぶ。アレは……！？

「なんだ、あれ！」

そこにいるのはスクナに似た鬼神。超が使おうとしたやつより数倍でかい。なんだあいつは……

「神の本棚……！」

俺の視覚が無数の本に覆われる

「キーワード、麻帆良、鬼神、封印、結界……  
……あつた！」

俺は眼を開く。すると、なのはたちが降りてきた。

「迅君！アレは！？」



「あれは『鬼神 カムイ』……ここに封印されていた、リョウ  
メンスクノカミに次ぐ鬼だ」

「カムイ……」

「大戦中に暴れまわってここまで来たが、サウザントマスターに  
封印されたらしい。だが結界が解けたことで、暴れだしたみたいだ。  
超も封印したが、俺たちの魔力でそれが消えたっばな」

こうして、俺たちの本当の最終決戦が始まった

第五十九話「麻帆良防衛戦！」（後書き）

秋風「お久です。五月病か、スランプか、なんというか小説が書けませんでした」

迅「ただの面倒くさがりじゃないの？」

秋風「んなわけねえだろ！」

迅「どーだか」

秋風「さてさて、次回でようやくネギま！は完結しますが、またキヤラたちは戻りますのでお楽しみに」

迅「んで？最終決戦は？」

秋風「仮面ライダー Fate / stay night ネギま！  
ガンダムのでんこもりだ！・・・多分」

迅「多分かよ！」

秋風「これからも頑張ります。やる気が出る方法教えてください・・・」

迅「次回、第六十話『さよならは言わない、また会えるから』（前編）次回もよろしく！」

第六十話「さよならは言わない、また会えるから」(前編)(前書き)

はい、ということでも話がまたぐことになりました。

詳細設定なんかはまた後日ですが、結構めためてです。

正直五月病に近い状態で書いてるのでどうなるか分かりませんが、頑張りましたので、読んでくれたら幸いです。

では本編どうぞ

第六十話「さよならは言わない、また会えるから」（前編）

とりあえず飛翔。ネギたちが攻撃されそうなので、すぐさま防御を展開する。

「熾天覆う七つの円冠！」  
ロー・アイアス

「迅！」

「迅お兄さん！」

「よう、無事か？」

俺は言いながらゼロを構える。どうやら鬼は待つてくれないらしい。

「ちょっと迅！アレはなんなのよ！」

「ああ、あれは超たちが結界を解いたことで暴れだした『カムイ』  
つて化け物だ……。まあ、俺たちが何とかするから、安心しろ」

さてやるか……

「ゼロ」

『オーライ、合言葉は？』

「革命者の七聖剣だ」

『オーライ、ダブルオーライザーセブンスソード展開』

ダブルオーライザーセブンスソードとなり、飛んでくる小型の鬼を切り裂いていく。

「おおおおおおおおおっ!」

きりがねえ……

「デイバインバスター!」

「なのは!」

「ここは私たちに任せて!」

「わかった、行くぞリインフォース!」

「はいっ!」

こうして俺はリインフォースと共に、カムイ目指して飛んでいった。

アキラside

「アデアット!戦乙女の弓!」

私は戦乙女の弓を使って飛んでくる鬼たちを撃ち貫く。

「数が多い……」

さっきの田中さんを相手にしてたほうがましかも……

「アキラ！前々！」

「え！？」

鬼が私に襲いかかろうとする。衝撃でネギ先生とアスナ以外が気絶して、私はとつさに目をふさいだ。

『プロテクション』

電子音がした。鬼は襲ってこない。眼を開けると、白い服を着た、私くらいの女の人が空を飛んでいた。

「大丈夫ですか？」

「は、はい……あなたは」

「私は高町なのは、迅君の幼馴染で、魔導士です！」

そのまつすぐな瞳が、とてもまぶしい。

「わ、私は……その、大河内アキラです。その、迅の仮従者でその……」

「え？」

少しの沈黙。そして……

ドオオオン！！

「え！？」

「あれは……」

鬼が倒れる。でも、あそこで対峙しているのは、迅と何かだった・

迅 side

「なんだ、あれ」

カムイが倒れる。そして中から人が生まれた。いや、角がある。ア  
レが鬼なのか……？

「外の世界、何年ぶりの空気が……」

「お前、何者だ？」

「我が名は神威……最強の鬼神にして、世界最強の存在」  
最強か……

「さて、余興だな……周囲の人間を滅ぼすでしょう」

「俺がさせると思うか……？」

「奇怪な姿……妖怪ではなさそうだな。人の味方をするなら、  
倒すのみ！」

鬼が瞬間移動で俺に刃を向ける。はやいっ……！！

「トランザムっ！」

トランザムを起動し、そのスピードを上回って斬り伏せて地面に叩きつける。俺も追って地上に降りる。

「どこ行った……？」

「ここだ」

「なっ！」

すぐに攻撃をするが、トランザムを上回るスピードで俺を蹴り飛ばした。

「ぐ、あ……」

その反動でトランザムとダブルオーライザーセブンスソードが解けてしまった。

「ほう、人間だったのか……だがその力は危険だな……消し去るとしよう」

「迅！」

リインフォースが仲裁に入り、神威を蹴り飛ばした。

「ぬ、貴様も人の形をしているが人の気が感じられん……面白  
い奴らよ」



「迅、立てますか？」

「ああ、大丈夫だ。行くぞ、リインフォース」

JOKER！

「はい、迅」

CYCLONE！

「「変身！」」

ガイアメモリをWドライバーに装填し、起動させる。

CYCLONE！JOKER！

「「さあ、お前の罪を数えろ」」

俺は仮面ライダーWに変身し、神威に襲い掛かる。

「むっ  
「むっ」

「はあっ」

連続で打撃を与えるが、神威はそれを受け流し、俺たちに反撃する。

「むうんっ」

「うあっ」

俺たちは吹き飛ばされ、再びメモリを取り出す。

TRIGGER!

トリガーメモリを入れ、ハーフチェンジした。

CYCLONE! TRIGGER!

「はっ!」

トリガーマグナムの引き金を引き、神威に攻撃を仕掛ける。だが神威はそれに関係なく走り出し、トリガーマグナムを吹き飛ばした。

「なっ!」

「駄目ですっ、やはりサイクロンジョーカーでない!」

くそっ……

CYCLON! JOKER!

再びサイクロンジョーカーとなり、攻撃を防ぐ。このままじゃ、防戦一方だ……!

フウイン!

突然俺たちの目の前に、一体のメモリが現われた。あれは……

「エクストリーム!」

リインフォースを吸収し、俺たちの上空へ現われる。そしてWドライバーが作動し、エクストリームメモリが突き刺さった。

X T R E M E !

「おおおおおおおおおおお……はあっ！」

中心部分が開き、俺たちは仮面ライダーWCJXダブルサイクロンジョーカーエクストリームとなった。

「なに!?!」

「これは……」

「すごいです迅、体から力が溢れてきます」

「それだけじゃねえ……ユニゾンしているときよりも……」

「……一つになっている!」「」

だが、何故エクストリームが……

『それは私よ』

「アテナ!?!」

『貴方が作りかけてたのを完成させたのよ。その力で、未来を切り開きなさい』

しょうがない、今だけは頼るとしよう。

「プリズムビッカー！」

プリズムビッカーを取り出し、プリズムメモリを取り出す。

PRISM!

「行くぞ！」

プリズムソードを手に、鬼に斬りかかる。

「はあっ！」

「ぬうっ！」

剣と剣が重なるが、俺はそのままボタンを押す。

PRISM! MAXIMUM DRIVE!

「はあああ……はあっ！」

鬼の体に傷が入る。さっきまですぐに回復する体だったが、今ではそれが追いついていない。

「ぬがあっ！なんだ、その力は……っ！」

「これが俺たちの、本当の力だ！」

言いながら、俺はWドライバーを閉じ、再び開いた。

X T R E M E ! M A X I M U M   D R I V E !

「な、なにい!?!」

周囲に竜巻が発生し、そのまま俺は空中に浮き、神威に向かって突撃する。

「ダブルエクストリーム!」

ダブルエクストリームが発動し、神威に直撃した。

「ば、か……な」

神威はそういい残し、その場に倒れ付した。

「ふう……」

「迅君!」

「迅!」

なのはたちが降りてきた。

「なのは、アキラ、みんな……無事だったか」

言いながら俺は変身を解いた。

「勝ったの?」

「ああ、なんとかな」

「それより迅君？アキラさんと真名さんっていう人と仮契約……キスするってどういうことかな？」

え？なんで知ってるんだ！？

「ごめん、私が喋っちゃった」

アキラー！

「迅君？私とも仮契約しようか」

「迅、私ともしてくれるよね？」

「迅！私も私もー！」

「迅君、うちもしてくれるやろ？」

なのは、フェイト、アリシア、はやてが俺に迫る。さらにシグナムやアリサ、すずかたちまで無言で詰め寄る。おいおいおい……

「お前らなあ……！？」

急に殺気を感じた。これは……！！

「伏せろっ！」

俺はなのはたちを庇い、その場に伏せる。だが運悪く、背後から来た攻撃をかわせず、左腕が切断されて吹き飛ぶ。血が垂れるが、魔

力で無理やり止める。止血はしたが、これで戦えるかどうか……

「う、あ……」

「迅君！」

つちい……まさか、まだ！

「負けんぞ、この程度で……！」

神威が立ち上がるうとする。くそ……っ！

「このままでは終わらん、おわらんぞお！」

再び最初現われた鬼の器に憑依し、暴れ始める。もう見境がない。このままだと向こうにまで……！！

「お兄さん！」

「ネギ……」

「大丈夫ですか!？」

「俺はいい、みんなを逃がせ……俺が、なんとかする」

剣を投影し、掴む。

「む、無理よ!あんだ腕なくなってるじゃない!」

「早く逃げろ!ここは俺がなんせ馬鹿っ!」「ぐはっ!」

アスナに思いつき蹴られた。

「アスナ、てめえ何を……」

「あんた一人でなんでもかんでも背負ってんじゃないわよ！」

「だが、奴が現われたのは俺の……」

「つこの馬鹿！あんたもネギと同じね！あたしたちや、そのなのはたちがそんなに信用できないの!？」

「アスナ……」

アスナの眼には、涙が溜まっていた。

「カモっ！」

「あいよ姉さん！」

え？まさか……

バクティオ  
仮契約！

突然されたので驚く。アスナって本当にこんなキャラだったか!？

「アスナ!？」

「これであたしも従者よ！従者はマスターと最後まで戦うのが必定！そうでしょアキラ！龍宮さん！」



「うん、もちろんだよ」

「そうだな、最後まで来たんだ。一緒に戦うぞ」

いつの間にか、なのはたちだけでなく、真名や刹那も駆けつけていた。

「迅さん、私も戦わせてください。今はお嬢様のためでなく、あなたの背負うもののために」

「刹那」

「旦那、二連続だが行くぜ！」

「はっ!?!ふむっ!?!」

バクティオ  
仮契約!

どうしてこうなったかは知らんが、もう行くしかなさそうだ……

「……………わかった、行こう！」

再び剣を取り出す。それはこの世界に来るきつかけになった力。

「なのは、フェイト、はやては空中から最大砲撃、ネギもだ。でっかい花火を頼む」

「了解!」「」

「はいつ！」

エレナが巨大なバインドで神威を縛り付ける。

「皆さん、今です！」

「スターライトオオ！」

「プラズマザンバアア！」

「響け終焉の笛！ラグナロク！」

「駆けよ、隼！」

「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル！来たれ雷精ウエニアント・スヒリテウスエリアルダヌムテンテース風の精雷をフラグラテイオルネトテンベスターヌウストリーナ纏いて吹きすさべ南洋の嵐！」

「『『『ブレイカアア！』』』」

ヨウオニスラタリエース  
雷の暴風！！

3人のブレイカーと、ネギの雷の暴風が炸裂し、神威がよろめく。

「があああああああああああああああああああ！！」

「行くぜ、準備はいいな！」

「うん！」



第六十話「さよならは言わない、また会えるから」(前編)(後書き)

秋風「どんどん行くぜ！」

迅「次回、第六十一話『さよならは言わない、また会えるから』(後編)(ネギま!の世界最終回)次回もお楽しみ！」

第六十一話「さよならは言わない、また会えるから」(後編)(ネギま!の世界

はい、ということネギま!の世界はこれで終わりです。

自分で書いてて、かなり疑問だったり、自己嫌悪する点多々ありましたが、なんとか書き終えることができました。

皆さんの応援のおかげです。これからはSTSへと入るので、これからはよろしくお願いします!

では本編どうぞ

とりあえず、戦いは終わった。ケアルガを当てながらも、腕を補正、修復した。幸いにも

腕自体は残っていたのでなんとかなった。

「うーん、なんか違和感が」

「我慢してください、慣れるまで貴方なら数時間で戻ります」

「まったく、心配かけないでよね」

「アスナ、お前なんで俺と仮契約したの？」

と聞くと、アスナは顔を真っ赤にした。

「そ、そそ……それはあれよ！勢いよ勢い！」

「あ、そう……」

「さて、迅君？私たちも仮契約しようねー」

なのはが力毛を掴み、笑顔で立っていた。

「お、おい……まだ俺は体が……」

「旦那、あきらめてくれ。この周囲一体に魔法陣ひいちゃった」

この馬鹿力毛ー！

「さて、えい」

「ふむっ!？」

仮契約!

「こ、今度は私だね。ん！」

「んっ……!」

仮契約!

「今度は私だよ」

「んんっ!」

仮契約!

「はいはい、次うちや〜」

「んっ……ふぐっ!？」

仮契約!

「次は私だ!」

「ふむっ!」

仮契約!

「あ、あたしだってやってやるっじゃない!」

「んっ!?!」

仮契約!

「最後は私だよ、迅君」

「ふぐっ!」

仮契約!

なのは、フェイト、アリシア、はやて、シグナム、アリサ、すずかの順に仮契約された。

「本当にあんたネギみたいね……」

「言うな、アスナ……」

ネギは確か アスナ、刹那、このか、パル、のどか、ゆえ、千雨・・か。大して俺はなのは、フェイト、はやて、アリシア、シグナム、リインフォース、アリサ、すずか、アキラ、真名、アスナ、刹那・・・12人も契約してしまった・・・

「うう……なんだこれ」

「えへへ、迅君とのキスの証」

なのはがめっちゃ喜んでる。それに対してアキラや真名が不機嫌だ。



「どうした、お前ら」

「別に！」

そんな騒動の後、とうとう超が未来へ帰ることとなった。

「さらばだネギ坊主！また会おう！」

「はい！必ずっ！」

こうして、超は未来へと帰っていった。

「超さん、行ってしまいましたね」

「ああ、そうだな……」

そんなことを言っていると、次第に俺やなのはたちの体も透けていく。

「これは……」

「迅!？」

成すべきことを……

なるほどな、成すべきことって言うのは、あの鬼神を倒すことだったってわけか。

「迅、どうしたの!？」

「どつやら、俺やなのはたちも、元の世界に帰るらしいな」

「そんな・・・そんな、嫌だよ！」

「アキラ・・・？」

アキラが俺にしがみつく。

「せつかく、せつかく仲良くなったのに・・・もう行っちゃうなんて・・・」

「迅、どうしても行かなければならないのか」

真名も俺の近くに寄ってくる。

「・・・悪いな。もともと俺はイレギュラーだ。この世界に、俺の居場所はない」

もともと、この世界に来たこと自体がイレギュラーだったわけだし、さらにいえば偶然出しな。

「だから、これは決まっていた「違います!」「ネギ?」

「だって、迅お兄さんには、3・Aという居場所があるじゃないですか!」

「ネギ・・・」

「ネギのいうとおりよ、この世界にだって、あんたの居場所はしっかりあるのよ」

「そのとおりです。だから居場所がないなんて言うては駄目ですよ」

「みんな……」

みんなの言葉が温かくて、とても嬉しかった。

「迅」

「なんだ？アキラ」

「ん……」

アキラが俺に抱きつく。もう、俺達の体はだんだん薄れていた。

「帰って来るよね？」

「……ああ、多分、な」

「多分では駄目だ、また必ず帰ってきてくれ」

「真名……」

「迅お兄さん、ちゃんと席も残しておきますよ」

「ネギ……」

「また無茶したらただじゃおかないわよ！」

「アスナ……」

「私たちみんな、待ってますからね」

「刹那……」

みんな、本当に優しいんだな。

「大丈夫だ、みんなとは繋がってる。」

言いながら、俺は仮契約カードを取り出す。

「例え離れていても、心と心が繋がっている。もしなにかあったら、心の底から俺の名を呼んでくれ。必ず、必ず助けに行くから」

言うてから、ネギの方を向き直る。

「ネギ」

「は、はい……」

「お前はこの先、困難な壁にいくつもぶつかるだろう。今考えている辛さもあるだろう。だが忘れるな、お前には仲間がいる。それはこの世界だけではない。別世界にも、俺たちという仲間がいることを忘れるな。いつか、また会おう。サウザントマスターの意思を次ぐ、立派な魔法使いよ」

そうだな、名簿にメモでも入れておいてやるか。

「は、はいっ！」

「アキラ、真名……」

「何？」

「またな」

俺は笑顔でそういうと、目の前の視界は全て真っ白に染まってしまった。

後日文化祭後

ネギside

「そっかー、超りん行っちゃったんだ。」

「それに神谷君も留学期間を終えてたって」

クラスの席は、二つ空いてしまった。でも、超さんと迅お兄さんはメッセージを残してくれた。

『立ち止まるな前へと進め 君が求めたモノは得られるだろう 再見 超』

『立派な魔法使いとして自分の信じた道を進め その道の先にお前の未来がある 神谷』

超さん、迅お兄さん、見ていてください。僕は必ず立派な魔法使い

になつて見せます！

アキラside

「・・・・・・・・・・」

カードは、ちゃんと残ったままだった。これは証、私と迅の……  
・これがあつた限りきつとまた会える。だから、私も頑張らないと……  
・

真名side

「・・・・・・・・・・ふっ」

カードは死んでいない。つまり、迅は無事に着いたということだ。  
なら安心だな。あいつは必ず会つと約束した。だからこそ、信じなければな。このカードに誓つて

アスナside

まったくもう、ネギつてばまた何か迷つてるわね。それにしても私、  
同じ年の男とキスしちゃったんだ……勢いだったのに、なん  
でだろ。今更だけど恥ずかしい。今度会つたら引つ叩いてやるから、  
覚悟しなさいよ迅！

刹那side

ネギ先生、少し遅しくなっただな……。私もこれから、お嬢様を守るために強くなる。そして再び、迅さんに会うために。今度こそ、本当の気持ちも伝えたいから……

ネギ side

「それでは、授業を始めましょう」

こうして、残された一学期の授業が再開した。

第六十一話「さよならは言わない、また会えるから」(後編)(ネギま!の世界

ネギま!の世界編完結

秋風「はい、ということでもさかの前半と後半に分けた完結編でした」

迅「実際には収集がつかないから分けたんだけどな」

秋風「さて、次回からとうとうSTSです。」

迅「ほんと、ネギま編長かったな」

秋風「だな」

迅「とりあえず、言いたいことを言え」

秋風「皆さん、色々アレでしたが。フラグ乱立の迅。STSになってからでも、ネギま!のキャラは登場させるつもりです。ですのでお楽しみに!とりあえずフラグ一覧。ちなみに惚れた理由も記載(笑)」

なのは 自分を変えてくれたから

フェイト 運命を変えてくれた人

はやて 自分を助けてくれた人

アリシア 自分を蘇らせてくれた優しい人

シグナム 信念を曲げない、強い男

ラインフォース 自分を闇から救ってくれたから

アリサ 自分に優しくしてくれたから

すずか タイプの男性



アキラ

一目惚れ

真名

昔のマスターに似ている

アスナ

ネギ同様、一人で抱え込む所が放っておけない

刹那

自分のことを人として見てくれるから

迅「・・・・・・・・・・・・・・・・」

秋風「うわ・・・・・・・・」

迅「お前、一回死ね」

秋風「あっはっは！おもしろい！どんどん増やすぜよ！」

迅「ふざけるなーっ！」

秋風「ぎゃーーーーー！！」

迅「次回、第六十二話『協力するならやっぱり報酬は欲しい』TA  
KE OFF！」

第六十二話「協力するには価値を確かめる」(前書き)

はい、ちょっと間が空きましたが、更新です。  
STS編、がんばります！

## 第六十二話「協力するには価値を確かめる」

「……………帰って来たな」

「そっだね」

そこは海鳴の臨海公園。言いながら、なのはたちが対面したように並ぶ。

「……………?」

「迅君、お帰り!」

なのはが笑顔で、そう言った。

「……………おかえり!」……………」

みんなの言葉に、俺も自然と笑みがこぼれた。

「ああ、ただいま」

こうして、再び「魔法少女リリカルなのは」の世界が始まる。

三年後

「俺帰っていい? KY」

「いい加減その呼び方やめろ!」

現在クロ男と聖王教会を歩く。何故にして野郎と歩かなきゃいけないんだ。

「仕方ないだろう、呼び出したのは僕じゃないんだからな」

「そんなの知ってるよ、どうせここの騎士団の団長のカリムなんとかだろ」

「かったりいな……どうせ機動六課に協力しろだのなんだのだから。」

「騎士カリムだけじゃないさ、君を呼んだのはね」

部屋に着くと、金髪の女性とシスター。それに一人の老婆と二人の老人がいた。三提督のお出ましかよ。

「はあ……やっぱり俺帰る」

「待て待て待て、ここまで来て帰るな。というか扉閉めようとするな」

無理やりクロノに押され、席に座らされた。

「んで？聖王教会の騎士殿と三提督は俺に何のようだ？」

「初めまして、カリム・グラシアです。はやくから良く聞いてますよ、神谷迅さん」

「う、わ……はやくのやつ……」

「そいつはどうも、んで？俺に話ってるのは？」

「そうね、実は……」

ミゼットの婆さんが地上本部の崩壊や管理局の崩壊の説明をした。

「で？」

「通り話を聞いてから、俺はそう聞き返した。」

「つまり、君の力を借りたいんだ」

「やだ」

クロノの言葉を一蹴。

「やだつて、子供か君は」

「これでも18ですが何か？」

「もう成人だろ」

「俺の世界では20が成人だKY」

「だからKY言うな！」

あー、クロノってやっぱりいじると楽しいや。

「さて、もういいかなハラオウン提督」

「すみません……」

「で、何故断るのかね？」

ラルゴの爺さんの言葉に、俺はため息をつく。

「次元犯罪者として俺を捕まえようとしたのはどこの組織だった？」

「それは紅と上層部の策略だっただろう。君も無罪で英雄とまでな  
った」

「そんなもん俺は望んでねえ」

「いつの時代も、人は英雄を求めるのよ」

英雄ねえ……

「なら地上本部の英雄がいるだろうが」

「彼は騎士カリムの予言を信じていないのだよ」

だからって俺に当てるなよ。

「やだね、そもそも俺は管理局おまへを信用してない」

「と……」

「ほれ」

言いながら俺は管理局の不正実験や上層部の不正を残した映像を映し出した。

「俺がこの世界に帰ってきて三年……俺はあらゆる世界に存在した「これら」を駆逐した。あんたらの耳にだって入ってきたんじゃないか？」

「……………」

三提督は無言、カリムとクロノはただただ驚いていた。

「わかったか？俺は管理局を潰してもいいんだ。世界を守る管理局？その組織が悪を働いたら世話ねーな。守る価値もねえ」

「では何故、君は3年前この世界を救った？」

「紅には個人的に貸しがあったし、なのはたちがこの世界を守ろうとした。だから守った……それだけだ」

「その彼女たちが再び、この予言のために動くとしても、君は戦わないのかね？」

「どうだろうな、あいつらのためになら戦うが、お前らのためには戦わないだろうな」

「なら戦ってくれるのですか？」

どのみち戦わなきゃいけない。だが、最初から管理局「くまじぶ」に協力したいとは思わない。だからこそ、管理局のために戦わないということをはっきりさせたかった。

「俺は、あいつらを守るために戦う。あいつらが危険だと思ったときのみ、戦う」

「わかりました、ありがとうございます」

カリムがにっこりと微笑んだ。

「……ふむ、ならば君には特別地位を与えようと思う」

「ああ？んなもんいらねえよ」

「まあ聞け。部隊に入るには民間協力者というものが可能だが、ミッドを主流に、君には引き続き違法施設の駆除を行って欲しいのだ。」

「………とどうと？」

「我々もこのようなことを知っては放っておこうとは思わない。それが我々が後の世代にすべき責任だからだ」

ほう………

「いいだろう、後はあんたたちに任せる」

「そうか………ではこれで失礼しよう」

そう言って三提督は退出し、クロノも用事があるので退出した。

「さて、俺もそろそろ帰ろうかな………」



「あらそうですか？今お茶を入れなおそうと思ったのですが」

「いえお構いなく、迷惑でしょう。それに、監視されるのは好きじゃない」

言いながら、スプーンを投げた。するとそこには犬がいた。

「あらら、わかってたのかい」

緑髪のロンゲ。アコースだ。

「あなたはまた仕事をサボって……」

「いやいや、世界を救った英雄の査察……立派な仕事だよ」

「ほう、なら今から俺が逆に査察してお前の恥ずかしい話をぶちまけてやるつか」

「き、君が言うと本当にやりそうだからやめてくれ」

なんだつまんないの。

「んじゃ、俺もそろそろ……」

「そうですか？残念です……」

と、カリムがちょっと残念そうだ。このまま帰るのも悪いかな……

「わかりました、もう少しだけいませう」

いすに座ると、カリムの表情が明るくなった。

「シャツハ、すぐにお茶を」

「はい、騎士カリム」

「ヴァロツサ、あなたは仕事に戻りなさい」

「はいはい……」

ん？よく考えたら今カリムと二人つきりか？すると、カリムが静かに喋りだした。

「以前はやてが良く話していました。自分の人生を変えてくれた良き人であり、大切な人であると」

「え？あ、ああ……」

はやては闇の書を所有しているということ、原作と変わらず、扱いは少しひどい。まあそんな奴らも含めて俺が潰しているのだが。

「今日お会いして、確認したかったことがありました」

「は、はあ……」

「あなたがどんな人物か、です」

「で、どうでした？」

俺が言うと、カリムはまたニツコリと微笑んだ。

「はやてが言うとおりの、素晴らしい方……そう思ってます」

「それはどうも。美人さんにそう言われると光荣だね」

「び、美人……」

カリムが顔を真っ赤にさせた。俺何か言ったか？

『（マスターってやっぱり自覚ないんですね）』

「（は？何が？）」

『（なんでもないです……）』

この後小一時間、カリムと楽しい会話をしてお開きとなった。んで、  
帰り

「今日は楽しかったです。迅」

「ええ、こちらもだいぶご馳走になりました」

「また、会えるでしょうか？」

カリムが上目遣いでこちらを見てくる。けっこ可愛い……  
かも

「ええ、今度は仕事抜きでお茶会でもしたいですね」

「もちろん喜んで！必ず貴方を招待しますね！」

カリムはとても嬉しそうに微笑んでいた。

帰宅

「ただいま」

「おかえり迅」

「ただいま母さん」

この3年で、まったく成長しない母さん。老けないし、ある意味桃子さんといい勝負かもしれない。あそこの店は通うと不老不死にもなるのかと心配だ。

「ご飯は？」

「ああ、食べてきた」

「あらそう・・・あ、そうそう。お手紙来てるわよ」

手紙？

「・・・わかった、ありがとね」

差出人を見て、俺は微笑む。このシリーズをブレイクするための人物と接触するためだ。まあそれはまた次の話で話すとしよう。



第六十二話「協力するには価値を確かめる」(後書き)

秋風「今日はもう寝ます」

迅「永遠に寝ておけ」

秋風「ひどい!」

迅「次回、第六十三話『白い服は変態のイメージがある』 TAKE  
OFF!」

第六十三話「白い服って変態のイメージがある」(前書き)

久々の変身&戦闘です

さらには新キャラ登場！

## 第六十三話「白い服って変態のイメージがある」

聖王教会の日から二日後、俺はある人物の元を訪れた。

「よう、ウーノ」

「いらっしやい、迅。ドクターがお待ちよ」

そう、次元犯罪者と原作で名高いジェイル・スカリエツティのアジトである。

「久しぶり……でもないか。あんなに早く手紙をくれるとは思わなかったよ」

「ええ、ドクターも貴方の渡した物に興味をそそられっぱなしよ」

何を渡したかというと、MSのデータとか、この世界じゃ拝めないものだ。

「なるほど、それで「迅」!」「ドゥーエか」

金髪の女性が抱きついてきた。ナンバーズNo.2のドゥーエだ。

「元気そうだな」

「もちろん 今からベッドの相手をしてもいいくらい!」

原作とキャラが何故違うのかというと、ドゥーエをたまたま見かけ、レジアスの弱みを握ろうとした誘拐犯たちを一蹴したりして、スカ



リエッツィと接点を持ったり、ドゥーエのわがままを大分聞いたからだ。あと一応、ウーノやドゥーエ達は俺が「人」であることを認識させていったでもあるかもしれない。

「それにしてもドゥーエ、お前まだ潜入中じゃないの？」

「いいのよ、仕事ばかりだから息抜きしないと死んじゃうわ。それより迅、ベッド行きましょう？」

「あのかな……」

こいつが言うとしゃれにならん。

「ドゥーエ？何をしようとしてるのかしら？」

笑顔でウーノがいう。正直怖い。なんというか、オーラが出ている。

「あらウーノ、なにか文句でも？」

「大有りよ。後でお話しましょうか……」

「とりあえず、スカリエッツィの所に行こう」

「ええ、そうね」

言いながらドゥーエが俺の腕を絡ませる。ここに来るたびやられるので、もう慣れた。ラボに着くと、小さい女の子がいた。チンクだ。それにトーレとクワットロもいた。

「チンク、トーレ、クワットロ、元気にしてたか？」

「久しいな、また勝負でもしないか？」

「あらあ、今日は何を持ってきてくれたんですかあ？」

「迅か、久しいな・・・また会えて姉は嬉しいぞ」

「また・・・って、大げさだな。言われれば空いている日に遊びに行くさ」

比較的、チンクとは仲がよかったりする。トーレは戦いが好きで、シグナムといい勝負だ。クワットロは俺が持つてくるデータが嬉しくてたまらないらしい。

「そうか、ならまた遊園地とやらに連れてって欲しいぞ」

「ええ！？チンクずるいじゃない！」

あれ？お土産買ってなかったか？

「ドゥーエは滅多に帰らないから」

「ああ、そっか」

「迅・・・今度私も連れてってよ」

「でも遊園地だぞ？」

「いいのよ、なんだったらホテルでも・・・」

「おい」

こいつは本気で言ってるのか嘘なのかわからん。そんな話をしていると、白衣の男が現われた。

「やあ神谷。元気だったかい？」

「よう、相変わらずだな」

「まあね、君がくれたデータに没頭中さ」

こいつとは話が合う。毎度毎度、管理局に対しての愚痴を言い合う仲間でもある。スカリエッティの理想はあんまり賛同できないので色々と話したが、最終的に「自分の夢をみつけること」をしようとしている。

「んで？今日の手紙には実験施設の話があっただけど？」

「ああ、あの研究所も君が潰しうる場所だ。」

「なるほど……人体実験か……」

「マフィアとの人身売買にも関わっているらしい。」

「人身売買ねえ……」

地球でもこっちでも悪人がするのは変わらんってことか……

「ありがとよ、ほれ。新しいMSのデータだ。作っていいけど実線投入とかするなよ？」

「わかってるさ。君とはそういう契約だしね」

言いながらスカリエッティはディスクを受け取った。管理局のデータをハッキングしたり、三提督からもらうデータよりも正確なので、本当に助かるにしても疲れた……

「悪いスカリエッティ。空き部屋借りるぞ」

「ああ、また徹夜だったのかい？」

「ああ、施設の排除と、研究員の捕獲で2日寝てない」

言いながら俺はラボを後にし、空き部屋のベッドに倒れる。

「少し寝て、そうだな……資料の研究所を潰しに行くか」

「張り切ってるわね」

「……まーな。んで？お前はいつの間に入ったんだドゥーエ」

ドゥーエがいつの間にか俺の隣に座っていた。

「あら、気がつかなかったの？」

「少し疲れてるから反応が遅れた」

「うふふ……」

寝て転がる俺の上へ、ドゥーエが乗っかる。

「ドゥーエ……」

「いいじゃない、私はいつもしたくもない男の相手をしてるんだから。今日ぐらい、ね?」

「ねじゃないだろ……ったく、お前はしょうがないな」

言いながらドゥーエを横に下ろし、横になる。

「別に一緒に寝てやるくらいならしてやるよ」

「うふふ、まあ貴方も子供だものね」

言いながらドゥーエがキスをしてくる。

「ん……」

「ん……ふぁ……」

「ふう、やっぱり迅とのキスが一番いいわ」

と、満足そうなドゥーエ。お前何人とキスしてんだよ。

「大丈夫よ、テープなしでキスしてるの、貴方だけだもの」

ドゥーエは男をたぶらかすとき、必ず口に薄いシールを貼るらしい。

「悪いけど寝かせてくれ……寝たらすぐにアジトに乗り込む」

「しょうがないわね、じゃあせめて……」

言いながらベッドの中に入ってくる。

「寝かせてもらっわよ?」

「好きにしる」

こうして俺は5時間ほどドゥーエと眠ることにした。このあとドゥーエがウーノたちに文句を言われていたが、なんだったのか。

とりあえずアジトを後にして、スカリエツティに教えられたアジトに向かった。

「ほうほう……警備が10人、しかも質量兵器持ち。あれはM4か?で、魔導士3人か……」

普通の研究施設にしちゃ、装備しすぎだな。ビンゴだぜ」

とりあえず接近し、周囲を見る。トラップはない。これだけの警備だからな……よし

「はっ!」

「ぐあっ!」

「貴様、なにm「ふんっ!」ぎゃっ!」

とりあえず一人をCQCで葬り、もう一人を奪ったM4の後ろ部分で殴って気絶させる。基本がなってないぜお前ら。

「さて、行くぜ」

そのまま俺は研究所へと乗り込んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

中に乗り込むと、ひどいものだった。人の臓器や、腕、足などが、液体につけられたカプセルに入っている。

「あいつら（なのはたち）連れてこなくて正解だな。さて・・・・・・・・」

「

ゆっくりと周囲を警戒して進む。殺気はない・・・・・・・・でも、声がする。俺は声の方向へ歩く。するとそこには、数十人はいるであろう子供たちが牢屋に入っていた。

「助けて・・・・・・・・助けて・・・・・・・・」

「これは・・・・・・・・」

腕には注射の後が多数あった。ポロポロで、腕がない子までいる。今までで一番酷いな・・・・・・・・俺は牢を熱で溶かし、空ける。

「大丈夫、もう大丈夫だよ・・・・・・・・」

「助けて・・・・・・・・助けて・・・・・・・・」

小さな蒼い髪をポニーテイルに結った、蒼い目の女の子が必死に俺に訴える。

「大丈夫、俺が絶対に助ける。だから、ちょっと待っててな」

影分身を作り出し、俺はそのまま研究所の中心部に向かった。

「これも駄目だ」

「では次のプランを・・・悪いが、それ以上はさせない」誰だ！？」

俺は帽子を深く被り、そこに立った。

「何だ貴様は！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

SKULL!

ロストドライバーが出現し、スカルメモリを挿入する。

SKULL!

「・・・・・・・・変身」

帽子を外し、装甲が体を覆う。そして、帽子を被り、研究員とマフイアたちを指差す。

「さあお前たちの罪を・・・・・・・・数えろ」



走り出し、マフィアたちを蹴り飛ばす。さらに武器を叩き落として  
は、スカルマグナムで撃ち放って倒していく。

「貴様……何者……」

「さあな」

俺が答えると、男は気絶した。俺は変身を解き、実験台になってい  
た子供の枷を外した。

「子供は無事か……クロノ」

すぐにクロノに回線を開く。

「ん？君か……」

「至急3小隊ほどをこっちに寄越せ」

「何？」

「違法研究所に子供たちがいる。保護を頼みたい。あと屑共の逮捕  
もな」

俺がいうと、クロノは驚いていたが、すぐに頷いた。

「わかった。すぐに人員を寄越す」

こうして、スカリエッティにもらった資料の大研究所は崩壊した。  
何をしたかって？スカルのマキシマムドライブ「スカルバニツシャ

「」を連発して研究所をボロボロにしてやったのさ。ちなみに証拠などは全部記録してある。んで、3日後……」

「なんで俺がここに来るんだか……」

「仕方ないだろう、急ぎの用事だ」

クロノに本局に呼び出されていた。すると、一人の女の子が泣いていた。

「うええええん！」

「あの子確か……」

あの蒼の髪って、俺に助けてって連呼してきた子が……？

「あの子は一番恐怖があるらしくてな……」

「あー！」

俺のことを見つけると泣き止み、俺にしがみついた。

「お兄ちゃん！」

「あ、ああ……」

話を聞くと、何がなんでも管理局の大人たちの世話にはなりたくないそうさ。ちなみにこの子に親もいないし、兄弟もない。完璧な孤児らしい。話を聞いている間、女の子は俺から離れようとしな

「うつぐ、うえ……」

「あーもう泣かない泣かない」

よしよしとあやす。もうしょうがないな……

「他のみんなと行くのが嫌か？」

「やだ……」

「孤児院に行くのやか」

「絶対やだよおお……うえええええん！」

「はあ……」

となると必然的に。

「ならどうしたい？」

「お兄ちゃんがいい」

「こうなる……」

「……わかったよ、俺の負けだ」

「ふえ？」

「俺のところに来るか？」

「いいの……?」

「ほかに行くところもないんだ。しょうがないだろ」

俺が言うと、女の子の顔が一気に明るくなった。

「いいのか? 神谷」

「しょうがないだろ、そういえば聞いてなかったが……名前  
は?」

「……」

聞くと、急に沈んだ顔になる。

「実はショックが大きすぎてな、以前の記憶を失っている。記憶が  
あるのは実験されているところからだそうだ」

なるほどね……

「そうなのか……ならお前の名前はターナだ」

「ターナ?」

「そう、ターナだ」

ぶつちやけファイアーエンブレム聖魔の光石のターナそっくりだからだ。ごめんなさい、名前のセンスなくて……

「うん! 『パパ』!」

「パ、パパ？」

「駄目……？」

- ・ 名付けやだからこうなったのか、よくはわからないがとりあえず了承した。19歳で一児の親とか、なのはただで十分なのに……

第六十三話「白い服って変態のイメージがある」(後書き)

秋風「はい、ということで新キャラです」

迅「かなり突然だったな」

秋風「いいじゃない、ロリ属性が欲しかったのさ。ヴィヴィオとの絡みも欲しいし」

迅「では、ターナのプロフィールだ」

神谷ターナ

4歳

女の子

ランク(センス)S

青い眼に蒼い髪。人体実験により、魔力量が異常となった少女。魔力適性によってセンスもずば抜けて高い。それも全て改造によるものである。

人体にはないが、改造前はリンカーコアがCランクもないほどの凡人だった。

人懐っこく、迅が大好きでどこに行っても離れない。ただ、他の大人を怖がり、心を許すもの以外はおびえている。

秋風「これからもこの子は活躍予定です」

迅「お楽しみに！」

秋風「さて、あと少しでsssスタートです！お楽しみに！」

迅「次回、第六十四話『新しい家族』 TAKE OFF!」

第六十四話「新しい家族」（前書き）

次回よりStrikers編が始まります

秋風「さて皆様、この小説なんと、200万ヒットを迎えました！」

迅「皆さんのおかげです。ありがとうございます」

秋風「これからも頑張りますので、どうか一つ、よろしくお願いいたします」

迅「それでは本編どうぞ！」



## 第六十四話「新しい家族」

「えへへ、パパ〜」

ターナが俺にべったりとくっついていて。というか、家に帰ってきてから離れてくれない。

「まったくあなたは……………」

「仕方がないだろ、ミッドは管理局が基盤なんだから」

ターナが逃れるすべと言えば『管理外世界』に逃れる以外方法はなし、初対面の人間には少々怯えてしまう傾向もあるので、未だに俺にしか心を開いてくれない。

「ただいまー」

「ひうつ！」

母さんが帰ってきた。というか、ターナは本当に驚きすぎ。

「あら迅、その子は？」

「ああ、ターナ、あいさつは？」

「タ、ターナ……………」

「ターナちゃんっていうの、可愛い名前ね。私は理沙、迅のお母さんよ」

「パパの・・・ママ？」

「パパって？」

とりあえず俺は事情を説明した。すると母さんは優しく微笑んだ。

「そう、辛かったわね・・・・・・・・そうだ、ターナちゃん好きな食べ物は何かしら？」

「わかんない・・・・・・・・」

「そう、じゃあハンバーグにしましょうか」

「はんばーぐ？」

「ええ、きつと気に入るわ。ちょっと待っててね」

そう言っつて母さんは料理を始める。ターナは不思議そうな眼で俺を見た。

「パパ」

「ん？」

「はんばーぐってなあに？」

「そうだな、おいしい食べ物だよ。ちょっとだけ待ってような」

しばらく部屋でターナと遊んでいると、母さんが料理を作っつてター

ブルに置いた。

「じゃあ、いただきます」

「いた、いただきます？」

「そう、食べ物命をいただいて食べるからいただきます……  
って、ちよつと難しかったかな？」

「うー？」

ターナが首を傾げる。ああ、ちよつと可愛い……

「そういう説明はもう少し大きくなってから。でも挨拶としていただきますとかは覚えような？」

「うん、パパ。いただきます！」

ターナが元気よく言って、ハンバーグを食べ始める。フォークとスプーンは使えるが、箸はまだ使えないらしい。どうやら気に入ったようだ。

「ほら、こぼれているぞ？」

「あう……」

ぼろぼろとこぼすターナの口元をリインフォースが拭ってやる。

「あ……」

「「どづいつときは『ありがとう』だよターナ」

「ありがとうー」

「どづいたしまして」

リインフォースは優しく微笑む。

「それにしてももうすぐはやてが建てる機動六課の設立か……」

「予言は変わるかもな……」

「迅は確かスカリエッティと友達になつたとか？」

「ああ、フェイトには口が裂けても言えない……」

「言ったら殺される。」

「そうですね……まあとりあえずイレギュラーなことが起きなければいいんですが」

それが心配だよな……スカリエッティはもう俺のデータに入り浸ってるし、聖王の開発が終わってる話は聞いたが、そのあと最高評議会への復讐もするとかしないとか。

「ま、なんにも起きないことにこしたことはない」

それまでは色々と研究所潰して回るかな。

「パパ、食べたよ」

ターナの皿の上は何も残っておらず、嬉しそうだ。

「よく食べたな、おいしかったか？」

「うん！」

「じゃあ食べ終わったら、」と馳走様って言おうな

「んと、」とちそうさま

「よくできました」

俺は言いながらターナの頭を撫でる。するとターナは嬉しそうに笑っていた。

「えへへ」

それからしばらくして、俺は食事を終え、風呂に入って布団に入る。眠い……

がちや

「ん？」

「パパ」

言いながらターナが布団に入り込む。

「なんだ？布団は隣だぞ？」

「パパと寝たい」

ま、いいか……

「いいよ、寝ようか」

「うんっ！」

ターナは嬉しそうに俺に引っ付き、数分で寝てしまった。

「すすす……パパ」

「パパ……か」

転生しないで気ままに生きてたら、普通に子供作ってこんな風になつてたのかな。

『マスター……』

「なに、後悔はしてないさ。こんな風に並行世界でも、救える命があるんだからな」

俺はターナに布団をかけて、眠りにつくことにした。

翌日

久しぶりに睡眠ができた。で、今日は土曜日なので早く起きて母さんは仕事に行った。俺も早く起きて、ゼロを調整していた。

「うーん」

『いかがいたしました？マスター』

ゼロ・エックスってもう略してもいいんだけど。

「やっぱり名前はゼクスに変えたほうがいいか？」

『別に構いませんが、それでこの私の声というのもどうでしょう？』

そうなんだよな……このボイスは消したくないしなあ……

「けどどうだ？フォルムの強化のおかげでオメガの技は使えるようになったし、MSのプログラムも使えるし……」

『問題はありません。正常な稼働ですね。ただ……』

「ただ？」

『要領がかなり膨大でギリギリですね、拡張する必要があるかと』

そつだな……要領あげればまだ無茶もできるし……

『あなたはまだ無茶をする気ですか』

「そつだな……ROCK SYSTEMを全部使えるときか」





「よしよし。朝ごはんにしよつな」

「朝ごはん？」

「そう、朝ごはん」

抱っこしながらリビングに向かい、椅子に座らせてご飯をよそつ。  
今日の朝ごはんはごはんと鮭と味噌汁だ。

「うっぐ、いただきます？」

「よしよし、よくできました」

「うん……むぐ、もぐ……」

ターナはおいしそうに食べる。さて、俺はゼロの改造でもしますか……

「んで、ゼロ？どこまで行っただけ？」

『確かライダーの能力を引き出すという話です』

「そうだった……クロックアップにアクセルモード、後はミラーワールドの行き来とか」

『スピード系が目立ちますね。乗り物でもオートバジンやサイドパツシャー、それにジェットスライガーを呼び出す機能も欲しいところですよ』

うーん……だけどなあ……

「パパ？」

「ん？」

「誰とお話してるの？」

そうか、ターナはデバイスを知らないのか？

「こいつだよ、こいつ」

『初めまして、レディ』

「ひゃう！？い、石が！」

「あははは！これはデバイスって言ってな、俺のパートナーさ」

「ご飯を食べながらも、俺の話に熱心に聴いていた。」

「いいなー・・・ターナもほしー」

「あはは、ターナはもうちょっと大きくなってからだな」

「ぶー」

ターナが口を3にして膨らむ。ん？食事を終えてるのか。

「ターナ、食べ終わったら？」

「しちそうさまー！..」

「よろしい」

ターナも少しずつ、ウチに慣れていってくれるといいな……

数日後……

「はあ……」

「君は僕を見るたびため息するのやめないか？」

「……KY」

「KY言うな！」

「なんで俺はいつも呼び出されるんだよ。普通赴くだろ！」

「仕方ないだろ、君と違って忙しいんだ」

「……この前カリムを色目で見えたのエイミィにちくつてやる」

「なっ！？誤解を招くようなこというな！」

冗談が通じないなこのバカは……さてと……俺は提督たちがいる部屋に入る。

「どつども、三提督の皆さん？」

「よく来たわね……さて、貴方にこれを渡すわ」

銀色のカードだ。本局の紋章が入っているが……これは？

「それは私たち3人の下にいる局員が持つ『特務官』の証明書よ」

「おい、俺は局員になる気はないぞ」

「あくまでも形式上じゃ……それは少将クラスの地位を持つことになる」

「ほう……」

こんなカードがねえ

「特務官は貴方を含めて5人……貴方の称号は『切り札』<sup>ジョーカー</sup>になる。」

他の4人はトランプのモチーフか……だから俺はジョーカー……なるほど。

「精鋭のトップの4人からなる精鋭部隊『カード』の5人目のエースとなる。お主には我々から直接依頼がいくだろう」

なるほどね……

「了解した、ありがたく受け取っておこう」

「では機動六課を頼むぞ、神谷君」

「ふん、あんた達に言われるまでもないさ……」

こうして俺は管理局を後にした。

ここから、魔法少女リリカルなのはStrikerSの物語が始まる。

## 第六十四話「新しい家族」(後書き)

秋風「さて、今回登場の新役職です」

迅「特務官とカードだな」

秋風「では解説」

### 特務官

伝説の三提督であるラルゴ・キール武装隊荣誉元帥、ミゼット・クローベル本局統幕議長、レオーネ・フィルス法務顧問相談役に仕える本局の精鋭部隊。それぞれスピード、ハート、クローバー、ダイヤの4部隊が存在し、スピード、ダイヤ、クローバーはそれぞれ一人ずつに付き、ハートは人員が必要などころへと回る。ただし、特務官を名乗るのはその中の隊長たち4人のみで、今回3人の切り札として迅が「ジョーカー」に任命された。特務官の地位は少将のレベルであり、カードを見せれば大抵の局員は黙るらしい。なんというか、国家錬金術師のような感じである。

### カード

三提督たちを補佐する特別部隊であり、全員が二等空尉、二等陸尉以上の階級を持つ実力者ぞろい。スピードとダイヤは騎士隊で、ハートとクローバーは魔導士隊である。隊長たちは特務官(上参照)なので、俗に言うエリート部隊である。ちなみに迅はこれに属してはいない。

迅「次回、第六十五話『始動、機動六課』 TAKE OFF!」

第六十五話「始動！機動六課」（前書き）

ということで今回から機動六課が始動します！

秋風「もう65話だよ……」

迅「最終話何話なんだ？」

秋風「ないかもね」

迅「えー……」

## 第六十五話「始動！機動六課」

はやてside

ようやく今日から機動六課が始動や。式も終わったし、後はこれやな

「特務官かぁ……どんな人やろ」

「新しくなった人なんですよね、はやてちゃん！」

「そうやねリン、なんでもウチらと同じ年の男の人らしいで」

19歳で少将相当って、どんなや……うちも人のこと言えんけど。

「優しい人だといいですね」

「そうやね、っと……ロビーで待ってる約束やった。行かないとあかん」

こうして私は協力してくれる人が来るロビーへ行くことにした。

迅side

「さて、着いたな」

「大きい！」



「そうだな、ここが今日からターナが住むお家だ」

「パパは？」

「もちろんパパもな」

俺が言うと、ターナは嬉しそうだ。さて、行くか……

「迅、はやくてたちに連絡は？」

「ミゼットの婆さんが言ってくれてるよ」

「そうですか……なのはさんたちに会うのは久しぶりですね」

リインフォースとエレナもいる。母さんに少し寂しい思いをさせてしまうので、エレナには定期的に行ったり来たりの生活をしてもらうことになる。

「さて行くか」

こうして、俺は隊舎へと足を踏み入れた。

はやく side

一応フォワードもロビー待機。そしてなのはちゃんたちもいる。さて、どんな人やる。

『八神部隊長』

「なんやシャーリー」

通信でシャーリーが映し出される。

『特務官がお見えです』

「了解や、ロビーにお通ししてや」

『はい』

ロビーのドアが開く。ちょっと緊張してきた。けど、それはすぐに解けた。

「よお、お前ら」

「「「「「迅（君）！？」「「「「」

うち、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリシアちゃん、シゲナムの声が重なる。そこにいたのは、うちの大切な人やった。

迅 side

あれ？なんでみんな固まってるんだ？

「あれじゃないですか？ちゃんと伝わってなかったとか」  
なるほど

「おーい、はやて？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

パンっ！

「うひゃあ!？」

眼のまで手を叩き、はやてを正気に戻す。

「大丈夫かよ・・・・・・・・」

「えと、迅君が特務官？」

「おう」

「あの精鋭部隊『カード』の？」

「らしいな」

「新しい特務官？」

「そう」

「どこに出向する？」

「そつだよ」

「少将相当の？」

「だからそつだって」

『ええええええええええええええええええええええええええええええ！？』

なのは、フェイト、アリシア、はやて、シグナムの順に聞かれ、全てに頷く。そして大声が響いた。耳塞がないと鼓膜がいられる。

「聞いてないよ!？」

「ミゼットの婆さんから聞いてない？」

「名前聞いてなかったもん!」

「そうなんだ」

なるほど、それは驚くわな。

「んじゃ改めて言うが、神谷迅特務官と」

「その補佐、エレナ」

「これより機動六課に出向する」「」

「ええ、ようこそ!」

こうして、俺たちは機動六課に迎えられた。

「あれ？迅君その子は？」

声で驚いて足にしがみついているターナがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こんにちはー」

「ひうっ！」

フェイトがしゃがんで挨拶するが、驚いて隠れる。

「あら・・・・・・・・」

「ターナ、みんなに挨拶は？」

「・・・・・・・・かみやターナ、です」

少し涙眼になりながら、ターナが挨拶する。よほどさっきの聲がびっくりしているらしい。

「へー、迅君の親戚？」

「いや、俺の娘だ」

「へー、迅の娘・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺なんか言っただ？

『むすめええええ！？』

全員がまた声を上げ、また驚く。で、デバイスを構える。



俺が言うと、ターナはなのはたちをチラリと見るが

プイッ

すぐに俺に引っ付く。

「「「「「うっ！」「」「」」」」

なのはたちに100のダメージ！やっぱり幼女の仕草の否定攻撃はダメージがでかい。

「遊んでる場合ですか」

「いいじゃん」

「その子供たちが思いつきり空気です」

「あ、そやった・・・紹介しとくな、機動六課のフォワードメンバーや」

はやてがいうと、スバルたちが前に出た。

「スターズ3！スバル・ナカジマ二等陸士であります！」

「スターズ4のティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ライトニング3、エリオ・モンディアルです！」

「ライトニング4のキャロル・ルシエであります！こっちはフリ

「ド・リ」

「きゅく〜!」

それぞれが挨拶すると、ティアナが一步前に入る。

「えと、神谷特務官……」

「迅速でいいぞ、どした」

「その、3年前は助けをいただいていたありがとうございます」

「え？」

そんなことあったっけ？

「えと、覚えてらっしゃらないかもしれませんが、怪物に襲われそうなところを助けてもらって……」

『マスター、あの時助けた女の子ですよ』

ああ！そういえば助けたな！

「そうか、そういえばいたな……大きくなったな」

「あう……えつとその、憧れてて、迅さんみたいになりたくて……」

「それで魔導士に？」



「えと、違う目的もありますけど、そうですね……」

違う目的はやっぱり兄貴のためなことか……まあいいや。

「そうか、ならこの一年、よろしくな」

「は、はい！」

顔を赤くし、ティアナは嬉しそうに微笑んでいた。

「また犠牲者が……」

「エレナ、なんか言った？」

「いえ？」

なんだよ一体。

「そういえばはやて、俺達の部屋は？」

「えっと一応大部屋が一つと、エレナさんとリインフォースの部屋があるで」

「はやて、私は迅と寝るので問題ないです」

「させへんで！大部屋なのはうちらも入れるからや！」

は？

「ぬっ……」

「なんで？てか俺が来たのは今日知ったんだろ？」

「一応少将相当だからVIPルームなんや」

あ、なるほど……つて、いやいやいや

「おかしいだろ、なんで？」

「拒否権なしや！」

「なしだよ！」

「なし！」

「なしだよ！」

「なしだ！」

えー……

「不幸だ」

あのこと言い合いもあったが、一応部屋に来た。本当に広いな。

「わーい、大きいベッド」

ターナが嬉しそうにベッドに跳ねる。

「ふふ、ターナちゃん喜んでるね」

「そうだな、ってなのは？いつの間に？」

「えへへ、迅君久しぶり〜」

言いながら俺に抱きつく。なんで俺の周りの女はこんなものばっか？

「フェイトたちが見たら俺が殺される」

「もう見てたりして」

と、フェイト、アリシア、はやて、シグナムが飛び出て、俺に抱きつく。

「うれしいよ、またみんなで戦えるんだもん」

「まあ、そうだな」

みんなが離れ、ソファーに座る。俺も座ると、エレナが紅茶を入れてくれる。

「とりあえずこれから、みんなで戦うわけやけど、迅君約束してくれへん？」

「ん？」

「絶対に無茶はしたらあかん、そういう約束や」

「.....」

「クロノ君から聞いたよ？いろんな違法施設を潰して回ってるって  
あのKY、今度しめる。」

「あの子もそうなんだよね……………」

フェイトはリインフォースと遊ぶターナを見る。

「ああ、そうだ……………実を言えば俺は、管理局を潰そうとも思  
った」

「……………迅の気持ちはわかるよ。でも、そんなことをしたら」

「わかってる、この世界は管理局が基盤だからな」

今崩せば、ミッド自体がそれこそ崩壊を起こすだろう。

「だから……………」

「わーったよ、無茶はしない」

「約束だよ？」

「わかってるよ……………だからお前たちも約束しろ」

『？』

「お前らも、無茶すんなよ」

俺の言葉に、全員が頷く。

『もちろん』

みんなが笑顔になった。すると……

「パー」

「どうしたターナ」

「お腹すいた」

「そっか、じゃあご飯いこうな」

「うん！」

俺はターナを抱き上げる。

「んじゃ、飯行こうぜ」

こうしてみんなが立ち上がり食堂へと向かう。この先何があるうともこいつらとこいつらの未来を、俺は守る。それが俺にかせられた、転生者としての義務なのだから。

こうして、機動六課での生活が始まった。

第六十五話「始動！機動六課」（後書き）

秋風「はい、ということで寝かせてください」

迅「冒頭からそれか!？」

秋風「宿題終わってないんだ、やらせてくれ」

迅「・・・次回、第六十六話『訓練つてスパルタくらいが丁度いい』TAKE OFF!」

## 第六十六話「修行はスパルタくらいが丁度いい」（前書き）

はい、最近更新できない秋風です。大学サークルが忙しくてやる暇がありません。

今度一気に更新するのでご勘弁を

で、今回こんな感想が2、3件来ました

『ライダーが多くてわからない』

まあ多いのは自重しますが。それならリクエストしてください。読者の方の要望はできるだけ取り入れるつもりです。ですが、いつもどおりリクエストだけでは困ります。感想や意見などを入れてお願いします。

ついでいうと、この小説は私の暴走小説でもあります。その時期その時期で流行ったり、自分のお気に入りが出される場合が多いです。例えば今は仮面ライダーWが私のブームです。なので多用することがあります。

読者の方でも、この小説を見てから、仮面ライダーを知らないから見直して再度この小説を見てくださるかたもいらつしゃいます。無理に見るとは言いませんが、見てからこの小説を見てくれるのも嬉しいです。

ちなみにネギま！がわからないですという人がいたり、Fateがわからないという人もいますので、その辺は勘弁してください。

それでは長くなりましたが、本編をどうぞ

## 第六十六話「修行はスパルタくらいが丁度いい」

機動六課に来て数日。俺は訓練場にいた。

「ほらほら、逃げなきゃ大変だぞ〜」

「「「「いやあああああああ!!!!」」」」

え？何してるかって？ホログラムの作成でファンガイアやらなにやらを出して遊んでる。

「ちなみに倒さないと今日のメニュー5倍な」

「「「「鬼〜!!」」」」

「迅君、やりすぎなの……」

何を言うか、ネギとの修行のときはこれの10倍は大変だったぞ……  
……ネギが

「いや、それはそうだけど……」

「お、動いたぞ」

ティアナside

と、とにかく勝たないと！迅さんにいいところ見せないとい！

「スパル、ちびっこ、行くわよ！」



「ティア、正気!?!」

「メニユー10倍になりたいの!?!」

「やだ!」

「じゃあ戦うしかないでしょうが!

「スバル、二人で接近して翻弄。ちびっこ……キャロ」

「はい!」

「数分3人分持たせて」

「了解です!」

「一撃でしとめる。いくわよ!

迅side

なるほどねえ……ガジェットと同じように対処か……まあ合格だな。でもそれじゃあ……

「いつけえ!」

「おお?」

「一撃必倒！デイベイインバスターアア！」

おおっ、出たデイベインバスター……二人目の悪魔が誕生か？

「悪魔じゃないもん！」

「誰もお前って言ってねえだろーが」

「うっ……」

「まあなのはことだけど」

「あう……」

言いながら俺はなのはの頭を撫でる。

「あ……」

離すと残念そうにする……お前ももう大人だろうが。

「「「「「やったあ！」「」「」」」」

いつの間にかファンガイアを倒している4人。まあいいだろう……  
・だけどまあ、時間がかかりすぎだな。しょうがないけど。

「それじゃあみんな、集合！」

なのはが号令をかけ、訓練が終わる。

「じゃあどっいう風にああいうアンノウンやガジェットに対処する

のか、迅君に見せてもらおう」

「「「はい！」「」」

えー……まじで？

「迅君がデスクワークやりたくないっていつから、こつこつとになってるんだよ？」

しょうがないな……

「なのは、訓練場にガジェット」

「オツケー」

そのにより、訓練場にガジェットが現われる。大体100体くらいか？

「さて、いくか……ゼロ！」

『オーライ、合言葉は？』

「自由への祈りだ……」

『合言葉認証……ストライクフリーダム、スタンバイレディ』

俺の体を粒子が包み込み、ストライクフリーダムへと変化させる。

「ゼロ、スーパードラゴンはお前に任せる」

『わかりました』

「神谷迅！ストライクフリーダム！出る！」

バーニアを吹かし、ビームライフルで撃ち貫く。オートでAMFを無効化する効力がかかるため、通常と変わらぬ攻撃ができる。

「ゼロ！」

『オーライ！スーパードラゴン起動！散開！』

スーパードラゴンが発動し、それが突撃などをしてビームで蹴散らす。

「どんどんいくぜ！」

腹部のカリドウス複相ビーム砲を放ち、敵を破壊する。つたく・・・  
なのはの奴、100体は多すぎる・・・

「なのは！後どれくらいだ！」

『あと40だよ！頑張つて！』

よし・・・

「ゼロ！」

『了解、ターゲットマルチロック！』

二挺のビームライフル構え、二門のクスイファイアス3レール砲を展

開し、スーパードラグーンを周囲に集める。

「これで決める！」

ドラグーン・フルバーストを発動し、一斉射撃を行う。重力下で使えるのはなのはエクシードモードのビッドの技術を採用しているので重力下でも使えるようになってる。

ズガアアアッ！

『ガジェット全滅・・・ミッションコンプリートです』

「100体倒すのに2分40秒か・・・最近動いてないしこんなもんか」

ティアナside

「「「「「・・・」」」」」

私たちがまだ始めたばかりだけど、100体いたガジェットが全滅しちゃった。あれ？なのはさん震えてる？

「「「らー！迅君ー！」

『うおっ！？なんだよなのは』

「もっと接近戦とかやってくれないと困るよ！何のためにお手本頼んだと思ってるの！」

『100体も出すからだろ、面倒くさいし……本気出すまでもないだろ』

え！？あれって本気じゃなかったの!？

「だってつきり仮面ライダーかと……」

『ライダーは多数相手が苦手なんだよ』

仮面ライダー？

「と、とにかく午前は終わり。戻ってきて」

あの人は、どれだけの力を持つてるんだろう。私も頑張らないと……

迅side

疲れた……

「ドラグーンはしんどいな」

『よく言いますよ。サポートはほとんど私がしてるのに』

「でも迅君、最近力を持って余してる感じがするけど……」

最近では違法施設潰してないし……暴れる機会が少ない。訓練で相当発散してるけど……

「まあ問題はないさ。それより……」

「お前、最近働きすぎ」

「あう……」

頭を撫でながら、ため息をつく。最近なのはは訓練のために夜遅くまで映像を見たり、メニューを考えている。

「だって頑張らないと……」

「俺との約束、忘れたわけじゃないだろ？」

「……うん」

昔約束したその約束を守らせないと、あのフラグが立っちゃうからな……

「お前がまた無茶して怪我したら……俺は嫌だからな」

「にははは、ありがと迅君」

言いながらなのはが俺の腕に腕を引っ張ってしゃがませ、頬にキスをする。

「あのな……」

「いいじゃない、私は迅君が大好きだよ」

「う……」

「こいつといいリインフォースといい、なんでこつもストレートに言ってくるかな・・・」

「だから、みんなには絶対負けないもん」

「な〜のは〜!」

「うお!? フェイト!?」

「フェイトちゃん!?」

いつの間にかフェイトが後ろに立っていた。

「ずるいよなのは! 抜け駆けなんて!」

「抜け駆けって・・・」

「どういう規約でそんなもんが・・・」

「とにかく抜け駆けは禁止!」

いいながらフェイトも俺に抱きつき、キスをしてくる。

「お、おい・・・」

「えへへ〜」

「むー・・・」



なのはが独占したものを取られたような顔になる。まあしょうがないか……

「そういえば、フォワードのデバイスは？」

「うん、いい調子だってシャーリーが言ってたよ。スバルのデバイスがちょっとクセがあるみたいだけど」

ああ、ウイングロードのことか……

「ウイングロードは先天系だからな……難しいといえば難しいな」

俺も試したけど面倒だからゼロに組むのやめたんだよね。俺は空飛べるし……

「そういえば昼飯か……早く戻ろう」

「え？どうして？」

「そつだよ、ゆっくり行こうよ」

「早くしないとまたターナが泣く……びええええええええええ！げ……」

もう時すでに遅いつてか……隊舎の外まで聞こえてくる。

「急ぐぞ」

「う、うん……」



「……………うん、我慢する」

ターナは少し迷いながらも、それに頷く。これで泣くのを我慢してくれればいいんだけど。

「まあとりあえず、ご飯行こうな?」

「うん!」

ターナを抱き、俺たちは食堂へと向かうことにした。

食事を終え、ターナはお昼寝、俺はなのはの考えたトレーニングを見ていた。

「ど、どうかな?」

「……………却下」

「あう……………」

その二文字がのしかかりなのはが頭を下げる。

「全体的にまだ足りん」

「結構乗せてるけど……………」

「しょうがない、今日一日俺がこいつらを預かる」

「ふえ!?!ま、まさか……………」

なのはの言葉に、俺はニヤリと笑った。

午後

「さて、午後は俺がお前らを見る。準備はいいな？」

「あの、迅さん……」

「なんだ、スバル」

「なんで宿泊装備がいるんですか？」

それは見ればわかるんだよね。

「質問は受け付けない。黙ってついて来い」

「は、はい！」

俺は4人を連れ、部屋にあるトレーニングルームに入った。

「うわー……」

そこに置かれた球体……そう、別荘だ。

「なんですか？これ」

「これはお前らを鍛えるために作ったものだ。行くぞ」



4人の悲鳴が、別荘に響いた。

第六十六話「修行はスパルタくらいが丁度いい」(後書き)

秋風「ということだめっちゃ更新が遅いです」

迅「最近忙しいとかほざいてるな」

秋風「サークルで絵を描いてるから死にそうなんだよ！」

迅「……次回、第六十七話『初出陣？まあいいんじゃない？』」

TAKE OFF!」

## 第六十七話「人間らしさって大切」（前書き）

はい、最近忙しくて死んでます、秋風です

このまえ大学で絵を発表してそれをpixivに貼りました。駄目絵ですが見てやってください。ユーザー検索でakikazeと出せば出ると思いますので。

ちなみに作品の名前から探すなら「壊れた愛」と探してください

では本編どうぞ！



## 第六十七話「人間らしさって大切」

修行も終わり、フォワードはボロボロだった。んでもって、デバイスもボロボロだった。とある朝の訓練。

「あーもー、ボロボロー……」

「スバルさんのナックルもひどいですね」

「それを言ったらエリオ君も……」

エリオのストラダーダも刃が欠けてる。

「ティアナもさつき詰まシヤムってたな」

「はい、結構だましましたです……」

「やっぱりみんなのデバイスじゃ迅君の修行は無理あったかな……」

そろそろ実戦型に変えるか……

「なのは、そろそろ実戦型の専用型に変えるべきだな」

「うん、そうだね。ちょっと早い気もするけど」

いや、時期的にはぴったりなんだよな。

「んじゃ、シャワー浴びて着替えて来い。後でデバイスルーム集合」

「「「「はいつ!」「」「」

こうして解散して、なのはと隊舎に歩き出す。

「でも迅君も最近ハードワークだね」

「お前が負担かからなきゃそれでいいよ」

「駄目だよ、無理したら」

なのはに言われたくない。

「ん?あれは・・・」

「フェイト、はやて。どこか行くのか?」

そこには車に乗ったはやてとフェイトがいた。

「うん、これからちよつとベルカ領にね」

「会議やから、ちよつと遅くなるで」

「了解した、留守は任せろ」

俺の言葉に二人は頷いて、車が発進して見送った。さて、ファーストアラートか・・・

「俺の出番はなさそうだな・・・あ、そうだ」

「……？迅君どうしたの？」

「いや、なんでもなし。俺もちょっと出かけてくるから後よろしく」

「え？う、うん……」

こうして、俺は機動六課の隊舎を後にした。

転移して、やってきた場所がある。そこは……

「おう、スカリエッティ」

「やあ、迅じゃないか」

スカリエッティのアジトです。

「今日はどうしたんだい？」

「ああ、今日レリックが出るだろ？」

「ああ、そういえばそうだったね。だが迅、私はもうレリックに興味……」

「わーってるよそんなこと。だから協力して欲しいんだって」

「協力？」

そう、スカリエッティの兵力はよく知っている。

「ガジェットに列車を襲わせてくれない？」

「サラッと驚くこというね」

「まあな」

「一応理由を聞きたいんだが」

「ああ、実は今日フォワードにデバイスが渡るんだけどさ、その  
実戦テストがしたいんだよ」

正直あいつらをぬるま湯に浸からせる気は毛頭ない。

「わかった、他ならぬ友の頼みだ。協力しよう」

「おう、よろしく頼むぜ」

ということ、スカリエツティの協力を得た。すると、そこにチンクがいた。

「おー、チンク」

「迅、久しぶりだな」

俺のところに行くと、手を引っ張られた。

「ん？」

「さあ、ここではなく食堂でお茶でも飲もう」

「え？あ、ああ・・・」

こりゃファーストアラート間に合うかな・・・

なのはside

とりあえずデバイスを渡した日に初出勤はびっくりしたけど、私やフェイトちゃんがいるから大丈夫かな・・・というか、迅君はどうしたんだろ。念話で呼ぼうかな。

「（迅君、迅君・・・）」

「（・・・ん？どうした？）」

「（緊急事態、聖王教会から出撃要請が出たよ）」

「（あー・・・言ってなかったか、俺はお前らが危機にさらされる時しか動かんぞ）」

「（ふえ！？）」

それってどういうこと!？

「（つまりだな、ガジェット程度の雑魚なら新しいデバイスを得たあいつらとなのはたちがいるなら、問題になるような事はないってこと。まあ一応そっちには行くから。じゃな）」

「（あ、ちよつと迅くん・・・）」

切れちゃった。なんか納得いかないなあ・・・もう、後でお話な

の……

迅side

「お、なかなか旨いな、この「コーヒー」」

「だろう？それとこの菓子がまたなんともいえなくてな……」

「私はコーヒーより紅茶ですわぁ、ねえトーレお姉さま？」

「うーむ、私としてはどちらも旨いのだがな」

現在ナンバーズと楽しくティータイム中。

「あら、このケーキはおいしいわね、今度作ってみようかしら」

機動六課のみんなが出撃中ですが、俺はナンバーズのみんなと優雅にお茶を飲んでます。ターナは今お昼寝中だし多分大丈夫だろ。

「というか迅？」

「なんだウーノ」

「機動六課出撃してるけど、行かなくていいの？」

「いいよ別に。あいつらだけでも何とかなるだろ」

正直俺に出番はありませーん

「とても正義の味方とは思えない発言ですわねえ、でもそこがいいんですけど」

「クアットロ、お前俺が正義の味方だと思ってたのか」

「だって世界救ったじゃないですかあ」

「それはなのはたちが死なないために戦っただけ。俺のけじめとしてもな」

「というか、管理局のために誰が戦うかっての。」

「あ！迅だー！」

そんな話をしていると、彼女たちが現われた。

「セイン、ノーヴェ、ウエンディ、デイエチ、元気か？」

「ばりばり元気っす！」

「チンク姉たちずりい！あたしらもお菓子食っ！」

「久しぶり、さっき訓練が終わったんだ」

4人は俺の協力で普通より早くロールアウト。戦闘機人ながら、人間についてを教え込んだ。なので、食事はまともなものを食べるし、おしゃれもする。

「ノーヴェ、もうちょっと女の子らしくしろよ」

「やーだね、こっちの方がいいんだ」

菓子を食べながら、ニヤリと笑う。

「そういえば迅、あれ、あたしと同じって奴らはどうなのさ」

「ああ、スバルのことか？ 今日初出陣だよ。どうしてだ？」

「早く戦ってみたい」

「まだお前の武装できてねえだろ……てか、戦う気がよ」

こいつもバトル馬鹿になったか……

「ノーヴェこの前ずっと迅が渡したビデオ見てたッス」

あー……仮面ライダーのDVD貸したんだっけ。

「この前なんか天道総司の真似事してたよ」

「セインそれ言うなよ!」

「そういうセインだって響鬼の手のしぐさ真似してたじゃない」

「あう……それならディエチだってガンダム見て訓練で『狙い撃つぜ』とか言ってたじゃん!」

なんて騒ぐ4人。元気だなー……こいつら。

「そういえば迅、聞いたかしら？」



「ん？」

「最近、管理局に対抗した反組織があるの」

「いや、聞いたことないな……」

原作でもそんなものなかったが……

「なんでも『管理局は世界を腐敗させるゴミ』と言ってるわ」

「あつはつは、そりゃいい……確かにゴミだもんな」

「笑い事じゃないわよ、その組織……いくつか世界を潰してるわ」

「……なるほどね。そりゃ過激だな……となると？」

「ミッドチルダを潰しに来る可能性もある」

それは聞き捨てならねえな……

「管理局はどうでもいいが、この世界の人間に危害を加えられるのは困るな」

「なんだ？暴れるのか？」

「いやトーレ、俺が戦う＝暴れるって考えやめて」

「それ以外表現が思いつかん」

そうですか……

「まあ、戦うなら姉も協力を惜しまんぞ、迅」

「おう、ありがとなチンク」

言いながら俺はチンクの頭を撫でる。

「あーずるいチンク姉！あたしだってやるってば！」

「あたしもやってやらあ！」

「私も手伝うよ」

「私ももちろんな」

「私だってやりますよお！」

「私もサポートするわよ」

なんだかすごいブレイクしちゃったな……でもまあ、こいつらが人間らしくなってくれたからよしとしよう。

「ああ、ありがとうみんな」

さて、そろそろ戻るかな。

「んじゃ、みんなまたな」

「ああ、また」

つと、ラボ寄ってくか

「スカリエッティ」

「ああ、帰るのかい？今ちよつどいいところだよ」

戦いが終盤になりつつある。

「よし、俺も行くか・・・あ、そうそうスカリエッティ」

「なんだい？」

「反管理局組織の話だが、お前たちも気をつけるよ？」

「ああ、万全の対策を取るよ」

「じゃ、またな」

こうして俺は現場に轉移した。

Side out

そこはどこかの廃墟

「・・・・・・・・首尾は？」

「万全」

「ならいい……管理局と言つ名の悪魔たちを倒すための準備を引き続き続ける」

「了解」

男の言葉に、女が頷く。

「ガジェットは？」

「現在捕獲80、破壊40」

「引き続き捕獲を優先しろ、製造も増やせ」

「了解しました」

今度は別の男が頷き、その場から消える。

「さあ、我らの手で世界を掴もうぞ」

迅の知らない物語が始まろうとしていた。

迅side

さあて、スカリエッティのやつ、ちょっと張り切りすぎじゃね？

「よおなのは」

「迅君！」

「なかなかピンチじゃねえか、救援に来たぞ」

「うん、迅君はフォワードをお願い！合流地点にたくさんいるらしいから！」

スカリエッティやりすぎだよ……50体はいるじゃん……

「わーった、なのはとフェイトも気をつける」

「うん、迅君」

「もちろんだよ、迅」

さて、今日はこれで行きますか……

「頼むぜ、フェンリル」

クラウドの乗るフェンリルを呼び出し、一気にスタートする。剣を構え、迫り来るガジェットを斬り裂いていく。

「ヒュウ、これはなかなか怖いぞ……っと、ファイガ！」

魔法を放ってガジェットを焼く。バランスとるのが難しいなこれ……

「行くぜ……っ！」

一気に列車に乗り、ガジェットを吹き飛ばす。

「おう、無事かお前ら」

「迅さん！」

「は、はい・・・なんとか」

「迅さん、そのバイクは・・・」

ティアナが眼を輝かせる。あー・・・こいつバイク大好きだっけ？

「後で乗せてやるよ」

「はいっ！」

「さて・・・」

俺は剣を取り出して、構える。

「お前らは後ろからの敵を頼む。俺とエリオで斬り込むから」

「はいっ！」

「ティアナ、後方援護だ、スバルはティアナとキャロを守れ」

「「はいっ！」」

「キャロ」

「はいっ！」

「お前はフリード抱えて下がってる」

俺が言うと、キャラロがびっくりした顔になった。

「え!？」

「竜魂召還した後じゃフルバックは無理だ。魔力の回復を優先しろ」

「は、はい……」

「行くぞっ!」

「「「はいつ!」「」」

この後、俺たちは見事にガジェットを殲滅。そこまではよかったんだが、その後なのはにたっぷりとお話された。

第六十七話「人間らしさって大切」（後書き）

秋風「さて、今回はゲストをお招きしています」

迅「どうぞー！」

士「ここは何の世界だ？」

秋風「秋風の感想の世界ってことです」

士「だいたいわかった……つまり俺の偉大さを教える世界だな」

迅「もう訂正が面倒だからそれで行こうか」

士「この作品の本編にも俺は登場しているが、それはまた別の俺だからな」

秋風「だよね」

迅「とりあえずダブルデイケイドだったしな」

士「俺の場合、ハイパーな奴らになれる世界だからな」

秋風「今Wが終わったんだよね」

士「ああ、次はキバの世界だ……紅渡がいる世界……俺が最初に会った仮面ライダーだな」



迅「そういえばそうなんだよね、そのあとゲストで剣崎一真も出てたけど」

士「あれはイメージが変わったよな」

秋風「だよなー。前は叫んではっかりだし」

迅「仮面ライダーになると便利だけど変わった奴らが多いよな」

士「天道なんかも変わっているな」

迅「お前人のことと言えるか？」

秋風「まあ、まだまともな部類だよな」

士「まともじゃない、素晴らしいの部類だ」

秋風「なんじゃそりゃ」

迅「さて、じゃあ士、宣伝を」

士「ああ、俺の出ている作品「仮面ライダーディケイド After the Movie War」は、W&ディケイドの話が終わってからの世界だ。ポジの世界を渡り、その世界の問題を解決していくのが俺の役割になる。新たなカブトの世界、そしてWの世界でライダーたちと戦い、カードを手に入れた。今は「カブトハイパーフォーム」と「WCJX」のカードを持っているぞ。次はキバの世界だ」

秋風「で、今度なのは世界に行くとか行かないとか」

士「作者の話だと、それは大分後だそうだ。だがまあ楽しみにしている」

秋風「そうだね、では時間ですのでここまで。お土産は？」

迅「とりあえずカメラの調整セットと、おいしいコーヒー豆だ」

士「ありがたくいただくぜ。じゃーな」

迅「次回、第六十八話『実家に帰省すると大抵親が恥ずかしく思える』TAKE OFF!」

外伝「とある新人との邂逅」(前書き)

はい、こちらの作品での初の小説クロスです。どうぞお楽しみに！

外伝「とある新人との邂逅」

?????side

「どこどこだ？」

俺はそこで目を覚ました。俺は頭を掻きながら周囲を見渡して立ち上がる。

「えーと、確か任務中になんかしたんだよな……思い出せねえ」

ロストロギアの光に飲まれたんだっけ……

「なあブレイブハート、俺どうしたんだっけ？」

『私にも正しい記録がありません』

場所はよくわからない場所だし、どうしようか……

ガサツ！ガサツ！

なんか来た！？

「グルルルルル……」

うわーお よだれだらっただらのワイバーンさんだあ

『マスター、現実逃避しないでしっかりしてください』



次の瞬間、金色のカードが現われ、何かワイバーンを撃ち抜いた。

「がああああああ！」

ワイバーンはその場に倒れ、その何かは腰のバックルを引っ張り、人に戻った。

「おい」

「!?!」

「!?!?じゃねーよ、大丈夫かお前」

「は、はあ……」

年はなのは隊長たちくらいか？

「えと、ありがとうございます」

「おう……てか、お前この施設の局員か？」

「俺は时空管理局員だけど、施設って？」

「………こここの施設の人間じゃない局員がどうしてここに……」

施設？

「えっと、俺ロストログアで吹き飛ばされたんです」

「なるほどな……嘘はついてなさそうだ」

「迅、どうした？」

そこに、巨乳の銀髪美女が現われ……って、あれ？

「リイン曹長？」

「リインは私の妹だ……というか、なぜ妹を知っている？」

「だって、機動六課にいるじゃ……」

「機動六課だと？」

男の人が少し驚いている。

「えと、俺は機動六課所属の魔導士、ハヤト・ロックウエルです」

「……ハヤト、お前の暦は何年だ？」

「新暦0075年ですけど」

なんか間違ったこと言ってるか？俺……

「ハヤト、お前のいた世界と、この世界は並行世界だ」

「並行世界？」

「ああ、この世界は0073年だ……この世界ではまたその部隊はないはずなんだ」

「え……………」

じゃあ俺は帰れないのか！

迅side

こいつ、どこかで見たな……だが機動六課の登場人物にこんな  
のはいないし……まあ、俺の力なら何とか返してやれるだろうな。

「誰だ！」

うち！見つかったか！

「アインス！」

「ああ！はっ！」

局員らしき男をアインスが倒す。さて、どうしたものか……

「あの、何をするんですか？さっき施設がどうか言っていましたか？」

「ああ、この世界には管理局が不正に動物実験をしていてな……  
さっきのワイバーンもそうだ。だから俺はこの施設を潰しにきたんだ」

「な、なるほど……」



「とりあえずお前のことは後回しだ……見張りを倒したことで  
気づく奴らもいるからな」

「じゃ、じゃあ俺も手伝います。そこのお姉さまを守らせてくださ  
い！」

何言っただこいつ……でも面白い奴だな。

「だとよ、どうするアインス」

「……ふふ、なら守ってもらおうか」

「はい！喜んで！」

「そういえば自己紹介がまだだったな、俺は神谷迅だ」

「私はリインフォースアインスだ」

こうして、俺はハヤトという少年と一緒に違法施設へと乗り込むこ  
とになった。

違法施設の前には、見張りが二人いた。

「さて、どうするかな……」

「入り口は一つだけのようです。正面突破しかできないでしょうね。  
……」

さて、どうしたものか……

「俺に任しちゃくれませんか？」

「何？」

「行くぜ、ブレイブハート」

『オーライ、あれですね？』

「おうよ、見せてやるっぜー！」

何をする気だ？

「ブレイブハート……」

なんだかハヤトがブツブツ言い始める。そして……

「シュート！」

「「な!?!」」

いきなりの攻撃開始に驚く俺とリインフォースだが……

「がっ！」

「ぐあっ！」

突然門番二人が倒れた。

「よっしやー！」

こいつ、今何をしたんだ？

「お前、今何を？」

「こいつは俺の必殺技、インビシブルシュートっす。なかなかでしよ？」

音速を超えた弾丸か……今さっき聞こえた単語は……

「まさか、アクセルシューターにソニックムーブを乗せたのか？」

「そういうことです」

こいつふざけた奴かと思ったら、なかなかやるじゃねーか……

「よし、門番も倒したし行きましょう！」

「ああ、そっだな」

こうして、俺たちは施設に突入した。

施設に突入すると、うじゃうじゃと人が出てきた。

「う、わ……めんどくせー……」

「ど、どうするんですか!？」

「こいつする」

サキタ・マギカ  
魔法の射手

セリエス・ルークス  
光の49矢!

魔法の矢で敵を潰す。

「すっげ……」

「こつからはAMFがあるらしいな……」

魔力弱まってるし……

「しょうがねえ……ハヤト」

「はい？」

「ほれ」

言いながら、俺はアクセルドライバーとアクセルメモリを渡した。

「これは？」

「研究所の奥になったら指示する。それまで持っておけ」

「あ、はい」

さて、研究施設の中心部はここだな。

「な、なんだ貴様ら！」

「さあな、お前らに名乗る名はない」

JOKER!

「まったくですね」

FANG!

「え？え？二人とも何するの！？」

「つく！かくなるうえは！」

研究員が怪物をゲージから出した。行くしかないな……

「アインス、頼むぞ」

「はい、もちろんです」

「ハヤト、お前がそれを持てばやり方流れ込んでくるだろ！行くぞ！」

「え！？あ、ちよつと！」

「「変身！」」

Wドライバーにジョーカーメモリを入れ、アインスの中に入る。

FANG! JOKER!

アインスがファンゲジョーカーになった。暴走もしてないし、成功だな。

「どうだ？アインス」

「はい、問題ありません」

さあ、行くぜ！

「さあ、お前の罪を数えろ」

ハヤトside

アインズさんがなんか変身した！かっこいい！アクセルドライバー  
か・・・やり方はわかった、行くぜ！

「ブレイブハート、サポート頼む！」

『オーライ』

ACCEL！

「変、身！」

スロットルを回す。そして、変身した。

ACCEL！

俺は仮面ライダーアクセルってやつになった。

「か、かつけ〜！」

「ほら、行きますよ〜！」

「はい、お姉さま！」

ARUM FANG!

ENGINE ELECTRIC!

俺もエンジンメモリとやらをいれて、トリガーを引く。これティアナ好きそうだな……

「はあああっ！」

「おらあ！」

やべえ！クセになりそうだ！普段からこんなに使えればいいのに！俺は襲い掛かる化け物やら局員やらを斬り捨てる。これ殺してないよな？

「な、かくなるうえは！」

男が大きな竜巻を発生させる。おいおい、ここ施設の中だぞ……

「しょうがないですね、ハヤト……マキシマムです」

「うす！」

ACCEL! MAXIMUM DRIVE!

迅side

さて、俺たちも行くか！

FANG！MAXIMUM DRIVE！

「タイミング合わせろ、ライダーツインマキシмумだ」

「りよ、了解！」

「行くぞ！」

同時に飛び上がり、必殺技を発動させた。

「「「ライダー！ツインマキシмум！」」」

竜巻を弾き飛ばし、二つに割れる。そしてそのまま竜巻は術者に跳ね返った。

「な、何！？ぐあああ！」

こうして、この施設を潰すことに、俺たちは成功した。

施設から離れ、俺は扉を作り出した。ハヤトが存在するミッドの世界だ。

「ほれ、これを通れば多分、お前の世界に帰れるぞ、ハヤト」

「マジっすか！んじゃあ帰る前にアインスさんの胸を……」



「さっさと行けこのばか者！」

「夜天の書お！？」

ハヤトはアインスに夜天の書で頬を引つ叩かれ、扉の中に吹っ飛ばされた。

「なんか、騒がしいやつだったな」

「はい、というかセクハラ人間です」

まあそうなんだが……うーん、どうかで見た気がするな、あいつ。

「まいつか……帰ろうアインス」

「そうですね」

こうして、俺たちは帰ることにした。

ハヤトside

「ぶわっ！」

ここは……そこは俺がロストログアに飲まれた場所の近くだった。あれ？俺帰ってきたのか？

「くっそー……アインスさんの胸を揉み損ねた……」

△ニユ

「ん？」

なんかやわらかい感触が？

「ハヤト……」

「ん？ティアナ？」

いつの間にか俺は、ティアナを押し倒していた。で、我に戻るとティアナの胸を揉んでいる。

「いや、これはその違うんだ！その！」

「あんたはどこで今まで何してて、現在進行形で何してんのよーっ  
「！」

「ぎゃあああああああ！」

この後しばらくティアナが言うことを聞かなかったけど、ハグしたら許してくれました。

外伝「とある新人との邂逅」(後書き)

はい、ということ。「魔法少女リリカルなのはStrikerS」とある新人の日常のハヤトとのクロスでした。ハヤトの設定もキヤラも崩壊しました。すいません……。とりあえず駄文なので、ラモン先生、ごめんなさい……

でわw

第六十八話「身内って他人の前だと恥ずかしく思える」(前書き)

はい！更新です！遅くなりました！

本編どーん！

第六十八話「身内って他人の前だと恥ずかしく思える」

「派遣任務？」

「せや！なんと海鳴での派遣任務や！」

確かドラマCDに収録されている話だったな……

「パス」

「駄目」

なんでさ……

「何で俺同伴？」

「だっておもらないやろ」

そりゃそうだけどさあ……

「とつか、迅？理沙様が寂しさで死にそうだから帰ってあげてください」

「うえ〜……」

母さんがそうなら仕方がないか……

「わかったよ、帰る」

こうして、俺は海鳴に帰ることとなった。

海鳴市 アリサの別荘

「ここが地球……」

「え！？魔法文化0!?!」

地球に驚くフォワードメンバー。まあ魔法文化0ならねえ。現在昔の別荘です。あー……母さんが怒るから一度帰るかな。

「さて、俺はちょっと帰省してくる」

「あ、うん……でもアリサちゃんたち来るよ?」

「どーせまだ時間あるだろ」

言って、俺は空を飛ぶ。つと、ここからは歩いて帰るかな……

「どうせなら家に帰るついでに色々と買い物もしておくか……  
ん?」

猛スピードで走るワゴン。そして映るのは二人の影……あれ?

「アリサとすずかじゃん……」

なんで捕まってたんだ?

『二人とも魔法を使えなきゃただの人ですよ?』

そういえばそうだな。さーて、どうしようか？

1 なのはたちに任せる

2 助けない

3 見なかったことにする

『いやいやいや、何言っているんですか。答えは4、助けるでしょ』

「ファイナルアンサー？」

『遊ばないでください』

しょうがないなあ……

「ゼロ、クロックアップ」

『オーライ、クロックアップ』

俺は猛スピードで駆け抜けたワゴンのあとを追った。

アリサside

くぅ〜！腹立つ！魔法使えると過信してたら後ろからやられるなんて……！

「アリサちゃん、どうしよう・・・」

「どうしようもどうしようもないわよ・・・魔法使えないし」

「私たちが杖やカードを取られたらただの人だもの・・・どうしよう。すると、数人の男が私たちを見ていた。」

「へっへっへ・・・バニングス家と月村家の令嬢だ・・・」

「高く売れるなあ」

「ちょっと！放しなさいよー！」

「ばかかお前は、お前らはこの後売られるんだからなあ、なあ兄貴」

「そのとおりだ、まあその前に味見するのも悪くねえな・・・」

「男たちが迫ってくる。」

「寄るな！けだもの！」

「強情な女だな・・・ならまずこっちの大人しいお前からやってやる」

「きゃあああ!?!」

「ゴリゴリッ！」

「さすがロングスカートを破られる。つく！」



「ひひひ・・・恐ろしくてさすがに声が出ないか？」

う、うう・・・

「じゃあ、いただきまーぶへえら!？」

私は目を丸くする。

「ったく・・・手間かけさせやがって」

声がしたほうをみた。そこにいたのは、私が好きなあの男だった。

迅side

「なんだ!てめえ!」

「通りすがりの幼馴染だ」

「迅!」

「ようアリサ、すずか。大丈夫かー?」

俺が言うと、すずかとアリサが眼を潤ませる。まったく、魔法に頼りすぎなんだよお前は。

「待ってる、すぐに終わらせる」

「なめんなガキ!」

男たちが襲い掛かる。ハア……

「ゼロ、デバイスモードのみを起動してくれ」

『オーライ、マイマスター』

Zセイバーを構え、襲い掛かる男たちを吹き飛ばす。

「ゼロ」

『オーライ、クロックアップ』

仮面ライダーカブトのクロックアップを作動させ、そのまま走り抜けてZセイバーを振るった。

『クロックオーバー』

「……ぎゃあああああ!?!」「」「」

「おしまいっど……」

身体に負担がかからないように数十秒だけしかできないが、これはいいな。

「ほれ、大丈夫か？」

「迅君!」

「迅っ!」

二人に抱きつかれる。まったく……手間かけさせやがって。

「ほれ、すずか」

カードを渡し、アダアットで服を調節させる。

「とりあえず後は警察に任せるか。一旦別荘に行こう」

「うん……」

「じゃ、じゃあさっさと行くわよー！」

二人に抱きつかれながらも、俺はその工場跡地らしきところを後にした。

「ただいま……」

「迅っくーん！」

「ぎゃあああー!？」

いきなり誰かが飛び掛ったと思ったら、母さんだった。

「か、母さん!？」

「うえ〜ん!さみしかったよお〜!」

「や、やめて!?!お願いだから!」

みんなの視線が痛い……

「と、とりあえず離して母さん」

「や〜」

もうやだ……

しばらくして解放され、アリスとすずかが自己紹介してから、母さんが自己紹介した。

「こんにちはみなさん、迅がいつもお世話になっています。母の理沙です」

「……お母さん!?!」「……」

フォワードメンバーが眼を丸くする。まあそう驚くよな、もう30代なのに見た目20代だもんなあ……。実際俺を生んだのは高校生の時だし。18で生んでもう19年だから36歳か。でも20代にしか見えません。それはなのは母やフェイトの母もそうなんだけど……

「パパ〜」

「おっと、ターナ」

お昼寝から眼を覚ましたターナがトテトテと走り、俺に抱きつく。

「パパ、抱っこ」

「はいはい」

甘えん坊のターナを抱くと、アリサとすずかが驚いていた。

「迅、パパってどういうことかしら？」

「しっかり説明してくれない？」

「ちょっと待てお前ら、その杖を置け、説明してやるから」

ターナが泣く前に説明、二人は納得してくれた。

「なーんだ、そうだったの」

「あの、迅さん？」

「なんだスバル」

「アリサさんとすずかさんも魔導士なんですか？」

当然の疑問だな……

「いや、二人は魔導士じゃなくて魔法使いだな」

「どう違うんですか？」

「二人にはリンカーコアがない」

「えー!?じゃあどうやって魔法を起動させるんですか!？」

この後フォワードが納得するように魔法のことを教える。で、口止めして終了。

「まあリンカーコアがあればこの手の魔法は使えるけどな」

「へ」

「さてみんな、そろそろ任務に移ろっか！」

「」「」「はい！」「」「」

こうしてフォワードは出発。俺はターナと湖の前で遊んでいる。

「パパ！鳥さんだよ！鳥さん！」

「そうだね、アレはアヒルさんだよ」

「アヒルさん？」

「そう、アヒルさん」

「アヒルさん！」

ターナが言葉を覚え、楽しそうにアヒルを追い掛け回す。そのつど、他の花などに興味をしめしたりと、楽しそうだ。

「あんたは行かなくていいの？」

「リインフォースに任せた。それに俺は管理局に協力する気はない

しな  
」

「そうなんだ……えへへ」

いきなりすずかが俺のほうによりかかる。

「なんだよすずか」

「さっきはありがとう」

「あ、すずかすずかい」

いいながらアリサも寄りかかる。

「お前らは魔法に頼りすぎだ」

「……それはうん、今日でよくわかったよ」

「なら気をつける」

「はい……」

「パパ」

「ん？どうしたターナ」

ターナがトテトテと走ってきた。

「おなかすいたー」

「そつか……もう3時か……」

お昼はあんまり食べさせなかったからなあ……母さんはみんなの夕飯を買いに行ったし……

「じゃあ翠屋行く?」

「そうだな、そうするか……」

最近行ってないし……

「それじゃあ今日のおやつはケーキを食べに行こう」

「わーい!」

こうして俺たちは翠屋に向かった。

翠屋

「こんにちは」

「あら、迅君じゃない」

「桃子さん、お久しぶりです」

「やあ、元気そうだね」

「土郎さんこそ」



久しぶりだな〜・・・2、3ヶ月ぶり？

「あら、その子は？」

「ほらターナ、挨拶は？」

「かみやターナです」

少しだけ緊張しながらも、ターナが挨拶する。

「親戚の子かい？」

「いえ・・・」パパ、お腹すいたよう「はいはい」

「あら、もうパパになったの？もしかしてなのと・・・」

「なにい！？迅君、君がそんな男だとは知らなかったぞ！」

「桃子さん、土郎さんが暴走するのわかってるなら止めてください」

「ふふふ、だってそのほうが面白いじゃない」

いやいやいや、洒落にならねーって、土郎さんが生地伸ばす棒を構え始めたよ。

「この子は、研究施設から助け出した子です。俺が引き取ったんですよ」

小声で言う。ターナはケーキに夢中だ。

「あ、そうだったの……」

「そうなのか……」

「パパ！これ食べたい！」

ターナがフルーツタルトを指差す。

「はいはい……じゃあ俺はチーズケーキお願いします」

「私アップルパイで」

「私はロールケーキを」

「私はショートケーキ」

あれ？一人多くない？

「迅、サーチャー撒くの終わりましたよ」

「リインフォース、お前いつからそこにいたの？」

「そうですね、ターナが自己紹介をするあたりです」

ほぼ最初じゃねーか

「まあいいや、席座ろうか」

こうして席に座るわけだが……

「お前ら、何してるの?」

なんかじゃんけんしてる。ターナは俺のひざに座り、おいしそうにフルーツタルトを食べる。うん……チーズケーキおいしい。

「やった!私迅の隣!」

「私も迅君の隣」

アリスとすずかが言いながら俺の隣に座る。リインフォースはなんかもだえてる。

「ここで負けるとは……」

なんてことをしていると、なのはたちが入ってきた。

「ただいま……って、リインフォースさん何してるんですか」

「高町か……いや、なんでもない」

ふらふらと俺の前に座るが……

「あー!アリスちゃんとすずかちゃんずるいよ!私も迅君の隣座る  
ー!」

「ふふん、甘いわねなのは。じゃんけんして決めたんだから」

「私参加してないもん!」

「でもそれは遅かったのが悪いよね」

なんてギャーギャー騒ぐ。はぁ……こいつらは年齢が変わって  
も中身は変わらないのか……

「おいしい」

ターナがなんの事情も知らずにおいしそうにケーキを食べていた。

第六十八話「身内って他人の前だと恥ずかしく思える」(後書き)

秋風「時間がないので今日は休みです」

直人「次回、ゲストが登場です」

秋風「狙い撃つぜ！」

直人「次回、第六十九話『食事は勝負、いざ銭湯準備』 TAKE

OFF

第六十九話「食事は勝負、いざ銭湯準備」(前書き)

はい、活動報告で募集したら15人以上来ました

みんな俺を殺すきか？まあ、できる限り書きますが、詳しいことはまた活動報告で

## 第六十九話「食事は勝負、いざ銭湯準備」

翠屋を後にし、俺たちは別荘へ戻った。すると、大量の肉やら魚介類やらが並び、ご飯も山盛り炊けていた。

「母さん、何これ？」

「あら、この大人数だからたくさん買ったんだけど？」

「ありがとうございます理沙さん。レシートは……」

「これだけど別にいいわよ？」

言いながら渡す。うわ……単位が何十万の世界だ

「いえ、これはうちの出張任務ですし、六課が払わなければいけませんので」

そう言っではやてがうちの口座にそのお金を入れた。母さんは別にいいのと言っていたが、俺が何とか納得させた。そして食事スタート

「あ！私が育てたお肉がぁ……」

「甘いよスバル、これも勝負だよ」

なのは、それはなんか間違ってる。で、俺は離れた場所で肉を焼いて、ターナに食べさせる。

「はいターナ、あーん」

「あーん」

ライトニングもシグナム以外がそこで食べている。

「はい、エリオ」

「ありがとうございますフェイトさん」

こっちは平和だな。

「あ！ヴィータ！貴様！」

「へん！油断するほうが悪いんだぜ！」

向こうは食事で大喧嘩である。こいつら、本当に元闇の書の守護騎士か？

「同じ存在として恥ずかしい……」

なんて、リインフォースが食事をしながらため息をついていた。

「まあいいじゃないか。昔より表情豊かだしな」

「迅さん」

リインがやってきた。



「どうしたリイン」

「私にもあーんってやって欲しいです!」

「え?はいはい・・・あーん」

「あーん」

リインが嬉しそうにする。

「あ!リインずるいぞ!迅!私にもやってください!」

おいおい・・・

「リインフォー스!抜け駆けさせへんで!うちも食べさせてや!」

「あ!はやてずるいよ!私も私も!」

「みんなずるいの!私もー!」

「みなずるいぞ!私もだ!迅!」

「駄目!私が先なんだからねっ!」

「私が先だよね?迅君?」

お前らな・・・

「だめー!パパはターナのー!」

なんてターナまで言い出す。お前ら何がしたいんだよ………なんてことを考えていると

「やつほー！迅！」

「迅、久しぶりね」

アリシアとプレシアさんが現われた。

「あれ？プレシア母さん、どうしてここに？」

「私が迎えに行ったの」

アリシアが嬉しそうに俺に抱きついた。アリシアはプレシアさんを迎えに行くために少し遅れていたのだ。

「あ、あーん」

アリシアが俺が箸で掴んでいた肉を食べた。

「えへ」

「あー！アリシア姉さんずるい！」

「いーじゃん、みんな固まっていたのが悪いよーだ」

この後みんながデバイスを取り出して大喧嘩になったのは言うまでもない。

「さてと、疲れた……」

この後プレシアさんがみんなを撃沈させた。それを見たフォワードは怖くて震えていたが、なれたものだ。

「この後は……ああ、そっか」

あのイベントが待ってるのか。

「と、とりあえずこれからスーパー銭湯へ行くで……」

ふらふらになりながらはやてが言うが、フォワードは首を傾げる。

「……スーパー銭湯？」

そりゃミッドにはないもん……銭湯なんて。

「ほら、行くぞ」

フォワードは場所の名前に疑問を持ちながらも、フォワードはアリサが用意した車に乗り込んだ。

銭湯に着くと、お決まりのこのイベントが待っていた。

「ねえエリオ君、楽しみだね！」

「うん、キャロもフェイトさんと楽しんできて」

「え？一緒に入ろっよ」

言われた瞬間、エリオが固まる。

「い、いや・・・僕は男の子だし・・・その」

「ほら、アレ見て？」

「あれって、看板？」

そこに書かれているのは

11歳以下のお子様限り、どちらの湯も使用可能

「ふふ、エリオ君10歳！」

「そつだよエリオ、エリオも一緒に入ろうよ」

フェイトが言うと、エリオがさらに顔を赤くした。そのセリフ、他の管理局員や読者の皆様が聞いたらどんな反応するんだろうな。

「えと、なのはさんやアリサさんたちもいますし、その・・・」

「ふえ？私は構わないよ？」

「私も別にいいわよ」

「ええ！？」

わくわく、頑張ってるエリオ

「パパ！早く！」

「はいはい」

「（迅さん！助けてください！）」

「（無理）」

「（即決ですか！？）」

だっしょうがないじゃん、フェイトの目がギラついて怖いんだもん。

「（たまには母親の行為に甘える。10歳が思春期ぶるな。まだ早い）」

「（ええ！？そんな！）」

「（それとも、これ以上駄々を捏ねるなら俺の権限で軍法会議にかけてやるつか？）」

「（管理局は軍じゃないです！というか、そんな権限あるんですか！？）」

「（俺に不可能はないぞ）」

なんて冗談はさておきと……

「ほらエリオ、行くぞ」

「は、はいっ！」

エリオの暗かった顔が一気に明るくなり、俺はターナを抱いて男湯の中に入った。入るとき、キャロがじつと看板を見つめていたのが見えたので、多分お話のとおりに行くんだろう。

「わ〜！大きいお風呂！」

ターナが大はしやぎである。4歳の女の子がタオルを巻くという行動をするはずもない。なので障害魔法を張ってそうそうに野郎に退出してもらった。なので風呂には俺とエリオとターナとキャロしかない。

「キャ、キャロ!？」

エリオが驚く。もうこの辺のくだりはいいよ……

「よし流すぞターナ。目を瞑って」

「ん〜！」

目を瞑り、水が流れる。自分の娘だからか、可愛く思える。そして……

「わ〜い！」

ターナがお風呂に入る。深いところがあるので、子供用の風呂に浸からせた。うん、これならおぼれないだろ。

「あ〜……生き返る」

「迅さん、なんか年寄り臭いです……」

さあみなさん？19+18はいくつかな？俺の本来の年齢ならもうすぐおじいさんだよ。

「あのハードワークで疲れないお前らがおかしい」

「そうですか？」

まあライティングのはフェイトがだいぶ負担してやってるけどな。

「そういえばエリオ、お前機動六課には慣れたか」

「え？はい……」

「そっか、ならいい」

「あの、どうしたんですか？」

こいつの未来も、変えやりたかったんだがな。

「お前、施設にいたって？」

「あ……」

「フェイトから聞いた。全部……な」

「……」

エリオの顔が沈む。

「まあ、過去を捨てるとは言わん、だが今と未来を見なきゃ、この先やっていけないぞ」

「迅さん……」

「昔は知らんが今はあるだろ、守り守られるもんが……」

「は、はい……」

エリオは笑っていた。まったくこの先管理局は本当に潰してやるのか。

「ほれ、キャラロが呼んでるぞ、行ってやれ」

「あ、はい!」

この後エリオは混浴へとキャラロに連れ込まれたが、俺は頑張れと念話を送るだけだった。

「あー……眠い」

「パパー?」

俺は別荘で寝る。否、だれている。

「迅君どうしたの?」



「暇だ……」

実際俺らいらねーだろ……

「まあそんなに危険なロストログアじゃないからね」

「っ！はやてちゃん！」

とっぜんシャルマルが叫ぶ。なんだ？

「フォワードの地点に魔力反応です！」

そんな話原作で聞いたことねえぞ？

「しょうがない、俺が行く」

暇つぶしだ。

「ターナはいい子にしてろ？」

「はいー！」

「っしゅ、行くぜ！」

こうして俺はすぐにバイクに乗ってフォワードたちのところに向かった。

ティアナside

何が起きたかわからなかった。ロストログアを封印したら、別の場所から変な集団が出てきた。

「あ、あなたたちは!？」

「あらら?管理局員のようね」

地球で管理局を知る人たちは少ない。この人たちはいったい!?

「私たちの姿は見られたらまずいから……消えて頂戴」

「ティア!」

私にめがけて尖った触手が飛んだ。避けようとしたが、早すぎた。

「agg!？」

私の肩を貫く。痛い……

「う……あ……」

「あら?外れたわ……もう一発」

ブオオオオン!

女の手がまた触手になった瞬間、バイクがそこを駆け抜けた。

迅side

「おいおい、何の冗談だ」

知らない女だな・・・原作でも見たことがない。

「ティアナ、しっかりしろケアルガ！」

「う、あ・・・迅さん？」

「よし、大丈夫だな。スバル！」

「はい！」

「ティアナを連れてフォワードは逃げる。なのはたちに連絡するんだ」

仕方ない。ここはやりあうしかなさそうだ。

「リインフォース、行くぞ」

Wドライバーを巻き、ジョーカーメモリを取り出した。

「貴方が神谷迅ね・・・」

「俺を知ってるのか？」

「ええ、世界を救った英雄・・・そして、管理局を破壊しうる存在」

管理局の破壊？まさかこいつ・・・

「反管理局の組織か」

「ただしくは『リメイカー』世界を変える者」

マジかよ・・・原作とは違う奴らか。

「で、その『リメイカー』が何のようだ？」

「この世界は、高町なのは、八神はやて・・・強大な力を生む星・・・ならば、破壊する。それが私の任務」  
なるほど、ならば止めてやる。

CYCLON!

JOKER!

「「変身!」」

CYCLON! JOKER!

仮面ライダーWとなり、構えを取る。

「それが貴方の力？素晴らしい・・・」

「行くぞアインス」

「ええ、迅」

俺はそのまま女に攻撃を仕掛ける。

「なら、これはどうかしら?」

そこに現われたのは……

「イマジン!?!」

「この地の記憶は私の手の中……さあ、行きなさい」

「がああああああ!」

「ちっ!」

疑問はいろいろと晴らしたいところだが、今は敵を潰す!

「はあっ!」

俺はそのままイマジンを蹴り飛ばす。この女は「この地の記憶」と言った。つまり闇の書事件に出現した者たちを作り出すことができるらしい。

「がああああああ!」

なかなかしぶとい……!

「アインス!」

「はいっ!」

HEART!

METAL!

ヒートメモリとメタルメモリをWドライバーに突っ込む。

HEART! METAL!

ヒートメタルとなり、メタルシャフトで相手を吹き飛ばす。

「一気に叩く！」

METAL! MAXIMUM DRIVE!

「メタルブランディング! はあっ!」

一気に攻撃し、イメージを吹き飛ばした。

「なかなかやるわね」

「お前、どういっつもりだ。いったい何者なんだ」

「私はリメイカーの一人『記憶』を操る者……名をメリー」

メリー……

「今日は引くとしましょう。でも覚えてなさい、管理局に正義などないということを」

いいながら女は消えていった。

「はあ……」

俺はWドライバーを解除し、元に戻った。

「リメイカー……か」

Side out

「ただいま」

そこはとある場所。メリーはそこに帰還した

「どうだった、記憶は」

「まあまあね…… Grongi、ファンガイア……他にもいくつかの記憶。解析して再現が可能よ」

「我らの遂行な使命のために……」

『世界を我が手に』

迅side

とりあえず襲撃はこのあとなかった。襲撃者はたんなる魔導士と言っていた。下手なことを言っただけスカッチとのつながりが消えたらこまるからな……

「さて、帰るのか」

「泊もせずに帰るとか、まじでない。で・・・

「アリサ、すずか、何その荷物」

「何って、私たちも機動六課に行くのよ」

「は？」

「戦力って多いほうがいいんでしょう？だから私たちも行くってこと」

「やっぱりこいつらに魔法教えなきゃよかった・・・」



第六十九話「食事は勝負、いざ銭湯準備」(後書き)

秋風「はい、またのらりくらりと書いてました」

迅「遅すぎだろ。今日はゲストがいるんだぞ」

秋風「そうでした……」

ニール「よう、じゃまするぜ」

秋風「ということで、恥ずかしい主人公ニールさんです」

ニール「おい！どこういう紹介だ！」

秋風「『狙い打つぜ！』とか……」

ニール「うっ！」

迅「『満足か？こんな世界で……俺は嫌だね』とか」

ニール「ぐふっ！」

秋風「かつこいいといえばカツコいいんだが」

迅「なんというか、齒の浮くセリフの連発だったよな」

ニール「やめるお！もうやめてくれえ！」

秋風「どっかの不可能を可能にする男並みだったからな」

ニール「ぐふっ！」

迅「もうやめてやれ」

秋風「すまんすまん」

迅「まあともかくクロス作品ではガンダムだな」

ニール「そっぴや結構ガンダムになってるよな、お前」

迅「結構な。でも最初はシャアザクだったな」

秋風「ああ、あれはなんとなくシャアがよかつたからw」

ニール「これからガンダムはほかに出すのか？」

秋風「機会があれば出す予定だ」

迅「あんまり変なのだして欲しくないな」

ニール「例えば？」

迅「ノーベルガンダムとか」

秋風「ああ、あれね」

迅「あとはZとか・・・変形したときが怖い」

ニール「それを言ったらキュリオスも無理か」

秋風「だな」

迅「後はもつと暴れられるのがいい」

ニール「GNDドライブで十分暴れてんじゃねーか」

秋風「さて、そろそろ時間だ。ニール。紹介を」

ニール「おう。俺が出ている作品『魔法少女リリカルなのは』深緑の狙撃手VS赤き傭兵』だが、俺がミッドに流れ着いて、ラーナが死んでからの話になる。それ以前は『魔法少女リリカルなのは』天を穿つ深緑の狙撃手』を読んでくれ。現在は最終決戦だ。なのはと俺の活躍を見逃すなよ！じゃないと狙い撃つぜ！」

秋風「結局言つたよ」

迅「ではお土産だ」

ニール「なんだこれ？DVD？」

迅「お前のかつこよくも恥ずかしいセリフの連発集だ」

ニール「俺をいじめて楽しいか！？」

秋風「いじめてない、いじってるんだ」

ニール「一緒だろ！」

秋風「まあ後はほれ、デユナメスのMGやるから。あとなのはのフ

イグマ

ニール「おう、ありがとうよ。じゃなあ」

迅「次回、第七十話『馬子にも衣装』 TAKE OFF!」

第七十話「ナンバーズday」(前書き)

お久しぶりです、おかげさまで300万ヒットを超えました。なの  
に放置でなりません。

これからも頑張りますのでどうかよろしく願います。

それでは本編ご覧ください

## 第七十話「ナンバーズday」

海鳴から帰ってきてから俺に安息の日はなかった。

「ん……」

朝目覚めると、ターナが横に寝る。これはまあいいだろう。だがその隣と、逆サイドである。

「おいシグナム、なんでお前はここに寝てるんだ。ついでにアリサ、お前はアリシアを蹴っ飛ばしてなにしてた」

気持ちよさそうに眠る2人にブツブツと文句を言う俺。とりあえず起き上がり、ターナを起こす。

「ターナ、起きようか」

「うー……」

「ほら、よっと」

抱き起こし、抱っこする。こうしないとターナが起きない。

「あ、パパあ……おはよー……」

眠そうながらも、嬉しそうな笑みを浮かべて起きるターナ。実はこれが日課だったりする。それというのもターナはどうも一人になると不安でたまらないらしいので、こうしてあげている。

「じゃあターナ、ターナは何をするんでしょーか？」

「顔を洗ってお着替え！」

「正解、さあやっておいで」

頬に軽くキスをして、ターナを送り出す。

「はあ……こいつらは」

向き直ってベッドを見る。さすがに朝なのでなのはとフェイトとはやてはいないが、それ以外のアリサ、すずか、アリシア、シグナムが寝ている。あれ？リインフォースは？

「迅、おはようございます」

バスタオル一枚のリインフォースがいた。

「ああ、おはよう……じゃねーよ！とつとと着替える！」

頭痛くなってきた……

そんな騒動の後、俺は食堂に向かう。向かう途中、はやてに会った

「あ、迅君おはよーさん」

「ああはやて、おはよう」

「お客さんが来てるらしいで」

お客？

「わかった、ロビー？」

「みたいや」

「りよーかい」

一体誰だ？三提督の誰かだったらはやてが知ってるだろうし……。そんなことを思いながらロビーに向かうと、我が目を疑った。

「迅！」

「ドゥーエ！？うおっ！？」

俺はそのまま抱きつかれた。ピンク色の髪……。つまり変装中のドゥーエ……。レジアスの秘書の姿だ。

「うふふ、久しぶり」

「（お前な！スカリエッティの側の人間が何簡単な形で機動六課に来てるんだよ！）」

「（いいじゃない、会いたかったんだから）」

こいつ、人の気苦労も知らないで……

「あ、迅君おは……。よ……。」



この最悪のタイミングでなのはとフェイトが登場した。そして魔王と夜叉と化している

「ジンクン、ダレカナ？ソノヒト」

「ワタシタチトイウモノガアリナガラ」

「ちょっと待て！お前ら！」

「「言い訳無用！」」

「ぎゃーっ！」

「初めまして、地上本部のレジアス・ゲイズ中将の秘書、ドゥーエと申します」

結局こいつは自己紹介しやがった。お前の登場原作だと最後のほうだぞ。

「ゲイズ中将の部下がここに何の用でしょうか？」

はやては緊張気味にドゥーエを見た。しかし、ドゥーエはクスクスと笑っている。

「いえ、今回中将は関係ないので、お気になさらず。ねえ迅？」

「お前な、アポなしで来たらこうなるに決まってるんだろ」

「あの、ドゥーエさんは迅君とどういう関係ですか？」

なのはがデバイスを構えながら問う。怖い、滅茶苦茶怖い……

「ええ、お友達ですわ……それも、とつても大事な」

余裕の笑みをかますドゥーエ。「貴方たちとは年季が違うのよ」と言わんばかりの妖艶な笑みである。みんな何故か不満の表情だ。

『（マスターはやっぱり疎いですね）』

「（何が？）」

『（なんでもないです）』

「で？お前何しに来たの？」

「何って、当然仕事です」

「……（スカリエッティ？）」

「それでは、行きましょう迅（ええ、ちょっとドクターが）」

こうして、俺はドゥーエと共に、スカリエッティのアジトへと向かうことになった。

「うふふ」

「ドゥーエ、いい加減離してくれない？」

「い、や」

現在ラボに向かって歩く俺たち。すると、ウーノがいた。

「よう、ウーノ」

「迅……って、ドゥーエ？何をしているのから？」

「見てわからない？迅の養分を引き出してるの」

養分って……俺は植物か。

「離れなさい！」

「いゝやゝよ」

ウーノとドゥーエがケンカを始める。そこにチンクがやってくる。

「迅！」

「チンク、いいところに来た！こいつら止める！」

「ずるいぞ二人とも！私が迅といちやいちゃする！」

「いちやいちゃってどこで覚えてきたお前！」

この後ドクターが現われ、ことを鎮圧した。

「でっ」

「でっ……とはっ」

現在スカリエッツィとラボでお茶を飲んでいる。それまで3時間くらい待たされたが。

「ドゥーエを使ってまで俺を呼んだんだ。余程急ぎの用事なんだろ」

「まあね……実は、先日……偵察中のトーレが襲撃を受けた」

「何!？」

「安心したまえ、傷は浅い」

トーレは機動六課の隊長クラスだ。そんなトーレが傷を負うほどの敵……

「……リメイカーか？」

「なんだ、もう情報は入っていたのかい？」

「いや、直接会った」

この後、俺はスカリエッツィにそれまでのことを話した。

「なるほど、記憶……」

「ああ、女の一人はそう言っていた。実際にファンガイアは現われている。トーレはどんなやつに？」

「それが、こんな化け物なのさ」

スカリエッツィに見せられて、俺は絶句する。

「これはドーパント……しかもW<sup>ウェア</sup>ドーパント」

これは、トーレでも勝てないはずだ。

「なるほど、君の知るものかい？」

「ああ、かなり性質が悪い……スカリエッツィ」

「なんだい？」

「機動六課にこねーか？」

俺が言うと、スカリエッツィは驚く。

「突然だね、何故だい？」

「言ったとおり、この先俺はあらゆる部門でエースをそろえたい。それこそリメイカーに対抗しうる」

「なるほどね……」

「とりあえず今日はそんなところか？」

俺が言うと、スカリエッツィが頷く。

「ああ、ゆっくりしていきたまえ」

とりあえずトーレの見舞いだな。

「おっ」

こうしてラボを後にした。

とりあえずメディカルルームへ入ると、そこにはトーレがいた。

「トーレ」

「迅」

トーレは腕に包帯を巻いていた。

「大丈夫か？」

「ああ、それなりに……な」

「見せてみる」

見ると、中のチューブが切れている感じだ。

「よく離脱したな」

「ああ、見た瞬間まずいと思った……あれが恐怖か」

「だな、しばらく養生してろ」

「む……」

頭を撫でると、恥ずかしそうに伏せる。トールはこつこつとこころ可愛いな。

「迅、ありがとう」

「どういたしまして、お大事にな」

こうしてメディカルルームを後にし、食堂に戻る。するとドワーエが待ちわびていたかのように飛び掛ってきた。そして抱きつかれる。

「迅、ドクターと何の話？」

「リメイカーについて、んでスカリエッティに六課に誘った」

「それまずいんじゃないの？お嬢様が何を言い出すか」

「知ってる」

フェイトが怒り狂うかもな……いや、プレシアさんいるしあの程度は大丈夫か？

「正直今はなりふり構ってなれないんだよ」

「世界を守るって顔ね」

「んあなたいそんなもんじゃねーよ、俺はあいつらやお前らに傷ついて欲しくないだけだ」

ため息をつく。こんなセリフ、よく口で言えるようになったものだ。

「さて……そろそろ帰らないとな……」

ターナに泣かれるのも困る。

「え……」

「しょうがないだろ、ターナに泣かれるのも困るし、予定も詰まってるしな」

明日は……ああ、騎士カリムに呼ばれてたな。その次の日はホテルアグスタ……か

「んじゃな、ドゥーエ」

「もう、いつもタイミング悪いんだから」

「悪い悪い、許してよ」

「じゃあ……ん」

ドゥーエと俺の唇が重なる。

「ん……ふう……」

「むう……ふあ……うふふ」

いじわるっぽくドゥーエが笑った。

「まったくお前は……」



「いいじゃない、ベッドに行かない代わりよ」

「こんなところウーノにでも」「ドワーエ？何してるの？」  
「……………」

案の定でした。で、この後ドワーエは逃げるように去っていった。

「まったく……………」

言いながらウーノが俺に抱きつく。

「ウ、ウーノ？」

「私が最初にしたかったのよ」

言いながらキスをされる。

「まったく、お前まで……………」

「いいじゃない…………じゃあ帰りは気をつけてね」

「ああ、またな」

こうしてアジトを後にした。

それから数分で機動六課に帰ってきた。時間はもう5時か…………

「ただいま……………」

「パパっ！」

ターナが嬉しそうにトコトコと走ってきて、俺に抱きつく。

「ただいまターナ」

「パパ、お帰りなさい！」

俺が抱き上げると、ターナは嬉しそうに抱きつく。

「お帰り迅君、何してたの？」

「ん？ああ、ちょっと知り合いの科学者のところにな……この前の連中のことで」

「ああ、そうだったの………迅君？」

「なんでしようかなのはさん」

なのはの目が怖くなった。

「迅君、なんだか違う女の人の匂いがするの………」

「いや、気のせいだろ………」

「あれ、迅お帰り………」

「迅君おかえ………」

「ど、どうした二人とも」

「違う女の匂いがする」

この後俺はこっぴり絞られた。

第七十話「ナンバーズday」（後書き）

久しぶりの更新です。とりあえず生きてます

秋風「ごめんなさい、大学のテストやらレポートやらに追われてました」

迅「読者の方々には申し訳ない」

秋風「これからも頑張るのでどうかよろしく」

迅「次回、第七十一話『VSシスター！』TAKE OFF！」

第七十一話「聖王教会」(前書き)

今日はカリムが登場です。個人的にはカリムが好きなので、すきあらば登場させようかなと思っています。

## 第七十一話「聖王教会」

スカリエツティとの話から次の日。今日は聖王教会へと訪れた。敵同士の間を行き来するとは、なんとも不思議な感じである。

「こんにちはシスター」

「神谷様、ようこそ……お待ちしておりました」

シャツハに案内され、カリムがいるところに訪れた。

「こんにちは迅、お元気そうでなによりです」

カリムが笑顔で言うてくれたので、俺も笑顔で答える。

「ええ、騎士カリム。貴女もお元気そうで」

「そんな……私のことはカリムと呼んでください」

「は、はあ……」

カリムが言うのでそうする。顔が赤いのだが……まあいいだろう。

「それでカリム、今日はどのようなご用件で？」

「よいお茶が入ったので、是非と思ひまして」

「………そうですか」

なんか違うような気がするな。

「実は……予言が変わったんです」

「予言が、変わった？」

もしかして、スカリエッティが俺の味方になったからか？

数多の星を告げる者たち……星を砕かんとする者たちによって砕け散る。世界をすくわんとする勇者は全てを糧に、星を砕かんとする者たちに挑む。

「星を、砕く？」

「数多の星を告げる者……つまり時空管理局」

「砕かんとするものは『リメイカー』ですね」

「そうですね……そして世界をすくわんとする勇者……これはあなたではないでしょうか？」

カリムの言葉に、俺はため息をついた。

「カリム、どうして俺が勇者なんですか？」

「だって考えられませんよ、あなた以外」

とりあえずカリム、貴女は病院に行つて検査してください。主に頭を

「だからカリム、俺は世界のために戦つたりはしませんよ？」

「でも結果的にあなたはみんなを救つてますよ？」

「ならもつと違つのがあるでしょ『仲間を救おうとする者』とか」

「もう、もうちょっと自身を持ってください。」

カリムがため息をつく。俺はどう人から見られているんだ。

「俺は勇者や英雄なんてたいそうなものじゃないですよ」

「それは人によりますよ、少なくとも私は、貴方を英雄だと思つて  
いますから」

ニツコリと笑うカリム。俺も短く笑う。するとカリムがこんなこと  
を切り出した。

「迅、実は頼みがあるんだけど・・・」

「俺ができる範囲で頼む」

「あら、なんでもできそうね・・・」

勘弁してくれ・・・

「頼みたいのは調査なのよ」



「調査？」

「私と一緒に来て頂戴」

カリムが立ち上がったって部屋を出る。俺もうなずいて続く。しばらく歩いていると、カリムの執務室らしき場所についた。

「ひどいな・・・」

その執務室は黒こげだった。

「質量兵器・・・RPG-7ってところか？」

「そんなことまでわかるんですね・・・さすがです」

「襲撃にあったのか」

「ええ、こんな脅迫文も」

言って、カリムが俺に紙を渡した。ミッドの文字を『答えを出す者』で解読した。

聖王教会から手を引け、ハトども

なるほど、穏健派に対するゴミどもの・・・そんなことを思いながら窓を見る。すると、何かが光った。

「カリムっ！」

俺はカリムを抱きかかえ、床に伏せた。

「きゃあ!？」

パン、パンツ!

スナイパーライフル!しかもサイレンサーなしかよ!

「怪我はないか、カリム」

「え、ええ………」

カリムが顔を真っ赤にしている。ん?よくよく考えればこの体制つて、カリムを押し倒してる?

「騎士カリム!ご無事ですか!」

最悪のタイミングでシスターシャツハが入ってきた。

「………」

沈黙……そして

「何しているんですか、この不埒者!」

この後誤解を解くのに数十分掛った。

現在俺はカリムとホールにいる。さて、対策はうったし……

「んじゃシスターシャツハ、ここの人たちよろしくな」

「はい、お任せを」

他の修道女などをホールで保護し、俺はホールを出る。スナイパーがいるということは、もう敵の部隊はいるのだろう。サーチしたら、ざっと40人はいた。面倒だな・・・

「ま、使っていない能力を試すチャンスだ」

廊下を走っていると、4人ほどの小隊が出てきた。

「いたぞ！撃て！」

「ザ・ワールド！」

俺は右手を前にして、時を止めた。そして銃をすべて叩き折り、蹴り飛ばした。

「そして時は動き出す」

「「「ぎゃあああああああ！」「」「」

俺のザ・ワールドは最大10秒。仮面ライダーファイズのアクセルフォームよりすごくない？まあいいや・・・先に進むか。

「実行部隊の場所はおそらく外だな・・・魔力の気配は・・・こつちだ！」

こうして、俺は聖王協会の中を暴れまわった。

Side out

「ええい、何をしている!」

「大変です、部隊が全滅です!」

男は聖王協会のタカ派の人間だ。クーデターをしたのもこの男であり、ドゥーエにたぶらかされたのもこの男だったりする。

「早く潰さんか!あのハトどもを!」

「ぐあっ!」

突然広場に兵士が倒れる。そして一人の男が現れた。

「見つけたぜ、鼠ども」

英雄と呼ばれた男、神谷迅だった。

迅side

みーつけたつと・・・ひーふーみー・・・おっと?60はいるんじゃない?

「き、貴様!」

「はいどうも、正義の味方です(棒読み)」

「あの英雄か！？な、何故貴様がここに！」

「カリムとは友達でね、さて……どこのどいつだ？カリムを殺そうとしたのは」

「やれ！」

男の合図で銃弾と魔力弾の嵐が降り注いだ。だが、俺は無傷だった。

「ば、馬鹿な！」

ザ・ワールド……魔力消費は激しいけど、これすごいね。

「さて、行きますか……」

俺は手に魔力を貯めた。そして……

「ザゲルガア！」

強大なザゲルガを撃ち放った。

『ぎゃあああああああ！』

「まだまだ、ガンズ・ザゲル！」

ガツシユのオンパレードである。さらに……

『ぐあああああああ！』

60いたやつらが一瞬で吹き飛んだ。さて、と

「後はお前だけだぞ」

「ひ、ひいいい！」

カリムを襲った罪だ。そして俺が濡れ衣着せられた罪だ……ぶっ飛ばす！

「さあ、お前の罪を数えろ……」

「た、助け……」

「ゼロ」

『……オーライ、マイマスター……コードを』

「……伝説」

『オーライ、レジェンドガンダム起動』

俺はレジェンドになると、すぐにスーパードラグーンを射出した。

「ひっ……」

「あばよ」

俺の言葉と共に、一斉射撃が起きた。

「あがやあああああ！」

「こうして、事件は幕を閉じた。

もうすっかり夕方だ。ターナ泣いているだろうな……

「迅、今日はありがとうございました」

「いえ、逮捕できてよかったです」

主犯と雇われた男たちは逮捕。男たちは恐怖でブツブツと言っているが気にしないでおこう。

「では、これで失礼しますね」

「はい、ありがとうございました……あ、迅？」

「はい？」

振り向いた瞬間、カリムに頬にキスをされた。

「え……え？」

「今日のお礼です」

頬を赤く染め、カリムは帰って行った。このあと機動六課でターナの大泣きを止めるのに苦労した。

第七十一話「聖王教会」(後書き)

秋風「すいませんでしたー!」

迅「死ねー!」

秋風「ぐあああああああ!」

迅「とりあえず、はやくかけよー!」

秋風「今日全部更新したから許してよ!」

迅「死ね」

秋風「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

迅「それ蒼天でもやっただろー!」

秋風「ぎゃー!」

迅「次回、第七十二話『馬子にも衣装』 TAKE OFF!」



第七十二話「馬子にも衣装」(前書き)

はい、ということではホテルアグスタです。

あー・・・なんか、番外編予告して全然書けてない。当選した先生、しばらくお待ちください・・・

## 第七十二話「馬子にも衣装」

カリムとの会談から数日が過ぎた。今日はホテルアグスタに来てい  
る。

「・・・だるい」

着替えを終えた俺はため息をつく。なぜに俺が警備に回らなきゃい  
けないんだ。

『仕方ありませんよ、これも仕事です』

まあ、報酬はもらうからいいか・・・

「」「」「」迅(君)！」「」「」

そこになのはたちがやってきた。

「・・・」

いつもとは違う5人のドレス姿だ・・・アリサとすすかもすこ  
い格好だ。

「ど、どうかな迅君・・・」

「一応、選んでは見たんだけど・・・」

「ど、ど、ど、ど、ど、ど」

「ど、どごうぬ」

「どうか、迅君？」

5人がもじもじしながら聞いてきた。なので……

「馬子にも衣装……だな」

「あー！ひつどおい！」

「嘘だよ、綺麗だぜ？みんな、な」

「あうう……」

「ふふつ……」

「えへへ」

「わ、わかればいいのよ」

「ありがとう、迅君」

5人とも顔を真っ赤にする。

「ま、それはさておき、警備に行くか」

スカリエツティが欲しい骨董品はもうあげたし……来ないんだよねえ。すると、なのはが俺の腕に絡んでくる。

「じゃあ、私と警備回ろう？」

「駄目！私と！」

言いながらフェイトが反対の手に絡んでくる。

「駄目や！うちと！」

今度ははやてが後ろから手を回す。

「あ、3人ともずるいわよ！」

「そうだよ！公平に決めようよ！」

「おいおい・・・これじゃ警備できないよ」

結局じゃんけんで決める5人。勝ったのは・・・

「やった！私の勝ち」

なのはだった。

現在警備としてなのはと廊下を歩く。

「えへへ、勝っちゃった」

「なのは、警備の意味わかってる？」

なのはは俺の腕にぴったりとくっつき、離れようとしなない。

「なのは、当たってる」

そう、先ほどからののは胸が当たっている。

「当たってるの」

「………はあ」

『マスターはやはり鈍いです』

「わけがわからん……さてと」

俺たちはホールに入り、周囲を見る。

「ふむ……警備はなかなかだな」

「一応要人が来るからね……やっぱりそれなりの警備だよ」

「それに加えて俺たちがいるのか……まあ、そうとうな怪物が来ない限りはここがやられることはないだろうな」

スカリエッツィたちはともかく、問題はリメイカーだ……要人たちが集まるなら、ここを襲撃するとも考えられる。

「さて、次は裏手の警備だな……その前にトイレに行ってくる」

「うん、じゃあここで待ってるね」

こうして俺はトイレに向かい、スカリエッツィに連絡を取った。

「よう、スカリエッティ」

『やあ迅……どうしたんだい？』

「いや、お前は今日ホテル・アグスタはどうする？」

『もう欲しいものは君が提供してくれたからね、とくに襲う理由もないよ』

「そうか……」

ならなのはの魔王フラグも大丈夫そうだな。

『ただね……』

「……？」

『ここ最近、私が見つけた覚えのないガジェットがいくつか確認されているんだ』

「お前が見つけた覚えのない？」

どういうことだ？

『このまえトーレが発見した研究所でガジェットの生産がおこなわれていたんだ』

「そこでWド パントに襲われたのか？」

『ああ、そうだね。ともかく気をつけたまえ。今回そのオークシヨ

ンにはロストログアも数多くある上、管理局の要人もいる。リメイカーが来るかもしれないからね』

「ああ、わかってる」

『では『あ、ちょっとドクター！待って！』ん？』

「あれ、セイン」

『迅！とりあえず次空いている日はいつ！？』

「えっと・・・そうだな、明日から数日かな」

『なら急いできて！チンク姉が迅に会いたくて悶えてるから！あとウーノ姉も！』

こうして通信が切れた。

『マスター・・・とりあえず近日中に行ったほづがよそそつですね』

「・・・そうだな」

トイレを出て、なのはのところに戻る。

「お待たせ」

「うん。じゃあ裏手に行ってみようか」

「ああ、そうだな・・・」

こうして、俺たちは警備を続けた。

エレナside

今回私は外の警備・・・まあ、あんまりにも楽で退屈ですけど。ガジェットは来ないでしょうし。それよりも・・・

「リインフォース、いつまで不貞腐れてるんですか」

中に入れず外警備に回されたことで、ずっといじけてのの字書います。

「うう・・・ずるいです・・・私だってドレス着て迅と・・・」

「はいはい、今度用意してあげますから・・・」

「うう・・・!?!?」

「どうしました?リインフォース?」

「何か、来る・・・シャル!」

『ええ、確認したわ!ガジェットよ!』

来ましたか・・・しかし、何故でしょう・・・

迅side



ん？通信？

「どうした、リインフォース」

『大変です、ガジェットが攻めてきました！』

「・・・わかった」

はあ、リメイカーの連中、本当にきやがった。

「なのは、中は頼む」

「うん、任せて・・・・・・迅君」

「ん？」

「気をつけて・・・」

「ああ、わかってる」

こうして、俺は走って外へと向かった。

エレナside

このままだとティアナがまた無茶をしますね・・・

「フォワードは下がって、私とリインフォースの支援をお願いします  
す」

「「「はい!」「」」

「行きますよ、リインフォース!」

「ああ!」

私達はそのままガジェットを潰し、戦います。ですが、なかなか手ごわいですね。私はディエンドライバーを手に取り、カードを取り出します。

『KAMEN RIDE』

「変身!」

『DI END!』

「「「えええええええ!?!」「」」

フォワードが驚いてますね・・・まあ説明は面倒なので後にしまし  
よう。

「これでっ!」

『ATTACK RIDE BLAST!』

ガジェットたちを撃ち、破壊します。これならいけますね

「はああっ!」

リインフォースもそのまま攻撃し、ガジェットを破壊。

「フォワード、援護を頼む！」

リンフォースの言葉に呼応して、スバルたちが動き始めました。

「でええええい！」

「クロスファイア・・・」

「待つてくださいティアナ！この斜線上ではっ！」

「行けます！シュート！」

私の忠告聞かず、ティアナがクロスファイアを発射しました。そして・・・

「避けなさいスバル！」

「え！？」

「あ・・・・・・・・」

原作通り、スバルに向かってクロスファイアがスバルにぶつかりました。

「スバル！」

「スバルさん！？」

「たっく・・・しょうがねえなあ・・・」

煙が晴れ、スバルは無事でした。そこにいたのは、タキシードをボロボロにした迅の姿でした。

迅 side

あーあー・・・せつかくの服が・・・

「スバル、大丈夫か？」

「は、はい・・・・・・・・・・」

「ティアナ！この馬鹿！味方撃つてどうするんだ！」

ヴィータ、いつの間に・・・

「ヴィータ副隊長、今はその、作戦の内で・・・」

「直撃コースだよ、このタコ！もういい！後はあたしらでやる！ひっこんでろ！」

「はい、ヴィータストップ」

「何すんだよ、離せ！」

俺は暴れるヴィータを抑える。

「いいから・・・残った奴らをせん滅する。西方面に多数だ。頼んだぞ」

「・・・おう」

ヴィータが頷き、飛んで行った。

「ほれスバル。裏手頼むぞ」

「・・・はい」

元気ないなー・・・まあしょうがないか・・・ん？

「あれは・・・」

そこにいるのはひと組の男女だった。

「お前達は・・・」

「あら、久しぶりね・・・」

「・・・」

「メリーか・・・」

そこにはメリーと、男がいた。リメイカーの幹部つてところだな、こいつら。

「さあ今日は遊んでもらいましょうか？」

「何？」

すると、男がガイアメモリを取り出した。あれは……！

『WEATHER!』

「なっ!？」

男が耳にウエザーメモリを入れて、ウエザード パントへと変身する。凄まじい殺気が周囲を支配し、フォワードがおびえた。そして

「う、うわあああ!」

「よせティアナ!」

ティアナがクロスミラージュを向け、撃ち放った。

「う、おお……」

ウエザードパントは動じず、雷を撃ち放つ。

「……わあああああ!」「……」

「っく!」

ティアナをかばい、そのまま距離を取った。

ACCEL!

俺はアクセルドライバーを取り出し、アクセルメモリを起動させる。

「変、身!」

ACCEL!

仮面ライダーアクセルに変身して、エンジンブレードを取り出す。

「はあっ!」

「う、おお」

「ぐっ!」

こいつ、強い!

「あはははっ!どう?その人形は!」

「人形だと!??」

「そうよ、それはただの一般人。そいつを殺して人形にしたのよ!

「外道が・・・」

「何とでもいいなさい・・・さあ、私の『記憶』を宿した人形よ・・・  
やりなさい!」

「ぐおおおっ!」

「ぐあっ!」

「迅!」

S K U L L !

「変身！」

リインフォースがスカルに変身して、躍りかかる。

「はあっ！」

「うっごおお！」

雷と嵐が発生し、俺たちは吹き飛ばされる。

「うわっ！」

「ぐっ！」

俺たちは地面に叩きつけられる。

「リインフォース、下がってる。お前は、ガジェットを頼む」

「わ、わかりました……」

「エレナも頼む」

「ええ、わかりました……」

こうして、俺はウエザード パントと対峙する。

「安心しろ、今救ってやる……」



「あら、できるの？是非ともやって欲しいものだわ」

「……………全て、振り切るぜ！」

TRIAL！

俺はアクセルメモリを抜き去り、トライアルメモリを入れてレバーを回した。

TRIAL！

音が鳴り、黄色くなる。そして装甲が蒼くなった。

「はあああっ！」

超スピードで走り、ウェザード パントを蹴り飛ばした。

「う、っ！おお！」

「何！？」

「はあああああああああっ！」

蹴りを連続で入れる。そして吹き飛ばした。

「ぐぐぐうう……………」

「つく！何をしているの！あの機械人形に勝った時のように見せな  
なさい！」

「やっぱりトーレを襲ったのはお前だな・・・なら、許さない！」  
俺はトリアルメモリの形を変えた。そしてボタンを押して走り出した。

「おおおおっ！」

ウエザード パントが攻撃をしてくるが、それを避けて蹴りをかます。

「おおおおおおおおおおおおっ！」

しだいに連続の蹴りが丁の形を作る。

「おおおおおおおおおおっ！」

「ぐあああああああっ！」

「はあああああああっはあっ！」

蹴りを終えて回転すると、落ちてきたトリアルメモリを取り、タイムを止めた。

TRIAL! MAXIMUM DRIVE!

「9.8秒・・・それがお前の絶望までのタイムだ」

「ぐおおおおおおっ！」

ウエザード パントが爆発し、そのまま灰になって消えた。元々死

体だったからだろう。

「っく・・・これで勝ったと思わないことね」

そう言っつてメリーは消える。

「逃がしたか・・・」

他のガジェットたちも破壊し終え、この戦いは幕を閉じた。

第七十二話「馬子にも衣装」(後書き)

秋風「ということで、リクエストのアクセルトリアルでした!」

迅「ウエザーあっけなかつたな」

秋風「いいじゃん、Wでもあっけなかつたから」

迅「まあそうだけどさ」

秋風「それより聞いた? Wもうすぐ終わるらしいよ」

迅「ああ、次はオーズだつて」

秋風「000つて・・・ファイズか」

迅「それ以前にオーガじゃね?」

秋風「それは言わない約束で」

迅「とりあえずまあ、これからもライダーは愛していきます」

秋風「次回はとうとう・・・」

迅「ああ、来るな・・・魔王が!」

なのは「魔王じゃないもん!」

迅「次回、第七十三話『魔王はどこまで行っても魔王』TAKE

OFFICE

**第七十三話「魔王はどこまで行っても魔王」(前書き)**

はい、ということと魔王降臨の回です。

今日はちょっと多めに構想を練ったのですぐに出せるかもです

最近ライダーばかりでごめんなさい。Fateファンのみなさん、  
ちょっと待ってくださいね？あとネギま！ファンも

ではどじろぞw

第七十三話「魔王はどこまで行っても魔王」

「さてなのは、俺が呼び出した理由わかるか？」

冒頭から俺はなのはに正座させています。

「……あの、迅君？」

「なんだ」

「なんで私、正座させられてるのかな」

来て数分からなのはが俺に言ってくる。

「今日のティアナの暴走……わかってるだろ」

「それは、そうだけど……」

「お前、俺が言ったように自分が教導にかける理由を話してないな？」

俺の言葉に、なのはがビクっ！と体を震わせた。

「それは、その……」

「あれはそう、海鳴から帰ってきてすぐだったよなあ……あれからどれくらいだった？」

「えと……2週間」

その瞬間、俺の何かがキレた。

「お前はその2週間何やってたんだこらあー！」

俺は思いっきり頬を両方から引つ張った。

「いふあい！いふあいよじんぶん！（痛い！痛いよ迅君！）」

「飾りか？この口は！ええ！？」

「いふあい！いふあいってふあ！（痛い！痛いってばー！）」

俺はばちんつ！という音を立てるように引つ張ってから離れた。それによってなのはが涙目になりながら頬をさすっている。

「あつう……ひどいよ……」

「ったく……お前はなんでそういつも行動で見せよつとする」

「だって……」

「口で言わなきゃ、わからないことだってあるだろ」

「……」

すると、なのはが俺に抱きつく。

「じゅん、なぞい……」



「まったく・・・変わらないな・・・お前は昔っから」

「あう・・・」

俺は静かに、ソファアの上でその上に乗るのを引き寄せ、少しひつつける。

「お前はいつもそつだ。勝手に一人で貯めこんで、周りを見ない」

「・・・」

「どうせ、訓練しているうちにわかってくれると思っただらろ？」

「・・・うん」

ま、ここは原作通りだよな・・・まったく、人の努力も知らないで・・・

「とりあえずティアナとは話し合え・・・じゃねーとあいつ、本当に壊れるぞ」

「・・・うん」

「まったく、お前は手間がかかる幼馴染だよ」

「迅君」

「ん？」

俺が顔を向けると、なのはが唇を重ねてきた。

「ん……」

「……ふ、あ」

しばらくして、離れる。

「お前なあ……」

「にやはは、いつもありがとう迅君」

「このバカたれ」

俺はデコピンでなのはのおでこを弾く

「あつう……」

「ま、わかればいいんだよ、わかれば」

俺が言うと、なのはが笑みを見せる。くっそ……14年も一緒にいるのにこの笑顔にはいつもノックアウトされそうだ。

「えへへ……実はね？今日はフェイトちゃんとはやてちゃんいないの」

「それで？」

「アリサちゃんとすずかちゃんは一時的に帰省だし、シグナムさんは出張でリンフォースさんはメンテナンスでデバイスルームから出れないし」

「だから、なんだよ・・・」

やばい、まさか？

「一緒に寝よ？」

「っ！」

上目遣いに抱きつきは卑怯だる畜生・・・

「駄目？」

「っ・・・す、好きに、しろ」

あそこまでされると理性が吹き飛びそうになる。やばいな・・・

「待ちなさい！」

すると、リインフォースが飛び出してきた。

「あれ？お前メンテナンスじゃ・・・」

「そんなもの急ピッチで終わらせました！高町なのは！あなたの思うとおりにはさせません！」

「む・・・」

結局、この日は右になのは、左にリインフォースが寄り添い、眠ることとなった。

翌日

「エレナ、ティアナの説得は？」

「一応、するにはしたんですけど・・・」

ティアナのあの様子だと、聞いてねえな・・・

「あーあ、やだやだ」

そして、運命の瞬間が訪れる。

「少し・・・頭冷やそうか」

「怖っ！」

3期のアニメを見た時はそうでもなかったが、実際に聞くととんでもないな・・・てか

「なのはやつ話をしたんじゃないのかよ」

「迅、それより早くいかないと・・・」

しょうがねーなあ・・・

「行くぞ、リインフォース」

「はい、迅」

CYCLONE!

JOKER!

「「変身」」

久しぶりの仮面ライダーWとなり、ウィングロードの上に降り立った。

「おいなのは・・・お前何してんだよ」

「・・・迅君、どいて?」

「・・・ティアナと話したのか?」

「したよ・・・でも、聞いてくれなかった。だから・・・」

力で叩きのめすってか?

「おいティアナ、どういうことだ」

「そ、それは・・・」

多分、言い方が悪かったのか?

「まあいい・・・もうよせなのは。これ以上戦闘は「アクセルシュ  
ーット!」「なっ!」」

「どいて迅君・・・じゃないと、迅君にも頭冷やしてもらおうの」

「結局こうなる運命か・・・しゃあねえ、行くぞリインフォース」

「仕方がないですね・・・わかりました」

ティアナの前に立ち、メモリを取り出す。

TRIGGER!

CYCLONE! TRIGGER!

メモリチェンジし、トリガーマグナムで残りの魔力弾を撃ち落とすた。

「おいティアナ、お前なのはに何を言ったんだよ」

「えっと、それは・・・その・・・」

「まあいい・・・今は隠れてろ」

「迅！来ますよ！」

「わかってる！」

HEART!

HEART! TRIGGER!

ヒートトリガーとなってトリガーマグナムを撃ち放つ。

「つく！ダイバイン！」

「ちいっ！」

TRIGGER！MAXIMUM DRIVE！

「トリガー！エクスポージョン！」

ダイバインバスターとトリガーエクスポージョンが激突する。

「っち！」

爆発が起き、煙が巻き起こる。つくそ！

「迅、エクストリームを……！」

「ああ、いく」させないよ！」「何！？」

煙の中からアクセルシューターが飛んでくる。つく！

「エクストリームの力は知ってるよ？私が出させると思っっ？」

「つく！やってくれるじゃねえか……」

「頭、冷やそうね……」

魔力が集中する。げっ！

「スターライトブレイカーだと！？」

やばいな、Wは愚か・・・仮面ライダーじゃ対抗できねえぞ・・・  
ガンダムになる時間もないし、宝具で防ぐ暇はあっても、織天覆う  
七つの円環ロー・ファイアスじゃあスターライトを防ぎきれるかどうか・・・  
ん？あつたよ、一つだけ相殺できるのであるう技が・・・あれ  
やりたくないけど、もう手がないんじゃないあ・・・

TRIGGER! MAXIMUM DRIVE!

「迅！？わかつているんですか！？エクスプロージョンでは勝てませんよ！？」

「わーってるよ・・・だから・・・」

言いながら、ヒートメモリを抜いた。だが、リインフォースが自らの意思でヒートメモリを持った左手を抑えようとする。

「ま、まさか！？駄目です！これは使えないと！自分で言っていたじゃないですか！」

「もう、これしか手はねえんだ！仕方ねえだろ！ティアナ！」

「!？」

俺が叫ぶと、ティアナがびくりと体を震わせる。

「よく見ておけ、無理した人間がどうなるか」

「え!？」



俺はリインフォースの手を払いのけて、ヒートメモリを右側のソケットに差し込んだ。

H E A R T ! M A X I M A M    D R I V E    M A X I M A M  
D R I V E    M A X I M A M    D R I V E    M A X I M A M    D R  
I V E    M A X I M A M    D R I V E    M A X I M A M    D R I V  
E    M A X I M A M    D R I V E    M A X I M A M    D R I V E  
M A X I M A M    D R I V E    M A X I M A M    D R I V E !

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

俺の体が燃え上がる。ティアナと遠くにいるスバルは驚いている。まあ、当然だろう。そして、俺はトリガーマグナムを握りしめたまま、そのヒートメモリが入ったソケットを叩いた。そして銃口を向ける。

「スターライト！ブレイカー！」

「はああああああああああっ！」

暴走したツインマキシマムによって、その火力を宿した砲撃が発射される。そしてスターライトブレイカーとぶつかり、爆発が巻き起こった。

なのは s i d e

い、今のはいったい！？うっん、そんなの関係ない・・・今は迅君とティアナに、頭を冷やしてもらっただけ・・・

「見つけた・・・レイジ・・・！！？」

煙が晴れて、迅君の・・・仮面ライダーWの姿があった。でも、体は炎が残っていて、ふらふらしている。そして、風が巻き起こって迅君の変身が解けた。メモリが音を立てて落ちた。迅君の体は傷だらけで、血まみれだった。そ、そんな・・・私、ちゃんと非殺傷で・・・

「迅！」

リインフォースさんがすごい慌てている。

「迅！しっかり！ヴィータ！すぐにシャマルに連絡を！このままでは危険だ！」

「お、おう！」

「エレナ！早く治療を！」

「わかってます！でも、メモリの反動は私の力でも手の施しようがないんです！」

手の施しようがない？それって・・・死・・・？

「いや・・・」

私のせいで・・・私が、もっとちゃんとティアナと話していれば・・・そんな、私・・・私・・・

「いや・・・いや・・・いやああああああああああああ

あっ！  
「

私は目の前が真っ暗になった。

第七十三話「魔王はどこまで行っても魔王」(後書き)

秋風「はい、ということでツインマキシмумでいた」

迅「おかしいだろ！危ないってわかっててやるとか！」

リインフォース「そうだ！ツインマキシмумだって外伝でちゃんとやっただろう！」

秋風「いやー・・・もとからこのつもりだったりして？あのかっこいいシーンを再現したのが本音かな」

迅「ざけんなあ！」

秋風「ぎゃああ！」

リインフォース「で？次回はなんなのだ？」

秋風「読者が気になっていたのであろう、なのはがキレた理由」

迅「早くかけよ。そして俺はどうなる」

秋風「どうなると思っ？」

迅「・・・さあな」

秋風「まあ、お楽しみに！」

迅「次回、第七十四話『力を求めても、得るものより失うものの方

が大きい  
『 TAKE OFF! 』

第七十四話「背中」(前書き)

とりあえず深夜更新が目立ちます(汗

しっかり更新していきますのでよろしくですw

## 第七十四話「背中」

エレナ side

とりあえず訓練は中止で、迅は今医務室で眠っています。

「パパ・・・」

ターナは心配そうに迅を見ています。やれやれ・・・

「あの、シャマル先生・・・迅さんは・・・」

「とりあえず・・・一命は取り留めてるわ。ただ、メモリの能力を二つ以上使用してるから」

「メモリの反動は医学では治せない。迅の気力しだいでしょうね・・・」

「そつえば、高町なのははどうした？」

「一応、部屋で休ませているわ・・・本人のせいでないにしろ、こうなったのを攻めてるみたい」

やっぱりそうでしょうねえ・・・さて、どうしたものでしょうか。まず、原因説明からが妥当でしょうね。

「ティアナ」

「あ、はい・・・」

「なのはさんの話を聞いたそうですね？」

「はい……」

何故でしょうか……原作なら教導にかける理由を聞けば、ティアナは理解したはずなのに

「何故、なのはさんの言うことを聞かなかったんですか？」

「私は……私は、なのはさんの教導にかける気持ちはわかりました。でも、自分で納得が、できなかつたんです」

ティアナは静かに、私達に語りだしました。

回想開始

ティアナ side

「……というわけなの」

いきなりなのはさんに呼び出されたと思ったら。私が無理しているのを見破られていた。そして教えてくれた。一人で頑張ることが、一番ではないことを

「どうかなティアナ……私とかならともかく、スバルやエリオ、キャロ……フォワードのみんなを、そんなに信用できない？」



「……………私は……………」

「私はね？別にティアナを否定してるわけじゃないの……………でも、みんなでやればきつと、ティアナは強くなれる」

「……………」

私はただそれを聞いて、ひとつだけ思ったことがあった。そしてそれは、今の私の奥底に秘めていたものでもあった。

「じゃあ……………迅さんは、どうなるんですか？」

「え？」

なのはside

いきなり何を言い出すかと思えば……………迅君が、どうしたんだろう。

「迅君が、どうしたの？」

「迅さんは、なんでもできて、すごい力まで持ってます……………それはこの前見ました」

ガンダムとか仮面ライダーは確かにすごいけど……………

「あの人はすごい力を持って……………いつも、一人で戦ってます」

「それは、そうだけど……………でも、迅君は……………」

「あの人は！いつも、いつも強くて！それがうらやましくて！追いかけて目標なんです！」

「テイ、ティアナ・・・？」

「いったい、何が言いたいの？」

「私は・・・私は確かに兄の後も追っています。でも！でも私は・・・迅さんを追いかけて・・・」

「え・・・・・・」

「迅さんのように強くなって！あんな風に戦いたい！そしてあの人もみたいに一人で戦ってる人の背中を守りたい！」

「ティアナ・・・・・・」

「あの人の背中を・・・あの人を守るためなら、私は・・・私は無理だつてしてみせる！無理をしても強くなって、あの人に振り向いてもらいたい！だからっ「ティアナ！」！？」

私は思わず叫んでしまった。ティアナが言うことは間違ってるわけじゃないでも、それでも納得ができない。

「迅君が・・・ティアナを見てくれない？そんなことない！」

「そんなはずないです！あの人はいつも先だけしか見てない！だから、だから私は・・・」

ティアナはもう、完全に私の言ったことを否定していた。私達を信

じていても、どれだけ信じようとも、迅君が本当に振り向くまで・・・  
きつとティアナは無茶をやめない。

「だから、強くなりたいんです！」

「あ！ティアナ！」

ティアナが走って行ってしまった。その瞬間・・・

大丈夫なの！私が、私が行く！

「っ！」

もうずいぶんと昔のことを思い出した。私はただ、ティアナを見る  
ことしかできなかった。

回想終了

なのはside

「私・・・間違ってたのかな」

部屋で一人、ベッドの中で呟く・・・

「私、どうすればよかったの？教えてよ・・・迅君」

私はただ一人・・・ひたすらそれを考えていた。

エレナ side

「なるほど・・・ね」

「・・・」

ティアナは話終えて、だんまりになりました。まあ、それはそうでしょうね・・・

「ティアナ・・・」

「・・・はい」

「貴方は、迅のことを少々勘違いしているようです」

「え？」

もう少しだけ、彼について話す必要がありそうですね・・・

「迅は確かに、すごい力を持っています。それこそ、この世界を得てしまうような」

「・・・」

「でも迅はそんなことはしません・・・どうしてかわかりますか？」

「どうして、ですか？」

「貴方達のためですよ」

「え？」

ティアナがびっくりして私を見ました。まあ、そうでしょうね……

「迅はいつも、貴方達がどうすれば強くなれるか……そんなことを考え、訓練メニューを組んでいました。なのはさんを休ませては、何日も徹夜してメニューを作っていましたよ」

「でも、それはスバルたちだけであって……私には……」

「それはありえませんか」

「どうしてですか！」

「迅は、人に差別をするのが苦手ですから」

そう、迅が女性に対して鈍いのはこのためでもある。誰か一人だけを特別視したり、逆に差別したりはできない。

「まあ、それでも……」

続きを言いかけて、アラートが鳴り響きました。

『八神部隊長！ガジェット及び、アンノウンが町を襲っています！  
レリックの反応もあり』

「なんやてっ！？」

映像が現れ、私は驚きました。これは……

「グロンギに、オルフェノク、ワーム！？それにあれはパンテオン・  
まさか、リメイカー？」

「急いで出撃や！なのはちゃんは・・・」

「私が呼んでくる！」

そう言っつてフェイトさんが走りだしました。

「シヤマル、迅君頼むで！」

「はい、はやてちゃん」

こうして、私達は出撃することになりました。ここで違うのは、テイアナも出撃に加わること。そして、なのはさんもちゃんと出撃していることです。二人ともあれがあればぎくしゃくもしますね・・・  
迅がなんとかしてくれるといいんですけど・・・

なのは side

「じゃあ、行くよー！」

「」「はい！」「」「」

「・・・はい」

とりあえず気を引き締めなきゃ・・・ティアナのことは後だね・・・  
じゃないと、迅君に笑われちゃう・・・うん、行くしない！

「仕方ありませんね……ワームの相手なら……」

あれって確か……

「変身っ！」

H E N S I N

蒼い装甲……確か、ガタツク？

「キャストオフ！」

C A S T O F F C H A N G E S T A G B E E T L !

「リインフォースはそのままで大丈夫、行きますよ！」

「ああっ！」

二人が怪物を迎え撃つ。

「フォワードはガジェットを！私とフェイトちゃんであの機械人形を倒すよ！」

「うん！なのはー！」

「」「はい！」

戦闘開始になり、私達は魔法を放つ。

「アクセル……シュート！」

「サンダーレイジ！」

機械人形は大したことがない・・・あれ!?

「ティアナ!？」

ティアナが独断先行して、ガジェットを乗り越えてグロンギに襲いかかる。

「でえええいつ！」

「ティアナ駄目！」

私は急いでティアナのところへ向かう。

「がああああっ！」

「がはっ！」

「ティアナ！」

私は殴られて飛んできたティアナを受け止める。

「なのは・・・さん」

「大丈夫?ティアナ」

「は、はい・・・」「があああっ!」「!?!?」



「つく！撤退を・・・しまった！」

ガジェットがいつの間！？AMFが強すぎる！つく！ティアナだけでも逃がさないと！・・・私が教導にかける理由のためにも！死なせたくない！

ギユアアアン！

「「！？」」

突然、恐竜のような機械が、グロンギを吹き飛ばした。そして跳躍して、リインフォースさんの手に乗った。そしてその機械の恐竜が変形して、一つのメモリが姿を現す。

FANG！

「行きますよ！マスター！」

機動六課医務室

迅side

「ああ・・・リインフォース！」

俺はジョーカーメモリを取り出す。

「ちよつと迅君！？」

「パパ！？」

「ああ、ちょっと行ってくる」

JOKER!

「変身！」

こうして、俺は一時的に気を失った。

ミッドチルダ クラナガン

なのはside

FANG! JOKER!

変身音が鳴り響き、リインフォースさんがWになった……じゃあ、もしかして……

「迅君……目が覚めたの!？」

「ああ、この通りだ」

「迅さん……」

「おうティアナ、無事みたいだな」

迅君……

「私も驚きました。大丈夫なんでしょうね?」

「ああ、だが早く休みたいから早く頼む」

「了解です」

すると、リインフォースさん・・・Wが手で何かを押した。

A R E M F A N G !

「さあ、行きますよ迅!」

「わかってるよ、行くぜ!」

Wは駆け出し、再び敵に向かって行った。

迅 s i d e

つたく・・・グロンギ、オルフェノク、ワーム・・・それにパンテオンか・・・面倒だったらありやしねーな・・・

「リインフォース」

「ええ、わかってます」

S H O U L D E R F A N G !

ショルダーファングをつかみ取り、それを投げる。よし、効いてるな・・・それにワームはエレナがなんとかしてる。後はあそこにいるガジェットか・・・独自の装甲か・・・なら

「一気に行くぞ」

「ええ！」

FANG! MAXIMUM DRIVE!

「なのは！ティアナ！行くぞ！」

「う、うん！ディバイン！」

「は、はい！ファントム！」

そして、俺が飛びあがり、マキシマムドライブを発動させた。

「ファングストライザー！」

「バスター！」

「ブレザー！」

ディバインバスターとファントムブレイザーで装甲が崩れ、そこへファングストライザーが叩きこまれる。それによってガジェットは崩れ、グロンギ、オルフェノク、ワームもせん滅した。

俺は隊舎で目を覚ました。なのはとティアナが涙を流して抱きついてきたのは無理もない。なのはから事情を聴き、俺はティアナと二人でいる。

「・・・なるほどな」

事情を聴き、俺はため息をついた。結局のところ、俺が変なプレイクをしたってことか。

「すみませんでした・・・」

「はぁ・・・まあお前の気持ちもわからんでもない。だが一つ訂正させる」

「え？」

「俺は、お前を見なかった日はねーぞ」

言つと、ティアナが驚いた顔になる。

「お前だけじゃねー・・・スバル、エリオ、キャロ・・・大切な仲間、部下で、そして・・・未来を担うストライカー・・・そんなお前達を、見ないわけないだろ」

「迅、さん・・・」

俺は苦笑しながらティアナの頭をなでる。

「今までちゃんと言ってやれなくて悪かったな、ティアナ。オメーに俺の背中、預けるぜ」

「うっ・・・ひっ・・・う、うわああああん！」

いきなり抱きつかれ、傷がやばい・・・だが、まあ大丈夫だろ・・・

う

「よしよし……ったく……」

「うっぐ、えっぐ……」

「ティアナ、悪い……離せ」

「え？」

「き、傷が……」

やばい、腹の傷が……傷……が

「じ、ごめんなさい！ごめんなさい！」

「はあ、まあ大丈夫だろうな……とりあえず今日は寝るか。お前も部屋に戻れ」

「嫌です」

「は？」

言つと、ティアナが俺のベッドに入ってきた。

「お、おい？ティアナ？」

「お願いです……今日だけ、今日だけ、一緒に……」

あー……駄目だこりゃ。てこでも動かない。

「わかったよ、今日だけな？」

「・・・はい、兄さん」

「え？」

何？これ・・・ティアナの兄フラグ？

「だめ、ですか・・・？」

「わーったよ・・・好きに呼べ」

「うん・・・兄さん」

こうして、魔王の話は終わった。翌日シヤマルに発見され、それを知ったはやてがなのは、フェイト、リインフォース、シグナム、アリサ、さすがに「お話」をしに来たのと言つまでもない。おかげで俺の怪我が増えたのも、言つまでもないだろう。

第七十四話「背中」（後書き）

秋風「さーせんでした・・・Wが2週連続です」

迅「結局ティアナフラグかよ」

秋風「とりあえずね、Wのこの2つはどうしてもやっておきたかった」

迅「なんで？」

秋風「もう2ヶ月も前に思いついたから！」

迅「それはお前の都合だろうがあああ！」

秋風「ぎゃあああああ！」

迅「どうすんだこれ！Wを・・・ってか、仮面ライダー知らない読者おいてけぼりだろ！」

秋風「いいじゃねーか！大丈夫だよ！」

迅「何が!？」

秋風「ティアナにフラグが立ったから！」

迅「言いわけあるかあああ！」

秋風「ぎゃあああああ！」



迅「ったく・・・すみませんみなさん・・・で、次回からあいつが出てくるんだろ？」

秋風「おう、一応な」

???「楽しみにしていたまえ」

秋風「あくまで???でした」

迅「大丈夫かよ」

???「さあな」

秋風「次回もお楽しみに！」

迅「次回、七十五話『しょうがないじゃん、だって俺だもの』TA  
KE OFF！」

第七十五話「しょうがないじゃん、だって俺だもん」(前書き)

とりあえずあいつが登場です。シリアスのようにギャグです。

第七十五話「しょうがないじゃん、だって俺だもん」

とりあえず戦いから一日が経過。チートな回復力を持ってして治るのは4日だそう。とりあえず今日は静かに過ごせそうだ……

「すーすー……」

ターナは俺が怪我をしてから全く離れない。

「とりあえずサプライズなことが起きて欲しいもんだ」

どーせこの後ヴィヴィオが出てくるんだろうけど……うん、なのはに押しつけよう。

「はぁ……暇だ」

鳥が鳴き、心地よい風がすり抜ける。よし、別荘に行こう。4時間経てば完治だつてする。うん、そうしよう！

「（エレナ）」

「（なんですか迅？）」

「（別荘持ってきて）」

「（ああ、別荘ならなのはさんたちに没収されました。）」

「はあっ！？なんで!？」

「( ) どうしてそうなった! ? 」

「( ) これがあると迅がすぐに完治するからだそうです  
いいじゃん! すぐ体治るの!

「( ) まったく、あなたは相変わらずですね……まあ、あきらめなさい」

なんだそりゃ……はあ……暇だ。

「コンッコンッ!

「ああ、どござー? 」

「迅ー! 」

「ぎゃああああああああつ! 」

いきなり誰かが抱きついてきた。小柄で銀髪で眼帯の少女……これ  
れは

「チンク!? 」

「迅! 大丈夫か!? 痛いところはどこだ! ? 」

「とりあえず、お前に今飛びつかれたのが一番だな……」

俺はよろよると起き上がり、チンクを下す。

「お前、どうしてここに？ドゥーエはどうした？」

ドゥーエならまだしも、なんでお前？

「何を言ってる、ドゥーエならそこだ」

後ろに手が回された。

「ドゥ、ドゥーエ……」

「久しぶりね迅……今日のあなたは無防備……今夜が楽しみだわ……」

怖ええ！

「いらドゥーエ、あなたいい加減になさい」

「おい……さりげなくなんでウーノまでここにいるんだよ」

これでトーレとかクアットロがいたらシャレにならん。

「むっ、どうかしたか？」

「あらあ、呼びましたー？」

もう嫌だ……俺は頭を抱える。

「お前らどっつしてここに？」

「どろろしてって……」

「ドクターの護衛だぞ」

「……は？」

「はっはっは！久しぶりだね迅！」

「スカリエツティイ！」

突然シルバーカーテンで登場したスカリエツティを殴り飛ばす。

「はっ！」

「なんでお前が機動六課（六課）にいるんだよ！」

「何故って、君が誘ったんじゃないか」

「そうじゃねえ！アポくらいとれや！」

「エレナという女性には取ったはずだが？」

あの女……

「まあ、君を驚かせるついでに、君を治療しようと思ってね。

「……腕をドリルに変えたら殺すぞ」

「わ、わかってるよ……」

やる気だったなこのやるう。

「おい、まだフェイトの説得もはやてへ言うことも終わってないぞ」

「そうなのかい？」

「見つかったら大変だからすぐに帰れ」

「友達にそういう言い方はひどくないかい？」

友達以前にお前はまだ犯罪者だろうが！

「お前どんだけ余裕かましてんだよ」

「いやー・・・楽しい研究が充実しててねえ、楽ったらありゃしないよ」

こいついつの間にも笑顔を出すようになった？まあいいとして・・・

「とりあえず白衣脱げ」

「何故だい？」

「ターナが怖がるから」

「仕方ないね・・・」

スカリエツティが白衣を脱ぐと、通行人Aに見える。

「で、お前らはお前らでおしゃれか」

普段はウーノは原作と同じだが、今日は黒いワンピース。ドゥーエはいつも通りの地上本部の制服。トールは何故かスーツで、クアットロは似合わない白いワンピースだ。そしてチンクは超がつくほどのゴスロリ服だったりする。

「ちょっとお！私の扱いひどくありません!？」

「クアットロ基本DSだけど、お前Mだろ」

「ひどおい！ドゥーエ姉様なんとか言ってく下さいよお」

「あら、違ったの?」

「ええ!？」

なんていう話をしていると、なにやら足音がした。

「迅、起きてる?」

「一番来てはいけない人が来たー！」

「おい、この場合どうする?」

「二人きりならベッドの中だけど、これだけじゃ無理でしょ」

「シルバーカーテン使ったらばれちゃいますよ?」

「私は男と寝る趣味はないよ?」



「んな冗談言ってる場合じゃねーんだ・・・」

ガラア

声の主、フェイトがドアを開ける。そして訪れる静寂

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ガラッ

扉が閉まり・・・そして

「スカリエッティ！」

フェイトがBJを纏って扉を開け、バルディッシュを向ける。

「フェイトま「動かないほうがいいねえ」は!？」

スカリエッティが俺の首に手をまわして、ナイフを向けた。

「卑怯な！」

「けが人を死人に変えたいかい？」

「つく・・・」

俺はこの状況で、ぼそぼそと話す。

「（お前、どういづつもり？）」「

「（いやぁ・・・あそこまでなると思わなくてね、こういづつのも楽しそうだろ？）」「

よく見れば、ウーノ達は必死に笑うのを我慢している。よほどのスカリエッティの行動が面白いんだろう。

「さあ武器を捨てたまえ、フェイト・テストロッサ（棒読み）」「

「つく！」

おいおいおい、捨てるのかよ

「それと、そこに隠れている人間たちもだ（棒読み）」「

なのはたちもいた。あーあー・・・もう機動六課の主力集まってるじゃん。ん？

「（リインフォース？）」「

「（つく・・・くくく・・・はやてもそうだが、なのはたちも本気になっている。これは、おもしろすぎる）」「

お前もかいっ！

「さて、役者は揃ったようだね（棒読み）」「

「スカリエッティ！ここに何の用や！」

はやてが切れる。そりゃそうだよな……こいつ捕まえるための組織なのに

「はっはっは！今日は遊びに来たのさ（本音）」

「ふざけるなっ！次元犯罪者が遊びにだと！」

シグナムが前に出ようとしますが、リインフォースに止められる。あいつもう笑ってないか？

「あなたの望みは何？」

「そうだね、この彼を頂こうか（棒読み）」

「そうそう、迅は私達のも物ですね……（本音）」

おいウーノ……声がマジなんだけど

「じ、迅は渡さないわよ！」

アリスの声が若干震える。次元犯罪者を前に恐怖があるのだろう。

「さて、では……彼を殺そうかね」

「なっ!?!」

「せっかくだ、君たちの前で解剖してあげよう」

「やめてえ!」

なのはの声にも関わらず、スカリエッツィは俺にナイフを振り下ろした。そして赤い液体が飛び散った。一同呆然・・・そして

「スカリエッツィイイ！」

フェイトとシグナムが涙を流しながらスカリエッツィに斬りかかった。

「トーレ」

「はい」

トーレがフェイトの攻撃を防ぐ。

「（おい、もういいだろ）」

「（そうかい？私はもう少し遊びたかったんだが）」

「んなこと言ってる暇あるか・・・」

「・・・え？」

俺は首のところにをさする。

「おいスカリエッツィ！この血糊どうにかしろよ」

「すまないね、演出を盛り上げるためさ」

「ほら迅、これを使え」

「サンキューチンク」

なんて、何事もなかったようにことを進めている。すると・・・

「これ、どういこと?」

ようやく落ち着きを取り戻したはやてが恐る恐る俺に尋ねる。

「ああ、こいつの遊び」

「はっはっは、どうだったかね?私の演出は」

演出っていうか、原作だったらこんなことあるんじゃないの?

「そ、そうやない!なんでスカリエッティと迅君がそんなつるんどるんや!」

「言ってなかったか?俺とスカリエッティは友達だぞ」

『はあああああああつ!?!?』

一同が驚きの声を上げる。

「しょうがない、順を追って説明しよう。なのは、別荘持ってこい

「う、うん・・・」

「で、アリシア・・・プレシアさん呼んで、フェイトはバルディッシュを構えるのやめろ」

「でも……」

「今のこいつらに、戦闘の意思はねえよ」

「わかった……」

武装を解いたフェイトだが、警戒をやめることはない。

「うー……」

「おはようターナ」

「パパ、どうしたの？」

「なんでもないよ。今から遊びに行くから着替えておいで」

「はい」

ターナが着替えに出ていく。

「はやて、話をするのは隊長クラス、副隊長クラス、フォワードと……そうだな、アリシアとアリサとすずかだ」

「わかった。みんな仕事に戻ってや」

こうして他の奴らは退散した。

「迅君、持って来たよ」

スバルたちと一緒に、別荘を持ってきた。

「迅、母さんは本局だからすぐ来るって」

数分でプレシアさんが転移して、こちらにきた。これで役者は揃ったな。

「ウーノ、セインたちは？」

「ええ、もう到着したわよ」

「来たよ迅」

「おう、よく来たな」

あれ？

「スカリエツティ？」

「ああ、新しくロールアウトしたよ」

オットーとデイドとセツテがいた。

「初めまして迅お兄様」

「よろしく・・・」

「よろしくお願いたします」

もう色々と突っ込みたいが、とりあえず俺たちは転移した。

現在セインたちがターナと海で遊んでいる。俺はスカリエッティとなのはたち、そしてウーノからチンクまでを呼び、ソファーに座った。

「さて、どういう話だっけ？」

「まず、どうして迅君がスカリエッティとつながりを持つてるかや」

「ああ、それ？ちょっと前に接触して、酒を飲んだら仲良くなった」

「そうじゃないでしょうか！」

素晴らしいほどのアリスの突っ込みが入る。スカリエッティも驚いている。

「素晴らしい突っ込みだな」

「だろ？」

「そこは大した問題やない。二人はどういう関係なんや！」

「ちょっとふざけただけだろはやて。そうだな・・・ま、情報提供の関係かな。後友達」

「情報提供？」

そう、結構長い付き合いってわけでもないが、そういう関係だ。



「俺が違法研究の施設を潰していたのは知ってるな？」

「う、うん……」

「その半分はこいつに場所の情報をもらってたんだよ」

「そうとも、まあ情報は頂いてたがね」

MSのデータだの、おもしろい研究をこいつに提供していた。

「それって、違法なんじゃ……」

「どの辺が？」

「だ、だって……次元犯罪者なのに……」

「まあそうだけどな、だけどスカリエッティも被害者って言えば被害者だぜ？」

「え？」

一同が首をかしげる。まあ、そうだよなあ……

「スカリエッティは、アルハザードにいた科学者のクローンさ」

「アルハザードですって!？」

プレシアさんが驚く。まあそうだよな。

「そうさ……私はアルハザードの科学者の遺伝子からできたクロ

「ん……」

「違法やないか！それにアルハザードなんて大問題や！誰がそんな……」

「最高評議会……この世界に腰を据えるトップさ」

「なっ！」

「あいつらなんでサウンドオンリーか知ってるか？」

そう、アルハザードの技術は遙か昔のもの。だからこそ、彼らがその時代に存在したとしたら？

「あの爺たちは、もう脳みそよ」

「え？」

ドゥーエが説明する。そういえばこいつが調節してるんだっけ。

「もっとも、もう始末しちゃったけど」

「行動早くないか？」

「だって迅に会う時間がなくなるんですもの。仕方がないでしょう？」

どの辺が仕方ないんだよ。

「で、まだ話は終わってへん……スカリエッティは何をするつもりやったんや」

「なに、この世界をひっくり返してやるうと思っていたが、もうやめた。そんなことにもう興味はない」

「どづいづこと？」

「私は迅に色々と教えられてね。世界を破壊しても、残るのはただの虚空・・・つまらないだろう？なら私はもう少し夢とやらを探してみようかと思ってね」

そう、スカリエッティの夢を作り出す。それによってゆりかご事件は回避される。

「話は終わりだ。スカリエッティの罪は消えないが・・・管理局の指名手配は消すし、これから機動六課に協力もしてもらおう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「やっぱり無理か、いきなり賛成とかは」

俺が言うと、なのはが焦る。

「そ、そうじゃないの！でも、なんか・・・何を信じていいかわからなくなっちゃって」

「なんだ、そんな問題か？」

「え？」

チンクの言葉に、思わずなのはが驚く。

「信じるものはいつも一つではない。それが人間なのだろう？ 私達はそれを迅から学んだ。そして私は……」

ちらりと外で遊ぶセイイン達を見る。

「あそこの妹達、ドクター……そして何より、迅を信じる」

「私達は戦闘機人だ。戦うための存在。だが、今は違う。信じる者のために、信じているものを守るために、戦う。それが今の私達だ」

「貴方達も、今信じるべきもののために戦えばいいのよ」

チンク、トーレ、ウーノが言う。こいつらも変わったな。

「さてと……体の傷もだいぶ癒えたし、飯にするか」

この魔力が充満した別荘なら、すぐに治る。

「えー！？ 治っちゃったの!？」

「なんだよ、何か問題か？」

「だって、看病したかったのに!」

「そっくだよー!」

などという。ざけんな……俺の命がいくつあっても足りないわ。

「さあ、料理作るぞ。手伝え」

「はいはい、やりましょうか」

ナンバーズが立ち上がり、エレナが台所へ案内する。なのはたちは、いまだに何とも言えない表情だ。

「今は考えるのをやめろ、お前ら」

「え？」

「今だけは・・・そーさな、息抜きくらいしてもいいんじゃないか？」

確かに彼女達の信じるものが一つ崩れた。だが、俺はそれの代わりとなってこいつらを支えたいと思う。かなりきついけど、それが俺がしたかった原作ブレイクだ。

「・・・うん、ありがと迅君」

「わかったよ、迅」

「今は迅を信じるよ」

「わかったわ、今日は何も考えへん」

「ま、あんたが言うならね・・・」

「うん、迅君を信じるよ」

「そうだな・・・少し休むとしよう」

「私も兄さんを信じます」

みんなが言う。とりあえずはよかったな。

「じゃあ、私も料理を作ってきますね」

『シャルは作らないでいい!』

全員でハモリ、シャルがすねたのは言うまでもない。

第七十五話「しょうがないじゃん、だって俺だもん」(後書き)

秋風「さて、スカリエツティ登場です」

迅「ヴィヴィオは？」

秋風「次回だな。とりあえずまたリメイカーとひと悶着あるぞ」

迅「マジかよ」

秋風「マジだ」

迅「次回、第七十六話『敵ってほしいパターンが同じ』 TAKE

OFF!」

## 第七十六話「早い者勝ち」(前書き)

お久しぶりです。最近s a iで絵を書いてて忙しいです。ごめんなさい。

興味がある方は連絡してくれば名前を教えるのでメッセージいただけるとうれしいです。

ユーザー検索か、タグ検索で一撃で出てくるので

それにしても、絵を描いている人ってこのサイトにはいるのだろうか・・・



## 第七十六話「早い者勝ち」

スカリエツティが来てから数日。とりあえず今日も朝練習である。

「ザケル！」

「クロスファイアー・・・シュート！」

「リボルバー・・・シュート！」

スターズは一段と増してきたな。今日はテストだし、やってやるか。

「ゼロ！」

『オーライ、スタンバイレディ』

ゼロを装備し、ティアナのクロスファイアーを撃ち落とし、スバルのリボルバーシュートを防ぐ。だがそれだけではない。

「でえええい！」

「フリード！」

「つく！」

攻撃パターンは増えてるし、コンビネーションもオーケーだな・・・  
よっし・・・

『ラスト・テイル・マイマジック・スキル・マギステル！来たれ雷ウエニアン』  
・スピリテウス

精風の精雷を纏アエリアーレス・フルグリエンテンテースいて《クム・フラグラテイオーネ》吹きすさべ《  
フレット・テンペスターズ》南洋の嵐アウストリーナ！』

「撃たせない！ファントムブレイザー！」

「何！？」

雷の暴風を撃つ寸前に、ファントムブレイザーに邪魔をされる。ち  
いっ！

『マスター、どうしますか？』

「しょうがない、行くぞ」

『オーライ、合言葉は？』

「・・・天使で行くぞ」

『オーライ、ウイングガンダムゼロカスタムver・エンドレスワ  
ルツ。スタンバイレディ』

俺の背中に羽が生え、それが俺を覆って行く。再び開くと、俺はウ  
イングガンダムになっている。

「ツインバスターライフル、発射」

バスターを発射して、ティアナのシルエットを潰していく。

「スバルっ！」

「おおっ！でえええいいい！」

「甘い！」

ツインバスターライフルを収納し、ビームサーベルで斬りかかる。だがスバルが消えた。

「何っ！？」

すると、後ろから攻撃が飛んできた。

「リボルバー・・・シユーツ！」

「幻術かつ！」

俺はリボルバーシユーツを羽で受けると、低い位置まで落ちる。

「つく！ゼロシステム！」

『ゼロシステム起動開始』

「排除、開始！」

「うおおりゃあああああ！」

「遅いつ！」

再び幻術ではなく生身で突っ込むスバルを蹴り飛ばし、バスターを向けた。

「うおおおっ！」

今度は後方からエリオが突っ込む。時間はあるのを判断して、バスターライフルを二分割にする。

「排除する」

ローリングバスターライフルを撃ち放ち、回転する。

「うわああああっ!?!」

スバルとエリオが吹き飛び、ビルごと崩壊する。それによって二人はノックダウン。

「きゅ〜」

「ゼロシステム解除だ」

二人が気絶したので模擬戦は終了した。

「はい、じゃあ集合だよ〜」

なのはの集合の後、評価をすることになる。新しいリミッター解除の話だ。

「で、今日はリミッター解除のテストを兼ねてただけど・・・」

「ええっ!?!」

「どうだった? 迅君」

「合格」

「早っ!?!」

「迅がつえゝにしても、あたしらがこれだけ鍛えてんだ。不合格だったらまた基礎からやり直してたところだぞ」

「「「「あ、あははは〜」」」」

「じゃあ、今日はそのご褒美に、町にでも行って遊んでおいで」

「「「「やったあ!」」」」

ということとで、多分休日編となった。

現在俺は食堂で飯を食べている。

「「「ちそうさま〜!」」」

「はい、よくできました」

俺は言いながらターナの口の周りのものを拭き取る。

「むぐぐ」

「まったく、またこんなにぼろぼろつけて……おいチンク、お前何してんの?」

チンクがかなり不自然な形で口にケチャップがついていた。まったく……

「お前もしょうがないな……」

言いながら俺がそれを拭き取ると、チンクは嬉しそうに笑う。

「ありがとう、迅」

「ああ〜ん！チンクちゃんずるいわよお！」

「そうですよ！お兄様！私のも是非！」

「駄目だよ！私が先！」

などと、ナンバーズが騒ぎ出す。すると……

「デイバイン、バスター！」

ええええ〜……

「ナンバーズのみんな、ちよつと頭冷やそうか」

もうすでにボロボロのクアットロ、ディード、セイン、チンク。

「ふえっ！ふえええ……」

「あー……ターナ、泣かない泣かない」

と、あやす。すると、なのはが近づいてくる。

「迅君、隣いいかな？」

「あ、ああ……」

俺が言うと、なのはがニコニコと笑いながら食事始める。すると・

「はい迅君、あ〜ん」

「え……」

「いいからほら、あ〜ん」

断れそうにないので、俺はそれを食べる。

「おいしい？」

「あ、ああ……」

「じゃあ「なの」は？」「ア、アリサちゃん……」

「ずるいわよ！抜け駆け！」

だから抜け駆けって何！？

「あ、そつだ迅君！今日おやすみなら一緒に出かけよう！」

「すすかざるいわよ！私がいくの！」

「駄目や！迅君はうちと一緒にや！」

「駄目！私と！」

「私、私だよ！」

と、全員が大喧嘩を始める。

「ま、待てお前ら！」

全員でデバイスや杖なんて構えたら・・・

ドオオオン！

とっさに結界を張り、織ロー・アイアス天覆う七つの円環でその砲撃を吸収して、食堂の崩壊は一部でとどまった。この後なのは、フェイト、アリシア、はやて、アリサ、すずかが、食堂のおばちゃんに怒られ、チンク、デイド、セイン、クアットロが医務室に運ばれたのは言うまでもない。

「はぁ・・・」

とりあえずフォワードを送り出し、ため息をつく。結局のところじやんけんをしようとしているので、ターナを連れて抜け出すことにした。

「はぁ・・・」

「パパ、だいじょうぶ？」



「ああ、大丈夫だよ・・・ちょっと精神的にきついけど」  
「うー？」

首を傾げるターナ。まだちよつとこの話は早かったかな。

「さて、どうし」迅「アリシア!？」

そこにはアリシアがいた。

「ど、どうやってここが!？」

「えへへ、こーこ」

と、指差す場所。腕時計がある場所だが・・・あ・・・

「シールの発信機・・・」

昔プレシアさんに提供した『名探偵コナン』の発信機・・・

「えへへ、私は魔力がないからね・・・こつこつ科学力と魔法がものを言つんだ」

「はあ・・・」

「というわけで、今回は私とデート!」

「デートって・・・」

「パパ、デートってなあに？」

と、ターナが聞いてくるので『もうちょっと大きくなってから』と言っでごまかした。現在はミッドの首都に向けて大きな自然公園を通っている。

「緑が気持ちいいねえ」

「ああ、そうだな」

現在はターナと手をつなぎ、ターナの反対の手をアリシアが繋ぐ。

「えへへ、お母さん見たい」

ターナ本人はとても満足そうだ。最近は六課の人に慣れてきたので、色々走り回るおてんば娘になっている。

「私がママでいいの？」

「うっ？」

アリシアの言葉にターナは首を傾げるが、笑顔でうなずいた。

「うんー！」

「えへへ、私がターナのママってことは、私は迅の奥さんだね」

「………知らん」

最近理解してきた。これをなのはたちが聞いたら、間違いなく砲撃

が飛んでくるといづ。

「じゃあ、アリシアマママ？」

「なあに、ターナ？」

「えへへ」

ターナが嬉しそうなので良しとしたいが・・・怖いな。

「さて、もうすぐ首都につくけど、どこ行きたい？」

「そうだね、私服がないから新しいの買おうかな・・・」

「ならついでにターナの服も買うか・・・ちょっと大きくなったしな」

最近二センチほど背が伸びたので、下着やらパジャマやらが小さくなった。なので新しいのを買うのはいいかもしれない。

「そうだな、じゃあショッピングモールに行こうか」

こうして、俺たちはショッピングモールへと向かった。

Side out

ところ移り、機動六課であるが・・・

「見つけた!？」

「うづん！いない！」

「どこ行ったんや迅君！」

「というか、アリシアもいないわよ！？」

「ほんとだ、ま、まさか・・・」

「む！？リインフォースもいないぞ・・・しまった！あいつはデバイスの能力で魔力を的確に追えるんだった！」

などなど、まあおおかた予想がつくだろうが、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、シグナムの順である。リインフォースは追いつく方法に気がついたので、こっそり抜け出す。すると、リインが紙を持ってきた。そしてそれは以下の内容

『みんな お、さ、き、に byアリシア』

この後なのはがキレて無言で紙を破り捨てていた。

シヨッピングモールに入ると、すごい人だかりができていた。人数もかなりいる。これは迷子になったときが大変だな。

「ターナ」

「う？なあにパパ」

「これをつけておこうか」

そう言ってゼロを手につけた。

「う？ゼロ？」

『はい、レディ』

「これだけの人だからな、迷子になったら大変だろ？」

『レディ、貴方はしっかりと私が警護します』

「えへへ、魔法使い見たい」

まあ、あながち間違ってもいないのだが。

「さあ、洋服を見よっか」

というわけで、アリシアとターナの服を見ることになった。

「ねえ、これどうかな？」

「また緑か？たまには・・・そうだな、蒼なんてどうだ？」

「あ、いいかも・・・でもこっちな・・・」

「オレンジのか？それだとアリサやティアナとかぶりそうだ」

現在ワンピースの色選び。デザインは素晴らしいらしいので、後は色だ。

「やっぱりちょっと派手にしてみるね」

そう言っつて赤いワンピースを取り出した。

「……まあ、悪くはないな」

「本当？」

「ああ、似合っつてると思うよ」

「ありがとう、迅」

アリシアが嬉しそうに笑う。

「さて、次はターナの服だな……えーと……」

子供服売り場についてから、色々と服を選んで着せてみる。着せるときはもちろんアリシアがやるわけで、俺は触れていない。

「パパ、どう？」

「お、可愛いじゃないか？」

「えへへ〜」

アリシア厳選の赤いドレスのようで、洋服なそれは、幼いターナにはとても似合っつているものだった。

「でも動きにくい……」

「そっか、じゃあこれ着てみて、ターナ」

「うん、アリシアマママ」

今度着たのはもっとラフな半ズボンとTシャツのセットだ。

「これのほうがよさそうだな」

「そうみたいだね、じゃあこれと・・・後はいくつか選ぼうか」

こうしてアリシアの長い買い物を終え、俺たちは食事へと向かうのだった。

第七十六話「早い者勝ち」(後書き)

秋風「最近更新できずに申し訳ない」

直人「夏でだらけてる証拠だな」

秋風「違う！サークルで絵を描いてて忙しいんだ！」

直人「嘘つけ！」

秋風「本当だよ！ではこれで！」

直人「次回、第七十七話『やっぱり悪役ってわかりやすい』 TAK  
E OFF」



第七十七話「敵ってわかりやすい」(前書き)

お久です。この作品を覚えている人は皆無ですが、テストの合間を縫って書きました。

感想も返せなくてすいません。近日中に書く予定です。

## 第七十七話「敵ってわかりやすい」

現在時刻正午・・・昼食のためにショッピングモールのレストランに入る。

「パパ、おなかすいたー」

「はいはい、どうしようか」

「ねえ迅、あそこで3人でゆっくりしようよ」

アリシアが指したのはいい感じの洋風レストランだ。日本のレストランらしく、口にも合うだろう。

「じゃあ、そこに・・・」迅!「アインス?」

息を切らせたアインスがいた。どうしたんだこいつ。

「アリシア、貴様ぁ・・・」

「あらら、ばれちゃった」

どうやらアリシアが俺を連れだしたのを知ってアインスが追いかけて来たんだろう。

「ずるいです迅!どうして誘ってくれなかったんですか!」

「いや、それは・・・」

「と、に、か、く！私も一緒に行きます！」

こういうわけで、アリシアとアインスとターナと食事をする事になった。

とりあえずレストランに入り、席に着く。ターナが俺の隣で、アインスとアリシアが前に座る。

「・・・なんだか、納得がいきません」

「しょうがないじゃん」

「パパ、おいしいね」

既に料理が来ていて、ターナがおいしそうに食事をする。このあとどうするかなあ・・・

「あ、ターナ？口の周りいっぱいついてるよ」

お子様ランチのパスタのソースが口の周りにベタベタとついている。アリシアがそれを丁寧に拭いてあげている。

「ありがとうーアリシアママ」

「マ、ママー!？」

「そっだよ、ターナが呼んでくれたの」

その言葉にアリシアが驚愕する。すると何を思ったのか、アインスが微笑んでターナを見る。

「ターナ、よければ私も母と呼んでくれ」

「お、おい!？」

「・・・アインスママ？」

もうなんか、嫌になってきた。

「パパ、ターナママが2人になったよ!」

「あ、ああ・・・よかったな」

ターナが事情を知らずに満面の笑みで言ってくる。つく・・・この可愛さで無邪気に笑ったら説得なんてできない・・・

「この後はどうするんですか？」

「ああ、そうだな・・・何も考えてない」

とりあえず食事を終えてからその辺をぶらぶらするかあ・・・

「今は食事を食べよう」

「はい、そうですね」

「うん、わかった」

この後3人がデザートやら何やらを頼んで食事を終え、外へ出るところとなった。

「で？何この状況」

現在はクラナガンの街を歩いているのだが、ターナは肩車で、アインスとアリシアが両方から抱きついている感じだ。周囲（男）からの殺気が半端ないのだが、そこは気にしたら負けだと思っておこう。

「では、この後どうしますか？」

「そっだなあ・・・ん？」

急に通信用のアラートが鳴り響く。通信元はエリオとキャロ。どうやらヴィヴィオを発見したようである。

「そっか、忘れてたな・・・でも、なんでだ？」

俺はすぐにスカリエッティに通信を開く。

「おいスカリエッティ、どういうことだ？」

「ああ、迅か・・・それが今日ここに届ける予定だったマテリアル・・・まあ、君がなんとかかしたいと言っていた少女の乗った車がガジエットに襲われた」

「それってスカリエッティじゃないの？」

アリシアの言葉に、スカリエッティは首を振る。

「冗談はよしてくれ。こんな悪趣味なガジェットは作らないよ」

そう言っただけで現れるのはガジェット・・・なのだが、装甲に若干の變化があり、機械と言っただけよりは生き物に近いものだ。

「とにかく、フォワードは向かったらしい。私もチンクとディエチ、クアットロ・・・トーレを出撃させる。」

「待った。トーレは完治してないだろ」

「む、そうだったね」

「トーレの分は俺が補うと伝えてくれ。一応念のためにサインを忍ばせてくれ」

「了解したよ」

「さーてと、ここから本格的に『俺が知らない物語』が動くわけだ・・・

「アリシア、ターナを頼んだぜ」

「うん、任せて」

「パパ、どこか行くの？」

「ああ、ちょっとお仕事ができたからね・・・帰ったらいっぱい遊んであげるから、それで許してくれよ？」

俺が言つと、少し渋っていたが、うなずいてくれた。

「うん、早く帰ってきてね」

「ああ、行ってきます」

こうして俺はアインズと共に現場へと向かった。

「おう、お前ら」

「兄さん！」

ティアナたちが駆け寄ってくる。

「この子か？」

「あ、はい……」

「一応、スカリエッティが作ったクローン……だ」

「そうなんですか……」

俺は眠る少女に回復魔法をかける。

「ガジエットの反応は？」

「海上に多数と、この地下に50ほどです」

「……なのはたちは？」

「なのはさん達が海上を・・・そして地下へは私達が潜る予定です」

「わかった・・・なのはたちが来たらすぐにヘリへこの子を乗せる」

「はい」

「これよりスターズ、ライトニングの両分隊はアインズとヘリへと乗り込み、子供とレリックを保護、護衛をしる。なのはたちに俺が地下へと向かうと伝えてくれ」

とりあえずチンクたちも来るしな・・・

「・・・はいつ!」「・・・」

「迅!」

「チンクか・・・」

「うむ、遅れてすまない」

とりあえず・・・そうだな

「出撃メンバーは誰だ?」

「私、ディエチ、クアットロ、セインだ」

・・・メンバーとしては悪くないな。よし



「チンク、セインを呼んでくれ。これから地下へ行く」

「わかった」

「デイエチとクアットロには現状待機させてくれ」

「うむ」

こうして、俺とチンクは地下水路へと向かうことになった。

地下水路と言っても、生活排水をある程度その廃棄口と地下水路で  
る過をしている部分だ。なので臭いわけではない。

「チンク、どうだ？」

「反応が近い・・・来たぞ！」

「セインは下がれ」

「うん」

セインをディープダイバーで潜らせ、俺は構えを取る。

「ゼロ！」

俺はゼロを起動させようとするが、反応がない。

「あーっ！」

「どうした迅!？」

「しまった、ゼロはターナに預けっぱなしだった！」

「どっする、来るぞ！」

つく、現状を整理しろ、俺！

ガンダムになれない

ガツシュの呪文使用不可

FFの呪文使用不可

R・O・C・K・システム使用不可

仮面ライダーの技術使用不可

アインスはヘリの護衛なのでW不可

大ピンチじゃん・・・ネギ魔の呪文だって無詠唱はゼロのサポートがあつてこそだ・・・しかたがない。

「迅！」

「・・・仕方がないトレス・オン投影開始！」

俺はアーチャーが持つ双剣を手に、ガジェットを斬り裂く。

「迅、大丈夫か？」

「ゼロなしで魔力を練り上げるのは面倒だ。しばらくはこれで持つ」

「IS発動、ランブルデトネイター！」

ナイフが次々と爆発し、ガジェットが消えていく。

「ふう……」

「大丈夫か？ 迅」

「ああ、なんとかな……」

とりあえず奥へ進むとしよう。

「行くぞ、チンク、セイン」

「ああ」

「オツケー！」

こうして俺たちは奥へと進んでいく。すると、苦戦を強いられている魔導士が目に入った。

「はああああっ！」

俺はすぐさまその魔導士の前に立ち、迫りくるガジェットを斬り捨てた。

「大丈夫か？」

「あ、はい・・・」

良く見るとこいつ、ギンガじゃねーの？

「君、所属は？」

「あ、はい。陸士108部隊のギンガ・ナカジマです」

「俺は機動六課専属特務官『ジョーカー』の神谷迅だ」

「あ、あの神谷さんですか！？う、うちの妹がいつもお世話に・・・」

「ん？ああ、気にするな。あいつはいい子だよ」

「あ、ありがとうございます・・・」

さて、どうしたものか・・・

「チンク」

「どうした？」

「下がってる」

何か気配を感じ得る・・・これは

「やあ、初めまして」

そこにいるのは黒いスーツを着た男。

「時空管理局です！貴方は何者ですか！」

「・・・我が名はジャック・・・そして」

000 Standing By

「仮面ライダーオーガ」

complete!

「なっ!?!」

敵が仮面ライダーオーガに!?!

「その二人の戦闘機人・・・もらいうける」

「なっ!?!」

ギンガが驚いてチンクを見る。

「・・・・・・ギンガ、だったな」

「は、はい・・・」

「説明は後です。君はチンクと撤退だ」

「でも・・・!」

「迅、大丈夫なのか!？」

チンクの言葉に頷き、ベルトを取り出す。

「別にライダーの力が使えなくても、ライダーになれないわけじゃない」

555 Standing by

「変身!」

complete!

「ほう、貴様がメリーの言っていた男か・・・」

「リメイカー・・・戦闘機人など、何に使っつもりだ」

「知れたこと。もっとも適した殺戮兵器!それが戦闘機人!」  
「違う!」  
「何っ!?!」

俺は声をあげて、奴を睨みつける。

「戦闘機人・・・確かに、それは人々が望まない誕生だ。だが誕生してきた彼女達も、そんな生まれ方は望まなかった。だが!彼女達は、人間だ!」

「人間・・・体のほとんどが機械の者に、そんなことがあるはずがない」

「心だ・・・」

「何？」

「体ではない・・・心が、魂が！それが気高くあれば、立派な人間だ！人間として生きる・・・そう望みさえすれば人であることができる」

「ほう、なら・・・そんな思想を持つ貴様を、排除するでしょう！」

オーガが剣を持って駆けだす。

「チンク！ギンガを連れて行け！」

「う、うむ！負けるなよ！」

「ああっ！」

こうして、俺と仮面ライダーオーガの戦いが始まった。

第七十七話「敵ってわかりやすい」(後書き)

今回はテストの合間を縫って書きました。すみません

迅「次回、第七十八話『気高き魂』TAKE OFF!」



第七十八話「性能の差が、決定的戦力の差じゃない」(前書き)

今回は結構余裕がなかったもので、大変でしたが、なんとか更新です。  
ではどうぞ

第七十八話「性能の差が、決定的戦力の差じゃない」

「行くぞ！」

俺はオーガへと駆けだす。

「はっ！」

「ぬっん！」

俺とオーガの拳が激突する。幾重にもぶつかり、距離を取る。

「さすがはオリジナル・・・と言ったところか」

「オリジナル？」

「そう、貴様こそ・・・この力を運んできた源だろうか？」

「・・・・・・・・・・」

確かにそうだ。神の本棚・・・それを持ってこの世界に入り、そしてそれを闇の書に複製された。そしてその残された欠片をこいつらが使っている。

「証明しよう・・・」

言いながら、オーガストランザーを手に取り剣を構える。

「管理局がどんなに腐った組織であり、そしてわれら<sup>リメイカー</sup>革新者がどれ

だけ優れているのかを！」

「結局のところ、お前達も世界の支配が目的か……？」

「違う、新たな秩序……そして新たな世界の創造……それが我らの目的だ」

「なるほど、だから『革命者』……か」

再び攻撃が激突する。拳が、足が……いたるところで激突し、互いに距離を詰めていく。

「はあっ！」

「ぬううん！」

オーガストランザーをファイズショットで受け止め、ファイズフォンの『ENTER』を押す。

Exceed charge

「はっ！」

グランインパクトを命中させる。だが、浅い……やっぱり性能が違<sup>スペック</sup>うとここまで差がでるのか……

「ふっ……くだらん」

「浅い……か」

時間稼ぎはだいぶした。そろそろ来るか・・・

ブオオオオン！

バイクのエンジン音が鳴り響く。そう、ファイズ専用マシンのオートバジンだ。

B a t t l e m o d e

オートバジンが変形しマシンガンをぶっ放す。

「あぶねっ！」

俺が避けると、それがオーガに直撃する。

「ぬぐおお！」

そして俺のそばに降り立つので、俺はファイズショットをしまつてファイズエッジを引き抜く。するとオーガもオーガストランザーにミッシヨンメモリーを差し込む。俺も同時にミッシヨンメモリーを差し込んだ。

R e a d y

R e a d y

互いの刀身にフォンブラットが宿り、また駆けだす。

「はっ！」

「らあっ！」

互いの刀身が激突するが、やはりオーガのほうのパワーもスペックも上だ。

「くっ……」

「このオーガに、貴様如きが勝てるわけない！」

オーガが剣を振り下ろし、俺はそのまま吹き飛ばされる。

「ぐあっ！」

やっぱり性能だとあいつのほうが上か……！

「確かに、今のままじゃ勝てねえな……」

俺は腕にあったファイズアクセルからアクセルメモリーを引き抜くと、それを装着する。

Complete

音声と共に胸部アーマーが開き、目が赤く、フォトンストリームが銀色に変わる。仮面ライダーファイズ アクセルフォームへと変化した。

「行くぞ」

Start Up

スタータースイッチを押し、超加速モードへと変わる。

「おおおおっ!」

一気に突撃し、攻撃をくらわせる。

「ぬぐっ!」

「一気に決める!」

Ready

ミッションメモリーをファイズポインターに差し込むと、それを足に装着してENTERを押した。

Exceed charge

一気に飛びあがると、赤い円錐がオーガの周りに幾重にも重なる。そして、俺は連続のクリムゾンスマッシュを放つ。

「おりゃあああああああああ!」

「ぬおおおおおおおおおっ!」

連続のクリムゾンスマッシュの攻撃が終わり、俺は着地する。

Time out Reformation

「はあっ、はあっ……」

前の戦闘でも無理をしたからな・・・これで決着ついているといいい  
だが

「か、勝った・・・」

オーガは膝をついている。周りには の刻印が浮かんでいる。

「ぐっ・・・なるほど、な・・・さすがはオリジナル・・・今  
日は、ここまでのようだ・・・」

「オリジナルオリジナルって・・・お前はなぜ俺のことを  
」

何故、俺のことを知っているんだ？俺が力を運んできたことを・・・

「いずれわかるさ・・・世界の終焉と、新たな秩序の狭間で・・・  
」

そう言い残し、オーガは姿を消した。

「世界の終焉・・・だと？」

予言にあったのは確かにリメイカーたちのことだ・・・だが、あの  
男が言った、世界の終焉。これがどうもひっかかる。

「何が起きているんだ？この世界で・・・」

俺はただ一人、下水道でそう呟いた。

それからしばらくして、俺は地上へ出た。クアットロからの報告で、なのはとフェイトが海上のガジェットを殲滅。ディエチが砲撃によってヘリへ向かっていた怪物・・・残骸の色からして、多分オルフエノクと言ったところか・・・それを破壊したらしい。

「よくやったディエチ、クアットロ」

「えへへ・・・」

「まあ、当然ですよお」

クアットロは何もしていないんだろうが、それは置いておこう。

「チンクとギンガは？」

「あの二人はも今は現場検証中。で、レリックはこの方が」

そこにいるのは、紫髪にドレスに似た服を着た少女。

「ルーテシア、アギト、ガリユー御苦労さま」

「うん、迅・・・」

「おう！」

「・・・」

そう、ルーテシア・アルピーノ、アギト、ガリユーだ。先日まで一応交流はしていたのだが、スカリエツティがいなくなってから、色々と連絡がとれずに大変だったらしい。



「ルーお嬢様はグロンギとファンガイアを殲滅したそうです」

「そうかそうか、偉いぞルーテシア。それにガリユーとアギトもな」

「迅……」

「ん？どうした」

見ると、ルーテシアが顔を赤くしてもじもじとしていた。

「抱っこ……」

「はいはい……」

なんだか原作と違って随分と甘えん坊だな……

「よっ」と

俺が抱っこすると、ルーテシアは嬉しそうにすり寄っていた。

「さて、みんなと合流するか……」

とりあえず一段落だ……後はヴィヴィオだな。こうして、俺たちは六課メンバーと合流を果たした。

帰宅後、機動六課

「つつわけで、しばらくルーテシアもここに置くぞ」

「まあ、ええんやけど・・・」

はやてと話し中だ。

「これ、どうにかできへん？」

現状、別荘を彼らの居住区としているのだが、ルーテシアがべつたりとついて離れない。

「なあルーテシア？そろそろ離れてくれない？」

「嫌」

この問答がかれこれ一時間行われている。

「まあそれとして・・・スカリエッティが作った、あの子供は？」

「指示通り、今は機動六課の医務室で安静にしとるよ。でもなんでや？どうしてあの子をここに？」

「なんだ、カリムから聞いてないのか？」

「ほえ？」

こりゃ完全に聞いてないな・・・

「この前、聖王協会は過激派に襲撃を受けた・・・つまり、クーデターだな」

「は、初耳やで!？」

「やっぱり・・・そして聖王病院ともなれば、過激派一派が残っていると厄介だ」

だからこそ、ヴィヴィオをあそこに置くのは危険だ。

「ま、後は・・・お前に任せる。今日は疲れた・・・」

「あ、うん・・・あ、迅君？」

「ん?」

振り向くと、はやてにキスをされる。

「おい・・・」

「お休み」

「・・・おやすみ」

こうして、部隊長室を後にした。部屋を後にし、いい加減ルーテシアに降りてもらった。そのあと手を繋いで入る。部屋に戻ると、既に眠っているターナの姿があった。

「ただいまターナ・・・ゼロ、御苦労さま」

「イエス、マスター・・・大丈夫でしたか?」

「まあ、なんとかな・・・ちよつと体力を使いすぎた。もう寝るよ・

「・・・」

『あ、マスター・・・』

俺が布団をめくると、そこから手が出てきて、引っ張られる。

「わっ!?!」

「ふっふっふ・・・」

「ドゥーエ!?!」

布団の中には、既にドゥーエがいた。

「捕まえたわよ」

「お、おい待て!ターナが横にいるだろうが!」

「大丈夫よ、爆睡中だもの」

言いながらドゥーエが服を脱ぎ始め、俺を押し倒す。押し倒すのが・・・

「あ、あら!?!」

そのワイシャツの首根っこを引っ張られる。

「ガリユー」

ルーテシアの言葉に動じてか、申し訳なさそうにガリユーはドゥー

工を開いている窓の外へと放り投げた。

「いやあああああ………」

ドゥー工は暗闇の外へ消えていった。ここ、2階だぞ……

「迅……」

すると、既にパジャマに着替えたルーテシアがいた。

「寝ようよ……」

「あ、ああ……そうだな」

ガリユーに何されるかわからないし。なんて考えていると、ガリユーはいつの間にか外へと消えていた。布団に入り、目を閉じる。

「おやすみ、迅……」

「ああ、ルーテシア、アギト」

「おう、おやすみ……」

こうして、長い一日は終わりを告げた。

第七十八話「性能の差が、決定的戦力の差じゃない」(後書き)

秋風「とりあえずテスト期間なのでここまでで。テストの最終終了は8月10日です。とりあえず9月20日までは休みなので、その休みの時は頑張っ行ってきたいと思います」

迅「次回、第七十九話『子供の喧嘩は怖い』 TAKE OFF!」

第七十九話「子供の喧嘩は怖い」(前書き)

まさかの連続投稿です。ああ、私もヤキが回ったな・・・

## 第七十九話「子供の喧嘩は怖い」

オーガとの戦いから翌日。俺はいつも通りの朝を迎える。

「・・・・・・・・邪魔」

俺はがっちりと掴むシグナムとすずかの手をどけ、さらに上に乗るルーテシアを降ろし、ターナを起こさないように降りる。昨日は色々とターナも疲れたようなので、寝かせておこう。

「さて・・・・・・・・あの子の様子でも見に行こうか・・・」

俺は着替えを済ませて外へ出る。うん、いい天気だ・・・

「あ、迅君！」

「なのはか・・・・・・・・おはよう」

「おはよう・・・・・・・・はあ・・・・・・・・はあ」

「どうした？」

何故か息切れしている。というか、お前訓練の時間じゃないの？

「そ、それがね・・・・・・・・？昨日保護した女の子がいなくなっちゃって・・・」

「なるほどね・・・」



こんな朝早くから出たのか・・・

「わかった・・・俺は外を探すから、お前は中を頼む」

「うん、お願いね」

確か原作だと聖王病院の中庭だった。なら、機動六課の森のほうかな。とりあえず外へ出て、魔力を感知する。お、いたいた・・・森のほうだな。俺はすぐに森のほうへ飛ぶ。

「みーつけた」

「ひいっ！」

そ、そんなに俺は怖いのか・・・？

「こ、怖くないぞ？」

『マスター、説得力ないです。いきなり空から現れたら驚くでしょう』

「・・・た、確かに・・・ん？」

「ふえ・・・ふえ・・・」

や、やばい！泣く！

『マスター・・・これはどうでしょうか？』

そう言ってゼロが提示するのはある歌だった。

「わかった、これを流してくれ」

『オーライ』

そして、音が流れる。オカリナを中心に、さまざまな音楽が流れる。ゼルダの伝説夢を見る島に登場する曲、風のさかなだ。ゆったりと流れる音楽にいつしかヴィヴィオは泣きやんでいた。

「ごめんないきなり驚かせて・・・名前、言えるかな？」

「・・・ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオか・・・いい名前だな。ヴィヴィオはどうして外に出たのかな？」

「パパとママ・・・いないの・・・」

「そうか・・・それは大変だったな。よいしょ」

「わっ！」

俺はヴィヴィオを抱き上げ、高い高いをしてあげる。

「ほれ、高い高い〜」

「あはははは！」

ヴィヴィオが笑顔になり、俺はヴィヴィオを降ろす。すると、俺の脚にしがみついてくる。

「抱っこして！抱っこ！」

「はいはい……」

こうして俺はヴィヴィオ保護の連絡と、ヴィヴィオの素性の連絡を  
なのはに入れた。すると、すっかりヴィヴィオは母親を探すという  
目的を忘れたようである。

「お兄ちゃん、名前は？」

そういえば言っでなかった……

「俺か？俺は神谷迅っていうんだ。よろしくな」

「うん！迅お兄ちゃん！」

と、嬉しそうに俺にすり寄る。

「迅君！」

「なのは」

「よかった、見つかったんだね」

「う？この人だあれ？」

「えーとね、この人は高町なのは……俺の幼馴染だよ」

「なのはだよ。よろしくね」

と、笑顔を見せるなのは。するとそれにつられてか、ヴィヴィオも笑顔になる。

「なのはお姉ちゃん」

「なーに？」

「えへへ・・・」

ヴィヴィオが嬉しそうに笑う。すると、ヴィヴィオが降りたがるので降ろすと、今度は手を繋ぐことをせがまれる。なのはも同様だ。すると、ヴィヴィオは満足そうに笑い、なのはがとんでもないことを言い出す。

「えへへ、これだと親子みたいだね」

「親子、ねえ・・・」

仮になのはと結婚して、こんな規則正しい子供が生まれるかどうか・・・

「迅君？何か言ったかな？」

「い、いや・・・」

これ以上思っているのはよそう。すると、さらにヴィヴィオが加速させる。

「なのはママと、迅パパ？」





「「「「パパあ!?!」「」「」

そうか、そういえばそうだった。俺はターナを降ろしてヴィヴィオのところへ近づく。

「よしよし、どうしたんだ?」

「急にいなくなっちゃだあ……」

「(なのは、もしかして……?)」

「(にはは……迅君がいなくなったから大泣き……)」

もうやだ……

「よしよし、ごめんな急にいなくなって」

「うん……パパ……」

言いながらヴィヴィオが俺にがっちりとひつつく。

「駄目!」

すると、いきなりターナが大声をあげた。

「駄目なの!パパはターナのなの!」

と、ヴィヴィオに負けずと抵抗して俺にひつつき、ヴィヴィオを俺から離そうとする。騒ぎを聞きつけて、フェイト、はやて、アリスア、アインス、アリサ、すずかが駆けつけていた。





「ふえ……」

「ふうあ……」

「よしよし……ちょっと強く言いすぎたな……でも、パパは二人が仲がいいと、嬉しいよ」

「ちょっと重いけど、そこは我慢だな……」

「……ごめんね」

「いいよ……ヴィヴィオもごめんなさい」

「仲直り完了……ふう、一件落着だな。」

「迅君重そうだね……ヴィヴィオ、おいで？」

「うん、なのはママ」

「……ママ……？」「……」

「……迅……」

「なのはちゃん……抜け駆けとちゃうか？」

「ずるいわなのは……」

「なのはちゃん……」

「高町、貴様……」

「高町なのは……お前」

「なのはさん、ずるいです……」

すごい殺気だ。この殺気を是非ともリメイカーにあてて欲しいものだが……

「ねえ、アインスママ、アリシアママ、どうしたの？」

不思議そうにターナがアインスとアリシアに聞く。が、こんなことを言えば……

「……ママ!?」「」「」「」

「アインスさん、アリシアちゃん……人のこと言えないんじゃないかな？」

「アインスに、姉さんまで……」

「アインス、お話しよか？」

「アリシア、あんたまで抜け駆けね……」

「アリシアちゃん、アインスさん……」

「アインスさん、アリシアさん……」

一触即発……怖い、怖すぎる……が、スバルがここでこんなこ

とを呟く

「こ、この際・・・みんなママにしちゃえば・・・楽なんじゃ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それだっ!」「」「」「」「」

「スバル!お前はまた余計なことを・・・」

「だ、だって!こんなの止められませんよ!」

た、確かにそうなんだが・・・

「なのはママ、フェイトママ、はやてママ、アリシママに・・・」

「シグナムママ、アインスママ、アリサママ、すずかママ、ティアナママ?」

ターナとヴィヴィオが順番に言うて行く・・・すると、それぞれ反応が違って怖い・・・だが、これが一番怖かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なーに?ヴィヴィオ、ターナ」「」「」「」「」

性格とか関係なく、この声が見事にハモったのが一番怖かった。だが二人はお構いなしだ。

「パパ!またママが増えたよ!」

「えへへ、ママがいっぱい・・・」

8人のママ・・・ね

『マスターが鈍いのが原因かと』

「・・・どうなんだろうね」

最早、どうでもいい・・・それより・・・

「朝ごはん食べるか」

「パパ！抱っこ！」

「ヴィヴィオも！」

「はいはい・・・」

今度から二人分抱っことおんぶしなきゃいけないのか・・・辛いなあ・・・まあでも

「ゆりかごを動かさないためにも、仕方がない」

この流れで行けば、リメイカーが確実にこちらを狙ってくる。その際スカリエッティ同様にヴィヴィオをさらうかもしれない。ならば、守って見せよう・・・俺の力で

第七十九話「子供の喧嘩は怖い」(後書き)

迅「何これ？」

秋風「幼女！幼女！」

迅「このロリコンがあああ！」

秋風「違うよ！私はロリコンじゃない！仮にロリコンだとしても、ロリコンと言う名のフェミスとだよ！」

迅「同じじゃああ！」

秋風「ぎゃああああ！」

迅「次回、第八十話『戦争の定義』 TAKE OFF！」

第八十話「今と未来を生きるために」(前書き)

今回は本編中で起きても語らなかった迅の衝撃の事実があきらかに  
!

## 第八十話「今と未来を生きるために」

ヴィヴィオが俺の娘・・・否、半ば無理やりのことだったが、娘になって早くも数日。相変わらず平和だ。ヴィヴィオはまだもの知らない女の子だ。まるで昔のターナと同じように。

「朝ごはん食べるか・・・」

「朝ごはん？」

「そう、朝ごはん」

「うー？」

検査の結果と言うか、スカリエッティの話でヴィヴィオが人造魔導士ということがわかったが、みんなは特に気にせず接している。そして今の問題点と言えば・・・

「パパ！抱っこ！」

「迅パパ！ヴィヴィオおんぶ！」

これである。二人分を抱っこしたりおんぶする。これがもう重い重い・・・

「あ、兄さん・・・おはようございます」

「ティアナ・・・いい所に来た・・・ターナ・・・ティアナの所に行つて」

「はい。おはようティアナママ」

「う、うん・・・おはようターナ」

これでも17歳の乙女である。ママと言われるのにまだ抵抗があるのか、ティアナが顔を紅くする。

「ティアナ、みんなはどうした？」

「え？えーと・・・実を言えば、ちょっと問題が」

「あ？」

ティアナが少し深刻そうに顔を伏せる。

「実をいうと、スバルが・・・」

「スバル？」

そういえばいつもセットなのにみねーな

「あのほら、スカリエツティが来たじゃないですか」

「来たな」

「それでえつと・・・」

なるほど、そういえば俺はまだスバルの戦闘機人ってこと知らないことになってるな。



「・・・ティアナ、こっちこい」

俺はティアナを会議室に連れていく。ターナとヴィヴィオはなのはとフェイトに預けた。

「・・・で、あいつの・・・体のことか？強いて言うと姉のギンガもだが」

「知ってたんですか!？」

「・・・まあな」

ようするにスバル自身が体のことで悩んでるのか。

「どついう経緯でそうなった？」

「その・・・ナンバーズの子たちと話をして、なんだか・・・元気がなくて」

うーん、やっぱり一緒にしたのは失敗か？いや・・・彼女にとってプラスのことになるはずだ。しかたない、ナンバーズから話を・・・いや、直接聞こう

「わかったティアナ。後は俺に任せろ」

「はい、兄さん」

とりあえず食堂で飯を食ってから、スバルのいる部屋に向かった。飯を食ってないらしいので、簡単なおにぎりとおかずを持っていく。

「スバル、いるか？」

「・・・・・・・・」

応答がない。ティアナの話では、引きこもって飯も食べてないとか・  
・天変地異の前触れだ。あいつが飯を食べないなど。

「スバル、入るぞ」

部屋に入ると、スバルがベッドで寝ていた。

「スバル」

「迅、さん・・・・・・・・」

「飯持ってきたぞ」

「ありがとうございます」

いつものスバルからは考えられないほどスバルのテンションが低い。

「ティアナから聞いたぞ・・・・・・・・悩んでるのか？」

「ティアナから？」

「オメーの体のことだ。ひどく心配してたぞ」

「あ・・・・・・・・」

どうやら、スバルはティアナが元気のない自分に気を使っているのを思い出したらしい。

「今思ってること話してみる。相談くらい乗ってやる」

「迅さん……」

「話してみる」

「……はい」

こうして話す。スバルの生まれ、そして保護まで。クイントに保護されてからの生活と、魔導士になるまでの経緯。なのはへの憧れ……そして現在を。

「私は、人として生きてきました……でも」

「でも、どうした？」

「私、本当に生まれてきてよかったのかな……って」

「何？」

スバルの言葉とは思えない一言だった。俺はそのまま話を聞く。

「私は戦闘機人です……そんな私とお姉ちゃんが生まれて、ナンバーズのみんなが生まれた」

「……そうだな」

「でも・・・それが本当に彼女達が幸せだったかわからない」

「何故だ？」

「あの子たちは・・・生まれてきてすぐ、人を殺したりする訓練をして実際にそれをしてきた」

確かに、ゼストの部隊を全滅させたのはチンクだ・・・

「そんな殺された人たち・・・殺したのはナンバーズでも・・・そのナンバーズが生まれて来た起因を作ったのは私なんです・・・」

「・・・」

「そう考えれば・・・私達が生まれなければ、その人たちは死ななかつた。それに、その『罪』をナンバーズの背負うこともなかつたんです・・・だから」

「スバル」

「え？」

パアッン！

俺は思いっきりスバルの頬をひっぱたいた。かなり力を込めて。

「迅・・・さん？」

「・・・お前、本当にそう思ってるのか？」

「え・・・え？」

「自分が生まれてこなかったらって、本当にそう思ってるのかと聞いている！」

「っ！・・・はい」

大丈夫かな・・・本編でティアナが殴られたくらい腫れちゃった。

「・・・スバル、こんな話をしてやるっ」

「・・・・・・」

「あるところに青年がいました・・・その青年は変哲もない人間です。力も人並み、頭脳も普通・・・ただ、本を読むのが好きでした。それも物語を暗記できるほどに」

俺は語る。俺自身の存在を

「そんな彼は、ある時死んでしまいました・・・彼は神様に殺されたのです。神様は言いました。『私のミスであなを殺してしまつた。貴方に力を授けましょう』青年は力を得ました。さらに神様は言います。『あなたは別の世界で生きなさい』」

本来なら・・・コーヒを零したというものが入るのだが、それは置いておこう。

「青年が送られた世界はある物語の世界でした。その物語はひどく淀んでいて、主人公も、そして仲間も・・・その親さえも、暗い過去や、悲しみを背負っていました。その先起こるであろう事件に備え、青年は主人公と接触をします。そう、青年はその先の未来を変

えようとしたのです」

なのはの怪我也・・・プレシアさんの死も・・・リインフォースの死も・・・全て止めようとした。

「ある時青年は、主人公の仲間の少女にかけられた呪いを解こうとしました。しかし逆に・・・青年は、その呪いとなる媒体に力を模倣されました。」

闇の呪い・・・それは、俺の想像を超えていた。

「しばらくして・・・その呪いは青年の力で世界を飲みこもうとしました。青年なんとか撃退するも、その時から、ある感情が芽生えたのです」

「感情・・・？」

「・・・青年は思いました。『この先の未来、自分どう生きればいいのかだろうか？』」

「え・・・？」

「青年の詰めを誤ったせい・・・それによって、世界は一度窮地に陥りました。青年はそれを悔やみ、生き続けることにしました」

答えは見つからない・・・ただ歩くだけの俺がいる。

「青年はある時、答えを見つけました。『この力で苦しむなら・・・いつそ、消えてしまおう』」

「!？」

「青年は、自決を決意しました。しかし・・・そんな自決は・・・青年にはできなかつたのです」

「どうして・・・ですか？」

一度はナイフで腕を切ろうとした。でもできなかった・・・

「その物語の主人公たちに・・・止められたからです」

俺が洗面台から帰ってこないと思ったなのはたちが不思議に思い俺を探し・・・俺の自殺を止めた。3年前・・・ネギまの世界から帰ってきてすぐだった。世界に照らしたはずの光が、ひどく淀んでいた。違法実験はやまなかつた。俺は世界に絶望し・・・死のうとした。

「主人公は言いました・・・『一緒に、この世界を変えていこう』・・・と」

「・・・」

「主人公は、青年の全てを知りません・・・しかし、主人公は・・・」

「主人公は、なんですか？」

「・・・主人公は、ただ・・・青年を・・・心から、大切に思っているからです」

「……………！」

「お前にも、いるだろう……心から大切に思ってくれる人が」

「あ……………」

スバルが何かを思い出す。

「……………なのは達、エリオ、キャロ……………ティアナ……………あいつらが一度でも、お前を否定したか？」

「……………」

「お前は、お前自身でいい……………お前は这个世界で生きていいんだ……………スバル」

「わ、私……………私……………」

「何も言つな……………お前は確かに普通とは違つかもしれない。それで軽蔑されるかもしれない……………でも、お前には必ず仲間がいる」

俺が言つと、スバルの目から涙があふれてくる。

「だが……………気にすることはない。お前は立派な……………人間だ」

「う、うえええええくん！ああくん！」

「……………よしよし」

俺は抱きつくスバルを優しく抱きとめ、しばらく泣かせてあげた。



「ひつく・・・ひつく・・・うえええ・・・」

なんだか前のフェイトみたいだな。

「・・・落ちついたか？」

「・・・あい」

落ちついてねーじゃん

「ほら、ティッシュ」

「ぞーん！」

やれやれ・・・

ぐう〜

「腹減ったか」

「・・・あい」

「よし、飯行くぞ」

「はい！」

スバルは元気になった。やっぱりスバルはこうでないとな・・・ん？

「スバル、もう落ちついたなら離れていいぞ？」

「だ、駄目です！」

何が駄目なんだよ

「お願いです！もう少し！」

「いだだだだだ！わかつたから力を緩めろ！腕が折れる！」

「あ、ご、ごめんなさい！」

まったくもう・・・

「パパ〜！」

「迅パパ！」

「ターナ、ヴィヴィオ」

二人は何かを抱え、俺のところへ走ってきた。

「どうした二人とも」

「はい！ケーキ作ったの！」

「ヴィヴィオも！」

どうやらパウンドケーキのようだ。すると、スバルがよだれを立たしている。

「お、おいしそう・・・」

「食堂行くんだから我慢しろ」

「は、はい・・・」

「そっだな、じゃあパパはターナたちのケーキを食べるから、食堂行こうか？」

「うん！」

「行く！」

言った瞬間、二人が同時に俺に飛びつく。お、重い・・・

「えっと・・・ヴィヴィオ、迅さんが苦しそうだよ？」

「うっ？」

「えーとね、私でよければ肩車してあげるから、こっちはこない？」

スバルの言葉にヴィヴィオが迷うが、俺が苦しそうという言葉を理解してかスバルの肩に乗った。

「わーい！高い高い！」

「ふう・・・重かった」

「スバルお姉ちゃんママみたい」

「え!?!」

「ふえ!?! ヴィ、ヴィヴィオにはもう8人もママいるでしょ!?!」  
スバル、それも違うと思うぞ。

「だって、温かいもん!」

ヴィヴィオの言葉を聞き、スバルがヴィヴィオを肩からおろす。ヴィヴィオは不思議そうにスバルを見る。するとスバルはヴィヴィオを嬉しそうに抱きしめる。

「ありがとうヴィヴィオ・・・そう言ってもらえるとすごく嬉しいよ」

温かい・・・か

「パパ」

ヴィヴィオがひっついてるのがうらやましいのか、ターナも俺にひっつく。

「よしよし」

「えへへ・・・」

そんなことをやっているとき、食堂についた。スバルのことでもあったか、今日は訓練を中止にしたようだ。

「あ、ママ〜!」

ターナがアインスたちに手を振り、アインスに抱きつく。

「ターナ」

「パパ、ケーキ食べてくれるって!」

「そっか、よかったね」

となのはが笑う。なるほど、作ってたのはやっぱりなのはか。

「スバル、大丈夫?」

「うん、ありがとねティア」

「スバルママ、ママもご飯食べよー」

「「「「「「ママ!?!」「」「」「」「」

なのは、フェイト、はやて、リインフォース、シグナム、アインス、アリシア、ティアナが驚く。

「あ、いや・・・その」

「なるほど・・・スバル、そういうことなんだ」

なのはが怖い。

「これは、私達にたいしての挑戦?」

フエイトもスバルを睨む。それにたじろくスバル・・・なんか嫌な予感。

「み、みんなには負けません！」

・・・やっぱり

「わかったで・・・これはスバルからの宣戦布告と見た！」

この後、ママが増えたと喜ぶ二人と、火花散らす9人がいることで、俺が部屋に引きこもることになった。

第八十話「今と未来を生きるために」(後書き)

テスト中なのでお休みです

迅「次回、第八十一話『正義と悪』TAKE OFF!」

第八十一話「管理局と三人のエース」(前書き)

今回はかなり話がおもしろいですが、ご容赦ください。久しぶりに出てきたKYをまたいじめます。



## 第八十一話「管理局と三人のエース」

スバルが母となり・・・うん、もうこのくだりはいいや。現在俺はなのは、フェイト、はやてと共に、聖王教会を訪れた。機動六課の設立の目的などについて教えるらしい

「俺帰っていい？」

「何言ってるねん・・・来たばかりじゃないか」

「だってよ・・・だるいしKYいるだろうし疲れるし眠いしKYいるし」

「KY今二回言ったよ？」

「とにかく帰る」

「もう、聖王教会に行くって言ったとたんいつもこれ・・・」

なのはがため息をつくが、知ったことではない。俺はこつこつという面倒事は嫌いなんだ。

「ほら、もうつくで？」

「はぁ・・・」

聖王教会に入ると、シャツハに迎えられて中に入った。部屋に入ると、原作通りにKYとカリムがいた。

「だからKYっていつも言うなと言ってるだろう!」

・・・心読んでんじゃねーよ、ドスケベ

「お久しぶりです、迅」

「・・・ええ、カリム」

こうして原作通り理由と、原作と違った予言について話された。

「・・・勇者って、やっぱり迅君?」

「・・・なんで?」

「だって、世界を救ったのは、事実でしょ?」

・・・世界を救ったのは別に管理局のためじゃねーし

「予言はさておき・・・みなさん、力を貸していただけますか?」

「非才な身なれど、全力にて・・・」

「私も同じく」

「もちろんや」

「・・・断る」

なのは、フェイト、はやてが頷く中、俺だけが否定した。おどろいて3人が俺を見る。

「何故だ？」

クロノが俺に聞く。制約を忘れたのかKY

「俺は管理局のためには戦わない。管理局が滅びようが、地上本部が壊滅しようが、知ったことじゃない」

「君はまだそんなことを・・・！」

「あ？元々機動六課への協力はそういう約束で行われたはずだ。それをお前達から破るのか？それとも、俺が協力しないから拘束でもするか？クロノ・ハラオウン」

「っ！君は、何故そこまで・・・」

「そこまで？人として外道に落ちた組織に協力する義理も義務もないだろう。俺はこの戦いが終われば海鳴に帰り、普通に生きる」

「え、どういうことなの？迅」

「・・・特務官はあくまでも形式上だ。機動六課内で俺が都合よく動けるため・・・そして、三提督の屑どもが俺を操りやすくするためだ」

その言葉に三人が驚く。

「もともと切り札なんてこの管理局に存在しない。俺を利用するためだけに置いたただけだ。この戦いが終わったら俺を抹消するだろうしな」

管理局にいきなり少将のような人間を出せるわけがない。ましてや、何かの事故か何かに見せかければ、英雄の死で管理局をさらに美化するだろう。

「管理局の正義など……とうにないだろう」

「「……」「」」

なのはたちは黙る。その通りだからだ。

「それとも、世界を把握するのが我々の使命だなどとまだ抜かすのか？クロノ」

「……それは」

「どうして迅はそこまで？」

「お前達管理局は神じゃない、人間だ……そんな奴らが神を気取り、世界を支配しようとする……それこそ、正義という名の盾の後ろで悪事を行う……そんな組織が正義をなのるか？」

「だが、それはあくまでも一部であって……」

「一部？俺の調べでは既に上層部の8割の人間が横領や人体実験、さらには異世界侵攻などを行っているが？」

「なんだと……」

「さらに言えば、この星は危険だなどと警告して人を避け、資源や

物資を奪う艦隊も発見した・・・それでもお前は管理局が正義と言  
えるか？」

「そ、そんな・・・」

「そんな事実はないと？では見せようか？これが全てだ」

俺は今までの管理局のデータを出した。全員が顔を真っ青にする。

「聖王の遺骸の一部を持ちだしたのは聖王教会の神父!？」

「闇の書の改竄・・・行ったのは管理局やて!？」

「プロジェクトFの実験を始めたのは管理局って・・・」

そう、今まで表舞台にはあるはずもない、管理局の汚点を俺は公開  
する。

「・・・・・・・・」

「なのは、フエイト、はやて」

「えつと・・・何？」

「お前達はどうする？それでも管理局に協力するか？」

「それは・・・」

三人が言葉を濁す。まあ、当然と言えば当然なんだが・・・

「私は……」

フェイトが小さく声を上げた。

「フェイトちゃん？」

「私はもう……管理局を信じない」

「フェイトちゃん!？」

「私は、迅を信じる」

「フェイト……」

フェイトの手が震えていた。今まで信じていたものが崩れれば、そうもなるだろう。

「ありがとう……フェイト」

「うん……クロノ、私はこの戦いが終わったら、管理局をやめる」

「な、何を言うんだ君は！君は執務官だぞ!？」

「それでも……私と言う人間を生み出す根源を作った管理局を、私は許さない」

「うちも、もう限界や」

「はやて!？」

はやても、そのスカートに掛けられた鎖・・・部隊長の証を外す。

「うちも、この戦いが終われば管理局はやめる」

「はやて・・・」

「うちには大切な家族がある・・・そんな家族を苦しめた管理局を、  
うちは許しとくない」

「なのは、お前はどつする？」

俺が言うと、なのははとても苦しそうな顔をしていた。

「私は・・・」

「・・・」

こいつにとって、今の教導部隊は自分の全てのはずだ。多分、こいつが管理局をやめることはないだろう。俺は静かに、念話でなのはに語りかけた。

「（なのは・・・）」

「（迅君？）」

「（別にお前は無理な選択をしなくていい）」

「（迅君・・・）」

別に、こいつを見捨てるわけじゃない。ただ、こいつの夢を潰して

まで、こいつらに管理局をやめてほしいと思っではない。

「私は・・・ずっと、管理局のために戦ってたわけじゃない。私は空を飛ぶのが好きで・・・空を飛んで帰ってくる地上が好きだった・・・だから私はここまで戦ってこれたし・・・一緒にみんなといわれた・・・でも、私はこんな！こんな組織のために戦ってきたんじゃない！」

「なのは・・・」

「だから私はこの先、管理局を信じない・・・そして・・・」

なのはが襟についていた一等空尉の紋章を外した。

「これが、私の答えだよ、迅君」

「なのは・・・」

「私は迅君を信じる・・・そして、迅君と一緒に戦つの」

なのはが笑顔で俺を見る・・・責任重大、だな。

「君は、最初からこれが目的で!？」

「・・・さあな、だが管理局と聖王教会には相いれない組織を俺は作るつもりだ」

「それを僕たちが許可するとも？」

「別にお前らに許可してもらわなくても、管理局の最高評議会がい



ない今となつてはお前らそれを許可せざるを得ない」

ドゥーエが始末したのはかなりいい方向へ進んでいる。

「ちなみに・・・どのような部隊なのですか？」

「お前達管理局、そして他の組織の悪を全て根絶する組織・・・名はまだないが、この戦いが終われば、俺はそれを作る」

今日来たのはこのためでもあつた。管理局からの別離の宣言。そしてリメイカーとはまた違う『本当の平和』を作る組織だ。

「君は本気で！管理局を敵に回そうと言うのか！」

「敵？敵とはなんだ？正義を行う組織に対して敵？それこそお前達が悪じゃないか？」

「・・・貴方も知っているように、管理局は巨大な組織です。貴方達4人では、とても無理ではないでしょうか？冷静に考えても、貴方が言っているのは無謀としか思えません」

「無謀ね・・・まあ、確かに4人ならな・・・だが」

別に俺達4人だけではない。

「日本には『忠を尽くす』という言葉がある。お前達は何を信じる？組織か？自分か？任務か？思想か？俺は、自分自身の正義を信じる。そして・・・俺を支える仲間たちをな」

俺は言いながら立ち上がる。

「じゃ、俺はそろそろ帰るぜ」

「……………」

「あ、迅？」

「なんだ？カリム」

「明日、お時間がありますか？」

「は？ええ、まあ……………」

確か明日は予定ないし、ゆっくりしようとか思ってたからな…………

「なら明日、またここへいらしてください」

「はあ……………」

こうして俺たちは退出して、機動六課へ帰ることにした。

機動六課　ロビー

「……………」

「……………」

「お前ら、本当にやめるんだな？」

俺が見せてこいつらがやめると言い出したのは予想外だった。

「うん、私は迅君についていくつもりだよ?」

「もちろん私も」

「うちもやよ」

はあ・・・

「わかったよ・・・ありがとな」

とりあえず、これからが大変だ・・・

「でも、部隊の話は本当なの?」

「部隊?何を言ってんだ・・・新しい組織、だよ」

「そ、組織・・・」

とりあえずこれから俺がすべきこと・・・

「なのは、昔俺に言ったよな『一緒に世界を変えていこう』って」

「うん」

「それがこの答えだ。この世界の闇を・・・全て根絶する」

そのために俺がいて、みんながいる。

「この世界で俺が本当にすべきことだからな」

「うん……」

こうして、俺たちは新しい決意を決めることにした。

第八十一話「管理局と三人のエース」（後書き）

秋風「眠いです」

迅「次回、第八十二話『闇の根絶』 TAKE OFF」

## 第八十二話「闇の殲滅のために」(前書き)

コミケから帰ってきました。

とりあえず初めてだったので色々大変でしたが、感動と汗と涙でした。8割汗でしたけど

コミケでとりあえず知ってる先生がたくさんいました。その中でも私がリリカルなのは小説を書くきっかけ(ここではなく書く自体)があった大先生にお会いできたので超嬉しかったです。

二日目はしくりました。東方知らない私が行っても意味がなかったornでも楽しかったです。

実を言えば今度の冬コミにはサークルで参加する予定ですので、その時はこの小説で書いてる先生や、読者の方とお会いしたいですw

でわでわ、久しぶりの本編をどうぞw

## 第八十二話「闇の殲滅のために」

「・・・なんでまた来なきやいけないんだよ」

翌日、俺はまた聖王教会を訪れた。

「暑い・・・」

夏だから暑い・・・まあいいけど・・・

「よう、シャツハ」

「これはこれは・・・おはようございます」

シャツハがいつものシスターの服装だ。

「暑くないか？シャツハ」

「慣れですよ、慣れ」

「あ、そ・・・カリムは？」

「ええ、もうすぐ来ると思いますよ」

もうすぐ、来る？

「あ・・・」

そこにいたのは、白いワンピースに白い帽子を被ったカリムの姿だ

った。

「おはよう迅」

「…………おはようカリム。その格好何？」

「うふふ、似合いますか？」

「似合ってるけど……………」

「さあ、街へ連れてってください」

言いながらカリムが俺の腕を掴む。

「お、おい!？」

「さ、行きますよ？」

こうして、俺は引つ張られて車に乗り込んだ。街まではかなり距離があるので金を使いたくないということで、途中からバイクに乗っていくことにした。二人乗りがしやすいマシンディケイダーに乗り、クラナガンへ行くことにした。

「…………ちなみにカリム？」

「はい？」

「俺を呼び出した理由って、この街の案内？」

「何を言ってるんですか？」



ん？じゃあ何か仕事か？

「デートに決まっているでしょう？」

はあ！？

「よくあの状況でそれを思いつくな」

「いいじゃないですか、それとも・・・私とデートするのは嫌ですか？」

「・・・別に、嫌じゃないですけど」

なのはたちには多分仕事だと言っちゃったからなあ・・・はあ

「で？どこに行きたいんですか？」

「えっと・・・ですね」

「？」

なにやら困った顔のカリム。どうしたんだ？

「実は私、今までほとんど休みを取ったことがないし、街に出たことがなかったので、どうすればいいのやら・・・」

・・・籠の中の鳥とはこのことか・・・はあ

「わかりました。とりあえず行きましようか」

「はい！」

とりあえずカリムと手を繋ぎ、街を歩くことにした。

「人がたくさんですね……」

「まあな……今日は休日だし……そうだな、映画はどうだ？」

「映画……いいですね、行きましょう」

こうして映画館へと入っていった。

「とても感動的でした」

「ああ、そうだな」

正午。見た映画は『青騎士』という映画。ぶつちやけ手塚治虫の漫画を映画化させたもの。並行世界でも手塚治虫は漫画家らしい。漫画の神様だな。ぐうたら漫画を『読んで人間の名簿にコーヒーぶっかける』神様とは大違いだ。内容は所々違って、最初からアトムがないストーリーだ。アトムの登場は人間だと思い込んでいたがロボットで、覚醒するというものだ。そして青騎士は人間という設定で、なかなかおもしろかった。ちなみにこの話は『現実世界』の漫画でも存在するので、是非とも読者は読んでほしい。

「とても感動しました。ロボットだけの国のために戦う人間と、人のために戦うロボット……正直、どちらに味方しているのか迷

います」

「・・・カリムは優しいな」

「え・・・はい」

カリムが顔を紅くする。

「人とロボットか・・・俺は間違っていた気がするがな」

「ロボットの国・・・ですか？」

「ああ、ロボットと人間・・・確かに差異はある。ただだからこそ、共存の道を選ばなければいけないんじゃないか・・・そう思う」

「それは、貴方が思う思想ですか？」

別に思想というわけではないが・・・俺が思うのはそうじゃない。

「人は都合のいいものは利用し、用がなくなれば排除する。それは今の管理局もそうだ。だから俺は青騎士と同じかもしれない・・・」

「ふふふ、英雄ね」

「からかうなよ・・・っと、そろそろ飯にしよう。どこがいい？」

「そうですね・・・昔からはやてが良く話してくれるのですが、和食というものが食べてみたいです」

和食・・・か

「ならあそこにするか」

以前見つけた地球の料理が食べられる店。あそこならだいたいのものがあるだろう。こうして、俺たちはその店へ向かった。

店に入ると、席が空いているので影の席に座った。帽子を取れば、カリムがいるのがわかってしまうので眼鏡をかけさせた。

「なにが食べたい？」

「そうですね・・・これは？」

「ああ、和食だな『天ぷら御膳』・・・これはいいんじゃないか？」

「じゃあ私はこれにします」

「・・・じゃあそうだな、俺もそうしよう」

こうして料理を頼み、水を飲む。

「この後はどうしたい？」

「そうですね・・・買い物があります」

「買い物か・・・」

「ショッピングモールにでも行くか」

「ショッピングモール？」

「ああ、色々な店が並んでいる場所さ」

あそこならなんでもあるしな。

「お待たせしました」

「おいしそう」

「いただきます」

こうして二人で食事を食べ、店を出た。金は俺が払ったが、カリムが少し不安そうに俺を見る。

「あの、すみません」

「なに、気にすんな」

「でも、誘ったのは私なのに・・・」

別にあんなの大金じゃねーしな

「さてと、ショッピングモールに行くか」

バイクに乗って数分。俺たちはショッピングモールで買い物 시작했다。彼女自身のお金は半端ないほど多い。流石は聖王教会のトップと言っべきか

「わあ、可愛いですね」

「ん？」

ああ、ぬいぐるみか……この前ヴィヴィオとターナにも買ってやったな。まあ関係ないけど

「あれは？」

「ああ、露店だよ」

そっか、露店なんか知らないよな。

「これは……」

カリムが手に取ったのは十字架のシルバーネックレス。

「綺麗……」

「……おっさん、これひとつね」

「え!？」

カリムが驚いた顔になる。

「欲しいんだろ？買ってやるよそのくらい」

「しかしそんな……」

「気にすんな、我慢は良くないぞ」

「・・・・・・・・はい」

カリムは購入したペンダントを首にかける。どうやら気に入ったらしい。

「ありがとうございます」

「・・・・・・・・どういたしまして」

「さて、そろそろ帰・・・」

ドオオッ！

「爆発!?!」

まさかリメイカーか!?!

「カリム、お前ははやてたちを呼んでここにいろ!」

「でも、迅!?!」

「いいから!」

俺は駆けだす。

「トレス・オン  
投影開始!」

アーチャーの双剣『千将・莫邪』を投影し、走り出す。

縮地！

一気に飛び、爆発現場へと降り立った。

「……ッ！」

そこは見る影もない……人々が焦げたにおいがする。

「ああ〜ん！」

女の子が泣いている。隣にいるのは母親か……まだ、息がある

「サイフォジオ！」

剣を刺し、身体を回復させる。

「君は逃げろ」

「えっぐ、えっぐ……」

「よお……速かったなあ……」

男の声がした。そこにいるのはロックマンゼロの敵ボス『ヘラクリウス・アンカトウス』だった。この男が……

「俺の名はガンツ！元は管理局で名がはせたんだがな！お前を待っていた！」

「……れ」



「あん？」

「黙れ」

俺は双剣をその場に刺し、男を殴り飛ばした。

「が……」

「……ゆるさねえ」

「馬鹿な、俺が生身の人間に……」

俺は次の瞬間からのことを覚えていない。

カリムside

「はあ、はあ……」

・  
迅が爆発地点へ行ってしまったので、現在私が追う形なのですが……

「ひどい……」

あちらこちらに死体が散乱していた。

「がああっ！」

「何!？」

声がするほうへ私は走る。まさか迅の身に何か!?

「ひっひい!助けて!許して!」

「・・・そう助けを請う人間を、お前達はどれだけ殺してきた?」

なにか装甲を纏っているような男が何かに襲われていた。あれは・

「じ・・・ん?」

魔力がとどめなく溢れてる・・・あれは、炎?

「オペレーション・・・X」

『リョウカイ、ボス・・・Xバーナーノ発射シーケンスヲ開始シマス・・・ライトバーナー出力上昇・・・50万FV・・・』

「い、いけない!」

彼は、あの男を殺してしまう。そんな直感が、私の頭をよぎった。

「迅!」

「塵になれ・・・」

『レフトバーナー出力上昇・・・50FV。ゲージシンメトリー・・・イクスバーナー発射スタンバイ』

「ヒ、ヒイイイ！」

「迅！駄目です！」

私は無我夢中になって迅に抱きついた。

「どけ……」

「駄目です！どきません！」

「……邪魔だ」

「殺してはいけません！殺して、なんの意味があるんですか！」

私はとにかく叫び続けた。迅に手を染めて欲しくない。ただそれだけの一心で

「迅！」

そして私は、思い切り抱きついた。

「あ……」

「迅、元のあなたに、戻ってください……」

「カリム……？」

私の名前を呼んでくれました。

迅side

俺は・・・いつたい？

「ここは・・・」

目を覚ますと、管理局員たちが現場検証をしていた。いつの間にか空も、夕焼け色に染まっている。

「俺は・・・」

「気が付きました？」

「カリム・・・」

そっだ、俺は戦ってて・・・それで・・・

「あいつは!!」

「・・・逃げました」

「そうか・・・ごめん、カリム。カリムが止めてなければ、今頃俺は・・・」

そっいうと、カリムが笑顔で人差し指を使って俺の口を塞ぐ。

「終わったことを悔いてはいけません・・・それに、わかりましたから」

「え？」

「貴方がどれだけ、闇を殲滅したいと思っているのか」

「カリム……」

「私も見ました……あのもの達の行為を……そしてあれが管理局の闇であると」

確か言ってたな……管理局がどうか

「でも、あなたがあなたでなくなったら、闇は消えません……」

「悪かったよ。カリム……」

こうして俺達のお出かけは幕を閉じた。

S i d e o u t

カリムが帰ってくると、そこには義弟のアコースがいた。

「お帰り義姉さん」

「ロツサ」

「どうだった？調査は<sup>データ</sup>」

「楽しかったわよ？」

調査……というのは迅のことだ。この先彼が作るであろう『管理

局及びあらゆる組織の悪』を潰す組織。それが自分たちの組織『聖王教会』にどう影響するのか？というものだ。

「わざわざ大将自ら動かなくても」

「いいじゃない。それに私、調査として出向いた覚えはないわ」

「え？」

「見定めに行ったのよ・・・彼自身をね」

そう、カリムは別に調査として出たのではない。迅の人としての器・・・それを見定めに行ったのだ。

「ま、彼が気になるなら頑張っつてね、義姉さん」

そう言っつてアコースは出ていく。それを確認してから、カリムは嬉しそつに買っつてもらつた十字架を見た。

「・・・私も、聖王教会やめちゃおうかしら」

カリムはぼそりと呟いた。

第八十二話「闇の殲滅のために」（後書き）

秋風「というわけで昨日夏コミから帰ってきました」

迅「えらくご機嫌だな」

秋風「うん、小説の大先輩に会えたからね」

迅「大先輩？」

秋風「昔ここで小説を書くきっかけになったのはU・T・先生がきっかけだが、リリなの小説を書くという志を得たのはその人のおかげなのさ」

迅「なるほど」

秋風「だからちよつと嬉しかったのさ」

迅「ふーん」

秋風「ではこれでw」

迅「次回、第八十三話『世界の影』TAKE OFF!」

## 第八十三話「段ボールは戦士の必需品」(前書き)

はい、ということで今回と次回は一切ライダー入れません

今回「わからないアニメ・ゲームがある」と言われてもリクエストされてないので私が勝手に考えました。

では本編をどうぞ。今回はゲストが後書きに来ています



## 第八十三話「段ボールは戦士の必需品」

過ぎ去りし平和な日々・・・今日も平和だった。だが、深夜2時。俺に特別任務が下った。

『質量兵器所持倉庫を破壊せよ』

なんとも面倒なミッションだ。俺はプランを見て、場所を見る。

「・・・少し距離があるな」

『マスター、データが揃いました。管理局の違法研究及び警備に使用される質量兵器が貯蔵されています。管理組織は『ヴァルツファミリー』です』

「・・・なるほど」

俺は立ち上がり、ゼロを首にかけてベッドを降りる。ヴァルツファミリー・・・

「パパ？」

「ん？ターナ起きちゃったのか」

言いながら俺はターナを抱き上げる。

「どこかに行くの？」

「ああ、ちょっとお仕事だ。ヴィヴィオといい子にしてるんだぞ？」

「うん、パパ」

ターナをベッドに戻し、頭をなでる。ターナはスヤスヤと眠りにつき、俺は確認してから外へ出た。

「あれ、迅君？」

「なのは・・・また残業か？」

「ううん・・・ちょっとお風呂。どこかに行くの？」

「ああ、特別任務」

「私も行ったら・・・駄目？」

突然何を言い出すんだこのアホ娘。

「アホ娘はないんじゃない？」

「心読むな」

「つたく、現状わかってんのか、こいつ・・・」

「私も、迅君の力になりたいから・・・だから・・・」

「・・・わかったよ」

「ほん」ただし、条件を付ける「条件？」

「1 お前はついてくるだけで一切手出し無用 2 俺がやることに一切口出ししない。この二つを守れ」

「うん、わかった」

こうして、俺となのはは質量兵器を扱う倉庫へと向かうことになった。

某日時 深夜3時 ミッドチルダ山岳地帯

現在俺となのははバリアジャケットを装備して草むらに隠れる。

「あんなところに倉庫が？」

「……ここ一体は管理局が管理する山岳地帯のはずだ……上層部が一枚かんでるな」

俺は高機能のカメラで周囲を写真に収める。

「……さてと」

俺はバリアジャケットのヘルメットを外し、バンダナを巻く。そして眼帯を着けた。

「迅君、その眼帯なあに？」

「これか？こいつはソリッドアイって言ってな、望遠機能や赤外線機能なんかが付いてるんだ」

「ふえ〜凄いの。じゃあそのバンダナは？」

「……気分だ」

とりあえずスネークの格好だ。ソリッドアイなのでオールドスネークなのはわかるだろう。わからない人は『METAL GEAR SOLID 4』をプレイしてくれ。ゲームとムービーの比率が6（ムービー）：4（ゲーム）だが、PS3なだけに感動するぞ。

「……さてと、敵兵は……ふんふん、周囲警戒が4か。マフィアの癖に警備薄いなおい」

「あの、迅君？」

「なんだよ」

「今回の任務ってその……」

「人が死ぬのかって？」

「……うん」

どうやら敵が質量兵器を持っているのを見て、俺も人を殺すのではないか？もしくは俺が死ぬのではないかと心配しているらしい。ついてこなきゃいいのに……

「大丈夫だよ、なのははここにいる。安全確保したら手を上げるから」

「うん」

こうして、俺は草むらからコンクリートの施設付近に足を踏み入れる。

「・・・センサーに反応は2つなるほど、赤外線センサーがあれば兵士は少なくて済むのか」

俺は近くに歩く兵士をサイレンサー付きの睡眠銃『mk・2』で狙い撃つ。

「うっ!」

見事頭に命中。一撃で沈む。

「・・・人が?」

やばい・・・どこから?あそこか・・・兵士がゆっくりと歩いてくるので、俺はそこを移動し、車の陰に隠れる。最初にいた場所が丁度真後ろになる。

「・・・気のせいか?」

男が首を傾げた瞬間、一気にCQCをかける。

「うっ!」

「・・・言え、赤外線センサーはどうやって外す」

「・・・その、詰所の・・・ボタン・・・」

「言え、中の構造を把握できる地図の場所、配備人数」

「し、知らない……」

「言え……！」

「ホントに、ホントに知らないんだ……！」

「つち、使えねえ

「うがつ！」

俺は一気に首を締めあげ、気絶させてトラックに放り込んだ。そのまま段ボールをかぶって進む。監視カメラもなんとか潜り抜ける。残りの外にいる兵士を気絶させ、詰所の入り口の影を見る。どうやら一人だけのようだ。

「……動くな！」

「ひいつ！」

ホールドアップさせ、尋問する。

「赤外線解除のスイッチは？」

「こ、これ……」

俺はボタンを押す。

「次、施設内の詳細な地図」

「こ、これだ・・・」

「御苦労」

「うがつ！」

俺は手刀で男の首を叩き、地図を手にする。そこまで複雑じゃないな・・・後はバインドで縛ってと・・・

「（なのは！いいぞ！）」

「（うん！）」

なのはが入り口まで降りてくる。

「行くぞ、俺の後ろについてこい」

俺はなのはと施設内に入り込んだ。

施設に入ると警備はないが、代わりにガジェットらしきものが警戒していた。

「・・・ガジェット？」

「もしかして、リメイカーかな？」

その線は薄くはないな・・・機能を停止させるのは俺のカスタム使用の『音が出ない』チャフグレネードだ。

「そらよつと」

グレネードが弾け、チャフが散布される。それによってガジェットが動きを停止する。

「今だっ！」

俺は持っていたゼロをバスターに変えて、警備に当たっていたガジェットを全て殲滅した。

「よしつと」

「あの、迅君？」

「ん？」

「もしかして、いつもこんなことしてるの？」

「んー・・・まあ、潜入ミッションではいつも人と出会わないようにするのが基本だからな」

「そっか」

俺たちはそのまま奥に進む。途中で様々な銃を見つける。

「ふうん、なかなかだな・・・保存状態もいいし、いくつかもらっておいてもいいか」

「これ、全部銃・・・なのかな」



「だな。この箱いっぱいにな」

そう、積み上げられるのは俺となのはより高く積み上げられたその銃の山

「……とりあえず爆破はまずいからなあ」ゲート・オブ・バビロン『王の財宝』」

ゲート・オブ・バビロンを出し、そこに武器を放り込む。

「……うん、これの処理は後で考えよう」

体を魔力で強化し、武器の入った箱を次々と放り込む。

「後は周囲の戦車か……こいつあ骨だな」

ぶっちゃけこんなもんゲート・オブ・バビロンの財宝に入れたくないし。

『武器はいいんですか？』

「……昔の憧れだ、気にすんな」

前世だとよくモデルガンとか持ってたからなあ……っと、思い出にふけるのは後だな。

「後は工場を爆破して任務終了……」そこまでだあ!「……あ？」

見ると、周りに黒いスーツ。そして小太りの男がいた。多分このファミリーとそのボスだろう。

「ど、どつするの迅君!」

「だあってろ、すぐ終わらせるから」

「てめえ……うちのシマ荒らすとはどついつ見だっ、あぁ!」

「……オメーがボスか？」

「だったらなんだ!」

「……やっと見つけたわ、ヴァルツファミリー」

「おめえだな、やっと見つけたぜ……」

「ああ？」

「質量兵器はどうでもいい……オメーが孤児を管理局の違法施設に実験体として売ってた張本人か」

「身よりのない餓鬼を売って誰が困るよ!」

ガハハと笑う男……うぜえ

なのはside

とりあえず銃を向けてる人をなんとかしたいのに、迅君がずっと男の人に聞いていた。そして……

「やっと、辿り着いた」

迅君の体からおびただしい魔力が流れる。まさか、キレてる？

「じ、迅君？」

「あ？」

「その……」

「大丈夫、キレてはない……むしろ」

今までにないほどの恐い笑顔だった。

「嬉しいのさ」

「何をごちゃごちゃ言ってる！殺してやるぜ！」

近くにいた男の人がアーミーナイフで襲いかかる。けど……

「じはっ！」

男の人はそのまま跳ね飛ばされた……否、迅君が殴り飛ばした。

「……さあ、お前達の罪を数えろ」

『リミッター解除、マスターいかがいたしますか？』

り、リミッター解除！？

「……モデルOX」

『了解いたしました。ライブメタルモデルOX機動』

「ロックオン」

『適合者確認、R・O・C・Kシステム起動開始』

迅君の体が光り、紅い装甲と紅いゼロ・・・それを纏った真紅の目になっていた。

「ゼロ、最初から飛ばす・・・なのは、隠れてる」

「う、うん・・・」

私は言われて箱の陰に隠れる。

「迅君、頑張つて・・・」

私はそう言つて迅君を見守ることにした。

迅side

さあ、全力全開だ・・・行くぜ！

「くらえー！」

「・・・アークブレイド」

俺は空中へ飛び、銃を向けた奴らにめがけてアークブレイドを放つ

た。

「ぎゃああー！」

「このっ！」

着地したところを狙い、真剣で5人ほどが俺に襲いかかる。

「滅閃光」

地面にエネルギー波をぶち当て、そのエネルギー波が四方八方へ飛んでいく

「ぎゃあああああー！」

それに吹き飛ばされる。俺はそこから周囲に向かってエネルギーのチャージショットを連発する。

「がはっ！」

「ひ、ひいー！」

逃げ出す者は放置。俺はただ、立ち向かってくるものに攻撃を加えていく。だが……

「待て」

俺は逃げようとするブタ……もといファミリーの首領めがけて剣を投げた。剣は男の横を通り、壁に突き刺さる。

「ひい！」

他に敵はいない。残るはこの豚野郎だけだ。

「さ、て、と……後はお前だよ、豚野郎」

「な、何が望みだ！」

「望みねえ……強いて言うなら、お前に恐怖を与えることかな  
言いながら壁に刺さったOXセイバーを掴み、引き抜いた。

「お前は今まで自分の売った孤児がどんな目にあつたか知らないだ  
る……ええ？」

「ひいい！」

そう、この男を追っていた俺の理由……それはまぎれもない、タ  
ーナのためだった。ターナを拾い、研究所に売りつけた。ターナだ  
けではない。未来ある子供たちを拉致しては、何人も金に換えて来  
た。そんな男を、俺が世に放つたままにしておくはずがない。こい  
つには、地獄を見てもらうとしよう。

「か、金はいくらでも払う！だから、だから助けてくれえ！」

Side out

男は必死に命乞いをする。そして、腰にあった銃を密かに握ってい  
た。いくらなんでも殺すことはないだろう。女が見ている。周囲の

盗聴器でも殺さないということを女と約束していた。なら、男が背を向けた時がチャンスだ。

「・・・制裁は、後で下す」

予想通り、迅は後ろを振り向いた。チャンスは今。男は銃を抜き、撃った。

「死ねえ！」

「がつ・・・は」

「死ね死ね死ね死ねえ！」

男は連続で銃を撃った。

「きゃあああ！迅君！」

女・・・高町なのはが悲鳴をあげる。やった・・・この状況を打破できた。武器はまだある。自分をこけにした男と、連れの女をこの銃で殺す。そう思い箱に手をかける。その瞬間だった。

「あー・・・」

「ひっ!?!」

突然箱から手が出て来た。か細い、子供の手。それは腐っていて、血まみれだった。

「あー・・・」







て、残っている戦車とかも全部バラバラにしておいた。今は入口だ。

「もう4時か・・・帰って5時・・・駄目だ、明日は昼まで寝る」

「にははは、私も午前中の訓練はお休みかな」

二人で笑いあい、帰ろうとする。

「あらら？帰ってしまったの？」

瞬間、体に寒気が走った。

「「!？」」

そして、何かがこっちに向かってくる。

「どけっ!!」

「きゃあ!？」

俺はなのはを突き飛ばす。その瞬間だった。

ズバアッ!

「ぐあああああああああああああああああ!!」

俺の左腕が、吹き飛ばされた。

第八十三話「段ボールは戦士の必需品」(後書き)

秋風「はい、ということですが今回はモデルOX、そしてメタルギアソリッド4を出しました。ライダー多いと文句言ってきた方々、これで文句ねーだろこのやるーって感じですよ」

迅「口が悪い」

秋風「すまん、つい本音が」

迅「つてか、俺の腕吹っ飛んでんだけど」

秋風「いいじゃん」

迅「よくねーだろ！なんでだよ！」

秋風「それは詳しくは次回」

????「あの〜・・・」

迅「?誰だこの美人」

ソラ「は、初めまして?ソラです」

秋風「おお〜ソラ君、久しぶり〜」

迅「・・・誰?」

秋風「蒼天シリーズではゲスト登場の『魔法少年の物語』続編の『

魔法少年の物語〜奇跡の神子〜』のソラ君です」

迅「ああ、なるほど・・・俺と同じく、リインフォースが従者にいる、あの」

ソラ「ええ、どうも」

秋風「どう？最近は」

ソラ「えと、色々大変です」

秋風「昔は・・・っていつでも前作ではあんなに子供だったのに・・・」

ソラ「僕も大きくはなりませんよ」

秋風「ああ、あのころのソラ君が懐かしい・・・」

迅「なんでお前はそんなふうになってんの？」

秋風「あの可愛くて抱きしめたいソラ君はどこへ!」

迅「ソラ、何かリクエストは？」

ソラ「マキシマムドライブフル稼働で」

迅「了解、行くぜソラ」

ソラ「はい」

CYCLONE!

JOKER!

迅&ソラ「変身」

CYCLONE JOKER!

秋風「え？え？何してんの？」

迅「さらにつと」

XTREME!

迅「覚悟しろ」

XTREME MAXIMUM DRIVE!

秋風「え、ちよつとま・・・」

迅&ソラ「ダブルエクストリーム！」

秋風「ぎゃああああっ！」

迅「これで悪は滅びた」

ソラ「ありがとうございます」

迅「さて、そろそろ時間だ」

ソラ「ありがとうございました、楽しかったです」

迅「ではお土産に Fate / stay night の宝具一式と、T2 ガイアメモリと、ロストドライバーだ。是非使ってくれ」

ソラ「ありがとうございます。それじゃ」

迅「次回、第八十四話『覚悟』 TAKE OFF! 」

ソラ・フォード 出演作品 魔法少年の物語〜奇跡の神子〜

魔法少年の物語の続編の主人公。機動六課ではアドバイザーとして活躍中。現在一等空佐。他の局員にはあいかわらず女性と見間違えられるほど美人になってる。今度に期待。ちなみにこの先生には作者はよくお世話になります。

第八十四話「殺す覚悟と殺さぬ決意」(前書き)

とりあえず今回も内容が濃いです。ギャグ要素が0なので楽しめる  
かわかりませんが、頑張って書いたのでよろしくお願いします

## 第八十四話「殺す覚悟と殺さぬ決意」

「ぐあああああああああああああああああああつ！」

俺の左腕が吹き飛ばされる。馬鹿な・・・魔力だったら、感知できるはずなのに・・・

「ざんねくん、今は魔法じゃないわ」

そこにいたのは黒いロングヘアの女だった。

「・・・何？それにお前・・・リメイカー・・・」

周囲にガジェットを従えている。つくそ・・・

「ご名答・・・私はリレイ、メリーの姉よ。妹を可愛がってくれた礼をしに来たわ」

「・・・はん、迷惑なお礼だな」

「そうかしら？この『ウォーターカッター』の切れ味は」

「ウォーターカッター・・・」

別名ウォータージェット・・・300MPaほどに加工された水を0.1mm～1mmほどの小さい穴などを通して得られる細い水流・・・刃のように切断されることからウォーターカッターの別名がついたと言われている。確か中にはマッハ3ほどの速さで流すウォータージェットもあるとか言ってたな。そしてアブレスティブジェットと



呼ばれる加工法によってダイヤをカットしたりするのも使つとか  
．．．くそ、完全に油断してた．．．

「ぐっ．．．うう．．．」

「無敵の特務官様も腕がふっ飛ばされちゃあ変身もできないよねえ  
．．．」

「なめるなよ！ザゲルガア！」

ザゲルガを撃ち、俺はなのはこのところにまで下がる。

「なのは！逃げるぞ！」

「．．．．．」

「なのは？」

「腕が．．．迅君の腕が．．．」

やばい、いきなりの事態に混乱してやがる！

「ちいっ！」

俺はなのとは自分の腕を抱えると、山岳地帯の崖へと落ちて行った。

リリイ s i d e

「ふん．．．他愛もない」

それにしても、近くにいたあの小娘は・・・

「高町なのはか・・・ふふ、ふふふふ・・・」

ガジェットに指示を出して搜索を始める。管理局へ一矢報いる力を、私が見るとしよう。

迅side

「いててて・・・」

崖の下に着くと、俺はなのはがいることを確認する。

「なのは、おい、なのは!」

「あ・・・じ、じん・・・君・・・」

「まったく、手間駆けさせやがって。」

「そ、そうだ!腕!腕は!??」

「ああ、ここにあるよ」

言いながら腕を出し、木の下に降りる。

「は、はやくみんなに知らせなきゃ!それに、腕を早く治して、逃げなきゃ・・・!」

「落ちつけなのは……この空間じゃ多分阻害魔法はされてる」  
さて、どうしたのか……

「じゃ、じゃあー！ど、どつすねば……どつすねばいいの！？」

「落ちつけ、お前らしくもない」

「だって……だって……」

「はぁ……高町なのは「一等空尉！」

「！」

俺はなのはを階級付きで呼ぶ。

「管理局員不屈のエースがそんなんでどうする！」

「あ……」

「しっかりしろ、今の状況で頼れるのはお前だけなんだ」

「……ごめんなさい、ありがとう迅君」

よし、もう大丈夫だな……

「腕は再生に時間がかかる……片腕で乗り切るしかねーな……」

とりあえず凍結させて、腕は『ゲート・オフ・パヒロン王の財宝』の中に入れた。多分、大丈夫だろ……

「私は、どうすればいい？」

「……しょうがねえ、力貸してくれ」

「うんー！」

さて、ここからどうする……山岳地帯で、下山なんて時間がかかる。だが、腕を着ける時間もしかりだ……しょうがない

「なのは」

「何？迅君」

「とりあえず、脱出する……このAMF制御下でどこまで飛べる？」

「……あんまり飛べないかな、でもなんとか……」

なら、仕方がない。

「なのは、お前にこれを」

言いながら俺はなのはにAMFを無効化させるペンダントを渡しておく。

「これを使えばAMFの中でも魔力を発揮できる」

「うん、使わせてもらうね」

言いながらそれを首にかける。

「お前には時間を稼いでもらいたい。ガジェットとあのリリイとかいう女と戦って時間を稼いでくれ。ペンダントの効力はあまり持たない。気をつける」

「迅君はどうするの？」

「俺はそれまでに魔力を充填して、一撃をくらわせる。前にネギ達の世界で手に入れた『バックティオー仮契約』のカードは持ってるな？」

「うん、はなみ離さず持つてるよ！」

と、満面の笑みでカードを見せる。

「そのカードを使うわけじゃないが、俺が魔法を使う瞬間に俺のすぐ近くに転送する。それを持つてるよ？」

「うん！」

こうして俺たちの生き残りをかけた作戦が開始される。

なのはside

私は迅君の作戦を信じて、空中へ上がる。するとそこには、さっきのリリイって女の人と、ガジェットの軍勢が待ち構えていた。

「あら、貴女一人？」

「・・・そうです。私は時空管理局機動六課スターズ分隊長、高町なのは・・・貴女を逮捕します」

「・・・小娘が、私が逮捕されるとでも思ってたのかい？」

「・・・」

それは、確かにそう思ってる。でも、できれば武力で解決はしたくなかった。でも、やるしかない。私はレイジングハートを構えた。

「生意気な小娘だ・・・私直々に始末してやるよ」

ガジェットが下がり、リリイさんが構える。

「戦いの前に聞いておくよ」

「・・・え？」

「あんだ、人を殺したことはあるかい？」

突然の言葉に、私は驚く。

「あ、ありません・・・」

「そう、じゃあアンタの負けは決まったよ!!」

突然凄い威圧感に襲われる。リリイさんが剣を構えて突っ込んできた。

「つく！レイジングハート！」

『オーライ、マイマスター。アクセルシューター』

「シューット！」

私はアクセルシューターを撃った。でも、リリィさんは全部を弾いてきた。

「こんな甘っちょろいの効かないよ！」

「速い！？」

『プロテクション』

レイジングハートが自動でプロテクションを形成したけど、いきなりヒビが入った。

「なっ！？」

「非殺傷設定なんかしてるあんたが、勝てるわけないねえ！」

「ぐっ……！」

私は距離を取り、レイジングハートを構えなおした。

（時間を稼ぐのは約15分……迅君がそれまでに何とかしてくれるんだから、頑張らないと）

「あ、貴女は……なんでリメイカーになったの！？それに、どうして殺傷設定なんか……」

私はとりあえず時間稼ぎのために聞きだす。すると、リレイさんは短く笑った。

「流石、天下のエースは違うわね……。末端の空士のことなんか知らないわけだ」

「え……。？」

「私は元管理局員……。それも、貴方と同じ空隊のね」

空隊……

「貴女が入局した10年前……。私も妹も管理局員として活動していた。その5年後、貴女がエースとして名を馳せたころ、私達に任務が下った」

「任務？」

「それは……。ある反管理局世界への威嚇攻撃。私達は催眠ガスを散布する仕事を任された。でも、それは違っていた」

「違っていた？」

「いったい、何が……？」

「催眠ガスを放射し、反管理局を唱える政府へ乗り込み抑えるのが目的だったはずなのに、私達は……。違うものを撒いていた」

「違う、もの……。？」



「・・・即効性の、毒ガスさ」

「!？」

毒ガス!？」

「私達は管理局の上層部にはめられたのさ・・・世界を破滅に追いやった私達に、居場所はなかった。私達の隊は指名手配となり、それに気付いた私達は逃げ出した。途中で何人も来る追手を逃れてね・・・」

「・・・」

「そして私はある事実を知った」

「・・・事実？」

言いながら、リライさんは私に剣を向けた。

「あなたのために、私達は追いやられたのさ！」

「!？」

どういっ、こと・・・？

「あなた、8年前の任務で怪我を負ったね・・・」

「はい・・・」

「その任務のバックアップは私達だった……そして当時の上官は未来あるエースを傷つけたせいでお払い箱になるはずだった。だが、その上官は私達にその責任をかぶせた！そして始末するついでに私達に一つの世界を滅ぼさせたのさ！」

「!！」

そ、そんな……私の、せいで……？

「だから私は誓ったよ！どんなになっても生き延び、管理局に復讐をすることを！そして、全てを壊し、殺し続ける覚悟をね！」

「……」

確かに、私は8年前無茶をした……そして、今……私のせいで迷惑をかけた人がいる。だから……

「なら、私が貴女を救います」

「はっ！アンタごときに何ができるのさ！人を殺す覚悟もないあんたが！」

「確かに、私は人を殺したことはないし、殺せません……そんな覚悟はない」

「そら見る、言ったこ「でも」!？」

私はリリイさんをまつすぐ見つめた。

「私には、人を殺さずにことを解決する決意はある！」

10年前

「ふええ！こ、怖かった！」

私は迅君の家で映画を見ていた。戦争の映画・・・人が殺し合い、戦い抜く。主人公はずっと戦いに悩み、最終的に戦い続けて廃人のようになって一生を終えてしまった。

「・・・迅は怖くなかったの？」

ちよつと震えていたフェイトちゃんが聞く。むう・・・手を握っている。ずるい・・・

「俺は、少し悲しかった・・・かな」

「え？」

「どつしてよ」

アリスちゃんが聞くと、迅君はテレビを切り替える。

「・・・この作品の主人公は戦争に疑問を持っていた。でも、最終的にそれに参加して、人を殺してしまった」

「それは戦争だから・・・やっぱりそうなると思っけど」

「そうだな・・・確かに、客観的に見て戦わなきゃいけないなら、戦うだろう」

「じゃあ何がおかしいの？」

アリシアちゃんが不思議そうに聞いた。確かに、私も気になる。

「彼は、戦争を反対して生きていた……なのに、自分の覚悟もなく戦ってしまった」

「それは死にたくないからやないか？」

「そうだな、戦争で死と言うリスク背負っている以上、死に多くないから戦う……相手も同じだ。でも……その殺し合いをする前に、主人公はもっとすべきことがあったと思うんだ」

「すべきこと……？」

「主人公は一度内戦を経験したはずだ。ならその後には戦争を止めようと運動もできただろうし、戦争を別方向から止めようともできなかったはずなんだ……」

迅君の目からは、涙が流れていた。

「人が人を殺す戦争……間違っても映画で出て来た『人殺しが快樂』な人間になってはいけない」

「それは当たり前だと思うけど……」

「確かに……でも、戦争と言うものは人をそうさせてしまう」

「じゃあ人を殺さないで解決すればいいのかな……」

「戦場じゃなければともかく、戦場でそれは難しいだろう」

「どうして？」

私が聞くと、迅君は困ったような顔をしていた。

「戦場で人を殺さなきゃ自分が殺されるかもしれない・・・そんな状況で『話し合い』なんてできるわけがない。敵の畏かもしれない、逆に相手を倒すチャンスかもしれない・・・戦場で疑心暗鬼になった状態の人間が、話し合いなんてできない」

「でも、話合えば分かりあえるかもしれないよ」

「それに・・・」

「？」

「人を殺さず貫こうなんて・・・甘い考えだ。時に人の命を奪わなければ生き残れない可能性だってある。管理局の『非殺傷設定』には、俺としては矛盾を感じている」

非殺傷設定は相手を捉え、その人に罪を償わせるためにある。リンデイさんは前にそう言ってたけど、迅君の考えは違っていた。

「ま、とやかくは言わないけど・・・これだけは覚えておけ。戦地に出た時『人を殺すよりも、人を生かす方が難しい』ってな」

回想終了

「・・・確かに、人を殺すよりも生かすことのほうが難しい・・・でも私自身がそう選んだ道だから」

エクシードモードになり、私はレイジングハートを構える。

「だから、私は私の『決意』を貫き通す！」

「上等だよ、でええええい！」

接近戦は私達魔導士にとっては不利・・・でも

「それを逆に利用すれば！」

「何!？」

私は攻撃が来た瞬間を狙い、リリイさんにバインドをかけた。

「零距离バインドだって!？」

私は距離を取り、レイジングハートを向ける。

「これが私の全力全開!スターライト・・・!」

「!?!」

「ブレイカーっ!」

私の攻撃が、リリイさんを買いた。

第八十四話「殺す覚悟と殺さぬ決意」(後書き)

秋風「はい、ということとで管理局の非道&戦争の定義についてでした。ゼロの小説同様、戦争をテーマにしました」

迅「お前は戦争嫌いだよな」

秋風「好きな人間を見てみたいよ。とりあえず8月は日本が終戦を迎えたということで、テーマにそって書きたかったというのもあります」

迅「なるほどな」

秋風「んでもって、次回で任務は終了です」

迅「次回、第八十五話『正義と悪の定義』 TAKE OFF!」

第八十五話「信じ合う者」(前書き)

久しぶりにEFじゃないほうの更新ですW



## 第八十五話「信じ合う者」

なのはside

「や、やった・・・？」

攻撃は直撃した。これで・・・

「・・・ふ、ふふ、さすがは・・・エースオブエースね」

そ、そんな・・・まさか

「でも、私の防御は貫けないよ」

リリイさんの体が黒に・・・!？

「こいつは妹が盗ってきた闇の書の欠片の力・・・体の炭素繊維を集め、硬化する」

「身体を・・・」

「ふふ・・・最初はためらったけど面白いわね、これ」

よ、余裕・・・私にはもうAMFを防ぐ手立てがない・・・私の、  
負け・・・

「見たところもうAMFを防ぐ手立てもないみたいね・・・」

「・・・!」

「終わりよ」

『それはどうかな・・・？』

「「！？」」

突然私の頭に声が響く。多分私だけじゃない・・・リリイさんの頭にも響いている。こゝこの声は・・・

「迅君！？」

「神谷迅かい！？ガジェットが始末に行ったというのに・・・」

『ああ、あいつら？もう消し炭さ』

突然火柱が上がる。あれは！？

『なのは！』

「「！」」

『遅くなったな・・・なのは』

そこにいたのは、髪が紅く染まり、肌が小麦色になった迅君の姿だった。

「エウオケム・島本大系ラジン召喚！迅の従者！高町なのは！」

私は転送され、迅君の隣に並ぶ

「なのは、これ頼むわ」

と、左腕を投げられる。ひいいい！

「じ、迅君！危ないの！」

「そういうな・・・さて」

迅君の周囲が燃え上がる。

「迅君、その体は・・・」

「ん？ああ、一番手っ取り早い身体強化魔法だ。  
・なんでも試してみるもんだな。さーて・・・」

チエンジスビ「フッホア  
炎精霊化・・・

迅君は片腕の手でボキボキと手を鳴らした。

「開戦だ」

迅side

「さあ、行くぜ！」

「ごさかしい、たかが炎！」

俺とリリーの拳がぶつかる。さすがに硬いな・・・

「炭素硬化か・・・」

「最強の盾、打ち破れるわけがない！」

言いながら蹴りをかましてくる。仕方がない。

「ならそれ以外の部分で行くぜ！」

フラグランテア・ルビカンス

紅き炎！

「何！？ぐああー！」

リリイが炎に包まれかけるが、避けられる。

「ほらほらどうした！どんどん行くぜ！」

サギタ・マギカ  
魔法の射手

セリエス  
連弾・火の59矢！

「ぐああああああっ！」

「どうした、自慢の炭素硬化で防いでみる！」

といっても、防御の隙なんか与えないけどな

「でああああっ！」

「がはっ！」

俺は隙ができた腹部に拳を突き出す。

「ガハッ！」

「どうした、さっきまでの勢いは」

「ど、どうして・・・デバイスも、呪文詠唱もなしに・・・これほどの・・・」

「俺は今『炎霊』だ・・・炎系統の呪文を司る。そんな存在が詠唱もデバイスも使うわけねーだろ！」

エウオカ大佐のオウアチリタンドトサモゼン毎回キウエリス  
火精召喚 槍の火蜥蜴29柱

「ぐああああああっ！こ、このお！」

「おっと！」

俺は迫りくる魔力弾を避けると、再び空を蹴って連続で拳を叩きこんだ。

「はああああああっ！」

「調子に乗るなあ！」

炭素硬化された拳を避けるが、そこからさらに尖らせた腕が飛んでくる。

「つく！」

「死ねえ！」

射程内だ・・・

「お前がな」

ウーラニア・フロゴース  
燃える天空

「あああああああああああああああああああああつ！」

「はあ、はあ、はあ……つく……！」

炎霊化はやはり負荷がかかるか……

「迅君！」

離れていたなのはが飛んできた。

「なのは……」

「やったの？」

「わからん……傷は負わせたが、片腕だったせいで燃える天空の射程がずれた。まあ、ともかく……助かったな」

朝日が昇り、俺達を照らした。

「迅君！」

なのはが泣きながら抱きつく。

「なのは……？」

「怖かった……！怖かったよお！」

「……すまない、そしてありがとう」

「ふえ？」

「今回の任務……お前がいなかったら俺は死んでた」

正直、逃げ切れたかも怪しいもんだ。

「だからそんな顔をするな……な？」

「ふえええん！」

「やれやれ……」

泣きじゃくるのはを抱えて30分ほど、俺は空を飛び続けた。

機動六課隊舎

「ただいまー」

『ギヤアアアアアアアッ！』

フォワードが悲鳴を上げる。

「ん？ああ、これが」

腕が片方吹っ飛んでるのに驚いているらしい。エリオとキャロが気

絶し、スバルとティアアナが顔を真っ青にしている。フェイトが驚いて俺のところへ駆け寄る。

「じ、迅!? その腕……」

「ああ、ちよつとな……エレナ、頼む」

「まったく、今度は逆の腕ですか……」

言いながら俺の腕を接着する。ウォーターカッターで斬られたからか、細胞が潰されることなく、見事にスッパリと斬れていた。

「エレナ、なのはの治療も頼む……はやて、俺の予備の制服もらえるか?」

「うん、今持ってくるで」

「わかりました、なのはさんこちらへ」

「まったく、今回はボロボロだな……」

「「パパっ!」」

「お、ターナ、ヴィヴィオ、おはよう」

「パパ、お怪我したの!？」

「大丈夫!？」

泣き顔で聞いてくる二人。俺は二人の頭をなでる。



「大丈夫だよ、二人とも、たいした怪我じゃない」

『腕吹っ飛ばしておいて何がたいした怪我じゃないですか・・・』

「さて、迅君？」

制服を持ってきたはやてが笑顔で俺の肩を押さえる。

「なにがどうなって、どうしてなのはちゃんと朝帰りなのか説明してもらおうか？」

ゾクッ！

超怖い・・・そう、まるでなのはが魔王になった時のようだ。

「高町、貴様もだ・・・」

見れば、フェイト、アリシア、シグナム、リインフォース、アリサ、すずかが素晴らしいほど怖い笑顔でこちらを見ていた。ちなみにスバルとティアナは俺の腕が吹っ飛んだ事態に頭が付いていかず、時間差で気絶していた。遠くにいるヴィータたちに助けを求めろが、ヴィータだけでなく、シャマルとザフィーラにも顔を逸らされた。

「……………さあ、逝こうか？」

この後、7人にこっぴどく叱られた。

二時間後 食堂

「はあ・・・」

もうくたくただ。

「あつひ」

隣でなのはも同じように突っ伏している。

「とりあえず任務は完了したから報告もして・・・ああ、ちゃんと来てる」

報酬はしっかりと書かれている。SSランク相当の任務なので、それなりの金額だ。今度ターナとヴィヴィオに服を買ってやるとしよう。

「パパ」！

「ん？」

「パパ、抱っこして」！

「ヴィヴィオも」！

二人が抱っこをせがむので、仕方なく片足ずつにターナとヴィヴィオを乗せる。この状態で来ようにも二人は朝飯を食べる。だんだん自立できてきているので嬉しいことだ。

「・・・にしても、いつの間に俺の隣に座った？ドゥーエ」

ドゥーエがいつの間にか隣にいた。

「うふふ、随分と大変だったみたいね」

「・・・ああ、まあな」

「後で癒してあげるわ」

言いながら俺にひつつくドゥーエ、色々な部分が当たっている。

「ドゥーエ？いい加減になさい」

「ウーノ・・・」

「いいじゃない、私の勝手でしょ？」

「駄目よ、そこに座るのは私」

火花を散らす二人。もう勝手にやってくれ・・・

「ルーがいつの間にか座ってるし」

「二人とも、邪魔」

「きゃあああ!?」

ガリユーに投げられる二人。最近あいつら出番ないな・・・

「・・・ふむ」

今回の様な事がないように、やっぱりスカリエツティに相談してお  
くか・・・

「迅」

「ん？」

「あーん」

ルーがピラフを俺に差し出してくる。なのでそれを食べる。

「おいしい？」

「ああ、おいしいよ」

「えへへ」

「そうだルー、スカリエツティは？」

「ドクターなら、ラボ」

「そっか」

俺はターナとヴィヴィオをなのはに任せ、ラボへと向かった。

ラボと言うのは、スカリエツティが機動六課の地下に作った研究室  
だ。といってもほとんど前の作りと変わらない。

「スカリエツティ」

「やあ迅、大変だったみたいだね」

「ああ、そのことで相談がある」

「相談？」

スカリエツティが手を止め、俺に向き直る。

「俺は力を持つてる。確かにそれは強い・・・だけど、俺自身が弱い」

「つまり、君の身体的能力強化がしたいと？」

「ああ、お前やウーノの力があれば、トレーニングは組めるだろ？」

「わかった、やってみよう」

こういうときスカリエツティは本当に頼りになる。

「ああ、そうだ迅」

「ん？」

「今度騎士ゼストに会ってくれないか？」

そういえばあのおっさんいねーな

「君にルーテシアを託してから地上本部に行く算段が立たないらしくてね。私がやってもいいんだが、拒否されてね」

・・・まあ、あいつはあんたのこと嫌いだもんな。でも・・・

「なんでお前がそれを？」

「ルーテシアに頼まれたのさ。メガーヌもそのうち目を覚ますことを話したらね」

なるほど・・・まあ、地上本部には用もあるからいいか。

「わーった、任せとけ」

こうして俺はラボを後にした。

第八十五話「信じ合う者」(後書き)

秋風「久しぶりの更新です」

迅「つたく、IFの方はすっかりやるからだ」

秋風「ごめんなさい」

迅「次回、第八十六話『修行は死と隣り合わせが丁度いい』 TAK  
E OFF!」

第八十六話「女の子は可愛いものに弱い」(前書き)

ということですが、話が変わってしまいました。今回はほのぼのです。

どうか迅に石を投げないで上げてください



## 第八十六話「女の子は可愛いものに弱い」

運命と言うのは時に残酷で、そして複雑だ。どうしてこうなったのか・・・まったくを持って検討がつかない。

「・・・・・・・・どうして、こうなった」

「わあ〜！パパちっちゃ〜い！」

「パパ、いい子いい子」

・・・・・・・・いきなりですが、推定年齢6歳？位に戻りました。

さかのぼること2時間前

「・・・・・・・・うーん、たいしたロストロギアじゃなかったな」

「だね、ちゃんと封印すればOKかな」

現在、なのは、フェイトと共にロストロギアの反応を追って遺跡に来了。残念ながらリックではないし、リメイカーもいない。

「よし、帰るか」

「そだね」

その瞬間、ロストロギアが光を放った。

「なのは！フェイト！下がれっ！」

光をまともに食らった俺は、意識を失った。そして、冒頭の部分に戻る。

「おいシャマル、これどういうこと？」

「そうねえ、多分このロストロギアの影響ね『時の逆行』一時的に若返り効果を得て幼児化してしまったんでしょう。ま、一日も経てば戻るわよ」

「……………はあ」

「迅君！大丈夫！？」

「迅！どこ！？」

と、俺を探す二人。

「あれ、シャマル先生、この子だけですか？」

「どっかで見たとような……………」

「ねえ二人とも？誰を探してるの？」

「迅君ですけど……………」

シャマルが笑いをこらえる。

「目の前にいるじゃない……ふ、ふふ……」

「「え？」」

「パパ、あそぼ〜」

「パパ、ご飯食べに行こうね〜」

「「迅君!？」」

二人して声をそろえる。なのはに限っては俺の幼少時代知ってるだろうちに

「んだよ……」

「「か……」」

「蚊？」

「「可愛い〜!」」

「「うっ!？」」

二人に抱きしめられる。

「きゃ〜!すっごく可愛い!迅君やっぱり可愛い!」

「何すんだ!離せ!」

「わ〜!離したくない!すっごく可愛い!」

二人の胸に圧迫され、呼吸困難になる。く、苦しい……

「なんや！？何の騒ぎや二人とも！」

「どうしたのフェイト？」

「一体何事！？」

「どうしたのなのはちゃん、フェイトちゃん」

「みんな見て見て！迅君！」

6歳の俺がなのはたちに抵抗できるはずもなく、俺はみんなの前につきだされる。

「きゃあああ！可愛い！」

「はやて！やめっ！」

「はやてするいよ！私もー！」

「ちょっと、代わりなさいよー！」

「私にもー！」

結局こいつらの暴走が収まるまで、15分位もみくちやにされた。

「……もう駄目だ、死のう」

『マスター、頑張ってください』

「何をだ」

現在ロビーにいる俺達。シャマルから事情を聞いた機動六課一同と、ナンバーズ

「お兄様、可愛いです」

「離せディードー！」

「嫌です、もうこのままでもいいじゃないですか」

「そうだね、可愛い」

ディエチまで……

「もう5分経ったわよ、そろそろ交代して」

と、ドゥーエが言う。いつの間にか俺は抱っこで回されている。若干ヴィヴィオよりも身長が低いせいか、抵抗しても抑えられてしま

う。  
「うふふ、いい子いい子」

「ドゥーエ！離せ！っく！ゼロ！」

『起動不可』

なに!？

「よしよし、いい子にしましょっね〜」

「つく!後で覚えてるお前ら〜!」

そんな俺の悲鳴が隊舎に響いた。

解放されてからも、地獄だった。服のサイズがないので、とりあえずゼロのBJを着ている。一応訓練もできるので、訓練場にいるのだが……

「なのは、離せ」

「いい子いい子〜」

なのはがシヨタコンになってしまい、暴走している。

「フォワード訓練の締めは予定では迅君との模擬戦だけど、とてもじゃないけど出せないよ〜」

「やめるなのは!ちゃんと訓練もやる!」

「でも兄さん、それでできるんですか?というか、私も抱きしめます」

「私も抱きしめさせてください!」

と、ティアナとスバルにまで抱かれる始末。年下に抱っこされると

か屈辱だ・・・

「ふ、ふふふ・・・なめんなよ・・・模擬戦・・・してやるよ」

こうしてフォワードと戦うことだ。

『コードはっ』

「自由の翼・・・」

『・・・オ、オーライ、フリーダムガンダム起動開始』

光に包まれ、フリーダムになる。なるのだが・・・

「なんじゃこりゃー！」

なぜかSDガンダムのようにサイズに合った感じだ。初めてガンダムになったのは9歳・・・あのときは設定に合うようにできていたはずだ。18メートルなので180センチというように。しかし今はどうだ？これはなんだ？

『マスター、恐らく身長が・・・』

「・・・もう何も言うな。いくぞー！」

ビームライフルを撃ち放つ

「わわっ！クロスファイアー・・・」

「おせえええええ！」

『ハイマツトフルバースト』

一斉射撃でビルを崩壊させ、スバルたちにやけくそで襲いかかる。

「じ、迅兄！？待ってえ！？」

「知るかー！なんで俺がこんな目にあうんだー！」

「それやつあた・・・きゃー！？」

「わわわー！」

「つく！ファントムブレイザー！」

「うらあああああー！」

シールドでファントムブレイザーを弾き飛ばし、そのままビームサ  
ーベルを使ってクロスミラージュを弾き飛ばす。

「え！？嘘！」

「はあああつ！」

ティアナがダウンし、吹っ飛ばされたティアナにキャラコがぶつかり  
キャラコがダウン。スバルも先ほどの戦闘でダウンし、エリオも巻き  
添えをくらって訓練終了。

なのはside



「……うん、次から迅君怒らせないようにしよう」

フェイス side

「……姿は変わっても、迅は迅だね……」

迅 side

模擬戦が終わったので、なのは達のところに戻る。すると、ヴィヴイオとターナが走ってきた。

「パパ、迎えにきたよー」

「いい子いい子ー」

我が娘に頭をなでられるとは……不覚

「じゃあ遊ぼうー」

と、両方に手を繋がれて歩く俺。正直死にたい……。隊舎につくと、俺は180°に反転し、逃走を図る。しかしその闘争は失敗に終わり、見事に捕まる。

「迅君？なんで逃げるのかなー？」

「か、母さん！？なんでここに……」

「私が呼んだんです。丁度戻ってましたから」

そう、母さんがいた。

「うふふ、可愛いわね、懐かしいし」

いい年して・・・

「離せ〜！」

最早脱出不可能。この後ターナとヴィヴィオと遊ぶのだが、その前にもみくちゃにされたせいで体力はほとんど戻ってなかった。

夕食の時もじゃんけんをして俺はアリサの膝で食事をしている。

「ほら、口開けなさい」

「一人で食べるっての〜！」

「駄目よ、ほらアーン」

「・・・・・・アーン」

屈辱だ・・・orn

「はい、今度は私だよ。あーん」

すずかにも同じことをされる。もうやだ・・・

風呂に入る時も、女湯に連れてかれそうになったので断固として阻止し、自分の部屋の風呂に入るのだが・・・

「ほら迅、体を洗ってやろう」

「やめろシグナム！お前が一番まずいんだよ！」

そう、シグナムとリインフォースが風呂に入ってきた。

「その体じゃ満足に入れまい、体もちゃんと洗わねばな。ほら、目をつむれ、流すぞ」

「うわぶ！」

そして今度はリインフォースに風呂の中に入れられる。

「マスター、ちゃんと肩までつかりましょうね」

「離せつて！お前らが一番危ないんだよ！」

「言ってる意味がわかりません、却下です」

とかいいながら風呂の中で抱きこまれる。うん、読者に殺されるな・・・俺

風呂に上がった後はパジャマを着るわけだが、母さんがサイズの合った昔のを持って来たらしく、それを着ることになった。今日は何故か部屋なのはとフェイトだけがいた。どうやらじゃんけんやら

何やら、何かしらの勝負をしたらしい。

「さ、寝ようね迅君」

「今日は一緒に寝ようね」

「あのさあなのは、俺は体はこうだけど精神面では19だぞ？なんか間違ってるないか？」

「そんなことないよ、この前あんなことがあったばかりだし、みんな迅君に気を使ってるんだよ」

「そうだよ、迅が少しでも落ちつけるようにね」

ホントかよ・・・

「ほらほら、一緒に寝ようね」

「もう好きにしる・・・」

こうして、今日も平和な日がすぎる。

余談だが、次の日故意的に『時の逆行』が使用されて、なのは、フエイト、はやて、アリシア、アリサ、すずかが9歳位になり、世話に追われたのはまた別の話

第八十六話「女の子は可愛いものに弱い」(後書き)

秋風「ということ、幼児化でした」

迅「おい、明らかに話が繋がってないぞ」

秋風「いいじゃん、書きたかったんだから」

迅「修行はどうした」

秋風「それは次回に延長した」

迅「おい」

秋風「だってさあ、呪文とかいちいちかくの面倒だしさあ、こつこつうギャグがあってもいいじゃん」

迅「そうじゃねーだろ」

秋風「気にすんな」

迅「するだろ！」

秋風「んじゃ、俺は逃げる！」

迅「次回、第八十七話『修行は死と隣り合わせくらいがちょうどいい』TAKE OFF!」

第八十七話「修業は死と隣り合わせ位が丁度いい」(前書き)

今回はチート爆発です

## 第八十七話「修業は死と隣り合わせ位が丁度いい」

さて、体も戻ったので修行を再開することになるわけだが・・・

「・・・ちよつとやりすぎたかな」

南の孤島・・・というわけでもないのだが、体を慣らす野生の王国だ。

『あの、マスター？』

「何？」

『なんで魔法球に隠したんですか？』

「そうでもしねーとあいつら入ってくるだろ」

前にやったら差し入れだなんだとかいつて入ってきて、邪魔ばかりだったからな。今回は水入らずの修行だ。

「さーつてと、まずは精神統一からだ・・・」

俺は水の上に立ち、制止する。葉が落ちる音、魚が跳ねる音・・・森の動物の鳴き声、全てが聞こえる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

この前の戦いではつきりした。我を失うのは精神面の弱さだ。さらに攻撃力が暴走するのは俺の体がまだ力に慣れていないから。今回

は全ての力の定着、精神面を強くする修行だ。

『・・・マスター、一時間が経過しました』

「よし、飯を探りに行こう」

ここはアマゾン以上の森林と、グランドライン以上の海がある。食べ物には豊富で栄養バランスも高い。

「・・・罨には、よしよし、鹿二匹、川で魚が20匹。夜までは持つな。後は茸と草、木の実に、

と・・・ふう、これだけあればいいか。住む場所もあるし、いつもの場所に行くか」

跳躍して、半径一キロほどの広場に降り立つ。何も無い荒野・・・

「・・・マイマジックスキル、マギステル」

魔法の射手から、千の雷、燃える天空、終わる世界・・・すべてのネギまの魔法を発動し、体を慣らしていく。

「マギア・エレベア闇の魔法起動・・・」

魔力圧縮の高速化、取り込むまでの秒数を速くする。そして攻撃も全てを使っていく・・・

「よし、次は・・・」

俺は腹部に手を当て、アマダムを出現させた。そう、仮面ライダークウガ



「変身！」

しかし、変身するのは普通のクウガではない。アルティメットフォームと、ライジングアルティメットだ。

「はああっ！」

当然ながら紅い目のクウガだ。現れた石を粉々に砕いていく。そして変身を解き、別のベルトを出す。それはオルタリング。つまり仮面ライダーアギトだ。

「変身！」

同じくシャイニングにまでなると、基本動作をして、必殺技を叩きこむ。確認ができたら次のライダーへ移る。説明が面倒なので言うが、クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、剣、響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイドの順にやっていく。Wはアインスがいないのでやらない。そして一通り確認が終わると、次はガツシユの呪文だ。ザケルからバオウザケルガを使う。シンクラスの砲撃は一発か二発が限度だ。少しずつ増やさないといけない。俺が扱えるのはガツシユ、ティオ、ブラゴだ。魔界の文字は覚えるのが大変で、この3人が限度だった。

「・・・次、宝具だな」

約束された勝利の剣を始めとした宝具一式。王の財宝があつてこそできるこれは、なかなか出力調整が効かない。なので使用しまくり、体になじませる。

「さて次、ファイア、ファイラ、ファイガ……」

FFの魔法一式……

「散れ、千本桜」

斬魄刀の一式。仮面をつけることはできるが、第三段階になることは不可能だ。まあ、始解、卍解が妥当だな……んでもって、これが

「……行くぜ!」

頭に炎、両腕にも炎、スカリエツティに作らせたガジェット1000体を蹴散らしていく。

「おおおおつ!」

Xバーナーを発射し、着地。まあ、まずまずだな……

「……ふう、疲れた」

この後もNARUTO、ロックマンZからZXA、ガンダムからQ<sup>クアンタ</sup>までの一通りをして、その荒野に倒れる。能力を使いすぎるとすぐこれだ。スカリエツティが組んだトレーニングメニューあと8倍は増やさないと……

「でも駄目だ……俺はこんなじゃ勝てない」

俺は2010年に3月に転生をした。つまり仮面ライダーWを知る人間だ。神の本棚の検索結果で8月の映画に仮面ライダーエターナルの存在を知った。ついでに新たなライダー、仮面ライダー000

の存在も。正直、オーガが可哀想だと思った。それはさておき、どんな能力かはまだ知らないし、閲覧ができないが・・・恐らく、リメイカーも同じ手を使ってくるだろう。

「オリジナル・・・」

そうあの男、ジャックは言っていた。つまり、向こうには俺のコピーの様な「何か」がいるのだ。俺の細胞は解析できないように多重にプロテクトで縛ってあるし、無理にやればその解析した機械は壊れる。だが奴らには恐らく『闇の書の残滓』が存在するだろう。ならばどうだ？俺のコピー体を作り出したとしたら？そしてそのリメイカーの首領が俺のコピーだったら？俺の負の部分『管理局への不満』そして『世界への不満』答えは一つ、世界の破壊だ。

「・・・そろそろ飯にするか」

俺は再び飛び立ち、元の寝泊まりする場所へと戻っていった。

「ふう・・・」

飯は結構うまい。なんせ豊富な食物連鎖で成り立っているのだから動物たちから栄養が得られる。そして・・・

「いつまで隠れてるつもりだ・・・スバル！ティアナ！」

俺は思いっきり硬い果物を投げつけた。

「「「いった〜」」」

「たく、どつやってここに来たんだこいつら。」

「お前ら、どつやってここまで来た」

「え、えと・・・その」

「魔法球は隠していた。幻術まで使って。なのにお前らがこつこつどつやって来た」

「まあ、おおよその予想は付くけどさ」

「ティアが幻術を破って」

「入ってからしばらくして良い匂いが・・・」

「はぁ・・・」

「お前らなあ、あんだ俺が来るなって言ったのに・・・」

「だって、兄さん一人の問題じゃないのに・・・」

「そつだよ、迅兄が一人で頑張ることないよ」

「別に俺は一人で頑張ろうなんて思っていない。ただ力を戻すのには一人でやらないとお前らまで危なくなる」

「崩壊なんか普通の訓練場でしたら崩壊するからな。」

「でも・・・私達だって強くなりたい！」

「お願い迅兄！私達にも修業させて！」

こいつらは……ってあれ？この光景どっかで

迅君！私も修行する！

迅の力になりたい……！

ああ、そうか……

「わかったよ、俺の負けだ。飯食ったら修行するぞ。ここは夜にならないからな」

「はい！」

こうして、俺とスターズの修行が開始された。

修行場所について、二人を座らせる。

「さて、お前らに聞くぞ？ゲームで言う経験値、それが最も効果的に上がるのは人間的な意味でいつだと思う？」

「うーん……訓練？」

「ティアナ、不正解」

「あう……」

「はい！実戦！」

「スバル、三角」

「やった！」

三角で喜ぶなアホ

「正解は、命の奪い合いだ・・・つまり、殺し合いだな」

「・・・」

「覚悟がないなら辞めろ」

「やります・・・」

「やるよ！」

・・・まあ、今回はあくまでも『召喚』されたやつらだしな。

「俺が言いたいことはわかるか？」

「えっと、ティアところし・・・あ」

「ドアホ！」

俺は思い切りスバルに拳骨をお見舞する。

「味方同士で殺し合ってどうする！」

「あつう〜だつて〜」

「今回はこいつらが相手だ」

言いながらディエンドライバーを取り出す。

K A M E N R I D E D E L T A !

K A M E N R I D E T H E B E E !

「さあ、構えろお前ら、じゃないと………死ぬぞ」

俺の言葉と同時に、ザビーとデルタは二人に襲いかかった。

スバル s i d e

私は急いでバリアジャケットを装備して、その一撃を受ける。

「はっ！」

「あつっ」

私は吹き飛ばされながらも、構えをとる。

「強い……」

一撃受けただけで、左腕が痺れてる……すごい

「………だあああつっ！」

ザビーと呼ばれた仮面ライダーが向かってくる。私は拳を突き出す  
が、それは受け流される。

「うそっ!?!」

「フンっ!」

「ガッ……」

思いつきり拳を奥底にぶつけられる。いっ……

ティアナside

私はすぐにクロスミラージュでデルタと呼ばれた仮面ライダーに向  
けて銃を撃つ。

「クロスファイアーシュート!」

「Fire」

『BURST MODE』

デルタからも、エネルギー弾が放たれる。その一発が私の頬を掠め  
た。血が垂れる。

「殺傷、設定……」

違う、違うわ、落ちつきなさいティアナ・ランスター……仮面ラ



ライダーには殺傷設定がない。なぜなら仮面ライダーは怪人を倒すのが使命だから。だからそれが私に向けられただけ。なら・・・！

「私は死ねない！」

『クロスファイア』

「くらえええっ！」

私とデルタの激しい撃ち合いが始まった。それはまさしく『死闘』なのだから

迅side

「さーてと、なかなか頑張るな」

『よかったですか？』

「何が？」

『あの子たちに修業をさせることです』

「・・・確かに、時間はない。でもそれは俺だけの話ではない。

「あいつらにはいい機会だ。この場で一線超えてもらおうのもいいことだ」

『そうではありません』

「ん？」

『貴方がわざわざライダーたちを召喚している理由です』

「・・・そーさな、あいつらが通った道だ。今更通らせないわけにもいかないだろ」

もう6年も前、本当の戦いが知りたいうことで、なのは、フェイト、はやてはライダーと戦った。殺さないを貫く彼女達は『殺す気』で来るライダーたちを倒せない。敵を倒す覚悟・・・それをさせたのも、俺だった。

「あいつらが単体で勝てないのは明白だ。ならなぜ俺が『二人同時に襲わせたのか』これを解ければ、一線を越えられる」

さあ、見せてくれ・・・ティアナ、スバル

スバルside

「つく！リボルバーシューツ！」

「ふんっ！」

だ、駄目だ！全然勝ち目がない！隙もない！怖い・・・こ、殺されちゃう！

ティアナside

押されてる・・・私・・・

「死にたくない・・・死にたくない！」

私は無我夢中でクロスファイアを撃ち放つ。すると、スバルがぶつかってきた。

「ス、スバル!？」

「テイ、ティア・・・」

スバルも震えていた。私と同じくらいに

「ティア、どうしよう・・・私・・・勝てない、かも」

スバルがいつにもなく弱気だった。私だって逃げ出したい。でも、ここで超えなきゃ兄さんと肩を並べられない。私は・・・勝たなくちゃ・・・え？

お前に俺の背中、預けるぜ

一瞬、兄さんの言葉が脳裏をよぎる。私は今まで何を学んできた？  
一人で強大な敵に勝つ？違う、私は・・・私は！

「スバル！」

「えっ、ティア!？」

「クロスシフトA!行くわよ!」

「で、でもティア・・・私・・・」

あーもう！イライラするわね！

「うじうじしないで！戦場なのよ！ここは！そして私達は生き残るの！見せてやるわよ、あいつらに、私達の力を！」

私の言葉に、スバルは理解したのか、立ちあがって構えをとる

「うん！ティア！」

さあ、反撃開始よ！

第八十七話「修業は死と隣り合わせ位が丁度いい」(後書き)

秋風「はい、ということでティアナ&スバルでした」

迅「これどういうこと?」

秋風「一応説明すると、迅は幻術で隠す」

迅「おう」

秋風「で、それをターナが目撃」

迅「・・・ふんふん」

秋風「んで、スバルがお菓子で誘惑して喋らせる」

迅「・・・うん」

秋風「で、ティアナが幻術破って突入と」

迅「なんだそりゃorn」

秋風「ちなみに迅が召喚したのは影山ザビーと三原デルタです」

迅「俺の出番は?」

秋風「次回?」

迅「まじかよ!」

秋風「ではまたw」

迅「次回、第八十八話『戦いの覚悟』 TAKE OFF!」

外伝「空色の瞳」(前書き)

というわけでお待たせしました、当選した方とのコラボです！

## 外伝「空色の瞳」

超、が付くほど、最近暇である。海鳴に帰ってきた俺（自殺未遂）はねっ転がっていた。

「ちょっと待て、（ ）はいらねえだろ」

気にすんな

変な電波を受信したが、まあ良しとしよう。すると、携帯電話がなる。

『クソ女神』

無理やり最初は『超素敵な女神さま』と書いてあったのですぐに書き直した。

「・・・はい」

『ねえ、暇？』

「忙しい」

そう言って電話を切ると、いきなり空中からタライが降ってきた。

「いっしょ」

「何が忙しいよー…」のニート…」



「誰が二トだ！この婦女子！」

「女神に向かつて婦女子って何！？言っておくけど私に男×男の趣味はないわよ！」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ俺達。しばらくしてエレナがことを鎮圧し、本題に入る。

「おほん、じゃあ本題ね」

「・・・とつとと話せ」

「実はね「やだ」まだ何も言っていないわよ！」

と、怒るアテナ

「迅、話が進みませんから」

「・・・オホン、昨日並行世界を見てただけど」

アテナside

昨日

「暇ねえ」

私は他の世界を見て暇を持て余す。正確には下界の『ある』小説サイトで読んだ小説をリアルで見たいというのがあるからだ。

「あら・・・？」

小説の通りであったはずのストーリーが歪んでいたのだ。すると、速達である物が届いた。

「ん？えーと・・・『天界より脱走者』・・・マジで？」

回想終了

迅side

「というわけよ」

「ふーん」

俺は言いながらお茶を飲む

「・・・で？」

「その脱走者を探すの『私の役目』なのよ・・・だから」却下「だからまだ言っていないじゃない！」

と、怒るアテナ。俺はため息をついてお茶を注ぐ。

「なんで俺がその脱走者見つけなきゃいけないんだ」

「いいじゃない、やって来てよ・・・転生者でしょあ？」

「あのお、こちとらこの前魔王に攻撃くらって傷が癒えてねえんだよ」

「……………本当はそうじゃない癖に」

「あ?」

殺気を当てて睨むと、アテナは一本のキーを手渡した。

「なんだよこれ」

「フェンリル」

「は?」

「だから、FF7のフェンリルの鍵だって」

こいつは何を言ってるんだ?

「私は女神…………つまり『神様』よ?あなたが欲しいもの知ってるのくらいわかるでしょう」

「っぐ!」

「ああ、そういえば言っていましたね。機構が難しくって『答えを出す者』でも作れないって」

FF7が大ファンな俺としては確かに欲しいものだ。

「あれのそっくりそのままの」  
「ピー…………あげてもいいわよ?」

「人の足元見やがって・・・」

「じゃ、行ってらっしゃい」

と、いきなり足場が浮遊感に襲われる。

「またこのパターンかよおおお！」

「アテナ様のバカアアア！」

こうして、俺たちは無理やり転移された。

S i d e O u t

P T事件から早数ヶ月。金髪を揺らす青年は静かにその地へと降り立った。

「・・・この世界か」

この世界に、青年の探し物があるのだという。

『マスター、五時の方向に魔力反応です』

「何？」

青年はその方向を見上げる。すると、何故か人が落ちてきている。

「追ってみるぞ、『フェンリル』」

「イエス、マイマスター“クラウド”」

これが、本編で語られることのない一つの物語

外伝 空色の瞳

迅side

「うわーお・・・」

「何のんきに言ってるんですか！」

「しゃーねな、魔法の射手 サキタ・マキカ 連弾・火の5矢！」 セリエス イグニス

その撃った反動で、俺が空中で静止、エレナを抱えて地上に降りる。

「ふう」

「し、死ぬかと思いました」

「お前天使じゃん」

「天使でも“死”というものはありますよ」

互いにため息を着く。どうやらお出ましのようだ。

「誰だ、出てこい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこにいるのは金髪の男。あれ？

「・・・・俺は時空管理局民間協力者のクラウド・ストライフだ。貴様ら、何者だ？」

まじで!？

「エレナ、どういうこと？」

「さあ・・・・でもアテナ様は“ある小説”って言っていましたよ？」

二次創作ってことか？つまり『なのは×FF7』のクロスオーバー作品？そんな作品最近見たような・・・

「答える、何者だ？」

「・・・・・・・・俺は神谷迅、決して怪しいものじゃない」

「私はエレナ、天使です」

「天使だと・・・？」

天使と言う言葉に過敏に反応するクラウド。まあ、しょうがないか。自分で言っておいてなんだけど、空から降ってきて怪しくないってのはどうかな？

「別に『管理局』は嫌いだけど、君みたいな協力は嫌いじゃない」

「管理局を知っているのか？」

「ああ、いろんな縁でね、っと……君に聞きたいことがあるんだ」

「なんだ」

「君は何故ここに？」

俺が言うが、クラウドは警戒をやめない。まあ、当然だろう。

「何故お前にそれを言わなければならない？」

「別に君や管理局に害をなすつもりはない。ちょっと厄介事でな、君の力を借りたいんだ」

俺は別の並行世界から来た事、そしてこの世界に天界から脱走者がいること、さらにはそれを倒さないとこの世界が崩壊することを教えた。

「それを俺に協力しろと？」

「おう」

「興味ないね」

うわーお、ばっさりと切ってくれたよ。

「別に良いけど、それでこの世界がなくなっても文句言っなよ？」

「……………なら、一つ提案だ」

言いながらデバイスらしきものをクラウドが構える。

「？」

「お前の力を見せて見る」

『スタンバイレディ』

どうやら俺が転生者かどうかから確かめたいらしい。

「わかった、行くぜ相棒」

『オーライマイマスター』

「……………おおおおおっ！」

たがいに剣を交え、火花が散る。

「フェンリル！」

『ロードカートリッジ！』

「狼牙一閃！」

んなっ！？オリジナル技！？

「ゼロ！」



『ロードカートリッジ』

「チャージセイバー！」

互いの魔力攻撃が交わる。嘘だろ！？チャージセイバーが押されるとか……！

「仕方がない、本気で行くぞ！」

「見せて見る！」

「トレース・オン  
投影開始！」

そこに現れるのはセフィロスの愛刀『正宗』を手に、フェンリルとぶつかる。

「貴様！何故それを！」

「ふふっ、言っただろう！俺は転生者！君の世界をも知る！」

閃光！

「恐れるな……はあっ！」

デイシディアの技大好きだからな……

「ぐうっ！」

「どうしたクラウド！そんなもんか！」

「つく！星よ・・・降り注げ！」

メテオレイン！

「うおっ！？ノータメでこれかよ・・・！」

「終わりだっ！」

「トレス・オンつち！投影開始！」

正宗を捨て、別のものを投影した。それはクラウドが持っていたバスターソード

「何っ！？」

それを見て動揺したクラウドに、ほんのわずかな隙ができた。

「終わりだっ！」

超究武神霸斬ver5！

「うああああっ！」

クラウドは技をくらって地面に叩きつけられた。

「ぐっ」

「勝負あり、ここからです」

「・・・そのようだ」

言いながらクラウドがデバイスを収めた。

「何故、その剣が？」

「ああ、これは俺の模造品だ“魔術”を使ったな」

「魔術？」

とりあえず俺は簡単に俺の能力についてクラウドに教えた。投影なので本物ではないことを。一度見ればそれをコピー出来ることを

「なるほどな・・・並行世界の俺の世界を知れば可能か」

「信じてくれるのか？」

「ああ・・・まあな」

はあ・・・よかった

「んで、クラウドはどうしてここに？」

「ああ、大切な仲間の母親、その使い魔が残した日記を取りにな」

それって、MOVIEの？

「なるほどね、一緒に行こう。そうすれば何かわかるかもしれない」

「ああ」

こうして、俺はクラウドとエレナと共に、その別荘へと向かうことになった。

とりあえず傷が癒えてから歩く俺達。クラウドはどうやらセフィロスの戦いの後（アドベントチルドレン）謎の魔法に巻き込まれて異世界に飛ばされたらしい。そこでフェイトと出会い、一緒にジュエルシードの捜索をしていたらしい。フェイトは現在裁判の真っ最中だとか。

「へー、大変なんだな」

「まあな・・・さて、そろそろ見えてくるころなんだが・・・」

そこにあっただのは一軒の別荘だった。

「お、これか？」

「どうやらそのようだ。フェンリル」

『イエスマスター、データともあっています』

扉を開けると、そこには人が昔住んでいたような形跡だけが残っていた。

「これが日記か？」

俺は机の引き出しから一冊の本を取り出した。どうやら俺達には読めない細工がしてあるらしい。

「これで目的は達したな」

「ああ・・・だが、お前の用は済んでいないらしいな」

「そうだった・・・」

脱走者か・・・

「エレナとか言ったな。お前は・・・」

「ええ、天界の人間・・・ジェノバとは無関係です」

「いや、それはわかる。その脱走するというケースはよくあるのか？」

流星はクラウドと言ったところか、なかなか鋭い

「稀ですね、力を抑えても、それを振り切って逃げる人も少なくありません」

「まあ、アテナの話だと大概はその世界で俺達のような連中に捕まるんだと」

まったく、面倒な仕事押しつけやがって。

「んで、反応は？」

「それらしいのは2つです」

「逃走者は2人なのか？」

「そのようです」

2人か・・・

「行動は？」

「一緒の様です。しかも天界から逃げるとき機械を持ちだしたとか  
機械？」

「えーと・・・」 『読めません』

「あ？」

「アテナ様がよだれを垂らしてます」

あのアマア・・・

『マスター！』

「ん？」

『膨大な反応を感知！何か来ます！』

そこに降り立ったのは二つの兵器だった。

「あれは・・・プライド・クラッドー！」

クラウドが声を上げる。ん？待てよ、じゃあ脱走したのって・・・

「ガハハ！また会ったなクラウドお！」

「キャハハ！今度こそ始末してやる！」

・・・まさか、このコンビだったとは

「まさかお前らが天界から脱走したのか？」

「その通りだ！あの女神が眠っているときにこれに乗ってトンズらしたのさ！」

その言葉に、エレナが頭を抱える。どうやら上司に恵まれていないようだ。

「キャハハ！逃げ切ったと思ったけど、追手がいたのね！始末して上げるわ！」

「う、わゝ・・・めんどくせ」

「それでもやるしかありません！」

「ついで、戦闘が開始された。」

「おおおっ」

「おらあ」

「っち！」

「このプラウド・クラッドの破壊力！見せてあげるよ！」  
ビームキャノンが発射される。

「ならばっ！」

織天覆う七つの円環！  
ロー・アイアス

7枚の花弁が俺達を守る。だが2枚の花弁が碎け散った。

「うそぉ！？」

「がはははっ！ゆけい！」

今度はその腕がこちらに来る。魔法を弾く上にこの攻撃力・・・反則だな

「クラウド、カートリッジは？」

「あと3発」

「ならやるか！」

俺はゼロを構える。

「一気に行くっか」

「よし、任せる」

「何をいっちゃいっちゃと・・・」



『ユニオンフォーム』

5本の剣が一本へまとまる。

「「おおおおおおおおおっ!」「」

「「ひひひひひひっ!」「」

敵のリフレクを突破し、その一撃がヒットする。それによって『クラウド・クラウド』が大破した。そしてそこには目を回したハイデッカーとスカーレットがいた。どうやら既に死んでいるので二度死ぬことはないらしい。すると、上からアテナが降りてくる。

「御苦労さま」

「この野郎、二人いるって聞いてなかったぞ」

「仕方がないでしょ? 私もさつき知ったんだから」

「ったく・・・ああ、クラウド、早く行けよ」

「何?」

「その本、届けてやるんだろ?」

俺が言うと、クラウドは微笑んで頷いた。

「ああ、そうだな」

「助かったよ、ありがとう」

言いながら俺は手を差し出す。するとクラウドも同じように手を出し、握手を交わす。

「じゃあなクラウド」

「ああ、迅……そしてエレナ」

こうして俺達の戦いは幕を閉じた。

二日後

「はい、フェンリル」

「……すごいな」

剣を装備したそれは、ゼロに収納が可能だという。アテナは事後処理があると帰っていった。

「さっそく試し乗りを「迅!」「フェイト」

「迅、どこか行くの?」

「ああ、新しいバイクの試乗だ」

「そうなんだ……ねえ、私も行っていい?」

「ああ、一緒にドライブだ」

ヘルメットを渡し、フェイトが後ろに乗る。

「さーで、飛ばすぜ」

「うん！」

こうしてフェイトとドライブに出かけたのだった。途中フェイトが「ふふふ・・・迅の匂い・・・ふふふ」とか言ってる怖かった。クラウド、お前はフェイトをこんなにするなよ？

完

外伝「空色の瞳」(後書き)

秋風「すいまつせんでしたあああ！」

迅「しょっぱなから土下座？」

秋風「前のコラボの作品、U・T・先生とマイペース先生のまで作っている途中で家のパソコンがめされたんだ！」

迅「そりゃ8年も使ってるノーパソコンならな・・・(汗)」

秋風「今回すごいぜ！」

迅「長っ！」

秋風「俺も驚いてる」

迅「さて、残る先生は？」

秋風「えっと、下の通り」

鷹先生

神崎先生

マイペース先生

秋風「のほほ」

迅「お三方、もう少しお待ちを！」

秋風「ではではw」

#### クロス作品

魔法少女リリカルなのは〜片翼の天使の導いた世界〜  
リリなの×FF7のクロスオーバー作品で、主役はもちろんクラウド。フェイトと共にジュエルシードを集めながらも、セフィロスと戦う。その戦闘力もそのままである。現在は続編の魔法少女リリカルなのはA's〜片翼の天使が望む幻想〜が連載されている。今回はそれの間のお話である。

外伝「転生者×転生者」(前書き)

今回はマイペース先生の四季 命の原作破壊サーガとの共演です

外伝「転生者×転生者」

迅が指名手配にあつて数日、その空白の外伝である。

外伝「転生者×転生者」

「……ここまでくればもう大丈夫だろ」

現在、逃亡中です

『マスター、ここは……』

「ん？……あれ？」

気がつくと、そこは海鳴だった。

「戻ってきたのかなあ……」

適当にさまよつてればそうなるか？転送をランダム設定にしたのが仇になつたか……

「アイスメイク！『大砲』<sup>キャン</sup>！」

「は!？」

突然空中から氷の塊が落ちて来た。俺はそれを避け、構えを取る。

そこにいるのは10歳くらいの男の子だった。待て待て待て？まずなんでこんなガキんちよが「アイスメイク」を知ってた？別の漫画だろ？

「おいガキンチョ、お前何者だ？」

「どうやらただものじゃないみたいだな・・・」

「俺？俺はお前と同じだよ・・・お前が神様殺したせいであつちらは面倒な仕事押し付けられてんだよ」

『リア充がよく言いますよ』

「お前はやつぱりあれだ、バハムートを召喚した別荘に『すいませんでしたあ！』・・・よろしい」

・・・なんか可哀想なデバイスだなおい。

『突っ込んだら負けですよ、マイマスター』

「だな」

てかそれ以前に、神殺して何？あのアテナ<sup>バカ</sup>死んだの？

『多分違つと思いますよ？この方、転生者の様ですが、よく調べたらここ並行世界みたいですし』

あー・・・なるほど？

「おいお前「おりゃあああつ！」「ちょ、待て！」

「こちとらなのは待たせてんだ！後が怖いからすぐすまそ、アイギス！」



『了解です、ようやくハーレムとして自覚が・・・』お前後で別荘  
な』すいませんっしたあ!』

は?なのはだつて・・・?

「ちよつと待て!話を聞けつて!」

『マスター、多分彼は相当焦ってますよ?』

話無理か・・・じゃあ『O H A N A S H I』だな

「マイマジックスキル・マジステル!」

サギタ・マギカ  
魔法の射手 セリエス ルーキス  
連弾光の97矢!

「なっ!?!無詠唱!?!」

『相手も何やらチートですね』

命side

俺はなのはと翠屋で集まる約束をしたんだが、その前にアイギスが  
転生者を発見した。面倒だけどこれも仕事ということで向かったん  
だが、今回はかなり敵が強い。

「ならこつちも!ゼノンの偉大なる魂よ、ここに!」

俺はエクセリオンブレイドを取り出し、突っ込む。しかし、敵は余

裕だった。

「なら・・・」

織天覆う七つの円環！  
ロー・アイアス

宝具まで使うのかよ！だったらあ！

王の財宝！  
ゲート・オラ・バビロン

「行けっ！」

宝具が飛ぶ。これは避けられないだろ・・・

「おっとっと！」

『プロテクション』

バック転をしながら避けられる。ウルトラマンかてめえは！

迅side

王の財宝まで使うとは・・・あいつも俺と同じなのか・・・？

「まあ、やりあえば分かるか」

『しかし、彼は見たところ無限のエネルギーを供給していますね』

つまりこのままじゃお互いに埒が明かないと・・・

「なら、もう速攻でけりをつけて話を聞いてもらおうか。投影開始」  
トレース・オン

エクスカリバー  
「約束された勝利の剣を取り出す。すると向こうも同じものを取り出しやがった。」

「エクスカリバー約束された勝利の剣！」

互いの真名解放によってその魔力がぶつかり合う。

「エクスカリバーおおおおおおおおおおおっ！」

しかし結果的に同じもんを使ってんだから同じ威力で同じ要領で吹っ飛ばされた。しかしながら、俺にはゼロが補助で魔力障壁を展開してダメージを軽減してくれていた。

「エクスカリバーいつてえー！」

「うおっと、ゼロサンキュー」

『これくらい当然です』

「アイギス！お前なんで防壁張らないんだよ！」

『マスターが悪いんですよ？私を使ってくれないから』

なんて理不尽なデバイスなんだろう・・・

「なあ、俺あいつが可哀想になってきた」

『奇遇ですねマスター、私もです』

「おい小僧、ちょっと話聞いてくれないか？俺はお前が言ってることがさっぱりなんだ」

「は？」

「とりあえず俺はその神殺しつてのを知らんし、色々食い違いがあるかもしれない」

こうして、初となる同じ力を持つ奴のと戦闘を終えた。

話を聞くと、この少年『四季 命』は、俺と同じように転生者らしいが、神様の不手際ではなく、女の子を助けて死んだらしい。かつこいじゃないか。で、アテナみたいなバカげたことをした神様が殺され、その転生者を片っ端から潰していたらしい。

「んで、俺をそれと間違えたのか」

「そういうこと、悪かった」

『にしても、マスター以外に転生者がいるとは、驚きました』

「確かに、並行世界とはいえなあ」

「そうなのか？」

『マスターの場合、ウハウハハーレムを継続中ですけどね』

「・・・・・・・・・・」

肉体年齢それ（10歳）の癖に引くわ

「引くな！そしてアイギス！てめえは変なこと言っんじゃないねえ！」

『だってそうでしょ、稀少技能使ってフラグ立ててるんですから』

「・・・世界一無駄な能力の使い方だな」

『まったくですね』

なんて二人の争いを聞きながらお茶を飲む俺。

「そういえば、アンタの能力は？」

「ああ、あれ？お前みたいに複数の稀少技能じゃなくて、一つに統一している」

『神の本棚』について教えると、その手があったか！と驚いていた。

「なにはともあれ、誤解が解けてよかった。それにここなら少しゆつくりできそうだ」

管理局に並行世界まで追う技術ないし

「そういえば迅さんはどうして追われてたんだ？」

「ああ、管理局にちょっと嵌められてな」

今までの経緯を話すと、命はうちでかくまってやるよと言ってくれた。別にいらんけど、お世話になっておくかな。

「そう言えば命？お前なんか急いでたんじゃねーの？」

「そうだ！忘れてたああ！なのはに怒られるう！」

言いながらいきなり瞬動を使って走る命。年齢的に言ってまだA S時代かな、アイツら

『マスター、いいんですか？』

「どうせ行先は翠屋だろ？ゆっくり行こうぜ」

こうして俺も翠屋に向かった。

命side

猛ダッシュで着いた俺だけど、その扉から溢れる黒いオーラに押し殺されていた。怖い、めっちゃ怖い。もう彼これ10分はこんな感じだ。

「何してんだお前」

「え？あ、迅さん!？」

「さんいらねえよ」

いつの間にか迅がいた。はや！

「瞬動使うバカに言われたくねえ・・・おら、はよ入れ」

俺は蹴り飛ばされ、中に入った。するとそこにはなのは、フェイト、  
すずか、アリサ、アリシアの5人が修羅と化していた。

「命君命君、今どれくらい経ったかな？かな？」

「ご、ごめんなのは・・・ちょっと用事があって」

「私達と会うのより大事なことって何？命？」

デバイス向けるなフェイトおお！

迅side

『（あの、マスター？助けてあげては？）』

「（いや、他人のハーレムって見ると面白いな）」

『（人のこと言えない癖に・・・）』

なんか言った？

『（いいえ、何も）』

なんか段々アリサたちも怖くなってきたので、俺は助けてやることにした。

「あー、その綺麗なレディたち？」

「あれ？あなたは？」

「さすが首を傾げる。」

「命の従兄の兄で、神谷迅だ。ちょっと用事で可愛い弟に会いに来たんだが俺が無理を言って街案内をさせてしまったな、それでここに来るまで遅くなってしまったんだ」

「という嘘をついてやる。今の今まで殺し合いしてましたなんてサラッと言えないしな」

「なーんだ、そうだったんだ。命君も最初からそう言えばいいのに」

「なのは、お前いつか命（いのち）に騙されるぞ」

「ああ、悪かったな、あはは」

「そうだ、私は高町なのはです」

「フェイト・テストロッサです」

「アリシア・テストロッサだよ」

「アリサ・バニングスよ！」

「月村さすがです」

「八神はやて言います、よろしゅうに」



と、それぞれが挨拶をしてくる。知ってます

『(マスター、今軽く現実逃避しましたね?)』

「(ソナナコトナイヨ)」

まったく嫌になるね・・・子供のころのあいつらか・・・

「ん?どうしたんですか迅さん」

「いや、なんでもないよ」

この世界でなのはを救ったのは当然命だろう・・・追われる身となった俺としては、この光景ってのはなんだか懐かしくて寂しいもんだ・・・

「ん?電話鳴ってるぞ、命」

「まじで?俺ちょっと出てくるわ」

どうやら、話に聞く神様らしい。転生者が出たのか?

「(なあ迅、転生者がこの街にいるらしいんだ。手伝ってくれないか?)」

「(別にいいけど、お前だけで十分じゃねーの?)」

「(面倒だし、なのはに何言われるかわからねーだろ?)」

ああ、なるほどね。こうして事情を説明した後、俺達は海鳴臨海公

園に向かった。

公園に着くと、なんか知らんけど怪獣が暴れていた。あれって『ベムスター』じゃね？

「じゃあねえ、行くか命！」

「おうよ！って、どうする気だ？」

「どうもどうも、そのまま倒すしかないっしょ」

俺ウルトラマンになるの能力はまだ作ってないし。というか転生者はどこだ？

「どうやらベムスターと一体化したみたいだ」

どんなチートだそれは……

「ったく、面倒だな……行くぜ？命」

「ああ！」

こうして能力を解放する俺達。

「！」

「行くぞっ！」

無詠唱で燃える天空を唱える命。どうやらデバイスが代わりに詠唱しているらしい。すごいな。

「こつちも負けてられないな・・・ゼロ！」

『魔力リミッター解放、行けます！』

プロ・アルマティオーネ　ヘー・匠ノ術ヲ操リテユナメネー  
術式兵装　『雷天大壮』！

雷天大壮を纏い、ベムスターに突っ込む。

「うおりゃっ！」

零距离　雷の暴風！

「！」

「うおらぁ！」

帝国九七式破城槌型　魔導鉄甲！

うおおお！？アイツネギまのなんてマイナーな武器を！知ってるやついるのかあれ！あれをくらい、ベムスターがよろける。さあて、一気に決めるか！

「命！」

「おっ！」

『魔力最大、いけます、マイマスター！』

『私も数少ない出番です。マスター！』

互いに魔力を引き出し、それをベムスターに向ける。

「キーリブル・アストラバー  
千の雷！」

千の雷が激突し、ベムスターが爆発した。

「いよっしゃー！」

「おっしー！」

こうして、俺達の戦いは幕を閉じた。

ベムスターを倒した後、気絶した転生者を天界に送ったらしい。俺もそろそろ行くとしよう。

「じゃあな、命」

「もう行くのか？」

「ああ、この世界のなのはたちを見て思った。俺の世界のなのはたちが今、苦しんでいるってな」

俺のことを信じていたあいつらだ。きつとまた変な悩み方してんだろ

「そっか・・・」

「じゃあな、俺と同じ・・・世界を救うために戦う転生者」

「じゃあな、俺と同じ・・・世界の悲劇を救うために戦う転生者」

こうして、俺は転移した。元の「リリカルなのは」の世界へと

命side

「行っちゃったな・・・」

『ですね、しかし彼の様子からして彼もきつとハーレ「こういうときくらいシリアスになれ、ジャンクにすんぞ」すいませんしたあっ  
』

不思議な出会いだ。今まで転生者とは戦ってばかりだったからな。

『さて、早く戻らないとなのはさんたちが怒りますよ?』

「・・・だな」

こうして俺は翠屋へと帰ることにした。

外伝「転生者×転生者」（後書き）

秋風「はい、ということでマイペース先生の四季命の原作破壊サーガとの共演でした」

迅「どうでもいいけど、なんでベムスター？」

秋風「なんとなくw」

迅「そしてくだくだだったな」

秋風「すいません！」

迅「てか、本編更新しろよ」

秋風「あー・・・はい」

迅「マイペース先生、なにかおかしかったらメールください」

秋風「それではw」

共演作品 四季命の原作破壊サーガ

よくある女の子を庇って死ぬというパターンの転生物語。しかし一味違うのが神様は世界に干渉しないのだが、他の神がアホをして転生者を出していたら殺される。そしてその転生者たちを追うのが四季命という転生者VS転生者という戦いが展開される珍しい小説。本人はフラグを自分の意思で立てる能力の無駄使いをしている。そしてロリコンである。デバイスを設定してもデバイスまでもがハー

レムの輪に入りたいというなんとも個性的なデバイスを持っている。  
今後はStS編が気になるところ。

残る先生

鷹先生

神崎先生

第八十八話「修業終了?」(前書き)

お久な更新です。とりあえずお楽しみください



第八十八話「修業終了?」

ティアナside

「行くわよスバル!」

「うん、ティア!」

私はクロスミラージユを構える。仮面ライダー……かならず、倒して見せる!

「ティア、どうするの!?!」

「考えがあるわ、スバル……」

私はスバルに作戦を伝える。

「ええ!? 大丈夫なのティア!」

「やるしかないわ! 信じなさい!」

私が言うと、スバルは迷うことなく頷いた。

「わかったよティア、信じてるから!」

こうして、私達の作戦が開始された。

迅side

「・・・さて、あいつらがどう動くか」

仮面ライダーデルタと仮面ライダーザビー・・・どちらも作品の中ではサブライダーとして登場するライダーだが、どちらも強力だ。仮面ライダーデルタはファイズの作品においても初期に造られたベルトだが、装備が少ない分威力は大きい。ザビーは近接戦闘のみだがそのフットワークはスバルより上。どちらも戦闘評価総合はAAランクを超えている。さあ、どうでる？

「でえええい！」

スバルがザビーに突っ込む。ザビーもそれに反応してカウンターを繰り返す。しかしそのスバルは消える。

「幻術？」

なかなかの精度で作られた幻術だ。すると数十にも渡るシルエットが現れる。なるほど・・・攪乱するとは、考えたな

「でえええええええっ！」

「!？」

スバルが3人同時に来る。ザビーは惑わされる『どれが本物なのか？』とだが・・・

「はっ！」

その程度ではザビーには通じない。全てザビーが拳で貫く。だがま

たしてもいない。その瞬間だった。

「がはっ！」

デルタが吹き飛ぶ。まさか・・・？

「完全に油断したわね」

ティアナの勝ち誇った声が聞こえた。なるほどな・・・前衛のザビーに集中させ、がら空きになったデルタを狙う。確かに良い方法だ・・・だが

「Fire」

「え！？」

その倒れかける状態からバーストを放つデルタ。狙いは同じ条件になったティアナ

「つく！」

ティアナはそれを避けるが、その避けた方向が悪かった。

「であああっ！」

「なっ・・・がふっ・・・」

ザビーが既にクロックアップで接近し、ティアナを吹き飛ばしていた。

「つく！クロスファイア・・・」

「・・・ライダーステイング」

「撃必殺か・・・って、ん？」

「ティアに手を、出すなああ！」

「スバル！？」

「ぐはっ！」

ザビーが吹き飛ばされる。おいおい、まさかこれって・・・

「おおおおおおおおおおおっ！」

スバルの目が金色になる。ティアナの命が危機に瀕したことからか、スバルは戦闘機人モードになっていた。

「うおおおおおおりゃああああああ！」

「つく！クロック・・・させるかあ！」！？」

ティアナを傷つけた起因がわかったらしく、ザビーがクロックアップする直前に懐に飛び込んでいた。

「おお・・・」

やるじゃないか・・・っていてもあいつ意識あんのか？

「スバル！止まりなさいってば！」

駄目だこりゃ・・・

「Check」

『Exceed charge』

デルタがルシファーズハンマーをするために飛ぶ。スバルもリボルバーナツクルを構えて躍りかかった。

「うおおおおおおおっ！」

「しょうがないな・・・」

ここまでだな

「ゼロ」

『オーライ、マイマスター』

武装を装備して、二人の間に入り、その攻撃を止める。

「！」

「!?!」

「はい、ストップ。デルタもザビーもストップだ」

「.....」

俺の言葉を理解したのか、行動を止める。それによって二人の仮面ライダーは消えていった。消えたのだが・・・

「うおおおおおおおっ！」

スバルがまだ止まっていなかった。

「ちい！止まれスバル！」

あーもー面倒だ！

「よつと！」

俺は瞬動でスバルの背後に回り込み、手刀で首に一撃を入れた。

「ガッ！」

スバルはそのまま倒れ、気絶してしまった。

「ふう・・・ティアナ、お疲れさん」

「はい、兄さん」

ティアナもその場にへたり込んでしまった。

「どうだった？『本当の』戦いは」

「すごく、怖かった」

そりゃそうか・・・

「でもよく頑張ったな」

俺はスバルを担ぎながら、ティアナの手を取り、立ち上がらせる。

「あ・・・」

「なのはたちがやったときは、もっと大変だったからな」

「え？なのはさんたちも・・・？」

そう、別荘で戦わせた時は大変だった。

「ま、とりあえずよく頑張ったな。ゆっくり休め」

こうして、スバルとティアナは眠りに着いた。

夜、俺はいつもの広場に立っていた。

「さーて、俺も修行を再開するかね」

『疑似ライダー召喚』

俺が作り出した、なのはのシミュレーションプログラムを応用した  
もの。周りにはG4、リュウガ、オーガ、グレイブ、歌舞鬼、  
クカブト、ネガ電王、ダークキバ、ダークディケイド、WCAXが  
いる。  
ダブルサイクロンアクセルエクストリーム

「来い！」

俺の言葉と共に、一斉にライダー達が襲いかかる。

サギタ・マギカ  
魔法の射手 セリエス イグニス  
連弾炎の49射手！

魔法の射手で牽制し、空中へ飛ぶ。しかし、そのままライダー達もジャンプして追ってくる。

『STRIKE VENT』

「ゼロ！」

『プロテクション！』

リュウガからのストライクベントを避ける。だがその背後からさらに攻撃が飛んでくる。

『ATTACK RIDE BLAST！』

ダークディケイドのブラストだ。

虚空瞬動！

今度はそれを横に避け、剣を構える。落下地点にグレイブがいるからだ。

「はあっ！」

「むんっ！」



剣と剣が交わり、火花が散る。そして俺はその場に着地する。

『ONE TWO THREE!』

「ライダーキック」

「ゼロ!」

『身体強化 物理保護全開』

ズガアアアン!

「……あぶね」

俺はそのライダーキックを受け止め、抑えつけ、投げ飛ばす。

「うおらっ!」

『マスター、大丈夫ですか?』

「……問題ない」

やっぱりダークライダー全員と戦うのは無謀だったかな

『XTREME! MAXIMUM DRIVE!』

「げっ!」

一番未知数のあれかよ!

「はあああああっ!」

「トレース、オン  
投影開始!」

「ロ・アイアス  
織天覆う七つの円環!」

7枚のうち4枚の花弁が割れる。なんて威力だ!

「はあっ!」

今度は別方向からミサイルが飛んでくる。

「おっと!」

G4か・・・

「ウエイクアップ!」

『FULL CHARGE』

どンドン撃ってくるな、必殺技・・・魔力は溜まったし、そろそろ逃げるのはいいな。

「オリジナル魔法・・・行くぞ」

『魔力リミッター50%解放、行けます』

ティアナside

私は夜、何故か目を覚ました。そして爆音と光がある場所を見つけてそこへ向かった。そこでは私とスバルがまったく歯が立たない仮面ライダー9人を相手に、兄さんが余裕の笑みで攻撃を避けたり、反撃している姿だった。

「すごい・・・」

兄さんは華麗に、そして力強くその攻撃を踊るように避けていた。すると、カブトムシを思わせるライダーが蹴りを放った。

「危ない！」

「ライダーキック」

「ゼロ！」

『身体強化 物理保護全開』

爆発が起きる。でも兄さんは逆にその脚を抑えつけて投げ飛ばす。そしてその後もなのはさんやフェイト隊長の必殺技にも等しい攻撃を避けたり、ミサイルを跳ね飛ばしたりして、地面に着地する。

「兄さん、いったい何を？」

まるで時間を稼ぐかのように、今まで攻撃を避けたり防いだりしていた。

「オリジナル魔法・・・行くぞ」

『魔力リミッター50%解放、行けます』

お、オリジナル魔法つて・・・？

『エネルギー充填、マスター！』

「魔力最大・・・！」

兄さんの腕が光り出し、まるで手のひとつひとつ爪の様になり、変わった。そしてライダー達が一斉に兄さんに襲いかかった。

「インストール  
展開」

M? b i u s !

兄さんの腕から光が放たれ、辺り一帯が光に包まれた。

「きゃあああああああ！？」

迅 s i d e

「はあ、ぜえ、はあ、ぜえ・・・」

初めて、使った割には・・・なかなか、やったか？

『マスター、大丈夫ですか？』

「なん、とか・・・」

多分今までだったら即気絶してたな・・・

「兄さん！」

「ティアナ・・・見てた、の・・・か」

「兄さん！？兄さん！」

ここで俺は気絶した。ティアナが必死に俺のことを呼んでいた気がした。

## 第八十八話「修業終了?」(後書き)

秋風「ということで、久しぶりの更新でした」

迅「遅すぎだよ」

秋風「ごめんなさい」

迅「まあ、とりあえずお前が学園祭でコス「だまれえ!」うおっ!」

秋風「それはもう黒歴史だから黙ってる!」

迅「ちっ」

秋風「んでもって、今回迅の必殺技ですが」

迅「お前好きだよな、これ」

秋風「気にすんな。とりあえずFate編とは違った必殺技です」

M?biusとは?

M?biusはメビウスと読む。つまり「無限大」を現す。ティアナの腕が爪の様に・・・というのは、指の一本一本がディーグレのアレインのイノセンスの様な状態である。攻撃は莫大なもので、9人のダイクライダーたちを一瞬で打ち倒す威力を持っている。詳細については別の話で

秋風「こんな感じ?」

迅「けつきよくほとんど分かってないじゃん！」

秋風「それは続きを読めってことだ」

迅「次回、第八十九話『夢って大事だよね』 TAKE OFF!」

祝!?!500万ピット?。(。(?!?)(前書き)

なんか、ね・・・この前気まぐれに見たら・・・え?  
って感じで固まりました。うん、皆さんには感謝の言葉でいっぱい  
です。



祝!?500万ヒット? )。 )!?

500万アクセス

秋風「……………」

迅「おい、これ何さ」

秋風「うん、びっくりした」

迅「最後に更新したのは？」

秋風「一ヶ月前」

迅「死ねやアアア！」

秋風「ぎゃあああああああ！」

迅「どんだけ読者様が待ってると思ってる！バカかお前は！」

秋風「だって！小説更新する前に冬コミの絵が終わらないんだもん！」

迅「だもんじゃねーだろ！これ明らかに『今日も更新してねーよ、しょうがないから前の見直すか』って人達だよ！」

秋風「より詳しく知れていいでしょ？」

迅「あほかぁ！」

秋風「えー、ほんと、すいません、でもありがとございます。500万ヒット・・・個人的に心臓が飛び出るかと思いました」

迅「色々ありましてね、今は描いてませんが近日中に上げさせますので」

秋風「わかった、わかったからゼロを構えるのやめて」

迅「さて、500万ヒットって・・・何かするの？」

秋風「うん、まあ・・・やることといっても・・・」

迅「ただ一つ」

秋風「キャラ募集・・・だけ、かな」

迅「だろっなあ・・・」

秋風「ただ、普通じゃつまらないからさ、工夫を入れる」

迅「工夫？」

秋風「今回募集するのは2つ」

迅「というと？」

秋風「純粹に仲間じゃなくてユニゾンデバイスが一つ」

迅「おい、リインフォースが荒れるぞ」

秋風「二つ目、敵が1人・・・正し条件付き」

迅「条件？」

秋風「敵はリリイとかみたいにある作品の能力を得ている」

迅「つまり？」

秋風「なにかしらの作品の力を得た状態であること」

迅「なるほど、仮面ライダーになれたり、ネギまの魔法が使えたり  
って感じか」

秋風「例は な」

名前 ベータ

年齢 不明

性別 男

能力 仮面ライダーダークカブト

ランク リメイカー幹部

目の色 黄色

髪の毛 黒

かつては管理局の違法実験に関わっていた局員。しかし、資質から  
彼も同じように実験台にされてしまう。結果は当然のごとく失敗し  
て廃棄となった。

その後瀕死の状態で目が覚めた時、仮面ライダーダークカブトと  
して覚醒した。

使用作品 仮面ライダーカブト

秋風「まあ、こんな感じ。あくまでも一例だけど」

迅「ユニゾンデバイスも募集するぞ」

秋風「たくさんのご応募お待ちしております」

迅「そしてこれからもこの作品をよろしくな！」

秋風「では！」

祝!?!500万ヒット?!)。。(?!?)後書き

本当に募集します。どしどし応募、待っています!

第八十九話「睡眠薬を使うのは大概いいことではない」（前書き）

ほんとすいません、ようやく本編を描きます。

冬休みになればきつといっぱい絵を描いて、たくさん小説を更新できると思います。

とりあえず神様シリーズのオリジナルは絵を描くつもりです

そこで質問なんですけど、この小説に挿絵ってどうやって入れるんですか？

知ってる人教えてください！

## 第八十九話「睡眠薬を使うのは大概いいことではない」

M?biusを使った後、俺はティアナに介抱されて目を覚ました。その後スバルも目を覚ました。スバルは戦った記憶が鮮明に残っており、俺に襲いかかったのを悔いて謝ってきた。俺はそれを許し、みんなで別荘を出た。出たら出たで、なのは、フェイト、はやて、アリシア、すずか、アリサ、シグナム、リインフォースが仁王立ちで立っていた。逃げようと試みるも、捕まって3人一緒に説教を喰らった。

「・・・疲れた」

現在、部屋でソファアに横たわっている。一方その前では、ターナとヴィヴィオが仲良くお絵かきをしていた。現在午前11時45分

「平和だ・・・」

ぶつちやけリメイカーは襲って来ない上、ナンバーズはフォワードと混ざって訓練中だし、1〜4のナンバーズも事務作業中だし、ルーテシアはゼストの様子を見に行っただし

「って、あ・・・ゼストに会ってねーや」

スカリエッティが会ってくれって言ってたな。後はレジアス・ゲイズがどうなることやら。

「パパ！見て見てー！」

「ん？」

ターナとヴィヴィオが俺のところ紙を持って近づいてきた。そこには機動六課のメンバーと、ヴィヴィオとターナ、俺が仲良くしているところが描かれていた。

「ターナと、ヴィヴィオで書いたの！」

「おー、すごいすごい！よく書けてるじゃないか」

俺は言いながら二人の頭を撫でる。俺はその書かれた絵と一緒にターナとヴィヴィオの写真を取る。二人は嬉しそうだ。

「よし、じゃあそろそろご飯行こうか？」

「わーい！ターナはハンバーグがいい！」

「はいはい」

こうして俺達3人はそのまま食堂へ向かうことになった。

食堂に入ると、珍しい人物を見た。

「おや、迅じゃないか」

「スカリエッティ・・・珍しいな」

いつもならラボで食事を取るのに、珍しくここにいる。他の局員は元犯罪者というものには抵抗があるのか、周りの席には人がいない。俺は気にせず席に座ることにした。



「スカリエッツィおじさんこんにちは」

「わ」

ターナとヴィヴィオが素晴らしいながら席に座る。

「やれやれ、私ももうおじさんか」

「ははは、まあ気にするな」

料理を置き、食事をする二人。

「それで……どうだったかな？私の組んだトレーニングは」

「ああ、なかなか良く機能していたよ。でももっと欲しい」

「ほう……まだ耐えられるのかい？やはり君は素晴らしいし、興味深い」

と、笑うスカリエッツィ

「ま、アレの完成はもう少し先かな」

「あれが完成すれば、君は無敵だからね」

「ははっ……まあ、無敵かどうかは知らないけどね」

M?biusは確かに強力だが、反動は大きい。そのM?biusを色々といじろうというのだから、

それもまたおもしろいことになる。

「あ、そう言えばスカリエッティ」

「ん？なんだい？」

「例の『アレ』は？」

「ああ、順調さ」

と、スカリエッティは笑う。

「悟られるなよ、あれは色々凄いから」

「まかせておきたまえ。必ず完成させよう」

「・・・フッフ、スカリエッティ、お前も悪だな」

「それを考える君こそ・・・フッフ」

なんてお代官と越後屋ごっこをしながらも計画の進行書をもらう。  
なるほど、40%ね

「さて、私はそろそろ戻ろっ」

「そうか」

「ああ、そうだ・・・迅」

「ん？」

スカリエツティが何やら地図を取りだした。

「騎士ゼストが今ここにいる。会ってくれないか？」

「わかった」

地図を受け取り、場所を見る。山岳地帯に建物があるのか・・・

「よし、ヴィヴィオ、ターナ、食事が終わったらリインフォース達  
のところでもいい子にしてなさい」

「パパ、どこかに行くの？」

「ああ、ちょっとお仕事だ。いい子にしてるんだぞ？」

「はーい！」

こうして二人が食堂を走って出ていく。するとそこへドワーエが現  
れる。

「迅」

「ん？ドワーエ」

「騎士ゼストの所へ行くの？」

「ああ、まあな」

「なるほど、地上本部へ行くわけね」

勘がいいな・・・

「その通りだ。てか、お前レジアスの秘書じゃねーの？」

「元々レジアス・ゲイズを始末する予定だったけど、ドクターがこちら側にいる以上、も消す意味もないし・・・暇だから私も連れてって」

・・・まあ、別にいいか

「いいよ、行こう」

「やった、さっそく行きましょう」

こうして俺はドゥーエと共に、騎士ゼストに会うことになった。

S i d e o u t

一方のなのはたち

「zzzzzzzzzz・・・」

「あれー？なのはママたち寝てるー」

「リインフォースママ、起きて〜」

ドゥーエの眠り薬入りの飲み物を飲んで眠っていた。

「えーと、この辺りなんだが・・・」

「ふふ、それにしても迅と一緒にいるのは久しぶりね」

「そう言えばそうだな」

いつもナンバーズがいることは少ない。というのも、俺にかまって欲しいがために寄ってくるとなのはにいつも「O H A N A S H I」を喰らうからだ。

「だから今日は、とってもいい日だわ」

そう言いながらドゥーエが俺にくつつく。今のドゥーエの恰好は山岳地帯と言うこともあって新型のスーツだ。といっても原作のあのスーツは本当にひどいので、俺がデザインしている。それぞれがあった服ではあるのだが、ドゥーエのは色々と露出度が高い・・・確かに高いんだけど・・・

「あの、ドゥーエ？」

「何かしら？」

「俺が作ってあげたスーツ・・・なんか、デザイン変わってない？」

そう、色々と自重して胸部などはちゃんとスーツが覆っているはず。しかし、それが半分くらい取っ払ってある。腕やふとももなんかの露出も半端ではない。

「うふふ、貴方が作ったスーツ・・・実は部屋に飾ってあるわ」

「・・・は？」

「せっかく迅が作ってくれたスーツですもの。使ったらもったいな  
いわ」

「それじゃ作った意味ないじゃん」

そもそも、俺があげたものってそんなことになるのか！？

「実を言えば、ウーノと私は迅からもらったものは使わないもの」

いつもとは違い、妖艶な笑みではなくごくごく普通の少女のような  
笑みを浮かべ、ドゥーエは俺にさらにひつつく。

「ドゥーエ・・・」

「うふふ、ほら・・・目標はもうすぐよ。行きましょっつ」

「わかった、行くぜ」

俺達はその場所へと飛び立った。

山岳地帯へ着くと、一つの小屋を見つけた。もう随分前に破棄され  
たようだ。

コン、コン

「……………」

「留守かしら」

「いや……下がれドワーエ」

「え？」

次の瞬間、槍が扉から出てくる。俺は投影した千将・莫耶トレスで防ぐ。

「誰だ」

「ルーテシア・アルピーノの依頼で貴方に会いに来た。ゼスト・グライガンツ」

槍が引き、建物の奥から大柄な男が出て来た。

「ルーテシアの名を知っている貴様は何者だ？スカリエツティの仲間か？」

「ああ、俺の名は神谷迅、こっちはナンバーズ2のドワーエ」

「俺に何の用だ」

「ルーの依頼を受けて、ここに来た」

「あいつの依頼、だと？」

ゼストは首を傾げる。

「ルーテシアが言っていた。ゼスト、貴方が地上本部にいる中将、レジラス・ゲイズに会いたがっていると」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「その依頼を受けて、私達が来たってわけ」

「そうだったのか・・・」

「さあ行こう、騎士ゼスト。全てに決着をつけるために」

こうして、俺達は地上本部へと赴くことにした。

時空管理局 地上本部

「ねえ、本当に大丈夫なの？これ・・・」

現在ロビーにいる。ドゥーエはライアーズマスクを付け、俺は俺でサングラスで顔を隠している。ゼストはフードを被っただけだが。

「平気だよ、さあ・・・行くか」

エレベーターでいざ、レジラス中将の元へ！

レジラスside

「・・・・・・・・・・・・・・・・」



今日は何故か、胸がざわつく

「中将、どうかしましたか？」

「いや・・・少し休憩にしよう」

地上を、そしてこの世界を守るために私はどれだけの犠牲を払った  
だろうか・・・？仲間を、家族を・・・そして自らの手を犠牲にし  
てまで私は守ろうと決めた。

「ふっ・・・」

歳は取りたくないものだ・・・嫌なことばかり考える。

「中将、お茶が入りました」

「ああ、すまん」

茶を飲み、立ち上がって外を見る。相変わらず平和な世界、この平  
和も、いつまで続くのだろうか

ウイイン

「・・・？誰だ？」

突然扉が開く。いったい誰が・・・

「初めまして、レジアス・ゲイズ」

「貴様、何者だ？」

サングラスをした男と、ピンクの髪の子、そしてフードを被った男がいた。

「貴方達なんですか！勝手に中将の部屋に……」

「……オーリス、黙っている。お前は……神谷迅」

そう、世界を救った「英雄」だ。

「ふっ……覚えていてくれるとは光栄だね」

「英雄がなんのようだ？よもや、私に刃を向けに来たか？」

「そんなことを言うってことは……アンタはやっぱり悪事を働いてるわけだ」

どうやら、ワシが思った通りか？

「まあ、今回はアンタを殺しに来たわけじゃない」

「何？」

「アンタと話したい人がいるんだ」

「……!？」

フードの男が前に出て、それを取る。お、お前は……!

「久しぶりだな、レジアス」

「ゼスト・・・！」

ワシの友と呼べる男が、そこにいた。

第八十九話「睡眠薬を使うのは大概いいことではない」（後書き）

秋風「な、長かった・・・」

迅「おい、どうしてこんなに更新が遅れた」

秋風「だ、だって・・・途中まで描いたのが消えたんだもん」

迅「ちゃんとこまめに保存しろ」

秋風「ごめんなさい」

迅「明日はどうするつもりだ」

秋風「一応、スターゲイザークロスとゼロクロスをなんとか更新する予定」

迅「はやくやれ」

秋風「はい」

迅「次回、第九十話『夢を掴もう』TAKE OFF!」

第九十話「夢を掴もう」（前書き）

キャラ募集まったく来ません！

どしどしお願いします！待ってます！

特にユニゾンデバイスの設定を期待してます！

ちなみに今回はこの小説を書くこのリリカルなのは二次創作の有名な作品のキャラが！ついに！ゲストに！

ではどござー！

## 第九十話「夢を掴もう」

俺は今、レジアス・ゲイズの部屋にいる。ゼストは一步前に出て、先にいるオーリスをちらりと見た。

「オーリスはお前の部下か」

「ああ、優秀だからな」

静かでありながらも、重い口調が開かれる。

「お前に聞きたいのは、2つ・・・」

言いながら懐から写真を取り出した。それはかつての部隊のもの、そしてもう一枚にはゼストとレジアスの二人が仲良く映る写真があった。

「1つ目、俺達の部隊の捜査を潰し、俺達を消すように指示したのはお前か？2つ目、俺とかつて語りあった夢は、どこにいった？」

鋭い眼光が光る。武人のその目はチートの能力を得ている俺でさえ気押されるものだ。

「・・・」

しかし、レジアスは答えない。

「なぜ答えない、レジアス」

「・・・・・・・・」

「答える！」

長い沈黙を破り、ゼストが槍を構える。

「かつて俺達は誓った！地上の平和とともに守り、世界を守ると！  
なのに貴様がやっていることはなんだ！？答えるレジアス！」

「・・・ワシは」

「！」

「ワシは、全てを捧げて来た・・・この地上を、世界を守るために・  
・・・」

ゆっくりとゼストは立ち上がり、外を見る。

「見る、ゼスト・・・ワシが全てを投げ出した代わりに、この世界  
の人間は、平和に時を過ごしている」

「その投げ出した物の中に、俺達も入っていたのか・・・！」

「・・・否定はできん。ワシは、そうして生きて来た」

「レジアス・・・っ！」

槍を強く握りしめ、ゼストはレジアスを睨みつける。

「なあおい、レジアスさんよ・・・」

「なんだ？英雄よ」

「あんだ、本当に平和を守ったつもりでいるのか？」

俺はただ一言、そう聞く。

「……ワシは平和のためにある。平和のためなら、犠牲にするものもある」

「犠牲の上での平和なんて、本当の平和じゃねえ」

「……」

今まで転生して、苦しいことや悲しい思いをした人間を沢山見て来た。だからこそ、言える。

「レジアス、アンタは逃げてるんだ」

「逃げる？ワシが？誰に？」

「自分自身からだ」

「！」

そう、平和を謳い、戦い続けた男は、戦っていたのではない。逃げていたのだ

「さつきゼストさんが写真を見せた時、あんたは顔をそむけた。怖かったんだろう。自分が、いや……過去の自分が」



「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「夢を抱き、仲間と笑った日々から・・・純粹に世界を守りたいと願い、戦った日々から・・・そんな過去の日々から、アンタは逃げ出したんだ！」

「黙れ！」

レジアスが声を荒げる。

「ワシは逃げてなどいない！平和のために戦うことがワシの今の存在意義だ！そしてこの世界の平和のためなら、どんなことにも身を染めて見せる！」

「ふざけるなっ！」

俺は大声で怒鳴った。

「そんなもの、本当の平和じゃねえ！」

「なん、だと？」

「・・・平和は、確かに待っても来るもんじゃねーし、待つものでもねー・・・自分から歩み寄らなきゃ来るものじゃない。だけど！その身を犠牲にして得る平和なんか！何の意味がある！」

その場が静まりかえる。

「・・・ワシは」

「アンタ達に、見て欲しいものがある」

俺は一つのディスプレイを展開した。

「これは？」

そこにあつたのは、一枚の絵。そしてそこに仲良く映る二人の少女の姿。そう、今日の昼に撮ったばかりのターナとヴィヴィオが絵を持って映る写真であつた。

「これはな、俺の二人の娘の写真だ……と言っても、この二人は本当の娘じゃない」

「どういふことだ」

「ターナ……青髪の女の子の方は管理局の違法な人体実験をされそうになった所を助けた。金髪の女の子……ヴィヴィオは、ジェル・スカリエツィが作った聖王のクローンだ……」

「……」

「そんな子供たちが持っている絵を見てくれないか」

そこに映るのは機動六課のメンバー、俺、ターナ、ヴィヴィオが仲良く手を繋ぎ、隊舎の前にいる写真だつた。

「この子たちは、俺達が思っている以上に辛い思いをして……俺達が思っている以上の苦痛を味わってきた……それでも、それでもこの子たちは！温かい未来を望んでいる！自分たちをひどい目に

あわせた大人たちを信じていてくれる！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いい加減、過去から目をそむけるな・・・アンタの目指した平和は、この子たちの様な次の世代の子供たちに残す者じゃないのかつ・・・！」

俺の言葉に、レジアスは黙り込んだ。

「ワシは・・・」

パチ、パチ、パチ

「「「「「！？」「「「「」

一斉に後ろを見た。そこにいたのは白い髪に白い化粧を付けた男だった。黒く細いスーツからして、貧弱そうに見える。

「いや〜・・・いい話、聞かせてもらいました」

「なんだ、お前は」

「リメイカーです、初めまして」

それを聞いた瞬間、全員が戦闘態勢になる。

「リメイカー・・・何の用だ」

「なに、ちよいと任務です」

「任務、だと？」

男はにやりと口をゆがめる。

「アインヘリアル」

「！」

アインヘリアル……だと？

「私はその制御装置がどうしても欲しくてね……」  
「にっこりとした笑顔で、手を出した。アインヘリアル……原作ではナンバーズが破壊する地上本部の新兵器だ。」

「ふん、貴様などに渡すわけがあるまい」

「まあ、そうですね……じゃあ……」

『N A Z C A！』

「力づくで奪うとしましょう」

ナスカのガイアメモリをドライバーらしきものにセットし、ナスカド パントが出来上がる。

「さあ、やりましょうか……」

「させるかよ……」

俺はWドライバーを装着し、ジョーカーメモリを取りだした。

「リインフォース！」

リインフォースに呼びかけるが、応答がない。

「あれ？」

「迅、探してるのはこれかしら？」

そういうドゥーエの腹部にはWドライバーが装着されていた。そして手にはサイクロンメモリがあった。

「ドゥーエ！？」

な、なんでお前がそれを・・・

「うふふ、リインフォースが寝ている間にちよ〜っとクアットロに弄ってもらったわ」

確かに、俺のWドライバーは模造品であり、強制的にリインフォースとの同時変身を設定させたわけではない。だけど・・・

「わかってるのか？ドゥーエ。それには多大な負荷が・・・」

「わかってるわよ」

言いながらドゥーエが俺の隣に並ぶ。

「愛してる人間となら、どんな負荷だって負って見せるわ」

「・・・行くぞ、ドゥーエ」

「ええ、もちろん」

CYCLONE!

JOKER!

「「変身！」」

CYCLONE! JOKER!

こうして俺とドゥーエは仮面ライダーWに変身した。ドゥーエが戦闘機人であるからか、以外と抵抗も少なかった。

「それがWですか・・・」

「「さあ、お前の罪を数えろ！」」

「「どうだ？ドゥーエ」」

「（問題ないわ。むしろ気持ちいい。迅と一つになってる・・・）」  
これ以上聞いても怖いだけなので、聞かないでおこう。

「いくぞ！」

俺は駆け出し、ナスカドーパントに蹴りを入れる。

「ふんっ！」

ナスカドーパントは剣を振り下ろす。俺はそれを防ぎ、メモリを取り出す。

METAL!

メタルメモリを取り出し、Wドライバーにセットする。

CYCLONE! METAL!

「はあっ！」

「ぐっ！」

メタルシャフトと剣が交わり火花が飛ぶ。そして大ぶりしたところでその隙を見てメタルシャフトを叩きこんだ

「ドゥーエー！」

「ええ！」

HEAT!

ドゥーエーがヒートメモリを起動させ、Wドライバーへとセットする。

HEAT! METAL!

ヒートメタルへとチェンジし、メタルシャフトを振るい続ける。

「……………」

「どうしたの？迅」

「（いや、弱い……）」

そう、こいつは弱い……それもものすごく

「くっそお……」

「ドゥーエ、決めるぜ？」

「わかったわ」

言いながらメタルメモリをWドライバーから外し、メタルシャフトに装着した。

METAL! MAXIMUM DRIVE!

「メタルブランディング！」

メタルシャフトから炎が現れる。そしてそのまま、ナスカドーパントへとメタルブランディングを叩きこんだ。

「ぐああああっ！」

ナスカドーパントは吹き飛び、窓の外へと落ちて行った。ここ、何階だっけ。だけど手ごたえがない……というか、逸らされた感じだ。一瞬だけ超高速を起動して逃げたんだろう。こんな敵がごろごろいるのか……やっつてらんねーよ



「さて、変身を解除するぞドゥーエ」

「もうちょつとだけ迅と一つになりたかったのに……」

「……なんか言ったか？」

「いいえ、何も」

Wドライバーを解除し、俺たちは再びレジアスたちに向き直った。

「……さて、続きを聞きたい。あの写真を見てなお、アンタはどう思うんだ？レジアス」

「……ワシは確かに、様々な悪事に手を染めて来た。正義のため……そう信じて」

「……」

「だが、これを見せられて思ったよ……“ワシが愚かである”と」

レジアスは静かに、ターナとヴィヴィオの絵を見ていた。

「ゼスト」

「なんだ、レジアス」

「今からでも間に合うだろうか、ワシは……平和のために戦えるだろうか？」

レジアスの意外な言葉だった。だがゼストはまっすぐとレジアスを見て頷いた。

「ああ、できるとも・・・今からでも」

こうしてこの一件は片がついた・・・はずだった

「ゴホっ！」

「ゼスト！」

そう、ゼストの寿命である。

「気にするな・・・もう、悔いはない。友が・・・正義の道を見てくれたのだからな」

「迅、何か救う方法はないの？」

「あるには、ある・・・」

だが、この方法は・・・あまりにも、酷だ。

「あるなら使ってくれ！ワシはこやつと話してないことがたくさんある！」

「・・・わかった、やってみよう」

そして俺はゼロを起動させた。

「迅・・・？」

「ゼストさん・・・痛みは、一瞬だ」

ゼロを振り上げた俺は・・・・・・・・・・・・・・・・

まっすぐにゼストの心臓にゼロの殺傷モードで突き立てた。

第九十話「夢を掴もう」（後書き）

秋風「というわけので、衝撃の90話でした！」

迅「なあ、秋風？」

秋風「なに？」

迅「これ、どういうこと？」

リインフォース「ガクガクブルブル・・・」

秋風「あー・・・なるほど、控室を見たのね」

近藤「どうも、初めまして」

リインフォース（以下アインス）「ひいっ！」

迅「なるほどね・・・そういうこと」

秋風「今回のゲストは魔法少女リリカルなのはStrikers  
はじまりの魔法より近藤さんと・・・」

エノレア「やつほーい！」

秋風「その近藤さんのデバイスにして管理局本局の大将エノレアさんです」

迅「なんとというか、設定資料集を見たけど、素晴らしい人だな。男

の鏡って言うか」

近藤「きよ、恐縮です」

エノレア「あはは、私と同じ顔でまったく違う反応」

アインス「うう、迅……」

秋風「うーむ、どの辺が怖いのかよくわからん」

近藤「orz」

迅「まあ、気にするなよ」

近藤「俺はそんなに怖いのか……」

エノレア「ご主人様はすごく魅力的だと思っけどなあ……」

秋風「さて、今回はレジアスのことでしたが」

近藤「俺達の所も死んではいないからな」

迅「確かに、というかさ……近藤さんなんで今は獣王じゃないの？」

秋風「感想用使用だ。気にするな」

エノレア「まあ、ご主人様はどっちでもかっこいいよ」

迅「確かにな」

アインス「……………（ぶんぶん）」 全力で首を横に振る

エノレア「えー？なんでよ」

アインス「こ、怖い……」

迅「駄目だこりゃ」

秋風「まあ、レジアスは実は俺の書いた小説では死んでないんだよね」

迅「確かに、蒼天シリーズでもな」

近藤「それにしても二つ気になる点が」

秋風「なんででしょう？」

近藤「まず、なんでドウエがWドライバーを使ったか」

秋風「ああ、あれは簡単です。あれが本物のWドライバーではないから」

迅「本物である場合は星の記憶であるフィリップに強制装着されるが、これは贋作……だから簡単に設定者を変えられるようになってる。もしリインフォースが変身できない時はエレナと変身できるようにってな」

秋風「今まで迅は色々とベルトを使っているけどあれはあくまでも“本物に近い”だけであり、真正正銘の本物ではない。ただしディ

ケイドライバーだけは並行世界の門矢士とアテナが生み出したから本物と認められているわけだ」

近藤「なるほど」

エノレア「じゃあさ、なんであの変なのナスカド パントは弱かったの？」

秋風「あれはまだナスカド パントとしての覚醒が出来てないから。まあ、ネタばれだからこれ以上は言えないけど、向き不向きがあるってことだけ言っておこう」

エノレア「なるほどねー」

秋風「さて、そろそろ時間だね」

迅「今回はうん、色々とお土産がある」

アインス「こ、近藤さんにはフェイト・T・ハラウンとの将来性を考えて家庭用品一式、エノレアにはこちらの世界の有名な洋菓子だ」

近藤「これはどうも」

エノレア「やったー！ケーキ！」

近藤「一日一個だからな」

エノレア「ご主人様のいけず！」

秋風「ではまた」

近藤「ええ、それでは」

エノレア「ばいばーい！」

近藤 大輔 出演作品 魔法少女リリカルなのはStrikers  
はじまりの魔法

この小説を書こうのサイトでかなり連載時期が長い素晴らしい小説の主人公。正義感が強く、冷静沈着。ただしものすごく天然で言動で他人に勘違いを招くことが多い。原作主人公なのはの無茶による被害者という数少ない設定キャラである。しかしそれによりアルハザードの知識を有した『魔王』である。悪に対しての意識が強く、容赦がない。最近はやフェイトと結ばれ、戦いが終わったら多分ゴールインだともう

エノレア 出演作品 魔法少女リリカルなのはStrikers  
はじまりの魔法

近藤のデバイスというか、夜天の書の原書の管理人格である。近藤とは任務で出会い、今に至る。性格は非常に明るく、お菓子と近藤が大好き。夜天の書の原書であることからリインフォースと顔が同じである。性格が違うのは主にクロノとユーノが原因。近藤に対しての愛が強く。近藤に害をなす者は容赦がない。最近ではスカリエッティが可哀想なことになった。今後彼女の活躍に期待

迅「次回、第九十一話『動き始める世界』TAKE OFF！」

秋風「引き続きキャラ募集してます！」

阪本 葵先生、こんな感じでよろしかったですでしょうか？



出演感謝です

外伝 氷翼の天使（前書き）

お待たせしました神埼先生！  
クロス小説完成です！どうぞー！

## 外伝 氷翼の天使

逃亡生活を続けて早くも一週間。随分と逃げて来たものである。一人と言つのもやはりつらいところもある。シグナムとリインフォースには色々と渡しておいたので、彼女達は大丈夫だろう。

「……ん？」

とりあえず逃げ込んだ次の世界。うん、なーんもない。海しかない。海と云うか、海と陸だけか？俺は静かにそこへ着地し、辺りを見渡した。

「こりゃちょうどいい。静かにできる」

随分魔力も消費したし、ここらでゆっくり休むとしよう。そんなことを思いながら、俺は寝っ転がる。静かに波の音が聞こえて、とても気持ちがいい。魔力も段々と落ちついている。

「………」

体は静かに魔力を循環させ、体内の魔力を段々と正常に稼働している。どうやら今までの戦いで相当無理をしていたことが分かる。

「……ん？」

空で何か光るのが見えた。そしてその光はだんだんと俺に向かってくる。

「え？」

そして次の瞬間

「ぐふえ!?!」

俺の鳩尾に何かヒットした。

????side

僕が……!僕が!なのはを!みんなを傷つけた!僕は……!僕は!

『マスター!』

「え?」

目を開けると、僕は人に肘をぶつけていた。

「あ、あの……大丈夫ですか?」

「……お、お前な、人の腹に肘を空からぶつけておいて大丈夫って聞くか?普通」

よろけながらも、男の人はゆっくりと立ち上がった。僕と同じくらいか下?つぽいけど、なんだか貫禄が出ている。

「あ、え、えと……ごめんなさい……その、わざとやったわけじゃ……」

「わざとやったなんて言ったらボコボコにしてやる。てか、お前誰だよ……」

「僕は……」

一瞬、名乗るのをためらう。もう全国に僕の名前は知られているはずだ。この人は知らないのかな？

「えと……その」

「わけありか？別に名乗りたくなきゃいいよ。俺だってお尋ね者だしな」

「……え？」

僕は目を丸くする。

「なんだ？知らないのか？局長が民間協力者だろ？お前」

「え……!？」

僕は驚いて彼を見る。

「そんだけ魔力ダダ漏れにしたらわかるっての……」

「……僕のことを知って、どうしますか？」

「別に？俺を捕まえようとするなら抵抗するけど？」

「……僕は、もう民間協力者にはなれません。だからそれをする

気もないです」

僕は小さくそう言って、彼の隣に座った。

「えと、僕はリオス・コーネルド……です」

「そうか、俺は神谷迅……現在指名手配の局員大虐殺者だ」

「ええ!？」

もう、驚いてしかない。すると、迅は静かに笑う。

「もっとも、管理局に嵌められたんだけどな」

「そう、なんですか？」

「信じる信じないはお前の勝手だが……色々あってな」

「そう、なんですか……」

静かにその海を見る迅は、遠くを見続けていた。

「リオス……って言ったな」

「え、と、うん」

「お前は どうして、そんな悲しい目をしてんだ？」

迅は前を見たまま、静かにそう呟いた。

迅side

このリオスってやつ。どうもさつきから気になると思ったら。随分と悲しい目をしてやがる。

「……………」

黙っちまった…………よほどのことらしいな。

「よくわかんねえけど、体に嫌なことを貯め込むのはよくねえぞ」

「…………知らないんですか？」

「あ？」

「僕が、どういう存在なのか……………」

魔力がダダ漏れているからただの魔導士ってわけじゃないらしいが…………本当にすごいわけありか。

「それほど、すごいものなのか？」

「僕は『天使の鍵』…………なんです」

「…………は？」

聞いた事ねえな。このあと、リオスが俺に説明する。機動六課での出来事、自分の正体、そして機動六課のメンツを傷つけてしまったこと。

「なるほど、ね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「リオス、先に言っておくことがある」

「なんですか？」

俺は話した。おそらくこの世界とリオスの世界は別世界であること。もしくは遠い未来であることを

「実際、なのはたちはまだ中学生だしな。俺の世界とお前の世界は並行世界である可能性が高い」

「そう、なんですか・・・」

「なんだ、意外な反応だな」

もっと驚くかと思ったんだが・・・

「もう、僕には行くところもないし、この何も無い場所で果てるのもいいかなって・・・」

なるほど・・・

「アホか、お前は」

「え？」



「そんなん、ただ現実から目をそらして逃げてるだけじゃねえか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こいつはそっくりだな、俺に

「なありオス」

「なんでしょうか？」

「俺と模擬戦するか」

こうして俺は立ち上がった。

俺達は立ち上がり、対峙する

「あ、あの・・・」

「ん？」

「どうして、模擬戦を・・・？」

戸惑うリオスに、俺はにやりと笑った

「なーに、俺はウジウジした奴が大嫌いだね・・・そんだけさ」

「え・・・」

「行くぜ・・・トレース・オン投影開始！」

千将・莫耶を構え、俺はリオスに躍りかかった。

「つく！グロリアス！」

『セットアップ！スタンバイレディ！』

グロリアスと呼ばれた剣に双剣が防がれる。

「やるな、いいセンスだ・・・だが！」

蹴りを入れ、さらに襲いかかる

「次の一手が甘い！」

「はあっ！」

剣が交わり、さらに火花が散る。だが・・・

「グロリアス！」

『フリーズシューター』

「うおっ!?!」

魔力弾が飛び、俺に至近距離でぶつかってくる

「ちっ・・・！」

なんとか防ぎきって下がった。なるほど、なかなかやるじゃねえか・

・・・2本ともボロボロだ・・・

「これでも一応宝具だったんだが・・・威力やべえな」

「やめるなら、今のうちです」

「まさか。本気で来いよ、少年！」

「少年・・・僕は君より年上だと思えますけど」

静かに言う。残念ながら俺はもうおっさんじゃ！

「隠しているんだろ？本当の力を」

「・・・・・・」

「ぶつけて見るよ、お前の本気を」

俺が言うと、少しだけリオスが笑った

「似ていますね」

「あ？」

「貴方と、なのはが」

「俺と、なのはが・・・？」

そうか？

「いいでしょう、全力で・・・お相手します。グロリアス、エンジンフォームセットアップ」

『オーライ、セットアップ&エンジェルフォーム』

リオスの姿が一変する。黄金と白銀の甲冑と天使のような翼が輝く。翼の色はまるで氷で出来ているかのような薄い蒼の色・・・

「行きますよ・・・！」

「おう！こつちも本気で行くぜ！」

俺はデイケイドライダーを取り、デイケイドのカードを入れた

K A M E N R I D E    D E C A D E !

デイケイドへと変身し、さらにケータッチを手にしてマークをタッチする

K U U G A ! A G I T O ! R Y U U K I ! F A I Z ! B L A D  
E ! H I B I K I ! K A B U T O ! D E N - O ! K I V A !

そしてデイケイドのマークをタッチした

F I N A L    K A M E N    R I D E    D E C A D E !

俺は仮面ライダーデイケイドコンプリートフォームへと姿を変えた。べ、別に神崎先生へのサービスじゃないんだからねっ！

『マスター、ツンデレは男だと気持ち悪いです』

「気にすんな！行くぜ！」

俺は一気に飛翔し、ライドブッカーをソードモードにしてぶつけた。

「うおっ！」

「つく！」

互いの力がぶつかって弾き飛ばされる

「グロリアス！」

『エンジェルシステムセットアップ！』

「うあっ！」

魔力の暴走！？意図的にやってるとは……！

『マスター！制御がダウンしています！このままでは……！』

「いや……大丈夫だ！」

デイケイドになっただけでも、コンプリートフォームのエネルギー容量ならそれを退けることもできる。俺の力があってこそその力だが、なかなか厳しい……！

「やるなりオス！こつちも負けないぜ！」

KAMEN RIDE AGITO!

ディエンドライダーでアギトを召喚する

「ちょっとくすぐったいぜ」

FINAL FORM RIDE A A A AGITO!

「うあっ!」

アギトがアギトルネイダーへと変化する。

「はっ!」

アギトルネイダーに乗り、その魔力の嵐を突き抜ける

「うおおおおおっ!」

アギトの紋章が展開される。そして俺はそのままライドブッカード一撃を入れた。

「はあっ」

「つく!」

防がれた!俺はそれによって体制を崩し、地面に着地する。それによってアギトルネイダーも消えてしまった。

「これで、片をつける・・・!」

「なるほど、互いに思いっきりでいくか!」

リオスの剣に魔力が溜まっていく。なら、俺もこれだ！

FINAL ATTACK RIDE DE DE DE  
ECADE!

「たあああああああああああつっ！」

「氷牙一閃・・・咬牙！」

互いの一撃が、衝撃を生み、爆発を生んだ。そしてその周囲は光に包まれた。

戦いを終えて、立っていた者は・・・いなかった

「はっ、はっ、はっ！」

「はあ、ぜえ、はあ、ぜえ！」

互いはずぶぬれで砂浜に寝っ転がっていた。

「うちくしょー・・・まさか、互いに海の上に落ちるとは・・・」

「これじゃ、どっちが勝ったかわかりませんね」

「別にいいんじゃない？引き分けで」

なんて二人で言う。そして

「……あははは！」

「ふふ、ふふふふ……」

互いに笑っていた

「どーやら、悩みは吹っ飛んだらしいな」

「え？」

「すっきりした顔じゃねーか」

リオスは最初に会った時よりもいい顔をしていた

「決心はついたか？」

俺は不意にそんな質問をした。こいつの目はいまだに悲しいままだ。だが、さっきとは違っていた。

「………はい」

「そっか」

「まだ、僕の世界でやるべきことがあります」

「なら、頑張れ……例えどんな道を行こうとも」

ゆっくりと互いに立ち上がる。

「お、そうだ……お守りだ、持って行け」



俺はポケットから鉱石を取りだした。

「この世界で見つけたんだ。ちょいと加工してな。そーさな、指輪  
作って嵌めて、なのはにでもプレゼントしな」

「っ……！」

「ふふ、まあ冗談だ。俺と出会い、そして戦った証として……受  
け取ってくれ」

「はい……大切にします」

リオスは頷き、光輝く鉱石を手にとった。

「じゃあ僕も、さっき海で見つけたんですけど……」

と、リオスは俺に蒼い貝殻を差し出した。

「綺麗だな、ありがたくもらっておくぜ……さてと、ゼロ？」

『はい、既に検索は終了しました』

銀色の扉が現れる。扉を開けると、そこは夜のクラナガンの山岳地  
帯だ。けっして青い耳のない猫ロボットの道具じゃないぞ

「この世界はお前の世界だ」

「……」

「この先どんなことがあっても諦めるな、お前の信念を貫き通せ」

「・・・はい！」

「じゃあな少年・・・いや、リオス・コーネルド。氷翼の天使よ」

「はい、さようなら神谷迅・・・世界を守りし転生者よ」

こうしてリオスは扉をくぐり、消えていった。

「よし、俺達も行くか！ゼロ！」

「はい、マスター！」

世界は、俺が救ってみせる！

リオス side

僕の世界・・・僕が生まれ、天使の鍵としてありし、この世界

「グロリアス」

『はい、何でしょう？』

「行くっ」

『はい、どこまでもお供いたします』

出合いは一期一会・・・迅さん、僕は最後まで自分の信念を通して

見せます！

S i d e o u t

この後迅は紅を倒し、リオスは世界を救った。互いに交わることがない世界。だが二人の首には互いに出会った証がかけられていた。互いに世界のために自分を犠牲にして戦う似た者同士は、こんな形で繋がり続ける。またいつか、この二人が会う日が来るかもしれない。

外伝 氷翼の天使（後書き）

秋風「すいませんでしたあああ！」

迅「神崎先生！ごめんなさいいいい！」

秋風「なんとか完成です。なんか、今まで作った中でも渾身の出来」

迅「そうか？結構ぐだぐだじゃん」

秋風「よけいなこというなああ！」

迅「と、とにかく、これで残るは鷹先生だけだな」

秋風「さ、最近見に行っていないからなあ・・・怖い」

迅「怒られたらバツク転土下座だな」

秋風「だな」

迅「ではまた！」

神崎先生、何か違っていたら教えてください！直しますから！感想も待ってます！

第九十一話「蘇生と罪と救済と」(前書き)

今回は久しぶりに連続投稿になるかもです  
あと、今回はドゥーエが大活躍します

## 第九十一話「蘇生と罪と救済と」

「ガッ……は……」

「迅！あなた何を！？」

「黙って見てろ……」

俺はゼロを引き抜き、武装を解除する。

「貴様……何を！」

「……よし、脈はなくなったな」

ゼストの死を確認し、魔法陣を敷く

「黙って見てろ……」

聖杖『バルキリー』……かつてアリシアを蘇らせたその力を使う

「俺がこいつを殺す前……そう、アンノウンに襲われたのはゼストにとつては『不可抗力』の死だ……我が杖の元、蘇れ……ゼスト・グライガンツ！」

光が収束し、ゼストに降り注いだ

「うつ……俺は？」

「ゼスト！大丈夫か！」

レジアスが駆け寄る。

「ゼストさん……よかった」

隣でオーリスが涙を流していた。

結局、レジアスは機動六課の俺の部屋にいる。いつの間にか夜になつていた。深夜1時。ドゥーエと二人である。

「まったく、本当に貴方は規格外なんだから」

「ははっ……この能力使った後は色々と反動でかいんだけどな」

「でも貴方は『悪』に染めた男に光を見せて、そして望まない死さえも払いのける……流石よ」

ドゥーエが嬉しそうに言う。

「俺はそんな立派な物じゃないよ」

「いいえ、だからこそ私は貴方が好きなの」

ベッドの上で、ドゥーエの唇と俺の唇が重なった。

「ん……」

「んちゅ……くはぁ……ぶぶっ」

「あのなあ……」

まったく、こいつの積極性にはたまに呆れる。

「いいじゃない、貴方が大好き……こんな気持ちになったのは初めてよ」

「ドゥーエ……」

「今まで私はドクターに生み出されてからただ任務のためにこの体を使い続けた」

「そういえば、聖王の亡骸のDNAを採取する時は聖王教会の神父をたぶらかしたんだっけか？」

「でも、私が貴方に会った時言われた……」

お前さ、それで本当にいいのか？

「初めは少し困惑したわ。赤の他人の私に何故そこまでって」

「それは……」

「分かってる。ドクターを止めるためでしょう？」

ドゥーエも、スカリエッティが俺と出会わなかったらどうなるかは予想していたらしい。

「こんな私を人として見てくれた。もちろん私だけじゃない……ウーノや他の妹達みんな……あの子たちを変えてくれた」



「ドゥーエ……」

ドゥーエが静かに俺に抱きつく

「だから、貴方が大好き」

「……ありがとう」

俺は静かにお礼を言った。すると、さらにドゥーエが距離を詰めた

「ねえ、迅？」

「なんだ？」

「随分前から聞きたいことがあったの……聞いてもいいかしら？」

「なんだよ、改まって……」

少し真剣な表情なドゥーエ

「迅は、誰が好きなの？」

「……え？」

「高町なのは、フェイト・テストロツサ、アリシア・テストロツサ、八神はやて、月村すずか、アリサ・バニングス、シゲナム、リインフォース、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター……そしてウーノに私、チンク……みんな貴方に恋心を抱き、振り向いて欲しいと思ってるわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でも貴方は、誰一人として振り向いていない・・・普通の男なら誰かしらに振り向くはず」

・・・それは

「貴方はいつも私達が迫ると困った顔になる。決して嬉しそうな顔を見せたことはない。さっきのキスだって少し抵抗してたわ・・・」

「流石、ドゥーエかな・・・」

「何人の男を任務で抱いたと思ってるの？」

「それ、良いようには聞こえないよ」

「話が逸れたわね・・・教えて？どうしてなの？」

・・・・・・・・

「ドゥーエ、俺さ・・・まず普通の人間じゃないんだ」

「そんなの知ってるわ。あんなチートな稀少技能は「違う」「え？」

「俺は一度「死んだ」人間なんだ」

「どづいつ、ことかしら？」

俺は静かに語った。俺がこの世界に生まれる前の経緯。神に殺され、

天使<sup>エリキ</sup>とともにこの世界に降り立ったことを

「……………」

「驚いたか？」

「まあ、神様とか不確かな存在を信じてないから」

「だろうな……」

「でも、それとこれとは別。貴方が転生者だろうと、この世界がア  
ニメだろうと、私達の好意を振り向かない理由にはならないわ」

「……はあ」

ドゥーエって本当にすごいな

「……正直なことを言うと、お前達の好意はとても嬉しいよ。男  
としても、この世界が好きだった人間としても」

「じゃあ、なんで？」

「……俺に、その資格がないからだよ」

俺はただ一言、そうドゥーエに告げた

「資格？」

「そう……俺はみんなを好きになる資格がない」

「どづいう意味？」

「この世界に転生してから、俺はなのはを立ち直らせて、プレシアさんを助けて、リインフォースを助けて・・・お前達に人としての認識を持たせた。結果的にみんなは救えた。でもそれは・・・」

そう、俺はこんなことをしてようやく気が付いた。

「アニメを見て、俺はプレシアさんの死を知った。リインフォースの消滅を知った。そしてドゥーエ、お前の死を知った」

「・・・・・・・・」

「それを潰して原作を潰して・・・世界を変えて・・・でもそれは・・・それは結局」

ここまでくれば、答えは一つ

「俺の、ただの自己満足なんだ・・・」

「迅・・・」

「アニメを見て、原作の話を知って・・・俺は結局みんなを利用して自己満足していただけだった。自殺を図ろうとしたのだって・・・心のどこかで、俺が変えたはずの世界が変わらなかつたって思ったからだ・・・世界を変えた結果の罪、だな」

「迅、もういいわ・・・」

「だから、俺には人を愛する資格もない。このまま俺がばら撒いた

世界の影を壊す・・・それが俺に課せられた罪を償う方法・・・」

「迅!」

ドゥーエが俺に突然抱きついた。

「ドゥ、ドゥーエ・・・」

「もう、いいの・・・いいのよ、迅」

その眼からはポタポタと涙が流れていた。

「確かに、貴方は世界を変えてしまった。それでも、私は貴方とここにいます」

「ドゥーエ・・・」

「だから、もうそんなことを言わないで」

すると突然押され、ベッドに寝る。ドゥーエがその上に重なった

「じゃあ・・・」

「え?」

「じゃあ死ぬはずだった私が言うわ・・・『貴方のことを、私が許します』」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静かにため息をついて、ドゥーエにキスをした。

「ありがとうドゥーエ」

こうして一日が過ぎる。この夜、俺とドゥーエが何をしたかはご想像にお任せしよう

翌日

「あ、迅君おはよう!」

「おうなのは!おはよう」

「・・・?」

俺が挨拶する。するとなのはが首を傾げる

「どうしたなのは」

「ううん、迅君・・・何か良いことでもあったの?」

「え?」

どうしたんだ?いきなり・・・

「なんだか迅君が嬉しそうな顔してたから」

「そうか?」

そんな顔してたかな・・・

「でも久しぶりに見たよ、迅君がそんな顔してるの」

と、なのはが俺に抱きついてくる

「おっと・・・」

「ふふふ、嬉しいな」

「なんで」

「迅君が嬉しそうな顔してると、私も嬉しいの」

「あ、そ」

「さて、今日の予定は？」

「うん、これがメニューだよ」

と、なのはが俺にメニューを渡してくる

「なるほど・・・さて」

「今日も一日頑張る」

「おうー」

こうして、今日も一日が始まる





第九十一話「蘇生と罪と救済と」(後書き)

秋風「ということ、迅の理由の話でした」

迅「ま、今まで散々どうして振り向かないのかって言われてたしな」

秋風「後はまあ、元からこういう設定だったしな」

迅「マジかよ」

秋風「さて、今回はついにあの男が登場！激戦です！」

迅「次回、第九十二話『叛逆の牙』TAKE OFF！」

第九十二話「叛逆の牙と別れ」(前書き)

今回は超急展開。今日中に5話連続投稿いけるかなあ・・・;

## 第九十二話「反逆の牙と別れ」

Side Out

そこはとある場所、とある闇の中

「・・・準備は？」

「問題ありません。およそ500人の戦闘員に能力を入れ終えました」

メリーが誰かに敬語を使っている。それはどこかで見た顔だった。

「くれな・・・いえ、我らが神『キング』」

「ああ、開幕の狼煙だ・・・」

世界の影が、牙を剥く

迅side

レジアスが心を取り戻し、ゼストを救ってから早二日・・・俺は今部隊長室へと呼びだされている。

「管理局の付近が狙われてる？」

「せや、数日だけでも6件・・・全員皆殺し・・・気分悪いわ」

リメイカーが動き出したか・・・

「映像は？」

「うん・・・これ、や」

はやてが出したのは犯人の映像

「・・・コイツは」

闇を象徴するかのような者たちがたくさんいた。仮面ライダーや等身大ではあるがウルトラマンカオスや、イーヴィルティガ、他にもさまざまな力を使う人間の姿があった。そして、その中に・・・

「やっぱりこいつか・・・紅っ！」

紅がその中心にいた。だが全盛期とは違い、見るからに闇の將軍という感じである。

「どうしてこいつが・・・」

「・・・わからへん、でもこれは『ビーツ！ビーツ！』なんや!？」

『大変です！機動六課に向けて膨大な魔力が接近しています！』

通信室から緊急回線で送られてくる。

「総員戦闘準備！非戦闘員は下がらせて！」

『了解です！』

「おでましか・・・行くぞ、はやて」

「うん！」

こうして、俺達は隊舎の外へと向かうことになった。

機動六課隊舎外

「非戦闘員は全員下がらせました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「迅君？」

「どうしたなのは」

「その、大丈夫？」

なのはが心配そうに俺を見た。

「ああ、問題ない」

サギタ・マキカ  
魔法の射手連弾光の78矢！  
セリエス・ルーキス

「・・・体は剣で出来ている」

ロー・アイアス  
熾天覆う七つの円環！

降ってきた魔法の射手を防ぐ。来たな・・・

「久しぶり・・・いや、初めましてかな？機動六課の諸君」

「紅・・・また性懲りもなく・・・」

「何を言う・・・気づいていたんだろう？私が生きています」

「・・・予感があった」

初めてリメイカーと対峙した時使われた能力は闇の書の力を感じていた。だがそれは紅が生きているという確証ではない。

「だが君は疑問があった。私は確かに君が消滅させた」

「そつだ・・・なのはたちの魔力を乗せた最大級の約束された勝利エクスカリの剣を非殺傷で喰らえばお前は消滅を免れない」

「ふ、ふふふ・・・」

紅が笑う

「何がおかしい？」

「私なんの準備もしないで君に挑んだとも思っていたのかね？」

「なんだと・・・？」

すると、紅の額に何かが浮かびだした。キン肉マンかテメーは

「何だ……??」

「その通り……私は紅スカーレットNO? ……紅のコピーだ」

「紅の、コピー……」

そんなのがいたのかよ……!

「もつとも……適合率が低く……15人いた兄弟のうちで私が唯一の成功例だ。そして……」

紅の体の変化していく。それは写真にあったその闇將軍みたいな姿。

「私は紅ではない……この世界の神にして王……『キング』」

「はっ……大層なやつ……」

「どうかな?」

突然、紅が分裂して一瞬で仮面ライダーG4になった。そして俺に襲い掛かる

「なっ!つく!」

俺はゼロをとっさに起動して全力でぶん殴って吹き飛ばした

「テメエ……」

印も結ばずに、影分身を……

「驚いたか？私はかつての自分を超越している・・・いや、それ以上の存在なのだよ」

「なるほど・・・その力なら、キングと自称するのはわかる。だが、紅は紅だ・・・所詮、悪だ」

「悪・・・ね。どちらが悪なのかね・・・神谷迅」

「何？」

紅の言葉に、俺は紅を見た。

「この力を私は確かに使っている。だが・・・この力をこの世界にばら撒いたのはどこのだれだったかな？」

「っ・・・!!」

確かに、この世界にばら撒いてしまったのは俺だ・・・

「そしてこのような君が言う“悪”が生み出された」

「・・・」

「さて、どちらが悪なのか、わかるかな？」

「違う!」

突然、なのはが前に出た。

「なのは・・・？」



「ほう?。」

「確かに、迅君は凄い力を持ってて、それを使っていた。そしてそれが世界に出てしまった。でも！迅君はその力を悪いことに使ってなんかない！」

「くくく・・・確かに」

紅はまた笑う。こいつは何をしようとしているんだ？

「だがそれが・・・本人の自己満足だったとしてもかな？」

「・・・!」

「それってどういう・・・」

こいつまさか・・・!

「まあそれはさておき、いいのでしょうかねえ？全国ネットで見る局員の皆さん。この巨悪である私を生み出した根源をこんな場所に置いておいて・・・!」

「紅！お前・・・!」

「さて、帰りましょうみなさん・・・今日はただの『挨拶』ですからね」

こうして紅は消えた。そして・・・

「ぶ、部隊長！迅さんの身柄を至急拘束するようにと本局から通達  
がっ……！！」

「っくー！！っくいう時の手回しは早いんやから……！！」

「迅君……」

「どうやら、ここまでだな」

「……なのは」

「ふえ？」

「フェイト、アリシア」

「え？」

「迅？」

「アリサ、すずか」

「迅……？」

「迅君？」

「はやて、シグナム……」

「迅、君？」

「なんだ……？」

「スバル、ティアナ……」

「迅兄い？」

「兄さん？」

「ルーテシア」

「迅……？」

「それにナンバーズのみんな……」

「迅、あなた……」

「それに、ターナとヴィヴィオも……」

うん、大体言い終えたかな……

「みんな……じゃあな」

俺はその場から魔力を使って全力で逃げた。

「迅君ー！」

消える瞬間に、なのはの声が聞こえた気がした。

エレナside

完全に、やられました……現在機動六課には本局の局員やら提督

やらが集まっています。迅の能力についてのことでしょう……そして今問題なのは……

『……………』

完全にお通夜状態の機動六課……さて、どうしたものでしょうか

「うっ……うっ……」

「はやてちゃん……」

はやてさんが泣いていました。

「なんでや……迅君は悪くない……悪いのは、うちののに……」

「違いますよ我が主……もとはと言えば、私が闇の書であったばかりに……」

「はやて……」

さて、どうしたものでしょうかね

「みんないるかしら？」

そこへリンディさんが現れました。今は統括でしたね。そしてその後ろにはクロノ君ですか……

「迅君のこと、ごめんなさいね……本来ならもっと秘匿しなければいけなかった」

「リンディさん、どうして迅君が拘束されなきゃいけないんですか！？ 迅君は悪いことしてないじゃないですか……！」

「……ここ最近に起きた事件はかつて闇の書の防衛プロگرامと呼ばれた紅の仕業。でも、その能力の大元となったのは彼、神谷迅君なのよ……」

確かに、そうですね……まあ、本当の根源はうちの上司なのですが……

「それで、彼の処遇だけど……」

「彼は拘束しだい、時空管理局所有の第4拘置所に置くこととなる」

「それって……！」

……この世界で聞いたことがありますね。SSランク以上の危険人物を拘束する牢獄

「辛いかもしれないけど、これが管理局の処置……平和を取り戻すための方法なの」

どこまでも救えない、馬鹿ですね。この人たちは。それとも誰かがそう言うようにしているのか……

「笑えませんね……その冗談は」

「冗談ではないわ、エレナさん。貴方にもある程度のことを覚悟してちょうだい」

「ある程度のこと？私は何も悪いことをしていませんが？」

「貴方も迅君と同じような力を持っている。貴方については迅君以上に不明な点が多いのよ」

確かに、私人間じゃありませんし・・・

「貴方達もバカですね、滑稽です」

「なんだと・・・!？」

「ごういうように紅が仕向けたのが分からないんですか？」

「え？エレナさんどういうこと？」

まったく・・・この子たちは人のことを信じすぎです

「いいですか？まず・・・あの映像は全国ネットで流れていたんですよ？」

「それが・・・」

「クロノ君、少しは学習しましょう。そんな邪悪な戦力を今までどこの組織が持っていましたか？紛れもなく、特務官である立場から迅は管理局の人間です。そんな事件の原因を管理局自身が持っていたら世間の人達はどう思いますか？」

「もしかして・・・」

「はい、ウーノさん、発言どうぞ?」

と、私はウーノさんを指す

「管理局の権威を地に落とすため・・・?」

「大当たりです。今回の事件は紅が率いる『リメイカー』のもの。でもその力の原因は迅にある・・・でもそんなことを黙っていた管理局の権威は地に落ちる。」

一同が黙り込んだ。まったく、しょうがない人たちですね

「そしてこの先、迅を拘束すれば管理局は『隠していた悪を自分たちの都合で処理した悪の組織』迅を見逃せば『自分たちが飼いならしていた犬を捕まえられなかった無能な組織』との評価が世間から出されるわけです」

『・・・!』

「リメイカーの目的は管理局を倒して新たな世界を作り出すこと。

そしてそれをするには無敵に近い人物である神谷迅を潰すこと・・・  
一石二鳥でしてやられたんですよ」

一同は何も言えない。否、何も言うことはないだろう。完全にこの組織の失態なのだから。

「わかりますか?ここで私を捕まえたとしても、それは無意味。さらに迅は捕まえても捕まえなくても管理局の待つのは権威が地に落ちる・・・ただそれだけなんですよ」

さて・・・後は

「はやてさん」

「は、はい・・・」

「貴方はどうしますか？ここにいる管理局のエイズたち、未来を担うストライカー、人として生きることを選んだ戦闘機人を持つこの部隊で、貴方たちがすべきことは？」

「・・・すみません、リンディさん、クロノ君、ちよいと出てもらえますか？」

「・・・わかったわ」

「ああ」

こうして二人が退出。その代わりに機動六課の全員が集められました。

はやてside

「・・・みんなに言うので、まずこの組織・・・時空管理局はうちはもう完全に信用ならん」

もう、迷ったらあかん

「そしてうちは部隊長として言う・・・この機動六課で課せられた任を解きます」



『!?!?』

みんなが騒ぎ出した。まあ、当然やろうな

「うちは今から迅君を救うために戦うことにする。管理局員としてやない。人としてや」

迅君が苦しんでるのに、うちが何もしないわけにもいかん。夢の部隊は大切な物。でもそれ以上に、うちは大好きになった一人の人間を救いたい・・・

「それでも、私と同じ意思の者はここに残って力を貸してほしい・・・そしてそうでない者はここを去って欲しい。これが部隊長として最後の命令や」

きつと、ほとんどが出て行ってしまっやろう

「以上や・・・ライン曹長」

「は、はいです」

「最終報告をうちにして来てや」

こうして、うちはロビーを後にした。

・・・30分後

コンコン

「はい」

「ただいまです」

入ってきたのはリンやった

「どや？向こうには何人残った？」

最悪、うちだけでも・・・

「くればわかるですよ」

と、リンに連れられてロビーへ戻った。そこにいたのは・・・

「み、みんな・・・」

そこには機動六課のメンバーが全員集まっていた。そしてリンが  
うちに向き直る

「これより機動六課総員、八神はやて部隊長と行動を共にするです  
」！  
「」

全員が敬礼した。うちも涙を流しながら敬礼した

第九十二話「叛逆の牙と別れ」（後書き）

秋風「というわけで連続投稿」

迅「急すぎじゃね？」

秋風「いいんだよ！頑張るんだから！」

迅「ま、いいか・・・」

秋風「さあ、今回は超バトルです。お楽しみに！」

迅「次回、第九十三話『出会いの本』 TAKE OFF！」

第九十三話「朱の魔導書」(前書き)

というわけで新キャラが出ます！  
応募してくれた方々感謝！

## 第九十三話「朱の魔導書」

迅side

「……………」

廃棄都市の静かな夜。雨の中俺は一人、静かに過ごしていた

「自己満足か……………」

この前もドゥーエに言ったのがこつも早く衝撃としてくるとはな

「……………明日は、もっと遠くへ」

こつして俺は眠りに着くことにした

……………ここは、夢か。たまにあるよな……………夢だつて自覚できる時が

「……………ん？」

どこからか、声が聞こえて来た

「ケテ……………タスケテ……………」

誰だ……………？

「オネガイ、ダレカタスケテ」

声はだんだん小さくなり、やがて消えていった

雀の鳴く声が聞こえた

「ん？」

朝か・・・

「イテテテ」

コンクリの上で寝るのは辛いもんだなあ

「・・・はあ」

『マスター、おはようございます』

「ああ、おはよう」

この時間、いつもならターナが起きてる頃かな

『マスター、ここから40キロ先の密林地帯で強大な魔力を感知しました』

「強大な魔力？」

『ただ、おかしいのですが、私達だけが感知しているらしいです』

気になるな・・・

「リメイカーの手掛かりかもしれない。行ってみよう」

『イエス、マスター』

こうして、俺は空を飛んだ。

なのはside

機動六課

「迅君の魔力は？」

「残念ながら……」

管理局でもいまだに掴めない迅君の足取り……きつとステルスとかを使ってるんだろうね。待ってて迅君……

「うえ〜ん……」

「ターナ……」

私はターナを抱きかかえる

「パパぁ……どこお？」

「ターナ……大丈夫だよ、パパはきつと帰ってくるから」

「本当？」

「うん、本当」

私がそういうとターナは安心して眠りについてしまった。

「迅君……」

迅side

「ここは……」

40キロの場所へ飛ぶと、そこには遺跡があった。

「こんな遺跡初めて見たな」

『何か書かれています』

呪われし書、ここに眠る

呪われた書？

「ま、行ってみますか」

『あんまりいい予感しませんけど』

こうして俺達は遺跡の中へ入っていった

「ここは……」

色々と倒れてる。人やら、魔力をもった動物やら



「あのさあゼロ、これあんまりいい予感しない」

『奇遇ですね、私もです』

つ……！？魔力が……吸われている！？

タスケテ、タスケテ

「……？ゼロ、今なんか言ったか？」

『いえ、まったく』

魔力が喰いたきや、これでどうだ！

「喰らえ！」

カートリッジを投げてなんとか耐える。おさまった……？

「よし、一気に中へ行く」

『オーライ』

こうして強行的に突破して行く。どうやら死んでいるのは魔導士が大半の様だ。

「これは……」

一番奥へ行くと、そこには一冊の本が収められていた。

タスケテ、タスケテ

『マスター!』

「ああ、お前にも聞こえるんだな」

「どうやら助けを読んでいたのはこの本か・・・」

「何々・・・？朱の魔導書？」

『検索をかけましょう』

「そうだな、開け、神の本棚」

本棚が現れる

「キーワード、魔導書」

これで半分が割れた

「次、朱の魔導書」

これでほとんど割れたか・・・

「・・・追加キーワード『封印』」

この一言で全てが割れ、一冊の本が現れた。タイトルは

fire book

へえ・・・

『マスター、何が分かりました？』

「この魔導書は随分昔の魔導書らしくてな、主と認めないものは当たり前構わず魔力を吸い出すから呪いの魔導書なんて呼ばれてんだと無理やり封印されて苦しんでいるのか

「助けて見るか」

『マスター、認めてもらえないと魔力吸われますよ？』

「やってやるぞ」

俺は魔導書に触れる。その瞬間

「ぐっ・・・！？」

魔力が吸われる。や、やべえ・・・！

「だが！」

俺は逆に魔力を逆流させる

『マスター何を！』

「こうすれば俺の声くらい聞こえんだろ！」

俺の魔力が尽きるのが先か、それとも魔導書の暴走が止まるのが先

か！

「聞け！朱の魔導書！俺はお前を助けに来た！」

俺は手を当て、その封印を破壊する。

・・・！！

「待ってるよ、すぐに破壊する！」

魔力の籠った拳で思いつきり破壊した。

『あーあー、知りませんよ？これ』

「はあ、ぜえ、はあ、ぜえ・・・」

魔導書の封印が外れ、本が浮かび上がる。

「これは・・・」

朱の魔導書 起動

光が走り、本が俺の手のひらに収まった。

『どうやら主をマスターと決めたようです』

「みたいだな」

すると、本が光、小さな女性が現れた。女性と言っか、女の子・・・？

「君は……」

「私、朱梨……」

この魔導書の管理人格ってところか？

「貴方が助けてくれたの？」

「ああ、そっだよ」

俺の手の上に乗る朱梨

「じゃあ、貴方がマスター？」

首を傾げるので、俺は頷く

「ああ、どうやらそうみたいだな」

「よろしくね、マスター」

静かにそう笑顔を見せた朱梨。戦いの前に頼もしい仲間が出来たもんだ

とりあえず遺跡を出てから野宿することになった。テント張ったし、とりあえず火でも起こすかな……

「マスター、火なら私が起こすよ」

と、火を起こす朱梨

「凄いぞ朱梨、そんなこともできるのか」

「えへへ・・・」

と、嬉しそうに笑う。さて、お湯もあつためたし、料理はたくさん作つたし、食うか

「いただきますと」

「なあに、これ」

「ご飯だよ、朱梨も食べ」

「うん」

と、食べる。どうやら朱梨は食事をしたことがあまりないようだ

「どうだ？」

「おいしい」

「そつか」

さて・・・

「朱梨、お前にいくつか質問がある」

「何？」

「お前は どうして封印されてた？」

俺が言くと、朱梨は少し表情を暗くした

「私は朱の魔導書として生まれた。でも、魔力を操るどころか暴走しちゃって……いつの間にか呪われた魔導書って言われて……」

なるほど、適正に不備があったのか

「でも、マスターのおかげでその壊れてた回路が直った」

「そうか」

なら、問題ないな。

「じゃあ次。お前は何かができる？」

「私は夜天の魔導書と呼ばれた魔導書のように炎の魔法を吸収し、それを使えるようにする。ほとんどページが埋まっている今、マスターは炎の魔導士になったも同然なの」

なるほどね……

「わかった、これから頼むぞ、朱梨」

「うん、マスター！」

こうして、俺達は新しい仲間を得た。

第九十三話「朱の魔導書」（後書き）

秋風「とりあえず次までかな」

迅「何？結局次まであんの？」

秋風「次書いたら絵を描く予定だから」

迅「あ、そ」

秋風「で、今回採用したユニゾンデバイスは！」

迅「紅 幽鹿先生の朱梨でした！」

秋風「今回、色々と設定を弄りましたが、大本の設定がよかったので採用！」

迅「詳しいプロフィールは下！」

朱梨<sup>しゅり</sup>

性別：女

概要：朱の魔導書の管理人格で、夜天の書と違って元から欠陥が存在した。そのためマスターと認めない人間の魔力を容赦なく吸っていた。

性格：純粹。迅が最初のマスターなのでまっさらな状態。そのかわり一途で、自分を救ってくれた迅が大好き



能力：炎を操り、炎で色々な事が出来る（炎で剣を作ったり、炎で自分の分身を作ったりなど・・・）絶対零度の炎を出す事が出来る

秋風「紅 幽鹿先生！ありがとうございました！」

迅「次回、第九十四話『たった一人の戦場』 TAKE OFF！」

第九十四話「たった一人の戦場」(前書き)

今回からラストスパートです

ではございませう

## 第九十四話「たった一人の戦場」

機動六課

なのはside

迅君がいなくなって早くも一週間・・・私達は管理局から独立している。新聞では迅君に対して管理局への追及が殺到して管理局が動けない。支援は聖王教会と地上本部がしてくれているので、なんとか保ってはいるけど・・・

「パパあゝ・・・」

「どこ〜?」

ターナとヴィヴィオが泣いていた。アリサちゃんたちがなんとかあやしているけど、流石に限界があるのかもしれない。

「エレナさん、迅君を・・・前と同じように探すことは・・・」

かつて別世界へ行った時、鉱石を使って迅君を探したことがあった。あれなら・・・

「・・・不可能ですね、迅の魔力の媒体がありませんから」

「そう、ですか・・・」

迅君・・・

ビー！ビー！

「!?!」

『高町隊長、テストロツサ隊長、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長、フォワードメンバーは至急ブリーフィングルームへ！繰り返します・  
・・・』

私達はそれを聞いて急いでブリーフィングルームへと急いだ

ブリーフィングルーム

「はやてちゃん！どうしたの!?!」

「・・・ミッドチルダ海上にリメイカーと思われし軍団を確認した  
んや」

「か、海上って」

「ミッドの海が全て凍りついてる・・・」

その映像は軍勢が迫るもの。遠くから街へ砲撃が繰り返される。まるで迅君の力を見せるかのように

「管理局は今思うように動けない。だから今からうちらが・・・」

「部隊長！海上に強力な魔力反応！この魔力は・・・」

そこに映っていたのは私達が探し続けた人物・・・

「迅君！」

迅君がそこにいた

迅side

「……………」

「現れたな……神谷迅」

「ゼロ……………」

『オーライ、リミッター解除……全システムをクリアしました』  
魔力が溢れる。ここまできたら……やるしかないだろう

「マスター……………」

「朱梨、君はまだ下がっていなさい」

「うん、わかった」

そう言って前を見た。ざっと500人つてところか……

「…………リメイカー、貴様らに忠告する」

ゼロを起動させ、Zセイバーを構える

「伸びろ……………」

ゼロの刀身が伸び、氷の上に線が引かれる。Bleachの市丸ギンの刀と同じ能力を使った。

『!?!』

「・・・この線より一歩たりとも、入るんじゃない」

なのはside

迅君が剣で線を引いた。

『何を言っやがる!』

『もうてめえにはいる場所なんてねえんだよ!』

怪物が二匹、迅君に襲い掛かる。その瞬間

『邪魔だ』

一撃によって怪人たちは消し飛んでしまった。

『聞こえなかったのか? そのテーマーラの汚れた体で・・・汚れた足で、この世界に踏み込むなって言っただよ』

迅君がかつてないほどの形相を浮かべ、怪人二人を倒していた

「迅君・・・」

『おもしろい、貴様が作り出した数多の世界の力に、たった一人で挑むつもりか』

『・・・・・・・・クク』

『何がおかしい』

迅君が笑う。あれだけの敵に囲まれて、どうして笑っていられるの？

『俺はいつだって一人だよ・・・守る物は、たった一つ・・・』

迅君の体から、とどめなく魔力が溢れていた。その虹色に輝く色に、私は見惚れる。

『この世界を俺が守る・・・それが俺の、最後の使命』

『ならば今度こそ、この世界から消えてもらおう・・・行けえ！』

敵が迅君に襲い掛かる。その時だった

この世に生れし者たちよ

迅君の声が、頭の中に響いた

「え・・・・・・・・？」

悪に染まりしその全てを消し去ろう

「何これ・・・」

「兄さんの声が・・・？」

「やるのかい・・・あれを」

スカリエツティだけ冷静だった。

「ドクター・・・これは」

「ああ、使うようだね・・・M？biusを」

「M？bius？」

「そ、そんなことより！迅を助けに行かなきゃ・・・！」

フエイトちゃんが駆け出そうとした時、エレナさんがそれを止めた

「行ってはいけません」

「ど、どうしてですか・・・！」

「迅に頼まれた、最後のお願いだからです」

「最後の、お願い？」

エレナさんの手が、震えている気がした

「迅は私にこう言いました。“アレを使うことになるなら、みんなを近づけるな”・・・神谷迅は、恐らく最後の大技を使うつもりです」



「最後の、大技？」

「転生者として得た能力と命を引き換えに……彼は、この世界の悪を全て取り去るつもりなんです」

「……!」  
「どういうこと……? 転生者……? それに、命を引き換えに……」

「……迅の前世は、ただの人間です。そう……他愛もない、その辺にいる、魔力も力もない人間でした」

「前世って……どうしてそんなことが分かるのよ」

「アリスちゃんの言うとおり。そんなことがどうして……」

「私は人間ではありません」

「エレナさんが、人じゃない……?」

「天界 第7支部 創造の女神アテナの秘書、準天使エレナ」

「天使……?」

「天界に仕えし者……そう思ってください」

「エレナさんが天使……?」

「迅はアテナの失敗により不可抗力の死を遂げました」

「不可抗力の死って……」

「それにより、迅にとっては“アニメ”の世界へと転生しました」

「アニメの世界・・・？」

「そうですね・・・迅にとってこの世界はアニメの世界でした。もちろん、今あるこの世界はそれに限りなく近かった並行世界なのです」  
でも、それだからって・・・

「それと、これからとどういつ関係が・・・」

「迅にとって、ここはアニメの世界・・・ならこの先のシナリオを全て理解していることになります」

「この先の、シナリオ・・・」

エレナさんは一呼吸をいれて、再び喋り出す

「まず・・・なのはさんの幼少時代の孤独」

「私の、孤独・・・」

私の、子供時代のこと・・・？

「プレシア・テストロッサの死」

「母さんの・・・？」

「リインフォースの消滅・・・」

「リインフォースの・・・?」

「そして起こったであろうジェル・スカリエッティの事件と、ド  
ウーエの死」

「・・・」

「これら全てに介入し、相殺してきた・・・それが迅なんです」

「じゃあ、あの紅が言ってた自己満足って・・・」

「そうです、紅の言う自己満足とは・・・迅が回避したかったこと  
に対してです」

「でも、そんなの関係ないよ！迅がそうだったとしても、私達だっ  
てとても感謝してる！」

「そーだよ！迅が私を生き返らせてくれて！お母さんとフェイトと  
暮らせてる！」

「確かにそうかもしれませんが・・・でも転生者としては、未来を捻  
じ曲げることが正しいかどうかはわからない」

「それは・・・」

フェイトちゃんが口を紡ぐ

「アニメの世界では・・・プレシアさんが死に、フェイトさんはそ  
の悲しみを乗り越えて強くなって行きました。この世界ではそれが

ない・・・リインフォースの死で、はやてさんは自分の様な人間を生まないようと管理局で世界を守るうとした・・・未来を捻じ曲げて幸せを掴んでも・・・それが、本当の幸せと呼べるのかと・・・  
迅は悩んでいました」

「迅が・・・」

「彼はきつと、たった一人の戦場で戦い続けていたのでしょよね」

みんな、静かに黙ってしまった。でも・・・私は！

エレナside

話終えて、シヨックが大きいみたいです

「・・・？なのはさん、どこへ？」

「迅君を、助けに」

「聞いてましたか？私の話」

「聞いてました。だから行くんです」

「え・・・？」

私は思わず声を漏らしました

「アニメの世界だとか、転生者だからとか・・・そんなの関係ありません。私達は、私達なんです」

「なのはさん・・・」

「そして迅君は迅君・・・私と昔からずっといてくれる幼馴染で・・・大切な人。そんな彼が命を投げ出そうとするなら、私はそれを止めたい」

「それは、迅の想いを踏みにじることになりますよ？」

「それでも構いません、私は迅君に生きていて欲しいんです」

なのはさんは・・・幼い孤独の時間を過ごさず、迅と一緒に・・・それでも、こんな強い子に成長した・・・アテナ様、転生者を送りだしたのは悪いことではなかったかもしれない

「だから行きます、私は迅君が大好きだから」

「私も行く、待ってなのは」

そういつてフェイトさんとアリシアさんが立ち上がりました

「母さんを救って、私達を救ってくれたのは迅・・・だから迅が大好き。だから救いたい」

「私達の気持ち、伝えてないもんね」

「待って、うちも行く」

今度ははやてさんが立ち上がりました。

「リインフォースの消滅をやめたせいで迅君はこんなことになってしまってる・・・そして本来うちが荷うべき罪を、迅君が支えている。そんな迅君がうちは大好きなんや」

「はやて、私も行きましょう」

「主はやて、私も同じです」

リインフォースとシグナムも立ち上がりました

「あたしたちだって行くわよ」

「アリサちゃん、すずかちゃん・・・」

「あたしだって、迅がいなかったら今頃この世にはいない。迅があたしたちを助けてくれた」

「迅君が罪を背負うというなら、一緒に背負いたい」

「わ、わたしたちも行きます！」

今度はスバルとティアナが立ち上がりました

「兄さんは私に生き方を示してくれた！私に背中を預けてくれた！だから・・・だから！兄さんを救いたい！」

「私も、迅兄いに人としてのありがたを覚えてもらった・・・だから、迅兄いを助けたい」

まったく・・・この子たちは

「わかりました、好きにしてください」

そう言っつて私は機動六課の回りにしいた結界を解きました。

「機動六課出動！迅君を助けるで！」

『了解！』

こうして、機動六課のメンバーは出動しました。

「……これでよかったのでしょうか」

ブリーフィングループに残った私は、静かにそう呟きました

「よかったのよ、これで」

そこにいたのは、創造の女神、アテナ様

「アテナ様」

「並行世界は何が起こるかは分からない……この世界の未来は、彼に託されたのよ」

「しかし……」

アテナ様は静かに私に近づき、一つの石を渡しました

「これは……」

「聖なる石と書いて聖石」

「神が持つと言われる、あの・・・」

これがどうして・・・

「迅は・・・ただの転生者じゃないわ。この世界を収めることができる神の器」

「それでは・・・」

「嫌な言い方だけど、私がコーヒーこぼしてこの世界に転生させたのも、この世界の意味だったってこと」

世界の意思是神の力に勝るといいますが・・・こんな形で・・・

「きつとよほど必要だったのね、この世界の悪を消し去る力が」

「アテナ様・・・」

「後は、貴方が決めてちょうだい。いいえ、彼に選ばせてあげて。神になるか、それとも別の道を選ぶのか・・・」

「了解しました、準天使 エレナ・・・その使命、しかと」

「頼んだわよ、帰ったら仕事もたくさんだから」

こうしてアテナ様は消えました。自分の仕事くらい自分でやって欲しいものですが、今はそれどころではないですね



「私も、最後の使命に取りかかりましょう」

こうして私は白い翼を広げ、空を飛ぶことにした。天使としての最後の仕事をするために

第九十四話「たった一人の戦場」(後書き)

秋風「うーん」

迅「どうした」

秋風「もうすぐ話終わるな、これ」

迅「Vividはどうするつもりだ」

秋風「たぶんやらない」

迅「は？」

秋風「言い方が悪かったな、多分Vividの話が完結してから構成を開始する」

迅「なるほどな」

秋風「とりあえずこのStS編は100話丁度で終わる・・・かも  
しれない」

迅「そういうと大概違う形になるな」

秋風「ちなみにエンディングはそれぞれ用意されています」

なのは

フェイト

アリシア

はやて  
シグナム  
リインフォース  
アリサ  
すずか  
スバル  
ティアナ  
ドゥーエ  
ウーノ

秋風「IFだけで12話か・・・辛いわー」

迅「次回、第九十五話『M?bius&Strikers』TAK  
E OFF!」

第九十五話 『M?bius & Strikers』 (前書き)

とりあえずラストスパートです

今回はぶっちゃけ言って戦闘描写がほとんどだったんで辛かった。

r z

そしてクリスマスの夜に独り小説を書く私

ああ、迅と同じくらい持ててみたいですね

## 第九十五話 『M?bius & Strikers』

迅side

怪物たちが一斉に俺に襲い掛かる。

「邪魔だ、と言ったはずだ」

『マスター・・・準備完了です』

「M?bius・・・」

俺は魔法の名前を口にした

『オーライ、M?bius解放』

M?bius・・・メビウスという名の無限の輪・・・これは俺自身にフリーダムガンダム、ジャスティスガンダムなどのエネルギー無限供給となるコアが宿るものだ。そして・・・

「きええええええっ」

「失せる」

ウーラニア・プロト・シス  
燃える天空！

無詠唱で魔法を撃てる。

「来い、ゴミども」

『がああああああああああああああつ』

一斉に敵が襲いかかる

「この前の借り、変えさせてもらっよう！」

炭素硬化でリリイが俺に襲い掛かる。遅い……！

「ゼロ」

『フレア』

「ぎゃあああああああああああああつ！」

リリイが悲鳴を上げる。だが俺はそんなことを気にせず第二陣に構えた

「ザゲルガ、ギガノレイス、ファイガ、魔法の射手連弾光の120  
矢」  
ルキス  
サキタ・マギカ  
セリエス

「ほう、一斉に別世界の魔法を同時使用するとは……」

「……影分身の術」

12人の分身を作り出す。それぞれが変身ベルトを装着していた。

「変身」

「変身」

『CYCLONER-JOKKER』

「変身」

『KAMEN RIDER DECADE』

「変身」

「変身」

「ガブツ」

『sword form』

「変身」

『HENSIN CAST OFF CHANGE BEETAL』

「変身、キャストオフ」

「響鬼」

『complete』

「変身」

『555 standing by』

「変身」

11人の仮面ライダーたちが敵へと向かって行く

「はあっ！」

「おらあっ！」

『FINAL VENT』

「おりゃあああっ！」

「ほう、仮面ライダーの力をそのまま解放していくとは・・・ならば」

紅がダークライダーを召喚する。だからテメーは甘いつて言ってんだよ

「甘い」

「何？」

「消える」

すでに上空で構えていたウイングガンダムver.エンドレスワルツとストライクフリーダムガンダムが一齐射撃を行い、ダークライダーたちを一掃した

「なに！？」

「言ったはずだ・・・俺はお前達を殲滅する・・・この世界に今度



「こそ、ひとかけらも残さない」

『M?bius system full burst』

「ゼロ、行くぞ」

『マスターとならばどこまでも』

体に魔力を張り巡らせ、大軍団に突っ込んでいく

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
っ！」

「敵は一人だ！殲滅しろお！」

「だりゃああああああああっ！」

ゼロを振るい、敵をなぎ倒す。敵も質量で攻めてくるので次から次  
へとキリがない

「とったあ！」

「ぐっ……」

槍が俺の肩を貫く

「この程度で……！俺をなめるなああ！」

槍を引き抜き、槍に魔力を込めてそれを正面に投げて爆発させる

「怯むな！押しきれえ！」

「おおおおおおおっ！」

「……何をやってるんだろっなあ、俺は

「ゼロ

』ロードカートリッジ

転生して、平凡な日常から抜け出して……アニメの世界に来たの  
に……」

「くらええっ！」

「っち！」

』Rider kick！」

』clock up

ライダーキックをクロックアップで避け、次の一撃を入れる。こんな闇に閉ざされた世界で……俺は……

』マスター！左舷から魔力弾が！」

「体は剣で出来ている……！」

ロー・アイアス  
熾天覆う七つの円環！

「もらったあ！」

「トレース・オン  
投影開始」

エクスカリバー  
約束された勝利の剣！

「ぎゃああああああああつ！」

・・・俺は何故ここまで戦ってきた？俺はどうしてここにいる？

「失せる・・・」

Xバーナー！

「俺は・・・はあ、はあ・・・俺は、なぜこの世界で生きる・・・」

こんな血まみれになって、いろんな奴の罪を背負って、それでも俺は何も救えねえ・・・

「いまだ！討ちとれ！」

「あああああああああああつ！」

俺は再び向かってくる大軍団に斬りかかる。魔法少女リリカルなのはのアニメを見た時・・・なのはの過去を変えられたらと思った・・・プレシアの死を防ぎ、フェイトの心を救ってやりたいと思った。リンフォースの消滅を見て、夜天の書と、はやてを救ってやりたいと思った。ナンバーズを見て、人としてのあり方を見せたいと思った・・・そんなバカみたいな妄想が現実になって・・・俺は実行して・・・

「ゲイ・ボルク突き穿つ死翔の槍！」

「俺は……」

そんなことをした、未来を捻じ曲げた俺の罪と結果が、コレか……

「スターライト、ブレイカー！」

凜とした声と、桃色の砲撃が轟き、槍が消滅する。そして氷がそれでひっくり返り、壁となった。

「これは……」

俺は空を見上げる。そこにいたのは白いバリアジャケットにツインテールの少女……俺が好きなアニメの人物、そしてそれを支えるメンバーたち

「なのは……？みんな……？」

「何……！？」

「迅君！しっかり！」

「お前、どうして……」

なんで、来ちまったんだよ……

「なんでって……迅君が心配だったから！」

「迅が戦ってるのに、私達が戦わないわけにはいかないよ」

「せやで、迅君一人、放っておけるわけないやろ？」

「違う……どうして来ちまったんだよ……」

「……今からでも、遅くない、帰るんだ」

「え？」

「あんた、何言ってるのよ！」

アリサが俺の胸倉を掴む

「言ったはずだ……『じゃあな』って」

「アンタ……」

「俺は、もうお前達に会いたくなかった」

静かに、俺はそう告げる

「どう、して？」

「俺は、お前らを利用した……自己満足なんかのために、先の未来を告げず……ただ一人で」

「自己満足なんかじゃないよ！迅君は私達を救ってくれた！」

「違う！本当に救う気持ちがあったなら！最初から未来を全て教え

ていた！」

「……！」

俺は必死になって叫ぶ。俺はもう、こいつらに会う資格すらないんだ

「俺に、もう退路はない」

アリサの手を払い、ゼロを持った

「進むのは茨道……闇の回路を、永劫に歩き続ける」

そう、それがこの世界で俺が犯した罪を償うための罰

「俺は……独りだ」

「……迅君」

なのはが俺を呼んだ。そして振り返った瞬間

パアッン！

乾いた音が、響き渡った。そしてこの一言

「バカ！」

「バカバカバカバカバカ！」

「なのは……」

「どうして!?!どうして独りなんていうの!?!」

そんなの、本当のことだからだろうが

「事実だ」

「バカ!」

今度はフェイトに叩かれる

「迅が転生者だろうと、迅がこの世界を知っていようと、そんなの関係ない!」

「迅がいなきゃ、私はここにいないんだよ!?!」

「迅君は、うちらを救ってくれたやないか!それが自己満足でも、実際にうちらは救われてる!」

「アンタが、一人だなんて言わせないわ」

「迅君には、私達がついてるから」

「兄さんは言ってくれましたよね?お前に背中を預けるって」

「迅兄いは、私に人としてのあり方を教えてくれたよ!」

「迅、お前は私の心を救ったのだぞ?」

「マスターがいなければ、今の私達はないのです」

みんな・・・

「どうして・・・」

「え？」

「どうして、俺なんかのためにここまで・・・」

自然と、そんな言葉が出ていた。すると、なのはが一步前に出る

「好きだから・・・」

「！」

「みんな、迅君が大好きだから・・・世界で一番、隣にいて欲しいからだよ」

なのはが笑顔で、俺の手を取る。

「一緒に戦おう？この先の未来は・・・私達が作っていく」

なのは・・・

「迅と一緒に、この世界を歩むために」

フェイト・・・

「もう、悲しい闇なんかには負けない」

アリシア・・・



「うちらは、大切な仲間なんや」

はやて・・・

「この世界で光を見るために」

すずか・・・

「アンタと生きるために」

アリサ・・・

「世界の平和などのためではない」

シグナム・・・

「マスターと同じ道を歩くために」

リインフォース・・・

「例えその道が困難でも」

ドゥーエ・・・

「きつと一緒に乗り越えられる」

ウーノ・・・

「みんなと一緒に!」

スバル……

「兄さんと一緒に！」

ティアナ……

「………そっか、そうだったんだ」

「え？」

やっとわかった、この世界にいる意味が、この世界に転生した意味が

「みんなと一緒に、光を見るためだったんだ……」

氷が割れ、回復を遂げたであろう残っていた半数の怪人と能力者達  
がいた。そして紅がその上で浮いていた。

「茶番は終わりだ！貴様ら全員、消し去ってやるっ」

「紅……俺はもう迷わない。俺は、俺の仲間たちと！この闇を消し去って見せる！」

光の魔法 起動開始！

これは闇の魔法と対をなす魔法

シニスト<sup>51</sup>ミツ<sup>51</sup>茨<sup>51</sup>タグ<sup>51</sup>グ<sup>51</sup>ネット  
左腕解放固定 『スターライトブレイカー』

デクスト<sup>51</sup>ミツ<sup>51</sup>茨<sup>51</sup>タグ<sup>51</sup>グ<sup>51</sup>ネット  
右腕解放固定 『約束された勝利の剣』  
エクスカリバー

左腕には解放固定したスターライトブレイカー、右手には投影に投影を重ね、99.9%本物として存在する約束された勝利の剣……そしてその二つを……

ドゥプレクタスフィンオー  
双腕掌握！！

「宝具と魔法を装填して体内に圧縮だと!？」

そして掌握された力はM？b i u sへと流れ込み……一つの完成された力が生み出される

「これが、俺の最高にして最後の業だ……」

術式兵装最終『神の光』

「これが、最後だ……紅！見せてやる、闇に歪んだこの世界に、光を！」

最後の戦いが、幕を開ける

第九十五話 『M?bius & Strikers』 (後書き)

秋風「いや〜・・・厨二設定だねえ」

迅「というか、今回お前セリフで稼ぎすぎ」

秋風「返す言葉もございません」

迅「後何話？」

秋風「紅との最終決戦に1話、事後に1話、最終話1話、IFエンディング12話」

迅「今年中に行けるの？」

秋風「なんとかする」

迅「で、今回の力は？」

秋風「おう、神の光だな、後M?bius」

M?bius

迅が作り出した核エネルギーを凌駕する無限創造エネルギーで、魔力などに変換ができる。自身に取り込むことで無限供給でエネルギーを得て戦闘が行える。射出すれば核兵器2個分のエネルギー弾を飛ばすことができる

神の光

迅の最終兵装。最終幻想と違い、リスクはまた違ったもの。最強に

して最後の技である。詳細は次回

迅「次回、第九十六話『WORLD DARK BREAKER』  
TAKE OFF!」

第九十六話「転生者として」(前書き)

というわけで、今回またしてもやってしまった!というこのタイトル変更

申し訳ない

で、今回は疑問が浮かぶであろう部分をいくつか徹底して出しておきましたので、読んでみてください

## 第九十六話「転生者として」

その氷に染められた海の上で、俺達は戦いを開始した。神の力で空を飛び、その力をメビウスへと蓄電、空を飛ぶ。さんざん恰好を付けて出したものの、今使えば紅と戦う時に使えないという判断だった

「デイベインバスター！」

「サンダースマツシャー！」

「響け終焉の笛！ラグナロク！」

なのはとフェイト、はやてが砲撃を繰り返し、防御力の少ない能力者たちが吹き飛ば

ウーラニア・ラゴロシス  
「燃える天空！」

コスミケー・カタストロフイー  
「おわるせかい！」

キーリアア及トラペー  
「千の雷！」

アリサとすずか、アリシアが魔法を放つ

「つく！たかが魔導士にてこずるな！」

プロディウンスになった能力者が叫ぶ。しかし……

「紫電一閃！」

「ぐばあ！」

シグナムがそこへ特攻する

『FINAL BENT』

王蛇がこちらへ突っ込んできた。俺はそれに構えるが、その前にスバルが現れる

「スバル！？」

「デイバイン、バスター！」

デイバインバスターがぶつかり、王蛇が吹き飛んだ。

「迅兄い！迅兄いは紅を！」

「フロントムブレイザー！ここは私達が防ぎます！」

スバルとティアナが俺の前の道を開く

「紫電一閃！迅さん！行ってください！」

「迅さん！頑張つて！」

「迅、勝つて・・・」

エリオとキャロ、ルーテシアも俺にそう促す

「すまん！」



俺は飛び、朱の魔導書を開いた

「朱梨」

「なあに？マスター」

「君の力を貸してくれ。俺のM？b i u sと神の光はまだ温存しておきたい」

俺が言うと、朱梨はにこやかな笑みを見せた

「うん、マスター」

「ユニゾン・イン」

紅蓮に燃えるその炎が俺を纏う。

「一気に行くぞ」

『うん！』

すると上空から怪物が奇襲をかけてくる

「つち！投影開始」  
トレスオン

千将・莫耶を取り出し、怪人に斬りかかる。するとそこで変化が起きる

「これは！？」

怪物の切り口から炎が出て、その後血が出てくる。どうやら朱梨の力には宝具に『炎』の属性を付加させる能力があるらしい

「がああああああああああっ!」

何故かモンスターハンターに登場するリオレイアが出現し、俺に奇襲をかける。

「っち!」

防御するも、地面に叩きつけられる

「っく!」

それと同時に他の怪物たちが襲いかかる。

「IS ライドインパルス!」

「IS ツインブレイズ!」

「IS レイスストーム!」

そこへ二つの閃光が通り抜ける

「迅!無事か!」

「お兄様!」

「迅、平気?」

「トローレ！ディード！オツトー！」

来てくれたのか……！

「IS ランブルデトネイター！」

「IS エリアルキャノン！」

さらにリオレウスの頭部が爆発を起こす

「チンク！ウエンディ！」

「こうなれば、これでもくらええ！」

敵の一人が懐から手榴弾らしきものを取りだす。しかし……

「いただきっ！」

セインがディープダイバーで地面から出てきて、手榴弾を奪い取って敵陣に放り投げる

「やほー！」

「セイン！」

「うおらあっ！」

すると今度はエアライナーが出現し、ノーヴェが特攻する

「ノーヴェ！」

「さっさとオメーは行けー！」

「IS スロスターアームズ」

ブーメランがそこを通り過ぎ、ノーヴェの周囲の敵を破壊した

「迅様、ここは私達が抑えます」

「セツテ・・・だが、さっきの前線よりここには敵が・・・」

そう、ここは敵陣のド真ん中だ。切り拓いたとはいえ、敵が大量にいるのだ

「我らナンバーズ、腐っても戦闘機人だ。このような異形には負けん！」

「トーレ・・・」

「また、お兄様たちと、機動六課のみんなと笑いたい」

「だから死ぬんじゃないぞ！」

「IS ヘヴィヴァレル！」

デイエチの砲撃が敵陣を貫き、道が開ける

「行きなさい、迅」

「ドゥーエ」

「信じているわ、だから必ず帰ってきて」

「ウーノ……」

信じている……か

「……わかった。みんな……俺も信じる」

「あと……」

言いながらドゥーエが俺に耳打ちをする

「（ドクターとクアットロが例の準備をしている。それまで耐えて  
ちようだい）」

「（わかった、頼んだぞ！）」

「ええ迅、愛してるわ」

「朱梨！」

『うん、マスター！』

炎の翼が生え、俺は再び空中へと飛んだ

スカリエツァイ side

「・・・さて、と」

「ドクタァ〜？できましたわ〜」

「そうかいクアットロ、ご苦労だね」

準備は整った。外の映像は・・・

「ほう、奮戦しているな」

外の映像は機動六課とナンバーズが奮戦している光景だ

「良いんですか？ドクター」

「何がだい？クアットロ」

「『コレ』本当は世界を破壊するために見つけたじゃないですか」

「いいんだよクアットロ、友のためならね。さて、ヴィヴィオ」

「なーに？スカリエツィおじさん」

その玉座に座るのは幼き子、ヴィヴィオ

「少しだけ痛いかもしれない。我慢できるかな？」

「うん！パパを助けられるんでしょ？」

「ああ、そのための『ゆりかご』だかね」

「じゃあヴィヴィオ頑張る！」

と、ヴィヴィオが笑顔を見せる。さて・・・

「クアットロ」

「ええドクター・・・さあヴィヴィオちゃん？後でちゃんと取り出すから我慢してねえ」

そう言つてクアットロがレリックを入れた

「んっ・・・！」

少しの輝きの後、レリックは見事ヴィヴィオの体内へとおさまった

「さてと、後は迅がくれたプログラムを入れるだけですわあ」

「ああ、急いっつ」

私はコンソールを叩き、迅に渡されたプログラムを入れた

「さあ、目覚めよ聖王・・・世界の危機のために・・・再び力を貸したまえ」

ゆりかごは再び世の中へと出る

レジアス side

「急がなか！武装隊はすぐに出撃しろ！」

「しかし中将！メインコンピュータが紅の力の影響を受けたせいで・・・」

『やあ、管理局の諸君』

そこに映るのは次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ・・・今は機動六課にいるらしいが

『お困りかな？レジアス中将』

「ふん、どこから嗅ぎつけ追った」

『迅に頼まれてね・・・君たちの正義を見せてもらおう』

すると、コンピュータが復旧した。これは・・・

「中将！全てのデバイスが使用可能に！」

「貴様、何を・・・」

『言っただろう？君たち管理局の正義を見せてもらおう。それとも私達が先にするかな？』

「お父さん・・・」

オーリスが心配そうに私を見た。フン、そんなこと言われるまでもない！



「全部隊に告ぐ！直ちにデバイスを持って出撃！ミッドチルダ海上へと急行し、機動六課を援護せよ！」

『了解！』

こうして出撃する部隊

「レジアス」

「ゼスト！？お前はまだ万全ではないだろう！」

そこには武装をした友の姿があった。そして後ろには紫髪の女がいた

「俺達を救った男が戦っているんだ。そういうわけにもいくまい」

「その通りです」

「さあメガーヌ、行くぞ」

「ええ、ゼスト」

こうして二人が空を飛んだ。

「死ぬんじゃないぞ・・・」

そう一言、私は言うしかなかった

Side Out

そこは何十メートルにも及ぶ氷の柱の上

「……っふ」

そこには戦いを眺める紅否、キングの姿があつた

「人とは愚かで醜い……力があればそれを奮い、均衡を乱そうとする。そして可能性を改悪し、全てを破壊しようともたくらむ」

それは闇の書の防衛プログラムの記憶があるからこそ、呟く言葉だつた。

「人々の傲慢、怠惰、暴食、嫉妬、色欲、強欲、憤怒……それぞれが暴走し、世界が裂けた。この世界では次元航空と言っていたが……ただ単に、風船が割れたのと同じだ」

独りごとをキングは呟き続ける

「だからこそこの世界は一度リセットしなければならぬ……それがかつてオリジナルの私が望んだ願いだ。だからこの破壊された歴史を正すため、時を、世界を、時代を修正する。もとの『魔法少女リリカルなのは』と言う名の世界にするために」

「……違う」

「……来たか」

そこに降り立ったのは一人の青年。黒き髪を揺らし、鋭い眼光を放つ。右手には朱の魔導書、そして左手には翠色の剣を持った、一人の転生者

「何が違う？神谷迅」

「この世界は、アニメの世界なんかじゃない」

「ほう……」

「限りなく、無限に存在する並行世界の一つ……そして、この世界はリセットする必要なんかない」

迅は静かに、キングに言う。今の自分の想いを

「この世界は今を生きようとする奴らがたくさんいる。過去を悔い、今を見ようとしている。それを戻すのは、許されない」

「ならば貴様はなんだ？決まった運命を捻じ曲げ、人々の運命を狂わせたお前は」

「俺は罪人だ。それを否定するつもりも、それから逃げるつもりもない。報いはこの世界での生涯と、この命をもって償う」

迅は言いながらユニゾンを解除する。そして迅の胸が虹色に光り出した。

「術式兵装再起動」

『神の光再起動』

「この世界を……俺が守る」

「良いだろう、転生者よ・・・その貴様の想いで私の野望を打ち砕いてみる」

神より生れし、運命を変え続けた転生者

闇より生れし、世界をリセットしようとする暗黒の意思

この戦いに、正義はない。勝った方が正義、ただそれだけ・・・

二人の最終決戦が始まる

## 第九十六話「転生者として」(後書き)

迅「というわけで、次回最終決戦だ」

秋風「……………」

迅「おい、どうした」

秋風「ウルトラマンゼロ、最高だ」

迅「またか、映画を見るといつもこうだな」

秋風「円谷監督、あんた最高だよ」

迅「えー……アホは放っておいて、今回はゆりかごについて説明しよう」

Q1 何故ゆりかごが使われたのか？

まあ、ゆりかごを使い、全てのシステムを掌握して能力者の位置や弱点をおおうという迅の作戦。少し前からスカリエッティと迅の間で秘密裏に進められていた作戦でした。

Q2 ヴィヴィオについて

ヴィヴィオは色々嫌がっていたのですが、この世界ではスカリエッティに特に恐怖がないので嫌がってもないし、痛みにも父親のために我慢するという意思がありました。

Q3 朱梨の魔力付加

魔力付加というよりもその迅の魔力が変換資質で『炎熱』に変わっ

ただけの話。ただ、普通と違い、自然現象で発生する炎さえも操ってしまふのが朱の魔導書の凄い所

迅「こんなかんじだ」

秋風「よし、コミケまで頑張るぞ！」

迅「次回、第九十七話『World darkness breaker』TAKE OFF！」

第九十七話「World darkness breaker」(前書き)

というわけでまた更新、もう眠いので寝かせてください。すいませ  
ん

## 第九十七話「World darkness breaker」

迅side

「行くぞ・・・」

「来るがいい・・・」

「トレース・オン  
投影開始」

千将・莫耶を互いに投影し、互いに攻撃を交える。それは二人してほとんど同じ動きだった。

「つく！」

「ふん・・・」

千将・莫耶が砕け散り、拳と拳が激突する。

「これが宝具と砲撃、そしてM？busを利用した神の光か・・・  
面白い」

離れると紅の拳には血が垂れ流れ、それを舐める

「だが・・・」

魔力を解放する紅

「それがすべてではない」



「はあっ！」

再び攻撃を仕掛けるが瞬動で避けられる。

「死ぬがいい」

ゲイ・ボルク  
突き穿つ死翔の槍

「させるかっ！」

ゲイ・ボルク  
突き穿つ死翔の槍

ゲイ・ボルク同士が激突し、爆発する。俺は吹き飛ばされ、氷の地面に転がった

「くっ……」

「とっさの判断……よくそんなことができたな」

「……神の光なら、不可能は可能になる」

ノーモーションで宝具を発動させる。呪文を言わずに詠唱呪文を発動もできる。そして……

「こんなことも、な」

印を結ばずに影分身が姿を現し、ノーモーションで仮面ライダーたちへと変身した。

「ふん・・・」

すると十字に結んだ紅が影分身を作ってダークライダー達を出現させた。

「条件は同じか」

闇の戦士なんて簡単に作り出せるわけだ。だけど・・・

「それでも負ける気はない！」

『over blast』

「おおおおおおおおおっ！」

魔力が溢れる。俺はすぐに接近して連続でゼロを振るった。

『チャージセイバー！』

「うおりゃあああっ！」

「ぐっぐっぐっ！」

『烈光刃』

「だあああっ！」

次々と攻撃を繰り返す。だが、何かおかしい・・・傷が・・・

「どうした？この程度か」

「なっ……」

そこにあっただのは無数のコア

「レリック……！」

「バカな奴だ。私が集めないとも思ったか？そして……」

「これがレリックだ！」

レリックが腕に埋め込まれていた。そこから砲撃が飛ぶ。

「つく！」

熾天覆う七つの円環！  
ロー・アイアス

花弁が6枚吹き飛び、地面にたたき落とされた。

「ぐっ……」

「悪いが、これで終わらん」

アイアン・グラビレイ

重力が一気に俺へのしかかる

「こんなものおっ……！」

フレイムブラスト

「むっ!?!」

炎の砲撃が飛ぶ

「朱梨!?!」

「マスター!早く立って!」

「ごさかしい……」

レリックの砲撃が朱梨へと向かう

「っく!」

フレイムカノン!

先ほどより大きな炎の砲撃が向かう

「やばい……!」

あんなのじゃ、レリックの砲撃は防げない……!

「朱梨!逃げろ!」

間に合えっ!

アイアン・グラビレイを抜け出し、朱梨の元へと向かう

「ぐっ!」

頼む……！間に合えっ！

### 夜天の雷

「!？」

さらに後ろから別の砲撃が飛び、朱梨の砲撃と合わさって相殺された

「今は……」

「マスター、無事か？」

「リインフォース！」

そこには銀髪に紅眼の女性、リインフォースがいた

「すまん、助かった……」

「気にするな、私はお前の魔導書だからな」

「あなたは？」

朱梨が不思議そうに首を傾げる

「私は夜天の書……リインフォースだ」

「あなたが……私は朱梨、朱の魔導書」

「話は後だ……」

俺は構えを取る。相殺されたことで余裕で立っている紅をみる

「リインフォース、朱梨を連れて下がれ」

「何？マスター、私はあなたを助けに・・・」

「悪いが、戦いに巻き込みたくない」

俺が言うと、リインフォースは朱梨を抱きかかえて頷いた

「帰って、来るのですね？」

「ああ、必ず・・・」

「約束ですよ、マスター・・・いえ、迅」

「悪いな」

「マスター・・・気を付けてね」

朱梨の頭を撫で、笑顔を作った

「ああ、わかってるよ」

こうしてリインフォースが朱梨を連れて去った

「よく待ったな」

「あそこで攻撃するのは無粋だろう？最後の別れに」

嫌らしい笑みを浮かべた紅。俺は魔力を整える。そして・・・

「おおおおおおおおおおおっ!」

「があああああああああっ!」

互いに光を纏ってぶつかり合った。

なのはside

「あれは・・・」

あらかた、怪物と能力を持った人たちを倒していたころ。二つの光がぶつかり合っていた。スバルたちやナンバーズみんなはすっかり疲弊してた。ギリギリ、だったかな

「あれって・・・」

・  
フェイトちゃんが声を上げた。あれは、迅君・・・もう一つは紅・・・

「凄い・・・」

「あれが迅なのか・・・」

その姿は光の矢と闇の矢がぶつかっていた。

「おおおおおおおおおっ!」

「があああああああああああああっ！」

互いに二つの光が激突する。迅君・・・

「みなさん！」

そこへ翼を生やしたエレナさんが現れた

「エレナさん！？」

「その姿って・・・」

「これが私の本当の姿です」

そっか、天使・・・だもんね

「迅は？」

「あそこです・・・」

私が指差す方向に迅君が戦っている

「迅・・・」

エレナさんが綺麗な石を握りしめていた。

「それは？」

「これは聖石・・・神の証とでも言いましょうか」



「どうしてエレナさんが？エレナさんは天使じゃ……？」

「これは私ではありません……これは、迅のです」

え……じゃあ

「迅は、神様なの？」

「いいえアリサさん、彼は……神の器」

「器？」

「神になりえる者と言う意味です」

そんなに凄いんだ、迅君……

「ぐああああああああああああっ！」

突然、迅君の悲鳴が聞こえた

迅side

ぶつかり合い、攻撃し合っている最中だった。

「埒が明かない……」

「じゃあ明くようにしてやるっ」

紅がなのはたちに向けて手を向けた

「なっ！？やめろぉ！」

俺はそのまま手の方へ飛びだす。しかし・・・

「かかったな！」

手に魔力の刃を携えた紅が突っ込んできた

「しまっ・・・」

「もう遅い！」

黒い魔力刃は俺の体を貫いた

「ぐあああああああああああああああああっ！」

「終わりだ、転生者！」

俺はそのまま叩きつけられる

『マスター！マスター！』

「う、ああ・・・」

ここまで、なのか・・・

「私の勝ちだ。はは、あはははははは！」

体の血が止まらない・・・魔力が・・・術式兵装が、消える・・・

なのはside

「迅君!？」

た、大変!

「すぐに助けなきゃ!」

『待ちたまえ、フェイト・テストロッサ』

「なっ!？」

そこに現れたのは、大きな船

「その声・・・」

「スカリエツティ!？」

突然魔法陣が足元にひかれ、私達は転送された。そこにはサイドテールの女性がいた。

「ママ!」

「え?」

「もしかして・・・」

「ヴィヴィオ!？」

成長した?ヴィヴィオがそこにいた

「全員いるね・・・まさかプラン2になるとは」

「スカリエッティ、これどういうことや」

「これは聖王のゆりかごだ。迅と私で用意したね」

「これからヴィヴィオの力と、迅の残した力で、迅に力を与える」

「力を・・・？」

「説明する暇はない。すぐにあそこの砲門へ向けてエネルギーを照射したまえ。迅を助きたいならね」

説明を聞いてるほど、確かに時間はない・・・なら、考えてる暇もない

「レイジングハート!」

『オーライ、マイマスター』

「なのは!？」

「迅君を助ける手段がこれだけなら、やるしかないよ!」

「・・・そうだね、バルディッシュ!」

『イエス、サー』

「サンダー……スマツシャー！」

「やったるで！響け終焉の笛！ラグナロク！」

「迅のために、頑張るよ！」

千の雷！  
キーリブル・アストラペー

「迅、負けたら駄目よ！」

燃える（ウーラニア・）  
フロゴシス 天空！

「迅君、目を覚まして！」

おわる（コズミケー・）せかい（カタストロフィー）！

「迅、無事に帰ってきてくれ！レヴァンティン！アギト！」

『はい』

『おう！』

「駆けよ、隼！」

『シュツルム・ファルケンツ！』

「さあ朱梨、我々も行くぞ、私達のマスターのために」

「うん！」

夜天の雷！

バーニングブラスター！

「レイジングハート、行けるよね？」

『はい、マスターのため、そして迅様のためならば』

この想いを、この一撃に……！

『ロードカートリッジ！』

「エクセリオン、バスター！」

砲撃の全てが砲門へとぶつかる。するとヴィヴィオがその砲撃の下で構えていた。

「ママたちの思い、乗せるからね！」

セイクリッドクラスター！

ヴィヴィオの砲撃によってみんなの砲撃が一つになった。それは虹色の光になって、飛んで行った。

迅side

.....

「ここまで、か」

まだよ……

この声……

「エ、レナ？」

気が付くと、真っ白い空間にいた

「ここは……」

「ここは貴方の意識の世界」

「お前……」

エレナの姿は、初めて会ったときと同じ、天使の姿だった

「最後ですから、貴方と会うのは」

「え？」

「これを貴方に」

渡されたのは綺麗な石

「これは？」

「聖石……神の器となる者が持つ石」

「俺が、神に？」

俺はエレナに告げられた。全てがこの世界の意思であり、この世界が俺を神に選んだことを

「どうしますか？」

「……決まってるだろ？」

俺は石を粉々に砕いた

「こんなもの、俺には必要ない」

「……でしょうね、だろうと思いましたよ」

「俺は神なんかじゃない。神の力を得ていても、それは神になったとは言えない」

そう、だからこそ、こんなものはいらぬ

「俺はみんなと……この世界で生きていくよ」

「……その言葉を聞いて、安心しました」

「エレナ？」

エレナは笑い、俺に口づけをした

「エレナ!？」



「天使のキスです。加護があるんですよ？」

「お前……」

「私は貴方と出会って、一緒にこの世界で生きて……とても楽しかったです」

静かにそういう。そして段々と、エレナの体が透けていく

「エレナ！」

「私もみんなと同じ……貴方のことが、大好きです」

「……ありがとう、エレナ」

「見守っています。アテナ様と、この世界と一緒に……」

「ああ、みててくれ、エレナ」

こうして、俺の意識は消えていった

目が覚めた。俺は光に包まれていた

「これは……」

温かい光だった。そしてその光は、みんなの魔力だとわかった……

「バカな！あれだけの致命傷を負って・・・！」

「みんなが俺に言ってる・・・負けるなって・・・」

立ち上がり、ゼロを杖のモードにした

「そして・・・言っている・・・帰ってこいって。だから！」

俺は、負けるわけにはいかない

迅君が、大好きだよ！

なのは

迅が、好き

フェイト

迅、だーいすき！

アリシア

ずっとそばにいてね？

はやて

帰ってきなさい！あたしはあんたが好きなんだから！

アリサ

負けないで・・・迅君

すずか

迅、負けるなよ、もう一度・・・会いたいのだから

シグナム

マスター・・・必ず帰ってきてください

リインフォース

マスター！頑張れ！

朱梨

パパ！がんばれー

ヴィヴィオ

そして彼女達だけではない。フォワードの、ナンバーズの、この世界の人々の、この世界が・・・俺を呼んでいる。そして・・・

天使の加護を受けたんです・・・負けたら承知しませんよ？

エレナ・・・分かっているよ

「バカな・・・ありえない」

「悪いな、紅……『ありえない』なんてことはないんだ。この世に奇跡の一つや二つ、転がってる……そして」

俺は杖を構える

「この世界の想いを、俺達の想いを！受けてみやがれえええ！」

— world darkness breaker 《世界の闇の殲滅》！

白銀の砲撃が紅に向かう

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああつ！バカな！これが、世界の意味だともいうのかあ！この、汚れた世界があ！」

「この先の未来は、俺が、俺達を作る！」

そう、それが俺の使命

「さよならだ紅、今度こそ」

「ばか、な……私は、私はあああああ！」

紅は叫びながらも消滅して行った。

「終わった……」

俺はそう言って空中から落下して行った。その時、翼の生えた誰かに抱えられていた気がした。

最終決戦、完結

第九十七話「World darkness breaker」(後書き)

秋風「ということ、こんな深夜までバカみたいに更新してました」

迅「さて、また疑問が浮かんだな」

Q1 ヴィヴィオの砲撃

これは迅があらかじめ色々と弄っており、プラン2として迅に無理やりその莫大なエネルギーを与えられるように改良がされていた。

Q2 プランとは？

ゆりかごよりエネルギー供給をするためのいくつかの手段

プラン1 迅の合図でエネルギー発射

プラン2 迅が絶命状態でのエネルギー発射

迅「というかわけで、あと3話でおしまいだ」

秋風「といつても、まだEDがあるけどね」

迅「次回、第九十八話『事件の後』 TAKE OFF! 」

第九十八話「事件の後 その1」(前書き)

というわけで二つに分けました。なのでちょっと短いです

## 第九十八話「事件の後 その1」

Side Out

海上での戦いは死者0・・・怪物たちは紅の消滅と共に姿を消した。幹部たちは様々で、能力の反動で死んだ者、記憶をなくした者、姿を消した者と、様々だ。そしてこの事件は全国ネットで配信がされており、メディアの見出しはというと

世界の危機、また救われる！

英雄、神谷迅！

管理局の無能！奇跡の部隊大活躍！

などなど、基本的に迅と機動六課を褒めたたえる記事ばかりである。当然管理局を中傷する記事も多々あった。それを規制しようとしても、権威が地に落ちてしまった管理局にはそんな能力があるはずもなかった。

迅side

「……………」は

眼を覚ますと、そこは病院のベッドだった。

「どれくらい寝てたんだろ」

『おはようございます、マスター』



「ゼロ・・・俺はどれくらい寝てた？」

『だいたい2週間と言ったところでしょいか。毎日機動六課の皆さんがお見舞に来てはキスをして帰ってました』

「は!？」

アホか、あいつら!

「事件は？」

『全て解決しました。紅は今度こそ、完全に消えて・・・管理局の権威も、今や地の果て。『膿』の部分はスカリエッティの告発によって次々とメディアで叩かれ、そして保安部によって逮捕されます』

「そっか」

全部終わったんだな・・・今度こそ

コンコン

「失礼します・・・迅君！」

そこにはなのはたちの姿があった

「なのは、みんな！」

「迅君!よかったよお〜！」

なのはが抱きつき、他のみんなが抱きついてきた

「ぎゃあああ！バカ！まだ怪我が！いででででで！」

「ふえええん！」

「うわーん！」

もう大騒ぎである。そしてこのあと俺は気絶して、ナースさんが来るまで大騒ぎとなり、なのはたちはこっぴどく叱られていた。そして

「パパ！」

「ヴィヴィオ、ターナ」

俺の娘たちが飛び込んできた

「二人とも、元気だったか？」

「うん！」

「パパ、痛い痛い？」

「大丈夫だよ、な？」

二人を抱きかかえ、頭を撫でる。少し体が痛いのはまあ耐えらるとしよう

「二人が元気なら、パパも元気になるよ」

「えへへ」

「わーい」

なんて、二人を膝に置きながら言う。外では半壊した街の復旧作業の様子などが見られた

コンコン

「はい？」

扉が開くと、そこにはレジアス・ゲイズがいた

「レジアス中将」

「久しぶりだな。目が覚めたと言うので見舞いに来てやったぞ」

「はは、中将自らか」

「うむ、貴様には感謝しているからな」

とってフルーツを置いた。

「管理局はもう駄目だろうな」

「うむ・・・今度ミッドチルダ全域で審議が行われる。『時空管理局』についてのな」

なるほどね・・・だけどそれは

「無論、ワシもただでは済まんだろう」

「レジアス中将……」

「なに、後悔などない。それが今までの報いだからな」

「そうか」

「それに、お前はワシの友を救い、ワシらに光を見せてくれた。十分じゃよ」

そう言っただけで立ち上がった

「さて、ワシは最後の仕事でもしに戻るか」

「……レジアス中将」

「なんだ？」

「アンタに提案がある」

「提案？」

足を止め、俺の方を見る

「新しい組織の柱にならないか？」

「新しい組織だと？」

管理局が崩壊する今だからこそ、俺は新組織を立ち上げるべきだと思っていた。まあ、前からその予定ではいたけど

「その組織は時空管理局とは違う」

「どう違う？」

「この世界の平定を守り、他世界へは進行しない。管理世界ではなく、観測世界とし・・・何かの事態には迅速に対応する。それがどこの世界であろうと。どんな悪にも立ち向かう」

「ほう？その組織の名は？」

名前か・・・うーむ

「時空警備隊（仮）だな」

「（仮）とはなんだ（仮）とは」

「ちゃんとした名前がまだ決まってない」

「まあ、考えておこう。ではな」

こうしてレジアスは帰っていった

お昼寝タイムとなったターナとヴィヴィオ。俺は優しく二人を撫でる

「・・・なあゼロ」

『はい、何でしょうかマスター？』

「気付いたか？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・ええ』

ま、自分の体だし・・・それに俺の相棒なら、気づいてはくれるよな

「魔力、減っちゃったな」

『・・・・現在マスターの魔力ランクはEXからS+にまで下がっています』

「直る見込みは？」

『最低1年・・・体のリンカーコアと魔力組織が『神の光』によって損傷していますので、魔法の類は控えた方がよろしいかと』

1年か・・・

「他は？」

『ライダーのシステムは正常です。今までしなかったクウガとアギト、キバの力は体内に宿っています。それと』

「それと？」

『魔法はと言いましたが、今までのネギま！の魔法といった体内の魔力なら問題ありません。威力は多少落ちますが、この世界において問題はないでしょう』

なるほど・・・

『なので最低1年、私はただの通信機というわけです』

「そつか、デバイスの計上を変えるのにも魔力はあるもんな」

『はい、マスターを守れないとは、デバイス失格です』

「気にすんな、気長にやろうぜ」

この世界を救ったんだ。それくらい安いもんだ

「さてと・・・もう少ししたら二人を起こして飯にしよう。それまで徹底的に能力の確認。いいな？ゼロ」

『オーライ、マスター』

こうして、俺とゼロは能力の確認をして過ごした

夜

「じちそーさま」

「じちそーさま」

「はい、よく食べました」

病院の食堂で食事をし終える。俺は現在車いすだ。というのも、M

? b i u s を取りこんだことで体の神経が一時的に麻痺していて、動くと言えば動くのだが歩くのが少し辛いのだ

「パパ、ヴィヴィオとターナが押すよー?」

「ああ、頼むよ」

「うん!」

こうして二人に押されて病室へと戻っていく。病室に戻り、ベッドの上になんとか腕だけで寝っ転がる。

「ふう」

「パパ、眠い・・・」

「二人とも歯を磨いておいで。そしたら寝よう」

「はい!」

こうして洗面台で歯を磨いた二人はベッドの中へと潜り込んだ

「おやすみ、二人とも」

「おやすみなさ〜い」

こうして二人は眠りに着き、俺は天井を見ていた

「パパ・・・」



「よしよし・・・」

世界は、この先どういった方向へ向くかは分からない。でも今は、この先のことよりも今を大事にすることにしよう。この子たちの未来のために

第九十八話「事件の後 その1」(後書き)

秋風「今回は連続投稿!その2へ続く!」

迅「次回、第九十九話「事件の後 その2」 TAKE OFF!」

第九十九話「事件の後 その2」(前書き)

とりあえず次回、最終回です  
ながかったorz

## 第九十九話「事件の後 その2」

迅side

戦いが終わって早2週間が過ぎた。体力も回復し、麻痺もなくなり俺は機動六課の隊舎へと戻ってきた。

「帰って来たな」

一度はさよならを告げて、もう戻ってくることもないと思っていたが……

『マスター、お出迎えが来てますよ』

「へ？」

「迅くん！」

隊舎の前でなのはたちが手を振っていた。俺はゆっくりとみんなの前にまで向かって行く。そしてみんな笑顔だった。

『おかえり！』

「……ただいま」

こうして、俺は機動六課へと戻ってきた

機動六課では相変わらず変わらぬ日々があった。忙しいみんなのデ

スクワーク、そして訓練、そんな平和な日々の中にただ一つ変わったものがあつた

「エレナ……」

そう、エレナが消えていた。みんなの記憶からも、みんなの思い出からも……存在が消えていた。ゼロの残されたデータによると、天界の天使は人間に正体をばらすことはしてはいけないのだという。エレナは天界に戻り、アテナの仕事に追われている……そう思いたい

「マスター……」

「リインフォース、どうした？」

「エレナは……」

そっか、こいつはデバイスだから……消えないのか、記憶が

「そうさな……帰ったよ。天界に」

「そうですか……これを、返しておきたかったです」

手にあつたのは料理の本。あいつこんな持ってたのか

「なーに、いつか帰ってくるさ」

「そうですね」

「さ、昼飯にでも行くか」

「はい、マスター」

こうして俺達は食堂へ向かうことにした

食堂

「いただきまーす！」

ここでも相変わらずの光景を見ていた。ヴィヴィオが嫌いな物を避けたり、スバルが大食いをしていたり。

「やめんか！」

ティアナがスバルに突っ込みを入れたり

「なにすんのティア」

「兄さんの食欲が失せるでしょうが！」

「いや、ティアナ……」

別に大丈夫だけど……

「駄目です！病み上がりなんですから！ちゃんと食べてください」

「はいはい」

可愛い妹だよ、まったく

「はい、迅君あーん」

「手を使えないからね」

と、なのはとフェイトが俺に食事を食べさせるけど・・・

「手を使えないって、これお前らがバインドで縛ってるからだろうが」

「じゃはは、なんのことやら」

「ほら、あーん」

「・・・あーん」

しびしびと俺はそれを口に入れる

「おいしい?」

「ああ、おいしいよ」

こんな感じで昼は過ぎて行った

機動六課 女子寮

「こんにちは」

「あら、こんにちは」

俺は女子寮を訪れ、ある人物に会いに来た。それはルーテシアの母、メガーヌだ

「メガーヌさん、体調のほうは？」

「ええ、もうすっかりよ。この前も戦闘に参加してたもの」

「そうでした」

後から聞いた話だが、ゼストと共に先陣を切って戦っていたという

「ルーテシアもお世話になったし、私も助けてもらったし・・・なんとお礼を言ったらいいか」

「あはは、気にしないでください。僕が勝手にやったことですし」

「うふふ、ルーテシアが貴方を好きになるのも分かる気がするわ」

「へ？」

あいつそんなこと言ってたのか？

「ええ、将来は絶対に迅君のお嫁さんになるって言ってたわよ？」

「あ、あはは・・・あ、そうだ。これ」

「これは？」

それは無人世界カルナージへのチケット



「ここなら、メガーヌさんとゼストさんがゆっくり休養できるかと思ってる」

実際、Vividでも同じ場所にいるしな

「ありがとう」

「さて、次へ行くか」

「あら、まだ予定があるの?」

「ええ、ナンバーズのみんなのところへ」

こうして俺はメガーヌさんと別れ、俺は海上隔離施設へと足を運んだ

### 海上隔離施設

「わざわざすまないな、ギンガ」

「いえ、スバルがお世話になってますし、これくらいは」

今日は本来なら立ち入りは禁止されているのだが、特別に入室を許可してくれた。別に彼女たちは犯罪を犯したわけでもないの、原作と違って普通の隊舎のような場所である。

「よう、みんな」

「迅!」

チンクが俺に飛び込んできた。つたく

「あぶねーだろ」

「ふふ、目が覚めてよかった、姉は心配だったんだぞ」

「ありがとな」

こうしてみんなで騒いで数分後

「へえ、じゃあみんなはもうすぐ自由なのか」

「ええ、ほとんど終わりました」

というのも、機動六課にいる間も一般常識くらいは教えていたので、彼女達がここにいる理由もさほどないだろう。

「それで迅、これからお前はどつする？」

トーレが俺に言う。まあ、確かに

「一応、この先衰退する管理局に代わる新しい組織を作る」

「組織……か。いったいどんな？」

「この世界の平定を守り、今確認されているだけの世界における混乱と悪を消し去るための組織だ。前に見せた『ウルトラマン』があったら？あれと同じさ。全宇宙の未来を守るのと同じ、全世界の平和と未来を守る。そんな組織だ」

「なるほど……」

まあ、まだ夢物語で問題は山積みなんだけどな

「お兄様」

「どうしたデイド」

「その組織、必ずや私も協力します」

「うん、ありがとな」

そういつて頭を撫でると、嬉しそうにデイドは笑っていた

「ずるいっす！うちも手伝っすよ！」

「私も手伝っよ……」

と、ウエンディやディエチが詰め寄る

「わかったわかった……みんな手伝ってくれよ」

こうして、ナンバーズと楽しい時間を過ごし、海上隔離施設を後にした

機動六課隊舎

「おかえりなさい」

「ドゥーエ、ウーノ」

この二人に限っては、特に常識が足りないということはないので、そのまま機動六課に滞在している

「おっ」

「うふっ、どうしたの？」

「いや・・・この前の戦いが嘘みたいだな。こんな平和の中だと」

ま、平和ボケだけには気を付けねーとな

「そうね・・・でも、この平和こそあなたが望んだものでしょう？」

「いいや、まだこれからだ」

「え？」

ドゥーエが少し驚いた顔をする

「真の平和のために・・・一日も早く、管理局の膿を全て消し去らなきゃいけない。その膿で苦しんでいる人たちを救いださなきゃいけない・・・忙しくなるぞ」

「そうね・・・」

「私はどこまでもついていくわよ？」

「ああ、ありがとう」

季節は3月・・・春の訪れを感じさせながらも、静かに、ゆっくりと・・・この世界の時は流れる

別れの日々は近い

## 第九十九話「事件の後 その2」（後書き）

秋風「次回！とうとう最終回です！」

迅「まだEDもあるが、それはまた別だからな」

秋風「ちなみにアンケート！」

- Q このまま続ける？それとも終わる
- 1 それぞれのEDをもってこの物語には終止符を打つ
  - 2 Vividの物語が始動
  - 3 Forceの物語から始動

秋風「ちなみに2、3の場合は新しい小説としてスタートさせるつもりです」

迅「他に要素は？」

秋風「・・・続編の場合、EDにはない『ハーレム』エンドになっ  
てしまうが」

迅「なん、だと!？」

秋風「いいじゃん!」

迅「よくなー!」

秋風「では、次回で最終回!」

迅「次回、最終回！」「神様の力を得た少年」  
TAKE OFF!

第百話（最終回）「神様の力を得た少年」（前書き）

やっとラストパートです。ありがとうございました。

EDがあるのでぶっちやけていうとコレ短いです

でもお楽しみください



## 第百話（最終回）「神様の力を得た少年」

迅side

季節は4月。それは出会いと別れの季節

「早いもんだなあ」

結局、時空管理局事態解体は免れたものの、人々の信頼と権力は地に落ちたまま、軍備は縮小されることとなる。そして世界は平定される

「こんなところにいたのですか？マスター・・・いえ、神谷迅総帥」

「おいリインフォース、その呼び方はやめろ。歯痒い」

「ふふっ、しかたありませんよ」

時空管理局に代わる新たな組織その名は『時空警備隊』結局（仮）とか言つてそのまま名前を付けた。時空警備隊の概念は世界の平定を守ることに。無限に広がる世界の中で、管理世界は観測世界と定め、特別な介入をせずに月に一度視察をするだけというもの。その時によつてその世界の状況を知り、対応するというものである。そして絶対と言える以下の鉄則がある

世界の悪にはどんな状況であろうと立ち向かう

我々は侵略者ではない。世界の経済や利益に干渉しない

才能がある者に無理にこちらの世界を教えて引き込んだりすることは許可しない

いかなる場合においてもの悪行を禁ず

どんな絶望的状况でも、世界を見捨てず、最後まで見届けること

そして時空管理局の中にあつた『管理外世界』という概念を取り払い、少しずつこの『魔法』というものを広げていくというものだ。それにより『魔法』を使った犯罪も抑えることをしなければいけない。なので、ミッドチルダ以外の世界での魔法使用は記録として残るように設定されている。これについては俺とスカリエツティが作ったのでどんなものでもジャミングすることなどできない。これにより人体実験はされることもないし、犯罪も激減する。そしてその司令として抜擢されたのはその組織を立ち上げた俺自身である。

「ま、柄じゃないんだよねえ」

正直な話、人を指揮するというのは苦手で、得意でもない。なのでその辺はレジアス・ゲイズ総長、ゼスト・グライガンツ大隊長に大任を任せている。管理局をやめ、時空警備隊に志す有望な若者や、本気でこの世界を守ろうと志す人物たちを『答えを出す者』で探し出し、交渉してこの組織での重役とした。結局のところ総帥とは名ばかりで、非常事態の時のみ出動することとなる。

「迅、そろそろ機動六課の解散式ですよ」

「そうだね、行くつか」

桜が舞う機動六課の隊舎前。綺麗なその桜と空を見ながら俺は歩く

「そういえばリインフォース、あいつらは？」

「ええ、スカリエッツィ達も来てます」

「そか」

スカリエッツィ達は時空警備隊科学開発部門という部署を担当する。担当局長はプレシアさん。前のことがあってか、少し戸惑ってはいたが、マリーやシャーリー、スカリエッツィたちの支援のもと、了承してくれた。前に見た小説であった『主任補佐』ってスカリエッツィのことか？とか思ったけど、スカリエッツィは「それはないね、一度見たことはあったが、プレシアとは別荘であったのが2度目さ」とのこと。

「そういえば迅、トーレたちも来てます」

トーレ、チンク、セツテ達は時空警備隊保安部という部署に所属することになる。時空管理局でも優秀だった人材や、ナンバーズが集まるその部隊。もともとは時空管理局の配下だった保安部なのだが、保安部長が時空管理局から時空警備隊へ傘下として入ることを決定したので。

「迅くん！」

遠くからなのはとフェイト、はやてが走ってくる。

「もう、探したよ？」

「リインフォース、見つけたなら連絡送ってや？」

「すみません、話しこんでいたもので」

なのはは時空警備隊教導部署司令官として活躍することになる。フ  
イトは時空警備隊本部でそのまま執務官と言つ立場がある。テイ  
アナなどもどうようだ。

「みんな待ってるで？」

「おう、ちよつと急ごつな」

はやても時空警備隊捜査部に配属される。様々な世界に散らばる謎、  
事件を担当する。他にも管理局を後ろ盾にした会社などを摘発する  
ものである。

「そついえば警備隊の設立はいつ？」

「来週だな。世界的に発表するつて、カリムがうるさくてさ」

カリムからも、カリム自身が協力を申し出た。というのも聖王教会  
という大きな組織の協力は必要不可欠だ。一応、時空警備隊と聖王  
教会は協定を結ぶ形で動いていく

「さあ、みんなが待っている。行こう」

隊舎の中へ戻り、俺達は解散式へと出ることとなる

「どうか、この先時空警備隊として行く人も、管理局で行く人も、  
頑張つて」

はやての話が終わり、解散になる。この部隊の全員が時空警備隊に入りたいと俺に個人個人で志願してきた。なので俺はそれを了承し、時空警備隊の設立を急いだのだ。

「あ、そだ・・・フォワードはあとで広場集合ね」

・・・やるんですか、あのイベント

「なのは・・・やるのか？」

「うん、もちろん」

「え？何が？」

と、フェイトが首を傾げる。

「まあ、来れば分かるよ」

「楽しみやなあ」

・・・ぶつちやけた話をしよう。なのはにはせがまれて『魔法少女リリカルなのはStrikerS』のアニメを見せた。本人がどうしても俺がいない場合の世界を見ておきたいとのことだったので。初めは驚きや恥ずかしがったりだったのだが、最後まで見てその後で『ねえ、これやろうよ』となった。俺が言えば絶対にやらなかつただろうに

現在六課の外、桜の花が舞うこの場所で、なのはが高らかに声を上

げる。

「さあ、全力全開手加減なし！迅君と私達VSフォワード、ナンバーズの最後の模擬戦！」

「桜に先謝っておこう。ごめん」

機動六課の日常はこうして終わりを告げる。それは別れではない・  
・新たな旅立ちとなる。

「レディーゴー！」

今日も機動六課は平和である

Side Out

天界

そこは神々がいる場所、天界

「アテナ様？サボらず仕事してください」

「ぶー」

「ぶーじゃありません」

エレナが天界に帰って来てから、エレナは驚いた。その上司の仕事をしないうぷりに。仕事の書類が自分のところに山積みになれ、アテナは漫画を読んでいるというものだった。そのあとエレナの一喝

でアテナが渋々と仕事を始めていた

「そういえばエレナ」

「はい？」

「天使の加護、あげたんでしょ？」

「……………」

エレナが顔を真っ赤にする

「ふふっ、まあいいけど」

「アテナ様」

「なに？」

「アテナ様はいつから迅が神の器だと？」

「そうねえ、あの時かしら。迅が闇の書の防衛プログラムに放り出された当たり」

そう、本来なら焼結するはずの肉体が消滅しなかった所だ。

「ゼウス様も彼は神の器だ。でもそれを選ぶのは自分自身だとおっしゃったわ」

「そうですね」

聖石を砕き、自らの道を示した迅は、神の力を得ながらも神になる  
うとはしなかった。

「世界へ反逆した神・・・か」

「いいえ、アテナ様」

「え？」

「迅は・・・英雄ですよ」

エレナは嬉しそうにそう笑った。

一週間後

迅side

さーて・・・来ちまったなあ

「マスター・・・準備はよろしいですか？」

「ああ」

その新たに設立された『時空警備隊』の大ホール。そこには新しく  
入る人間達がいた。なのはたちも当然ここにいる。

『では、総帥から言葉を頂きます』

言葉、か・・・そうだな、今の思ってることを直接言つとしよう



「・・・ミッドチルダの魔導士たち、そして騎士たちよ。我々は正義の力を元に集まった。だが、全ての悪が滅び去ったわけではない。世界には様々な脅威が潜んでいる。俺達は弱きものを助け、支えるために、これからも戦い続けなければならない。それがこの時空警備隊で一番守るべきことだ。新たに立ち上がるう！ミッドチルダの勇士たちよ！平和と正義のために、無限にある全世界の未来のために！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』』

俺の言葉に、そこにいた人間達が声を上げた。

「時空警備隊総帥として宣言しよう、ここに時空警備隊を設立する！」

俺の戦いは終わらない。俺達は戦い続ける。それが転生者としての使命なのだから

F i n

第百話（最終回）「神様の力を得た少年」（後書き）

秋風「終わったー！」

迅「何言ってんだ、まだEDがあるだろ」

秋風「つち！」

迅「おいおい」

秋風「そしてEDですが、結構短いです」

迅「なんでさ」

秋風「12人も沢山書けないから」

迅「駄目だこりゃ」

秋風「後書きはEDの後です。そして以下の通り」

なのは エンディング  
フェイト エンディング  
アリシア エンディング  
はやて エンディング  
シグナム エンディング  
アリサ エンディング  
すずか エンディング  
スバル エンディング  
ティアナ エンディング

ウーノ エンディング  
ドゥーエ エンディング

さあ、好きなものを選ぶがいい！

IF フェイト・テストロッサ エンディング(前書き)

というわけで、フェイトからです

なのは 主役は最後のお楽しみに取っておいてください

先に断っておくけど超短いです。wordでも2Pくらいしかないです

IF フェイト・テストロッサ エンディング

時空警備隊設立から早2年

「おはよー迅」

「フェイト、おはよう」

起き上がり、朝のキスをして起き上がる。

「えへへ」

「つたく、キスするたび喜ぶな」

「だって嬉しいんだもん」

約1年前、俺とフェイトは結婚した。というのも、フェイトが俺に告白してきたからである。なのはたちからは『迅君が選んだならそれでいい』と言うことらしい。その後の「愛人のポジションは私達だから」というセリフが妙に怖い。

「お父さん、おはよう」

「パパ、おはようございます」

「エリオ、キャラ、頑張ってこい」

「はいー!」

エリオ、キヤロは正式に俺の息子、娘だ。なのでヴィヴィオ、ターナを入れた6人家族となっている。二人は学校へ行かせ、友達を作るように言っている。

「ねえ迅？」

「ん？」

「その・・・もうすぐ生まれるかな？」

「そうだな」

フェイトのお腹には俺とフェイトの子供がいる。

「えへ、ちょっと楽しみなんだ」

「そうだな・・・」

なんせ、養子以外の初めての子供だ

「幸せになるうね。もっともっと」

「ああ、そうだな」

ドックン

「あ、お腹が動いた」

「そっか、早く出て来いよ」

「名前どうしようか」

「男の子でも女の子でもいい名前を付けてあげなきゃね」

名前か・・・俺はセンスないからなあ

「迅が決めてよ」

「えー・・・」

「だって、お父さんでしょ?」

「そんなときに考えるよ」

さてと、そろそろ仕事の時間だな・・・

「そろそろ行くからな」

「あ、待って」

「ん?」

俺とフェイトの唇が重なり合う。

「んっ・・・」

「んちゅ、んふ・・・」

「くはっ・・・あのなフェイト、朝からどんだけ長いキスをさせるんだよ」

「いいじゃない、日課でしょ？」

そうだけど・・・

「行ってきますフエイト」

「行ってらっしゃいあなた」

こうして今日も一日が始まる



IF フェイト・テストロッサ エンディング(後書き)

次はアリシアEDです

IF アリシア・テストロッサ エンディング(前書き)

アリシアのEDDです

IF アリシア・テストロッサ エンディング

「迅！朝！」

「へいへい・・・」

時空警備隊の設立から組織も軌道に乗り、早2年。アリシアと結婚した俺は、ミッドチルダから地球へと居を移した。それとつものも、アリシアは死者だ。ミッドチルダでは時空警備隊の理念を反さないために離れたのだ。

「おはようアリシア」

「おはよっ！」

と、アリシアが飛び込んでくる

「アリシアお前なあ！」

「えへへ」

アリシアはご存知の通り眠っていた分、フェイトの姉ではあるが若い。20歳を超えていても中はまだ十代なのである。

「ん？なんだよ」

「朝のちゅー」

「へいへい」

唇を合わせ、アリシアが俺にすり寄る。アリシアは猫のようである。ヴィヴィオとターナはすでに起きているらしく、ベッドにはいない

「まったく・・・」「おぎゃー！おぎゃー！」「ほら、お呼びだ」

「あらら、リニス？どうしたのかなー？ご飯ー？」

俺とアリシアの間に生まれた子、リニス。かつてのアリシアの飼猫であり、プレシアさんの使い魔の名前だが、どうも気に行っているらしく。そうだった。ちなみに性別は女の子。俺の黒い髪とアリシアの白い肌がはっきりと遺伝している。

「よしよし、あ、パパがいいのかな？」

「よっと・・・リニスおはよー」

俺が言うとリニスは笑みを見せる。

「ご飯にしようか、今日は洋食だな」

「わーい、手伝うよ」

「ヴィヴィオも〜」

「ターナも〜」

今日は休日。俺は時空警備隊の総帥でもあるが、海鳴では会社の社長でもある。この経済状況で社長になるというのもおかしい話だが、この俺の頭脳なら問題はない。

「さて、と」

アリシアは料理はできるのだが、現在二人目の子供がお腹にいるのであまり無理はさせたくない。なので家事は俺が大体やっている。ヴィヴィオとターナも手伝ってくれるのでとても助かる

「二人目の子、名前何にする？」

「この前はリニスって英語の名前だからな、今度は日本語の名前はどうか？」

「そうだね、それもいいかな」

なんて話ながら料理をする。ちなみに事あるごとに俺にひつついてきたりするところ、アリシアは本当に中身は子供なのだ実感することがある。

「できた〜」

朝食はトーストや目玉焼き、ウィンナーなどなどだ

「今日はどうするんだ？」

「うーん、リニスの服をそろそろ買おうかな」

「そうだな、じゃあ買い物か」

久しぶりに車の運転だな。朝食を終え、着替える。アリシアはリニスを抱き、準備を終えていた。

「じゃ、行くところ？あ・な・た？」

「ああ、そうだな」

手を繋ぎ、少し離れた車場まで歩きだす

「やっぱりこうしてると思うよ、迅」

「何が？」

「この世にまた生き返ったことが、どれだけ嬉しいかって」

「はは、そうだな」

アリシアは元々死者だ。その体質のせいで何度か悪夢も見ている。それで何度苦しんでいたかもわからない

「大丈夫だよアリシア」

「ふえ？」

「これから先も俺が守るから」

「うん！」

平和な日々は続く。これはそんな日の一コマ。海鳴の平和な空の下、  
今日も俺達家族は楽しく暮らしている

IF アリシア・テストロツサ エンディング(後書き)

次回はアリサEDになります

IF アリサ・バニングス エンディング(前書き)

アリサEDです。子供の名前は超適当です



## IF アリサ・バニングス エンディング

アリサED

時空警備隊の設立から早5年がたち、俺はアリサと暮らしている。  
元々アリサ自身が財閥のお嬢様ということがあり、結婚するのに色々大変だった。結婚してからは親戚周りをしたり、ヴィヴィオとターナを紹介したり、もう面倒くさいことばかりだ

「迅、どうしたの？」

「いや？」

今日は休日。ヴィヴィオとターナは友達の家遊びに行った。

「あー、パパ」

「はいはい、どうした？」

俺とアリサの子、ミネアは、3歳。言葉を覚えはじめと言ったところである

「パパ」

「はいはい」

抱っこして上げると、嬉しそうに笑う

「あの子たち帰ってきたら今日はパーティよ、わかってる？」

「おう」

財閥を継ぐ継がないの話では、アリサと一緒に継がないことにした。お義父さんは渋い顔をしたが、時空警備隊の総帥であることからそれを了承してくれた。ちなみに今日のパーティーとはミネアの3歳の誕生日のことだ。

「それにしてもあいつら遅いな」

「そうね、ちょっと外へ行ってみましょう」

まだ時間もあるので外へ行く。するとヴィヴィオとターナが全力で走っているのが見えた。後ろにはなんだか怪しいのが3人くらい見えた。

「パパ！ママ！助けて！」

「ヴィヴィオ！ターナ！」

俺が駆けだす前に、ミネアを押し付けられ、アリサが走りだした。

「うちの娘に……何してんのよー！」

「ぐばあー！」

変質者の男が倒れる。そしてそのままアリサが回し蹴りで2人目をしとめ、逃げ出した男に向かって石を剛速球で投げて倒した。

「……お見事」

「あー！」

ミネアは嬉しそうにぱちぱちと手を叩いていた。

「ママー！」

「怖かったよー！」

「よしよし」

このあと3人は逮捕された。どうやら海鳴を騒がしていた変態だったらしい。

「相変わらず、怖いなお前は」

「何か言った？」

「いえいえ、お淑やかといたしました・・・ん？」

アリサ、足を怪我したら

「ミネア、ヴィヴィオの所に行こうか」

「あー！」

ミネアは嬉しそうにヴィヴィオの所に抱きつく

「よっつと」

そして俺はアリサをお姫様抱っこする

「ちょ!?! 迅!?!」

「怪我してんだろ、無理すんな」

「あううう・・・いくら家の前だからって・・・バカ」

「はいはい、バカで結構。俺はお前の体の方が大切だからな」

そうして家の中に入る。怪我はたいしたことがなく、変質者のナイフが足をかすっただけだった。

「これでよし」

「迅・・・」

「ん?」

「あ・・・ありがとう」

「どういたしまして」

そう言うってからアリサにキスをする

「ん!?!?」

「ん・・・」

「んぢゅ・・・んん!?!」

「ふう」

アリサが顔を真っ赤にしていた

「何するのよ！いきなり！」

「嫌だったか？」

「いやじゃ、ないけど・・・」

「なに、ちょっとだけ震えてたから、落ちつかせただけ」

まあ、実際ナイフに向かって行くのが怖くない奴いないしな

「バカ」

「はいはい」

「でも・・・ありがとう」

顔を真っ赤にして、俺にひつつくアリサ

「ふふっ、ああ」

こんな感じで、俺とアリサの関係は続いていく

IF アリサ・バニングス エンディング(後書き)

つきはずかEDDです

IF 月村すずか エンディング(前書き)

すずかのEDです

IF 月村すずか エンディング

すずかED

時空警備隊の設立から3年がたち、俺とすずかは2年前に結婚、海鳴市でお義姉さんたちに挨拶して、ミッドに戻ってきた。

「迅君、今日はどこに行こうか」

「そうだな、お腹の子のことか、ヴィヴィオとターナのことを考えて・・・クラナガンの動物園にでも行こうか」

「そうだね」

コーヒーを飲みながら、楽しそうに遊ぶヴィヴィオとターナを見る

「ねえ、迅君？」

「ん？なんだすずか」

「本当に、いいの？」

心配そうに俺にすずかが言う

「何が？」

「この、お腹の子を産んでも」

その言葉に、俺はため息をついた



「またその話か・・・」

「・・・・・・・・」

この世界ですずかには吸血鬼の子孫だと、結婚する前に言われた。俺はそれを知っていた。この世界は並行世界。何が起きてもおかしくはない。とらいあんぐるはーとと混ざり合っている世界など、どうというものではない

「まったく、オメーは」

「あう・・・」

俺はすずかを抱き寄せる。

「やっとできた子供だ。大切にしよう」

「うん」

こうして日々はすぎる

半年後

病院で生まれた子は、男の子で、紫色の髪と黒い瞳をしていた。吸血鬼なら紅い目が生まれた瞬間には出来るのだという。忍義姉さんの話ではこの子は混血の子であると教えてくれた。そしてその血は男が人間であることからとても薄くなっていると言われた。孫の代には消えてなくなるであろうその吸血鬼の血が

「だつてさ、すすか」

「よかつた……この子にも、未来の子にも、私と同じ思い、しな  
くていいんだ……」

すすかは嬉しそうに涙を流していた。

「ばーか」

「え？」

「俺はな、そんなことを言わせるがために言ったんじゃないよ」

すすかは意味をよくわかっていないようだ。

「すすか、もう……苦しむな」

「迅、君……」

今まで夜の一族と言うことで命を狙われ、そして生きて来た。その  
辛さと苦しみに耐え生きて来た。だがもう、そんな苦しみはいらな  
いだろう。

「俺がお前の苦しみ、全部背負って生きてやる」

「じ、ん……くん……うえっ……うええええええん！」

「よしよし」

赤ん坊がすやすやと眠る中、すずかは声に出して、俺の胸の中で泣き続けた

「落ちついたか？」

「うん」

「さて、子供の名前……考えないとな」

どうしたもんか……

「あ、迅君」

「え？」

引き寄せられ、唇が重なった

「ん……」

「んあ……」

「ぶはっ……すずか」

「えへへ」

いじわるっぽい笑みを浮かべ、すずかは嬉しそうだった。

「そう言えば今日、流星が流れてんだな」

その明るく照らしてくれる流星

「流星……」

「え？」

「神谷流星……この子の名前だ」

この日を忘れないためにそして……

「俺とすずかから生まれた、天からの申し子……流星だ」

「いい名前だね」

「そうか？ありがとう」

こうして新たに生まれた命に名がついた

IF 月村すずか エンディング(後書き)

次回ははやてのEDです

IF 八神はやて エンディング(前書き)

はやてのEDです

今回の子供の名前も思い付きです

## IF 八神はやて エンディング

はやてED

とりあえず時空警備隊の軌道に乗ったころ、俺とはやてが結婚した。マスコミからも色々と言われるのが嫌なので海鳴で式を上げた。何と言っても場所が場所だからな。そしてその3年後、はやては双子の子を成した。

「うああああん！」

「うあああっ！」

「ママ！蓮花と凜花がまた泣いてる！」

「あーもー！目が回りそうや！」

現在俺とはやて、ヴィヴィオとターナ、そして蓮花と凜花の6人暮らし。ぶっちゃけ男の勢力がなくて悲しい

「どうした蓮花、あーあー、お漏らししてるよ・・・」

「おむつはそこや」

「はいはい」

双子ということもあって、面倒をみるのがかなり大変だ。なのではやては一時時空警備隊を除隊し、この二人の世話にいそしんでいる。ちなみに俺は急いで帰るように努力し、最近飲みに行ったりなど全

然していない

「は……終わった」

しばらくして、蓮花と凜花がようやく眠りに着いた。

「うふふ、御苦労さんや」

「ああ、ありがとう」

渡されたコーヒーを受け取り、それを飲む。最近2時間に一回起きるのでこれがまた大変なことだ。

「ふう」

はやてが俺の隣に座る

「最近、時空警備隊のほうはどないや？」

「ああ、軌道にも乗ったし、カリム達も積極的に支援をしてくれる」

「そら安心や」

「なあ、はやて……」

「なんや？」

俺は静かに、はやてに告げる

「これで、よかったのかな」



「え？」

「……闇の書のことだよ」

「ああ、その話……もう4回は聞いたで？」

闇の書の呪いを解き、リインフォースを救った。でもそれによつてはやては後から深刻なダメージを受けた。無理な防衛プログラムの切り離しでその時は気がつかなかったが、はやての魔力が原作よりも下がっていたのだ。リインフォースが体の中に溶けて強くなるはずだったはやて。それは力だけでなく、想いや願いさえも、強くなるはずだった。

「いつも言うてるやる？それはアニメの話……ここはちやうんよ」

「はやて……」

「まったく強情やな、うちの旦那さんは」

そういつて俺にはやては口づけをする。

「ん!？」

「んちゅ……ふ」

「ぶあつ……!はやて……」

「うちはうちや……それに魔力なんか強うなくても、うちには迅君がいる、それにリインフォースやシグナム達があるんやから!」

・・・はは、そうだな

「そうか・・・そうだよな」

「そうなんよ」

「ありがとうはやて」

「どういたしまして、迅君」

こうして、俺と最後の夜天の王の生活は静かに、緩やかに進んでいく

IF 八神はやて エンディング(後書き)

次回はシグナムEDです

IF 烈火の将 シグナム エンディング(前書き)

シグナムのEDです

IF 烈火の将 シグナム エンディング

時空警備隊が出来て早10年

「ほら！早くしろ焰！遅刻するぞ！」

「やっぱ！行ってきましたーす！」

シグナムと俺の間に一人の男の子が生まれた。シグナムの髪の色と俺の目の色、そしてシグナムっぽい目つきの男の子。名前は焰<sup>ほむかい</sup>。ヴオルケンリッターである彼女に子が成せることはないと思いきや、何の奇跡が無事にシグナムは出産した。

「ヴィヴィオ、ターナ、今日の任務は気を付ける？」

「はい！総帥 行ってきましたーす！」

「ヴィヴィオはちゃんと見るから、行ってきましたーす！」

「ああ、行ってらっしゃい」

ヴィヴィオ16歳、ターナ17歳・・・機動六課でいうスバルやティアナと同じ年齢となり、時空警備隊でもエースとして活躍している。

「あのターナの面倒見がいいのはシグナムに似たのかな？」

「それを言うならあのお調子者のヴィヴィオは迅の所からだろうに」

「ははは」

相変わらずお厳しいお言葉なこと

「それにしても、焰ももう10歳か・・・」

「ああ、そろそろデバイスを送ろうと思うのだが・・・」

「デバイスか・・・マリーにでも相談してみるか」

ちなみにどんなものにようか・・・

「もちろん、剣だろう？」

「だと思った」

「コイツ赤ん坊の焰に剣握らせてたからなあ」

「ま、いいんじゃないの？」

「ふふっ、あの子がどんな騎士になるのか楽しみだ」

「だだよアギト」

「へへっ！姉御の倅だ！きっちり鍛えてやるぜ！」

アギトも我が家の一員だ。一応時空警備隊の中でもシグナムと共に行動を共にしている。

「んじゃ、あたしは先に行くぞ姉御」

「ああ、後でな」

「そういえば今日から出勤か」

「ああ、今日は久しぶりに主達とな」

そーいえばそんなこと言ってたな

「迅は、どうなのだ？」

「なのはに教導の視察頼まれてるからな。早いかも」

「むう・・・高町とか？」

「はは、大丈夫だよシグナム」

シグナムを抱き寄せ、唇を重ねる。舌が絡まり、数秒の沈黙が流れていた。そして離す

「あっ・・・」

「愛してるのは、お前だからな」

「ば、バカ者！こんな朝から・・・」

「嫌だったか？」

俺が言うと、シグナムは顔を真っ赤にして伏せる

「嫌なわけ、なかるう・・・」

「ふふっ、そうだな・・・じゃあ行ってくるよ」

「あ、待て・・・」

「ん？」

振り向くと、ソフトタッチではあるが、シグナムが俺にキスをしてきた。

「気を付けて、な」

「ああ、行ってきます」

こうして俺は一日の仕事を始める。烈火の将と歩むこの道は、悪いものではない



IF 烈火の将 シグナム エンディング(後書き)

次回はリインフォースのEDになります

IF 夜天の書 リンフォース エンディング(前書き)

リンフォースのEDです

ちよつといたん休憩

ウーノ

ドゥーエ

スバル

ティアナ

なのは

は午後に更新します

IF 夜天の書 リインフォース エンディング

リインフォースED

時空警備隊が設立されて早5年、俺はリインフォースの告白を受けて、それを受け入れた。ユニゾンデバイスとの結婚ということで色々問題はあったものの、今は問題なく生活を送っている。ユニゾンデバイスなので子が成せないかと思いきや、驚いたことに可愛い女の子が生まれたのだ。黒い髪と、リインフォースと同じ紅い目をした可愛い女の子。名前はアインス。戸籍ではリインフォース・神谷となっているので、アインスの名を残したいと考えたのだ

「マス・・・じゃない、あなた、朝です」

「ん・・・ん・・・」

「もっつ・・・」

ん？もう、朝か・・・

「おはよう、リインフォース」

「おはようございます」

「まったく、敬語はなしって、いつも言ってるだろ？」

「すみませ・・・じゃない、ごめんなさい」

まあ、そんな可愛いリインフォースだから

「しょうがない、許す」

俺はそう言っただけ唇を重ねる

「ふふっ、朝食の準備ができてますよ」

ネギま！の世界以来、リインフォースの料理はおいしいことが分かったので、よく料理を作ってもらっている。

「うん、おいしい」

「よかった・・・」

「そのセリフ、毎日聞いている」

「心配ですもの、シャマルの料理のようにならないか」

まあ、あれはカオス以外の何物でもないからな

「あれは料理じゃなくて兵器だからな」

「あの時シャマルではなく、はやてに料理を教わっておいてよかったと思います」

「そうだな」

じゃなきゃ俺が料理を作る羽目になってたし

「あつっ・・・パパ・・・」

「アインスどうした？おはよう」

「パパ」

「うん、パパだよ」

最近パパ、ママという言葉と、おねーちゃんという言葉覚え、事あるごとに呼んでいる。

「パパ！おはようー！」

「おはよーー！」

「ああ、おはよう。」ご飯をしっかりと食べていくんだぞ？」

「はーい！」

二人も立派な小学生となり、学校に行っている。食事を終えた二人は学校へ向かう

「いってきまーす！」

「行ってらっしゃい、気を付けてね」

「早く帰れよ」

「はーい！」

こうして二人が学校へと向かう

「ふふっ」

「どうしたリインフォース」

「なに、もし私が消滅していたら、こんな生活はできなかったと思っ  
つてな」

ま、確かにな

「でも違うだろ？」

「そうですね・・・今はあなたがいて、娘がいる」

リインフォースは嬉しそうに笑っていた

「さて、俺も仕事に行くかな」

「あ、待って」

「ん？」

俺とリインフォースの唇が合わさる

「行っ  
てらっ  
しゅい」

「行っ  
てき  
ます」

こうして俺は仕事へ出かける。世界の平定のために。夜天の書との  
この生活は、長く続くこととなる

IF 夜天の書 リンフォース エンディング(後書き)

次回はウーノEDです

IF ナンバース ウーノ エンディング(前書き)

ウーノのEDです



## IF ナンバース ウーノ エンディング

ウーノと結婚して早一年。戦闘機人でも何故か子供ができるという・  
・ちよつと驚いた。けどよくよく考えれば原作でスカリエッツィ  
がクローンをお腹に残していたのでそれに気がついてスカリエツテ  
イの子かと心配したが、DNAでも100%俺とウーノの子供だと  
いうことが分かった

「おはようウーノ」

「ええ、おはよう」

「あー」

そのウーノの腕の中にいるのは俺とウーノの子である『レイ』だ。  
1から生まれた者ということでもつまりレイと名付けられた。

「今日は久々の休暇ね。どこに行きましょうか」

「そうだな、どこがいい？」

「うーん・・・この前ショッピングモールに行く約束だったのに急  
に仕事になったから、そこにしましょう？」

この前のことまだ引きずってんのかよ！

「その、この前は・・・その」

「いいわよ、仕事だもんね」

「ああもう、可愛いなお前は」

そう言っつて俺はウーノを抱き寄せる

「きゃっ!?!」

「悪かったよ……ごめんな」

「キス……」

え?

「キスしてくれたら、許してあげるわ」

「はいはい」

こっつして唇を合わせる

「ん……」

「んちゅ……」

「んん……」

「ふはっ……迅……」

ウーノが俺に抱きつく

「ウーノ?」

「いつも、こうしてると思うわ・・・私が人間だったら・・・って」  
何言ってるんだ・・・？

「普通に生まれて、普通に恋をして・・・こんなふうになったのかしら？」

「・・・バーカ」

ほんと、可愛いなこいつは・・・

「迅・・・」

「お前は人間だろ？」

「でも・・・」

「それに俺はウーノという存在を愛しているんだぞ？それ以外に何か必要か？」

俺はウーノを抱きしめる。たまに、ウーノは自分の存在を否定したりする。まあ、俺にかまって欲しいのが 分かりなんだが、それは言わないでおこう。こうするの嫌いじゃないし。

「迅？」

「今度は何？」

「愛してるわ」

「ああ、俺もだよ」

再びキスをして愛を確かめある。俺達。しかし、このあと緊急で仕事が入り、後日ウーノの機嫌を取るのに苦戦したのはまた別の話

IF ナンバース ウーノ エンディング(後書き)

次回はドゥーエEDになります

IF ナンバース ドウーエ エンディング(前書き)

ドウーエのEEDです

IF ナンバース ドゥーエ エンディング

時空警備隊が設立されて早3年。俺はいつも通り総帥室で仕事をしている。

「ふうー・・・終わった」

「マスターお疲れ様」

朱梨にお茶を入れてもらい、一息つく

「そう言えばそろそろ昼か？」

「さっき連絡でドゥーエ奥さまが来るって言ってたよ、マスター」

え？なんで？

「今日お弁当忘れてるって」

あ・・・

「そういえばそうだった。昼は食堂で食べようと思ってたんだ」

コンコン

「はい？」

「失礼します」

そこに入ってきたのはピンク色の髪をした管理局員の女性だった。

「……ドゥーエ？」

「ふふっ、さすがにわかつちやう？」

ライアーズマスクを外したドゥーエがそこにいた。よくよく見れば俺とドゥーエの間に生まれた女の子『エレナ』がいた。エレナの名を付けたのは色々あるが、まあ覚えている人もいないので気にしないことにした。

「あ……」

「よしよし……ていうかドゥーエ？なんで変装してんの？」

「なんでって……こうでもしないと貴方の幼馴染達に追われちゃうからよ」

と、ため息をつくドゥーエ。俺とドゥーエが結婚してからののはたちが怒り狂い、ドゥーエを倒そうと何度襲撃しに来たか分からない。エレナが生まれてからはその数は減ったものの、未だにドゥーエにとってはトラウマの様だ

「迅、はい……お弁当」

「ああ、ありがとう」

弁当を受け取り、食事を取る

「うん、うまい」



「そう？頑張つて作った甲斐があつたわ」

最近は何かと理由を付けてここに来る気がするのは気のせいかな・  
ま、いつか。しばらくは静かに食事をして、弁当箱を片づけた。  
いつのまにかエレナはすやすやと、一人用のソファアの上で眠つて  
いる。

「ごちそうさま・・・」

「はい、お粗末さま」

「ふう・・・」

とりあえず仕事は終わつてるし、一息だな。

「うふう・・・お疲れの様ね」

と、ドゥーエが俺に抱きつく

「ああ、まあな・・・」

「じゃ、えい」

と、ドゥーエが俺と唇を重ねる

「ふう・・・む・・・うむ・・・」

「んちゅ・・・んあ・・・ん・・・」

舌が絡まり、いやらしい音が鳴る。最近ドワーエと夜一緒でないの  
で、そうとうドワーエが興奮しているように見える。

「ぶはっ！ドワーエ！ちよっと落ちつけて！」

「あんっ……だめよ……もう3週間もほったらかしなんだから」

「わかった、わかった……でもホント、場所を考えろよ」

「いや、場所なんて関係ないわ」

と、ドワーエさらに抱きつく

「ああもう……」

こいつと付き合ってたけど、こいつも結構子供なのだ

「わかったよ、一回だけな」

「迅、愛してるわ」

「俺もだよ」

こいつして愛し合う。今日もミッドチルダは平和である

IF ナンバーズ ドゥーエ エンディング(後書き)

次回はスバルのEDです

IF スバル・ナカジマ エンディング(前書き)

スバルのEDです

IF スバル・ナカジマ エンディング

時空警備隊設立から半年、忙しい中なんとか取った休暇。朝9時、俺はクラナガンの公園へむけて走っていた。

「やべえ、完璧遅刻だ」

公園で会う約束は9時。なのに現在9時を既に回っている。これは非常にまずい

「はあはあっ！スバル！遅れてごめん！」

そう、スバルとデートの約束をしていたのだ

「迅兄い遅い！」

「すまん・・・寝坊した」

現在15分・・・うわあ、スバルかんかんだよ

「もー！」

「悪い悪い、お詫びにアイス奢るから」

「わーい！」

単純な奴・・・まあ、見ての通り、俺とスバルは恋人同士となった。スバルが顔を真っ赤にして大声で告白されたため、断ることもなく、俺は了承した。スバルが喜び、ずっと一緒にいる。

「じゃあ迅兄い！行こう！アイス屋さん！」

「アイス屋でいいのか？」

「あ・・・違った！デート！」

「はいはい」

こうしてスバルと共にクラナガンの都市部へと出発した

ミッドチルダ都市部

「ん〜！おいしい！」

スバルがおいしそうにアイスを頬張る。まったく・・・

「スバル、この寒いによく食べるな」

季節は冬だ。このクソ寒い中よく食べたもんだ

「だっておいしいんだもん！」

「はいはい」

「迅兄い！はい！あーん！」

「へいへい」

そう言つてアイスをもらう

「おいしい？」

「ああ、おいしいよ」

まったく、こいつはガキなんだから

「？迅兄いどうしたの？」

「いや？スバルが子供だнатて」

「むー！あたし子供じゃないもん！」

と、勢いよく服を引っ張る

「え？おい！」

そしてスバルと唇が重なる

「ん・・・」

「ぷはっ！おいスバル！」

「えへへ、わかった？子供じゃないでしょ？」

それはいいけどお前・・・

「こんな人ごみで」

「え？あ・・・」

「ああもう！行くぞ！」

周りの視線が痛いので走り出す。こんな感じで、俺とスバルの関係は続いていく。恋人同士というより、仲のいい兄弟という感じではあるが・・・まあ、いつかは



IF スバル・ナカジマ エンディング(後書き)

次回はティアナEDです

IF ティアナ・ランスタール エンディング(前書き)

ティアナのEDです

IF ティアナ・ランスター エンディング

時空警備隊が設立されて早4年。ティアナと結婚した俺は、幸せな生活を送っている。ティアナと俺の間に生まれた子、ティーダ。ティーダは兄の名前ではあるが、ティアナがどうしてもということになった

「ティアナ、早くしろ」

「あ、待って・・・ティーダはまだ」

ティーダを着替えさせるティアナ。今日は時空警備隊設立4周年という記念すべき日なので、そのパーティーがあるのだ

「うん、もう大丈夫」

「よし、行くか」

車に乗り込み、クラナガンを走る。場所は元地上本部。現在は時空警備隊総本部として発展している。まあ、前の地上本部の跡かたもないわけだが

「そういえば、最近一緒にバイクで走ってないわね」

「ああ、そう言えばな・・・ま、ティーダの世話で大変だったし、しょうがないよ」

ぶっちゃけ2時間にいっぺん起きるティーダを置いてバイクを乗りに行く気にはならない

「ねえ、迅……今度一緒にドライブしましょう?」

「ああ、そうだな」

ま、ティータを誰かに預けたらの話だけど

「もうすぐ着くな」

「迅、ネクタイ曲がつてるわ」

「まじで? わかった」

ティアナは兄さんという呼び方から迅と呼ぶようになった。夫婦なら兄さんと呼ぶのはおかしいと言ってきたからだ。総本部に着き、車を止める

「ほら、しゃんとして?」

「これくらい大丈夫だろ」

「総帥がこれでどうするの、ほら」

そういえばお出迎えがあったんだっけ

「相変わらずいやね、コレ」

ティアナと歩くのは赤絨毯の上。まあ総帥が入るならこうなるだろうな。すると女性局員がひそひそと話しているのが見えた。どうやらティアナのことを見ているらしい

「迅」

「ん？」

ティアナが急に俺にひつつく

「お、おい」

「いいの、見せつけてやりましょ。これくらい、私達は愛してますって」

「それなら・・・」

と、俺はティアナと唇を重ねる。しかも大勢の前で

「ん!?!」

「ん・・・」

「んはっ!迅!」

「ん?これくらい愛してるって教えた方がいいだろ?」

俺が言うと、ティアナが顔を真っ赤にする

「もう、バカ・・・」

「はいはい、さあ行くぞ」

「ええ・・・」

こうして俺達は幸せな道を歩き続ける

IF ティアナ・ランスター エンディング（後書き）

次回、とうとうなのはEDです

この後は外伝を2作挟んで終了となります

IF 高町なのは エンディング(前書き)

最後のなのはEDです！

外伝後二つは来年になりますでは！



IF 高町なのは エンディング

Side Out

そこはクラナガンにある結婚式場、そこには英雄、神谷迅の姿があった。今日はいつもの黒いジャケットではなく白のタキシードだ。

迅 side

「緊張してきた・・・」

『マスター、深呼吸してください。そして落ちついてください』

「分かってはいるんだけどさ・・・」

コンコン

「はい？」

扉が開き、そこにはヴィヴィオとターナの姿があった。

「パパがっこいい！」

二人して声を揃えられた

「ありがとう二人とも。二人も可愛いな」

流石桃子さんと母さん・・・すごくいいセンスだな

「えへへ」

「あ、ママもね、綺麗だったよ！」

「そうかそうか、それはお楽しみに取っておこうかな」

さて、そろそろ時間か・・・

「二人はそろそろ母さんの所へ行きなさい」

「はい！」

こうしてパタパタと二人は出て行った

『マスター、時間です』

「ああ」

こうして、俺は会場へと歩いて行った。会場に着くと、そこにはウエディングドレスを着たなのはの姿があった。いつもと違って髪を降ろし、首には装飾を付けられたレイジングハートがかかっている

「あ！迅君」

「なのは・・・」

「その、どう・・・かな？」

「ああ、とっても綺麗だよ」

と、率直な感想を言うと、なのはが顔を紅くした

「じゃはは、恥ずかしいよ」

「ふふ、さあ行こうか」

「うん」

こうして腕を組み、式場の中へと入った。ここに来るまで色々あって、なのはの父の土郎さんはOKを出してくれたものの、兄の恭也が血の涙を流すほど反対したり、フェイトたちがなのはに勝負を仕掛けたり・・・もう大変だった。このゴールまでたどり着くのは

「では、神谷迅、貴方はこの方をいかなる時も妻と認め、ともに苦難の道を通り越えることを誓いますか？」

「はい」

「高町なのは、貴方はこの方をいかなる時も夫と認め、ともに苦難の道を通り越えることを誓いますか？」

「はい、誓います」

「では、誓いのキスを」

こうしてなのはと俺の唇が重なり、拍手が巻き起こった。

「えへへ、これで夫婦、だね」

「そうだな」

「じゃあこれはからは『あなた』って呼んだ方が言い？」

うーむ・・・

「まあ、なのはの好きにして」

「うふふ」

と、なのはがもう一度嬉しそうにキスをしてきた。その時だった

ばあああん！

会場の扉が勢いよく開く。そこにいたのは真剣を持った高町恭也の姿だった。

「なのはー！俺は認めんぞ！そんな男とお！」

『そつだそつだあー！』

と、後ろにはなのはのファンクラブの方々がいた。そして

「高町なのは！神谷迅様は私達のもんです！」

いつの間にか立ち上がっていた俺のファンクラブの方々も揃っていた

「はぁ・・・どうしてこう静かに終われないんだか」

「夫婦の力見せてあげようよ、あ・な・た」

と、なのはがレイジングハートを構える

「行くよ、レイジングハート」

『オーライ、マイマスター』

「ゼロ・・・行くぞ」

『オーライ』

「セーットアップ！」

『Standby lady』

こうして俺となのはがセットアップして大軍団に向かって行く。俺となのはが結ばれ、この物語は一度幕を降ろす。だが、この先の物語はまだ終わらない。この先の新たな未来を、この先の幸せな明日を創るために、俺達は一緒に歩き続ける！

「デイバインバスター！」

「約束された勝利の剣！」

IF 高町なのは エンディング（後書き）

いったんこれでおしまいです。ありがとうございました

外伝の後、あとがきでお会いしましょう！

## 後書き

ども、秋風です。とりあえず、新作のめどが立ったのでいったんこの物語はおしまいです。

一応、続編もあるのでお楽しみにしてください。一応番外編の予定として鷹先生と紅夜叉先生とのお約束があるのですが、最終話終わったのに番外編で書くのは失礼だしおかしいという考えに至りまして。鷹先生と紅夜叉先生の作品は続編にて公開と言うことになります

この小説の感想総数は511件

6 / 594 / 926 アクセス

ユニークが545 / 720人

という、感謝しまくりの結果となりました。一応、書いていて楽しくはあったのですが、他の方から作品についての矛盾なども頂いて苦勞の日々ではありました。

しかしながら、自分の好きな物を沢山一つにまとめて出すという、この新しい楽しみにはとてもよかったと思っています。とりあえず続編もありますので、是非ともご覧ください。

続編ではもちろん迅が主人公ですが、その娘たちも大活躍する話です。ちなみに続編ではまだ結婚はしてないのであしからず

それでは、失礼いたします

今までご愛読ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2773k/>

---

魔法少女リリカルなのは～神様の力を得た少年～

2011年6月8日00時23分発行